松山市文化財調査報告書54

束本（つかもと）遺跡4次調査
枝松（えだまつ）遺跡4次調査

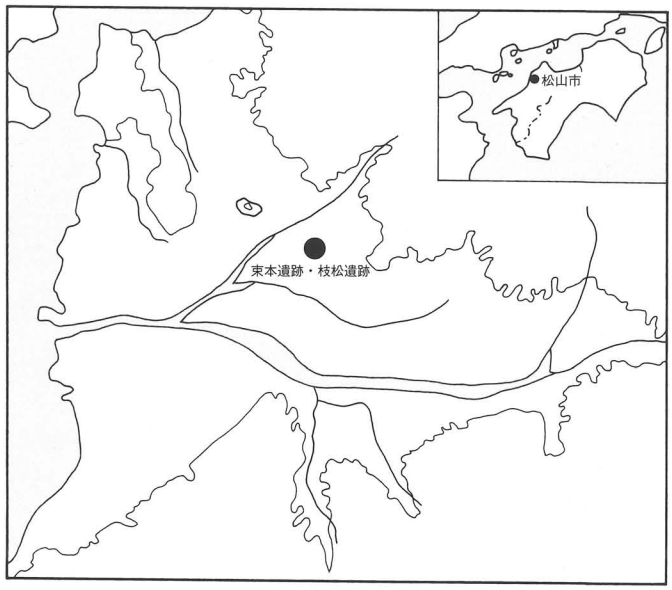
－本文編－

1996

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

東本遺跡４次調査
枝松遺跡４次調査

－本文編－



1996

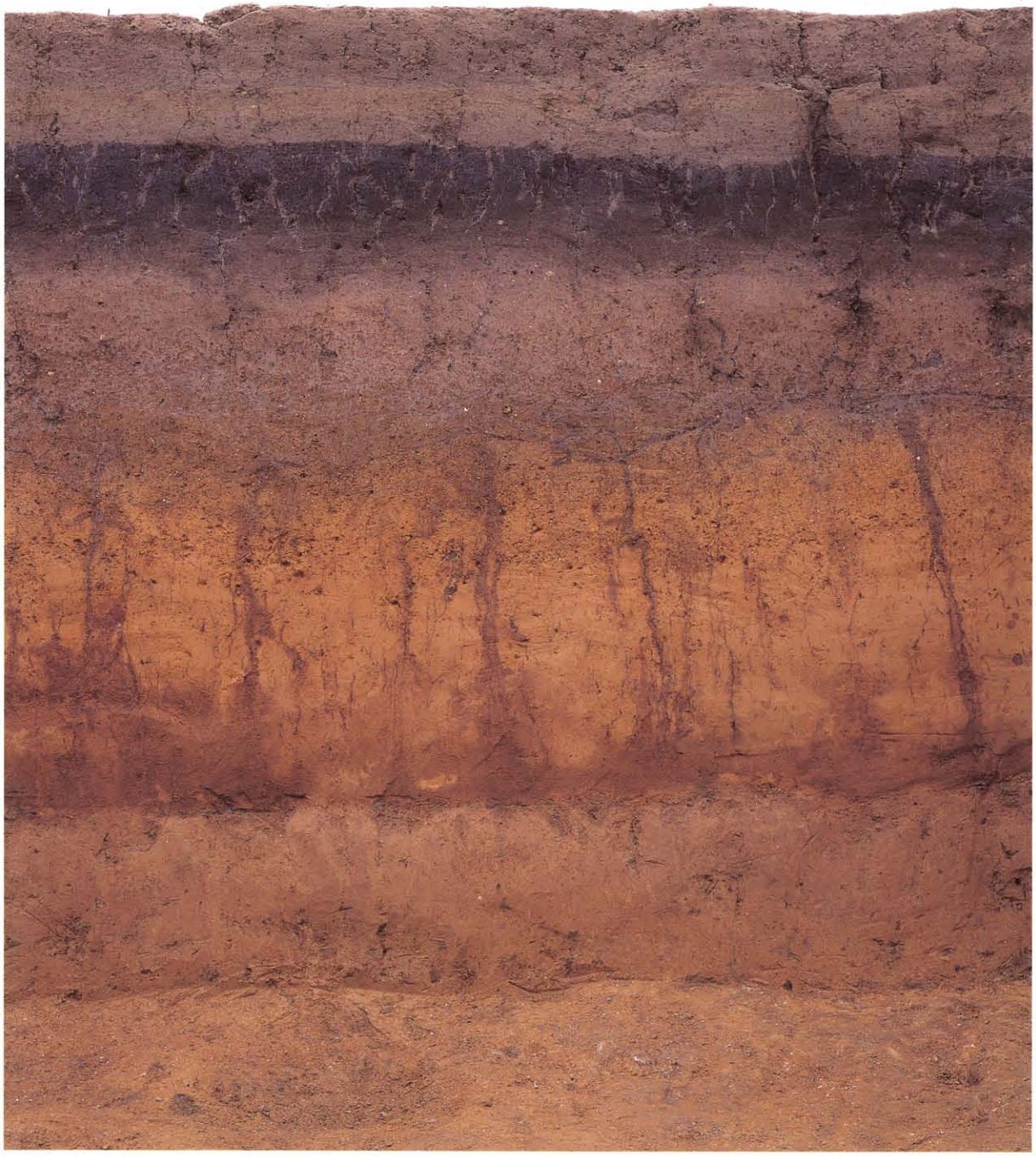
松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

巻頭図版１　調査地（南より）

巻頭図版 2　SB203周堤帯



巻頭図版 3　基本土層 1 区西壁

序

近年、松山市においては、土地開発の激増に伴って発掘調査も増大し、松山の歴史を塗りかえる新しい発見が相次いでいます。枝松遺跡４次調査地及び束本遺跡４次調査地が立地する桑原地区もそのひとつです。「船」の絵が描かれた土器片が出土した樽味高木遺跡をはじめとして、これまでに弥生時代から中世にかけての数多くの遺跡が確認されています。

今回の発掘調査による成果のひとつとして、束本遺跡４次調査地全域にわたってアカホヤ火山灰（6,300年前）及びＡＴ火山灰（約22,000～25,000年前）を確認したことが挙げられます。これまでの部分的かつ２次的でしかなかった火山灰土を１次堆積層で確認したことは、それらの前後に含まれる遺構・遺物の新旧関係を明らかにするうえで、貴重な成果といえます。

また、同遺跡で検出された２棟の竪穴式住居址は、特筆すべき遺構として注目されています。ともに弥生時代末の一般的な大型円形竪穴式住居ではありますが、住居の周囲に周堤帯を巡らしていること、住居内より青銅鏡（破鏡）を出土したことなど、非常にめずらしい検出例です。これらのことから、この周辺における卓越した人物の存在を考えずにはいられません。

このように、検出された住居址によって当時の人々の暮らしの一端を明らかにでき、今後の集落関係の研究を進める上で大変貴重な資料を得ることができました。

本書の刊行にあたり、当遺跡の発掘調査についてのご指導・ご協力を頂きました関係各位、ならびに関係機関に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも埋蔵文化財の発掘調査に関して、より一層のご協力をお願い申し上げます。

平成８年３月３１日

財団法人　松山市生涯学習振興財団
理事長　田　中　誠　一

例　　言

1．本書は、松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団が平成４年10月～平成５年７月に実施した松山市東部環状線建設に伴う事前調査の報告書である。

2．遺構の実測は、担当調査員の責任のもと、愛媛大学・松山大学学生他の援助を受けた。遺構の撮影は担当調査員と大西朋子が行った。

3．遺構は呼称を略号で記述した。竪穴式住居：ＳＢ、溝：ＳＤ、土坑：ＳＫ、自然流路：ＳＲ、柵列：ＳＡ、柱穴：ＳＰ、掘立柱建物：掘立、倒木及び性格不明遺構：ＳＸである。

4．科学分析の番号は、図中に黒丸に白字で表示した。

5．本書にかかる図面の作成は、梅木謙一、宮内慎一、高尾和長、山本健一、水本完児、相原秀仁、大森一成の責任のもと志賀夏行、波多野恭久、田丸竜馬、白石公信、小野敬通、黒木修二、越智令子、松本美知子、田崎真理、中村紫、岩本美保、村上真由美、木下奈緒美、岡本邦栄、森田利恵、生鷹真弓、古角優子が行った。

6．遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

7．本書に使用した方位はすべて磁北である。

8．本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

9．調査及び報告書作成においては、愛媛大学下條信行、平井幸弘、田崎博之、村上恭通、徳島文理大学石野博信、京都造形大学内田俊秀、九州大学宮本一夫、広島県立歴史博物館福井照道の諸先生方には御指導と御教示を賜った。記して感謝申し上げます。

10．本書の執筆は、高尾和長、梅木謙一、宮内慎一、山本健一、水本完児、相原秀仁、大森一成が分担執筆した。執筆者名は本文目次に記し、必要に応じ文末にも記載した。関連資料の調査は志賀夏行が行った。浄書は、高尾和長の指導のもと白石公信が担当した。

11．写真図版は、担当調査員の指導のもと、遺物の撮影及び図版作成は大西朋子が行った。

12．本書の編集は高尾和長が行い、梅木謙一、宮内慎一の協力を得た。

本　文　目　次

第１章　はじめに ―――――――――――――――――――――――――〔高尾〕
　　1．調査に至る経緯 ………………………………………………………………… 1
　　2．調査・刊行組織
第２章　遺跡の概要 ―――――――――――――――――――――――〔高尾〕
　　1．地理的環境 ……………………………………………………………………… 2
　　2．歴史的環境
第３章　調査の概要 ―――――――――――――――――――――――〔高尾〕
　　　調査の経緯 ……………………………………………………………………… 6
第４章　層　位 ――――――――――――――――――――――――――〔宮内〕 7
第５章　東本遺跡４次　１区の調査 ――――――――――――――〔高尾〕
　　1．調査の経緯 ……………………………………………………………………… 19
　　2．層　位
　　3．遺構と遺物 ……………………………………………………………………… 24
　　4．小　結 …………………………………………………………………………… 29
第６章　東本遺跡４次　２区の調査 ――――――――――――――〔高尾〕
　　1．調査の経緯 ……………………………………………………………………… 33
　　2．層　位
　　3．遺構と遺物 ……………………………………………………………………… 40
　　4．小　結 …………………………………………………………………………… 70
第７章　東本遺跡４次　３区の調査 ――――――――――――――〔山本〕
　　1．調査の経緯 ……………………………………………………………………… 87
　　2．層　位
　　3．遺構と遺物 ……………………………………………………………………… 92
　　4．小　結 …………………………………………………………………………… 123
第８章　東本遺跡４次　４区の調査 ――――――――――――――〔山本〕
　　1．調査の経緯 ……………………………………………………………………… 141
　　2．層　位
　　3．遺構と遺物 ……………………………………………………………………… 146
　　4．小　結 …………………………………………………………………………… 161
第９章　東本遺跡４次　５区Ａの調査 ―――――――――――――〔相原〕
　　1．調査の経緯 ……………………………………………………………………… 169
　　2．層　位
　　3．遺構と遺物 ……………………………………………………………………… 171
　　4．小　結 …………………………………………………………………………… 187
第10章　東本遺跡４次　５区Ｂの調査 ―――――――――――――〔高尾〕
　　1．調査の経緯 ……………………………………………………………………… 195

2．層　位 …… 195
3．遺構と遺物 …… 199
4．小　結 …… 207
第11章　束本遺跡４次　５区Ｃの調査 ―― 〔相原〕
1．調査の経緯 …… 213
2．層　位
3．遺構と遺物 …… 216
4．小　結 …… 230
第12章　束本遺跡４次　６区Ａの調査 ―― 〔水本〕
1．調査の経緯 …… 237
2．層　位
3．遺構と遺物 …… 239
4．小　結 …… 241
第13章　束本遺跡４次　６区Ｂの調査 ―― 〔相原〕
1．調査の経緯 …… 245
2．層　位
3．遺構と遺物 …… 249
4．小　結 …… 254
第14章　束本遺跡４次　６区Ｃの調査 ―― 〔水本〕
1．調査の経緯 …… 259
2．層　位
3．遺構と遺物 …… 264
4．小　結 …… 276
第15章　枝松遺跡４次の調査 ―― 〔大森〕
1．調査の経緯 …… 283
2．層　位 …… 287
3．遺構と遺物 …… 288
4．小　結 …… 294
第16章　まとめ ―― 〔高尾〕 298
第17章　自然科学分析 ―― 〔古環境研究所〕
1．火山灰分析 …… 305
2．珪酸体分析 …… 312
第18章　付編　束本遺跡・桑原高井遺跡出土の弥生土器 ―― 〔梅木〕 359
第19章　調査の成果と課題 ―― 〔高尾〕 405

挿　図　目　次

第２章　遺跡の概要

第１図　桑原地区の主要遺跡分布図（縮尺1/25,000）…… 4
第４章　土　層
第２図　土層柱状図 …… 8
第３図　土層柱状図（1）（縮尺1/30）…… 9
第４図　土層柱状図（2）（縮尺1/30）…… 11
第５図　土層写真（1）…… 14
第６図　土層写真（2）…… 15
第５章　１区の調査
第７図　調査区位置図（縮尺1/1,000）…… 20
第８図　遺構配置図（縮尺1/200、1/80）…… 21
第９図　区割図（縮尺1/400）…… 23
第10図　第Ⅳ層上面出土遺物実測図（縮尺2/3）…… 24
第11図　掘立101測量図（縮尺1/40）…… 25
第12図　掘立102測量図（縮尺1/40）…… 26
第13図　ＳＡ101測量図（縮尺1/40）…… 27
第14図　ＳＤ106測量図（縮尺1/60）…… 28
第15図　ＳＤ106出土遺物実測図（縮尺1/3、1/2）
第６章　２区の調査
第16図　調査区位置図（縮尺1/1,000）…… 34
第17図　北区遺構配置図（縮尺1/200、1/80）…… 35
第18図　南区遺構配置図（縮尺1/200、1/80）…… 37
第19図　区割図（縮尺1/500）…… 39
第20図　第Ⅵ層上面遺構断面測量図（縮尺1/40）…… 40
第21図　第Ⅳ層上面出土遺物実測図（縮尺2/3）
第22図　ＳＢ203測量図（縮尺1/60）…… 43
第23図　ＳＢ203炉①・②測量図（縮尺1/40）…… 45
第24図　ＳＢ203出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）…… 46
第25図　ＳＢ203出土遺物実測図（2）（縮尺1/4）…… 47
第26図　ＳＢ203出土遺物実測図（3）（縮尺1/4）…… 48
第27図　ＳＢ203出土遺物実測図（4）（縮尺2/3、1/2、1/1）…… 49
第28図　ＳＢ201測量図（縮尺1/40）…… 50
第29図　ＳＢ201出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 51
第30図　ＳＢ202測量図（縮尺1/40）…… 52
第31図　ＳＢ202炉測量図（縮尺1/20）…… 53
第32図　ＳＢ202出土遺物実測図（縮尺1/4）
第33図　ＳＢ204測量図（縮尺1/30）…… 54
第34図　ＳＢ204炉測量図（縮尺1/20）…… 55
第35図　ＳＢ204出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 56

第36図　ＳＢ205測量図（縮尺1/40）…… 57
第37図　ＳＢ205炉測量図（縮尺1/20）
第38図　ＳＢ205出土遺物測量図（縮尺1/40）…… 58
第39図　ＳＢ205出土遺物実測図（縮尺1/4、1/1）
第40図　ＳＤ203測量図（縮尺1/100）…… 60
第41図　ＳＤ203出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）…… 61
第42図　ＳＤ203出土遺物実測図（2）（縮尺1/4）…… 62
第43図　ＳＤ203出土遺物実測図（3）（縮尺1/4）…… 63
第44図　ＳＤ203出土遺物実測図（4）（縮尺1/4）…… 64
第45図　ＳＤ203出土遺物実測図（5）（縮尺1/4）…… 65
第46図　ＳＤ203出土遺物実測図（6）（縮尺1/4）…… 66
第47図　ＳＰ出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 67
第48図　ＳＰ105出土遺物実測図（縮尺2/3）…… 68
第49図　その他の出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 69
第７章　３区の調査
第50図　調査区位置図（縮尺1/1,000）…… 88
第51図　遺構配置図（縮尺1/200、1/80）…… 89
第52図　区割図（縮尺1/400）…… 91
第53図　第Ⅳ層上面焼土測量図（縮尺1/20）…… 92
第54図　第Ⅳ層上面出土遺物実測図（縮尺2/3）…… 93
第55図　ＳＢ302測量図（縮尺1/60）…… 97
第56図　ＳＢ302遺物出土測量図（縮尺1/80）
第57図　ＳＢ302炉測量図（縮尺1/40）…… 99
第58図　ＳＢ302凹地測量図（縮尺1/20）…… 100
第59図　ＳＢ302出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）…… 101
第60図　ＳＢ302出土遺物実測図（2）（縮尺1/4）…… 102
第61図　ＳＢ302出土遺物実測図（3）（縮尺1/1、1/4、2/3、1/2）…… 103
第62図　ＳＢ302出土遺物実測図（4）（縮尺1/1）…… 104
第63図　ＳＢ301測量図（縮尺1/40）…… 105
第64図　ＳＢ301出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 106
第65図　ＳＢ303測量図（縮尺1/40）…… 107
第66図　ＳＢ303炉測量図（縮尺1/40）
第67図　ＳＢ303遺物出土測量図（縮尺1/40）…… 108
第68図　ＳＢ303出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）
第69図　ＳＢ303出土遺物実測図（2）（縮尺1/2、1/1）…… 109
第70図　ＳＢ303と思われる出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 109
第71図　ＳＢ304測量図（縮尺1/60）…… 110
第72図　ＳＢ304出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 111

第73図　ＳＢ305断面測量図（縮尺1/40）…… 112
第74図　ＳＤ201出土遺物実測図（縮尺1/4）
第75図　ＳＤ304測量図（縮尺1/80）…… 113
第76図　ＳＤ304出土遺物実測図（縮尺1/4、2/3）…… 114
第77図　ＳＤ305出土遺物実測図（縮尺1/4）
第78図　ＳＤ306出土遺物実測図（縮尺1/4）
第79図　ＳＫ305測量図（縮尺1/20）…… 116
第80図　ＳＫ307測量図（縮尺1/20）
第81図　ＳＫ出土遺物実測図（縮尺1/4、2/3）…… 117
第82図　ＳＰ出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 118
第83図　ＳＤ301測量図（縮尺1/80）…… 119
第84図　ＳＤ301出土遺物実測図（縮尺1/3、2/3）…… 120
第85図　ＳＫ302出土遺物実測図（縮尺1/3、1/4）
第86図　その他の出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）…… 121
第87図　その他の出土遺物実測図（2）（縮尺1/4、1/2、2/3）…… 122
第８章　４区の調査
第88図　調査区位置図（縮尺1/1,000）…… 142
第89図　遺構配置図（縮尺1/200、1/80）…… 143
第90図　区割図（縮尺1/400）…… 145
第91図　ＳＢ401測量図（縮尺1/60）…… 147
第92図　ＳＢ401内ＳＫ1測量図（1/20）…… 148
第93図　ＳＢ401内ＳＫ2・3測量図（1/20）
第94図　ＳＢ401出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）…… 149
第95図　ＳＢ401出土遺物実測図（2）（縮尺1/4、1/2）…… 150
第96図　ＳＢ402測量図（縮尺1/60）…… 151
第97図　ＳＢ403測量図（縮尺1/60）…… 152
第98図　ＳＢ403炉測量図（縮尺1/20）…… 153
第99図　ＳＢ403出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）
第100図　ＳＢ404測量図（縮尺1/60）…… 154
第101図　ＳＢ404内ＳＫ2測量図（縮尺1/20）…… 155
第102図　ＳＢ404出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）…… 156
第103図　ＳＤ401測量図（縮尺1/80）…… 157
第104図　その他の出土遺物実測図（1）（縮尺1/2、1/4）…… 158
第105図　その他の出土遺物実測図（2）（縮尺1/4）…… 159
第106図　その他の出土遺物実測図（3）（縮尺1/3）…… 160
第９章　５区Ａの調査
第107図　調査区位置図（縮尺1/1,000）…… 170
第108図　第Ⅳ層上面出土遺物実測図（縮尺2/3）…… 171

第109図　第Ⅳ層上面遺構配置図（縮尺1/200、1/80）…… 172
第110図　第Ⅲ層上面遺構配置図（縮尺1/200）…… 173
第111図　ＳＢ501測量図（縮尺1/40）…… 174
第112図　ＳＢ501出土遺物実測図（縮尺1/4）
第113図　掘立501測量図（縮尺1/80）…… 175
第114図　ＳＤ501・503測量図（縮尺1/80、1/160）…… 177
第115図　ＳＤ出土遺物実測図（1）（縮尺1/3、1/2、2/3）…… 178
第116図　ＳＫ503測量図（縮尺1/20）…… 179
第117図　ＳＫ506測量図（縮尺1/20）
第118図　ＳＤ510測量図（縮尺1/80）…… 180
第119図　ＳＤ出土遺物実測図（2）（縮尺1/3、1/2）…… 181
第120図　ＳＫ501・505測量図（縮尺1/40）…… 182
第121図　ＳＰ出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 184
第122図　第Ⅱ②層出土遺物実測図（1）（縮尺1/3）
第123図　第Ⅱ②層出土遺物実測図（2）（縮尺2/3、1/2）…… 185
第124図　その他の出土遺物実測図（1）（縮尺1/3）
第125図　その他の出土遺物実測図（2）（縮尺2/3、1/2）…… 186
第10章　５区Ｂの調査
第126図　調査区位置図（縮尺1/1,000）…… 196
第127図　区割図（縮尺1/200）…… 197
第128図　第Ⅳ層上面遺構配置図（縮尺1/200、1/80）…… 198
第129図　第Ⅲ②層出土遺物実測図（縮尺2/3）…… 199
第130図　ＳＤ502測量図（縮尺1/80）
第131図　ＳＤ520出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 200
第132図　ＳＤ519測量図（縮尺1/80）…… 201
第133図　ＳＫ510測量図（縮尺1/40）
第134図　第Ⅲ層上面遺構配置図（縮尺1/200）…… 202
第135図　ＳＤ516・517測量図（縮尺1/80）…… 203
第136図　ＳＤ517出土遺物実測図（1）（縮尺1/4、2/3）…… 204
第137図　ＳＤ517出土遺物実測図（2）（縮尺2/3）…… 205
第138図　ＳＤ518測量図（縮尺1/80）…… 206
第139図　ＳＤ518出土遺物実測図（1）（縮尺1/4、1/3）
第140図　ＳＤ518出土遺物実測図（2）（縮尺2/3）…… 207
第141図　その他の出土遺物実測図（縮尺1/4）
第11章　５区Ｃの調査
第142図　調査区位置図（縮尺1/1,000）…… 214
第143図　遺構配置図（縮尺1/200、1/20）…… 215
第144図　区割図（縮尺1/200）…… 216

第145図　ＳＢ502測量図（縮尺1/80）…… 218
第146図　ＳＢ502炉測量図（縮尺1/40）
第147図　ＳＢ502遺物出土測量図（縮尺1/40）…… 219
第148図　ＳＢ502出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）…… 221
第149図　ＳＢ502出土遺物実測図（2）（縮尺1/4）…… 222
第150図　ＳＢ502出土遺物実測図（3）（縮尺1/4）…… 223
第151図　ＳＢ502出土遺物実測図（4）（縮尺1/4）…… 224
第152図　ＳＢ502出土遺物実測図（5）（縮尺1/4）…… 225
第153図　ＳＢ502出土遺物実測図（6）（縮尺1/4、2/3）…… 226
第154図　ＳＢ502出土遺物実測図（7）（縮尺2/3）…… 227
第155図　ＳＫ511測量図・出土遺物実測図（縮尺1/10、1/4）…… 228
第156図　ＳＤ515測量図（縮尺1/80）…… 229
第157図　ＳＰ及びその他の出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）
第12章　６区Ａの調査
第158図　調査区位置図（縮尺1/1,000）…… 238
第159図　土層柱状図 …… 239
第160図　遺構配置図（縮尺1/200、1/80）…… 240
第13章　６区Ｂの調査
第161図　調査区位置図（縮尺1/1,000）…… 246
第162図　区割図（縮尺1/200）…… 247
第163図　遺構配置図（縮尺1/200、1/80）…… 248
第164図　ＳＢ603測量図（縮尺1/40）…… 249
第165図　ＳＢ603炉測量図（縮尺1/20）…… 250
第166図　ＳＢ603出土遺物実測図（縮尺1/4、2/3）…… 251
第167図　ＳＤ603測量図（縮尺1/40）…… 252
第168図　掘立601測量図（縮尺1/40）…… 253
第169図　その他の出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 254
第14章　６区Ｃの調査
第170図　調査区位置図（縮尺1/1,000）…… 260
第171図　土層柱状図（縮尺1/20）…… 261
第172図　区割図（縮尺1/200）…… 262
第173図　遺構配置図（縮尺1/200、1/80）…… 263
第174図　第Ⅲ②層及び第Ⅳ層上面出土遺物実測図（縮尺2/3）…… 264
第175図　ＳＢ601測量図（縮尺1/60）…… 265
第176図　ＳＢ601炉測量図（縮尺1/40）…… 266
第177図　ＳＢ601出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 266
第178図　ＳＢ602測量図（縮尺1/60）…… 267
第179図　ＳＢ602炉測量図（縮尺1/40）…… 268

第180図　ＳＢ602出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 269
第181図　ＳＫ601測量図（縮尺1/40）…… 270
第182図　ＳＫ602測量図（縮尺1/40）…… 271
第183図　ＳＫ出土遺物実測図（縮尺1/3）
第184図　ＳＰ出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 274
第185図　第Ⅱ②層出土遺物実測図（縮尺1/3、1/2）…… 275
第186図　その他の出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 276
第15章　枝松遺跡４次調査地
第187図　調査区位置図（縮尺1/1,500）…… 283
第188図　区割図（縮尺1/200）…… 284
第189図　遺構配置図（縮尺1/200）…… 285
第190図　土層柱状図（縮尺1/40）…… 287
第191図　ＳＤ6出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 288
第192図　掘立1測量図（縮尺1/40）…… 289
第193図　掘立1出土遺物実測図（縮尺1/3）
第194図　ＳＤ1・2測量図（縮尺1/160）…… 291
第195図　ＳＤ1・2出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 292
第196図　ＳＫ1測量図（縮尺1/10）…… 293
第197図　ＳＫ1出土遺物実測図（縮尺1/3）
第198図　その他の出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 294
第16章　まとめ
第231図　束本遺跡4次調査遺構配置図（縮尺1/2,500、1/1,250）…… 299
第232図　竪穴式住居址の規格（縮尺1/200）…… 301
第17章　科学分析
第199図　束本遺跡4次調査から産出した珪藻化石 …… 316
第200図　束本遺跡4次調査種実 …… 317
第201図　植物珪酸体の顕微鏡写真（1）…… 341
第202図　植物珪酸体の顕微鏡写真（2）…… 342
第203図　植物珪酸体の顕微鏡写真（3）…… 343
第204図　植物珪酸体の顕微鏡写真（4）…… 344
第205図　植物珪酸体の顕微鏡写真（5）…… 345
第206図　束本遺跡4次調査出土炭化材の顕微鏡写真（1）…… 349
第207図　束本遺跡4次調査出土炭化材の顕微鏡写真（2）…… 350
第208図　束本遺跡4次調査の花粉遺体（1）（2）…… 354・355
第18章　付編　束本遺跡・桑原高井遺跡出土の弥生土器
第209図　束本遺跡1次Ａ区出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）…… 360
第210図　束本遺跡1次Ａ区出土遺物実測図（2）（縮尺1/4）…… 361
第211図　束本遺跡2次調査地遺構配置図（縮尺1/200）…… 362

第212図　東本遺跡2次調査ＳＢ01出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）…… 364
第213図　東本遺跡2次調査ＳＢ01出土遺物実測図（2）（縮尺1/4）…… 365
第214図　東本遺跡2次調査ＳＢ01（3）・ＳＢ02・地点不明遺物実測図（縮尺1/4）…… 366
第215図　東本遺跡3次調査地遺構図（縮尺1/60）…… 367
第216図　東本遺跡3次調査ＳＢ01内Ｐ13出土遺物実測図（縮尺1/4）
第217図　桑原高井1次調査地遺構配置図（縮尺1/200）…… 369
第218図　桑原高井1次調査ＳＢ01出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）…… 371
第219図　桑原高井1次調査ＳＢ01出土遺物実測図（2）（縮尺1/4）…… 372
第220図　桑原高井1次調査ＳＢ02出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）…… 373
第221図　桑原高井1次調査ＳＢ02出土遺物実測図（2）（縮尺1/4）…… 374
第222図　桑原高井1次調査ＳＢ02（3）・ＳＢ03出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 376
第223図　桑原高井1次調査ＳＢ04出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）…… 377
第224図　桑原高井1次調査ＳＢ04（2）・ＳＢ05出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 378
第225図　桑原高井1次調査ＤＫ4出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 379
第226図　桑原高井1次調査ＤＫ5出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 381
第227図　桑原高井1次調査ＳＤ01関連出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 382
第228図　桑原高井1次調査ＳＤ02関連出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 383
第229図　桑原高井1次調査ＳＤ03関連出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 384
第230図　桑原高井1次調査その他出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）…… 385
第19章　調査の成果と課題
第233図　副次的炉と二重に巡る竪穴式住居址（縮尺1/150）…… 404

表　目　次

第５章　１区の調査
表１　掘立柱建物址一覧 …… 30
表２　土坑一覧
表３　溝一覧
表４　第Ⅳ層上面出土遺物観察表石製品
表５　ＳＤ106出土遺物観察表土製品
表６　ＳＤ106出土遺物観察表金属製品
第６章　２区の調査
表７　竪穴式住居址一覧 …… 71
表８　溝一覧
表９　土坑一覧
表10　第Ⅳ層上面出土遺物観察表石製品 …… 72
表11　ＳＢ203出土遺物観察表土製品
表12　ＳＢ203出土遺物観察表石製品 …… 75

表13　ＳＢ203出土遺物観察表金属製品 …… 75
表14　ＳＢ203出土遺物観察表装身具
表15　ＳＢ201出土遺物観察表土製品
表16　ＳＢ202出土遺物観察表土製品 …… 76
表17　ＳＢ204出土遺物観察表土製品
表18　ＳＢ205出土遺物観察表土製品 …… 77
表19　ＳＢ205出土遺物観察表金属製品 …… 78
表20　ＳＢ203出土遺物観察表土製品
表21　ＳＰ出土遺物観察表土製品 …… 83
表22　ＳＰ105出土遺物観察表石製品 …… 84
表23　その他の出土遺物観察表土製品
第７章　３区の調査
表24　竪穴式住居址一覧 …… 125
表25　土坑一覧
表26　溝一覧
表27　第Ⅳ層上面出土遺物 …… 126
表28　ＳＢ203出土遺物観察表土製品
表29　ＳＢ203出土遺物観察表装身具 …… 128
表30　ＳＢ203出土遺物観察表石製品 …… 129
表31　ＳＢ203出土遺物観察表金属製品
表32　ＳＢ301出土遺物観察表土製品
表33　ＳＢ303出土遺物観察表土製品 …… 130
表34　ＳＢ303出土遺物観察表金属製品 …… 131
表35　ＳＢ303出土遺物観察表装身具
表36　ＳＢ303と思われる出土遺物観察表土製品
表37　ＳＢ304出土遺物観察表土製品 …… 132
表38　ＳＤ201出土遺物観察表土製品 …… 133
表39　ＳＤ304出土遺物観察表土製品
表40　ＳＤ304出土遺物観察表石製品
表41　ＳＤ305出土遺物観察表土製品
表42　ＳＤ306出土遺物観察表土製品 …… 134
表43　ＳＫ303出土遺物観察表土製品
表44　ＳＫ304出土遺物観察表土製品
表45　ＳＫ305出土遺物観察表土製品
表46　ＳＫ306出土遺物観察表土製品
表47　ＳＫ307出土遺物観察表土製品 …… 135
表48　ＳＫ307出土遺物観察表石製品
表49　ＳＫ308出土遺物観察表土製品 …… 135

表50　ＳＰ出土遺物観察表土製品
表51　ＳＤ301出土遺物観察表土製品
表52　ＳＤ301出土遺物観察表石製品 …… 136
表53　ＳＫ302出土遺物観察表土製品
表54　その他の出土遺物観察表土製品
表55　その他の出土遺物観察表石製品 …… 138
第８章　４区の調査
表56　竪穴式住居址一覧 …… 162
表57　土坑一覧
表58　溝一覧
表59　ＳＢ401出土遺物観察表土製品 …… 163
表60　ＳＢ401出土遺物観察表金属製品 …… 164
表61　ＳＢ403出土遺物観察表土製品
表62　ＳＢ404出土遺物観察表土製品
表63　ＳＰ出土遺物観察表土製品 …… 165
表64　その他の出土遺物観察表土製品
表65　その他の出土遺物観察表金属製品 …… 166
表66　その他の出土遺物観察表土製品
第９章　５区Ａの調査
表67　竪穴式住居址一覧 …… 188
表68　掘立柱建物址一覧
表69　土坑一覧
表70　溝一覧
表71　第Ⅳ層出土遺物観察表石製品 …… 189
表72　ＳＢ501出土遺物観察表土製品
表73　ＳＤ501出土遺物観察表土製品
表74　ＳＤ503出土遺物観察表土製品
表75　ＳＤ503出土遺物観察表金属製品
表76　ＳＤ505出土遺物観察表土製品
表77　ＳＤ505出土遺物観察表石製品
表78　ＳＤ502出土遺物観察表土製品 …… 190
表79　ＳＤ510出土遺物観察表土製品
表80　ＳＤ502出土遺物観察表金属製品
表81　ＳＰ出土遺物観察表土製品 …… 191
表82　第Ⅱ②層出土遺物観察表土製品
表83　第Ⅱ②層出土遺物観察表石製品
表84　第Ⅱ②層出土遺物観察表金属製品 …… 192
表85　その他の出土遺物観察表土製品 …… 192

表86　その他の出土遺物観察表石製品
表87　その他の出土遺物観察表金属製品
第10章　5区Bの調査
表88　溝一覧 …… 208
表89　土坑一覧
表90　第Ⅲ②層出土遺物観察表石製品 …… 209
表91　SD520出土遺物観察表土製品
表92　SD517出土遺物観察表土製品
表93　SD517出土遺物観察表石製品 …… 210
表94　SD518出土遺物観察表土製品
表95　SD518出土遺物観察表石製品
表96　その他の出土遺物観察表土製品
第11章　5区Cの調査
表97　竪穴式住居址一覧 …… 230
表98　溝一覧
表99　土坑一覧
表100　SB502出土遺物観察表土製品 …… 231
表101　SB502出土遺物観察表石製品 …… 234
表102　SK511出土遺物観察表土製品
表103　SP出土遺物観察表土製品
表104　その他出土遺物観察表金属製品
第13章　6区Bの調査
表105　竪穴式住居址一覧 …… 255
表106　掘立柱建物址一覧
表107　土坑一覧
表108　溝一覧
表109　SB603出土遺物観察表土製品 …… 256
表110　SB603出土遺物観察表石製品
表111　その他の出土遺物観察表土製品
第14章　6区Cの調査
表112　竪穴式住居址一覧 …… 277
表113　土坑一覧
表114　溝一覧
表115　Ⅳ層上面出土遺物観察表石製品 …… 278
表116　SB601出土遺物観察表土製品
表117　SB602出土遺物観察表土製品
表118　SK出土遺物観察表土製品 …… 279
表119　SP出土遺物観察表土製品 …… 279

表120　第Ⅱ②層出土遺物観察表土製品 …… 280
表121　第Ⅱ②層出土遺物観察表金属製品
表122　その他の出土遺物観察表土製品
第15章　枝松遺跡の調査
表123　掘立柱建物址一覧 …… 295
表124　溝一覧
表125　土坑一覧 …… 296
表126　ＳＤ6出土遺物観察表土製品
表127　掘立1出土遺物観察表土製品
表128　ＳＤ1・2出土遺物観察表土製品
表129　ＳＫ1出土遺物観察表土製品 …… 297
表130　ＳＰ出土遺物観察表土製品
表131　その他の出土遺物観察表土製品
第16章　まとめ
表188　束本遺跡4次調査の竪穴式住居址の規格と構造 …… 301
表189　束本遺跡4次調査及び周辺遺跡の竪穴式住居址一覧（1）（2） …… 304
第17章　科学分析
表132　束本遺跡4次調査2南区の土層柱状図 …… 305
表133　束本遺跡4次調査1区北壁土層柱状図 …… 306
表134　束本遺跡4次調査5区Ｂ土層柱状図 …… 307
表135　束本遺跡4次調査5区Ｃ土層柱状図 …… 308
表136　束本遺跡4次調査6区Ａ土層柱状図 …… 309
表137　束本遺跡4次調査2南区火山ガラス比ダイヤグラム …… 310
表138　束本遺跡4次調査2区における火山ガラス比分析結果 …… 311
表139　放射性炭素年代測定結果 …… 312
表140　束本遺跡における珪藻化石一覧 …… 314
表141　1区北壁における珪藻化石群集ダイヤグラム …… 315
表142　種実同定結果 …… 317
表143　束本遺跡4次調査の植物珪酸体分析結果（1） …… 323
表144　束本遺跡4次調査の植物珪酸体分析結果（2） …… 324
表145　束本遺跡4次調査の植物珪酸体分析結果（3） …… 325
表146　束本遺跡4次調査、遺構関連試料の植物珪酸体分析結果（1） …… 326
表147　束本遺跡4次調査、遺構関連試料の植物珪酸体分析結果（2） …… 327
表148　束本遺跡4次調査、遺構関連試料の植物珪酸体分析結果（3） …… 328
表149　束本遺跡4次調査、遺構関連試料の植物珪酸体分析結果（4） …… 329
表150　束本遺跡4次調査2区南区の植物珪酸体分析結果 …… 330
表151　束本遺跡4次調査6区Ａの植物珪酸体分析結果 …… 331
表152　束本遺跡4次調査2区の植物珪酸体分析結果 …… 332

表153　束本遺跡4次調査3区の植物珪酸体分析結果（1）…… 333
表154　束本遺跡4次調査3区の植物珪酸体分析結果（2）…… 334
表155　束本遺跡4次調査4区の植物珪酸体分析結果 …… 335
表156　束本遺跡4次調査5区Ｃの植物珪酸体分析結果 …… 336
表157　束本遺跡4次調査6区Ｃの植物珪酸体分析結果 …… 337
表158　束本遺跡4次調査6区Ｂの植物珪酸体分析結果 …… 338
表159　束本遺跡4次調査の植物珪酸体分析結果 …… 339
表160　植物珪酸体の顕微鏡写真 …… 340
表161　炭化材の樹種同定結果一覧 …… 348
表162　束本遺跡4次調査における土器内堆積物および焼土の花粉分析結果 …… 353
表163　枝松遺跡4次調査の植物珪酸体分析結果（1） …… 357
表164　枝松遺跡4次調査の植物珪酸体分析結果（2） …… 358
第18章　付編　束本遺跡・桑原高井遺跡出土の弥生土器
表165　束本遺跡2次調査竪穴式住居址一覧 …… 388
表166　束本遺跡3次調査竪穴式住居址一覧
表167　桑原高井遺跡1次調査竪穴式住居址一覧
表168　桑原高井遺跡1次調査土坑一覧
表169　桑原高井遺跡1次調査溝一覧
表170　束本遺跡1次調査Ａ区出土遺物観察表土製品 …… 389
表171　束本遺跡2次調査ＳＢ01出土遺物観察表土製品 …… 390
表172　束本遺跡2次調査ＳＢ02出土遺物観察表土製品 …… 392
表173　束本遺跡2次調査地点不明出土遺物観察表土製品 …… 393
表174　束本遺跡3次調査ＳＢ01内Ｐ13出土遺物観察表土製品
表175　桑原高井1次調査ＳＢ01出土遺物観察表土製品
表176　桑原高井1次調査ＳＢ02出土遺物観察表土製品 …… 395
表177　桑原高井1次調査ＳＢ02出土遺物観察表石製品 …… 397
表178　桑原高井1次調査ＳＢ03出土遺物観察表土製品
表179　桑原高井1次調査ＳＢ04出土遺物観察表土製品 …… 398
表180　桑原高井1次調査ＳＢ05出土遺物観察表土製品 …… 399
表181　桑原高井1次調査ＤＫ4出土遺物観察表土製品
表182　桑原高井1次調査ＤＫ5出土遺物観察表土製品 …… 400
表183　桑原高井1次調査ＳＤ01関連出土遺物観察表土製品 …… 401
表184　桑原高井1次調査ＳＤ02関連出土遺物観察表土製品
表185　桑原高井1次調査ＳＤ03関連出土遺物観察表土製品 …… 402
表186　桑原高井1次調査その他出土遺物観察表土製品 …… 403
表187　桑原高井1次調査その他出土遺物観察表石製品 …… 404
第19章　調査の成果と課題
表190　(1)副次的炉をもつ竪穴式住居址一覧 (2)柱が2重に巡る竪穴式住居址一覧 …… 406

第１章　　はじめに

１．調査に至る経緯

平成4年、松山市道路部街路建設課より松山東部環状線（松山市束本町～枝松町）道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

確認願いが申請された束本1丁目他は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『83　枝松遺物包蔵地』内にあり、周知の包蔵地として知られる。申請地一帯は『桑原地区』と呼ばれ、これまでにも数多くの調査が行われ、弥生時代～古墳時代の集落関連遺構が確認されている。同地区は、「船」を描いた弥生土器（樽味高木遺跡3次調査）や「貨泉」（樽味立添遺跡）などが出土しているほか、前方後円墳（5世紀末）の経石山古墳などの遺跡が数多くあり、松山平野の主要な遺跡地帯として注目される。

文化教育課では、確認願いが申請された地点についての遺跡の有無と、さらにはその範囲や性格を確認するために、平成5年に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、申請地では遺物包含層及び遺構が検出され、弥生時代～中世の集落遺跡があることを確認した。

この結果を受け、（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターと申請者は発掘調査についての協議を行った。発掘調査は、弥生時代の集落構造の解明と範囲確認を主目的とし、平成5年10月～同6年7月の間に野外調査を実施した。

なお、室内作業は平成6年8月～同8年3月の間に実施した。

２．調査・刊行組織（平成8年3月31日現在）

松山市教育委員会	教育長	池田尚郷
生涯教育部	部長	渡辺和彦
	次長	三好俊彦
文化教育課	課長	松平泰定
（財）松山市生涯学習振興財団	理事長	田中誠一
	事務局長	一色正士
埋蔵文化財センター	所長	河口雄三
	主幹	山内仁
	次長	田所延行
	調査係長	田城武志
	主任	栗田正芳（文化教育課職員）
調査担当	調査員	梅木謙一
		宮内慎一
		高尾和長
		山本健一
		水本完児
		相原秀仁
		大森一成

第２章　遺跡の概要

１．地理的環境

松山平野は県下最大の平野であり、主に重信川によって形成された扇状地である。その支流の一つである石手川は、高縄山に源を発し、平野の北東部を南西方向に向け横断しながら小野川さらには、重信川に合流し、伊予灘に注ぐ河川である。石手川は溝辺町周辺から南西に向かって大規模な扇状地を形成し、その扇状地の標高32m～36mに今回の調査地も立地する。

束本遺跡と枝松遺跡が立地している扇状地面は、約23,000年前の姶良（ＡＴ）火山灰の降下・堆積期には、すでに段丘化していたと推定されている。しかし、この火山灰層直上に火山灰混じりの砂礫層が堆積していることから、この地で姶良火山灰の降下・堆積後に、短期間の洪水のような現象が起こったと推測される。しかし、その後は小河川の流路に沿って、部分的に小規模な洪水や砂礫の堆積が起こったが、石手川本流による激しい洪水に襲われることなく、縄文時代や弥生時代の遺跡の立地にとっては、安定した地形環境であったと推定されている〔平井1989〕。

２．歴史的環境

本遺跡一帯は桑原地区と称され、数多くの遺跡が存在する。ここでは、近年に調査された遺跡を中心に桑原地区の遺跡の展開を概説していきたい。

旧石器時代

当地域にかぎらず、松山平野全域においても、これまでに旧石器時代の明確な遺構は発見されていない。しかし、樽味遺跡・樽味四反地遺跡においてはポケット状に堆積したＡＴ火山灰土を確認している。

縄文時代

現在までに、縄文時代の遺構は検出されていない。しかし、樽味立添遺跡・桑原田中遺跡からは、刻目凸帯をもつ土器（縄文晩期後半～弥生前期前半）が各1点出土している。

弥生時代

前期：樽味遺跡より前期前半の土坑（ＳＫ5）と溝（ＳＤ4）、樽味高木遺跡からは前期後半の土器を検出している。桑原田中遺跡2次調査地においても土器片が出土している。

中期：樽味高木遺跡1～3次調査地からは中期後半の土器が出土している。特に2次調査地ＳＢ1からは甕形土器・無頸壺・短頸壺などが、さらに3次調査地ＳＸ1からは甕形土器・壺形土器・高坏形土器の資料性が高い土器が出土している。

後期：本調査地北部では、樽味立添遺跡ＳＸ1から後期後葉の遺物が出土している。樽味高木遺跡2次調査地Ｂ区より、弥生後期の竪穴式住居址（ＳＢ２）を検出している。樽味四反地遺跡2～3次調査地ＳＢ1とＳＢ8、これらの竪穴式住居址から出土した土器は、弥生時代後期末のものであり、この一帯に弥生後期～後期末にかけて集落が広がっていたことを示すものである。

他に、樽味立添遺跡では包含層中より『貨泉』の出土がある〔梅木謙一1989〕。また、樽味高木遺

跡3次調査地から「船」を描いた線刻（絵画）土器が出土している〔梅木謙一1992〕。

南部においても集落跡が検出されている。桑原田中遺跡ＳＫ1からは、一括投棄された土器群が出土している。下層には壺形土器、上層には高坏形土器が検出される傾向にあり、認識された投棄が行われた井戸祭祀の可能性がある遺構である。今回の調査地に隣接する、東本遺跡2次調査地では竪穴式住居2棟と掘立柱建造物址や土坑が検出され、枝松遺跡3次調査地では、貼り付けによる高床部をもつ竪穴式住居址が検出されている。桑原稲葉遺跡では、円形と方形の竪穴式住居址を1棟づつ検出している。

桑原高井遺跡では、竪穴式住居址5棟のほか、集落関連遺構が検出されている。住居址には円形と方形の二種類があり、これらは壁体に沿って周溝がめぐる。特に2号住居址は平面形態が六角形を思わせるような円形である。柱穴は中心部に1本と壁体に沿って6本の計7本からなり、ベッド状施設を付設している〔森光晴1980〕。これらの住居址・土坑より検出した土器も弥生時代後期～後期末のものであり、この南部一帯においても、北部同様に集落の存在を示すものである。

古墳時代

古墳時代では、樽味立添遺跡から10数棟の竪穴式住居址と掘立柱建物址（古墳後期以降）を検出している。樽味高木遺跡の竪穴住居址並びに土坑からは5世紀代の須恵器・土師器の甕形土器・壺形土器・高坏形土器などが出土している。また桑原本郷遺跡では5世紀後半の方形竪穴式住居址や掘立柱建物址が検出され、さらに包含層より滑石製の臼玉100点余りが須恵器と共に出土している〔栗田茂敏1987〕。

桑原地区では、集落関連遺構だけでなく、経石山古墳と三島神社古墳の2基の古墳が古くから知られている。経石山古墳は、全長48.5mの前方後円墳で5世紀末に時期比定されている〔森光晴1986〕。三島神社古墳は全長45m、初期の畿内型の横穴式石室を内部主体にもつ前方後円墳である。出土遺物より6世紀前葉に比定される〔森光晴1986〕。発掘調査後に削平（消滅）される。

また、桑原地区の東側の丘陵部には、東野お茶屋台古墳群と畑寺竹ヶ谷古墳群が存在し東野お茶屋台古墳では周溝から5世紀後半の須恵器が出土し、畑寺竹ヶ谷古墳においても周溝内から須恵器や直刀が出土している。これらの群集墳は、6世紀前半に始まる。

古代・中世

樽味四反地遺跡では10世紀代に比定される溝ＳＤ1・ＳＤ3が検出されている。また、樽味遺跡のＳＤ1・ＳＤ2からは14世紀後半、ＳＤ3・ＳＫ5からは15世紀代の土師器が出土している。特にＳＤ1は集落境界の溝として位置づけられている。なお、樽味遺跡一帯は14～16Ｃにかけて当地方で権力を握っていた河野氏の支配範囲に入っていたのではないかと考えられている〔宮本1989ｂ〕。

❶樽味遺跡　❷樽味四反地遺跡　❸樽味立添遺跡　❹桑原田中遺跡
❺樽味高木遺跡　❻桑原田中遺跡２次調査地　❼樽味高木遺跡２次調査地　❽樽味高木遺跡３次調査地
❾樽味四反地遺跡２･３次調査地　❿束本遺跡２次調査地　⓫枝松遺跡３次調査地　⓬桑原稲葉遺跡
⓭桑原高井遺跡　⓮桑原本郷遺跡　⓯経石山古墳　⓰三島神社古墳
⓱東野お茶屋台古墳群　⓲畑寺竹ケ谷古墳群　Ⓐ枝松遺跡４次調査地　Ⓑ束本遺跡４次調査地

第１図　桑原地区の主要遺跡分布図（S＝1：25,000）

〔文献〕

梅木　謙一　1992「樽味立添」「樽味高木」「樽味四反地」「桑原西稲葉1・2次」「桑原田中」「経石山古墳」「枝松3次」『桑原地区の遺跡』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

梅木　謙一　1994「樽味高木2・3次」「樽味四反地2・3・4次」「桑原田中2次」『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

田﨑　博之　1993『樽味遺跡Ⅱ』「樽味遺跡2次調査報告」愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ・愛媛大学埋蔵文化財調査室

梅木　謙一　1989「樽味四反地遺跡」「樽味立添遺跡」「樽味高木遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

森　　光晴　1980「東本Ⅱ・Ⅲ・桑原高井遺跡」『松山市文化財調査報告書14』
「東野お茶屋台古墳群」「経石山古墳」「三島神社古墳」『愛媛県史　資料編　考古』松山市教育委員会

松村　淳　他　1989「桑原田中遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

岡田　敏彦　1990「桑原稲葉遺跡」『桑原住宅埋蔵文化財調査報告書』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

栗田　茂敏　1987「桑原本郷遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会

平井　幸弘　1989「鷹子遺跡及び樽味遺跡をとりまく地形環境」『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室

平井　幸弘　1989「石手川扇状地城北地区における沖積低地の地形発達と考古遺跡の立地環境」『愛媛大学教育学部紀要Ⅲ自然科学．9』愛媛大学

宮本　一夫　1989ａ「道後平野における弥生時代開始時期の動向」
1989ｂ「道後平野の中世土器編年－13～15世紀を中心に－」『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室

西尾　幸則　1986「畑寺竹ヶ谷古墳群」『愛媛県史　資料編考古』愛媛県史編纂委員会

町田　　洋・新井　房夫・森脇　　広　1986『地層の知識』「第四紀をさぐる」考古学シリーズ[8]

吉本　　弘　1986「湯之町廃寺」「内代廃寺」『愛媛県史　資料編』愛媛県史編纂委員会

松山市史料集編集委員会　1980『松山市史料集第一巻　考古編Ⅰ』

松山市史料集編集委員会　1986『松山市史料集第二巻　考古編Ⅱ』

愛媛県教育委員会　1987『愛媛県中世城館跡－分布調査報告－』

第３章　調査の概要

１）調査の経緯

調査地は、束本1丁目から枝松1丁目に位置し、全長約900ｍ、幅20ｍ、対象面積は17,600㎡である。枝松町と束本町では、既に3次の遺跡調査が実施されている。したがって今回の調査地は遺跡名を枝松町内は枝松遺跡4次調査地、束本町内は束本遺跡4次調査地とし調査を進めた。

束本遺跡は調査の進行上調査区を東西に横切る道路及び畦によって地区割を行った。名称は北より1区～6区とし、さらに、2区と4区は北・南区、5区と6区は北よりＡ・Ｂ・Ｃの3区画に小区分を行った。

枝松遺跡は東西に横切る溝より、北・南区に小区分を行った。調査は北側の枝松遺跡と束本遺跡1区より開始した。まず、各調査区ともに調査地西端に土層観察用のトレンチを設定し、基本層序の検討を行う。次に、重機により表土剥ぎを行い、排土の搬出をも行う。調査区東側は排土搬出用の道路及び排土置場として使用する。なお、遺構の呼称は、1区ＳＢ1はＳＢ101、2区ＳＢ1はＳＢ201とし、算用数字の左側は区名をあらわし、右側は各調査地内での遺構番号をあらわすものである。

平成6年3月19日（土）午後に第一回現地説明会を行い、近隣住民や考古学ファンほか約200名の見学者が訪れる。主に束本遺跡の1区から4区の見学をおこない、特にＳＢ203の遺構説明とＳＢ302の住居址及び出土遺物の説明を行う。3月末で1区と2区の調査を終了する。枝松遺跡につていは平成5年12月で調査を終了している。

平成6年7月25日（月）午後に第二回現地説明会を開き、5区と6区の見学会を行った。雨天のために現場事務所内にて出土遺物の説明を行う。見学者60名。7月末で野外調査を終了する。

野外及び室内調査では、住居址・土坑・土器内の土壌、基本土層について植物珪酸体や火山灰などの自然科学分析を行い、堆積土層の時期や古環境の復元につとめた。

また、ＳＢ302より検出した破鏡の分析と保護処理を委託した。

今回の調査では、調査の全体にわたり、下條信行氏・田﨑博之氏・宮本一夫氏に指導を賜った。さらに、住居については石野博信氏、鏡については高橋　徹氏、石器については藤野次央氏に指導を賜り、植物珪酸体及び火山灰分析は、古環境研究所（杉山真二氏・早田　勉氏）に調査を委託し協力をいただいた。

第4章　層　位

本調査は松山東部環状線道路建設に伴う事前調査である。建設予定地の内、枝松1丁目-9から束本1丁目2番に至る約800mの間が調査対象地である。調査地は調査以前は水田や既存宅地であった。調査地の標高は北端で35.6m、南端で32.0mを測る。

基本層位は第Ⅰ層表土、第Ⅱ層黄灰色砂質土、第Ⅲ層黒色土、第Ⅳ層褐色砂質土、第Ⅴ層暗褐色粘質土、第Ⅵ層黄褐色土、第Ⅶ層暗褐色砂質土、第Ⅷ層灰色砂礫である（第2図）。

第Ⅰ層－水田耕作に伴う客土や造成土である。地表下15～80cmまで開発が行われている。

第Ⅱ層－粘性の違いにより2層に分層した。第Ⅱ①層は調査地全域に見られる。黄灰色砂質土で厚さ3～20cmの堆積を測り、土師器片を少量含む。第Ⅱ②層は調査地南部、5区A及び6区Aのみで検出された。第Ⅱ①層に比べ粘性がやや強い。厚さ5～10cmの堆積を測り、土師器、須恵器を包含する。

第Ⅲ層－微弱な土色の違いから2層に分層した。第Ⅲ①層は調査地北部、2区の南半部から3区の北半部を除くほぼ全域で検出された。黒色土で、厚さ5～10cmの堆積を測るが、調査地南部5区A～Cでは厚さ40cm前後を測る。本層中及び上面からは多数の遺構や遺物を検出した。特に本層中からは石器類が出土している。第Ⅲ②層は4区の一部を除くほぼ全域で見られる。厚さ5～15cmの堆積であり、本層中から石器類が出土している。土壌分析の結果、約6,300年前に南九州の鬼界カルデラから噴出した広域テフラ、鬼界アカホヤ火山灰に由来する火山ガラスの濃集層準が認められた。本層上面にて倒木址を検出している。

第Ⅳ層以下は各調査区の西壁沿い、及び調査区内の東西方向のトレンチ掘りによって土層観察を行った。調査の進行上、危険が伴う場所や第Ⅷ層検出までに地表下3mを越える場所では途中でトレンチ掘りを中止した場所もある。

第Ⅳ層－本層上面が今回の調査における最終の遺構検出面である。調査北区中央部（4区の北半部）を除くほぼ全域で見られる。厚さ5～20cm前後の堆積である。本層上面からは石器が数点出土しているほか1区の南半部にて焼土を検出した。

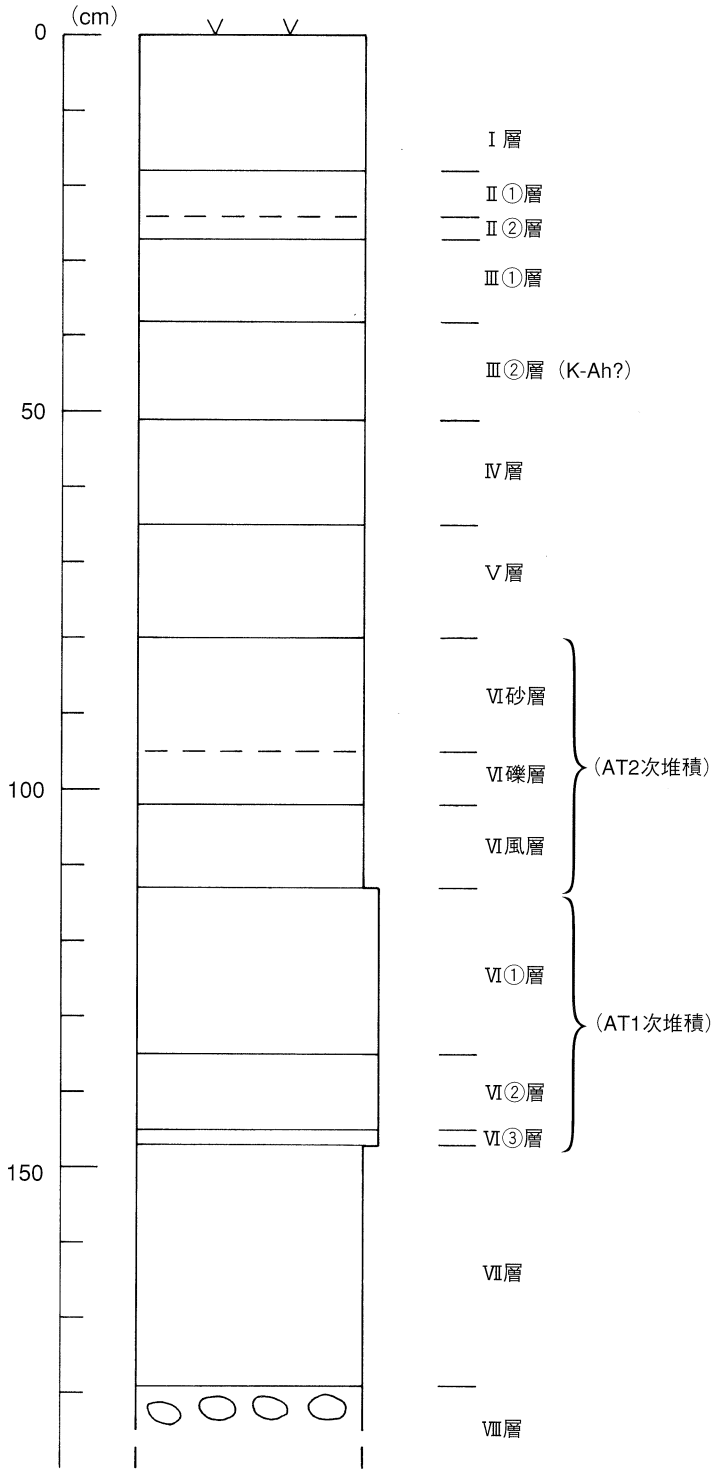
第Ⅴ層－4区の北半部を除くほぼ全域でみられる。堆積状況は調査地北方から南方へ向けて緩傾斜堆積をなし調査区北端で約5cm、南端では約40cm前後を測る。本層中から遺物は検出されなかった〔2区の中央部にて本層上面から掘り込まれたピット状遺構を検出した〕。

第Ⅵ層－土壌分析の結果、本層は約2.2～2.5万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した広域テフラ、姶良Tn火山灰であることが判明した。堆積状況により大きく2層に分層した。1つは直接、調査地に降下した火山灰〔1次堆積〕、他方は、何らかの作用により調査地外の場所に降下した火山灰が、調査地内に移動して堆積した火山灰〔2次堆積〕である。特に1次堆積の火山灰は粒子の大きさにより3つに分層した。上位より黄色の細粒火山灰層、褐色の粗粒火山灰層、黄色細粒火山灰層で、それぞれを第Ⅵ①層、第Ⅵ②層、第Ⅵ③層と呼称した。また、2次堆積の火山灰は混入する遺物（砂、礫）により、第Ⅵ層砂、第Ⅵ層礫、第Ⅵ層風といった呼称名を付けた。

〔2次堆積〕

第Ⅵ層砂－1区の北半部及び3区を除くほぼ全域でみられた。1～3㎜大の砂の粒子が混入するもので色

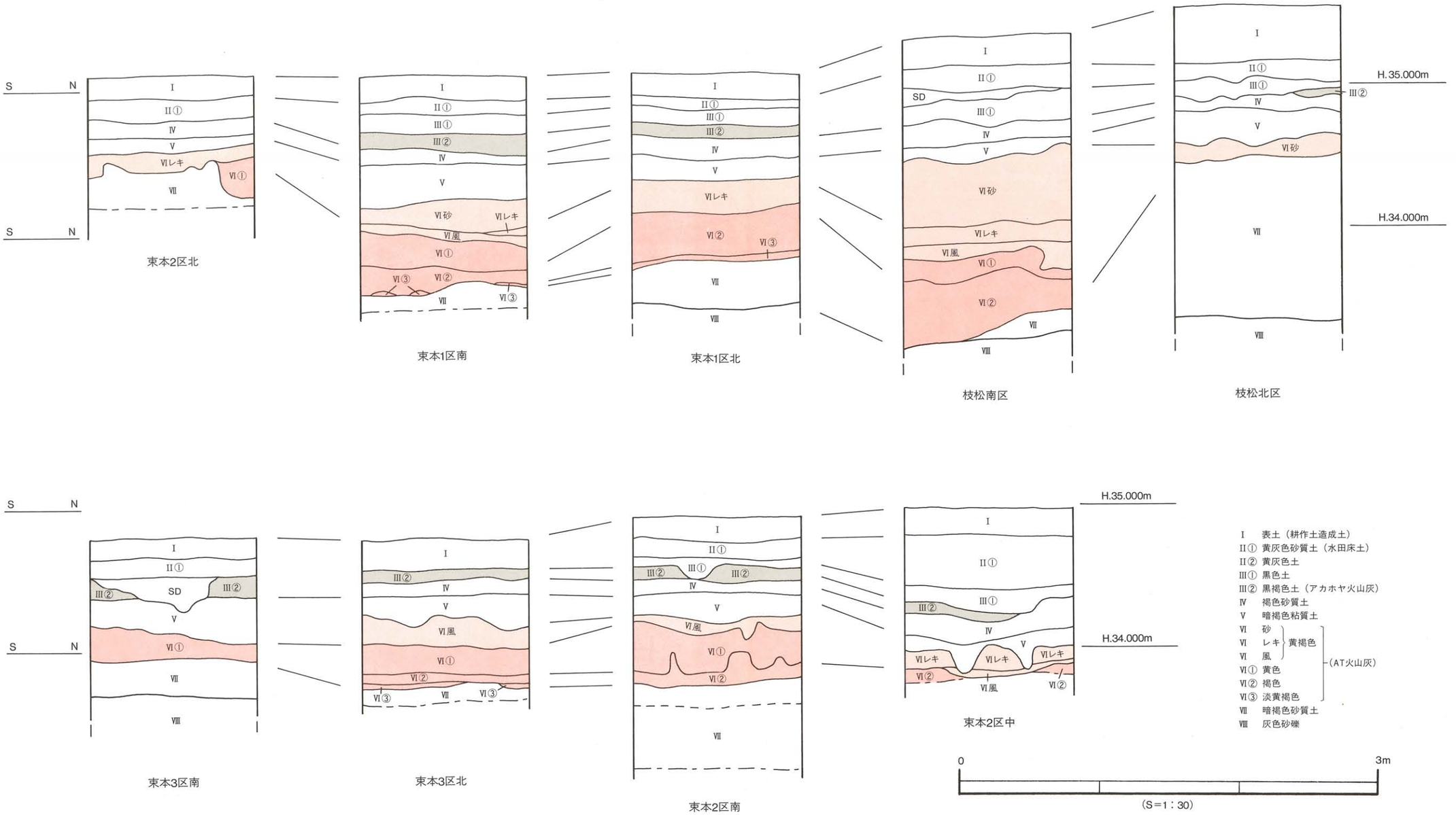
層　位



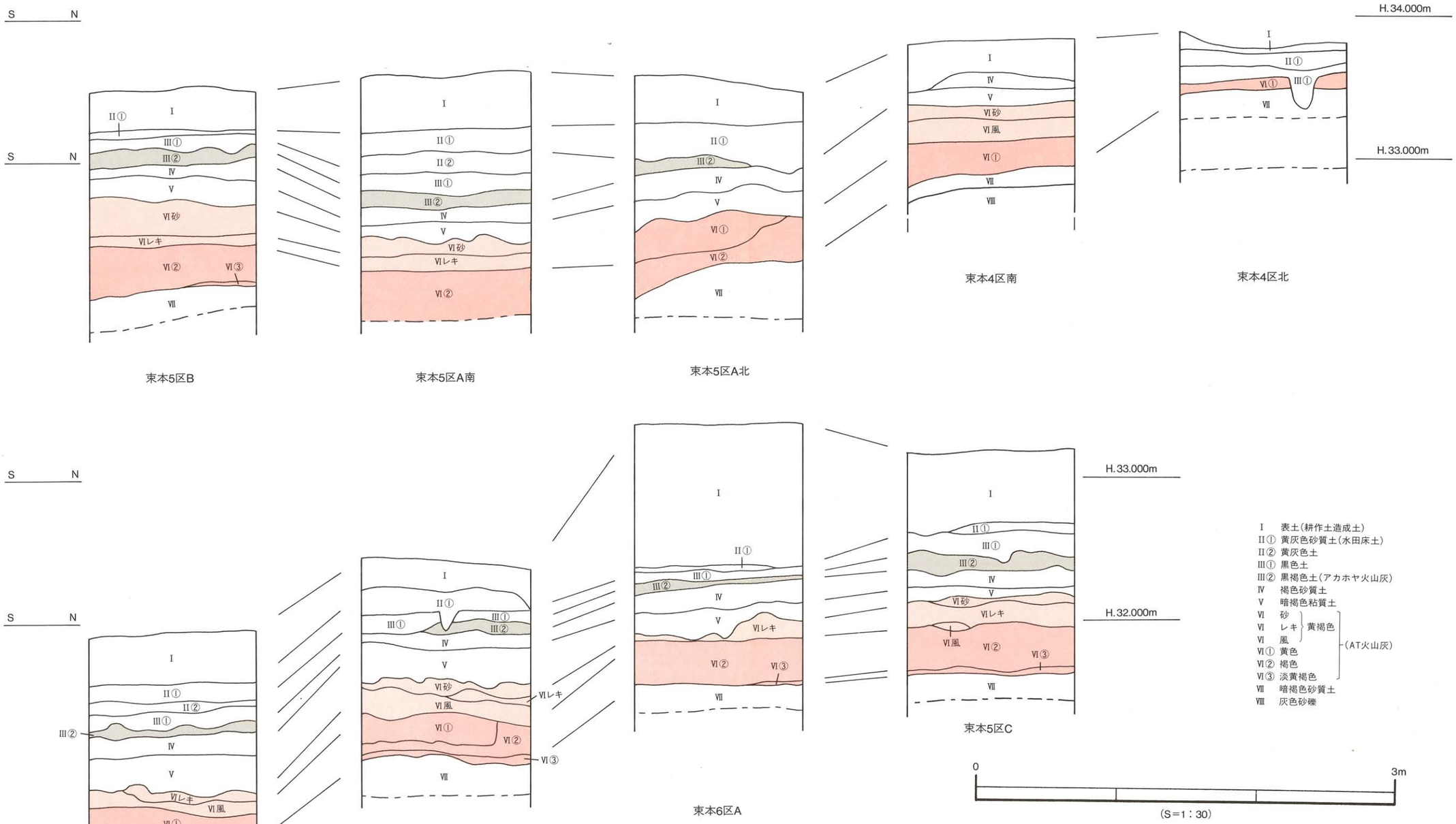
土層名称

Ⅰ	表土
Ⅱ①	黄灰色砂質土
Ⅱ②	黄灰色土
Ⅲ①	黒色土
Ⅲ②	黒褐色土
Ⅳ	褐色砂質土
Ⅴ	暗褐色粘質土
Ⅵ砂	黄色砂質（黄色ガラス含む）
Ⅵ礫	黄色砂礫層（黄色ガラス含む）
Ⅵ風	黄色ガラス質火山灰層
Ⅵ①	黄色細粒火山灰層
Ⅵ②	褐色粗粒火山灰層
Ⅵ③	黄色細粒火山灰層
Ⅶ	暗褐色砂質土
Ⅷ	灰色砂礫層

第２図　土層柱状図


S N
S N
I
II①
III①
III②
IV
V
VI砂
VI風
VI①
VI②
VI③
VI レキ
VII
VIII
SD
H.35.000m
H.34.000m
束本2区北
束本1区南
束本1区北
枝松南区
枝松北区
束本3区南
束本3区北
束本2区南
束本2区中
I 表土（耕作土造成土）
II① 黄灰色砂質土（水田床土）
II② 黄灰色土
III① 黒色土
III② 黒褐色土（アカホヤ火山灰）
IV 褐色砂質土
V 暗褐色粘質土
VI 砂
VI レキ
VI 風
黄褐色
VI① 黄色
VI② 褐色
VI③ 淡黄褐色
（AT火山灰）
VII 暗褐色砂質土
VIII 灰色砂礫
0
3m
(S=1：30)

第3図　土層柱状図(1)


S N
II①
I
III①
III②
IV
V
VI砂
VIレキ
VI②
VI③
VII
束本5区B
束本5区A南
束本5区A北
束本4区南
束本4区北
H.34.000m
H.33.000m
H.32.000m
VI風
VIII
束本6区C
束本6区B
束本6区A
束本5区C
I 表土(耕作土造成土)
II① 黄灰色砂質土(水田床土)
II② 黄灰色土
III① 黒色土
III② 黒褐色土(アカホヤ火山灰)
IV 褐色砂質土
V 暗褐色粘質土
VI 砂
VI レキ 黄褐色
VI 風
(AT火山灰)
VI① 黄色
VI② 褐色
VI③ 淡黄褐色
VII 暗褐色砂質土
VIII 灰色砂礫
0
3m
(S=1:30)

第4図　土層柱状図(2)

調は黄褐色を呈する。調査地北から南へ向けて緩傾斜堆積をなし厚さ5～20cm前後を測る。

第Ⅵ層礫－3区の一部及び4区を除くほぼ全域でみられた。5～23㎜大の小礫が混入するもので、色調は黄褐色を呈する。2区、6区では堆積が厚く、厚さ20～30cmを測るが、その他はいずれも5～15cm前後である。

第Ⅵ層風－1区の北半部及び4区を除くほぼ全域で見られた。1～4㎜大の礫がわずかに混入するもので、色調は黄色を呈する。6区では比較的堆積が厚く20cm前後を測るが、その他の場所では5～10cm程度である。

〔1次堆積〕

第Ⅵ①層－1次堆積の火山灰の内、最も粒子のきめの細やかなもので、調査地ほぼ全域で検出された。4区においては、本層がブロック状に堆積をなす。色調は黄色を呈し、厚さはほぼ均一で10～30cm前後を測る。

第Ⅵ②層－本層は堆積中及び堆積後に東西方向の水の作用を受けたものと思われる。色調は褐色を基調とし､特に水の作用の大小により乳褐色､乳黄褐色に色調の変化した部分がみられた。分布は4区及び5区の一部を除くほぼ全域である。1～3区では15～20cm前後の堆積であるが5区では30cm前後と最も厚くなり、6区南端部では5cm程度と最も薄い堆積状況となる。

第Ⅵ③層－調査地内に最初に降下した火山灰である。比較的粒子のきめの細かい火山灰で色調はやや淡い黄色を呈する。堆積状況は西壁や東西トレンチの土層観察などから、6区周辺では面的な広がりが予想されるが、その他の地域では点在しているものと思われる。厚さわずかに3～5cm程度の堆積である。

第Ⅶ層－前述したように、危険を伴う場所では第Ⅷ層まで掘り下げができなかった。したがって便宜上、第Ⅷ層までの間の土層を第Ⅶ層と呼称する。暗褐色砂質土を基調とするが、5区では黄白色の粘土層（厚さ10～20cm）が褐色砂質土を覆う場所がある。その他、6区Ａでは第Ⅵ層下に5㎜大の小礫を含む灰色粗砂層が検出された。調査区西壁沿い及び東西トレンチ掘りにより、本層上面は調査地全域を通し、ゆるやかな起伏をもつ。特に5区Ａの北端では約30cm程度盛り上がった箇所がみられた。第Ⅵ層以上、第Ⅲ①層までは、本層上面の起伏に沿った堆積状況をなす。

第Ⅷ層－旧石手川の砂礫層である。調査区北半部で主に検出された。拳大の円礫で構成される。本層上面は調査地北東から南西方向へ傾斜をなす。特に東西方向では1区の中央部に、南北方向では3区及び4区の南端部にて約20cm前後の土堤状の高まりがあり、自然堤防があったことがうかがわれる。

遺構は、第Ⅲ①層上面及び第Ⅳ層上面で検出した（第３図）。第Ⅲ①層上面では枝松遺跡ＳＤ5・7など数条の溝やピットを検出し、束本遺跡ＳＢ203やＳＢ302の竪穴式住居址をはじめ、土坑やピット、倒木址などを検出した。第Ⅳ層上面（最終遺構検出面）では、竪穴式住居址や掘立柱建物址、溝、土坑などの遺構を多数検出したが、その深さなどから判断すると本来は第Ⅲ②層以上の層から掘り込まれた可能性が高いものばかりである。

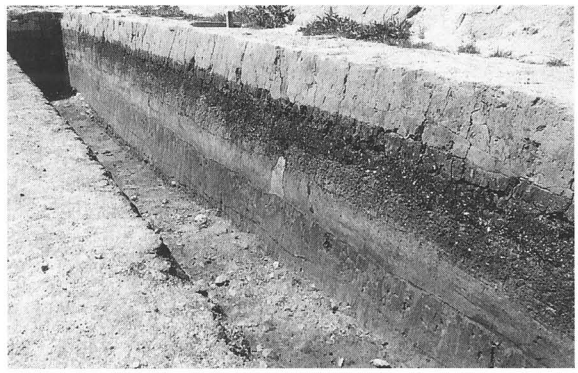
これらのことから各層は出土遺物・検出遺構から判断すると、第Ⅱ①層は中世以降、第Ⅱ②層は古墳時代～中世、第Ⅲ①層は縄文時代までに堆積したものと判断される。

また、第Ⅳ層上面の標高を測量すると漸次、調査地北東から南西方向へ向けて緩傾斜をなす。

1　枝松

2　束本１区（1）

3　束本１区（2）



4　束本２区

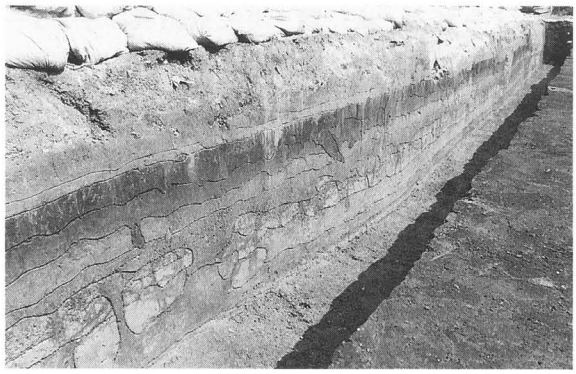
5　束本３区

6　束本４区

第５図　土層写真（1）

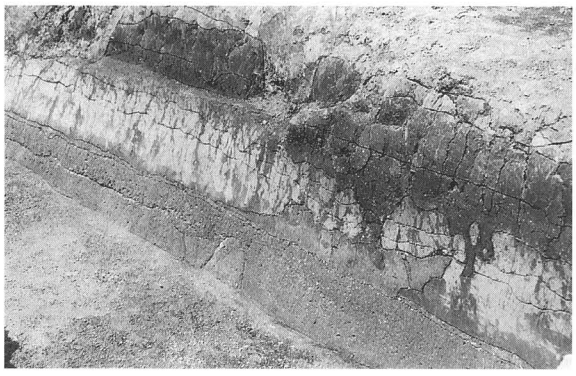
7　束本5区A

8　束本5区B



9　束本5区C

10　束本6区C



11　束本6区B

12　束本6区A

第6図　土層写真（2）

まとめ

今回の調査で注目されることは2つのテフラ（火山灰）の検出である。アカホヤ火山灰（第Ⅲ②層）とＡＴ火山灰（第Ⅵ層）である。

アカホヤ火山灰は今から約6,300年前に降下したテフラである。色調は黒褐色を呈し、厚さは調査地全域を通し5～15cmを測る。松山平野での検出は初例である。本層中からは石鏃10点が出土している。これまで、松山平野における縄文時代以前の石器は表採資料がほとんどであり、今回のように層位的に検出された例はなく、本資料は貴重な資料といえる。今後、松山平野における先土器～縄文時代の石器編年等を考えるうえで好資料となるものである。

一方、ＡＴ火山灰は今から約22,000～25,000年前に降下した広域テフラである。色調は黄褐色を基調とする。今回の調査では直接、調査地に降下した火山灰（1次堆積）と、何らかの作用により調査地以外の地から搬入された火山灰（2次堆積）とを検出した。1次堆積のうち最初に降下した火山灰は厚さ3～5cmの堆積で、その分布は点在しているものと考えられる。次に降下した火山灰は厚さ5～25cmの堆積を測る。調査地全域でみられるが、東西方向に流れる河川や流路等の影響で色調が茶褐色や乳褐色を呈する。最後に直接降下した火山灰は、厚さ10～30cmを測り、1次堆積の火山灰の中では最も厚い堆積をなす。調査地のほぼ全域でみられ、色調は黄褐色を呈する。1次堆積後には風や水（砂・礫が混じる）の作用により、2次的に堆積した火山灰が厚さ10～30cmの堆積を測る。色調は黄褐色を呈する。松山平野では調査地東部、樽味四反地遺跡1次調査地や桑原西稲葉遺跡2次調査地などでＡＴ火山灰が検出されている。しかしながら、今回の調査では、最大で厚さ60cm前後の堆積があり、松山平野では初例である。よって、きわめて貴重な資料といえる。

火山灰以外の土層では第Ⅶ層はＡＴ火山灰堆積以前の土層であり、砂質土や粗砂、粘質土などで構成される。調査地全域を通し、第Ⅶ層上面では南北方向は凹凸がみられ、東西方向は東から西へ緩傾斜をなす。第Ⅵ層以上、第Ⅲ①層まではいずれも第Ⅶ層上面の起伏に沿った堆積状況をなす。第Ⅲ①層上面では比較的平坦面をなすことから、生活面を形成していたことがうかがわれる。

また、最下層である灰色砂礫層は拳大の円礫で構成され、旧石手川の砂礫層である。検出した地点は数箇所ではあるが、調査区北部では南北方向に、調査区中央部から南側の一部では東西方向に20cm前後の土堤状の高まりを検出している。おそらく自然堤防が形成されていたものと思われる。

以上、簡単にまとめを行った。ＡＴ火山灰は、これまでに桑原・樽味地区で検出例が報告されているが、今後は資料収集を重ね、松山平野でのＡＴ火山灰の分布や堆積状況などの詳細なデータ作りに努め、ＡＴ火山灰が堆積する要因を検討していく必要性がある。また、今後の調査では、可能な限り深掘りを実施し、火山灰の有無や、旧石手川の砂礫層の検出をし、古地形や古環境の復元に努めることも重要な調査課題である。

第５章

東本遺跡４次

－１区の調査－

第５章　　１区の調査

１．調査の経緯

1区は、調査対象地の北端部であり、調査以前は水田と果樹園であった。調査対象面積は1,400㎡であるが、安全対策及び排土置場として周縁を2～5mの幅で使用したために、調査面積は990㎡余りとなった。以下、調査工程を略記する。

1993年10月1日より調査事務所の設置及び調査準備作業を行う。

10月8日より調査区西側に幅1mのトレンチ（ａトレンチ）を掘り基本土層の確認を行う（第８図）。表土剥ぎ取りはまず調査区西側の幅8mを重機により行い、排土は東側に置く。剥ぎ取り後は遺構検出作業を行う。

19～25日、排土搬出用の道路をつけ、排土の搬出をしながら東側7mの表土剥ぎを行う。遺構検出作業を行い、掘立柱建造物・溝・土坑・柱穴痕を検出する。調査区内に東西8m間隔、南北4m間隔の測量杭を打ち、遺構配置図の作成を行う。

28日に杉山真二・早田勉・田﨑博之の各氏に層序に関する調査指導を乞い、検討会を行う。

11月末迄に遺物出土状況の測量と遺物の取り上げを行い、さらに遺構の測量を完了する。

3月に調査区内を精査し、航空写真測量を行う。測量完了後、東西3カ所にトレンチ（ｂ・ｃ・ｄトレンチ）を掘り、写真撮影と測量を行う。3月末日迄に野外調査を終了する。

なお、調査区に4m四方の杭を打ち、西から東にＡ・Ｂ・Ｃ、北から南に１・２・３･･･21・22・23と番号を付し、グリット分けを行った。

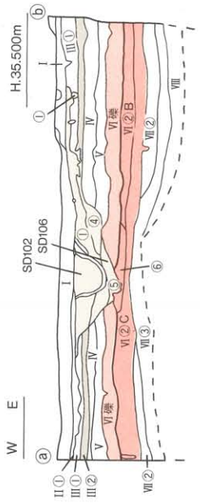
２．層　位

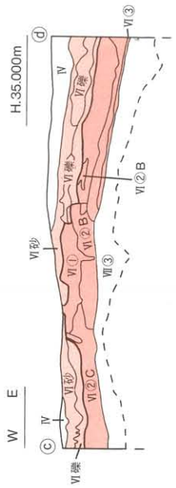
本調査区の基本土層は、第Ⅰ層表土（耕作土）、第Ⅱ層黄灰色（水田床土）、第Ⅲ①層黒色土、第Ⅲ②層黒褐色土、第Ⅳ層褐灰色土、第Ⅴ層暗褐色土である。第Ⅰ層及び第Ⅱ層は20～30㎝の厚さを測る。第Ⅲ①層黒色土と第Ⅲ②層黒褐色土は、調査区の南側5mから北側にわたりみられ、共に厚さ5～20㎝の堆積である。第Ⅲ①層中には少量であるが、弥生土器が含まれる。第Ⅲ②層中に1点石器を検出している。この第Ⅲ②層はアカホヤ火山灰（6,300年前）である。第Ⅳ層褐色砂質土は調査区全域に堆積し、厚さ10～20㎝を測る。第Ⅳ層中には遺物は検出されなかったが、生活が行われていたと思われる焼土を調査区の中央部で検出している。

遺構は、第Ⅳ層上面で検出し、古墳時代から近世までの遺構を確認した。掘立柱建造物2棟・柵列1基・溝7条・土坑2基・柱穴29基である。これらの遺構は調査区西壁では第Ⅲ②層を切っており、本来は第Ⅲ②層のアカホヤ火山灰以上の層から掘りこまれていたと考えられる。

検出遺構の時期は、調査壁の土層の切り合い関係より埋土が灰色の遺構は近代で、灰色以外は古墳時代以降と認定した。

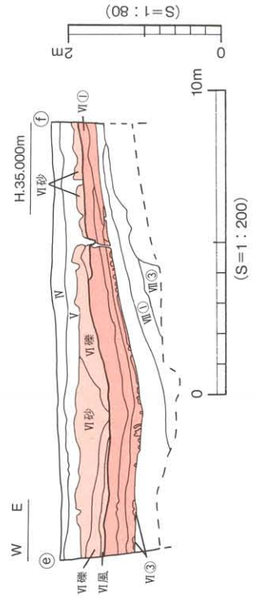
第７図　調査区位置図

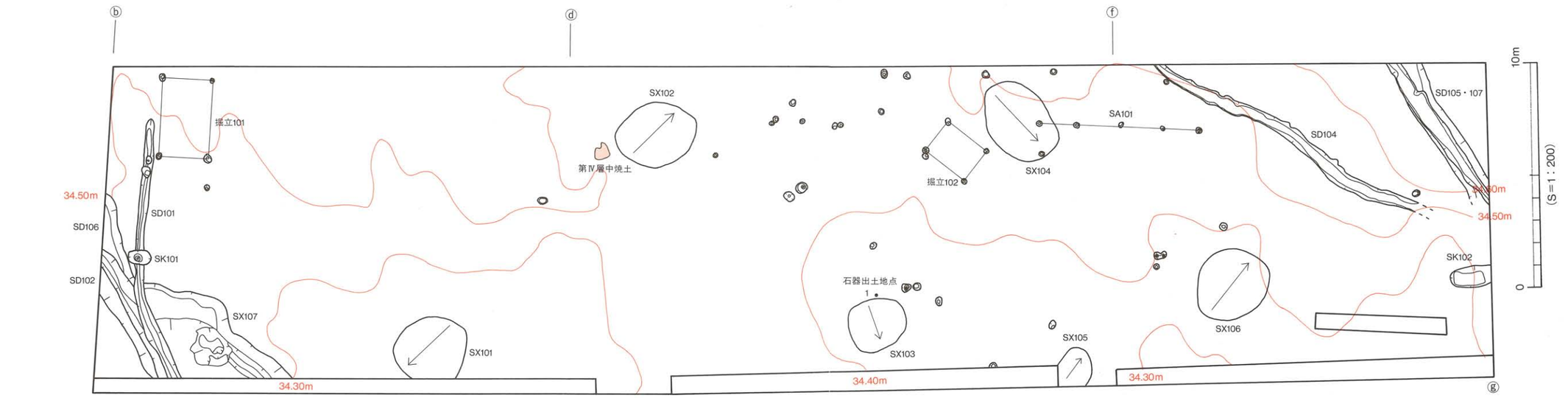


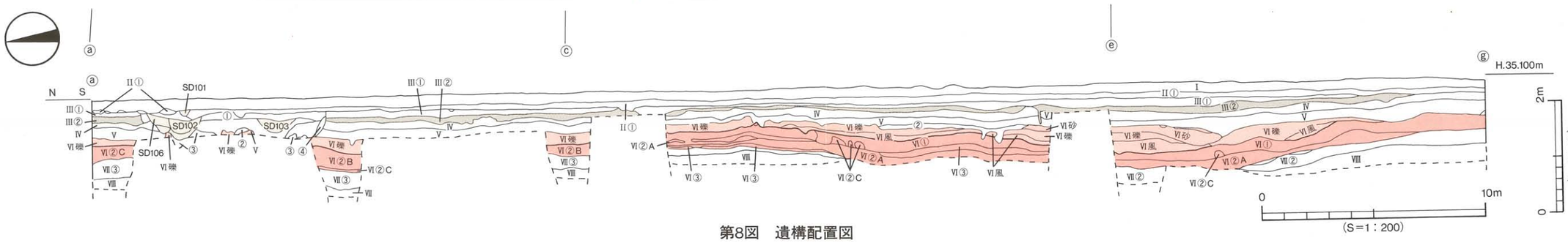


基本土層

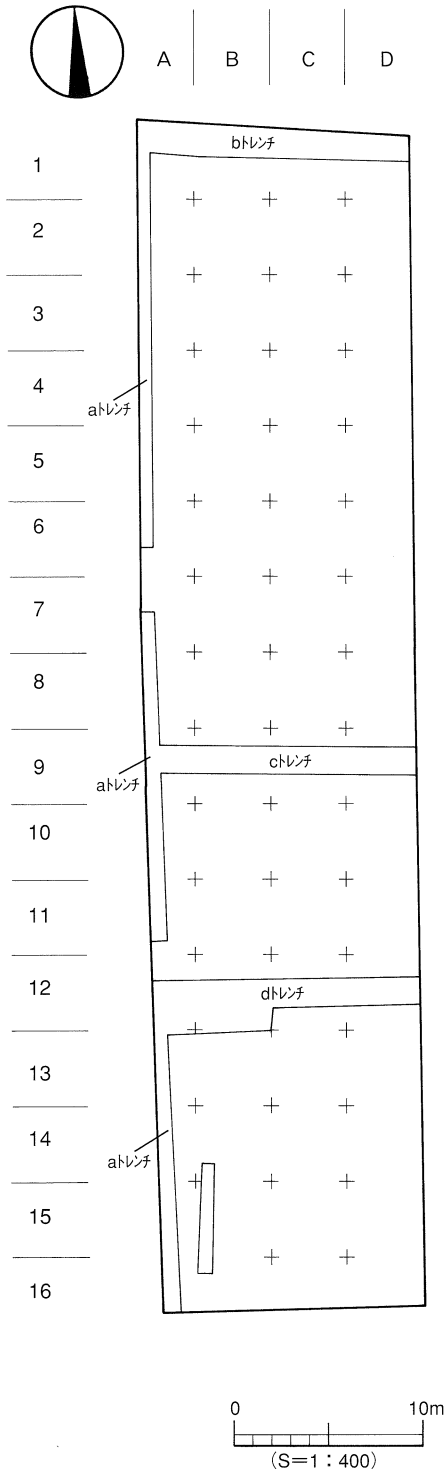
I	表土	
II①	黄灰色砂質土	
II②	黄灰色土(粘性が強い)	
II③	黒色土(灰色混じり)	
III①	黒色土	
III②	黒褐色土(アカホヤ火山灰)	
IV	褐色砂質土	
V	暗褐色粘質土	
VI砂 / VI礫 / VI風	AT2次堆積	
VI①	黄褐色土(黄色細粒)	AT1次堆積
VI②A	黄褐色土(褐色細粒)	AT1次堆積
VI②B	乳褐色粘質土	AT1次堆積
VI②C	乳黄褐色粘質土	AT1次堆積
VI③	黄褐色土(黄色細粒)	AT1次堆積
①	茶褐色土	
②	黒色粘質土	
③	灰褐色砂(粗砂)	
④	灰色砂	
⑤	灰茶色砂	
⑥	明黄褐色土	
⑦	黒褐色粘質土	
VII①	黄褐色砂質土	
VII②	黄褐色粘質土	
VII③	褐色砂質土	
VII④	灰色砂	
VII⑤	黄灰色粘土	
VII⑥	黄白色砂質土(硬質)	
VII⑦	乳灰褐色粘質土	
VII⑧	暗茶褐色粘土	
VII⑨	黄褐色砂礫	







第8図　遺構配置図


A
B
C
D
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
bトレンチ
aトレンチ
aトレンチ
cトレンチ
dトレンチ
aトレンチ
0
10m
(S=1：400)

第9図　区 割 図

３．遺構と遺物

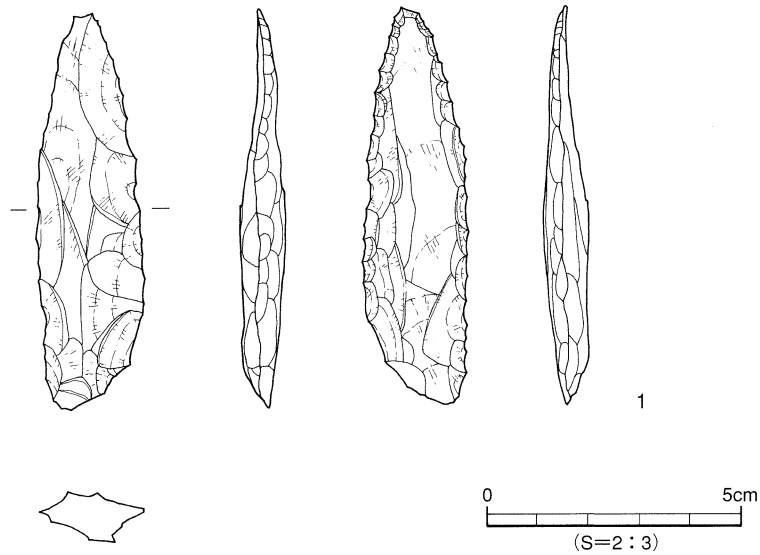
〔１〕先土器・縄文時代

１）焼土（図版８）

調査区中央のｃトレンチで焼土を確認した。トレンチ南壁の第Ⅳ層中にて断面検出後、平面で焼土の範囲を確認した。その結果、焼土は東西80cm、深さ20cmの広がりをもち、その上面では赤茶げた焼土痕を検出した。焼土内から遺物は検出されず、明確な掘り方は確認できなかった。焼土の時期はアカホヤ火山灰降下以前である。

２）遺物（第10図，図版10）

1はナイフ型石器で、焼土検出地点より13m南西のＢ9区で検出した。検出面は第Ⅳ層上面の検出である。石材は赤色チャート。法量は長さ7.8cm、幅2.0cm、厚さ0.9cm、重さ13.7ｇを測る。



第10図　第Ⅳ層上面出土遺物実測図

〔２〕古墳時代以降の遺構と遺物

１）掘立柱建物址（掘立）

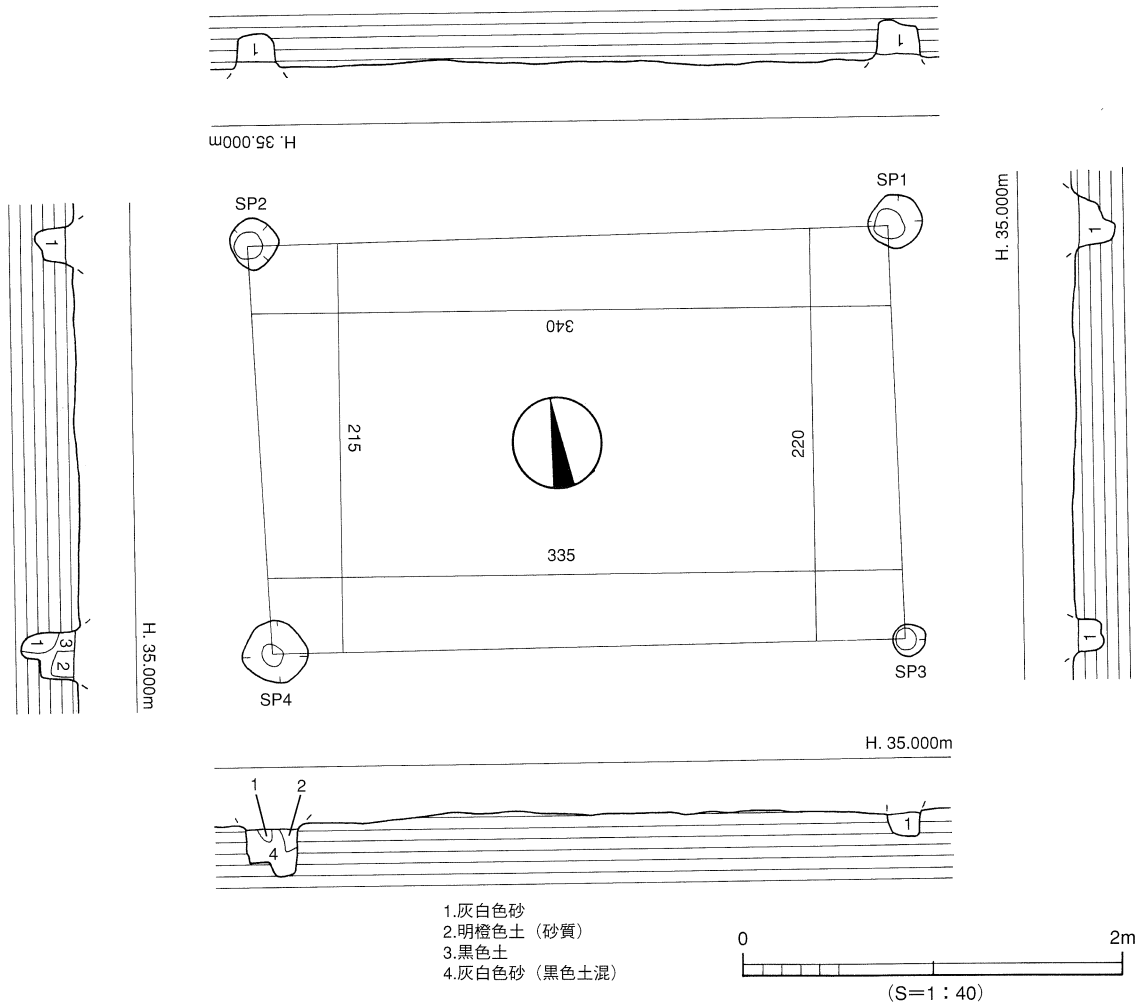
本調査で確認された掘立柱建物址は2棟である。

掘立１０１（第11図，図版７）

調査区北側の中央より東、Ｃ1～Ｄ2区に位置する。建物址は、東西棟で1間×1間、桁行長3.4m、梁行長2.2mを測る。柱穴は円形で直径20～35cm、深さ12～18cmである。埋土は灰白色土である。柱穴内からは遺物の出土はない。

掘立１０２（第12図）

調査区中央部のＣ10～Ｄ10区に位置する。建物址は1間×1間で、桁行2.1m、梁行1.7mを測る。柱穴は円形または楕円形で、直径20cm～40cm、深さ10cmの遺存である。埋土は黒色土である。柱穴内からは遺物の出土はない。



第11図　掘立101測量図

2）柵列（ＳＡ）

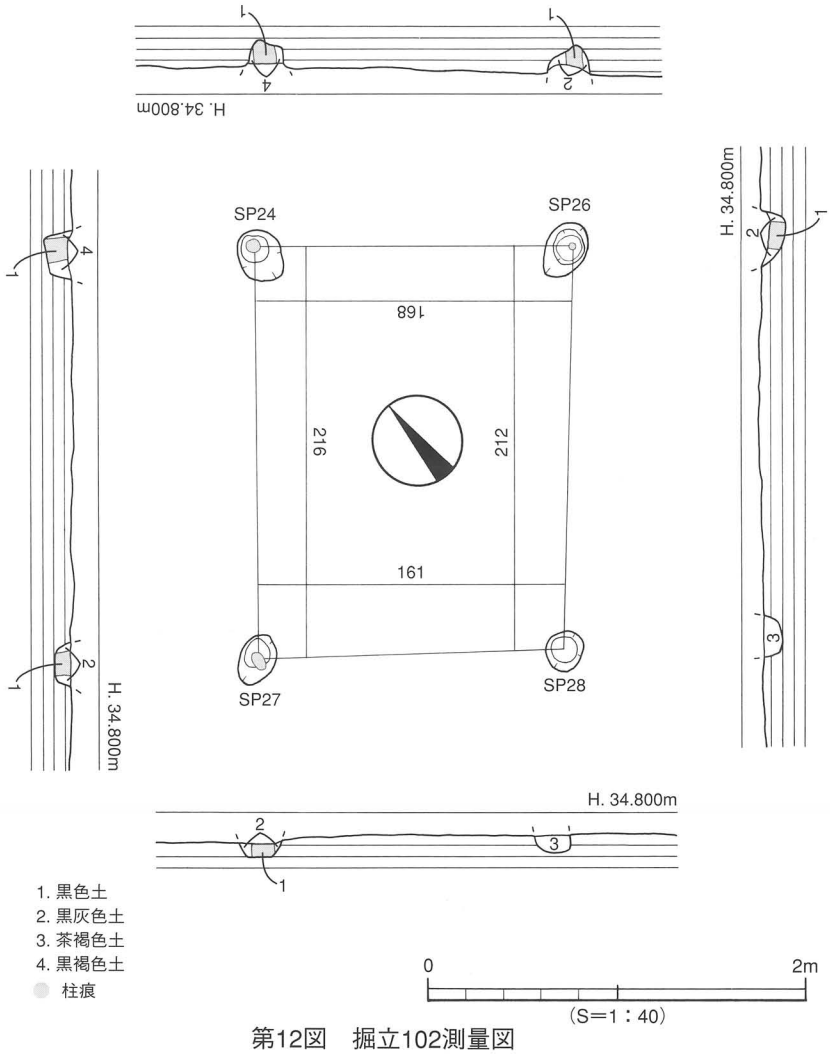
ＳＡ１０１（第13図）

調査区南東部のＤ12～13区で、ほぼ一直線に並ぶ小穴列を検出した。当初、掘立柱建物の可能性を考え、対応する小穴の検出に努めたが、対応する小穴がみあたらず、南北方向に直線的に並ぶ柵列と判断した。柵列はＳＰ32・34・35・36・37から構成され、検出径は19～20㎝、深さ6～24㎝を測り、それぞれの間隔は北より1.6m・1.9m・1.8m・1.6mを測る。ＳＰ35は深さが他の小穴より深く24㎝を測り、基底部より12×10㎝、厚さ5㎝の敷石を検出する。埋土は灰白色土で遺物の出土はない。なお、この柵列に関連する遺構は西側では検出されなかったことより、柵列に関連する遺構は、東側の調査区外に広がるものと考えられる。

3）溝（ＳＤ）

ＳＤ１０６（第14･15図，図版10）

調査区北西のＡ1～Ｃ1区で検出し、ＳＤ101・102に切られる。溝は断面形態がレンズ状を呈し、上場幅170㎝、深さ46㎝、検出長6.0mを測る。溝床面は北東から南西に向け傾斜している。埋土は2層で、上層が茶褐色砂層、下層は灰茶色砂層である。出土遺物は、須恵器の坏蓋小片1点と、弥生土器の細片と鉄製品である。このうち、実測可能な遺物は須恵器1点と鉄製品である。



第12図　掘立102測量図

出土遺物の坏蓋2は、扁平な天井部と口縁部を分ける稜はやや鈍く、口縁部は尖り気味に丸く、内面に内傾する段を有する。鉄製品3は、棒状で長さ3.6cmで断面は楕円形を呈している。錆が厚く原形は不明瞭であるが釣り針の可能性が考えられる。

ＳＤ１０４

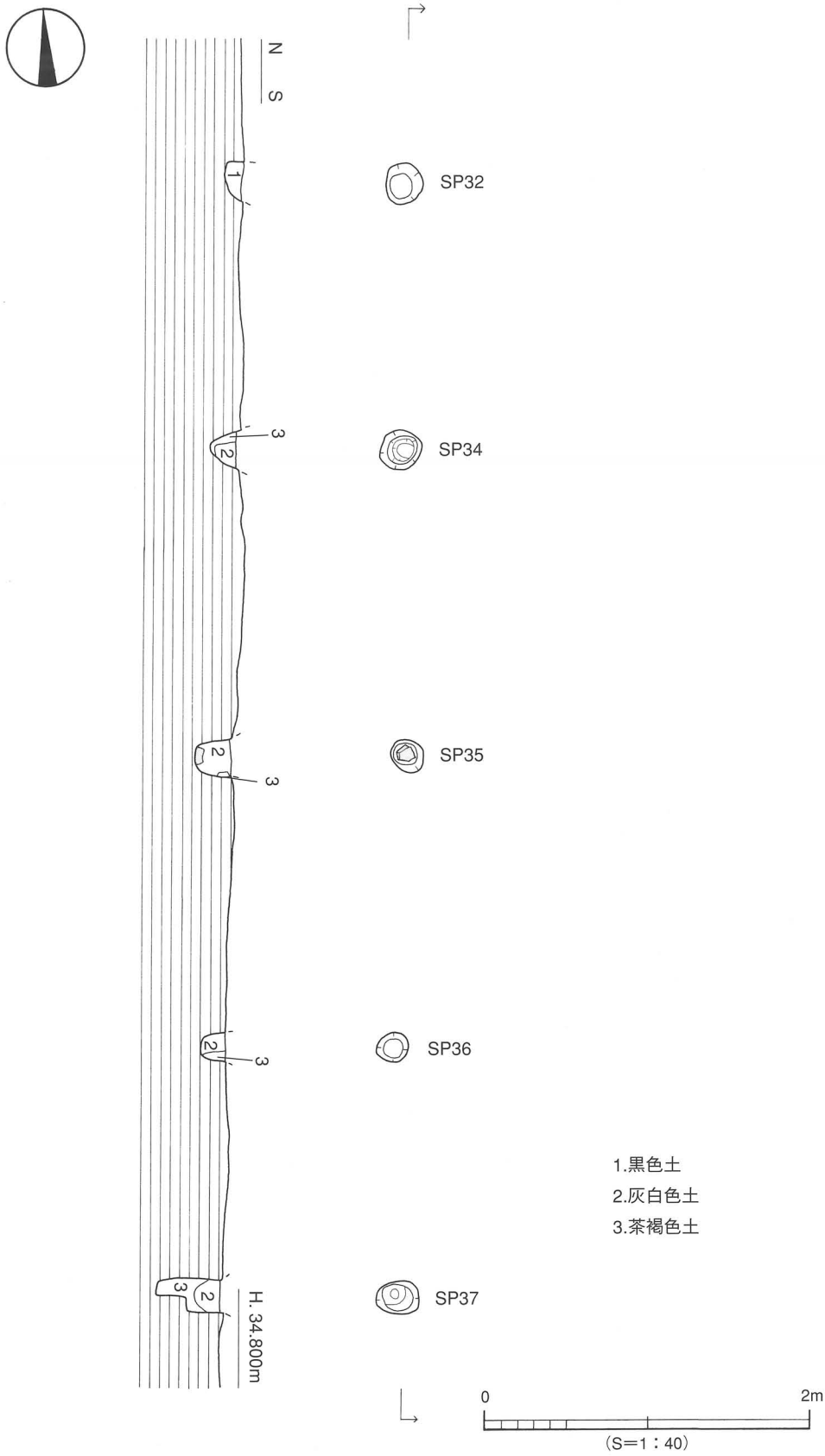
調査区南東のＣ14～Ｄ14区で検出した。ただし、調査区の南側は、表土剥ぎ取り時に掘り下げすぎており、本来は南側に延びるものと思われる。断面形態はレンズ状を呈し、上場幅65cm、深さ11cm、検出長11.8ｍを測る。埋土は黒色土1層である。遺物の出土はない。

ＳＤ１０７

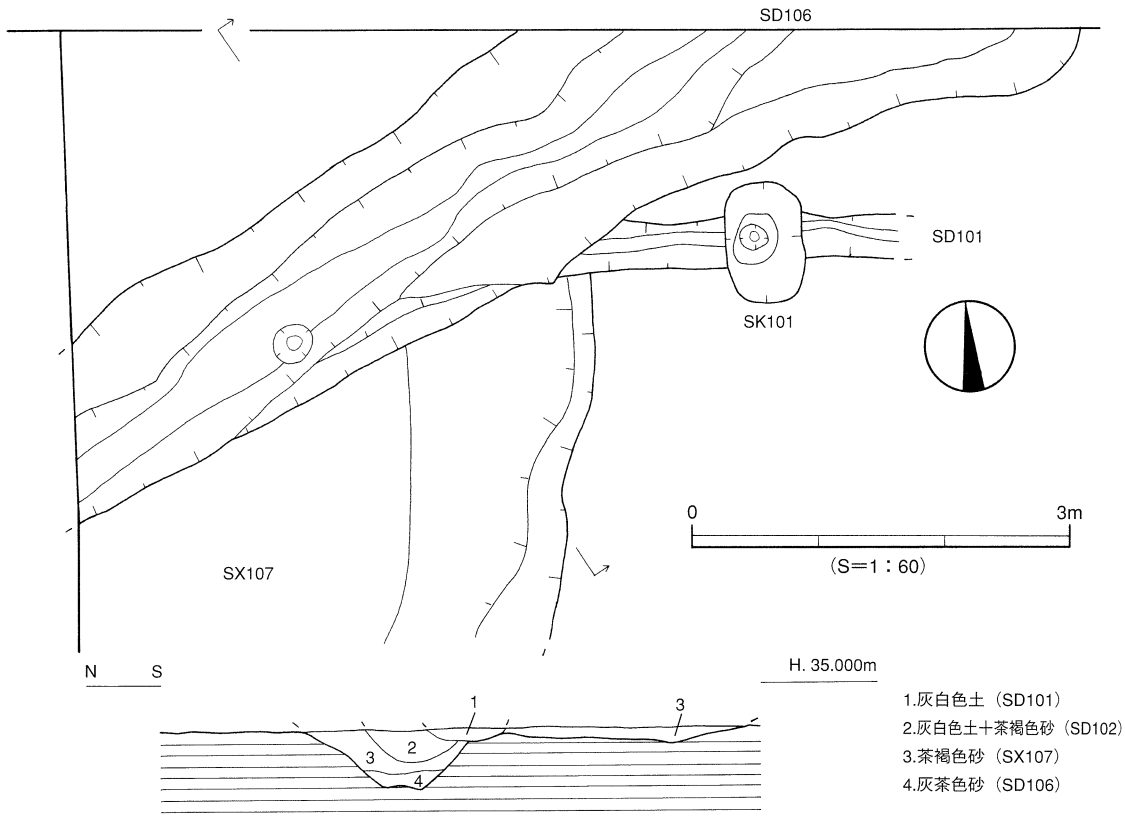
調査区南東隅Ｃ15～Ｄ16区に位置する。上場幅110cm、深さ20cm、検出長7.2ｍを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は2層である。上層は黒褐色粘質土、下層は黒褐色砂質土で、レンズ状に堆積する。遺物の出土はない。

ＳＤ１０５

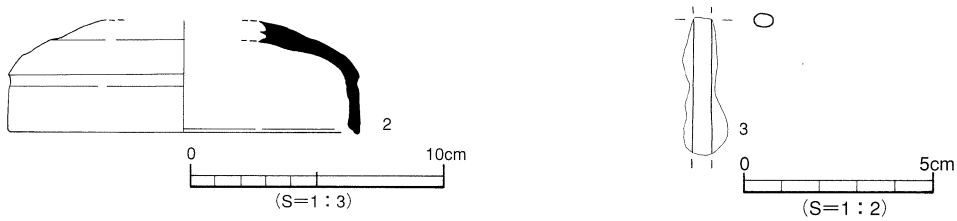
Ｃ15～Ｄ16区に位置し、ＳＤ107の上面を流れる。上場幅52cm、深さ12cm、検出長7.1ｍを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は灰白色の砂層である。遺物の出土はない。



第13図　SA101測量図



第14図　SD106測量図



第15図　SD106出土遺物実測図

ＳＤ１０２（図版７）

調査区の北西Ａ1～Ｃ1区にあり、ＳＤ106を切りＳＤ101に切られる。溝の断面形態はレンズ状で上場幅60cm、深さ19cm、検出長6.0ｍを測る。埋土は灰白色粗砂に灰黒色細砂混入するもので、遺物の出土はない。

〔３〕近代の遺構

１）溝（ＳＤ）

ＳＤ１０１

調査区北側のＡ1～Ｄ1区に位置し、東西方向に第Ⅱ層を切る状況で検出した。上場幅40cm、深さ10cm、検出長12.2ｍを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰色の砂である。遺物の出土はみられないが、埋土が灰色土であり、近現代の遺構と思われる。

2）土坑（ＳＫ）

ＳＫ１０１

調査区北のＢ1区に位置し、ＳＤ101を切っている。平面形態は楕円形であり、長軸100cm、短軸57cm、深さ15cmを測る。埋土は灰色土である。遺物の出土はない。時期は近代の溝ＳＤ101を切る遺構であり、近現代のものと思われる。

ＳＫ１０２

調査区南壁沿いのＢ16区に位置する。遺構は調査区外に至る。平面形態は楕円形と思われ長軸160cm、短軸91cm、深さ85cmを測る。埋土は灰色土でＳＫ101と同じである。遺物の出土もない。埋土等より近現代の土坑と思われる。

〔4〕その他の遺構

1）倒木（ＳＸ）

倒木は、調査区4区から13区間に6基を検出した。平面形態は楕円形で、規模は160～350cmである。このうち、ＳＸ105は160cmとやや規模が小さい。倒れた方向は、ＳＸ101は北西方向、ＳＸ102・105・106は南東方向、ＳＸ103・104は南西方向に倒れている。今回の調査では、平面形態とその規模、さらに倒壊方位を記録するにとどめ、完掘はしていない。

4．小　結

層位：第Ⅲ②層（アカホヤ火山灰）、第Ⅵ層（ＡＴ火山灰1次堆積）は火山灰であることを確認している。アカホヤ火山灰の下層からは、石器と焼土を検出しており、6,300年以前の生活址を確認することができた。今後、周辺地域の面的な調査が進めば、より一層の成果がえられると思われる。

遺構：本調査区で検出した遺構は、いずれも出土遺物が少なく時期が明確に比定できないが、弥生時代の遺物を包蔵する第Ⅲ①層を切っているために、古墳時代以降の遺構であると認定した。

検出遺構は掘立柱建物址と柵列及び柱穴と土坑である。掘立柱建物址は、1間×1間の2棟を検出している。この2棟の柱穴は小規模なものであり、住居址ではなく、小さな簡易的な倉庫であったと思われる。溝は6条検出している。溝の基底部は、北東から南西にゆるやかに傾斜している。ＳＤ104を除く5条の溝には砂が見られ、水が流れていたことがわかる。

出土遺物は、ＳＤ106から須恵器を検出しており、埋土より古墳時代以降のものと考えられる。

今回、調査区内西側では住居址は未検出であり、住居址は柵列（ＳＡ101）より東側に展開するものと考えられる。

遺構・遺物一覧　－凡例－

（1）以下の表は、本調査区検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
　　遺構一覧は志賀、遺物観察表は高尾・田﨑・中村が作成した。

（2）遺物観察表の各掲載について。
　　法　量　欄　　（　）：復元推定値
　　形態・施文欄　　土器の各部位名称を略記。
　　例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）砂・長（1～4）、多→「1～4㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表１　掘立柱建物址一覧

掘立	規模（間）	方位	桁行		梁行		床面積（㎡）	時期	備考
			実長(m)	柱間寸法（尺）	実長(m)	柱間寸法（尺）			
101	1×1	東西	3.40	10.3	2.20	6.7	7.48	古墳時代以降	SP 1·2·3·4
102	1×1	北東	2.10	6.4	1.70	5.2	3.57	古墳時代以降	SP 24·26·27·28

表２　土坑一覧

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ（m）	埋土	出土遺物	時期	備考
101	B1	楕円形	逆台形	1.00×0.57×0.15	灰色土		近代	SD101を切る
102	B16	楕円形	逆台形	1.60×0.91×0.85	灰色土		近代	調査区外へ続く

表３　溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ（m）	埋土	出土遺物	時期	備考
101	A1～D1	レンズ状	12.2×0.4×0.1	灰白色砂		近代	E→W
102	A1～C1	レンズ状	6.0×0.6×0.19	灰白色粗砂 灰黒色粗砂		古墳時代以降	SD106を切りSD101に切られる
103	A1～A3	レンズ状	5.2×0.1×0.15	灰白色粗砂		近代	平面は確認できず断面のみ確認
104	C14～D14	レンズ状	11.8×0.65×0.11	黒色土		古墳時代以降	NE→SW
105	C15～D16	レンズ状	7.1×0.52×0.12	灰白色砂 黒褐色砂質土		古墳時代以降	NE→SW
106	A1～C1	レンズ状	6.0×1.7×0.46	茶褐色砂 灰茶色砂	須恵器杯蓋 弥生	古墳時代以降	SD101．102に切られるNE→SW
107	C15～D16	レンズ状	7.2×1.1×0.2	黒褐色砂質土 黒褐色粘質土		古墳時代以降	NE→SW

表４　第Ⅳ層上面出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質（石材）	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
1	ナイフ形石器	完形	赤色チャート	7.8	2.0	0.9	13.7		10

表５　SD106出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
2	坏蓋	口径(13.6) 残高　4.4	口縁部はほぼ直に立ち上がる。端部はわずかに凹面をなして内傾する。天井部と口縁部との段差による陵をもつ。	㋐回転ヘラ削1/2 回転ヨコナデ ㋑回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	石·長(1~2) 密 ◎		

表６　SD106出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
3	棒状鉄製品 釣針？	棒状の小片	鉄製	3.6	0.5	0.35	3.7		10

第6章

束本遺跡4次

－2区の調査－

第６章　　２区の調査

１．調査の経緯

2区は、1区の南側に位置し、1区との距離は4ｍである。調査地は幅20ｍ、長さ116ｍ、対象面積2,320㎡である。当地は、調査以前は2枚の水田であった。調査面積は、周縁地を安全対策兼排土置き場として使用したために、1,366㎡あまりとなった。以下、調査工程を略記する。

調査地は調査地中央にある水路により北区と南区の2つに小区分し、南区より調査を開始した。

10月12日より、南区西側に幅1ｍのトレンチを掘り基本土層の確認を行う。つづいて東西10ｍ、南北50ｍの範囲で表土剥ぎを行い遺構検出作業を行う。

11月18日より、北区設置の事務所を撤去し、西側に土層確認のトレンチ（ａトレンチ）を掘る。次に東西幅14ｍで表土剥ぎを行い、同時に排土の搬出を行う。表土剥ぎ作業と併行して遺構検出作業を行う。

12月2日より、南区は東に4ｍ拡張する。表土剥ぎ取りを行い、遺構検出作業も同時に行う。

12月6日、東西8ｍ間隔、南北4ｍ間隔の2列で測量杭を打ち、区割りを行う。

1月7日より、南区Ｄ21～29区にかけて竪穴式住居が検出され、幅4ｍ、長さ33ｍに渡り拡張を行い遺構検出作業を行う。

2月24日、田﨑博之・平井幸弘・宮本一夫・杉山真二・早田　勉の各氏に土層、遺構及び遺物に関する調査指導を乞い検討会を行う。

3月19日に現地説明会を行い、地域住民及び考古学ファン約200名が見学に訪れる。

3月末までに調査区内の精査を行い、航空写真測量を実施する。つづいて東西に3カ所のトレンチｂ・ｃ・ｄを掘り土層の確認を行う。土層の写真撮影と測量を行い野外調査を終了する。

２．層　位（第３・17図）

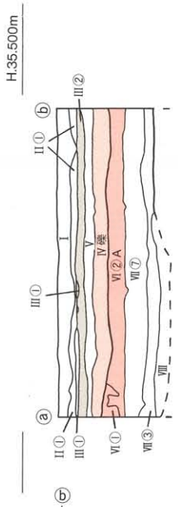
本調査区の基本土層は、第Ⅰ層表土（耕作土）、第Ⅱ層黄灰色（水田床土）、第Ⅲ①層黒色土、第Ⅲ②層黒褐色土（アカホヤ火山灰）、第Ⅳ層褐灰色土、第Ⅴ層暗褐色土、第Ⅵ層はＡＴ火山灰土である。1次堆積土と2次堆積土に分かれ、2次堆積土の風・礫・砂、1次堆積土の第Ⅵ①層、第Ⅵ②層、第Ⅵ③層と呼称する。第Ⅰ層及び第Ⅱ層は20～30㎝の厚さを測る。第Ⅲ①層は、北区北端より20ｍ以南には5～10㎝の堆積が認められるが、北区北端より20ｍ間には見られない。第Ⅲ②層は、ほぼ調査区全域で5～15㎝の堆積が見られる。第Ⅲ①層からは弥生土器、第Ⅳ層上面からは石器が出土している。

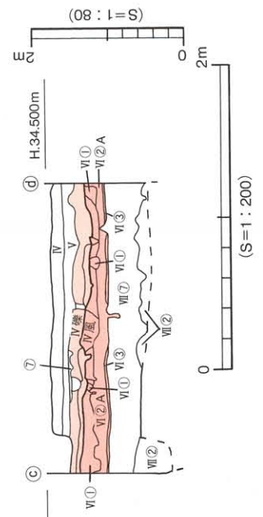
遺構は、第Ⅵ層上面で先土器時代～縄文時代の柱穴1基を検出した。第Ⅳ層上面では、弥生時代末～近世までの遺構を確認した。竪穴式住居址5棟、溝3条、土坑11基、柱穴120基、倒木痕4基である。

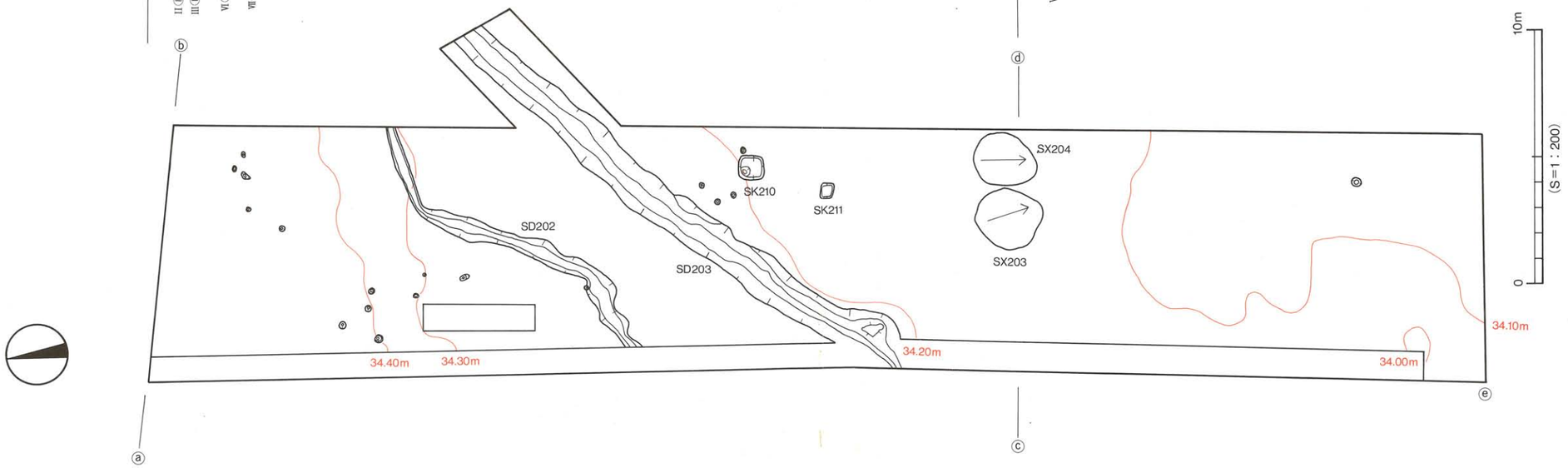
第16図　調査区位置図

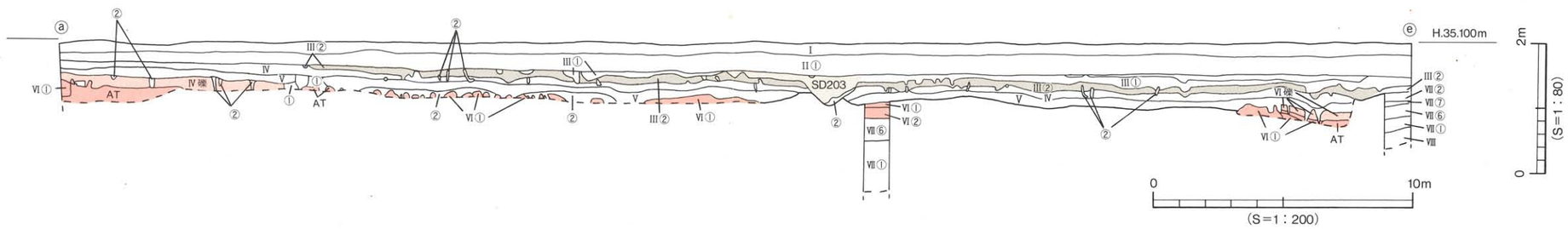
基本土層

Ⅰ	表土	
Ⅱ①	黄灰色砂質土	
Ⅱ②	黄灰色土(粘性が強い)	
Ⅱ③	黒色土(灰色混じり)	
Ⅲ①	黒色土	
Ⅲ②	黒褐色土(アカホヤ火山灰)	
Ⅳ	褐色砂質土	
Ⅴ	暗褐色粘質土	
Ⅵ砂	AT2次堆積	
Ⅵ礫	AT2次堆積	
Ⅵ風	AT2次堆積	
Ⅵ①	黄褐色土(黄色細粒)	ATI次堆積
Ⅵ②A	黄褐色土(褐色細粒)	ATI次堆積
Ⅵ②B	乳褐色粘質土	ATI次堆積
Ⅵ②C	乳黄褐色粘質土	ATI次堆積
Ⅵ③	黄褐色土(黄色細粒)	ATI次堆積
Ⅶ①	黄褐色砂質土	
Ⅶ②	黄褐色粘質土	
Ⅶ③	褐色砂質土	
Ⅶ④	灰色砂	
Ⅶ⑤	黄灰色粘土	
Ⅶ⑥	黄白色砂質土(硬質)	
Ⅶ⑦	乳灰褐色粘質土	
Ⅶ⑧	暗茶褐色粘土	
Ⅶ⑨	黄褐色砂礫	
②	黒色粘質土	
⑦	黒褐色粘質土	

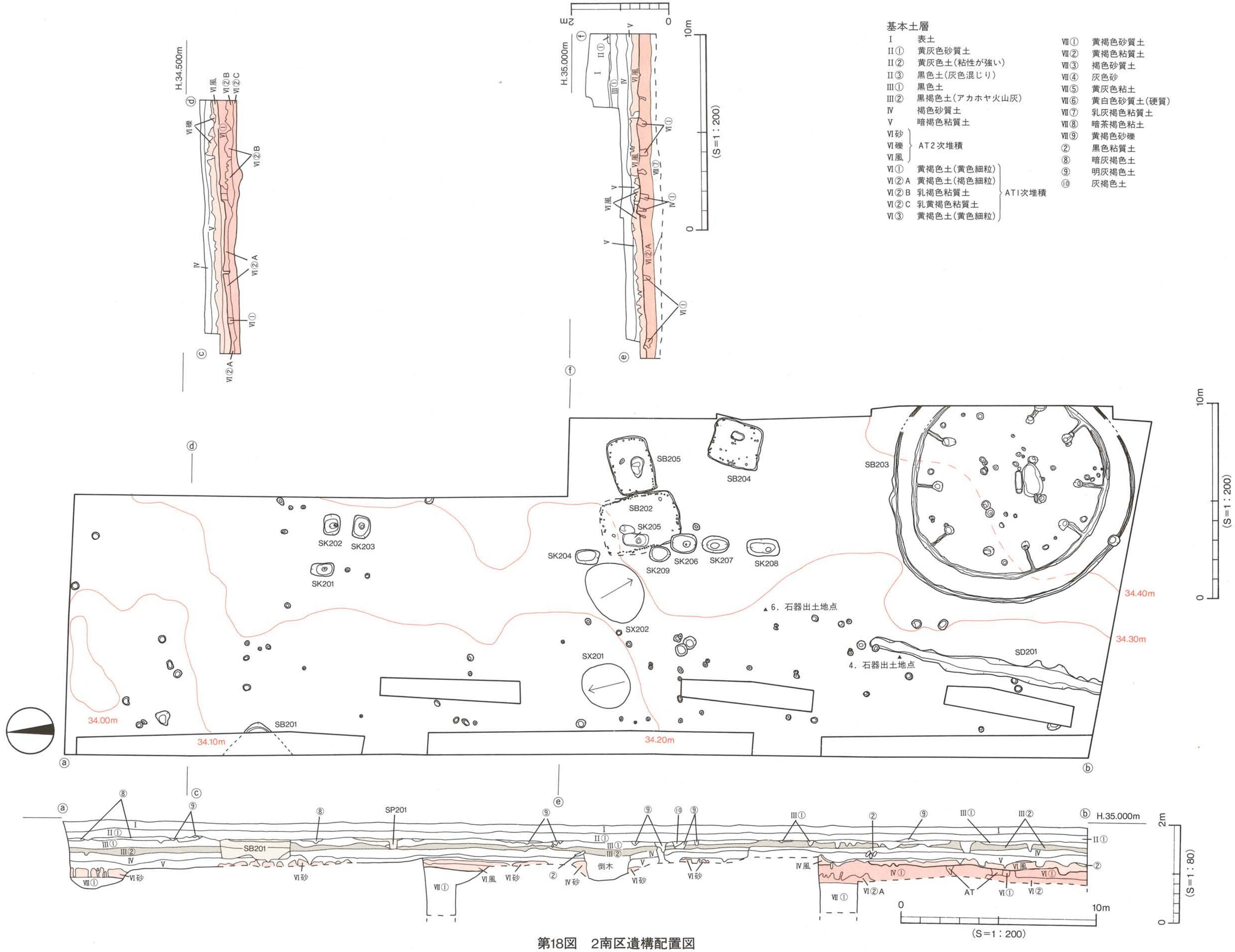




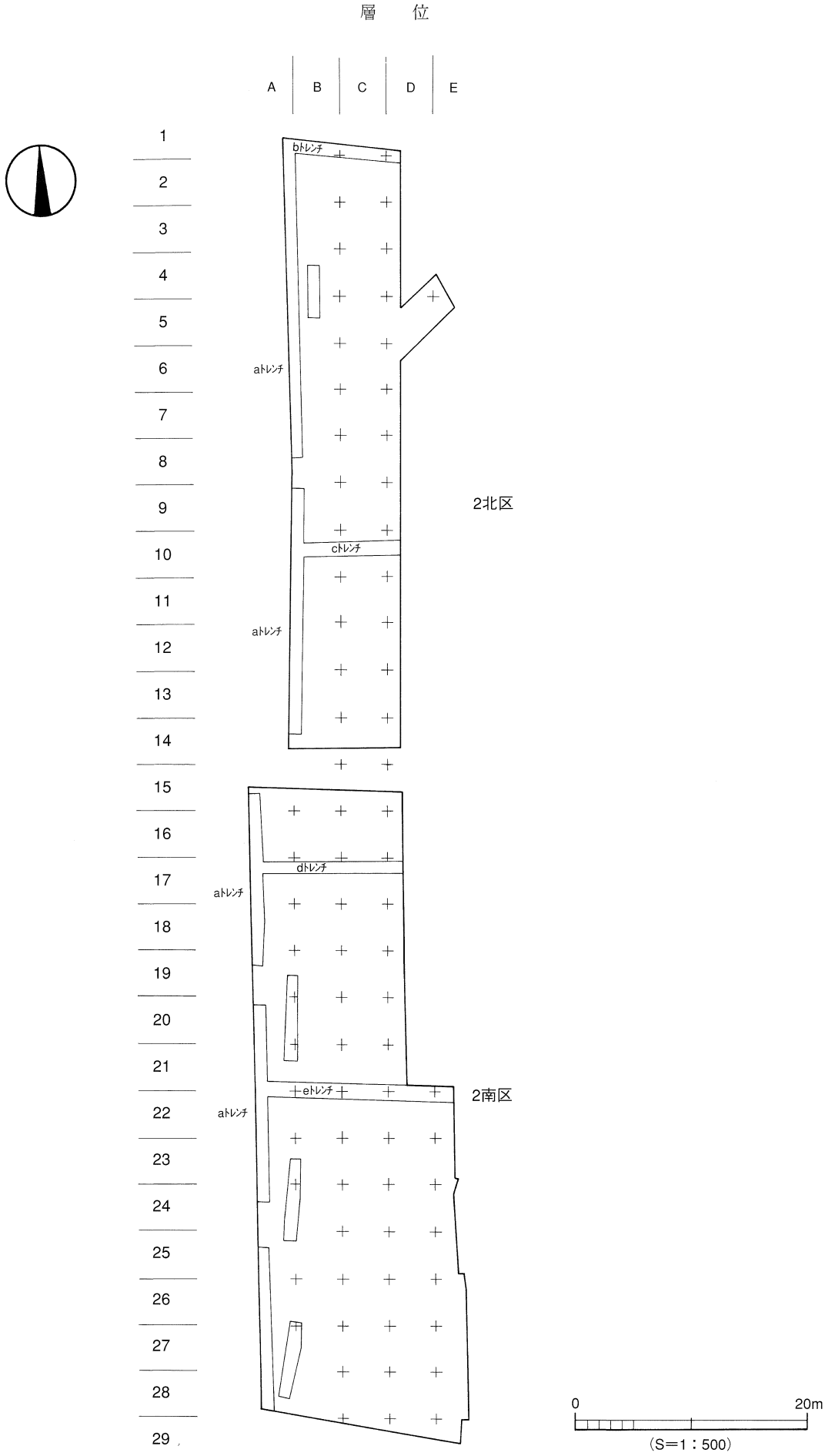




第17図　2北区遺構配置図



第18図　2南区遺構配置図


層　位
A
B
C
D
E
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
bトレンチ
aトレンチ
cトレンチ
aトレンチ
2北区
dトレンチ
aトレンチ
eトレンチ
aトレンチ
2南区
0
20m
(S=1：500)

第19図　区 割 図

３．遺構と遺物

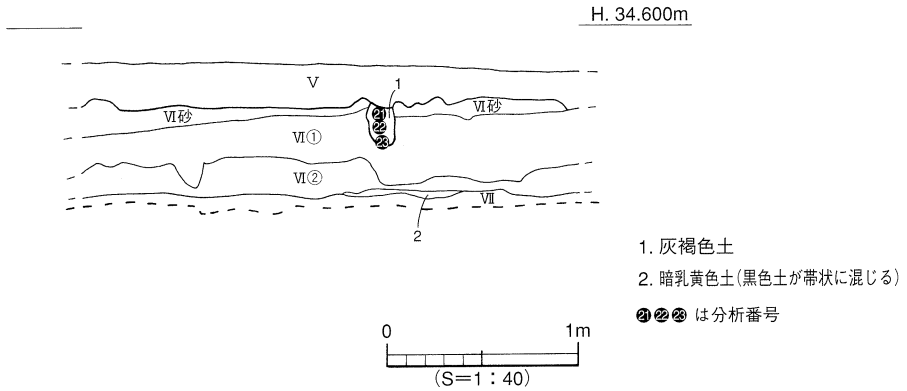
〔１〕先土器時代～縄文時代

遺構は南区ｃトレンチの第Ⅵ層上面で円形の小ピットを1基検出した（第20図、図版14）。規模は径16cm、深さ25cmを測る。埋土は、灰褐色土である。出土遺物はない。第Ⅵ層上面での調査は時間的な関係で部分的なものである。

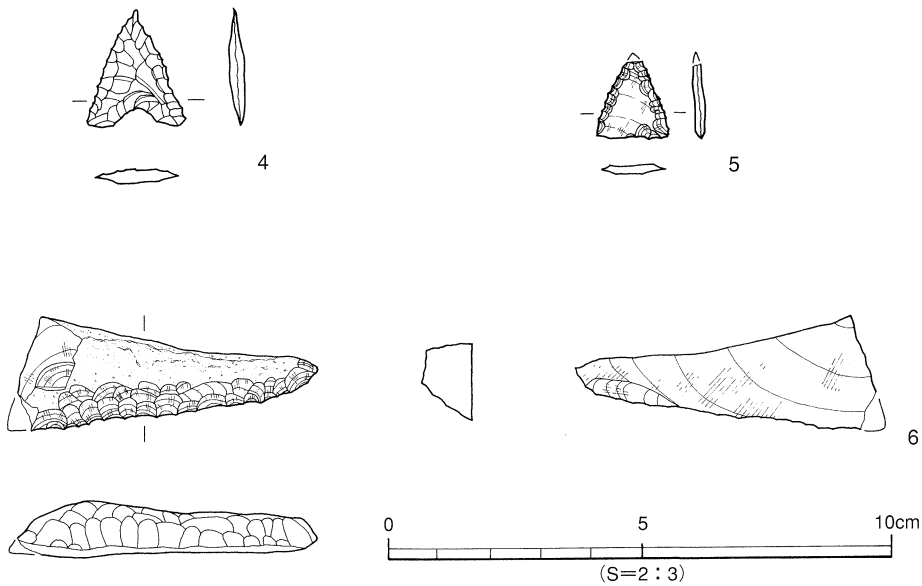
遺物は第Ⅳ層上面のＣ13区、Ｂ24・26区で石鏃とスクレイパーが出土した（第21図、図版32）。

石鏃4は凹基式である。法量は長さ2.3cm、幅1.9cm、厚さ0.25cm、重さ0.9ｇを測る。石材は赤色チャートである。石鏃5は平基式である。剥片の縁辺部に調整を施す。両面に主剥離面を残す。法量は長さ1.5cm、幅1.3cm、厚さ0.15cm、重さ0.4ｇを測る。石材は緑色チャートである。

スクレパー6は、ほぼ完形品で自然面をもつ。法量は長さ5.9cm、幅2.2cm、厚さ1.1cm、重さ11.9ｇを測る。石材は姫島産の黒曜石である。



第20図　第Ⅵ層上面遺構断面測量図



第21図　第Ⅳ層上面出土遺物実測図

〔2〕弥生時代

1）竪穴式住居址（ＳＢ）

検出した5棟の住居址は、すべて弥生時代後期末の住居址である。いずれも第Ⅳ層上面での検出で、調査区南区の南側に集中している。平面形態は円形（1棟）と方形（4棟）の二種類がある。円形の住居は大型で、方形の住居は大型と小型がある。

（ＳＢ２０３の調査工程）

2区の遺構検出状況の写真撮影を高所作業車を使用して行った。その際、上方より各遺構を観察すると、南区にドーナツ状に巡る幅約1ｍの輪が見られた。当初は住居址ではなく、周溝ではないかと考えたが、入念に遺構の観察と検討を行った結果、竪穴式住居の周堤であることが判明した。なお、住居の東側は未検出部分があったため東側に拡張を行ったが、住居全体の検出にはいたらなかった。調査は続いて住居東壁に幅50㎝のトレンチを掘り、埋土の堆積状況及び住居の深さと周堤帯の構造についての確認を行った。住居の埋土は4層あり堆積は40㎝であった。周堤帯は2層に分層でき、厚さ25㎝であった。

次に、住居の中央部に十字にベルトを残し、埋土1から掘り下げを開始する。以後埋土2・埋土3と順次掘り下げをおこなう。埋土4は部分的な検出であった。遺物は埋土2・埋土3より出土したため、遺物とベルト土層の測量を行い、遺物を取り上げ、ベルトを撤去し、床面施設の検出を行った。床面には炉と主柱穴、周壁溝、小溝を検出した。炉は不整形であったために、南北に1本、東西に2本のベルトを残し掘り下げを行った。精査の結果、炉は方形の深い炉と楕円形の浅い炉より構成されていることが判明した。

主柱穴は、はじめに外側に8本を検出したが、東側に2本あるものと思われたため調査区を対象地域まで拡張し計10本を検出することになった。さらには、内側に4本の主柱穴が存在することをも確認した。周壁溝の検出では、外側の主柱穴から周壁溝につづく小溝が存在することを確認した。小溝は主柱穴10本の内8本に伴い、北西のＳＰ4と北東ＳＰ49の周辺からは小溝は検出できなかった。また、小溝と周壁溝との切り合い関係も入念に観察を行ったが、切り合いは確認できなかった。

ＳＢ２０３（第22図、図版15～19）

南区の南東隅に位置する。平面形態の全容は、調査区外に続くために明らかではないが、円形と思われる。規模は径12ｍ、壁高40㎝を測り、大型の住居である。この住居には3点の特徴がある。

第1には周堤帯をもつことであり、第2には主柱穴が10本と4本の2重に巡ることであり、第3には炉が2ヶ所あるということである。

周堤帯は幅1～1.5ｍで、厚さ25～30㎝が残っていた。周堤帯は、住居の外側を30㎝掘り下げ、掘り下げた外壁下に幅10～15㎝の溝を巡らす。周堤帯は灰褐色土で非常に硬く築造されており、部分的には上下2層に分層できる。

主柱穴は、外側と内側の2重に巡る14本の柱穴を検出した。外側の柱は壁体より1.5ｍ離れた地点に10本（ＳＰ1～8・48・49）があり、柱穴平面は円形で、径35～60㎝、深さ35～60㎝、柱穴間は200～230㎝を測る。内側の柱は壁体より3.5ｍの地点に4本（ＳＰ9～12）が並び、柱穴平面は円形で、径38～48㎝、深さ55～60㎝、柱穴間は200～280㎝を測る。内側の柱穴は、外側の柱穴にくらべて、深く統一されている。

炉址（第23図）は、住居址中央やや南側に位置する。南側のものは不整の楕円形を呈し浅く（炉1とする）、北側のものは長方形を呈し深い（炉2とする）という形態をもつ。規模は南側炉1は長軸172cm、短軸92cm、深さ8cmを測る。断面形態は、レンズ状を呈する。炉1の埋土は、上層が黒褐色土を下層は、厚さ4～6cmの炭の層を検出した。北側炉2は長軸100cm、短軸32cm、深さ30cmを測る。炉2の埋土は、大きく三層に分層される。炉2からは炭は検出されなかった。中・下層は第Ⅵ層の火山灰（黄色）ブロック混じりである。その他の内部施設として、小溝と周壁溝を検出した。

小溝は、外側の主柱穴10本の内、ＳＰ4・49を省く8本より壁体に向かって伸びる溝である。規模は、幅20cm、深さ5cm、長さ100cmを測る。断面形態は、Ｕ字状である。

周壁溝は、壁体にそって巡る。規模は、幅20cm、深さ5cmを測る。断面形態はＵ字状である。

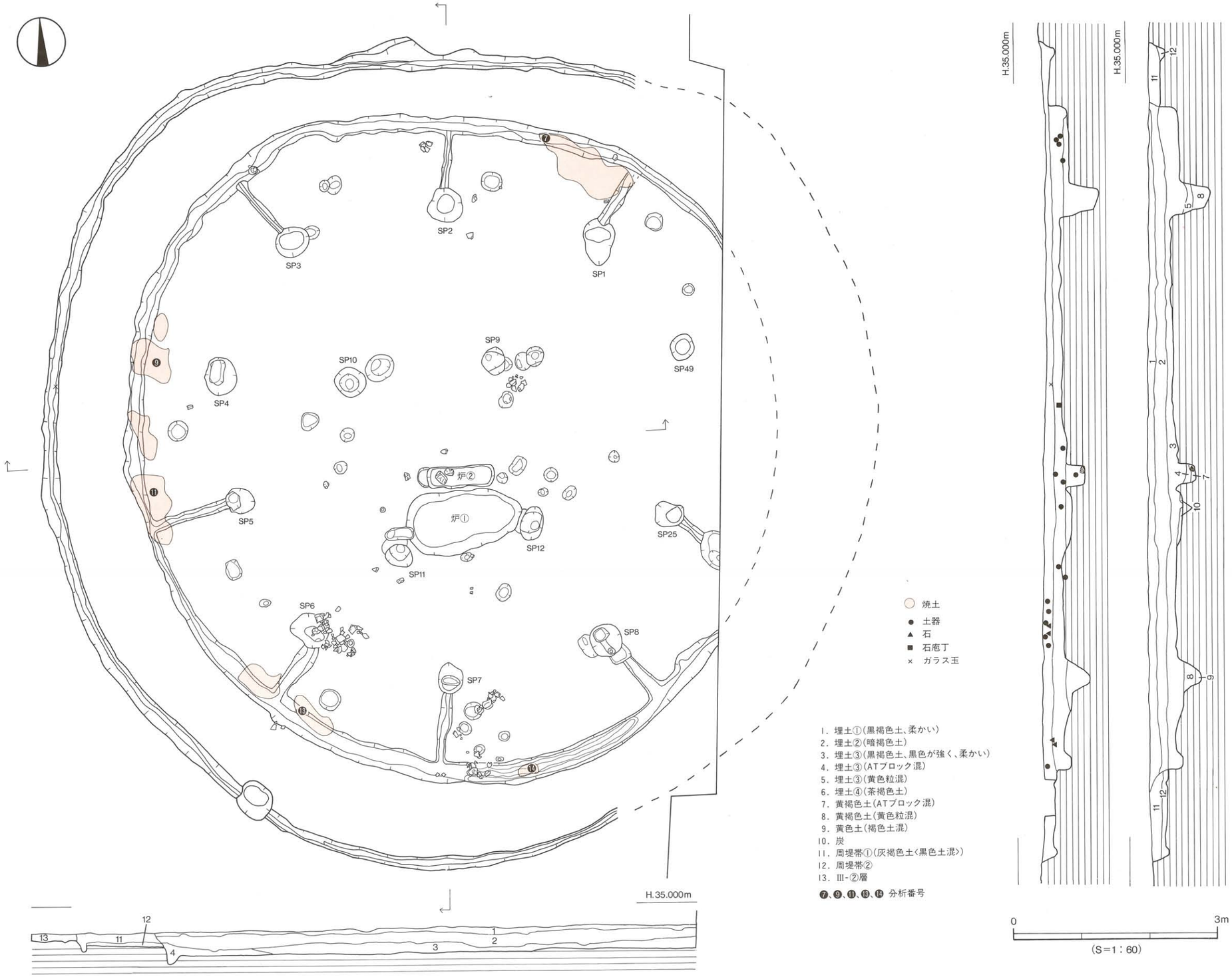
遺物は埋土内と床面から出土している。

住居址内の床面からは石錘1点と石庖丁2点、それと土器片が出土し、住居内の周壁溝よりほぼ完形の鉢が出土している。炉2からは鉢片が出土している。周堤内（北東部）からはガラス玉が1点出土している。それと、焼土を周壁と平行に巡る形で検出した。

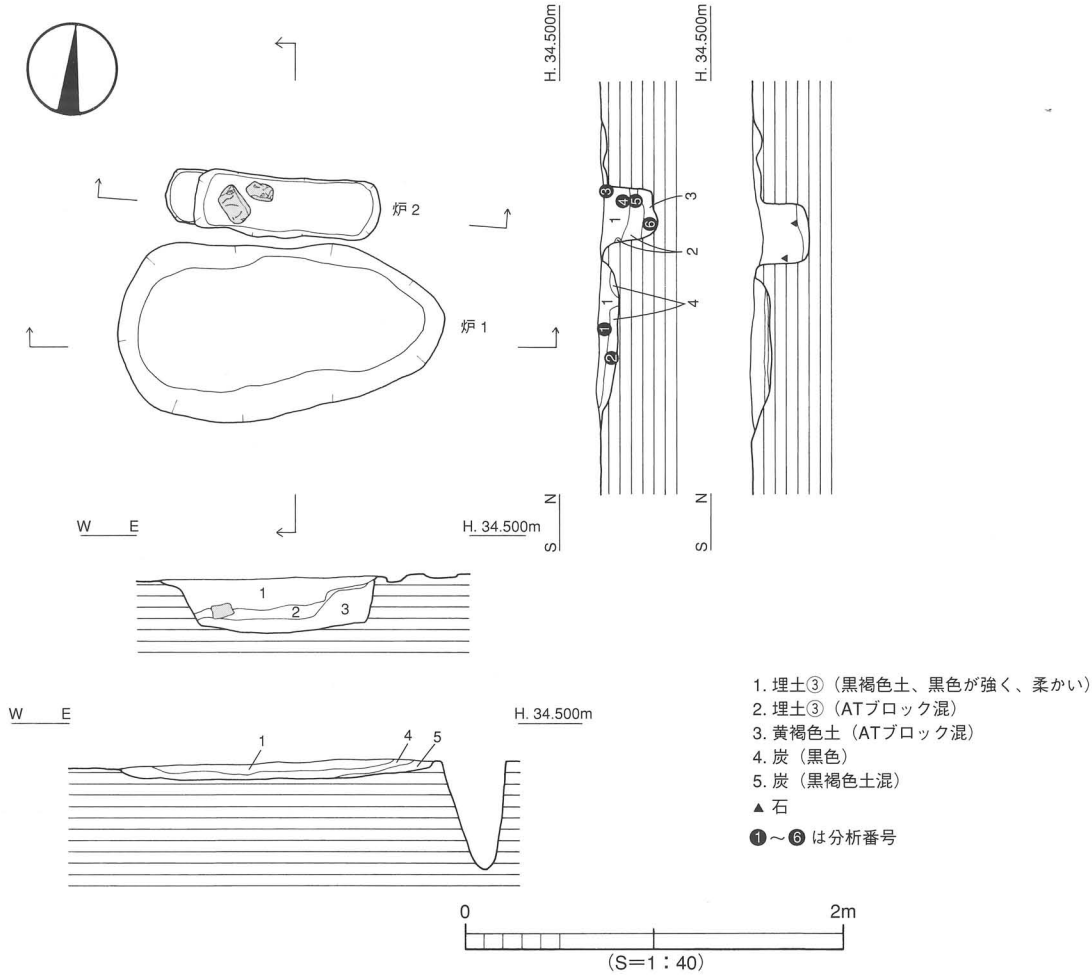
出土遺物（第24～27図、図版23～25）

甕形土器（7～8）　7口縁部は、ゆるやかに外反し端部は、「コ」字状を呈する。外面口縁部にタタキ後ハケ、底部にタタキ後ナデ調整を施す。8・9口縁端部の内面はヨコナデによりやや拡張され、端面は凹む。10は口縁部～頸部にかけての小片、直立気味に立ち上がり端部付近で僅かに外反する。内面にケズリが見られる。11口縁端面はナデにより僅かに凹む。12口縁部はゆるやかに外反し端部は「コ」字状を呈する。13口縁部は「く」字状に外反し、端部は丸味のある「コ」字状である。口縁部に接合痕が顕著に見られる。14口縁部がやや肥厚し端部は丸味をもつ。15短く屈曲する口縁部の端部は丸味をもつ。16小さい平底より肩部の張る胴部をもち、口縁部はゆるやかに外反し肥厚する。17・18は平底内外面にハケ目調整を施す。

壺形土器（19～38）　19～28は複合口縁壺の口縁部片である。19は口縁拡張部が僅かに外反し、櫛描による沈線文を施す。20拡張部が剥ぎ落としている。擬口縁の端面に波状文を施す。21短く内傾する拡張部片。櫛状工具による縦沈線文を施す。22接合端面に波状文を施す。23～26は拡張部～接合部の小片であり口径は不明である。23・26は波状文、24は斜線充填による三角文を施す。27僅かに内湾する拡張部、端面はナデにより上方に拡張する。28内傾する拡張部の端部はナデにより丸く仕上げる。横沈線文を3条施す。29外反する口縁端部は内外に拡張し、端面に円形浮文と三角形斜線の充填を施す。30外反する口縁の端部は粘土貼り付けによって拡張する。31外反する口縁部、肩部に円形の竹管文を1ヶ施す。頸部内面にしぼり痕が顕著である。32外傾気味に立ち上がり端部手前で外反する口縁部。33外反する口縁の端部は指おさえにより凹む。ハケメ調整を施す。34頸部片で僅かに外傾する長い頸部、外面にミガキ調整が施される。35～37直口気味に立ち上がる頸部片、外面にミガキ調整後に横沈線文を施す。38丸味のある平底。内外面にハケメ調整を施す。



第22図　SB203測量図

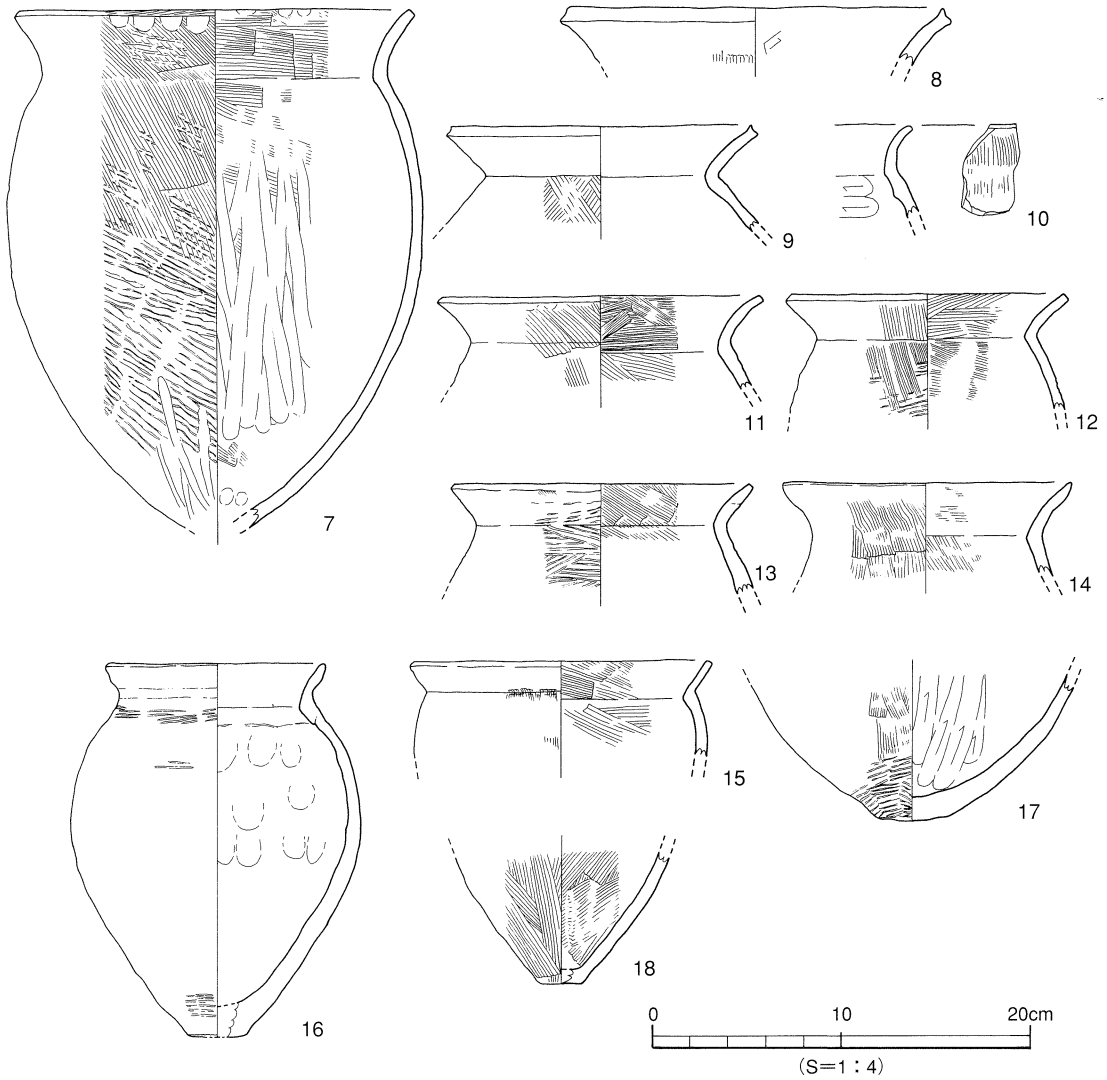


第23図　SB203炉1・2測量図

鉢形土器（39～48）　39・40は大型品。39の口縁部は、反り気味にゆるやかに外反する。内面に弱い稜をもつ。外面にタタキ後ハケ、内面にケズリ調整を施す。40短く外反する。口縁部。内面に明瞭な稜、内外面にケズリ風のナデが施される。41大きく開く口縁部の端部は「コ」字状である。ボタン状の底部を持つ。42肩部の張る胴部である。41・42ともに内外面にミガキ調整が施されている。43～47は、直口口縁である。43は口縁端部は先細りで丸い。44小さな底部であり全体的にいびつである。45先細りの口縁部。外面にタタキ痕が残る。46口縁部は先細りである。47口縁部の小片である。48「ハ」字状の脚台を持つ。指頭痕が顕著に残る。

高坏形土器（49～55）　49・50は外反する坏部。屈曲部に明瞭な稜が見られる。51口縁部片である。端面に半截竹管文と円形浮文を施す。52・53は柱部。52は四方向に円孔がある。54・55は裾部。ゆるやかに広がる裾部の端部は「コ」字状である。

器台形土器（56～58）　56は口縁部片、端面に竹管文を施した円形浮文あり。57の口縁部はラッパ状に開き端部は粘土を貼り付け「コ」字状を呈する。内外面にミガキ調整を施す。58は裾部片、端面は強いヨコナデにより凹む。器壁は厚い。



第24図　SB203出土遺物実測図（1）

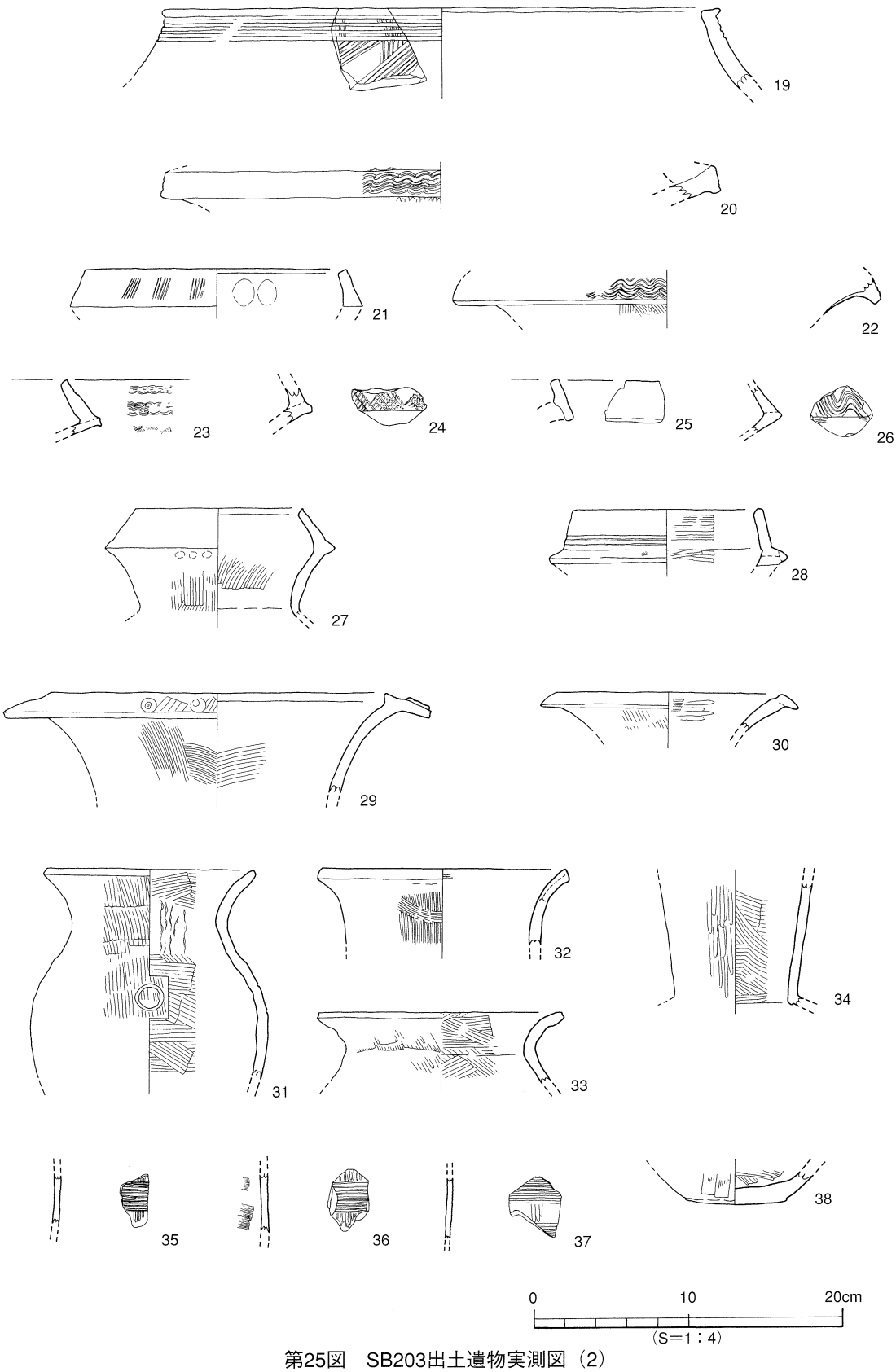
支脚形土器（59・60）　59は中空であり、受部は斜めにカットされ「U」字状を呈すると思われる。60は受部の角状突起の一部と思われる。

不明土器（61・62）　61・62極めて小片である。内湾気味に立ち上がり端部は尖り気味に丸い。

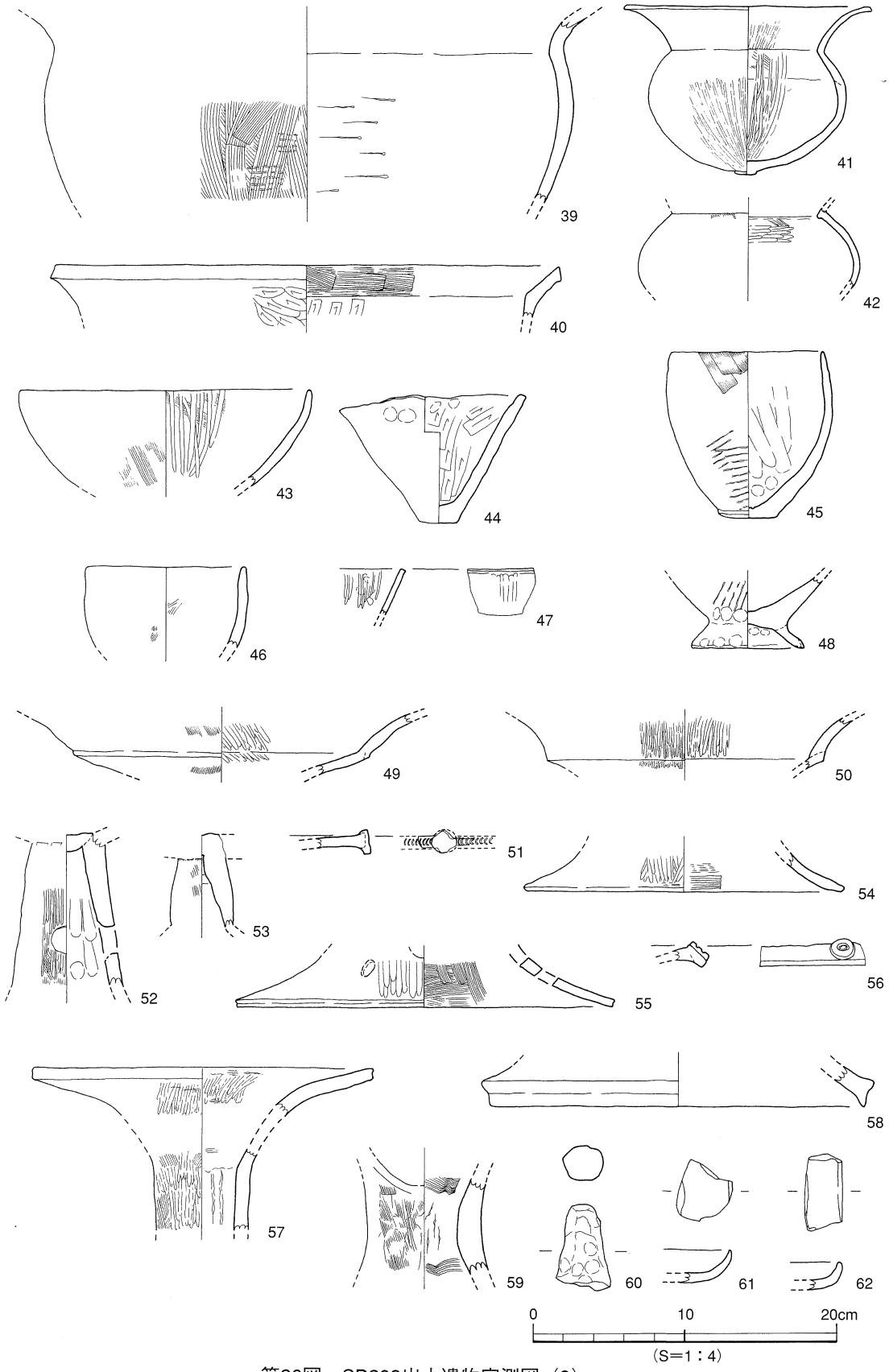
石庖丁（63）　完形品である。法量は長さ9.8cm、幅4.1cm、厚さ0.55cm、重さ53.4ｇを測る。研磨段階に側部に抉りを施す。刃は両面から同じ角度で研がれる。石材は結晶片岩である。

石庖丁（64）　完形品である。法量は長さ7.6cm、幅4.3cm、厚さ0.45cm、重さ34.2ｇを測る。両面に剥離面を残す。側部に抉りをもち、刃は両面から違う角度で研がれる。

石錘（65）　有溝石錘の完形品である。法量は長さ3.4cm、幅3.0cm、厚さ1.8cm、重さ25.3ｇを測る。石材は砂岩である。



第25図　SB203出土遺物実測図（2）

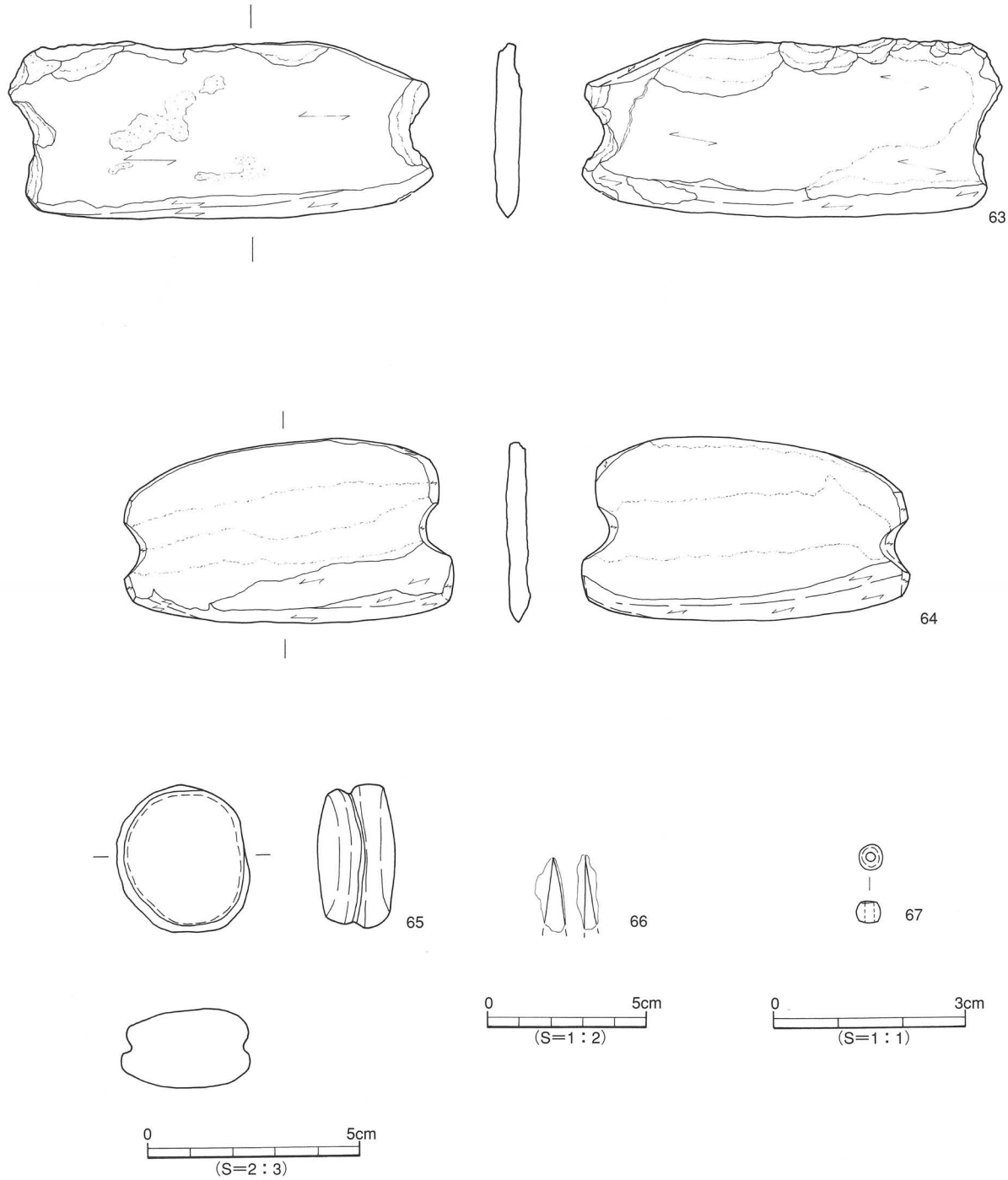


第26図　SB203出土遺物実測図（3）

鉄製品（66）　器種不明である。錆が厚く付着する。尖った端部をもつ。

ガラス小玉（67）　青色である。細かい気泡が多く含まれ濁る。

時期：出土遺物41の鉢が時期決定の資料である。大きく開く口縁部とボタン状の底部の形態や内外面のミガキ調整は弥生時代後期末の特徴をもち、出土遺物に大きな時期幅がないことより、埋没時期は、弥生時代後期末と思われる。

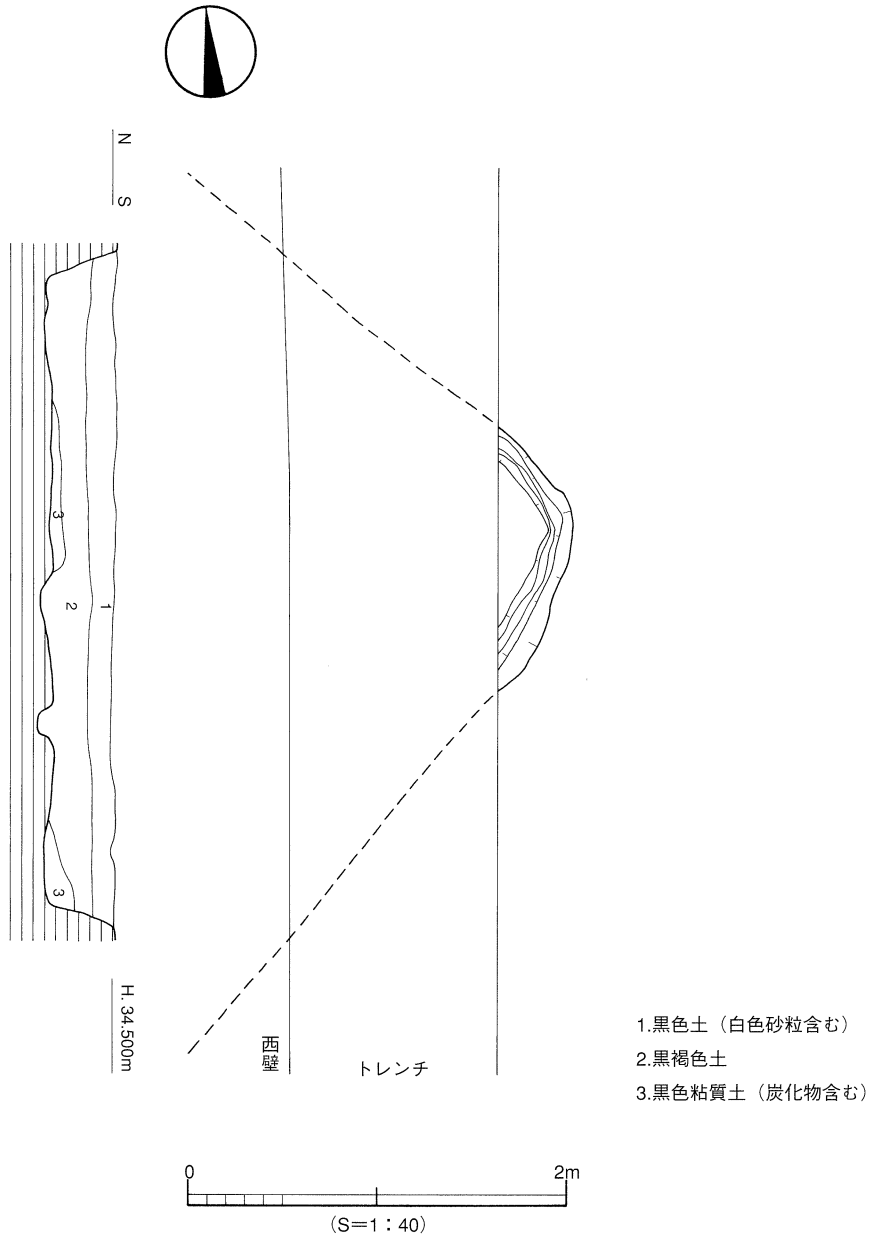


第27図　SB203出土遺物実測図（4）

ＳＢ２０１（第28図）

南区の北西Ａ17～18区にて住居址の一部を検出した。本住居の大部分は調査区外にあり、さらに土層確認のためのトレンチにより切られており、わずかな検出にとどまった。よって全容は判明しないが、直角となる平面形態を一部検出したため、住居址の平面形態は隅丸方形ないし長方形になるものと思われる。検出値は75×110cm、深さ40cmであるが、調査地西壁では長さ4mの住居部分を確認している。屋内施設には周壁溝と炉がある。周壁溝は壁体にそって幅10cm、深さ5cmで巡る。埋土は黒色土と黒褐色土である。調査区西壁では、炉址と考えられる炭化物を含む黒色粘質土を検出した。炉は南側がわずかに凹んでいる。

出土遺物は甕形土器、鉢形土器が床面より少量出土している。



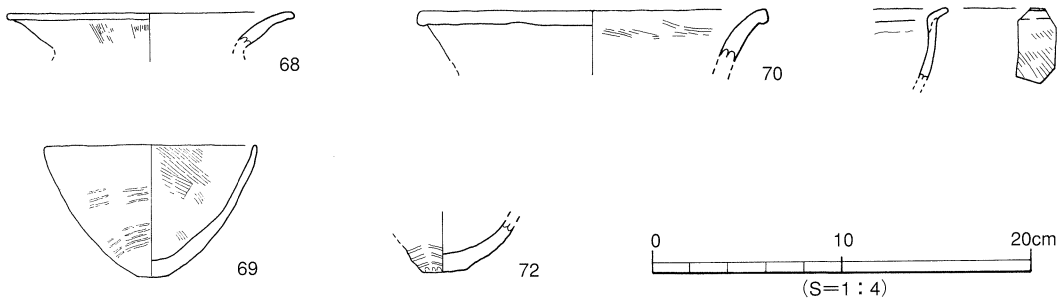
第28図　SB201測量図

出土遺物（第29図、図版25）

甕形土器（68・70・72）　68・70は口縁部片。68は大きく外反する口縁部で端部は丸味のある「コ」字状を呈する。70の口縁端部は下方にやや突出する。器壁は厚い。68・70の内外面ともにヨコナデ調整が施される。

鉢形土器（69・71）　69は直口口縁、端部は先細りになり若干内湾する。底部は丸味のある小さい平底である。71は口縁部片、短く外反する口縁部、端部は丸味のある「コ」字状である。

時期：出土遺物69の鉢は、外傾して立ち上がり、底部は丸みをもつ形態であり外面にタタキ調整が残る。これらは、弥生時代後期末の特徴をもち、出土遺物は少量ではあるが、大きな時期幅がないことより、埋没時期は弥生時代後期末と思われる。



第29図　SB201出土遺物実測図

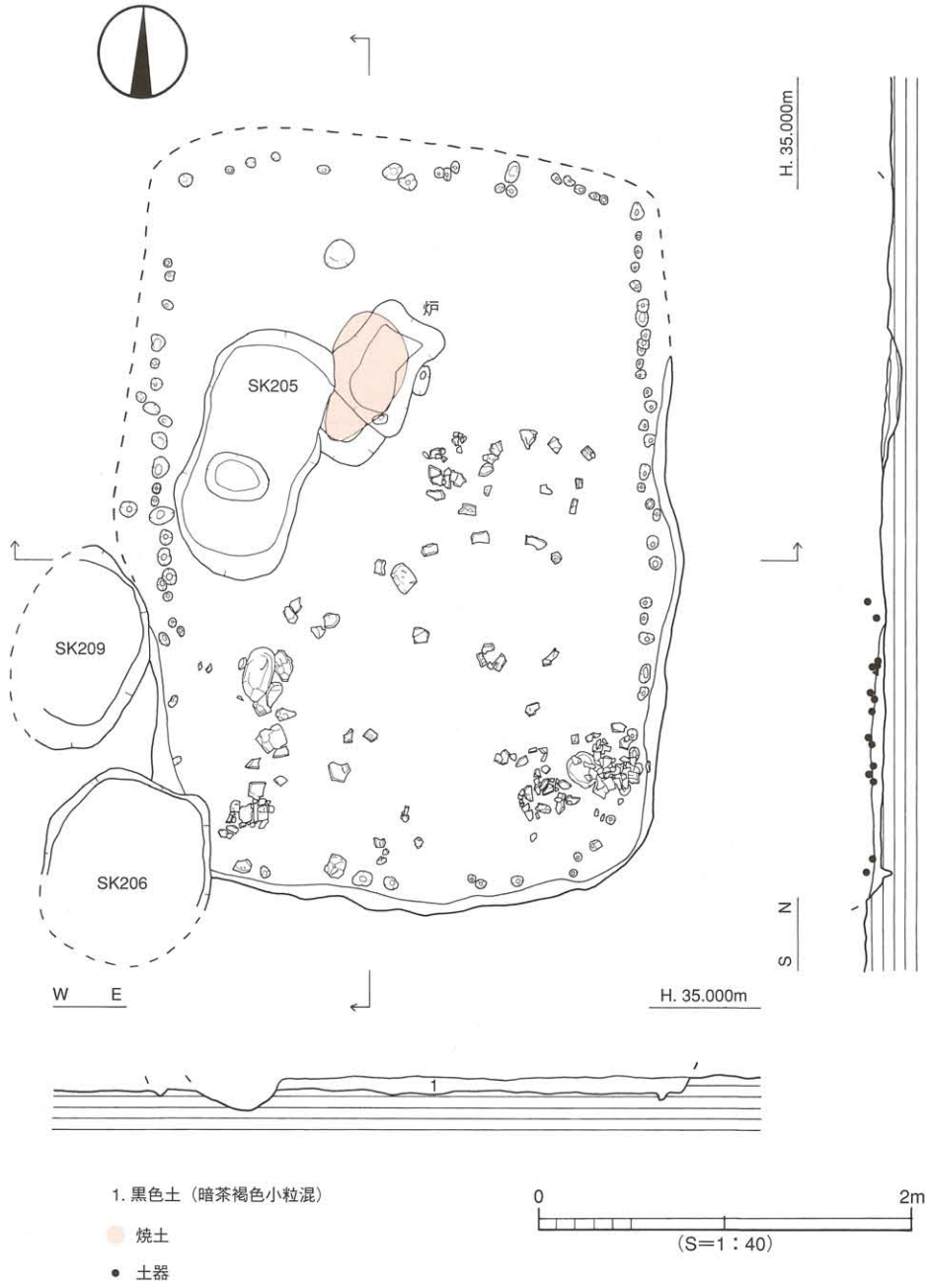
ＳＢ２０２（第30・31図、図版20）

Ｃ22～Ｄ23区で検出した。重機による掘削作業中に土器がまとまって出土したので、周囲を精査すると隅丸長方形の住居址であることが判明した。規模は長軸390cm、短軸290cm、深さ7cmを測る。埋土は黒色土である。屋内施設には、炉と小ピットをもち、主柱穴は検出されなかった。炉（第31図）は西側をＳＫ205に切られているが、住居址の中央部やや北よりに不整形な形で検出した。長軸92cm、短軸45cm、深さは8cmを測り、北側がやや深くなっている。炉内からは炭化物及び焼土を検出した。小ピットは壁体に沿って検出され、直径5～18cm、深さ3～4cmを測る。遺物は、住居址南東隅の床面より甕形土器・壺形土器・鉢形土器が出土している。

出土遺物（第32図、図版26）

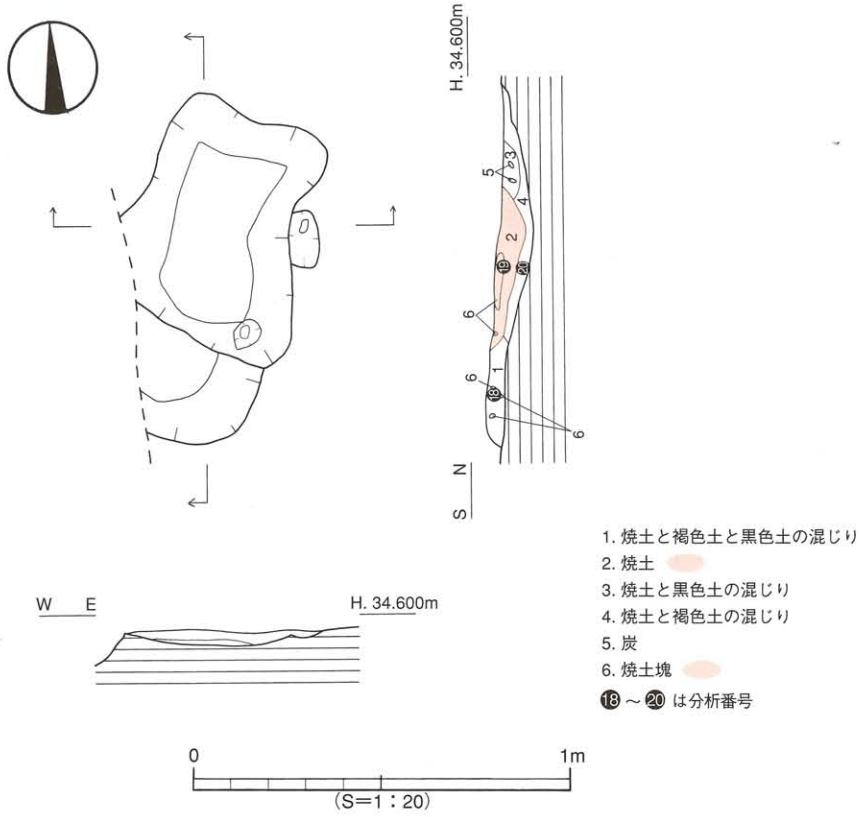
甕形土器（73～78）　73口縁部は長めで直立気味に立ち上がり中位付近でゆるやかに外反する。端部は丸味のある「コ」字状である。74口縁部は短く外反し端部は丸味をもつ。胴部は肩部が張る形態である。75外反する口縁部片。端部は幅の広い「コ」字状を呈する。76口縁部片。外反する口縁端部は「コ」字状を呈する。器壁が薄い。77・78小さめの平底で胴部は長い。

壺形土器（79～81）　79複合口縁壺の拡張部片である。上下に櫛状工具による7条の横沈線文とその間に波状文7条と縦沈線文5条を施す。80突出気味の小さい平底とやや肩の張る球形の胴部をもつ。口縁部は欠損している。81平底の底部である。内面にケズリ調整が施される。82ミニチュア土器の底部片。

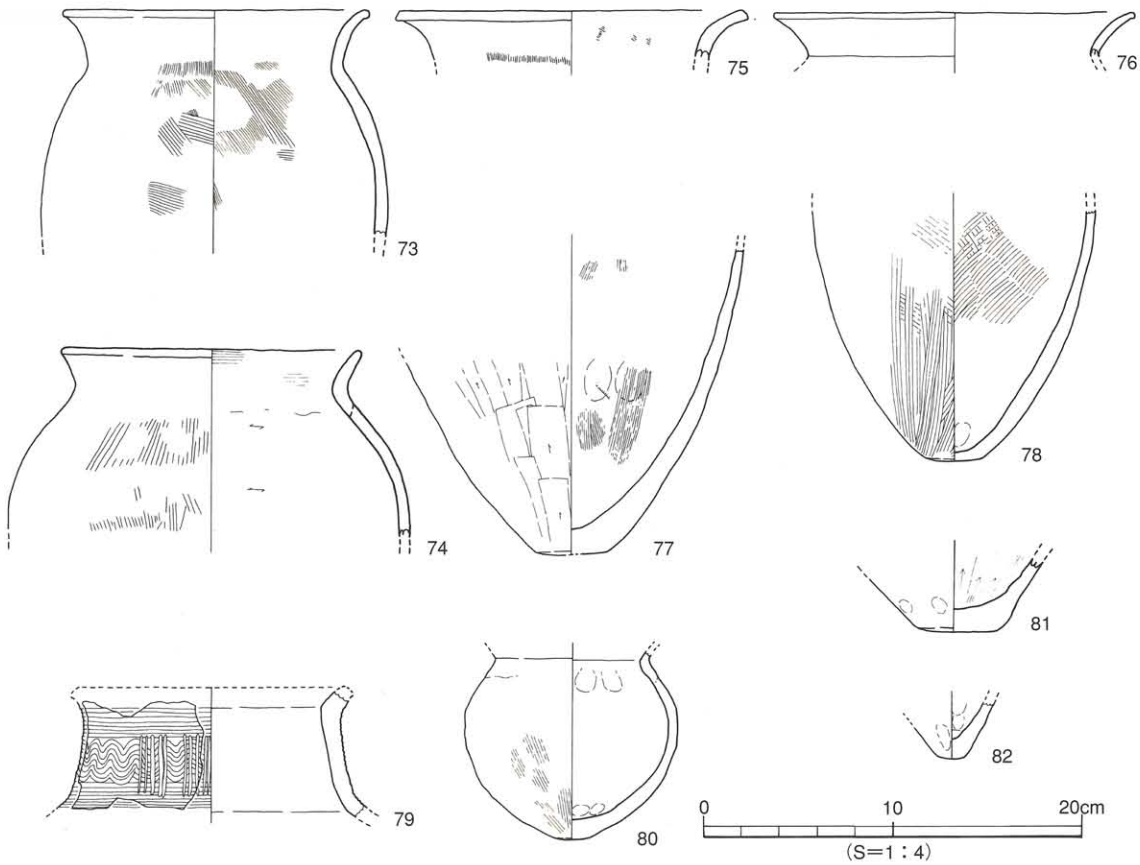


第30図　SB202測量図

時期：出土遺物の甕形土器は小さな丸みをもつ底部と長胴であるという弥生時代後期末の特徴をもち、他の土器との時期幅がないことより埋没時期は弥生時代後期末と思われる。



第31図　SB202炉測量図



第32図　SB202出土遺物実測図

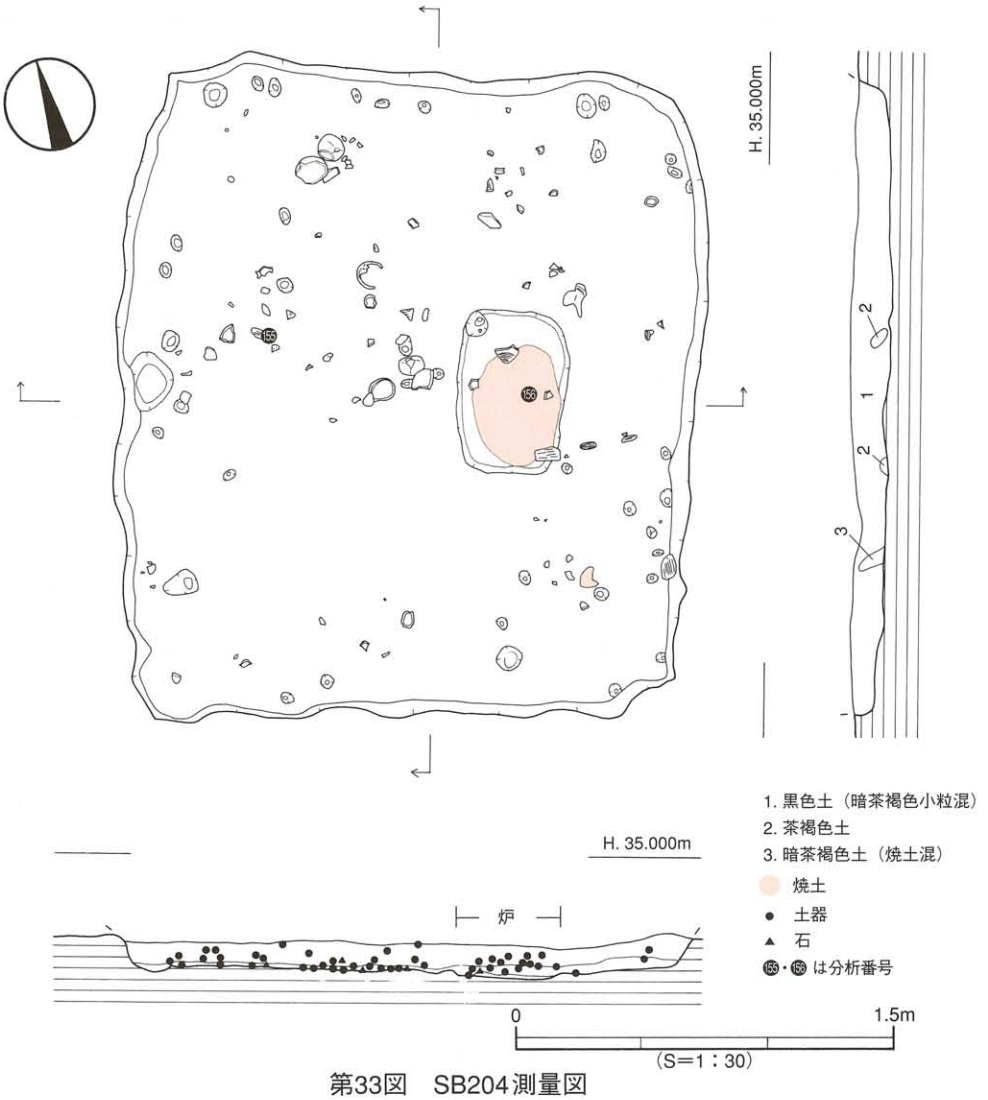
ＳＢ２０４（第33・34図、図版20・21）

南区、東側拡張区のＤ23～Ｅ24区で検出した。平面形態は隅丸方形で、規模は南北250㎝、東西220㎝、深さ16㎝を測る。内部施設としては炉と小ピットを検出している。炉（第34図）は住居の中央やや東側にあり、平面形態は方形で南北64㎝、東西42㎝、深さ3㎝を測る。炉床全体に焼土を検出した。主柱穴と周壁溝は検出されなかったが、床面において径5㎝、深さ5㎝の散在する小ピットを40基検出している。

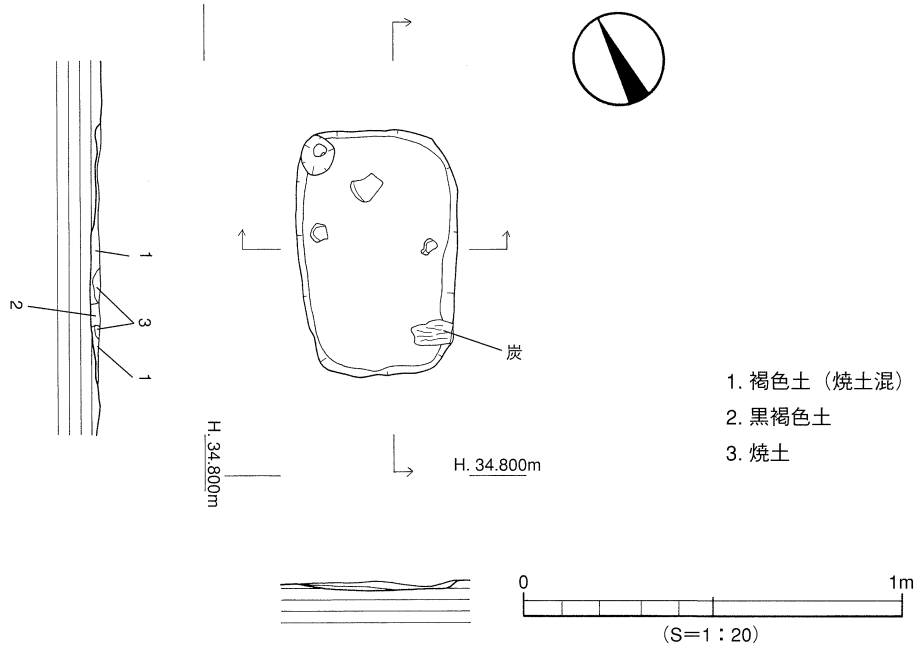
遺物は、床面中央部と北側より鉢形土器と支脚形土器のほぼ完形品が出土した。そのほかに、甕形土器・壺形土器が出土している。

出土遺物（第35図、図版26）

甕形土器（83～89）　83・84は外反する口縁部の小片。83の端部はナデにより面をもつ。84は尖り気味に丸い。85～89は底部片。85は平底。外面にハケ目調整が施される。86小さな平底をもち内外面にハケ目調整が施される。87小さな平底。タタキ痕が顕著に残る。88・89丸味をおびる底部にタタキ痕が残る。



第33図　SB204測量図



第34図　SB204炉測量図

壺形土器（90）　複合口縁壺。拡張部の破片である。櫛状工具による4条の波状文と2条の沈線文を施す。

鉢形土器（91～97）　91・92は大型品の口縁部片。91の口縁端部は「コ」字状を呈する。92の口縁端面はヨコナデにより凹む。93は外反する口縁部。端部は丸味をもつ「コ」字状である。94内面に稜をもち、短く外反する口縁部。口縁端部はヨコナデにより凹む。95直口口縁の完形品。口縁端部は尖り気味であり底部は丸味をもつ。底部から胴部にかけて全体にタタキ痕が顕著に残る。96小型品。ゆるやかに内湾気味に立ち上がる口縁部の端部は丸味をもつ。97突出気味に丸味をもつ小さな底部。

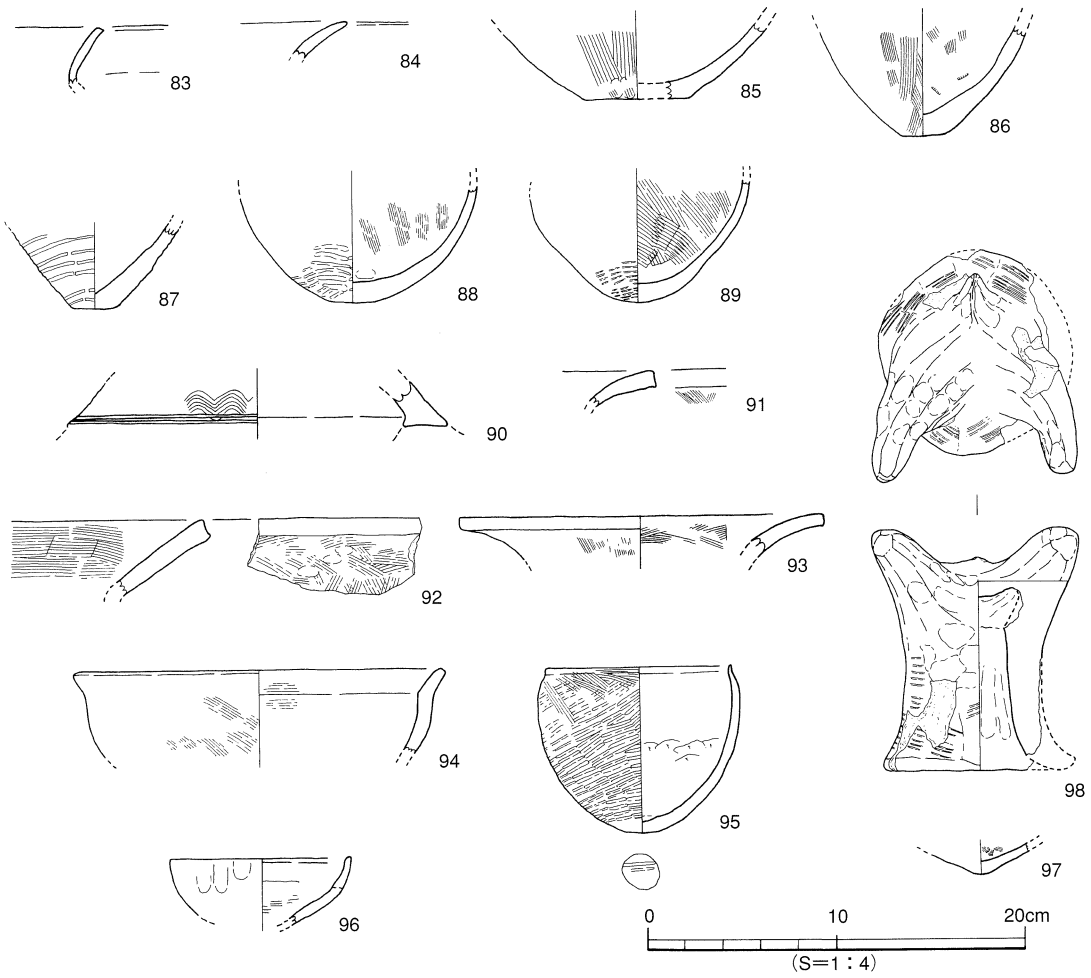
支脚形土器（98）　中空であり受部に2本の角状の突起をもつほぼ完形品である。外面にタタキ痕が残る。

時期：出土遺物の鉢形土器等より弥生時代後期末に埋没したものと思われる。

ＳＢ２０５（第36図、図版20・21）

東側拡張区で、ＳＢ202の東側に接するように検出した。平面形態は隅丸長方形で、規模は東西290cm、南北210cm、深さ15cmを測る。内部施設としては炉・高床部・小ピットを付設している。炉（第37図）は中央部やや南側にあり、平面形態は卵形を呈し長軸105cm、短軸64cm、深さ14cmを測る。埋土は2層あり、上面が炭化物混じりの焼土で覆われ、床面部分は焼土混じりの暗茶褐色土である。高床部は、住居の西壁から70～120cm間に三日月状を呈した形で検出した。この高床部は厚さ10cmを測る黒褐色土を貼り付けて築造していた。このほか壁体にそって小ピット（径10cm、深さ7cm）が36基見られる。

遺物は床面北側と南東隅より完形の甕形土器と鉢形土器、それと小型の鉄鏃が1点出土している。



第35図　SB204出土遺物実測図

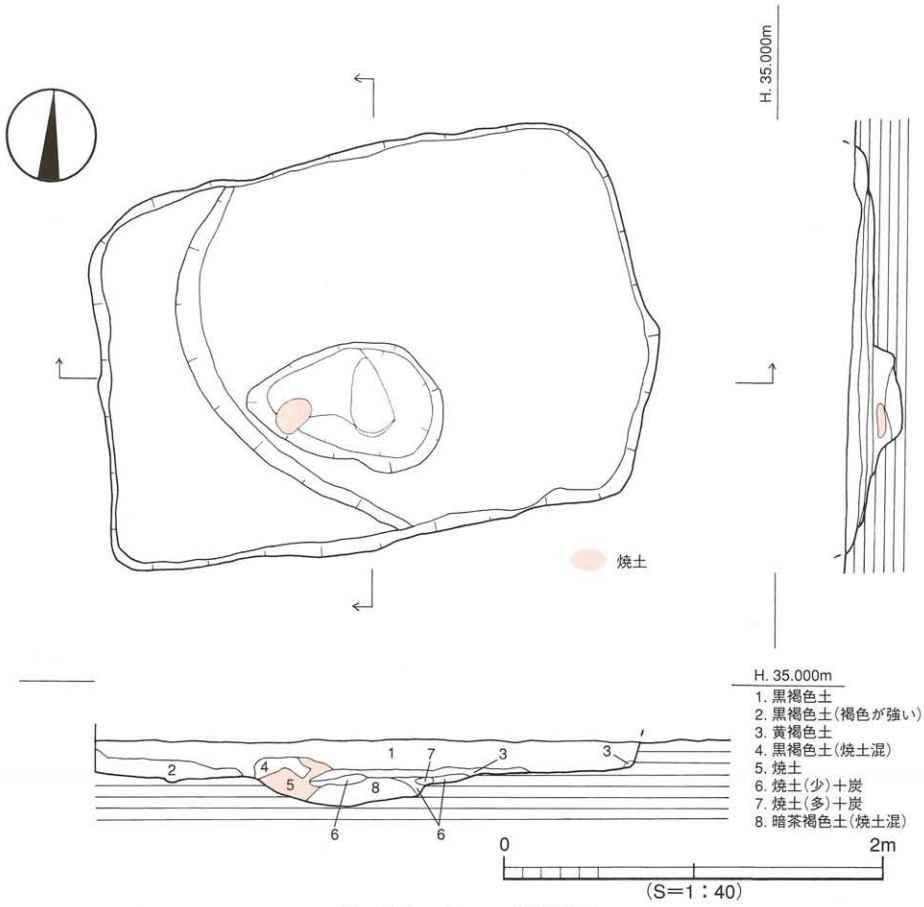
出土遺物（第39図、図版27）

甕形土器（99～103）　99は、小さな平底より張りが少なく細長い胴部につづく。口縁部は「く」字状を呈し端部は丸味をもつ。外面にタタキ、内面にケズリ調整を施す。100は胴中位がやや張る長い胴部をもつ。口縁部は反り気味に外反し、端部は下方に若干突出する。外面にタタキ、内面にケズリ調整が残る。101は胴部中位で張りをもつ。口縁部は「く」字状を呈し肥厚される。底部は小さな平底である。102口縁部は短く直立気味である。口縁端部は丸味をもつ。肩の張らない胴部に小さな平底をもつ。103は口縁端部でやや肥厚され端面はナデにより凹む。頸部内面に稜をもつ。

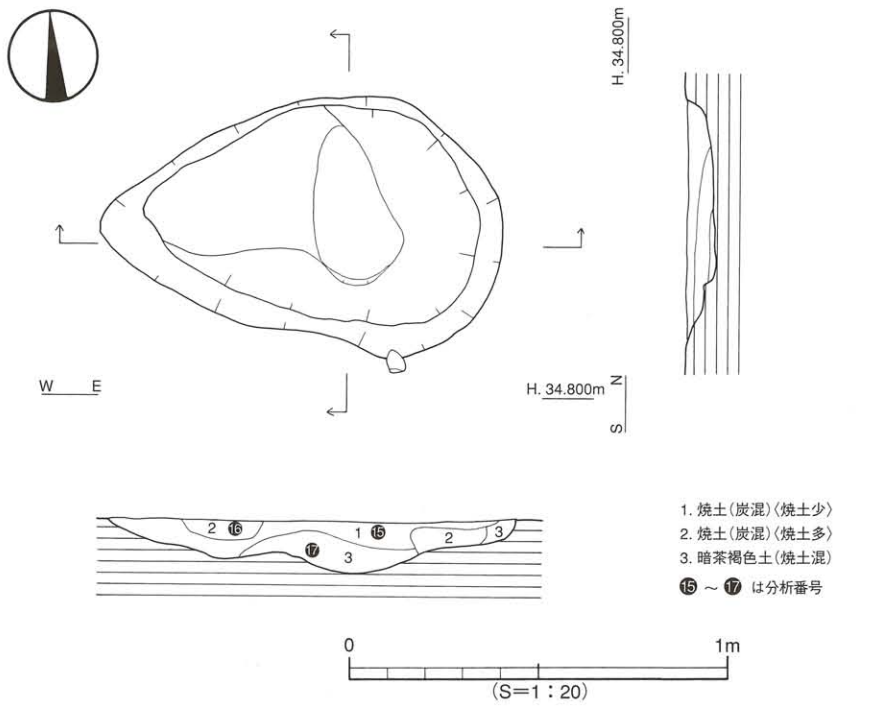
鉢形土器（104）　直口口縁。端部は丸味をもつ「コ」字状を呈する。体部は丸味をもち、底部は粘土を貼り付けし突出気味である。

鉄鏃（105）　基部の一部を欠く長さ1.9cm、幅1.0cm、厚さ0.18cm、重さ0.7ｇを測る有頸圭頭鏃である。

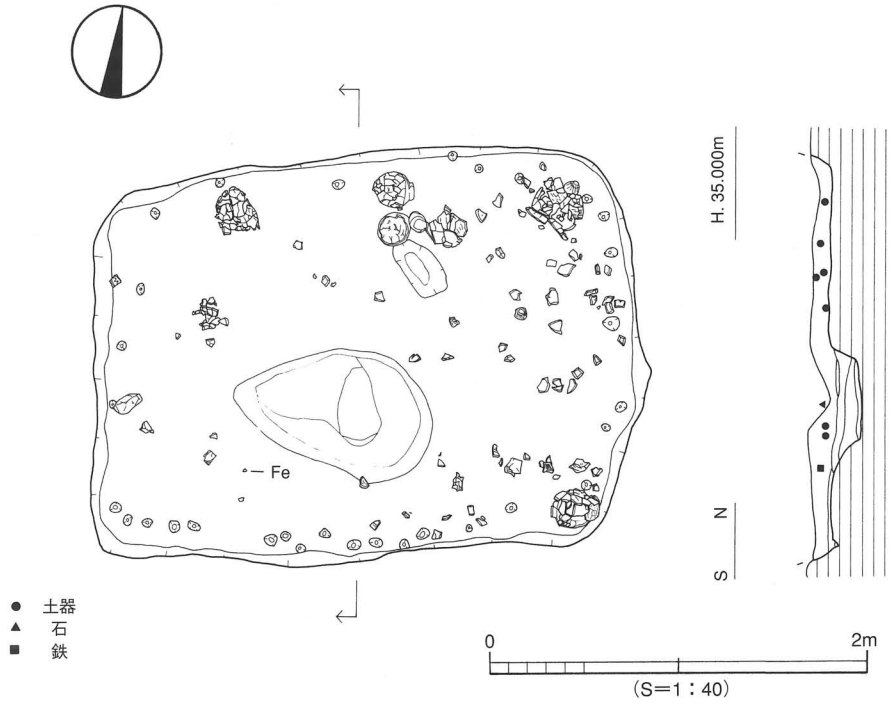
時期：出土遺物の甕形土器・鉢形土器より弥生時代後期末に埋没したものと思われる。



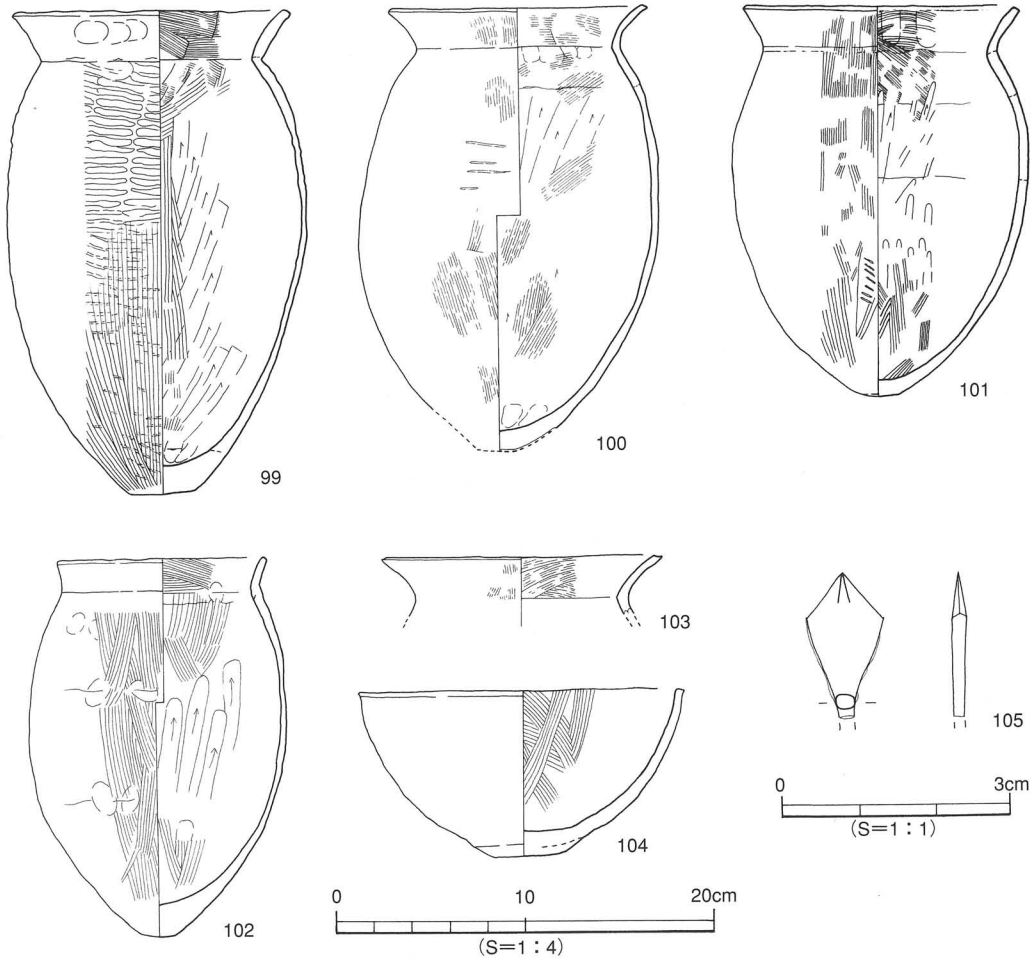
第36図　SB205測量図



第37図　SB205炉測量図



第38図　SB205出土遺物測量図



第39図　SB205出土遺物実測図

2）溝（SD）

今回の調査で、検出した溝は3条である。SD202と203は北区からの検出であり、特にSD203は弥生時代後期末の土器を多量に出土している。SD201は、南区からの検出で弥生土器が出土している。

SD203（第40図、図版22）

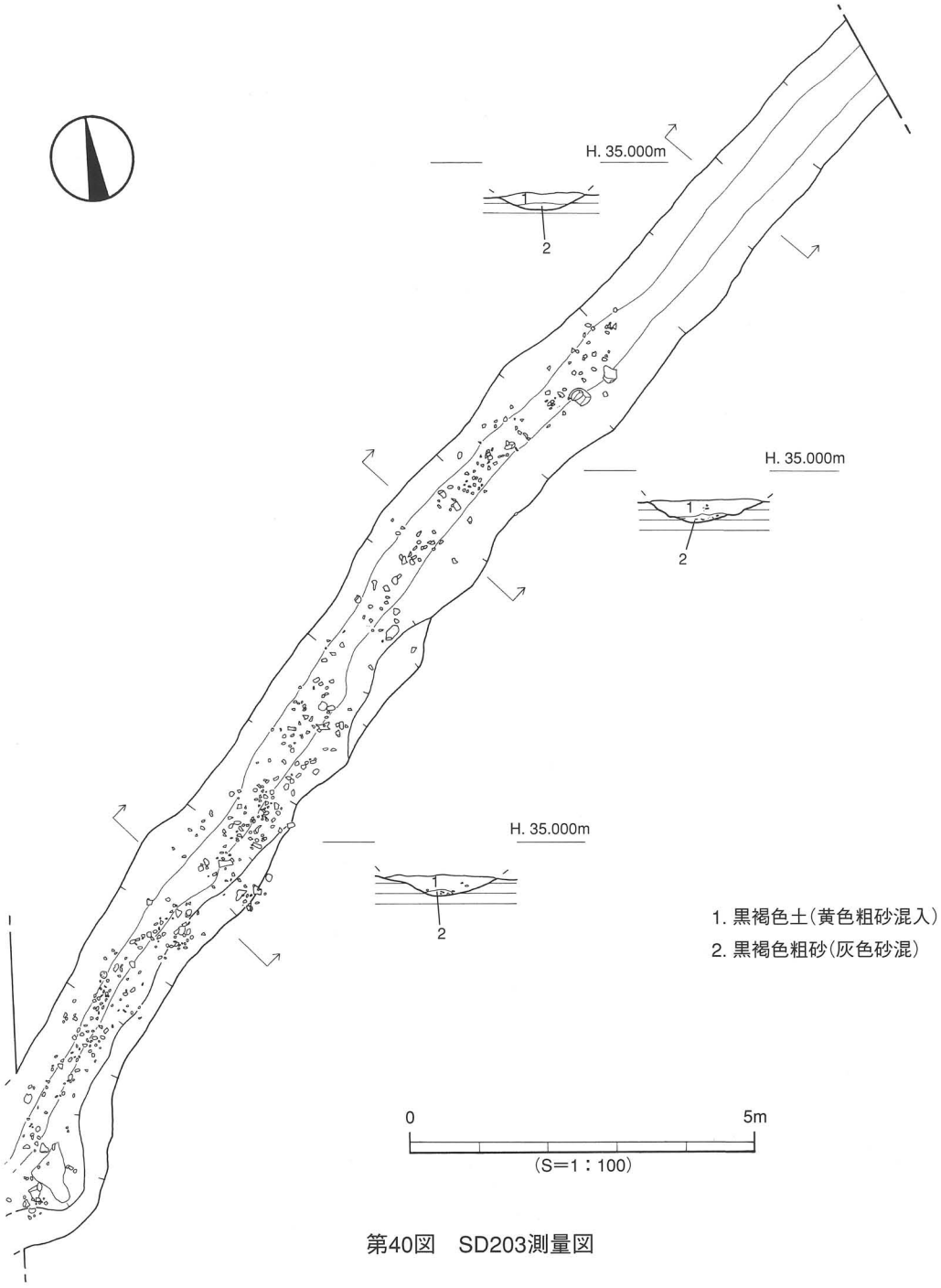
SD203は、土器が多数出土したために東側を5×3mの範囲で拡張し調査を行った。よって溝はD4～A9区にかけて検出するにいたった。北東から南西に走る溝の断面形態は舟底状を呈し検出長21.5m、上場幅130cm～180cm、深さ30cmを測る。埋土は2層でその多くは黒褐色土で、基底部では黒褐色土に砂が多く含まれるものである。なお、地点によっては、灰色と黄色の砂がブロック状に堆積しているのが見られた。

出土遺物は、溝全体より弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器が出土した。

出土遺物（第41～46図、図版28～30）

甕形土器（106～137）　106～123は口縁から胴部にかけての残存である。106直立気味に立ち上がる口縁部の端部は「コ」字状である。胴部の張りは少なく、外面にタタキ痕が残る。107外反する口縁部の端部は強いナデにより上方にやや拡張する。胴部は張りをもつ。口縁部内外面にヨコナデ調整を施す。108はやや反り気味にゆるやかに外反する。口縁端部は「コ」字状である。内外面に板ナデによる調整が施されている。109の口縁部はゆるやかに外反し端部は薄く下方がやや突出する。110ゆるやかに外反する口縁部の端部は「コ」字状である。111・112は口縁部下半部が肥厚し端部は先細りで丸味をもつ。粘土接合痕が顕著に見られる。113口縁部はやや反り気味に外反する。端部は先細りである。114の口縁部は短く急角度で外反する。端部はヨコナデにより上方にわずかに拡張する。115・116は「く」字状の口縁部である。115の端部は先細りで口縁部中位に粘土接合痕が見られる。117～119・121の口縁端部はヨコナデにより上方に拡張が行われている。120の口縁部は反り気味に外反し端部は「コ」字状であるが上方にわずかに突出する。122口縁部は直立気味で端部は丸味をもつ。124～137は底部片である。124～126は丸味のある不安定な平底である。127は平底で細長い胴部をもつ。128～133は小さな平底の底部である。外面にタタキ痕が見られる。134は磨滅のため調整不明である。137は丸味のある尖底である。外面にタタキ痕が見られる。

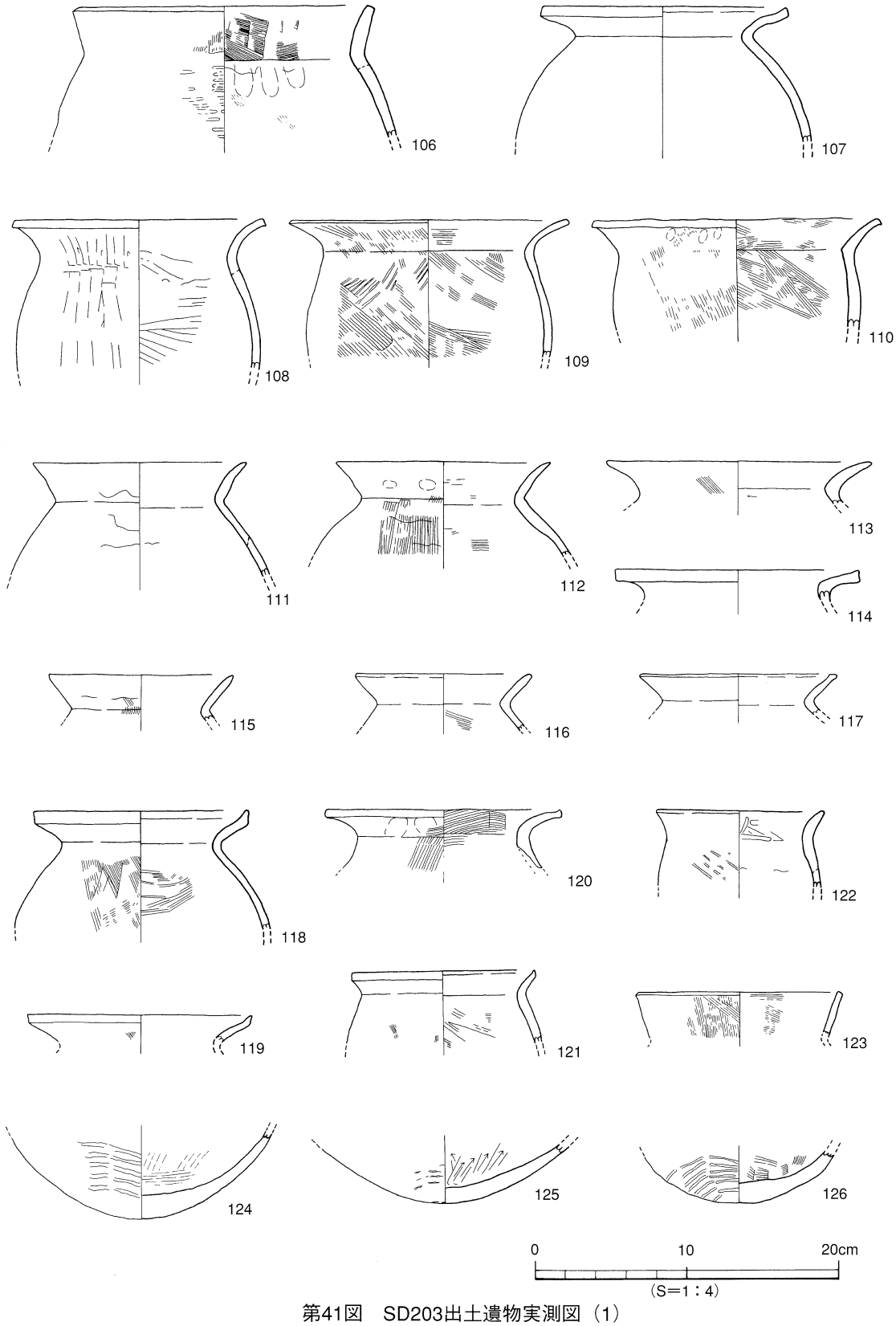
壺形土器（138～162）　138～148は複合口縁壺の口縁部片である。138は接合部が「く」字状を呈する。拡張部中位に櫛状工具による横沈線文とその上下に6条と3条の波状文を施す。139の拡張部は内湾し端部はわずかに上方につまみ上げる。140は拡張部がわずかに残るだけである。141は内傾する拡張部をもつ。口縁端部は外上方に拡張する。櫛状工具による横沈線文を14条施し、その上面に7条1組の縦沈線文を、下部に波状文を施す。142拡張部を剝ぎ落とし下垂する擬口縁を看取する。端面に4条の波状文が施される。143内傾する口縁部の端部は「コ」字状で丸味をもつ。頸部に貼り付けによる一条の凸帯を巡らし、櫛状工具による斜格子文を施す。144内傾する拡張部の端部はわずかに上方につまみ上げる。145は直立気味に立ち上がり、短く内傾する拡張部。端部は「コ」字状を呈する。頸部に貼り付けによる凸帯を巡らし櫛状工具による斜格子文を施す。146は直立気味にわずかに外反する拡張部に波状文が施される。148内湾する拡張部は肥厚され、口縁端部は上下にわずかに拡張される。148直立し僅かに外反する拡張部。中位の内外面に稜が見られる。149～151は外反する口縁部片である。149は口縁端部をわずかに下方に拡張し端面に斜格子文を施す。150は大きく開く口縁部、端部は粘土を貼り付け下方に拡張し垂れ下げる。端面に6条の波状文を施す。頸部に凸帯を貼り付け



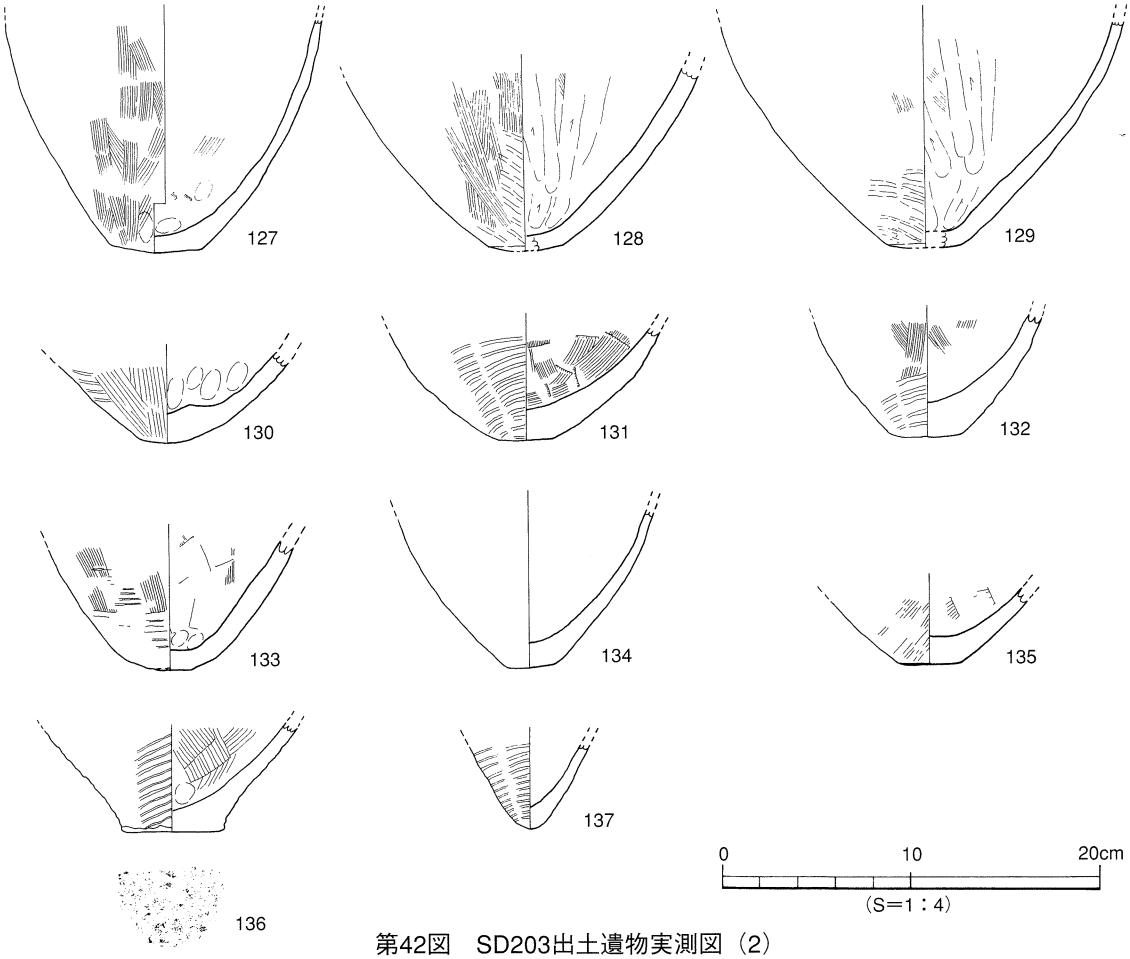
第40図　SD203測量図

斜格子文を施す。151は口縁上位の器壁が厚く口端部は「コ」字状を呈する。152・155直立気味にわずかに外反する口縁部。153・154は内湾気味にわずかに外傾する口縁部。口端部はナデにより凹む。156大きく外反する拡張部の外面に山形文を施す。接合部に円形浮文を貼り付ける。内面にミガキ調整を施す。157～162は底部片。157～159は丸味のある平底で胴部は丸味をもち立ち上がる。160突出した平底。161・162は高台状に大きく突出した平底である。162の底部に葉脈圧痕が見られる。

鉢形土器（163～184）　163大型品。口縁部は反り気味にゆるやかに外反する。端部は内面のヨコナデにより上方にやや拡張する。164短く外反する口縁部。端部下方がやや突出する。165ゆるやかに外



第41図　SD203出土遺物実測図（1）



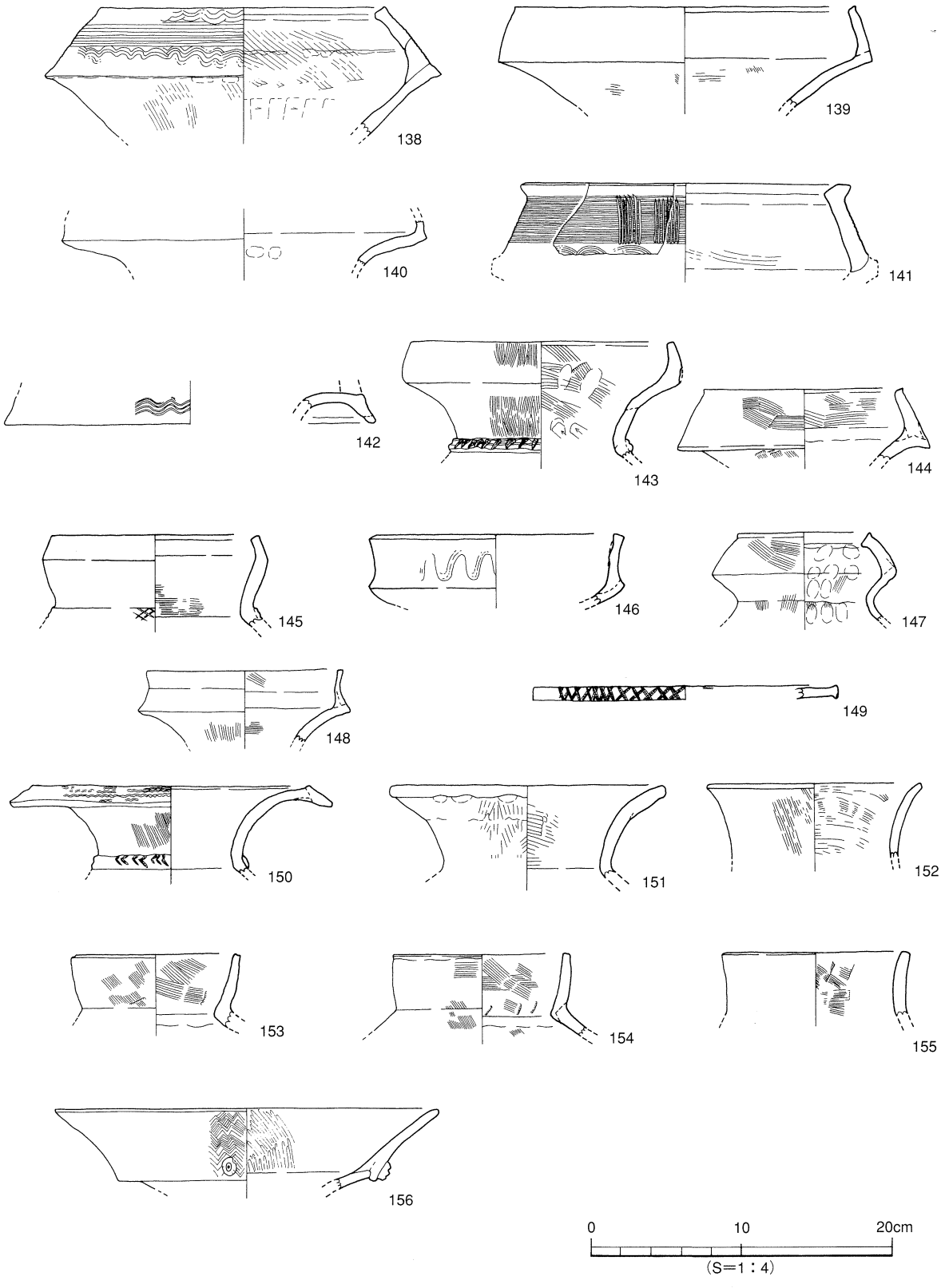
第42図　SD203出土遺物実測図（2）

反する口縁部。端部は「コ」字状を呈し胴部は丸味をおびる。166口縁部は大きく外反する。端部は丸味をもつ。167口縁部片。端部は丸味をもつ。器壁は薄い。168口縁部は外反して口端部下方がやや突出する。内外面にミガキ調整を施す。169口縁部はわずかに外反する。端部は「コ」字状である。170～172は直口口縁。170の口縁部は先細りである。171は「コ」字状を呈しわずかに内湾する。172は丸味をもつ。173小型品である。口縁部はゆるやかに外反し、端部はやや肥厚され、端面はヨコナデにより凹む。174～177は口縁部の小片。174～176はわずかに外反し先細りである。177は直口口縁、端部は丸味をもつ。178はわずかに突出気味の丸味のある平底。内面にミガキ調整を施す。182～184は台付鉢。182・183はくびれの上げ底。

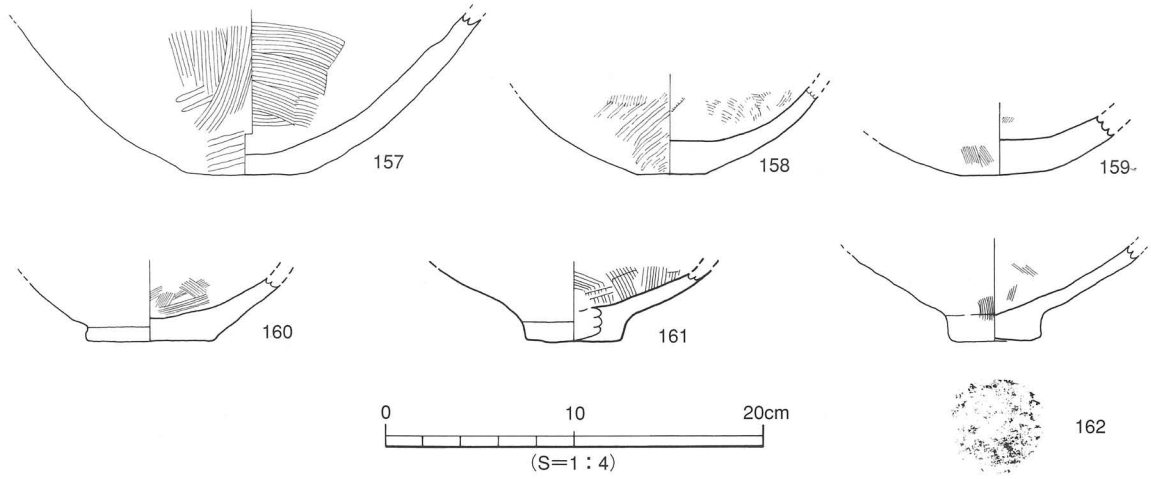
高坏形土器（185～191）　185～191は脚部。185は上下2段に円孔があり、下段は貫通していない。186はゆるやかに広がる脚部。187は径1.0cmの円孔が四方向に残る。188は坏部中位に稜をもつ。柱部と裾部を分ける境に径1.0cmの円孔が四方向に見られる。189脚部上位に三方向と思われる円孔を施す。190は2段の円孔を施す。191は大きく広がる裾部。端部内面は凹む。

器台形土器（192）　大型の器台、四方向に径2.2cmの円孔を施す。

支脚形土器（193～198）　193は受部の小片。受部上面を斜めにカットする。194中実で器高は低い。上下の面は凹みをもつ。195中空である。口縁部は折り曲げ垂下させ端部にヘラ状工具によるキザミを施す。196中空で直立する口縁部の受部は斜めにカットする。197中空。受部に2本の角状突起をもつ。198中空。胴部に穿孔があり受部に2本の角状突起をもつ。



第43図　SD203出土遺物実測図（3）



第44図　SD203出土遺物実測図（4）

時期：出土遺物より弥生時代後期末に埋没したと思われる。

ＳＤ２０１（第18図）

南区、Ａ28～Ｂ25区にあり、ＳＢ203の西側で検出した。規模は上場幅40～80㎝、深さ3㎝、検出長11.7ｍを測る。ＳＤ201は、第Ⅳ層上面での検出であるが、南壁では第Ⅲ①層を切っていることを確認している。南壁では、溝の深さは20㎝を測る。検出長は11.7ｍである。ただし、溝底の凹みが北東方向にＤ19区までは見られるが、東壁では検出されなかった。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色土である。ＳＤ201は3区北西の溝と断面形態や埋土が同じであり、位置関係からも同一の溝と思われる。よって、本調査の中では最も長い溝となる。出土遺物は弥生土器片が少量出土している。

時期：出土遺物、埋土等より弥生時代後期末と思われる。

ＳＤ２０２（第17図、図版22）

北区、Ａ6～Ｄ3区で検出した。溝はＤ3区にはじまり西に伸び、一旦南西に折れ曲がりＡ6区に続く。溝は非常に残りが浅く、溝底をわずかに検出しただけである。規模は上場幅50～120㎝、深さ3～9㎝、検出長13.2ｍを測る。埋土は黒色土である。遺物の出土はない。

時期：埋土と西壁土層で第Ⅲ①層からの検出であり、ＳＤ203と同様弥生時代後期末と考えられる。

〔３〕近現代の遺構

土坑（ＳＫ）

北区2基、南区9基の計11基の土坑を検出した。平面形態は隅丸長方形と楕円形を呈するものである。隅丸長方形のＳＫ201～206・208・210・211は、規模は径53～150㎝、深さ20～42㎝を測る。楕円形のＳＫ207・209は長軸規模は87～131㎝、深さ22～27㎝を測る。11基の土坑からは遺物の出土はない。

時期：埋土がすべて灰白色土のため近現代の遺構と思われる。

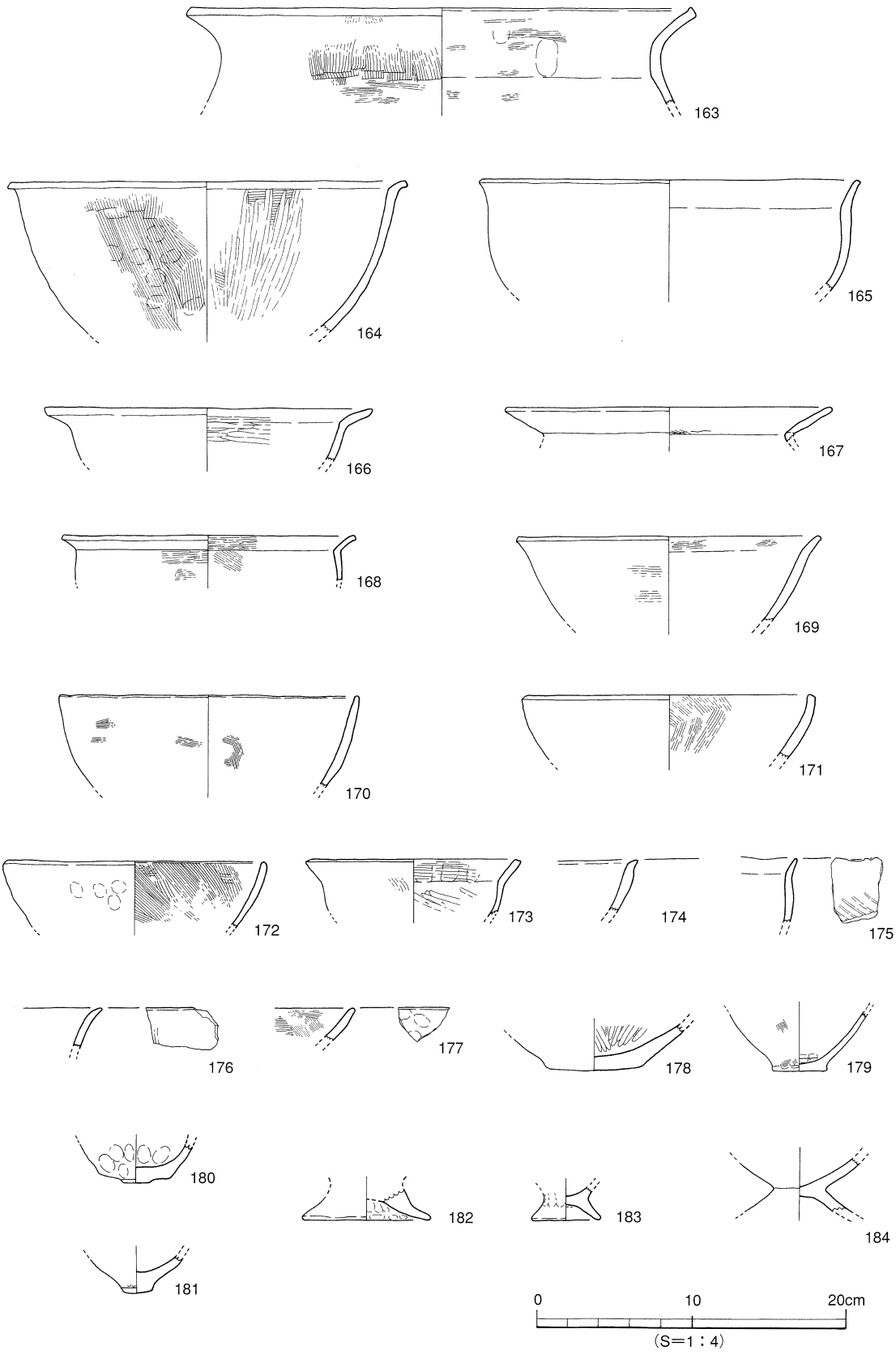
〔４〕その他の遺構

１）倒木（ＳＸ）

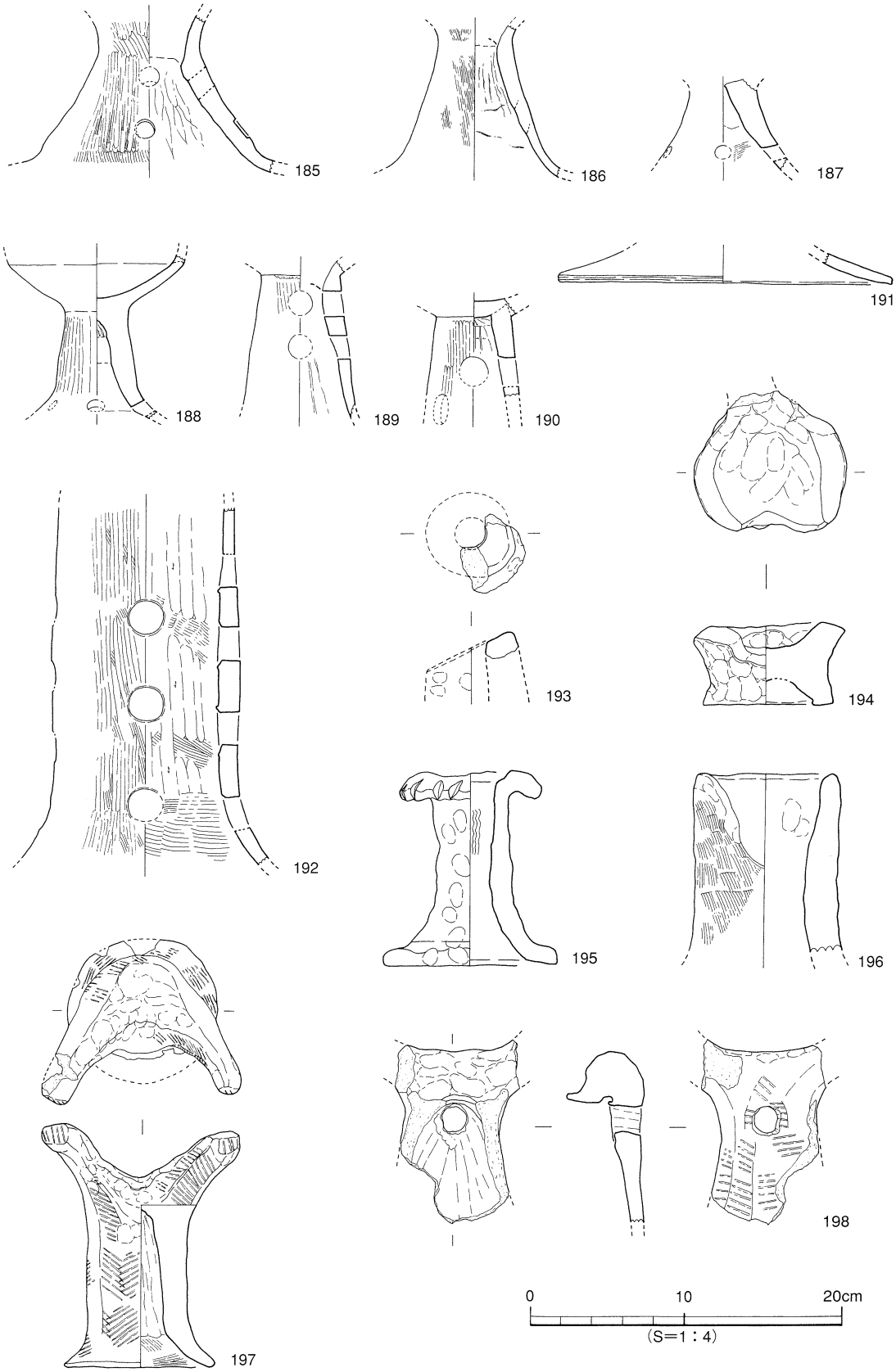
倒木は北区と南区で4基を検出した。平面形態は円形で、規模は径200～330㎝である。倒れた方向は、ＳＸ201は北方向、ＳＸ202・203は南東方向、ＳＸ204は南方向である。今回の調査では、平面形態とその規模さらに倒壊方位を記録するにとどめ完掘はしていない。

２）柱穴（ＳＰ）

本調査区では柱穴を119基検出した。柱穴は埋土の違いによりⅰ～ⅳの4グループに分けられる。



第45図　SD203出土遺物実測図（5）



第46図　SD203出土遺物実測図（6）

ⅰ：黒色土を埋土にもつもの44基である。その中で遺物が出土したのは、ＳＰ3、ＳＰ24、ＳＰ49、ＳＰ73である。

ⅱ：黒色土に暗茶褐色土が混ざる埋土をもつもの36基である。その中で遺物が出土したのは、ＳＰ54、ＳＰ72、ＳＰ95である。

ⅲ：暗茶褐色土を埋土にもつもの20基である。遺物は出土していない。

ⅳ：灰白色土を埋土にもつもの19基である。その中で遺物が出土したのは、ＳＰ34である。

ＳＰ出土遺物（第47･48図、図版31）

ＳＰ3（199）　かなり厚い平底の底部片。

ＳＰ24（200）　外上方に直線的に広がる口縁部。端部は丸味をもつ。

ＳＰ34（201）　小さめの平底。肩部がやや張り胴部中位に焼成後の穿孔あり。

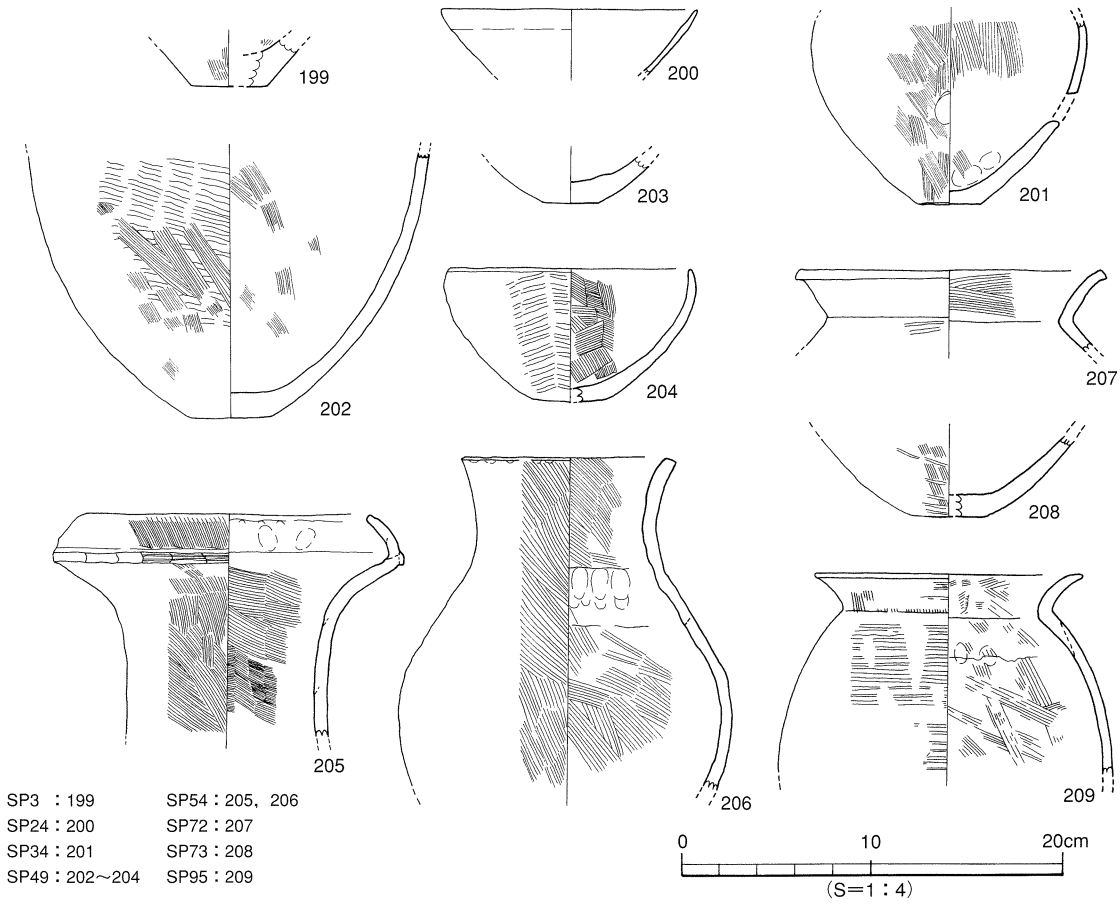
ＳＰ49（202～204）　202・203は壺の底部片。204は直口口縁の鉢。口縁部は、やや内湾し端部は先細りで、丸味のある平底である。外面にタタキ痕が残る。

ＳＰ54（205・206）　205は袋状口縁。頸部は長めで中位までほぼ直立し接合部に向かって急に外反し、拡張部は短く内湾する。端部は丸味のある「コ」字状を呈する。206の口縁部は長球形の胴部から稜をもたず、なだらかに直立気味に立ち上がる。口縁部は「コ」字状である。

ＳＰ72（207）　「く」字状口縁をもち端部は「コ」字状であるが下方がやや突出する。

ＳＰ73（208）　小さめの平底。外面にタタキ痕が残る。

ＳＰ95（209）　外反する口縁部の端部は先細りである。

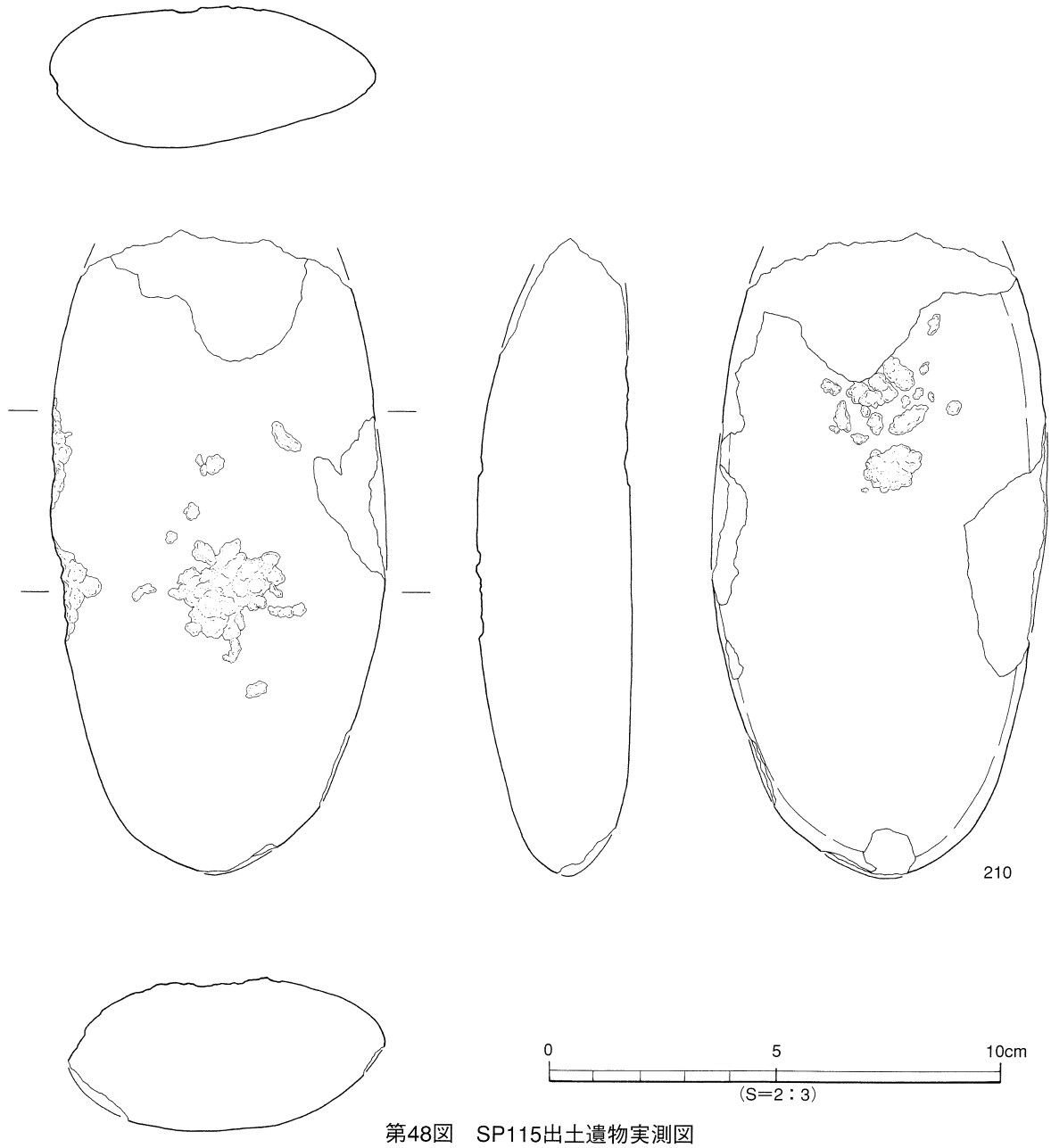


第47図　SP出土遺物実測図

ＳＰ115（210）　敲石である。長さ14.2cm、幅7.1cm、厚さ3.3cm、重さ435ｇを測る。両面及び片方の側面に使用痕が見られる。

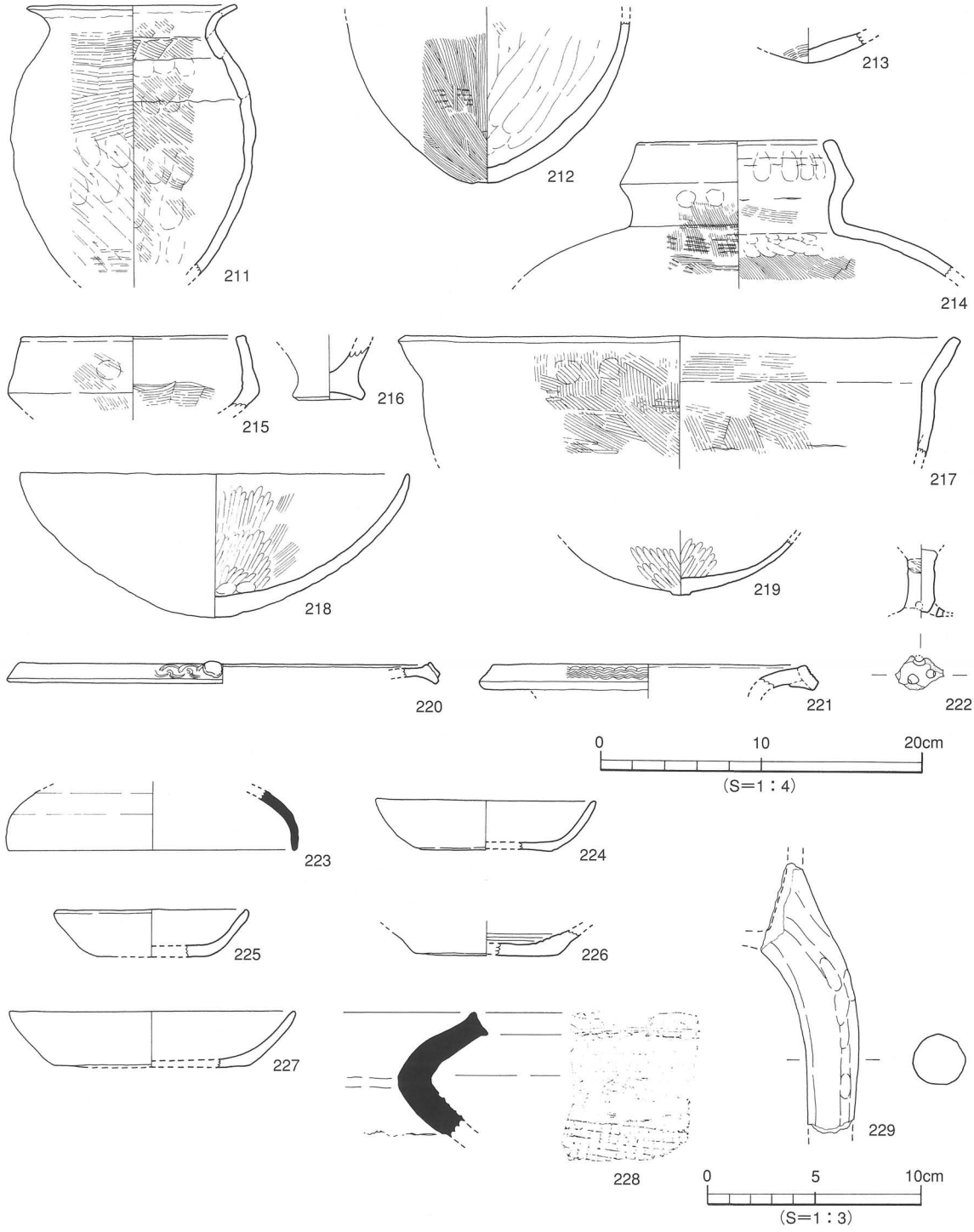
その他の出土遺物（第49図、図版32）

211～213は甕形土器。211は短く外反する口縁部。口縁部外面と胴部内面に接合痕が顕著に残る。212丸味をもって突出気味の不安定な底部。213丸底の底部片。214・215は複合口縁壺。214頸部は直立気味に立ち上がり拡張部は内湾する。口縁部はヨコナデにより丸味をもつ。215接合部は丸味をもち口端面はヨコナデにより凹む。216～219は鉢形土器。216くびれの上げ底の台付鉢。217大型品。弱い稜をもち短く外反する口縁部。218直口口縁。口端部は先細りし底部は突出気味に丸味をおびる。219突出する小さなボタン状の底部。220は高坏の口縁部片。端部を上下に拡張し端面に半截竹管文を2段と円形浮文を貼り付ける。221は器台の口縁部片。口端部は粘土貼り付けにより垂下する。端面に



第48図　SP115出土遺物実測図

櫛描による4条の波状文を施す。222ミニチュアの高坏か？短く細い柱部の下部に径0.9㎝の円孔を3方向に施す。223須恵器の坏蓋。内湾気味に垂下し口縁端部は丸い。224土師器の坏。内湾気味に立ち上がる。口縁端部は先細りで丸い。225土師器の小皿。外傾する口縁端部は丸い。226皿。底部内面に工具痕と思われる輪状の溝が顕著に残る。227土師器の坏。内湾気味に立ち上がる口縁部。228須恵器の甕。外反する口縁端部はナデにより凹む。229三足付土釜の脚部。



第49図　その他の出土遺物実測図

４．小　結

本調査区においては、先土器時代～縄文時代、弥生時代、近現代の遺構と遺物を検出することができた。

（１）先土器時代～縄文時代

遺構：南区ｃトレンチの第Ⅵ層上面では、円形の小ピット1基を検出した。調査は時間的な関係で3×3ｍの範囲に限られたために、ピット1基以外には遺構を検出することができなかった。よって、小ピットの性格を明らかにすることができなかった。小ピットの検出は、ＡＴ火山灰堆積以降でアカホヤ火山灰堆積前に、調査地周辺で生活が営まれていたことを示す資料である。

遺物：第Ⅳ層上面とアカホヤ火山灰（6,300年前）を含む第Ⅲ②層中ではスクレイパー1点と石鏃2点が出土している。この3点はアカホヤ火山灰降下以前の縄文時代早期に調査地周辺地で生業を行っていたことを示す資料である。

（２）弥生時代

本調査区で検出した弥生時代遺構は、円形の大型住居1棟、方形の中型以上の住居1棟、方形の小型住居4棟と溝3条である。特筆されるものは、円形の大型住居ＳＢ203である。ＳＢ203は幅1.0～1.5ｍの周堤帯をもつ直径12ｍの住居である。内部施設には外側に10本、内側に4本の主柱穴、外側の主柱穴から壁に向かう小溝、中央部に副次的構造の炉をもち、非常にめずらしい住居である。特に、炉の構造は興味深い。炉1は楕円形で浅く、炭を検出し、炉2は長方形で深く、炭を検出していない。2つの炉は、異なる形態と様相をしめしているのである。

方形の住居（ＳＢ201）は一部分の検出であるが、2区検出の方形住居の中では最も大きく深い中型以上の住居である。小型の住居は一辺2～4ｍを測り、主柱穴は未検出である。小型住居の内部施設には違いがあり、貼り床をもつもの（ＳＢ205）と周壁に小ピットが並び炉をもつもの（ＳＢ202・204）がある。

住居と溝内出土遺物には、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、支脚形土器などがある。甕形土器には底部にはタタキ痕が残り、口縁端部をナデによって尖らすものがみられ、鉢形土器にはボタン状の底部に大きく外反する口縁部をもつものがある。これらは弥生時代後期末の土器の特徴を示すものである。よって、5棟の住居は弥生時代後期末のものと考えられる。ただし、ＳＢ202と205は隣接しており、同時に建造されていたとは考えられず、2棟は時間差があると考えておく。

（３）その他の遺構

ここでは、柱穴の時期を考える。時期は、埋土と出土遺物から推測すると、ｉ黒色土と暗茶褐色混じりの埋土をもつものは弥生時代後期末、ivの灰白色土を埋土にもつ柱穴は近現代と考えられる。iiiの暗茶褐色土を埋土にもつ柱穴は他の調査区資料と比較検討することで時期が特定できると思われる。

遺構・遺物一覧　－凡例－

（１）以下の表は、本調査区検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
　　遺構一覧は志賀、遺物観察表は高尾・田﨑・中村が作成した。

（２）遺物観察表の各掲載について。
　　法　量　欄　　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）砂・長（1～4）、多→「1～4㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表7　竪穴式住居址 一覧

竪穴(SB)	時期	平面形	規模 長さ(長径)×幅(短径)×深さ(m)	主柱穴(本)	内部施設 高床	土坑	炉	カマド	周壁溝	備考
201	弥生後期末	隅丸方形	(1.10)×(0.75)×0.40				○		○	aトレンチに切られ調査区外に続く。aトレンチ西壁で3.58mを測る。
202	弥生後期末	隅丸長方形	3.90× 2.90 ×0.07				○			小ピット列
203	弥生後期末	円形	12.0×(9.3)×0.40	内4 外10			◎		○	柱穴から周壁溝に向かって小溝 周提帯
204	弥生後期末	隅丸方形	2.50× 2.20×0.16				○			
205	弥生後期末	隅丸長方形	2.90× 2.10×0.15		○		○			

◎副次的炉

表8　溝 一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ（m）	埋土	出土遺物	時期	備考
201	A28～D25	レンズ状	11.74×0.80×0.03	黒褐色土 黒色土	弥生	弥生後期末	
202	B5～D4	レンズ状	13.20×1.20×0.09	黒色土		弥生後期末	NE→SW
203	A9～D4	舟底状	21.50×1.68×0.30	黒褐色土 黒褐色粗砂	弥生	弥生後期末	NE→SW

表9　土坑 一覧

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ（m）	埋土	出土遺物	時期	備考
201	C18	隅丸長方形	逆台形	1.16×0.63×0.32	灰白色土		近現代	
202	C·D18	隅丸長方形	逆台形	1.05×0.82×0.20	灰白色土		近現代	
203	C·D·19	隅丸長方形	逆台形	1.10×0.90×0.27	灰白色土		近現代	
204	C21·22	隅丸長方形	逆台形	1.27×0.78×0.25	灰白色土		近現代	
205	C22	隅丸長方形	逆台形	1.34×0.67×0.31	灰白色土		近現代	SB202を切る
206	C23	隅丸長方形	逆台形	1.24×0.91×0.42	灰白色土		近現代	
207	C23	楕円形	逆台形	1.31×0.80×0.27	灰白色土		近現代	
208	C24	隅丸長方形	逆台形	1.50×0.84×0.24	灰白色土		近現代	
209	C22·23	楕円形	逆台形	1.25×0.87×0.22	灰白色土		近現代	
210	CD7	隅丸長方形	逆台形	1.00×0.94×0.25	灰白色土		近現代	
211	C8	隅丸長方形	逆台形	0.59×0.53×0.20	灰白色土		近現代	

表10　第Ⅳ層上面 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
4	石鏃	完形	赤色チャート	2.3	1.9	0.25	0.9		32
5	石鏃	ほぼ完形	緑色チャート	1.5	1.3	0.15	0.4		32
6	スクレイパー	ほぼ完形	姫島産黒曜石	5.9	2.2	1.10	11.9		32

表11　SB203 出土遺物観察表　土製品

（1）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
7	甕	口径(20.4) 残高 27.4	口縁部は長めでゆるやかに外反。端部は「コ」字状。胴部下半は底部にむかってすぼまる。	㊐㊇上 タタキ→ハケ(14本/2.6cm) ㊇中 タタキ ㊇下 タタキ→ナデ	㊐ハケ(8本/cm) ㊇ハケ→ナデ上げ	暗黄茶色 黄茶色	石・長(1~6) ◎	黒斑	23
8	甕	口径(19.6) 残高 3.1	口縁端部は内面のヨコナデによりやや拡張する。端面はヨコナデにより凹む。	㊐端 ヨコナデ ㊐ハケ(5本/cm)→ヨコナデ	㊐端 ヨコナデ 他は磨滅のため不明	茶色 灰茶色	石・長(1~4) ◎		
9	甕	口径(15.8) 残高 5.5	「く」字口縁。端部は内面のヨコナデによりやや拡張する。端部はヨコナデにより凹む。	㊐端 ヨコナデ ㊐ヨコナデ ㊇ハケ(5本/cm)→ナデ	㊐端 ヨコナデ 他は磨滅のため不明	乳黄茶色 乳灰茶色	石・長(1~3) ◎		
10	甕	残高 4.9	口縁部は、直口ぎみに立ち上がり、端部付近で外反する。端部は丸味をもつ。内面だけに弱い稜をもつ。	㊐端 ナデ ㊐㊇ハケ(8本/cm)	㊐ナデ ㊇ケズリ	乳赤茶色	石・長(1~2) ◎		
11	甕	口径(17.2) 残高 5.0	口縁部は若干反り気味に外反する。端面はナデによりわずかに凹む。内面は明瞭な稜、外面は弱い稜をもつ。	㊐端 ナデ ㊐㊇ハケ(5本/cm)	㊐ハケ(25本/cm) ㊇ハケ(5本/cm)	乳黄茶色	石・長(1~3) ◎		
12	甕	口径(14.4) 残高 6.3	口縁部はゆるやかに外反する。端部は「コ」字状。内面は明瞭な稜、外面は弱い稜をもつ。	㊐端 ヨコナデ ㊐ハケ(5本/cm)→ヨコナデ ㊇タタキ→ハケ	㊐ハケ(5本/cm) ㊇ハケ(8~9本/cm)	暗黄茶色 乳茶色	石・長(1~3) ◎		
13	甕	口径(15.4) 残高 5.9	口縁部は「く」字に外反する。端部は丸味のある「コ」字状。口縁部中位に接合痕が顕著。	㊐端 ナデ ㊐タタキ(3~4本/cm)→ナデ ㊇タタキ	㊐ハケ(8本/cm) ㊇ハケ→ナデ	乳赤茶色	石・長(1~5) ◎		
14	甕	口径(15.0) 残高 5.0	口縁上半部がやや肥厚する。端部は丸味をもつ。内面だけに弱い稜をもつ。	㊐端 ナデ ㊐㊇ハケ(7本/cm)	㊐ハケ(7本/cm)→ナデ ㊇ハケ	乳黄灰色	石・長(1~2) ◎		
15	甕	口径(15.4) 残高 5.0	口縁部は短く屈曲する。端部は丸味をもつ。内外面とも明瞭な稜をもつ。肩部がやや張る。	口縁部のつけ根にハケ(7本/cm) 他は磨滅のため不明	㊐ハケ(15本/cm) ㊇ハケ(7本/cm)	乳灰色 乳黄灰色	石(1) ◎		
16	甕	口径(11.3) 底径 (3.2) 器高 19.9	口縁部はゆるやかに外反。中位で肥厚する。端部は丸味をもつ。内面だけに弱い稜あり。肩部が張る。小さい平底。	㊐ヨコナデ ㊇タタキ(4本/cm)→ナデ ㊎ナデ	㊐ヨコナデ ㊇ナデ	暗灰茶色	石・長(2~3) ◎		23
17	甕	底径 3.8 残高 7.8	突出ぎみの小さめの平底。胴部は丸味をもって立ち上がる。底部周辺に放射状にタタキ痕が顕著に残る。	㊎㊇下 タタキ(8本/cm) ㊇上 タタキ→ハケ(8~9本/cm)	ナデ上げ	黄茶色 乳黄灰色	石・長(1~3) ◎		23
18	甕	底径 (2.0) 残高 7.1	ごく小さな平底。胎土や焼きが良い。	ハケ(10本/cm)	㊇ハケ(10本/cm) ㊎ハケ→ナデ	暗灰茶色 黄茶色	密 ◎	黒斑	
19	壺	口径(36.0) 残高 5.3	複合口縁。 ㊁櫛状工具による横沈線文(4条)縦沈線文(5条)斜沈線文。小片。	施文 (磨滅のため不明)	ナデ	乳黄茶色 灰黄色	石・長(1~3) ◎		24
20	壺	残高 2.2	複合口縁。口縁拡張部が剥落する。擬口縁を看取する。端面に波状文。小片。	㊅接合部ヨコナデ→施文 ㊈ミガキ		黄茶色	石・長(1~3) ◎		24

表11　SB203 出土遺物観察表　土製品

（2）

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
21	壺	口径(16.8) 残高　2.4	複合口縁。 拡張部短く、接合部で剥落する。 櫛状工具による縦沈線文(5条)。	㊍ナデ→施文	指頭痕	乳赤茶色 乳赤黄茶色	石(1~2) ◎		24
22	壺	残高　2.4	口縁端部欠損の為形態がはっきりわからない。口端部垂下し端面には波状文(6条)を施す。	㊐端面ヨコナデ→施文 ㊓ハケ(7本/cm)		黒色	石(1~2) ◎		
23	壺	残高　3.5	複合口縁。 ㊍櫛状工具による小さめの波状文(6条×2段)接合端面はナデにより凹む。	㊍施文 ㊓ハケ(13本/cm)→ナデ	ナデ	赤黄色	石・長・密(1) ◎		24
24	壺	残高　2.4	複合口縁の接合部分付近の破片。 外面ヘラ状工具による斜線充填の三角文。	㊎接合部ヨコナデ→施文 ㊓ナデ	ナデ	黄茶色	石・長(1~2) ◎		24
25	壺	残高　2.7	複合口縁。 拡張部短く、接合部で剥落する。 端部は「コ」字状を呈する。 ㊍無文	ヨコナデ	ヨコナデ	黄茶色	石・長(1~3) ◎		
26	壺	残高　3.2	複合口縁の接合部分付近の破片。 外面は波状文。	㊍施文 ㊓ハケ(9本/cm)→ナデ	ハケ(9本/cm)→ナデ	赤黄色	石・長(1~2) ◎		24
27	壺	口径(10.7) 残高　7.0	複合口縁。 拡張部わずかに内湾する。端面はナデにより上方にやや拡張。	㊍ヨコナデ ㊓ハケ(5本/cm)→ナデ	㊍ヨコナデ ㊓ハケ(5本/cm)→ナデ	黄茶色	石・長(1~3) ◎		
28	壺	口径(12.0) 残高　3.8	複合口縁。 拡張部端部はナデにより丸く仕上げる。拡張部下に横沈線文(3条)。	㊍ハケ(7~8本/cm)→ヨコナデ→施文	ハケ(7~8本/cm)→ナデ	乳黄茶色	石・長(1~2) ◎		24
29	壺	口径(21.6) 残高　6.6	そりぎみに外反する口縁。端部は内外に拡張する。端面、三角形で斜線による充填。その左右に円形貼付浮文あり。	㊐端面施文 ㊓ハケ(7~8本/cm)→ナデ	ハケ(5本/cm)→ナデ	茶色 乳茶色	石・長(1~4) ◎		24
30	壺	口径(14.5) 残高　2.6	口端部は粘土貼付により拡張し、外側下方に垂下する。	㊐ナデ ㊓ハケ(5本/cm)	ハケ(5本/cm)→ミガキ	灰黄色土 乳黄茶色	石・長(1) ◎		
31	壺	口径(13.4) 残高 13.5	短い頸部に外反する口縁部をもつ。 肩部に円形の竹管文(径1.7cm)1ヶ所あり。	ハケ(5本/cm)	㊐ハケ(5本/cm)→ナデ ㊓しぼり痕 ㊋ハケ(5本/cm)→指オサエ	乳黄茶色 黄茶色	石・長(1~5) ◎	黒斑	23
32	壺	口径(15.6) 残高　4.9	頸部は外傾気味に立ち上がり、外反する口縁をもつ。口縁部直下(外面)に接合痕を残す。端部を肥厚する。	㊐ヨコナデ ㊓ハケ(9本/cm)→ヨコナデ	ヨコナデ	黄茶色	石・長(1~4) ◎		
33	壺	口径(15.7) 残高　4.5	弱い稜をもってそり気味に外反する口縁部。口縁部は指押えにより凹む。	㊐端指オサエ ㊐㊋ハケ(8本/cm)	ハケ(8本/cm)	乳灰黄色 乳灰色	石・長(1~2) ◎		
34	壺	残高　8.0	頸部破片。 頸部下端が締り、やや外傾する細長い頸部をもつ。	ハケ(5本/cm)→ミガキ	ハケ(5~6本/cm)	黄茶色 茶色	石・長(1~2) ◎		
35	壺	残高　3.4	直口気味に立ち上る長い頸部をもつ。ヘラ状工具による横波線文。	ミガキ→施文	ナデ	黄茶色	石・長(1~2) ◎		24
36	壺	残高　4.0	直口気味に立ち上がる長い頸部をもつ。ヘラ状工具による横沈線文(12条)。	ミガキ→施文	ハケ(14~15本/cm)	赤黄茶色 黄茶色	石・長(1) ◎		24
37	壺	残高　4.0	直口気味に立ち上がる長い頸部をもつ。ヘラ状工具による横沈線文(12条)。	ミガキ→施文	ナデ	黄茶色 暗黄茶色	石・長(1~4) ◎		24
38	壺	底径　6.4 残高　2.2	丸味のある平底。	㊋ハケ(不明瞭) ㊎磨滅のため不明	㊋ハケ(8本/cm) ㊎磨滅の為不明	赤黄茶色 黄茶色	石・長(1~6) ◎	黒斑	
39	鉢	残高 12.2	大型品。口縁部は反りぎみにゆるやかに外反する。内面だけに弱い稜をもつ。肩部が張る。	㊐ヨコナデ ㊋上ナデ ㊋下タタキ→ハケ(10本/cm)→軽くナデ	㊐磨滅の為不明 ㊋上ケズリ→ナデ ㊋下ケズリ	乳黄茶色 乳灰茶色	石・長(1~3) ◎		

表11　SB203出土遺物観察表　土製品

（3）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
40	鉢	口径(33.0) 残高 3.4	大型品。口縁部は「く」字状に短く外反する。端面はヨコナデによりやや凹む。端面下方は若干突出する。	口端 口上 ヨコナデ 口下 板ナデ(ケズリ風)	口 ハケ(6本/cm) 胴 板ナデ(ケズリ風)	暗赤茶色	石・長(1~2) ◎		
41	鉢	口径(16.0) 底径 1.3 残高 11.1	口縁部は反り気味に大きくラッパ状に開く。端部は「コ」字状。肩部が張る。底部は突出したボタン状。	口 胴上 磨滅 胴下 ミガキ 底 ナデ	口 ミガキ 胴上 ハケ(8本/cm) →ミガキ 胴下 底 ミガキ	灰茶色 暗赤茶色	石・長(1~3) 金 ◎	黒斑	24
42	鉢	残高 5.3	頸部接合部が締り、接合痕が顕著。肩部が張る。薄手。	ハケ(8本/cm) →ミガキ(かなり磨滅)	頸 磨滅のため不明 胴上 ハケ(8本/cm) →ミガキ 胴下 ナデ	暗赤茶色 灰茶色	長(2) 密 ◎		
43	鉢	口径(18.8) 残高 6.4	直口口縁。端部は先細りで丸い。	口 ヨコナデ 胴上 ナデ 胴下 ハケ(8~9本/cm)	ハケ(8~9本/cm) →ミガキ	乳赤茶色	石・長(1~3) ◎		
44	鉢	口径(12.2) 底径 2.3 残高 8.6	直口口縁。口縁部は指おさえによりわずかに外反する。端部は部分的に形状が異なる。小さな平底。	口 指おさえ 胴 底 ナデ	口 指おさえ 胴 ケズリ	乳赤茶色 乳黄灰色	石・長(1~3) ◎	黒斑	24
45	鉢	口径(10.0) 底径 4.0 残高 11.0	深鉢。直口口縁。口縁部はやや内傾し、先細り。平底だが、底部周辺が小さくはね上がる。	口 ハケ(10本/cm) 胴上 ハケ→ナデ 胴下 タタキ(2~3本/cm) →ナデ 底 ナデ	口 ヨコナデ 胴 ナデ上げ 底 指おさえ	乳赤黄色 赤茶色	石・長(1~3) ◎	黒斑	24
46	鉢	口径(10.2) 残高 5.3	直口口縁。端部は丸味をもつ。口縁部内面はヨコナデのため若干凹む。かなり小片。	ハケ(8~9本/cm) →ナデ	口 ヨコナデ 胴 ハケ(8~9本/cm) →ナデ	乳黄茶色	石・長(1~3) ◎		
47	鉢	残高 3.0	直口口縁。端部は丸味のある「コ」字状だが、下方がやや突出する。極めて小片。	口端 ヨコナデ 口 ミガキ	ミガキ	暗赤茶色	石・長(1) 密 ◎		
48	(台付)鉢	底径 7.0 残高 4.7	「ハ」字状の脚台をもつ。端部は丸味あり。指頭痕、粘土接合痕が顕著に残る。	胴上 タタキ(2~3本/cm) →ナデ 胴下 指おさえ→ヨコナデ 脚 指おさえ→ナデ	ナデ	乳灰黄色 乳茶色	石・長(1~5) ◎		
49	高坏	残高 4.0	口縁部は大きく外反する。屈曲部に明瞭な段を有する。小片。	口 ヨコナデ 坏上 ハケ(14本/cm) 坏中 ヨコナデ 坏下 ハケ	ミガキ	乳茶色 暗茶色	石・長(1~3) ◎		
50	高坏	残高 3.3	口縁部は反り気味に外反する。屈曲部に明瞭な稜を有する。小片。	ミガキ	ミガキ	暗茶色 灰茶色	石・長(1~3) ◎	黒斑	
51	高坏	残高 1.6	粘土を貼付し、口縁端部を拡張する。端面に半截竹管文と円形浮文をもつ。	口端 ヨコナデ→施文 口上 ハケ(6~7本/cm) →ヨコナデ 口下 ハケ	口端 ヨコナデ→施文 口 ハケ(6~7本/cm) →ミガキ	茶色 灰茶色	石・長(1~2) ◎	黒斑	25
52	高坏	残高 10.0	坏底部は充塡技法。脚部はゆるやかに広がる。径1.8cmの4方の円孔あり。	脚上 ナデ 脚下 ハケ(9本/cm) →ミガキ	脚上 ヨコナデ 脚下 ナデ上げ	茶色	石・長(1~5) ◎		
53	高坏	残高 6.2	柱部はややふくらみをもつ筒状。裾部で大きく広がる器型と思われる。脚部上半は器壁が厚い。	脚上 ヨコナデ 脚下 ハケ(6本/cm) →ナデ	坏底 不明 脚上 絞り痕 脚下 ナデ	乳赤茶色 乳灰色	石・長(1~2) ◎		
54	高坏	底径(21.0) 残高 2.7	ゆるやかに広がる裾部。端部は丸味のある「コ」字状。	裾 ハケ(10本/cm)→ ミガキ 底端 ヨコナデ	ハケ(10本/cm)→ ヨコナデ	乳灰黄色 灰色	長(1) ◎	黒斑	
55	高坏	底径(24.4) 残高 3.3	ゆるやかに広がる裾部をもつ。端部は「コ」字状で、端面はヨコナデのため凹む。円孔が2ヶ所残る。	裾 ミガキ 底端 ヨコナデ	裾上 ハケ(12本/cm) 裾下 ハケ→ヨコナデ	乳赤茶色 乳黄茶色	石・長(1~2) ◎		
56	器台	残高 1.7	粘土を貼付し口縁端部を拡張する。端部下方は「コ」字状。竹管文を施した円形浮文あり。	磨滅のため不明 (端部下方にわずかにヨコナデ残る)	磨滅のため不明	乳黄茶色	石・長(1~3) ◎		
57	器台	口径(22.0) 残高 10.7	口縁部はラッパ状に広がる。端部に粘土を貼付し、明瞭な「コ」字状。胴部は筒状。	口端 ヨコナデ 口 胴 ハケ(9~10本/cm) →ミガキ	口 ハケ(9~10本/cm) →ミガキ 胴 絞り痕	赤茶色	石・長(1) 密 ◎		
58	器台	底径(24.4) 残高 2.7	幅広い端面をもつ。端部内面と端面は強いヨコナデにより凹む。器壁は極めて厚い。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰茶色 暗灰色	石・長(1~4) ◎		25

表11　SB203 出土遺物観察表　土製品　（4）

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調 (外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
59	支脚	残高　7.7	中空。受部を斜めにカットする。	㊀ナデ ㊁指おさえ→ハケ (10本／cm)	胴上 ハケ(10本／cm) 胴中 絞り痕 胴下 ハケ	灰茶色	石・長(1~4) ◎		
60	支脚	残長　5.4	中実。受部の角状突起の一部。	ナデ (指頭痕顕著)		乳灰黄色	石・長(1~2) ◎		
61	不明	器高　2.2	口縁部は内湾ぎみに立ち上がり、先細りとなる。把手(耳)部分か？極めて小片。	磨滅のため不明	ヨコナデ	赤茶色	石・長(1) ◎	黒斑	25
62	不明	器高　1.8	口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。端部は丸味のある「コ」字状。把手(耳)部分か？極めて小片。	㊀ヨコナデ 他はミガキか？	ヨコナデ	茶色	石・長(1) ◎		25

表12　SB203 出土遺物観察表　石製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
63	石　庖　丁	完　形	結晶片岩	9.8	4.1	0.55	53.4		25
64	石　庖　丁	完　形	結晶片岩	7.6	4.3	0.45	34.2		25
65	石　　錘	完　形	砂岩	3.4	3.0	1.80	25.3		25

表13　SB203 出土遺物観察表　金属製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
66	不　明	完　形	鉄　製	2.3	0.65	0.4	1.3		25

表14　SB203 出土遺物観察表　装身具

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
67	小　玉	完　形	ガラス 青　色	0.35	0.35	0.15	0.05		25

表15　SB201 出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調 (外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
68	甕	口径(15.0) 残高　1.8	口縁部は大きく外反する。中位でやや肥厚し、外面に弱い稜をつくる。端部は丸味のある「コ」字状。	ハケ(10~12本／cm) →ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色	石・長(1~3) 金 ◎		25
69	鉢	口径 11.0 底径　1.7 残高　7.0	直口口縁。端部は先細りになり若干内湾する。丸味のある小さい平底。	タタキ (かなり磨滅)	ハケ(8本/cm)→ナデ	乳茶色	石・長(1~3) ◎		25

SB201 出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調 (外面)/(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
70	甕	口径(18.2) 残高　2.8	口縁下端部は下方にやや突出する。器壁は厚い。	ヨコナデ	ハケ(8本/cm)→ヨコナデ	乳茶色 暗灰茶色	石・長(1~2) ◎		25
71	鉢	残高　3.9	口縁は短く、急角度で外反。端部は丸味のある「コ」字状。内面に粘土接合痕が顕著に残る。	㊐ヨコナデ ㊍上 ハケ(5~6本/cm) →ヨコナデ ㊍下 ハケ	㊐ヨコナデ ㊍ナデ	乳黄色	石・長(1~3) ◎		25
72	甕	底径　(2.3) 残高　2.8	平底。底部周辺に小さな押圧痕が並ぶ。胴部は丸味をもって立ち上がる。鉢の可能性も有。	㊎ナデ ㊍タタキ(3~4本/cm)	ナデ	灰茶色	石・長(1~3) ◎		25

表16　SB202 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調 (外面)/(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
73	甕	口径(15.6) 残高 12.1	口縁部は長めで直口ぎみに立ち上がり、中位付近でゆるやかに外反する。端部は丸味のある「コ」字状。	㊐ ヨコナデ ㊍上 ハケ(13本/cm) ㊍下 ハケ(8本/cm)	㊐ヨコナデ ㊍ハケ(18本/cm)	暗茶色 乳茶色	石・長(1~5) 多 ◎		
74	甕	口径(15.6) 残高　9.8	口縁部は短く外反する。端部は丸味をもつ。内外面とも稜をもたない。肩部が張る。	㊐ ヨコナデ ㊍ ハケ(5~6本/cm)	㊐ハケ(5~6本/cm) →ヨコナデ ㊍ケズリ→ナデ	乳灰茶色 乳茶色	石・長(1~3) ○		
75	甕	口径(18.0) 残高　2.7	口縁部中位で粘土を接合し、外面にごく弱い稜をつくる。端部は肥厚して「コ」字状。	㊐㊎ ヨコナデ ㊐ ハケ(10本/cm) →ヨコナデ	㊐上 ヨコナデ ㊐下 ナデ	茶色 暗茶色	石・長(1~3) ◎		
76	甕	口径(19.0) 残高　2.4	口縁部は外反する。端部は丸味ある「コ」字状だが下方がやや突出する。器壁は薄い。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗茶色 茶色	石・長(1~2) ◎		
77	甕	底径　3.8 残高 16.2	小さめの平底。胴部は細長い。	㊍ 板ナデ(ケズリ風) ㊎ ナデ	ハケ(13本/cm)	暗茶色	石・長(1~5) 多 ◎	黒斑	
78	甕	底径　2.9 残高 13.2	やや丸味のある小さい平底。胴部は細長い。	㊍ ハケ(5本/cm) ㊎ ナデ	㊍上 ハケ(5本/cm) ㊍下 板ナデ ㊎ 指おさえ	暗灰茶色	石・長(1~3) ◎		
79	壺	残高　6.7	複合口縁。 ㊐上 横沈線文7条。 ㊐中 波状文7条、縦沈線文5条。 ㊐下 横沈線文7条。	磨滅のため不明	剥離のため不明	暗茶色	石・長(1~3) 褐色粒 ◎		26
80	壺	底径　1.7 残高 10.1	突出ぎみの小さい平底。胴部は球形に近いがやや肩部が張る。	㊍上 ヨコナデ ㊍下 ハケ(7~8本/cm) →ナデ ㊎ タタキ	ナデ	灰赤茶色	石・長(1~2) ◎		
81	壺	底径　4.3 残高　4.0	平底。胴部がストレートに広がりながら立ち上がる。	ナデ	ケズリ	茶色 黄茶色	石・長(1~4) ◎	黒斑	
82	甕	底径　1.4 残高　3.1	ミニチュア土器と思われる。平底。	ナデ	指おさえ	赤茶色 灰黄色	石・長(1~4) ◎		

表17　SB204 出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調 (外面)/(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
83	甕	残高　3.0	稜をもって外反する口縁部。 端部はヨコナデにより面をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰茶色 乳黄茶色	石・長(1~3) ◎		
84	甕	残高　1.8	外反する口縁部。 端部は尖り気味に丸い。	ナデ	ナデ	黄茶色	石・長(1~2) ◎		

SB204 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
85	甕	底径 (5.4) 残高 3.9	平底。	ハケ(7本/cm)	ナデ	灰茶色 黒色	石・長(1~3) ◎		
86	甕	底径 (2.2) 残高 5.8	平底。底部内面に段をもつ凹みあり。	ハケ(9本/cm)	ハケ(9本/cm)→ナデ上げ	乳茶色 黒色	石・長(1~4) ◎	黒斑	26
87	甕	底径 (2.4) 残高 4.5	平底。胴部の叩き痕。顕著に残る。	平行タタキ(2本/cm)	板ナデ	暗黄茶色	石・長(1) ◎		26
88	甕	残高 6.2	丸味をおびる底部。	平行タタキ(2本/cm)→ナデ	ハケ(15~16本/cm)→ヨコナデ	灰赤茶色	石・長(1~2) ◎		26
89	甕	残高 6.4	突出気味の丸味をおびる底部。	平行タタキ(3本/cm)	ハケ(5本/cm)	暗灰茶色 灰黄色	石・長(1~3) ◎		26
90	壺	残高 2.3	複合口縁。口縁拡張部の破片。 波状紋（4条） 沈線紋（2条）	ヨコナデ→施文	ヨコナデ	乳黄茶色 乳灰茶色	石・長(1~2) ◎		
91	鉢	残高 1.8	口縁下に粘土を貼付て肥厚さす。 端部は「コ」字状を呈する。	(口端)ヨコナデ (口)ハケ(8本/cm)	ヨコナデ	暗灰茶色	石・長(1) ◎		
92	鉢	残高 4.0	大型品、外反する口縁部。端面はナデにより凹む。器壁が厚い。	(口端)ヨコナデ (口)ハケ(7~8本/cm)→ナデ	ハケ(7~8本/cm)	乳茶色	石・長(1~3) ◎	黒斑	
93	鉢	口径(19.0) 残高 2.3	ゆるやかに外反する口縁部。 端部は面をもつ。	(口端)ヨコナデ (口)ハケ(9~10本/cm)→ヨコナデ	(口端)ヨコナデ (口)ハケ(9~10本/cm)→ナデ	乳灰黄色土 乳灰黄茶色	石・長(1~3) ◎		
94	鉢	口径(19.0) 残高 4.6	弱い稜をもって外反する口縁部。 端部は、ヨコナデにより凹む。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ(6~7本/cm)→ナデ	(口)ヨコナデ (胴)ナデ上げ	乳茶色	石・長(1) ◎		
95	鉢	口径 9.7 器高 9.8 底径 1.8	直口する口縁部、端部は先細り、丸みをもつ。底部にも叩き痕を残し不安定である。全体的に叩き痕顕著。	(口)タタキ(3本/cm)→ハケ(9~10本/cm) (胴)(底)タタキ	ケズリ→ナデ	暗灰黄色 暗灰黄茶色	石・長(1) ◎		26
96	鉢	口径 9.6 残高 3.5	ゆるやかに丸味をもって立ち上がる。 口縁部、端部は丸く仕上げる。内面に粘土接合痕が顕著にみられる。	ナデ	(口)ナデ (胴)ハケ(7本/cm)→ナデ	灰黄色	石・長(1~3) 金 ◎		26
97	鉢	口径 0.8 残高 1.6	突出ぎみの小さな丸底。	ナデ	ハケ(24~25本/cm)→ナデ	暗灰茶色 灰黄茶色	石・長(1~3) ◎		
98	支脚	口径 8.8 残高 12.8	中空。受部は、角状の突起をもつ。	平行タタキ(3~4本/cm)→ナデ	ナデ	灰黄茶色	石・長(1~2) ◎		26

表18　SB205 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
99	甕	口径 14.0 底径 3.2 器高 25.3	口縁部は「く」字状。端部は丸味をもつ。胴部は張りが少なく、細長い。小さな平底。胴部の器壁は薄い。	(口)ヨコナデ (胴上)タタキ(4本/2cm) (胴下)タタキ→ハケ(4本/2cm) (底)ナデ	(口)ハケ(13本/cm) (胴)ケズリ→ハケ(7本/cm) (底)ナデ	赤茶色	石・長(1~3) ◎		27
100	鉢	口径 13.0 底径 (2.3) 残高 23.4	口縁部はやや反り気味に外反。端部は下方が若干突出する。胴部は中位でやや張る。底部は小さな平底になると思われる。	(口)ハケ(7本/cm)→ヨコナデ (胴)タタキ(2本/cm)→ハケ	(口)ハケ(7本/cm)→ヨコナデ (胴)ケズリ→ハケ	赤茶色	石・長(1~2) ◎	黒斑	27
101	甕	口径 14.2 底径 2.6 器高 20.4	口縁端部がやや肥厚。端面はナデにより若干凹む。胴部上位でやや張る。小さい平底。	(口端)ナデ (口)(頸上)ハケ(14~15本/cm) (胴下)タタキ→ハケ(6~7本/cm) (底)ナデ	(口)ハケ(14~15本/cm) (胴)ハケ(6~7本/cm)→ナデ (底)ハケ(6~7本/cm)	乳茶褐色	石・長(1~5) ◎	黒斑	27

SB205 出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
102	甕	口径 10.8 底径 2.3 器高 19.9	口縁部は短く直口ぎみ。端部は丸味をもつ。内面だけに弱い稜をもつ。胴部は底部に向かってすぼまる。	㊐ヨコナデ ㊒ハケ(7~8本/cm) ㊓ナデ	㊐ハケ(13本/cm) ㊒上 ハケ(7~8本/cm) ㊒下 ハケ→ナデ上げ	灰茶色	石・長(1~3) ◎		27
103	甕	口径(14.0) 残高 3.1	口縁端部でやや肥厚する。端面はナデにより凹む。内面だけに明瞭な稜をもつ。	㊐端 ナデ ㊐ハケ(10本/cm)→ナデ	㊐ハケ(10本/cm) ㊒ナデ	赤茶色 灰茶色	石・長(1~4) ◎		
104	鉢	口径 17.1 底径 (3.5) 器高 8.7	直口口縁。端部は丸味ある「コ」字状。体部は丸味をもつ。底部は粘土を貼付し突出ぎみに平底になす。	磨滅のため不明	ハケ(6本/cm)	乳茶黄色 乳赤茶色	石・長(1~3) ◎	黒斑	27

表19　SB205 出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
105	鏃	茎一部を欠く	鉄製	1.9	1.0	0.18	0.7		27

表20　SD203 出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
106	甕	口径(18.8) 残高 8.8	口縁部は短く、直立気味に立ち上がる。端部は「コ」字状。胴部の張りは少ない。器壁が厚い。	㊐ハケ(8~9本/cm)→ナデ ㊒タタキ(6~7本/cm)→ナデ	㊐ハケ(8~9本/cm) ㊒ハケ→ナデ	乳茶色	石・長(1~3) ◎		28
107	甕	口径(16.0) 残高 8.9	口縁部は大きく外反する。端部は強いヨコナデにより上方にやや拡張する。胴部は張りをもつ。	㊐ヨコナデ ㊒磨滅のため不明	㊐ヨコナデ ㊒ナデ	乳茶色	石・長(1~3) ◎		28
108	甕	口径(16.3) 残高 9.9	口縁部はやや反り気味にゆるやかに外反する。端部は「コ」字状。胴部の張りは少ない。	㊐端 ヨコナデ ㊐㊒板ナデ	㊐端㊐ヨコナデ ㊒板ナデ	灰茶色	石・長(1~3) 金 ◎		28
109	甕	口径(17.9) 残高 9.0	口縁部はゆるやかに外反する。端面は細く、下方がやや突出する。胴部の張りは少ない。	㊐端 ヨコナデ ㊐ハケ(5~6本/cm)→ヨコナデ ㊒タタキ→ハケ→ナデ	ハケ(5~6本/cm)→ナデ	乳茶色	石・長(1~3) 金 ◎		28
110	甕	口径(18.3) 残高 7.3	口縁部はゆるやかに外反。端部は「コ」字状。内面だけに明瞭な稜をもつ。胴部の張りは少ない。	㊐端 ナデ ㊐㊒ハケ(6~7本/cm)→ナデ	ハケ(7~8本/cm)	灰黄色	石・長(1~3) ◎		
111	甕	口径(14.0) 残高 7.5	口縁部下半がやや肥厚する。端部は先細りで丸味あり。胴部は張りをもつ。粘土接合痕が顕著。	㊐ヨコナデ ㊒ナデ	㊐ヨコナデ ㊒ナデ	灰黄色	石・長(1~4) 多 ◎		28
112	甕	口径(14.0) 残高 6.2	口縁部下半がやや肥厚する。端部は先細りで丸味あり。内外面とも弱い稜をもつ。胴部は張りをもつ。	㊐ヨコナデ ㊒ハケ(8~9本/cm)	㊐ヨコナデ ㊒ハケ(8~9本/cm)→ナデ	灰黄色	石・長(1~3) ◎		28
113	甕	口径(17.2) 残高 2.8	口縁部はやや反り気味に大きく外反する。端部は先細り。内面だけに明瞭な稜をもつ。	磨滅のため不明	㊐磨滅のため不明 ㊒ナデ(ケズリ風)	灰茶色 茶色	石・長(1~5) ◎		
114	甕	口径(16.0) 残高 2.0	口縁部は短く、急角度で外反する。端部はヨコナデにより上方にやや拡張する。内外面とも稜をもたない。	ヨコナデ	㊐ヨコナデ ㊒ナデ	乳茶色	石・長(1~2) ◎		
115	甕	口径(12.0) 残高 3.1	「く」字口縁。端部は先細り。口縁部中位に粘土接合痕あり。内外面とも弱い稜をもつ。	ハケ(8本/cm)→ヨコナデ	㊐ヨコナデ ㊒ナデ	乳茶色	石・長(1~3) ◎		
116	甕	口径(11.5) 残高 3.7	「く」字口縁。端部は丸味をもつ。外内面とも明瞭な稜をもつ。	ヨコナデ	㊐ヨコナデ ㊒ハケ(11~12本/cm)	乳茶色	石・長(1~3) ◎		

SD203 出土遺物観察表　土製品

（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
117	甕	口径(12.0) 残高 2.7	口縁端部はヨコナデにより上下にやや突出する。外面だけに弱い稜をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰茶色	石・長(1) ◎	黒斑	
118	甕	口径(14.0) 残高 7.8	口縁端部は強いヨコナデにより、上方が拡張する。内外面とも弱い稜をもつ。胴部は張りをもつ。	㊐ヨコナデ ㊒ハケ(15～16本/cm) →ナデ	㊐ヨコナデ ㊒ハケ(15～16本/cm) →ナデ	乳灰黄色	石・長(1～3) ◎		28
119	甕	口径(14.6) 残高 1.8	口縁端部は、ヨコナデにより上方に拡張する。	ハケ(15～16本/cm) →ヨコナデ	ヨコナデ	乳灰茶色	石・長(1～3) ◎		28
120	甕	口径(15.2) 残高 3.9	口縁部は反りぎみに大きく外反する。端部は「コ」字状だが、上方にやや突出する。内外面とも弱い稜をもつ。	㊐ヨコナデ ㊒ハケ(6本/cm)→ ヨコナデ	㊐ハケ(6本/cm) ㊒ハケ→ナデ	茶色	石・長(1～3) ◎		
121	甕	口径(12.0) 残高 4.7	口縁部は短く外反する。端部はヨコナデにより上方にやや拡張する。内側だけに弱い稜をもつ。胴部の張りは少ない。	㊐㊒上ヨコナデ ㊒下ハケ(10本/cm) →ナデ	㊐ヨコナデ ㊒ハケ(8本/cm)	乳黄茶色 乳灰茶色	石・長(1～2) ◎		28
122	甕	口径(11.0) 残高 5.0	口縁部は直口ぎみ。端部は丸味をもつ。胴部の張りは少ない。肩部に粘土接合痕あり。	㊐ナデ ㊒タタキ(3本/2cm)	板ナデ	赤茶色 暗赤茶色	石・長(1～2) ◎		
123	甕	口径(13.0) 残高 3.0	口縁部は直口ぎみに開く。端部は「コ」字状。	㊐口端ヨコナデ ㊐ハケ(10本/cm)→ ヨコナデ	ハケ(10本/cm)→ナデ	茶色	石・長(1) 少 ◎		
124	甕	残高 5.5	ほぼ丸底。胴部は丸味をもって立ち上がる。底部は厚い。	タタキ(2本/cm)	ハケ(3本/cm)	乳灰黄色	石・長(4～5) 金・多 ◎		28
125	甕	残高 3.8	ほぼ丸底だが若干底部が突出ぎみ。	タタキ(2～3本/cm)	板ナデ	乳灰茶色	石・長(1～3) ◎	黒斑	28
126	甕	底径 3.0 残高 3.2	丸底に近いが若干平坦な面をもつ。器壁は厚い。	タタキ(3本/cm)	ハケ(7～8本/cm)→ ナデ	暗茶色	石・長(2～4) 金 ◎	黒斑	28
127	甕	底径 4.9 残高 12.3	平底。細長い胴部をもつ。	㊒ハケ(15本/cm) ㊓ナデ	㊒ハケ(2種類) (15本/cm)(10本/cm) ㊓ハケ→ナデ	暗灰茶色 乳灰茶色	石・長(1～3) ◎		
128	甕	底径 (3.8) 残高 9.5	丸味のある不安定な平底。	㊒タタキ(2～3本/cm) →ハケ(11～12本/cm) ㊓ナデ	ハケ(11～12本/cm) →ナデ上げ	灰茶色	石・長(1～5) 多 ◎	黒斑	28
129	甕	底径 3.8 残高 11.8	丸味のある不安定な平底。	㊒タタキ(2～3本/cm) →ハケ(11～12本/cm) ㊓ナデ	ハケ(11～12本/cm) →ナデ上げ	灰茶色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
130	甕	底径 2.4 残高 4.8	小さな平底。底内部に指頭痕が顕著に残る。	㊒タタキ(2～3本/cm) →ハケ(10本/2.5cm) ㊓タタキ	ナデ(指おさえ)	乳茶色 乳灰黄色	石・長(1～4) ◎	黒斑	28
131	甕	底径 (3.0) 残高 5.7	小さな平底。底部を中心にタタキ痕が放射状に顕著に残る。器壁が厚い。	㊒タタキ (7～9本/5cm) ㊓ナデ	ハケ(10本/cm)→ナデ	乳灰黄色	石・長(1～3) ◎		28
132	甕	底径 3.5 残高 6.4	平底。器壁が厚い。	㊒上ハケ(9～10本/cm) ㊒下タタキ(4本/2cm) ㊓ナデ	ハケ(9～10本/cm) →ナデ	灰黄色	石・長(2～4) ◎		
133	甕	底径 2.3 残高 6.9	丸味のある小さな平底。	㊒タタキ(9本/5cm) →ハケ(12本/cm) ㊓ナデ	㊒ハケ(12本/cm)→ ナデ ㊓ナデ(指おさえ)	乳灰黄色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
134	甕	底径 2.6 残高 8.3	小さな平底。	磨滅のため不明	板ナデ	暗赤茶色 黒色	石・長(1～3) 多 ◎		28
135	甕	底径 (3.2) 残高 4.0	小さめの平底。胴部はほぼストレートに広がる。	㊓ナデ ㊒ハケ(8本/cm)	ハケ(8本/cm)→ナデ	茶色 黒色	石・長(1～5) ◎		

SD203 出土遺物観察表　土製品

（3）

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
136	甕	底径（5.5） 残高　5.8	平底・底部周辺が小さくはね上がる。胴部はやや直立気味に立ち上がり、ストレートに広がる。底部に葉脈圧痕あり。	㊥タタキ(10～11本/5cm) ㊦葉脈圧痕あり	ハケ(12本/2.5cm)→ナデ	乳灰黄色 黒色	石･長(1～5) 金 ◎	黒斑	
137	甕	残高　4.3	丸味のある尖底。	タタキ(2～3本/cm)	ナデ	乳灰茶色	石･長(1～3) 金 ◎	黒斑	28
138	壺	口径(18.6) 残高　8.6	複合口縁。 ㊧櫛状工具による波状文(6条)横沈線文(9条)波状文(3条)。	㊧ヨコナデ→施文 ㊨ハケ(4本/cm)→ナデ	㊧ハケ→ヨコナデ ㊨ヨコナデ	暗灰茶色	石･長(1～3) ◎		29
139	壺	口径(22.4) 残高　6.6	複合口縁。拡張部わずかに内湾する。端部は上方にわずかにつまむ。	㊧磨滅のため不明 ㊨ハケ(10～12本/cm)→ナデ	㊧ナデ ㊨ハケ(7～9本/cm)	赤茶色	砂･石･長･金(1～3) ◎		
140	壺	残高　3.0	複合口縁。 口縁拡張部が欠損する。	ヨコナデ	㊧ヨコナデ ㊨ナデ	灰茶色	石･長(1) 多 ◎		
141	壺	口径(21.6) 残高　5.8	複合口縁。拡張部外面櫛状工具による横沈線文(14条)縦沈線文(7条×2)波状文(2条)端部上方に拡張。	ヨコナデ→施文	㊧上ヨコナデ ㊧下ハケ(4本/cm)→ナデ	灰茶色	石･長(1～2) 多 ◎		29
142	壺	口径(24.4) 残高　1.9	複合口縁。拡張部が剥落する。擬口縁を看取する。接合部垂下し外面に波状文(4条)。	㊧ヨコナデ→施文 ㊦上ヨコナデ ㊦下ハケ(10本/cm)	磨滅のため不明	乳灰茶色 乳茶色	石･長(1～2) ◎		
143	壺	口径(17.2) 残高　7.8	複合口縁。拡張部が内湾する。頸部は貼付凸帯に櫛状工具による斜格子文を施す。	ハケ(10本/cm)→ナデ	㊧ヨコナデ ㊦上ハケ(5本/cm)→ナデ ㊦下ナデ	灰黄色	石･長(1～4) 砂･多 ◎		29
144	壺	口径(13.0) 残高　4.7	複合口縁。口縁接合部は肥厚する。端部上方につまむ。	㊧ハケ(8本/cm)→ナデ ㊨ハケ→ナデ	㊧㊨ハケ(6本/cm)→ナデ	乳黄色	石･長(1～2) 金 ◎	黒斑	
145	壺	口径(13.7) 残高　5.6	複合口縁。頸部に貼付凸帯と櫛状工具による斜格子文を施す。	ナデ→施文	㊧ナデ ㊦上ナデ ㊦下ハケ(7~8本/cm)→ナデ	乳茶色	石･長(1～3) ◎		
146	壺	口径(15.5) 残高　4.6	複合口縁。拡張部わずかに外反し幅広の波状文を施す。	㊧ナデ→施文 ㊨ナデ	㊐端ナデ ㊧不明 ㊨ナデ	灰黄色 灰茶色	石･長(1～3) ◎		
147	壺	口径（8.7） 残高　6.0	複合口縁。拡張部肥厚し、端部は上下に拡張する。	㊧ハケ(9~10本/cm)→ナデ ㊨㊩ハケ(9本/cm)→ヨコナデ	㊧ヨコナデ ㊨ハケ(?)→ヨコナデ ㊩ハケ→ヨコナデ	乳茶色	石･長(1～5) ◎		29
148	壺	口径(12.7) 残高　4.8	複合口縁。拡張部中心部分の内外面共に稜がみられる。	㊧ヨコナデ ㊨ハケ(7本/cm)→ナデ	ハケ(7本/cm)	乳黄色	石･粒(1～3) ◎		
149	壺	口径(20.0) 残高　0.9	口縁端部を下方にわずかに拡張する。端面に板状工具で押圧による斜格子文。	㊐端施文 ㊐ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	乳茶色 黒色	石･長(1) ◎	黒斑	
150	壺	口径(18.2) 残高　5.8	口縁端部は粘土を貼り付け、下外方に垂下する。端面に波状文(6条)頸部貼付凸帯斜刻目文。	㊐端ヨコナデ→施文 ㊐ナデ ㊨ハケ(8本/8㎜)→ナデ	磨滅のため不明	乳茶色	石･長(1～5) ◎		29
151	壺	口径(18.2) 残高　6.1	外反する口縁部をもつ。口縁部外面に接合痕を残す。	㊐端ヨコナデ ㊐ハケ(5本/cm)	ハケ(5本/cm)→ナデ	乳茶色 乳灰茶色	石･長(1～3) ◎		
152	壺	口径(14.0) 残高　5.0	わずかに外反する口縁部をもつ。端部は「コ」字状を呈する。	㊐端ナデ ㊐ハケ(6～8本/cm)	ハケ(6～10本/cm)→ナデ	茶色 灰茶色	石･長(1～3) ◎		
153	壺	口径(11.1) 残高　5.5	口縁部わずかに内湾。口縁端面はナデによる凹みをもつ。肩部内面接合痕が顕著。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊩ハケ(12本/cm)→ナデ	㊐ハケ(10本/cm)→ヨコナデ ㊩ハケ→ナデ	乳黄色	石･長(1～2) 金 ◎	黒斑	29
154	壺	口径(10.3) 残高　5.0	口縁部わずかに内湾。口縁端面はナデによる凹みをもつ。	ハケ(12本/cm)→ヨコナデ	㊐ハケ(10本/cm)→ヨコナデ ㊩ナデ	乳黄色	石･長(1～2) ◎		

SD203 出土遺物観察表　土製品

（4）

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
155	壺	口径(11.4) 残高　4.1	直立気味に立ち上がる頸部にわずかに外反する口縁部をもつ。端部は「コ」字状を呈する。	ナデ	㊐ハケ→ナデ ㊍ハケ(11～12本/cm)	乳灰茶色	長(1) ◎		
156	壺	口径(21.1) 残高　5.6	二重口縁。大きく外反する拡張部外面に山形文。接合部に円形貼付浮文。端部ナデにより丸い。	㊐端 ヨコナデ ㊎ヨコナデ→施文 ㊍ナデ	㊎ヨコナデ→ミガキ ㊍ヨコナデ	乳茶色 黒色	石・長(1～3) 金 ◎		29
157	壺	底径　(6.6) 残高　8.4	丸味のある平底。胴部は丸味をもち、大きく広がりながら立ち上がる。器壁は厚い。	㊌ハケ(4～5本/cm) ㊋タタキ(2本/cm) →ハケ	ハケ(4～5本/cm)	茶色 灰黄色	石・長(1～3) ◎	黒斑	29
158	壺	底径　(3.5) 残高　4.6	丸底に近いがやや平坦な面をもつ。胴部は丸味をもって立ち上がる。底部は厚い。	㊌タタキ ㊋上 タタキ→ハケ(9本/cm) ㊋下 タタキ(12本/5cm)	㊍ハケ(9本/cm)→ナデ ㊌ナデ	灰茶色 灰色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
159	壺	底径　(5.8) 残高　3.1	底部は丸味のある不安定な平底。胴部は大きく広がりながら立ち上がる。器壁は厚い。	㊌ナデ ㊋ハケ(7～8本/cm) →ナデ	ハケ(10～11本/cm) →板ナデ	乳灰茶色 乳茶色	石・長(1～2) 金 ◎		
160	壺	底径　(6.8) 残高　3.3	突出した平底。	磨滅のため不明	ハケ(20本/cm) (板ナデ風)	乳茶色 灰黄色	石・長(1～3) ◎	黒斑	29
161	壺	底径　(5.0) 残高　3.9	高台状に大きく突出した平底。胴部は丸味をもって立ち上がる。	ナデ	ハケ(5本/cm)	灰茶色 黒灰色	長(2～3) 金 ◎	黒斑	
162	壺	底径　(4.8) 残高　5.0	高台状に大きく突出した平底。底部に葉脈圧痕あり。	㊌葉脈圧痕あり ㊋ハケ(13～14本/cm) →ナデ	ハケ(13～14本/cm) →ナデ	黒色	長(2～3) ○		29
163	鉢	口径　(32.0) 残高　6.3	大型品。口縁部は反りぎみにゆるやかに外反する。端部は内面のヨコナデにより上方にやや拡張する。	㊐端 ヨコナデ ㊐上 ハケ(5～6本/cm) →ヨコナデ ㊐下 ハケ(5～6本/cm) ㊋ハケ(8～9本/cm)→ナデ	㊐上ハケ(8～9本/cm) →ヨコナデ ㊐下㊋ハケ(8～9本/cm) →ナデ	乳茶色 乳灰黄色	石・長(1～3) 少 ◎		
164	鉢	口径(25.4) 残高　9.9	口縁部は短く外反する。端部下方がやや突出する。内面だけに弱い稜あり。	㊐ヨコナデ ㊋ハケ(7本/cm)	㊐ヨコナデ ㊋ハケ(7本/cm)→ミガキ	乳茶色	石・長(1～4) ◎		
165	鉢	口径(24.0) 残高　7.3	口縁部はゆるやかに外反する。端部は「コ」字状を呈する。内面だけに弱い稜をもつ。胴部に丸味あり。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	灰茶色 灰黄色	石・長(1～2) 多 ◎		
166	鉢	口径(20.8) 残高　3.5	口縁部は大きく外反する。端部は丸味をもつ。内面だけに弱い稜あり。	ヨコナデ	ミガキ	乳茶色	石・長(1) 少 ◎		
167	鉢	口径(20.5) 残高　2.3	口縁部は大きくストレートに外傾する。端部は丸味をもつ。内外面とも明瞭な稜あり。器壁は薄い。	ヨコナデ	ハケ(9～10本/cm) →ヨコナデ	乳灰茶色	石・長(1) 少 ◎	黒斑	
168	鉢	口径(18.4) 残高　3.0	口縁部は外反する。端部は下方がやや突出する。内外面とも明瞭な稜をもつ。器壁は薄い。	㊐ヨコナデ ㊋ハケ(14～15本/cm) →ヨコナデ→ミガキ	㊐ヨコナデ→ミガキ ㊋ハケ(14～15本/cm)	赤茶色	砂粒 少 ◎		
169	鉢	口径(19.0) 残高　5.5	口縁部は短めでやや外反する。端部は「コ」字状。内面だけにごく弱い稜をもつ。	㊐端 ヨコナデ ㊐㊋ハケ(4～5本/cm) →ナデ	㊐ハケ(15～16本/cm) ㊋磨滅のため不明	乳茶色 乳灰黄色	石・長(1～3) 多 ◎		
170	鉢	口径(19.0) 残高　6.0	直口口縁。端部は先細りになり丸味をもつ。	ハケ(14～15本/cm) →ナデ	ハケ(14～15本/cm) (磨滅が激しい)	乳茶色 乳灰黄色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
171	鉢	口径(18.0) 残高　3.7	直口口縁。端部は「コ」字状を呈し、わずかに内湾する。外面に焼成時のひび割れが多数残る。	㊐ヨコナデ ㊋ナデ	㊐ヨコナデ ㊋ハケ(7～8本/cm) →ナデ	暗赤茶色	石・長(1～2) ◎		
172	鉢	口径(16.6) 残高　4.3	直口口縁。 端部は丸味をもつ。	㊐端 ヨコナデ ㊐㊋ナデ	ハケ(7～8本/cm)→ ナデ上げ	灰黄色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
173	鉢	口径(13.1) 残高　3.7	口縁部はゆるやかに外反し、端部はやや肥厚ぎみ。端面はヨコナデにより凹む。内面だけに弱い稜をもつ。	㊐端 ヨコナデ ㊐㊋ハケ(5～6本/cm) →ナデ	㊐ハケ(5～6本/cm) ㊋ヘラナデか？ (工具痕あり)	乳茶色 茶色	石・長(1) 少 ◎		

SD203 出土遺物観察表　土製品

（5）

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
174	鉢	残高　3.5	口縁端部がやや外反し、先細りになる。内面に弱い稜をもつ。口縁部外面は、強めのヨコナデにより凹む。	㊐ヨコナデ ㊋ナデ	㊐ヨコナデ ㊋ナデ	灰赤茶色 灰色	石・長(1) ◎		
175	鉢	残高　4.2	口縁部は短くやや外反。端部は先細りになる。内面だけに弱い稜をもつ。極めて小片。	㊐ナデ ㊋タタキ(2～3本/cm)→ナデ	ナデ	乳灰色 乳茶色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
176	鉢	残高　2.7	口縁部は、やや外反する。端部は先細りになり、端面はごく小さい。内外面とも稜をもたない。極めて小片。	㊐ヨコナデ ㊋ハケ(6本/cm)→ナデ	㊐ヨコナデ ㊋ナデ	乳灰茶色	石・長(1) ◎		
177	鉢	残高　2.2	直口口縁。端部は丸みをもつ。極めて小片。	ナデ	ハケ(13～14本/cm)→ナデ	乳灰色	石・長(1) ◎		
178	鉢	底径　6.1 残高　2.9	若干突出ぎみの丸味のある平底。胴部は大きく広がりながら立ち上がる。	㊋ナデ ㊎ケズリ	ハケ(15～16本/cm)→ミガキ	乳茶色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
179	鉢	底径　3.6 残高　3.8	突出した平底。底部周辺は小さくはね上がる。器壁はかなり薄い。	㊎ハケ→ナデ ㊋ハケ(9～10本/cm)	㊎指おさえ ㊊磨滅のため不明	赤茶色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
180	鉢	底径　2.0 残高　2.6	手捏ね土器と思われる。 ボタン状に突出した平底。胴部外面は、指頭痕のため凹凸が激しい。	㊎ナデ ㊋指おさえ	指おさえ→ナデ	灰黄色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
181	鉢	底径　2.0 残高　2.4	ボタン状に突出した丸味のある平底。胴部下半は底部に向かってすぼまる。	㊎ナデ ㊋磨滅のため調整不明	板ナデ	灰茶色 乳茶色	石・長(2～4) ◎	黒斑	
182	(台付)鉢	底径　7.8 残高　2.1	大きく広がる「ハ」字状の脚台をもつ。裾部は先細りになり、端部は丸味をもつ。	ナデ	ナデ(指頭痕顕著)	灰黄茶色 黒色	石・長(1～3) 多 ◎	黒斑	
183	(台付)鉢	底径　4.2 残高　2.2	「ハ」字状の脚台をもつ。	磨滅のため不明	ナデ	赤黄茶色	石・長(1～4) 多 ◎		
184	(台付)鉢	残高　3.6	「ハ」字状の脚台をもつ。	磨滅のため不明	ナデ	乳茶色	石・長(1～3) 多 ◎		
185	高坏	残高 10.2	坏底部の充填部が剥離する。脚部は大きく広がる。径1.3㎝の円孔が2段残る。(下段は、貫通していない。)	㊋ハケ(4本/cm)→ミガキ ㊍ハケ(6本/cm)	絞り痕	乳灰茶色	石・長(1～3) ◎		30
186	高坏	残高　9.9	坏底部の充填部が剥離する。脚部はゆるやかに広がる。	㊋上 ハケ(12本/cm)→ヨコナデ ㊋下 ハケ(12本/cm)	絞り痕	乳赤茶色 乳灰茶色	石・長(1～2) ◎		
187	高坏	残高　5.9	坏部が接合面で剥離。脚部は大きく広がる。4方と思われる径1.0㎝の円孔が残る。	ナデ	㊋上 ナデ ㊋下 ハケ(8～9本/cm)	乳茶色	石・長(1～3) 多 ◎		
188	高坏	残高 10.8	坏部は中位に稜をもつ。脚柱部は若干ふくらみをもつ円筒形。裾部は大きくひろがり4方に円孔が残る。	㊍磨滅のため不明 ㊋ミガキ	㊍磨滅のため不明 ㊋上 絞り痕 ㊋下 ナデ	乳茶色	石・長(1) ◎		30
189	高坏	残高 10.2	坏底部の充填部が剥離する。脚部はゆるやかに広がる。3方と思われる径1.5㎝の円孔が2段残る。	ミガキ	磨滅のため不明 (わずかに絞り痕)	赤茶色 乳黄色	石・長(1～2) ◎		
190	高坏	残高　6.4	坏底部充填法。脚部はゆるやかに広がる。径1.8㎝の円孔が2段残る。(上段は4方、下段は不明)	ミガキ	㊍底 ヘラミガキ ㊋ケズリ	赤茶色	石・長(1～2) ◎		
191	高坏	底径(21.0) 残高　1.9	大きく広がる裾部をもつ。端部内面はやや凹む。	剥離のため不明	剥離のため不明	赤茶色	石・長(1) 多 ◎		
192	器台	残高 23.2	大型品。筒状の厚手の柱部から裾部がゆるやかに広がる。4方に径2.2㎝の円孔が4段残る。	ハケ(7本/cm)→ミガキ	㊋上 ハケ(7本/cm)→ナデ ㊋下 ハケ(3～4本/cm)	暗赤茶色	石・長(1) 密 ◎		30

SD203 出土遺物観察表　土製品

（6）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
193	支脚	口径 (6.0) 残高 3.7	中空。上面全体を斜めにカットする。器壁は厚い。	ナデ	ナデ	乳茶色	石・長(1~3) ◎		
194	支脚	口径 9.4 底径 8.3 器高 5.3	中実。上下面に凹みをもつ。受部を斜めにカットする。舌状の突起が欠損する。	指おさえ ナデ (指頭痕顕著)	指おさえ ナデ (指頭痕顕著)	乳灰赤茶色	石・長(1~4) ◎		30
195	支脚	口径 5.5 底径 11.0 器高 12.6	中空。口縁部は折り曲げて垂下させ、端部にヘラ状工具により大きな刻みを施す。	ナデ (指頭痕顕著)	㊐ナデ ㊒絞り痕 ㊓ナデ(指頭痕顕著)	灰黄茶色 黒色	石・長(1~3) ◎	黒斑	30
196	支脚	口径 (8.2) 残高 11.5	中空。口縁部は直口。裾部に向かってゆるやかに広がる。受部を斜めにカットする。	㊐ナデ ㊒ハケ(7本/cm)	ナデ	茶内 灰色	石・長(1~2) ◎		30
197	支脚	底径 9.0 器高 14.8	中空。受部に2本の角状の突起をもつ。	タタキ(4本/cm)→ ナデ (指頭痕顕著)	㊒絞り痕 ㊓ハケ(6本/cm)	灰茶色 灰色	石・長(1) 多 ◎	黒斑	30
198	支脚	残高 11.9	中空。受部に2本の角状の突起をもつ。胴部に穿孔あり。	㊒上ナデ ㊒下タタキ(3本/cm) →ナデ	ナデ	乳黄灰色 黒色	石・長(3~5) 多 ◎	黒斑	30

表21　SP 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
199	甕	底径 (4.0) 残高 2.5	平底。胴部はほぼストレートに広がる。底部はかなり厚い。	㊒ハケ(7~8本/cm) ㊕ナデ	ハケ(7~8本/cm)	暗赤茶色 灰茶色	長(1~3) ◎	SP3	
200	坏	口径(13.2) 残高 3.5	体部はほぼストレートに広がりながら立ち上がる。口縁端部は丸味をもつ。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	乳黄白色	砂粒(1~2) 少 ◎	SP24	
201	壺	底径 (3.4) 残高 9.8	小さめの平底。肩部が張る。胴部中位に焼成後の穿孔あり。	㊕ナデ ㊒ハケ(14~15本/cm)	ハケ(6~7本/cm)	茶色 黒色	長(1) ◎	SP34 黒斑	
202	壺	底径 (4.0) 残高 14.0	平底。	㊒上タタキ(3本/cm) ㊒下タタキ→ハケ (10~11本/cm) ㊕ナデ	ハケ(10~11本/cm)	茶色 灰色	石・長(1) ◎	SP49	
203	壺	底径 (3.0) 残高 2.4	小さめの平底。	磨滅のため不明	ナデ	黒赤茶色 茶色	石・長(1~2) ◎	SP49	
204	鉢	口径 12.4 底径 3.3 器高 6.9	口縁部はやや内湾する。端部は先細りになり丸味をもつ。やや丸味のある平底。	㊒タタキ(3本/cm) ㊕ナデ	ハケ(10~11本/cm)	茶色	石・長(1~3) ◎	SP49	31
205	壺	口径(15.0) 残高 11.9	袋状口縁。拡張部は短く内湾し、端部は丸味ある「コ」字状。頸部は長めで中位まで直立し、急に外反する。	㊐端ハケ(5~6本/cm)→ヨコナデ ㊓ハケ(5~6本/cm)→ハケ(10~12本/cm) ㊓ハケ(10~12本/cm) ㊐上ハケ(10~12本/cm)→ヨコナデ㊐下ハケ(10~12本/cm)	㊐端㊓拡㊓頸ヨコナデ ㊒頸ハケ(10~12本/cm)	暗茶色	石・長(1~3) ◎	SP54 九州系の土器	31
206	壺	口径 10.2 残高 17.5	口頸部は長球形の胴部から稜をもたず、なだらかに直口ぎみに立ち上がる。口縁端部は「コ」字状。	㊐端ナデ ㊐㊒頸㊒胴ハケ(5~6本/cm)	㊐㊒頸ハケ(5~6本/cm) ㊒上ナデ ㊒下ハケ	灰茶色	石・長(2~4) ◎	SP54	31
207	甕	口径(15.4) 残高 4.3	「く」字状口縁。端部は「コ」字状だが下方がやや突出する。内外とも明瞭な稜をもつ。	㊐ヨコナデ ㊒タタキ(3本/cm)	㊐端ヨコナデ ㊐ハケ(11本/cm)	灰黄色 乳茶色	石・長(1~3) 多 ◎	SP72	
208	壺	底径 (4.0) 残高 4.3	小さめの平底。	㊒タタキ(3本/cm) →ハケ(10本/cm) ㊕タタキ→ナデ	ナデ	乳灰茶色 黒色	石・長(1~4) 多 ◎	SP73 黒斑	
209	甕	口径(14.0) 残高 10.6	口縁部は外反する。端部は先細りになる。内外面とも明瞭な稜をもつ。	㊐端ナデ ㊐ハケ(7~8本/cm) →ヨコナデ ㊒タタキ(8本/3cm)	㊐㊒上ハケ→ヨコナデ ㊒下ハケ(7~8本/cm)	乳黄灰色	石・長(1~3) 多 ◎	SP95	31

表22　SP115 出土遺物観察表　石製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
210	敲　石	約５／６	アプライト？	14.2	7.1	3.3	435.0		31

表23　その他の 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
211	甕	口径(12.5) 残高 16.9	そり気味に短く外反する口縁部。口縁外面、胴部内面に接合痕顕著に残る。	(口)ヨコナデ (胴上)平行タタキ(2本/cm) (胴下)タタキ→斜ナデ	(口)ハケ→ヨコナデ (胴)ハケ(6～7本/cm)	乳灰黄色	石・長(1～3) ◎	黒斑	32
212	甕	残高 10.0	不安定な底部片。丸味をもってやや突出気味。器壁は厚い。	平行タタキ(3本/cm)→ハケ(8本/cm)	ハケ(6本/cm)→ナデ上げ	灰黄色	石・長(1～2) ◎		
213	甕	残高　1.8	やや丸底。底内面はナデにより凹む。	タタキ(3本/cm)	ナデ	灰茶色 茶色	石・長(1～3) ◎		
214	壺	口径(11.8) 残高　8.7	複合口縁。無文。頸部は直立気味に立ち上がり拡張部は内湾する。口縁端部はヨコナデによりやや丸味をおびる。	(拡)ヨコナデ (頸)ハケ (肩)ハケ(9～10本/cm)→平行タタキ(2～3本/cm)	(拡)ヨコナデ (頸)ハケ→ナデ (肩上)指おさえ→ナデ (肩下)ハケ(9本/cm)	乳灰黄色	石・長(1～3) ◎		32
215	壺	口径(13.8) 残高　4.6	複合口縁。無文。複合口縁接合部は丸味をもつ。口縁端面はヨコナデにより凹む。	ハケ(6本/cm)→ヨコナデ	(拡)ヨコナデ (頸)ハケ(6本/cm)	乳茶色	石・長(1～3) ◎		
216	鉢 (台付)	底径 (4.0) 残高　3.3	台付鉢底部。 くびれの上げ底。	ナデ	ナデ	灰茶色	石・長(1～2) ◎		
217	鉢	口径(34.0) 残高　7.4	大型品。弱い稜をもって外反する口縁部。	(口端)ヨコナデ (口)(胴)平行タタキ(2～3本/cm)→ハケ(6～7本/cm)	(口端)ヨコナデ (口)(胴)ハケ(6～7本/cm)→ナデ	灰乳黄色	石・長(1～5) ◎		
218	鉢	口径(23.9) 残高　8.8	浅鉢。直口口縁。底部は突出気味で丸味をおびる。	(口)ヨコナデ 他は磨滅のため不明	(口)ヨコナデ (胴)ハケ(8本/cm)→ミガキ	灰茶色	石・長(1～3) 金 ◎		32
219	鉢	底径　1.0 残高　3.2	突出する小さなボタン状の底部。	ミガキ	ミガキ	茶色 乳茶色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
220	高坏	口径(25.0) 残高　1.2	口縁部の小片。口端部は上下に拡張。端面には半截竹管文を２段と円形浮文を貼りつける。	(口端)ヨコナデ→施文 (口)ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄茶色	長(1) ◎		32
221	器台	口径(19.2) 残高　1.6	口縁端部は粘土を貼付し垂下。端面には櫛描による波状文(4条)。口縁外面に接合痕を残す。	(口端)ヨコナデ→施文 (口)ハケ(8本/cm)	ヨコナデ	乳茶色 灰黄色(一部黒色)	石・長(1～3) ◎		32
222	ミニチュア (高坏)	残高　4.2	脚部。直立気味の柱状部が完全に残る。柱下部に径0.9cmの円孔を3方に施す。	ナデ		乳灰茶色	石・長(1～3) ◎		32
223	坏蓋	口径(13.2) 残高　2.8	丸味をもって垂下し、端部は丸い。	(天)回転ヘラケズリ (口)回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	青灰色	石・長(1) ◎		
224	坏	口径(10.0) 残高　2.4	内湾気味に立ち上がる口縁。端部は丸く細い。	(口)ヨコナデ (底)糸切り痕	(口)ヨコナデ (底)ナデ	乳黄茶色	石・長(1～2) ◎		
225	小皿	口径 (5.0) 器高　2.2	外傾する口縁部。端部は丸い。	(口)ヨコナデ (底)糸切り痕	ヨコナデ	茶色	長(1) ◎		
226	皿	底径 (6.5) 残高　1.2	底部片。平底。底内面にナデによる溝が顕著に残る。	(口)ヨコナデ (底)糸切り痕 板状痕	(口)ヨコナデ (底)ナデ	乳黄茶色	石・長(1) ◎		
227	坏	口径(13.0) 残高　2.6	口縁部は若干内湾気味に立ち上がり、端部は丸い。磨滅のため底部の切り離しは不明。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳灰黄色	石・長(1) ◎		
228	甕	残高　5.7	外反する口縁。端部はナデにより上下に拡張され、端面は凹む。頸部の稜はゆるやか。器壁は厚い。	(口)格子タタキ→回転ヨコナデ (胴)格子タタキ	回転ヨコナデ	灰白色	石・長(1～3) ◎		
229	土釜 (鍋)	残高 12.0	三足付土釜(鍋)の脚部。接合下部屈曲し下方向にのびる。	ナデ	ナデ	灰茶色	石・長(1～2) ◎	煤	

第７章

束本遺跡４次

－３区の調査－

第７章　３区の調査

１．調査の経緯

3区は南北に縦長い調査地の中央部に位置し、調査面積は約730㎡である。

以下、作業工程を順次略記する。

① 3区では第Ⅲ層上面において遺物が多量に出土したため、第Ⅰ・Ⅱ層は重機にて除去し、第Ⅲ層からは手掘りにて掘り下げを行った。第Ⅲ層中位では遺物が少ないが、部分的に密集し比較的大きい破片が出土した。遺物が密集して出土した部分の直下(第Ⅳ層上面)では遺構を検出したところもある。

② 遺構の検出は遺構埋土と第Ⅲ層が黒色土であることから、第Ⅲ層中位での遺構検出は困難であった。よって、遺構検出は第Ⅳ層上面にて行った。ただし古墳時代の溝ＳＤ301は第Ⅲ層上面、大型円形住居ＳＢ302は第Ⅲ①層上面で検出した。

③ 遺構検出の後、各遺構を順次掘り下げ、測量を行った。

④ 1・2区の深掘りでＡＴ火山灰が検出されているため、3区においても西壁沿いを深掘りした。その結果、3区においてもＡＴ火山灰層の堆積を検出した。

⑤ 調査区中央で検出した大型円形住居址（ＳＢ302）ではガラス小玉を検出したため、土壌の採取と洗浄作業を行った。また、各遺構においても必要に応じて土壌を採集し、洗浄作業を行い、自然科学分析の資料を準備した。

⑥ 航空測量と写真撮影を行い、本調査区の調査を終了した。

２．層　位（第４・51図）

本調査区では第Ⅰ層から第Ⅷ層までの土層を確認した。遺構の検出は主に第Ⅳ層上面で行った。また、第Ⅳ層から第Ⅷ層までは調査区西壁下のトレンチ（ａトレンチ）と東西トレンチ（ｂ・ｃトレンチ）にて土層堆積状況と遺構・遺物の確認調査を行った。以下、本調査区の基本層位を記述する。

第Ⅰ層：灰色土で、20cmの堆積を測る。現代の耕作土である。

第Ⅱ層：第Ⅱ①層－黄灰色砂質土で約15cmの堆積を測り。耕作土の床土である。

第Ⅱ③層－黒色土（上層の汚染を受ける）約5cm～10cmの堆積を測り、調査区中央寄りで確認された。土器を包含しているが、小片で磨滅を受けているものが多い。

第Ⅲ層：第Ⅲ層は2層に分層される。

第Ⅲ①層－黒色土約10cm～15cmの堆積を測る。遺物が、部分的に密集して出土した。破片は大きく磨滅はほとんど受けていない。

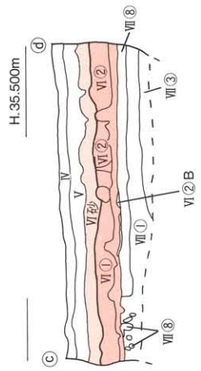
第Ⅲ②層－黒褐色土約5cm～10cmの堆積を測る。この第Ⅲ②層は土壌分析の結果、鬼界アカホヤ火山灰層（約6,300年前）と認められたが、一時堆積層としては検出されていない。この層中からの遺物の出土はない。

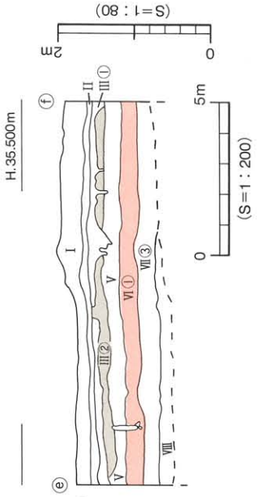
第Ⅳ層から下層については、ａトレンチとｂトレンチの調査結果からである。

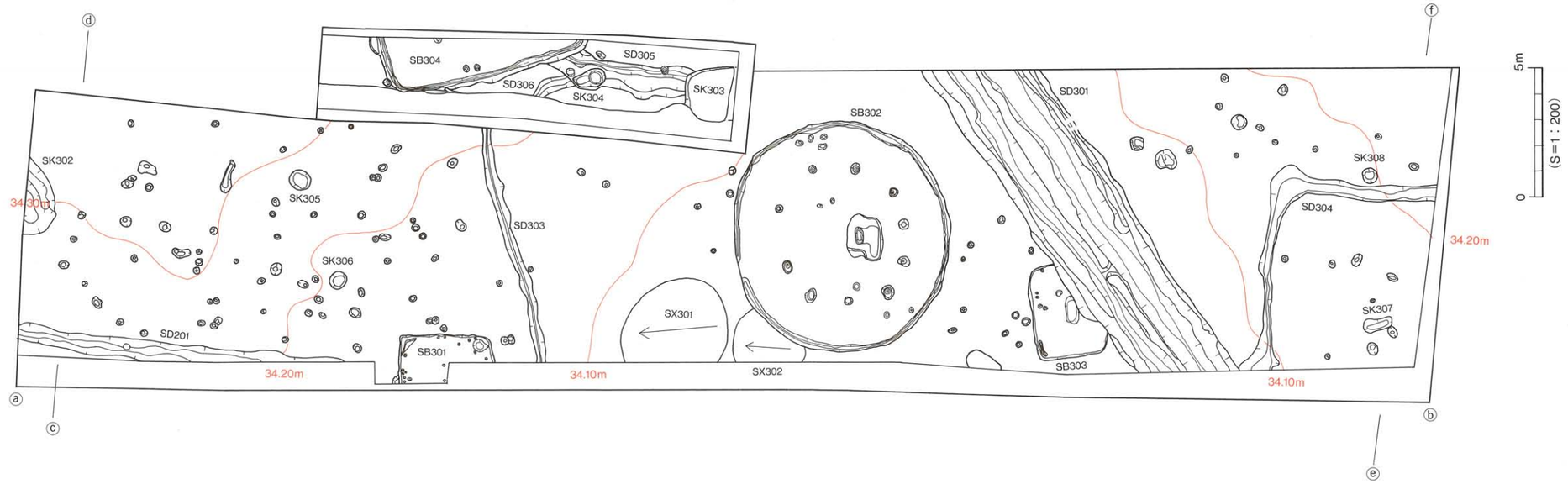
第50図　調査区位置図

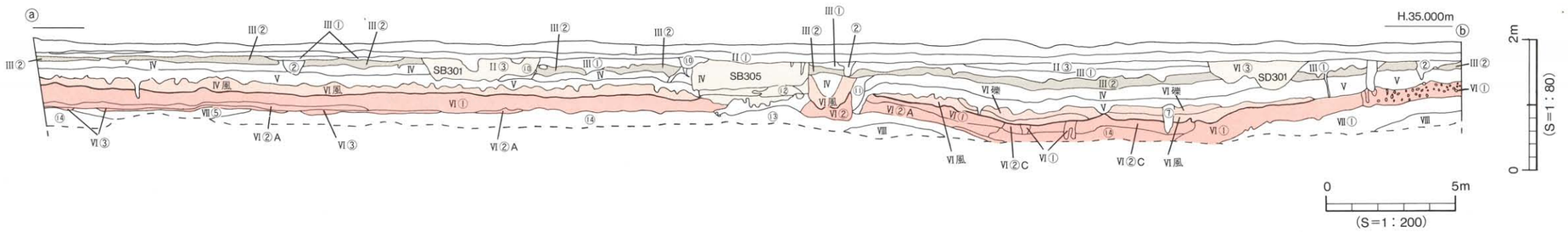
基本土層

Ⅰ	表土	Ⅶ①	黄褐色砂質土
Ⅱ①	黄灰色砂質土	Ⅶ②	黄褐色粘質土
Ⅱ②	黄灰色土(粘性が強い)	Ⅶ③	褐色砂質土
Ⅱ③	黒色土(灰色混じり)	Ⅶ④	灰色砂
Ⅲ①	黒色土	Ⅶ⑤	黄灰色粘土
Ⅲ②	黒褐色土(アカホヤ火山灰)	Ⅶ⑥	黄白色砂質土(硬質)
Ⅳ	褐色砂質土	Ⅶ⑦	乳灰褐色粘質土
Ⅴ	暗褐色粘質土	Ⅶ⑧	暗茶褐色粘土
Ⅵ砂 Ⅵ礫 Ⅵ風	AT2次堆積	Ⅶ⑨	黄褐色砂礫
		Ⅷ	砂礫
Ⅵ①	黄褐色土(黄色細粒)	②	黒色粘質土
Ⅵ②A	黄褐色土(褐色細粒)	⑩	灰褐色土
Ⅵ②B	乳褐色粘質土	⑪	淡黄褐色砂質土
Ⅵ②C	乳黄褐色粘質土	⑬	褐色粘質土
Ⅵ③	黄褐色土(黄色細粒)	⑭	淡褐色砂質土

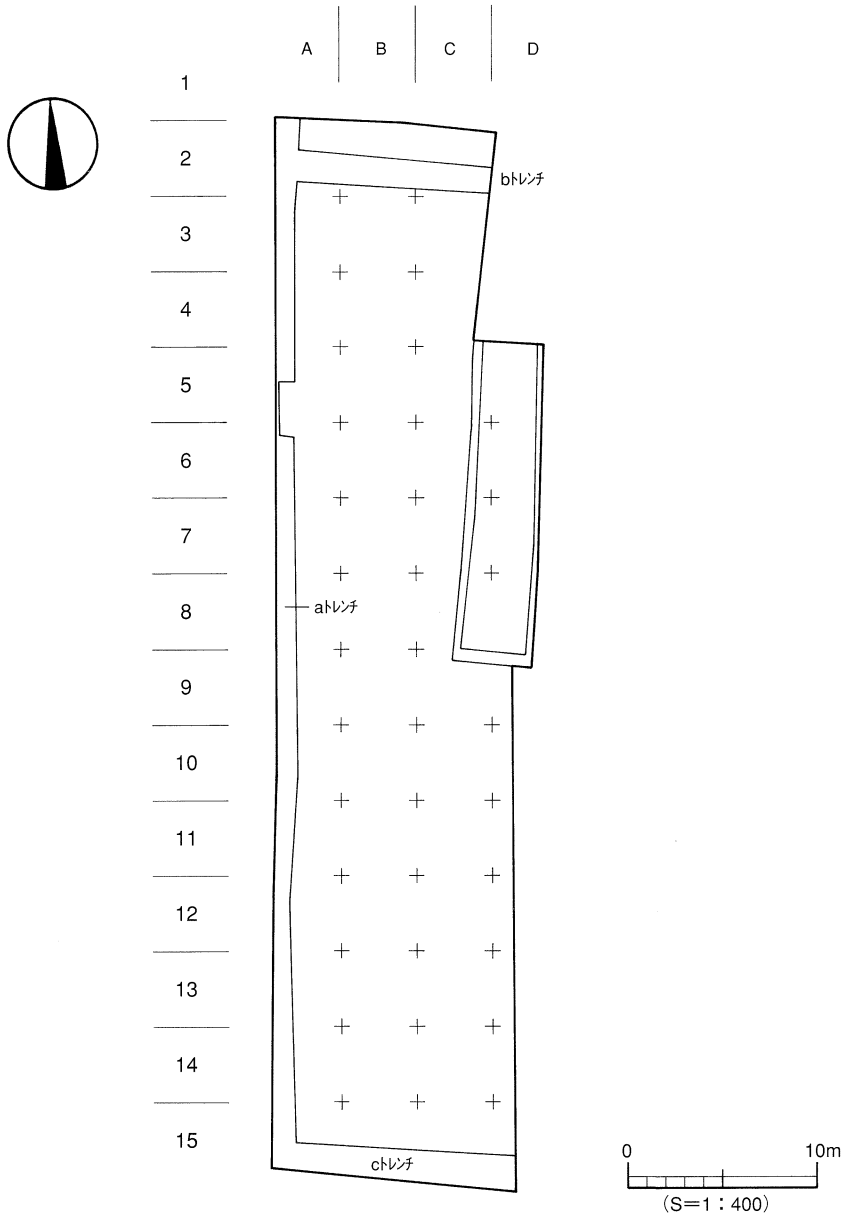








第51図　遺構配置図



第52図　区 割 図

第Ⅳ層：褐灰色土（小礫石混入）約10～30cmの堆積である。遺物は、第Ⅳ層上面に遺物形態（スタンプ）を残す状況で石器2点が出土した。また、第Ⅳ層中にて焼土を検出した。

第Ⅴ層：暗褐色土で約10～25cmの堆積を測る。

第Ⅵ層：ＡＴ火山灰堆積層（約2.2～2.5万年前）である。調査地全域では1次堆積層と2次堆積層に大別され、さらに1・2次ともに3層に細分できる。

第Ⅵ層2次堆積

砂　1～2㎜　本調査区では検出していない。

礫　2～5㎜　ａトレンチ北側で厚さ10cmを測る。

風　黄色で小石・礫混じり　ａ・ｂトレンチで厚さ60cmを測る。

第Ⅵ層1次堆積

①乳褐色土（黄色の細粒）ａ・ｂ・ｃトレンチで厚さ10～70cmを測る。

②乳暗褐色粘質土（乳茶褐色と乳茶褐色粘質土がある）ａ・ｂトレンチで10～40cmを測る。

③淡黄色粗粒　ａトレンチ北側で厚さ5～10cmを測る。

第Ⅶ層：砂粒多い　ｃトレンチで厚さ10cmを測る。

各層位は、出土遺物や火山灰層の堆積などから、第Ⅰ・Ⅱ①層は近現代、第Ⅱ③層は弥生～古墳時代、第Ⅲ①層、第Ⅲ②層は縄文時代（約6,300年前）、第Ⅳ・Ⅴ層は約2.2～2.5万年以降、6,300年以前、第Ⅵ層は約2.2～2.5万年前、第Ⅶ・Ⅷ層は約2.2～2.5万年以前に堆積したものと考えられる。

３．遺構と遺物

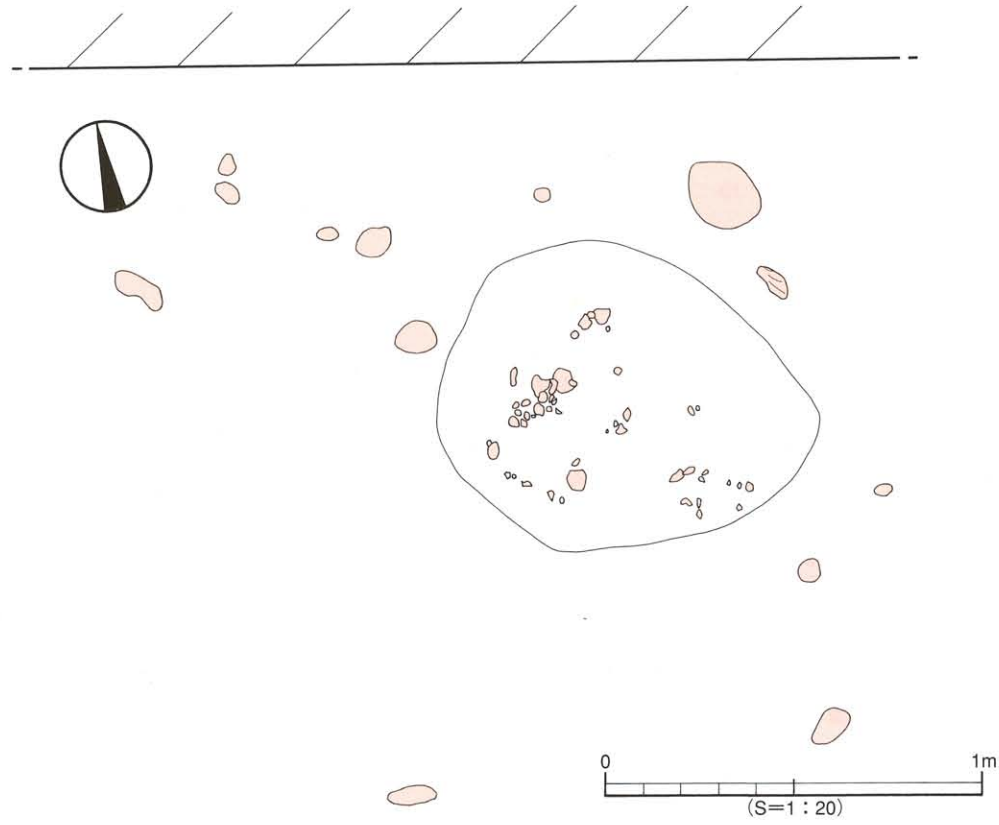
〔１〕先土器時代～縄文時代

当該期に属する遺構・遺物は第Ⅳ層上面で検出した焼痕1ヶ所と、石器2点である。

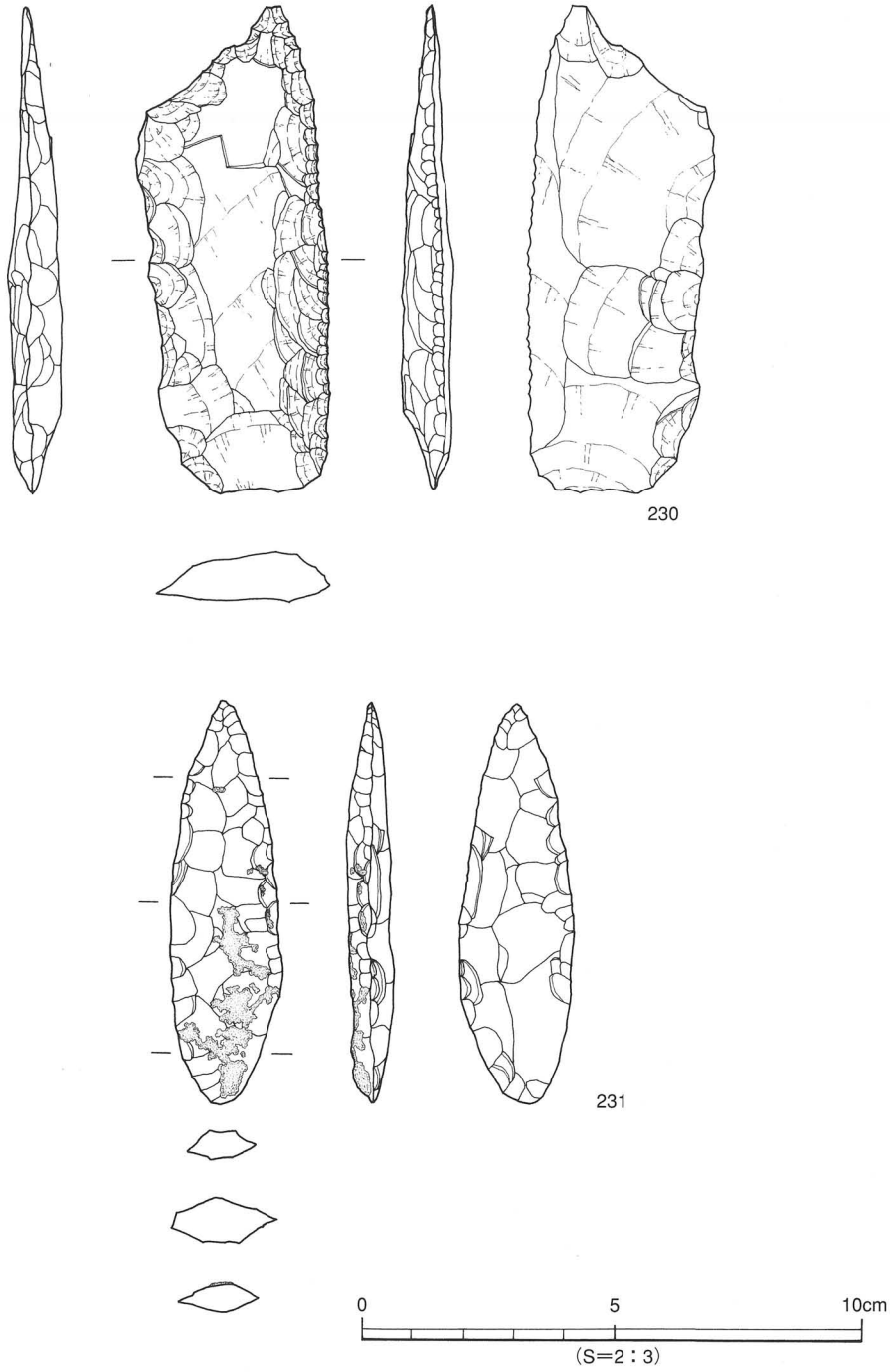
１）焼痕（第53図）　調査地北部のＢ2区で検出した。焼痕の平面形態は楕円形状で、範囲は長さ102cm、幅83cm、深さ2.5cmを測る。第Ⅳ層上面で検出されだが、第Ⅳ層中につづいていた。焼痕の基底部は北東から南西への傾きが見られるが、明確な掘り方などは確認されなかった。焼痕の範囲からは、直径3～5cm大の焼土塊が検出された。遺物はない。

２）石器（第54図、図版59）　石器2点は、調査区北寄りのＢ4区で出土した。焼痕からは約8～10m南に位置する。2点の石器は、遺物形状（スタンプ）を第Ⅳ層に残す状況で検出した。

230、スクレイパーの完形品である。法量は、長さ9.6cm、幅3.6cm、厚さ0.9cm、重さ39.7ｇを測る。側面片方にブランティングを施す。231、尖頭器の完形品である。法量は、長さ8.0cm、幅2.1cm、厚さ0.8cm、重さ15.0ｇを測る。基部にタール状の付着物が見られる。石材は不明である。



第53図　第Ⅳ層中焼土測量図



第54図　第Ⅳ層上面出土遺物実測図

〔2〕弥生時代

弥生時代の遺構は調査区全域で検出された。検出遺構は円形の大型住居1棟、方形の大型住居2棟、方形の小型住居2棟、溝5条、土坑6基、柱穴108基である。住居址は調査区北部から中央部にかけて、また柱穴は北部に密集している。遺構はほとんどのものが第Ⅳ層上面で検出したが、ＳＢ302は第Ⅲ①層上面での検出である。

１）竪穴式住居址（ＳＢ）

（ＳＢ３０２調査工程）

住居の北半部は、既に第Ⅲ②層を剥ぎ取ったあとに遺構検出をしたため住居址の検出は第Ⅳ層となった。一方、西半部と南半部は第Ⅲ②層を残した状態で遺構検出を行った。第Ⅲ②層と住居の埋土は黒色土で、類似するものであったが、住居埋土には赤褐色土粒が混入するため、半径4mの半円形プランを検出することができた。この時点で調査区東壁を精査すると、住居址が第Ⅲ層中（第Ⅲ①層上面）からの掘り込みであることが確認された。住居址は推定する調査対象地内にあるため、調査区の拡張を行った。その結果東半部も検出するにいたった。遺構検出状況の写真が、東半部と西半部で段差があるのはこのような理由によるものである。遺構の全体プランが確認された後、住居内の掘り下げを行った。

遺構掘り下げ時には遺物は小片が少量出土する状況であった。その後、検出面より約25～30cm掘り下げた時点では東半部で弥生土器や焼土の出土が多くなり、床面付近からは青銅鏡片も出土した。青銅鏡は出土した時点では銀色に輝いており、金属遺物にしては錆ておらず、何が出土したのか分からなかった。遺物スタンプを残す状態で取り上げてみると鋸歯文が見えたため鏡だと分かった。出土状況の写真撮りや測量を行ったのち遺物を取り上げたが（出土から1時間）、この時点では鏡面の輝きはなくなっていた。住居址内の埋土は全てを採集し、順次洗浄作業を行った。その結果、ガラス玉2点を検出することができた。

遺物出土状況の写真撮影と測量を行い、住居址の埋土を全て取り除くと床面からは主柱穴の柱痕や炉址、凹地状遺構、周壁溝を検出した。床面遺構の調査後、貼り床の整地土を除去し、柱穴掘りかたを調査して、住居址の調査を終えた。

ＳＢ302は住居の規模が大きいことや鏡が出土したこともあり調査には約40日を費やした。

ＳＢ３０２（第55・59～62図、図版35～39・49～51・59）

ＳＢ302は調査区中央の第Ⅲ①層上面で検出した。北西で検出したＳＢ301からは約15m、南で検出したＳＢ303とは3.5mを測る位置である。

平面形態は円形で、規模は東西890cm、南北840cm、深さ32cmを測る。埋土は3層に分層され、上層は黒灰色土（黒色土に灰色土が滲み混んだ状態）、中層は黒色土（褐色土の粒が粗に混入）、下層は黒褐色土（褐色土の粒が密に混入）である。上層は厚さは5～8cmを測る。第55図では東部分に限り検出されたことになっているが、おそらく全体に遺存していたと思われる。中層は、住居址中央から東にあり、凹レンズ状に堆積が見られた。下層は住居址全体で見られた。

内部施設は、炉址（炉内土坑を含む）、周壁溝、主柱穴、貼り床、凹地状遺構を検出した。

炉址（第57図）は住居中央の南寄りで検出した。平面形態はやや東西方向が長い不整な方形である。規模は東西165cm、南北135cm、深さ10cmを測る。炉の周囲には炉堤が設けられており、幅10cm、高さ3cmを測る。炉内の埋土は黒色（炭黒く）で、土質は軟質である。黒色土中には焼土や炭化物が混入している。炉内からは弥生土器片が出土した。

炉を完掘した状態で炉の北にて土坑を1基検出した。平面形態は不整な長方形である。東西に長い土坑は、東西70cm、南北28cm、深さ52cmを測る。基底面は平坦である。埋土は黒色土で炭黒く、土質は軟質である。埋土からは弥生土器が出土したが、炭化物や焼土は検出されなかった。この土坑は、炉に付帯する施設と思われる。

周壁溝は壁体にそって巡るが、住居北部で約70cm途切れる。規模は幅10～30cm、深さ5～15cmを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は弥生土器が少量と鉄製品が1点出土した。

主柱穴は周壁から160～180cm内側の位置で10本を検出した。主柱穴の柱痕は貼り床上面で検出され、柱穴掘り方は貼り床を掘り下げた（除去）後に検出された。各柱穴間は140～220cmを測り、住居址西半分は柱間が狭く（ＳＰ4～10）、東半分では柱間が広い（ＳＰ10～4）ことを確認した。また、対面する柱間は4.9～5.5mを測り、これらの交点は1対面を除いて、炉内土坑で交わる。主柱穴の平面形態は円形もしくは楕円形で、径25～50cm、深さ57～66cmを測る。柱痕は全ての柱穴で確認することができ、規模は径12～28cmを測る。柱穴埋土は黒灰色微粘性土、柱痕埋土は黒色土である。柱穴出土の遺物は小片の弥生土器が少量と、ＳＰ7より鉄製品が1点出土している。

貼り床は、住居内のほぼ全域で見られるが、主柱穴ＳＰ1の周囲では見られなかった。貼り床は黒色土と茶褐色土（第Ⅳ層）の混合土からなり、厚さ2～5cmを測る。部分的に、版築の様に横縞状の堆積を見る部分もあり、やや硬く締まっている。

凹地状遺構（第58図）は住居東側の北寄りと西側の床面で20基検出された。平面形態は円形もしくは楕円形で、径15～34cm、深さ3～5cmを測るが、明確な掘り方をもたない浅い凹地である。埋土は黒色土である。遺物の出土はなかったが、1基については遺構上部において粘土塊が検出された。

住居からの出土遺物は弥生土器、銅鏡片1点、鉄製の長頸鏃1点と三角形鉄片1点、ガラス小玉6点、石鏃1点の他に焼土、炭化物、粘土塊がある。

弥生土器は床面より少し浮いた状況で住居全体に散在するが、炉の周辺で出土する傾向がある。器種は甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏形土器・器台形土器である。土器の復元作業の結果ほぼ完形品になったのは高坏（270）1点に限られた。この高坏形土器は脚台部が住居北端やや東寄りで出土し、坏部は南西側やや北寄りの位置で出土したものが接合された。壺には胴部に線刻されたもの（250）が住居東側（やや南）で出土した。このほか、出土した胴部片には器壁が薄手のものでヘラ磨きの調整痕が見られるものが多い。青銅鏡片（290）住居東側で周壁から約40cm内側の床面直上より、鏡面を上にした状態で出土している。鏡片は櫛歯文帯から外縁にかけてのもので、長さ5.8cm、幅2.6cmを測る。鉄製長頸鏃（288）主柱穴Ｐ7の柱穴基底面より出土した。三角形鉄片（289）住居東側のやや北寄り、周壁からは1.2m内側の床面から少し浮いた状態で出土した。

ガラス小玉（281～286）は6点が出土した。このうち4点は遺構掘り下げ時に出土し、2点は埋土の洗浄によって出土したものである。ガラス小玉の出土地点は住居北東区より2点、南西区より3点が床面直上ないし床面よりやや浮いた状態で出土し、1点については出土地区がつかめていない。

石鏃（287）炉の西縁から約60cmの位置で、床面からやや浮いた状態で出土した。

焼土及び炭化物は住居全体で見られるが、西半部からの出土が多く、焼土の範囲も西半部では広いものとなっている。住居の南西側の壁体に沿って検出された焼土は長さ300cm、幅80cm、厚さ15cm（最厚部）を測る。これらの焼土の平面形態は不整形のもので、横断面は山形を呈する。焼土からは弥生土器の小片が少量と炭化物が出土している。炭化物は固体で、3点検出され、炭化物の中には植物遺体とわかるものもある。

出土遺物（第59～62図、図版49～51）

甕形土器（232～237）　232・233は口縁部片、235～237は底部片である。口縁部は外反する。

壺形土器（238～254）　250は胴部に、251は底部に線刻が施される。

鉢形土器（255～269）　255は大型品。260は羅線状に沈線を施す。

高坏形土器（270～275）　270は完形品で口縁部は加飾され、脚部は円孔が穿たれる。

器台形土器（276～278）　口縁部、脚裾部ともに加飾が施される。

装身具（281～286）　ガラス製小玉で、長さは0.2～0.35cm、幅0.25～0.4cm、孔径0.1～0.18cm、重さは0.03～0.05ｇを測る。色は青緑色、青色、濃い青色が見られる。

石製品（287）　凹基式の石鏃で石材は赤色チャートである。

金属製品（288～290）　288は鉄鏃の先端部分である。289は三角形状鉄片である。290は銅鏡の外縁部片である。鏡面、背面とも磨き痕がみられる。

時期：出土遺物の鉢形土器の形態と出土遺物に時期差が見られないため、弥生時代後期末に埋没したと考えられる。

ＳＢ３０１（第51・63・64図、図版40・41・52・59）

ＳＢ301は調査区中央北寄りのＡ5区で検出した。東のＳＢ304からは約10m、南東のＳＢ302からは約15mの位置である。周囲にある小柱穴群との切り合いはない。

本住居は、住居の西部が調査区外のため全容は不明であるが、コーナーを2ヶ所検出していることから平面形態は方形になるものと思われる。規模は南北360cm、東西190（＋α）cmである。壁高は完掘した状態で約20cmを測る。ただし、西壁土層の精査では、本住居は第Ⅲ①層上面からの掘り込みであることを確認しており、壁高は少なくとも35cm（第Ⅲ①層上面から基底部までの深さ）以上はあるものと思われる。埋土は黒褐色土1層である。住居内施設は部分的な高床部1ヶ所、土坑1基、小ピット28基がある。なお、周壁溝と炉は検出されていない。

高床部は住居址北東隅に貼付けられている。平面形態は方形であるが、南西コーナー部はａトレンチにより欠如している。規模は南北226cm、東西12cm、厚さは8～10cmを測る。高床部の構築は第Ⅳ層の土を用いて築き固めており、硬く締まっている。部分的に黒色土が混じるところがある。

土坑は床面南東隅で検出した。平面形態は楕円形で、径42～50cm、深さ21cmを測る。埋土は住居址内埋土と同じく黒褐色土である。遺物は弥生土器の小片が少量出土している。住居に伴うものであるが、性格は判断できなかった。

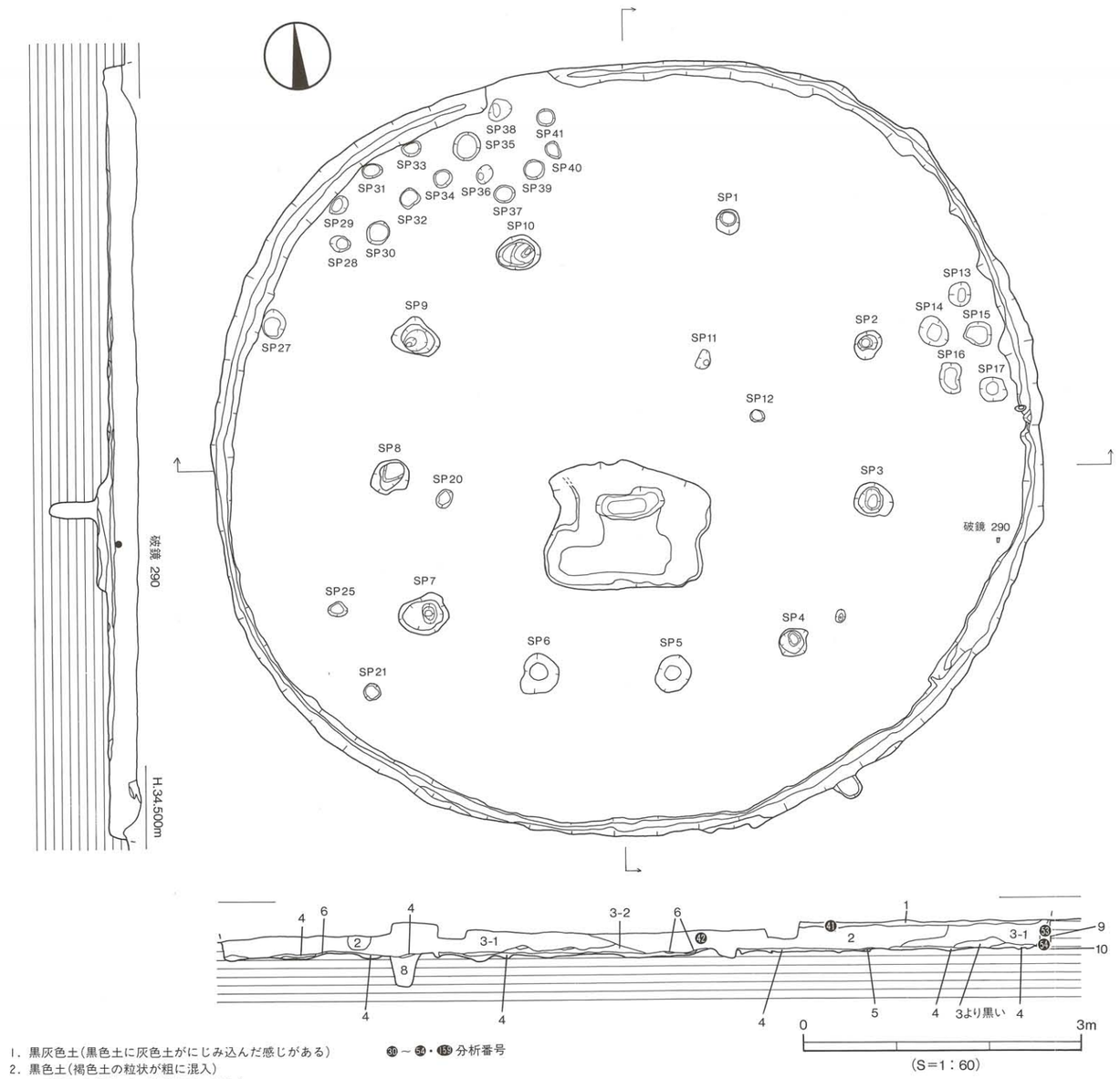
小ピットは床面全体で検出し、特に南東隅に集中している。ピットの並びに規則性はみられない。平面形態は円形～楕円形を呈し、径5～10cm、深さ5～7cmを測る。埋土は黒色土（茶褐色土混入）である。遺物の出土はない。

住居址内からは弥生土器と円礫石1個が出土している。

弥生土器は住居址全体より散在して出土したが、北半部と南端部にやや多く、ほとんどの土器が床面より浮いた状況での出土である。器種は甕形土器・壺形土器・鉢形土器・器台形土器がある。出土土器は鉢形土器（298）を除くと破片であった。円礫石は住居北部（調査地西壁）床面よりやや浮いた状況で出土した。円礫石の大きさは長さ20cm、幅15cm、厚さ12cmで石材は花崗岩である。

出土遺物（第64図、図版52）

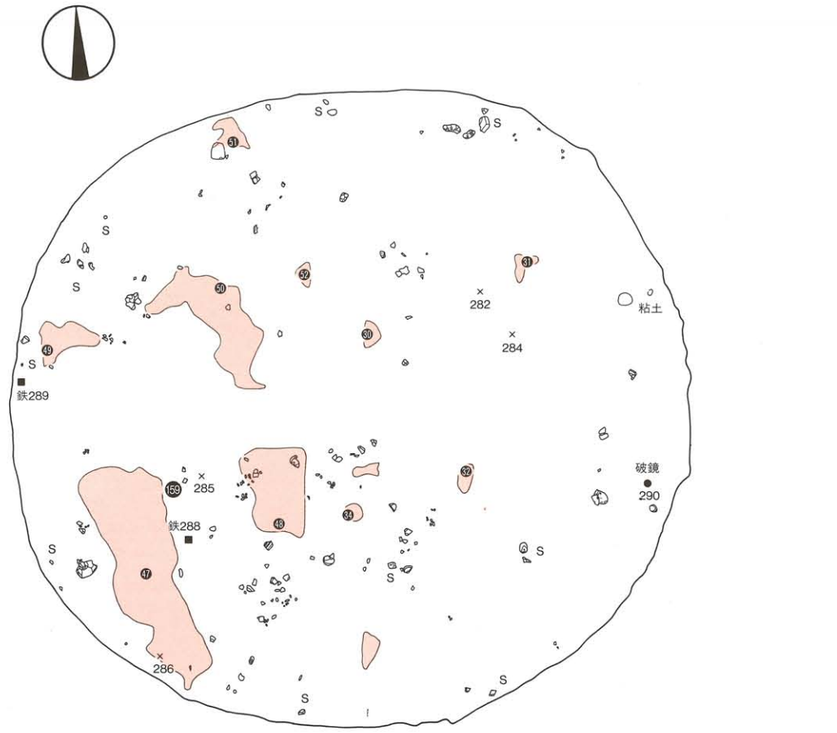
291～302は弥生式土器である。291～296は甕形土器である。291～294は外反する口縁部で口縁端部は面をもつ。295・296は平底の底部。297は複合口縁壺で、口縁部に波状文、接合部に刻目文を施す。298・299は鉢形土器である。300は器台形土器で、口縁端部には波状文6条を施す。301・302は混入品である。共に甕形土器で如意形の口縁部をもつ弥生時代前期。



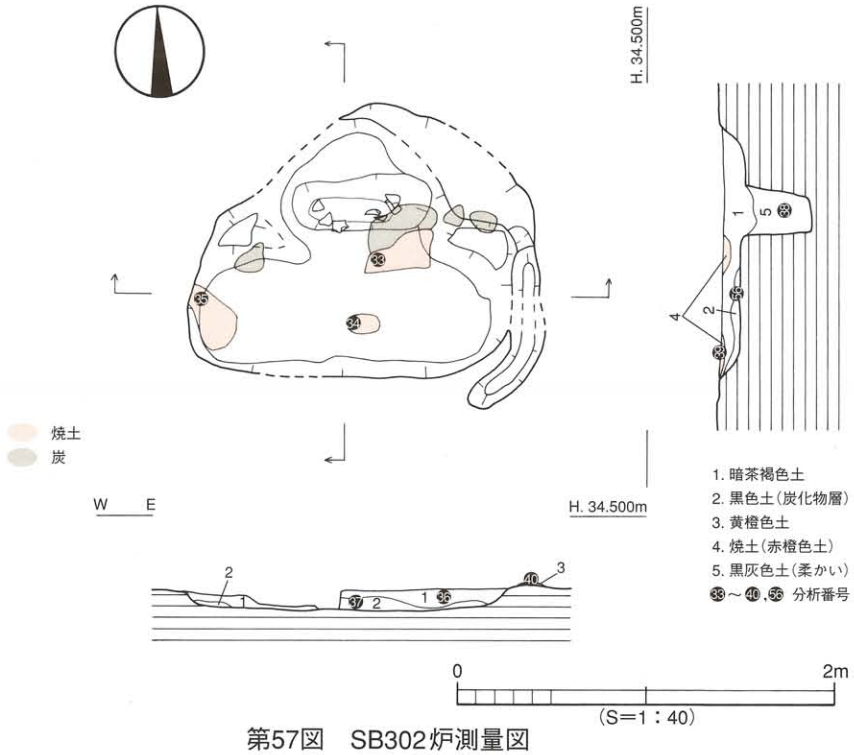
1．黒灰色土(黒色土に灰色土がにじみ込んだ感じがある)
2．黒色土(褐色土の粒状が粗に混入)
3-1．黒褐色土(褐色土の粒状が密に混入)
3-2．3-1に焼土が多量に混入
4．黒色土と茶褐色土混じり
5．茶褐色土(黒色土が少量混入)　} 貼床
6．黄色土(ブロック)
7．焼土
8．黒灰色徹粘性土
9．周壁溝埋土①
10．　〃　②

㉚～㉞・⑮⑨ 分析番号

第55図　SB302測量図



第56図　SB302遺物出土測量図



第57図　SB302炉測量図

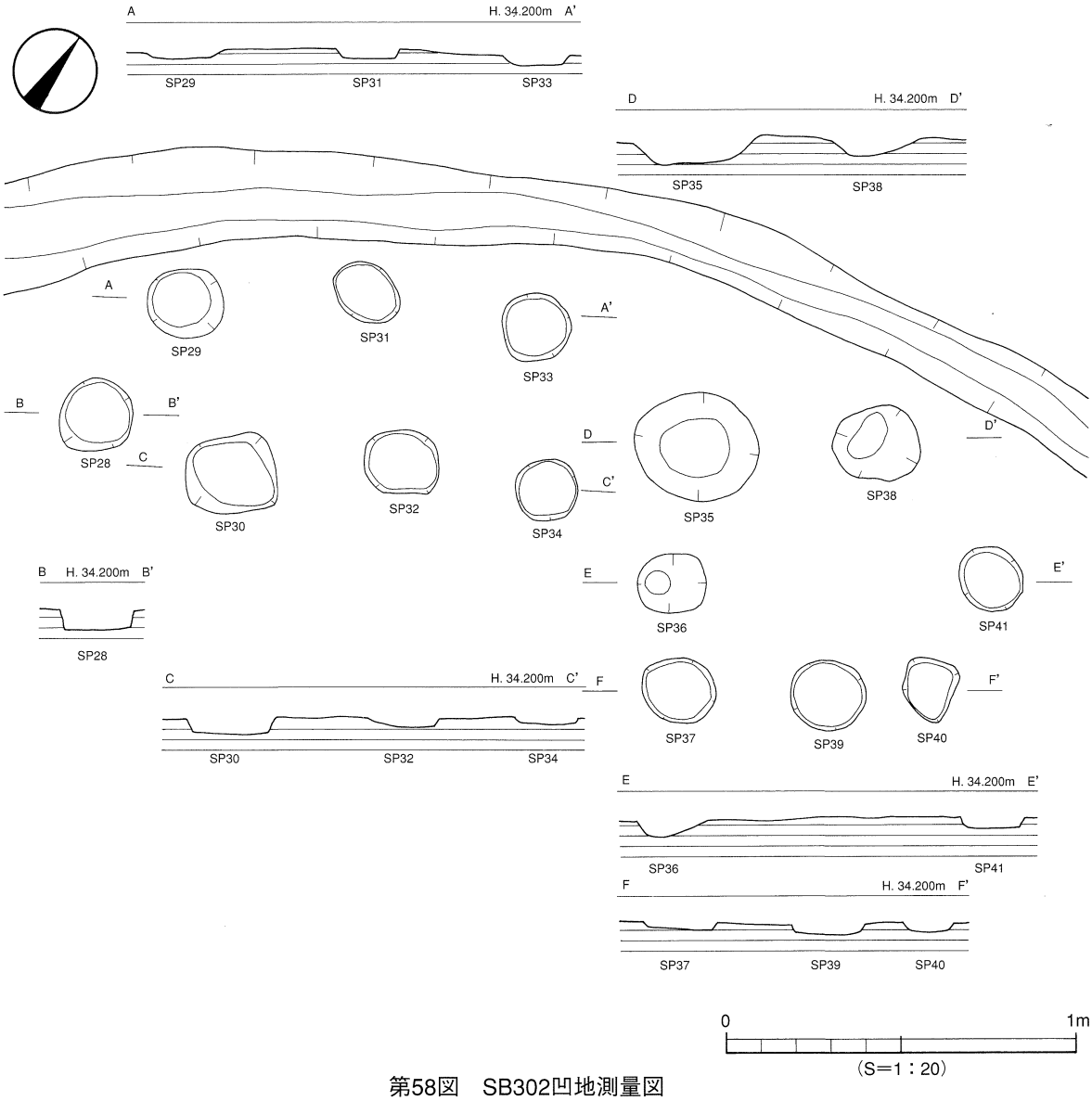
ＳＢ３０３（第65～70図、図版42～44・52・53）

ＳＢ303は調査区南部Ａ～Ｂ12区にあり、ＳＢ302の南西3.3ｍに位置する。ＳＢ303の上部からは、表土剥ぎ時に比較的大きな土器片が出土していた。ＳＢ303検出地点には本住居址以外の遺構がないため、表土剥ぎ時の土器片がＳＢ303のものと思われる。よってＳＢ303は、第Ⅲ①層上面で検出しなければならなかったものである。平面形態はやや形が整わないものの長方形で、規模は東西380㎝、南北280㎝、壁高17㎝を測る。ただし、第Ⅲ①層上面から床面までの深さは約50㎝を測るため、壁高は50㎝以上あったものと考えてよい。掘り方基底面は、東から西へ傾斜が見られ、比高差は16㎝を測る。埋土は黒色土である。住居内からは部分的な高床部、炉址1基、主柱穴2基、小ピット42基を検出した。

高床部は住居址を二分するかのように東半部に限り検出された。平面形態は長方形で南北284㎝、東西200㎝、基底面からの高さは約10㎝を測る。地山を削り出して作られており、高床部の東半部には、上面を平坦にするための整地土が見られる。高床部上面は掘り方基底部と同じように傾斜が見られる。遺物は、高床部の整地土を取り除いた後に検出したものがある。

炉（第66図）は住居址のほぼ中央にあり、炉は炉堤が設けられている。炉堤内縁での平面形態は長方形となり、規模は東西113㎝、南北56㎝、深さ14㎝を測る。炉の西半部は基底部から上部にいたるまで貼り土が見られ、不整形な炉の掘り方は炉堤構築時に長方形になるように改修したものとみている。炉堤は高さ4～7㎝、幅10～20㎝を測る。炉堤の貼り土は第Ⅳ層と黒色土の混合土で硬く締まっている。炉内の埋土は上層が黒色土（住居埋土より赤褐色土の混入が少ない）、下層が黒褐色土（黒色土と焼土の混合）である。下層は炉内東半部の基底部から炉堤上部に渡り堆積が見られ、さらに炉の東縁に近い高床部の上部にも堆積が見られた。炉内からの遺物の出土はない。

主柱穴（ＳＰ１）は南壁側の中央やや西寄りで検出した。平面形態は楕円形で、東西45㎝、南北20



第58図　SB302凹地測量図

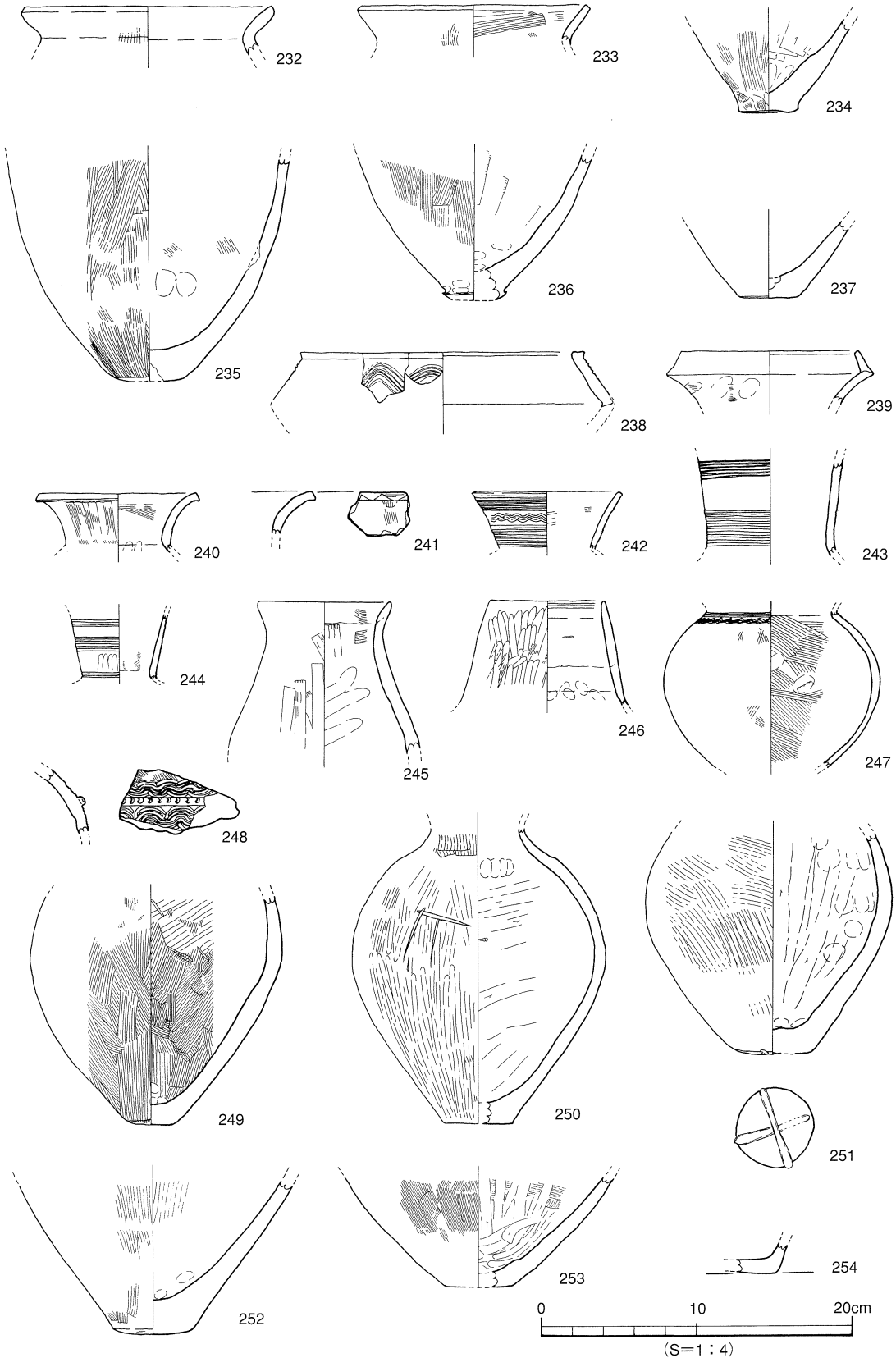
cm、深さ22cmを測る。柱穴基底面には径15cm前後の柱痕が東西に検出されたため、柱材は2本であったものと思われる。埋土は黒色土（赤褐色土が粒状に混じる）である。柱穴からの遺物の出土はない。

主柱穴（ＳＰ２）（支柱穴）は南壁中央の壁下より検出した。主柱穴の柱穴中心間で約25cmを測る掘り方は壁面と床面より南方向へ斜めに掘り込まれており、角度は約60°を測る。規模は径15～20cm、深さ約20cmを測る。埋土は主柱穴と同じ黒色土（赤褐色土が粒状に混じる）で、遺物の出土はない。

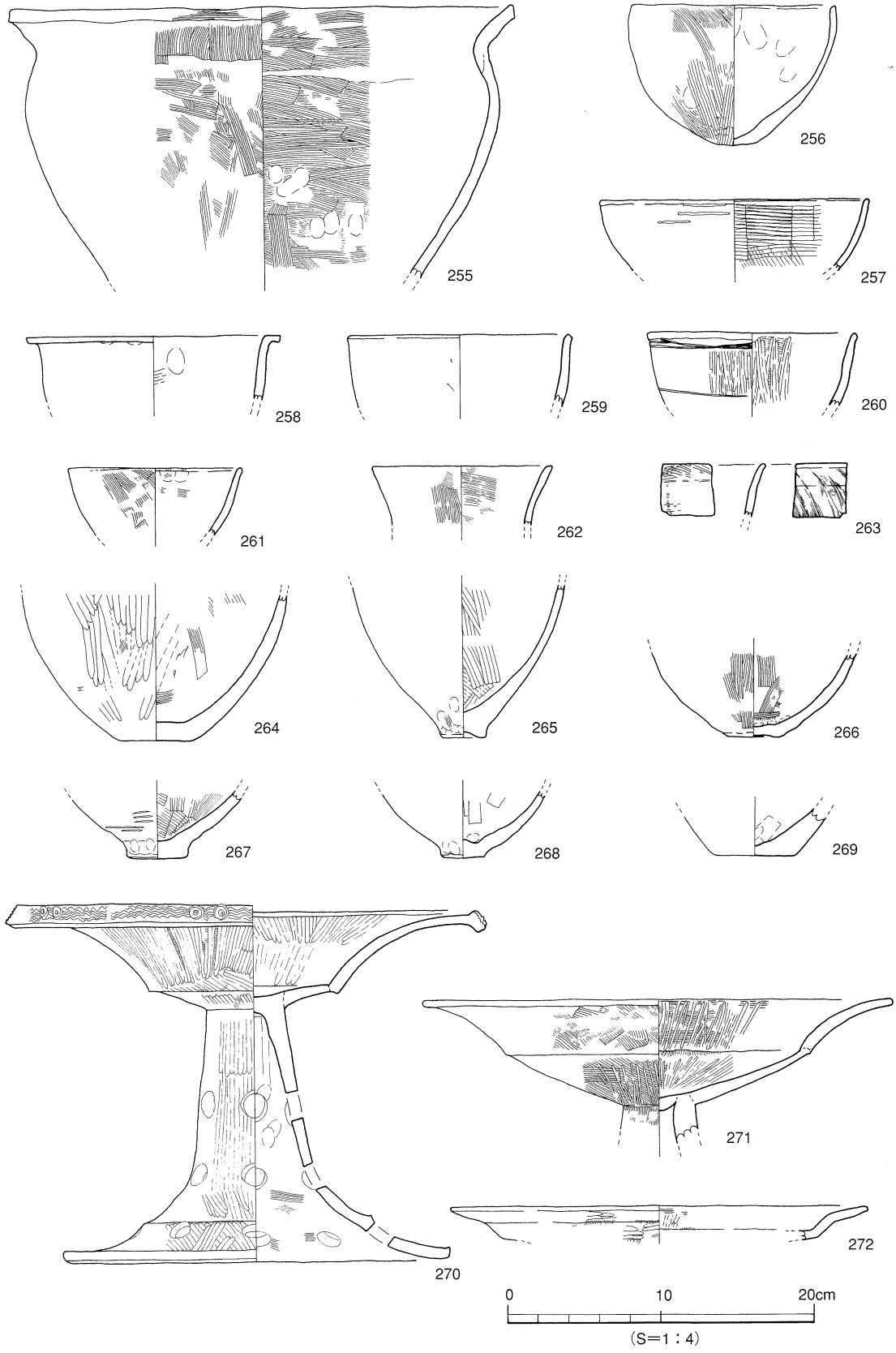
小ピットは住居址全体で検出したが、東半部に多い。平面形態は円～楕円形を呈し、大きいものは径10～15cm、小さいものは径8cm前後で深さは2～6cmを測る。埋土は黒色土である。

このほかには、炉中央北側、炉堤に接した位置で作業台を検出した。作業台は径30cm、厚さ約15cmを測り、円礫石で上面は多少凹みが見られた。石材は花崗岩である。なお、炉の南半部の西寄りには70×30cm規模の平坦面部分があり、中央は僅かに凹んでいた。この凹みと作業石底部の形状が似ているため、この位置に作業台が置かれていた可能性がある。

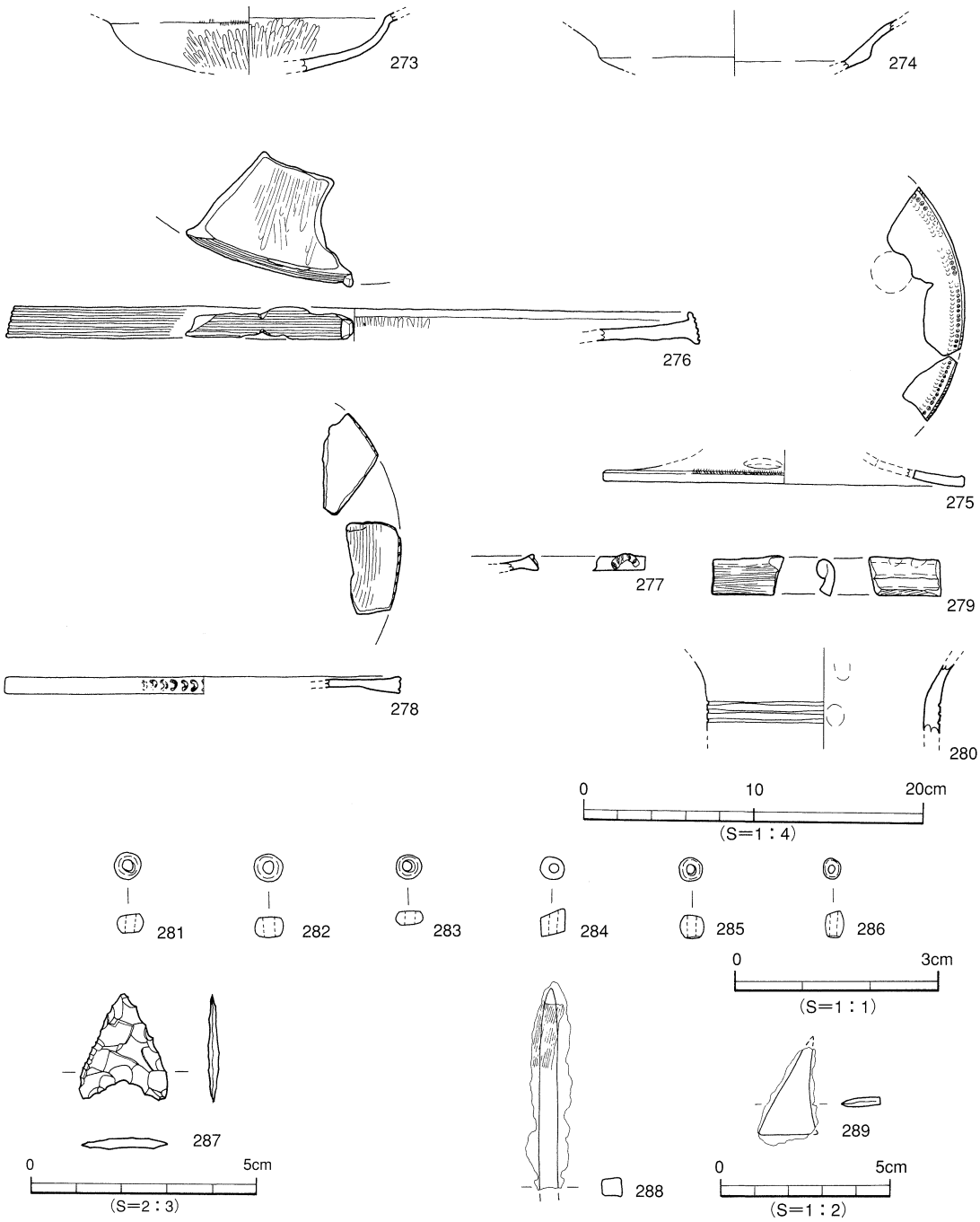
遺物出土状況　遺物には弥生土器、鉄製品、石製品、炭化材、焼土がある。弥生土器は遺構検出時に



第59図　SB302出土遺物実測図（1）



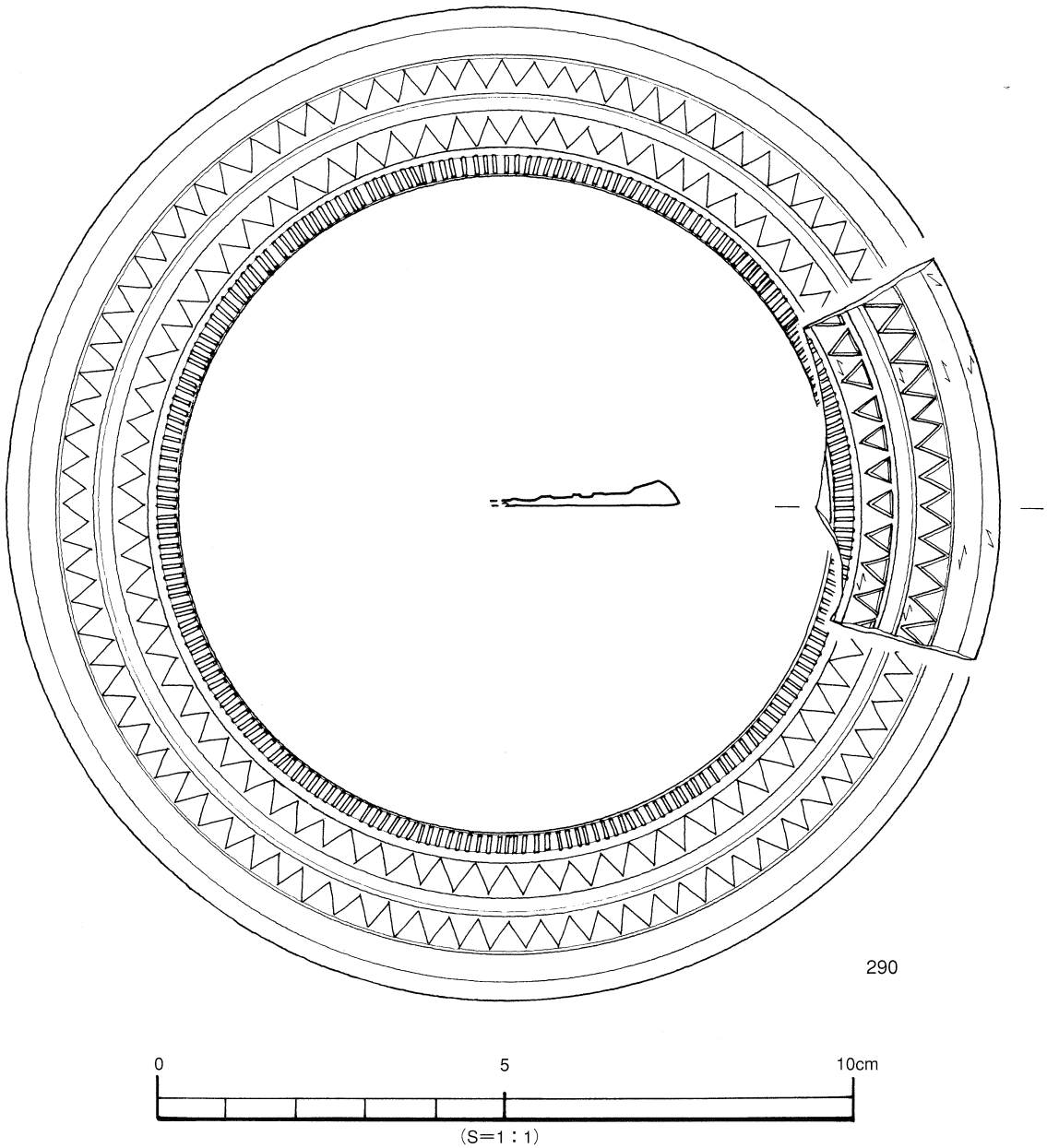
第60図　SB302出土遺物実測図（2）



第61図　SB302出土遺物実測図（3）

比較的大きい土器片が埋土から出土した。土器は住居址の西側からの出土量が多く、接合の結果ほぼ1個体になった甕形土器もある。また、高床部側（東側）では小片が少量の出土であった。鉄製品は、鉄鏃1点が炉堤の北側上部から出土した。石製品は管玉が1点住居北壁の中央やや東の壁で出土した。

炭化材（第67図）は住居址南東部分では少ないが、ほぼ住居全域でみられた。炭化材は焼土と混在した状況にあり、住居址の掘り方と並行するものと、斜めに位置するものが見られた。炭化材は断片が多く遺存状況は不良である。炭化材の規模は痕跡より、長いものでは約120cmを測る。焼土は住居址全域にあり、炭化材と混存した状況で出土しているが、なかには炭化材をとり囲むように検出された



第62図　SB302出土遺物実測図（4）

ものもある。

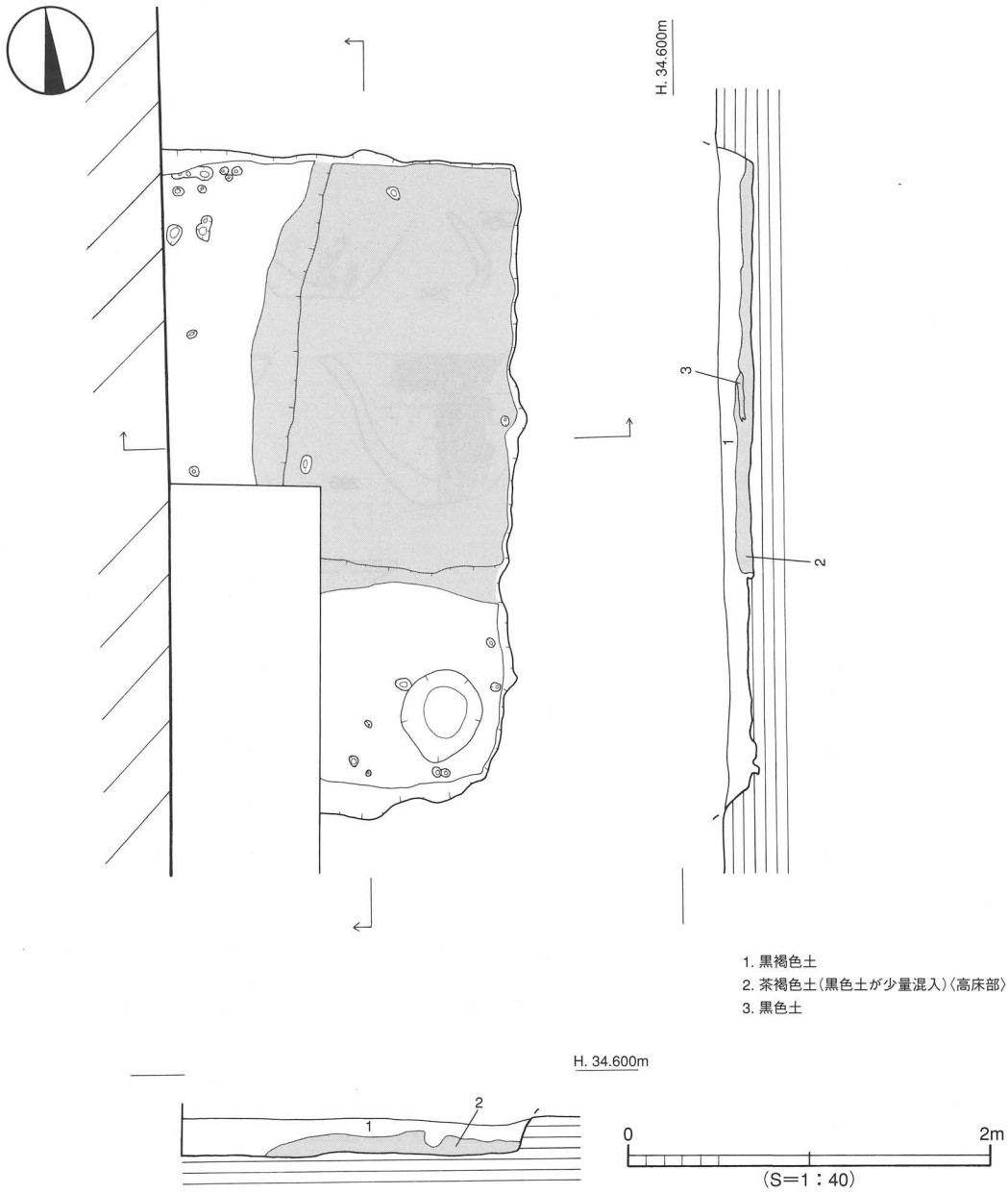
出土遺物（第68～70図、図版52・53）

303～315は遺構中より出土したもの、316～323は表土剥ぎ時に出土したもので調査の結果ＳＢ303に伴うと思われるものである。

303～313・316～323は弥生式土器、314は金属製品、315は石製品である。

甕形土器（303～305、316～318）303は外傾する口縁部、304は「く」字状の口縁部、他は外反する口縁部で口縁端部は面をもつ。底部はやや立ち上がりをもつ平底（303）、やや突出した（316）ものがある。

壺形土器（306～310）　306～308は複合口縁壺である。306・307は口縁部に4条の波状文を施す。



第63図　SB301測量図

309はラッパ状に開く口縁部である。310はやや丸味のある平底の底部である。外面には3ヵ所に籾圧痕がある。

鉢形土器（311・319～322）　311は底部片で底部内面中央が凹む。319・321はやや内湾気味に上外方向へ立ち上がる口縁部である。320・322は稜をもち外反する口縁部である。320は大型品。

高坏形土器（312・313）　312は外反する口縁部。313は脚柱部で3段に4方向の円孔を施す。

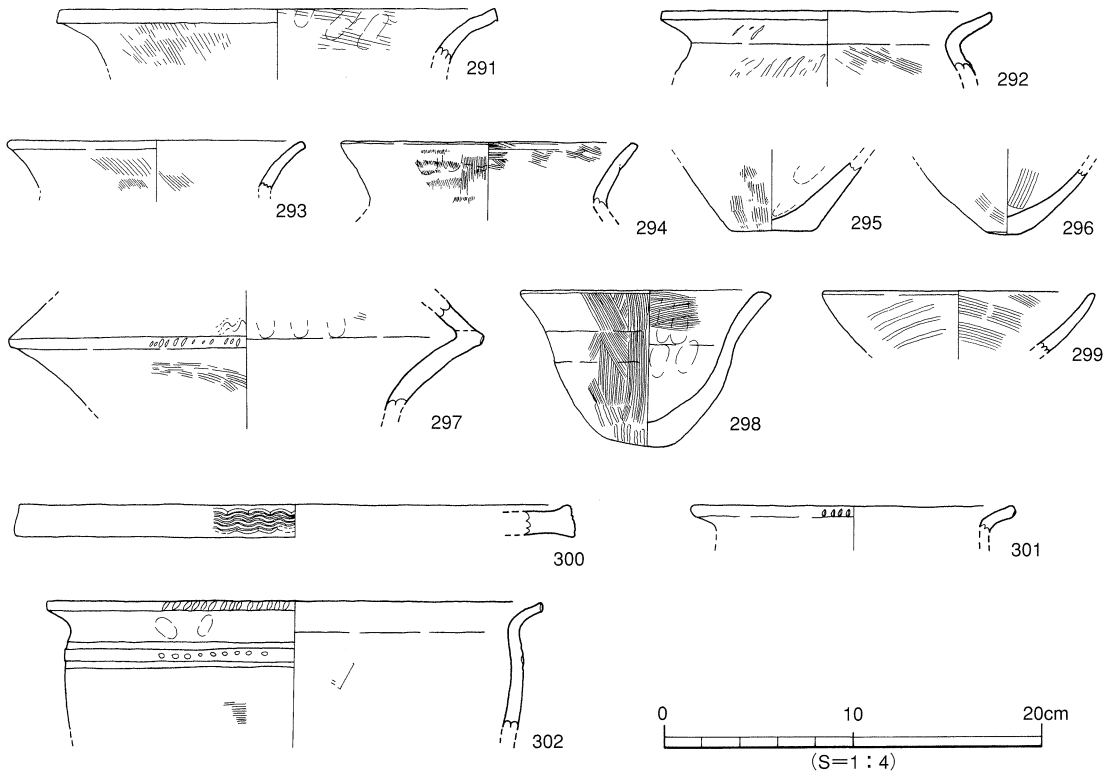
支脚形土器（323）　体部でくびれをもち、受部は開く。器高は低く6cmを測る。

鉄鏃（314）　ほぼ完形品で長さ9.2cm、幅2.5cm、重さ15.9ｇを測る。

管玉（315）　薄い灰緑色を呈する碧玉製の完形品である。

ＳＢ３０４（第51・71・72図、図版45・53）

ＳＢ304は調査区北寄りのD5～7区で検出した。西側のＳＢ301からは約10m、南西側のＳＢ302からは8.6mを測る位置にある。他の方形住居址とは方向が多少異なり西へふる。



第64図　SB301出土遺物実測図

住居址は北西隅と西壁の検出にとどまる。南東の壁際で掘り方が少しカーブを描いており、この部分が南西隅になる可能性がある。よって、平面形態は方形を呈するものと思われる。住居址の西壁は長さ約800cm、北壁は検出長220cm、壁高40cmを測る。埋土は3層に分層され、埋土①層は黒灰色土、埋土②層は褐色土に茶褐色土が混じるもの、埋土③層は黒色土に褐色土が混じるものである。埋土③層中には基本層位の第Ⅵ層がブロック状に混入している。内部施設は周壁溝と主柱穴1基がある。周壁溝は幅16～33cm、深さ2～9cmを測る。断面形態はレンズ状である。主柱穴の平面形態は円形で、径36cm、深さ62cmを測る。住居址からの出土遺物は甕形土器・壺形土器・鉢形土器他が床面から出土している。

出土遺物（第72図、図版53）

324～342は弥生式土器である。340の器種は不明。

甕形土器（324～326）　324は外反する口縁部のものである。325・326は平底の底部である。

壺形土器（327～332）　327・331は複合口縁壺で327は口縁部に6条の波状文ののち4条の沈線文を施す。329・332は外反する口縁部をもち、328は外傾する筒状の頸部をもつ。330は長径壺である。

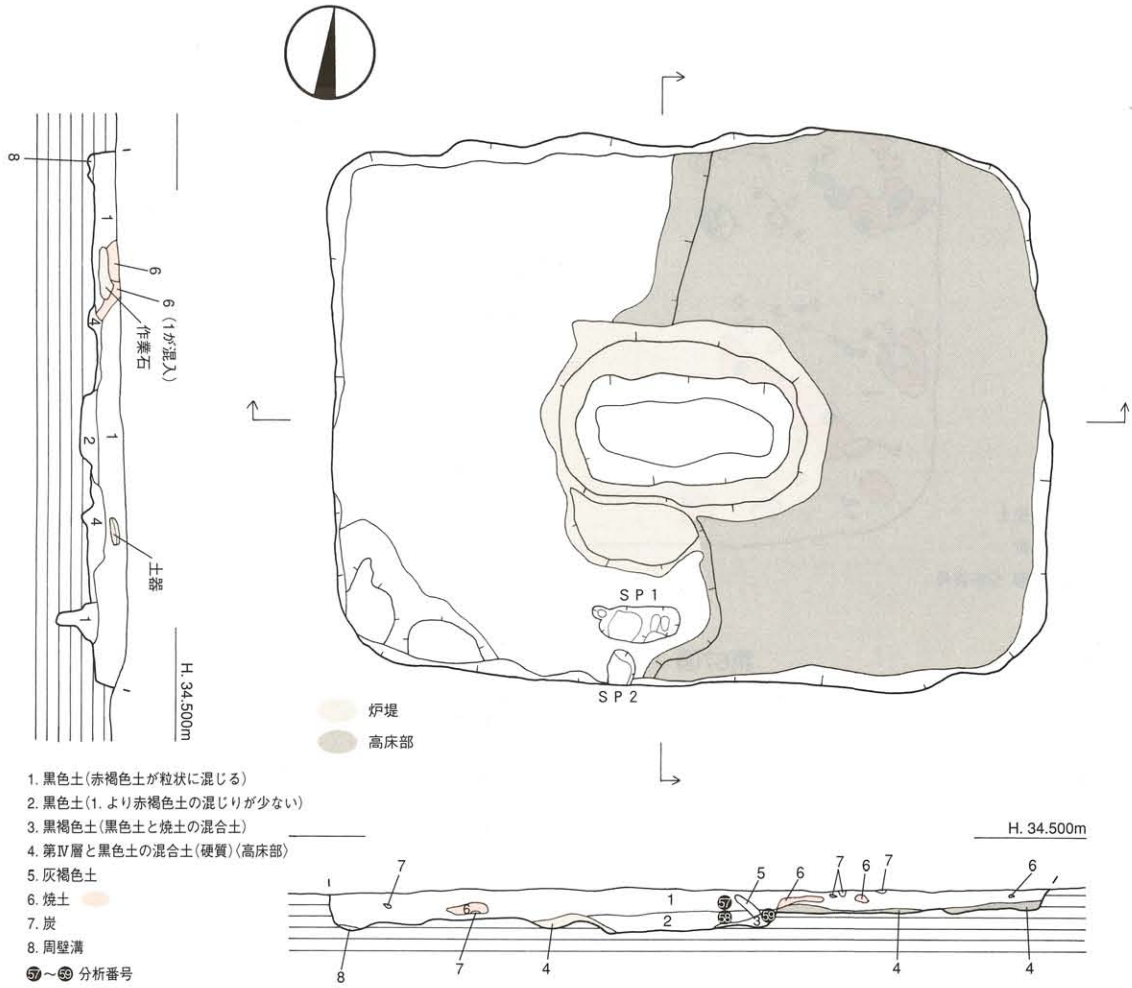
鉢形土器（333～337）　337は台付きのもので6方向に円孔を穿つ。

高坏形土器（338・339）　338は脚裾部で屈曲部に半截竹管文（二段のＳ字状）と円孔（数は不明）を穿つ。

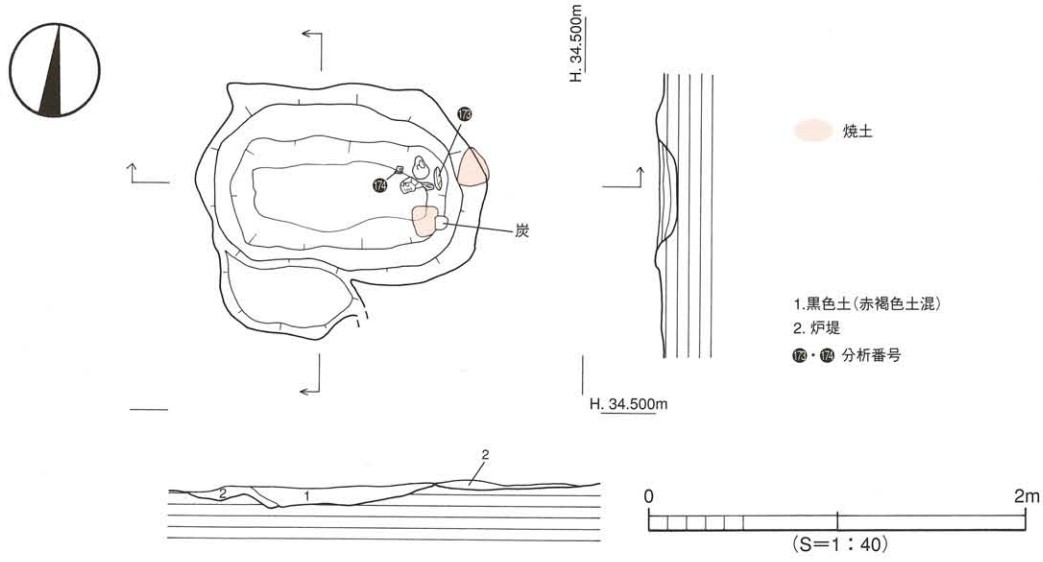
支脚形土器（341・342）　341は器壁は厚く「ハ」字状に開く裾部。342は外反する裾部である。

ＳＢ３０５（第73図）

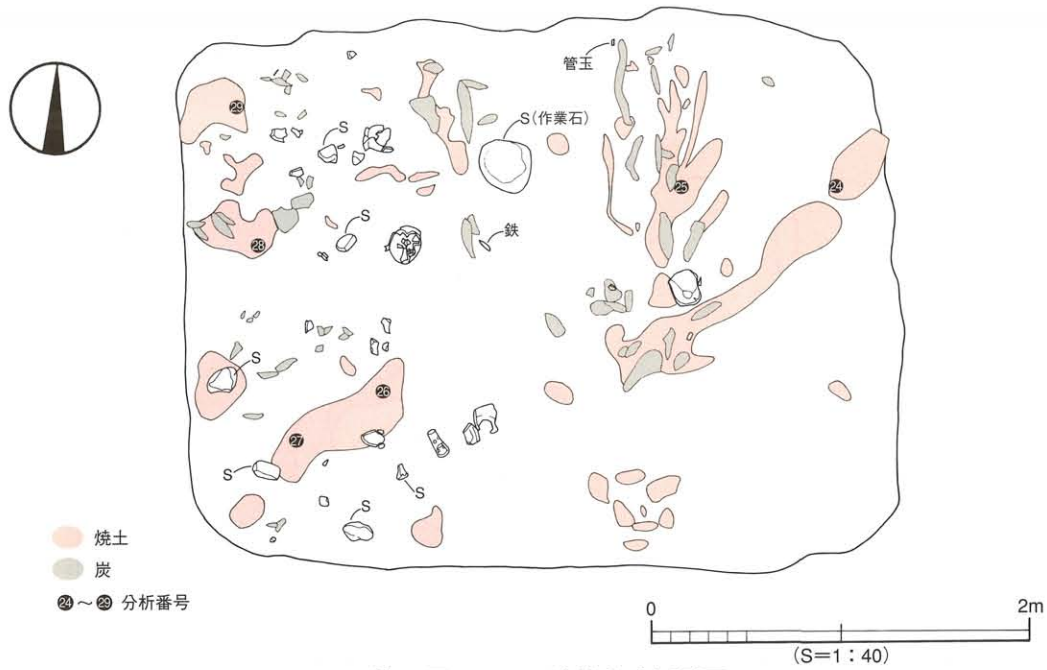
ＳＢ305は調査区中央部のＡ8・9区で確認された。ＳＢ301からは南7m、ＳＢ302からは北西2mの位置である。基本土層確認のためのａトレンチ掘削時に本住居の北東コーナーを検出し、平面形態は



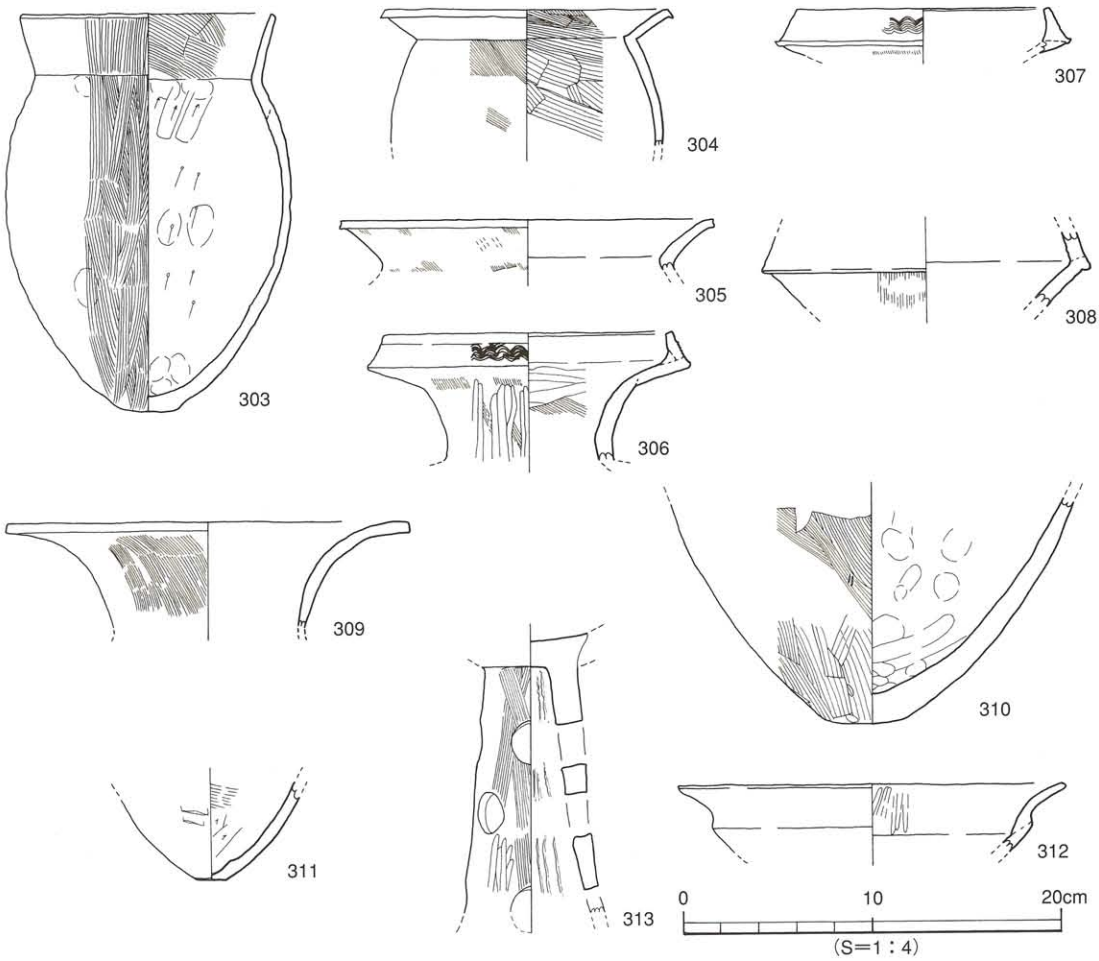
第65図　SB303測量図



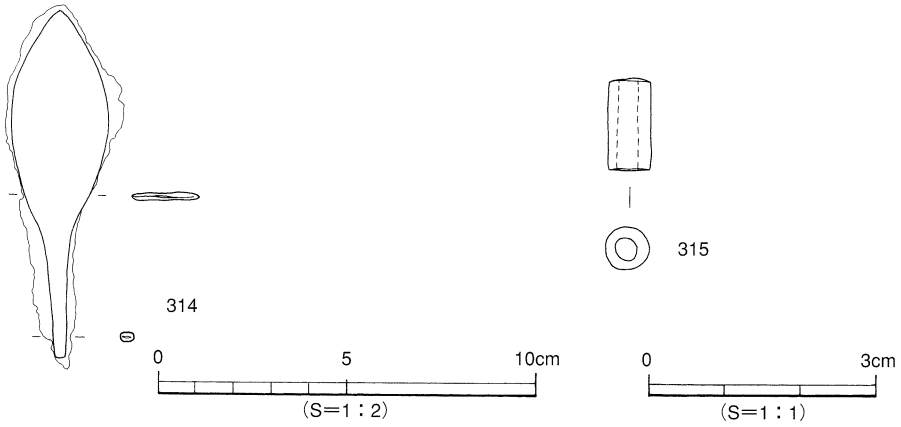
第66図　SB303炉測量図



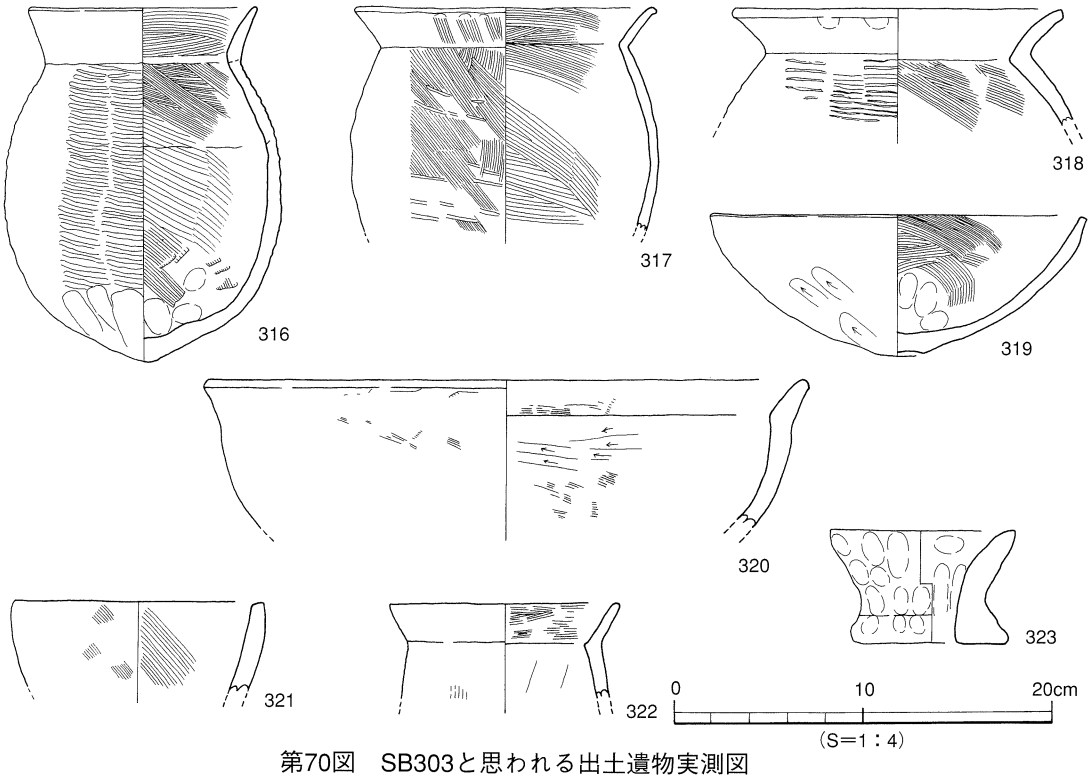
第67図　SB303遺物出土測量図



第68図　SB303出土遺物実測図（1）



第69図　SB303出土遺物実測図（2）

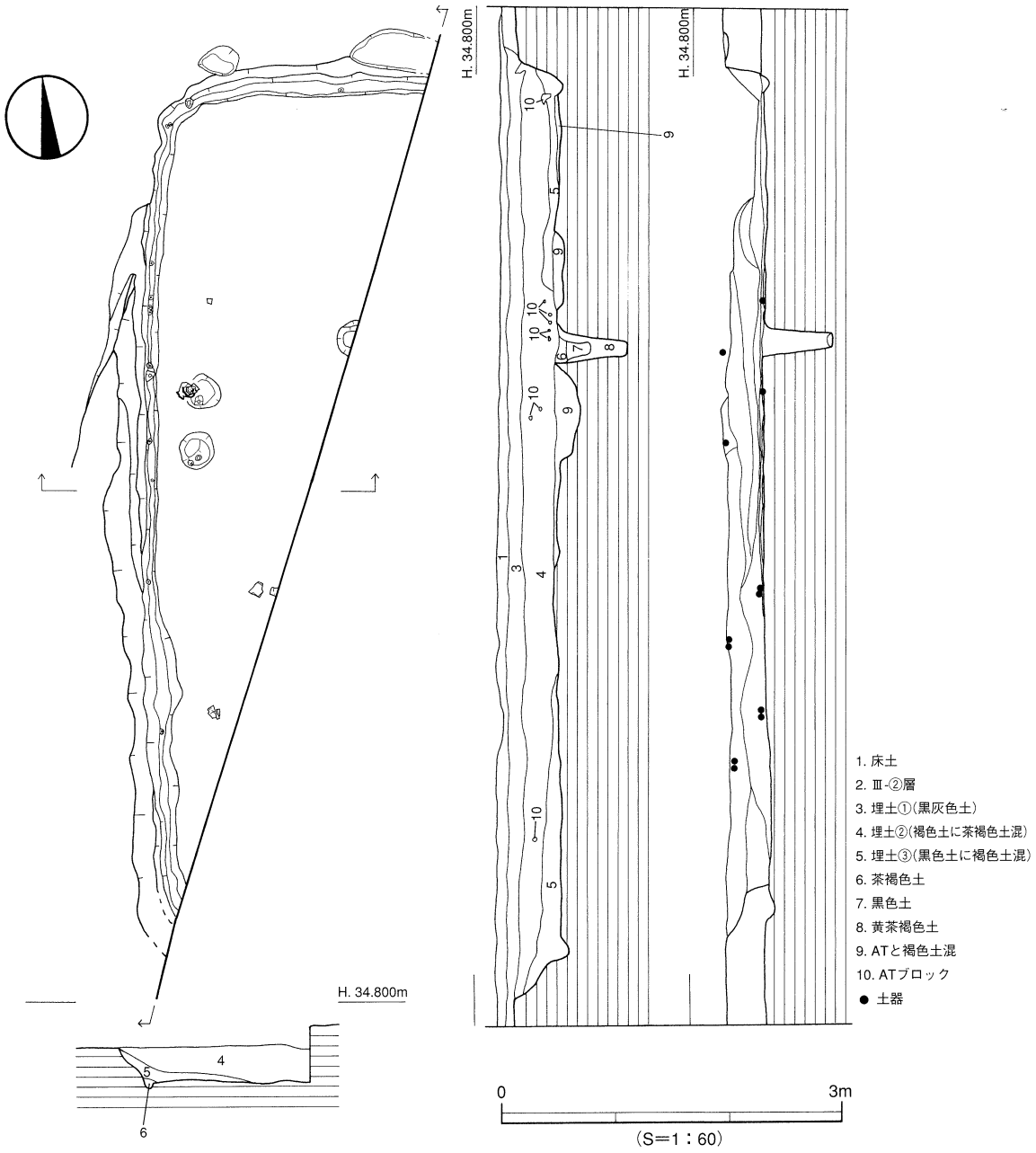


第70図　SB303と思われる出土遺物実測図

方形であることを確認した。ただし、土層確認のために北東コーナーを削平してしまったために、結果的には本住居址は西壁（調査区）で確認するにすぎなくなった。住居の規模は調査区西壁では南北443cmを測るが、この数値は住居址の1辺長ではない。壁高は約70cmを測る。住居址の埋土は3層に分層でき、上層は黒色粘質土（黄色土ブロックが散在）、中層は上層土よりも黒色が強く粘性も強い土と暗褐色粘質土（焼土・黄色土ブロック混入）からなる。下層は褐色粘質土（焼土・黄色土ブロック混入）である。なお、下層は上面が平坦であること、焼土や黄色土のブロックが混入すること、出土土器が細片で少量であることから床面の整地土であると思われる（貼床）。

住居の掘り方は2段になっており、上・下段の壁下には凹みが見られる。このうち下段の凹みはaトレンチ掘削の際に平面で溝として確認されていたもので周壁溝と考える。

遺物は西壁より弥生土器の小片が少量出土した。

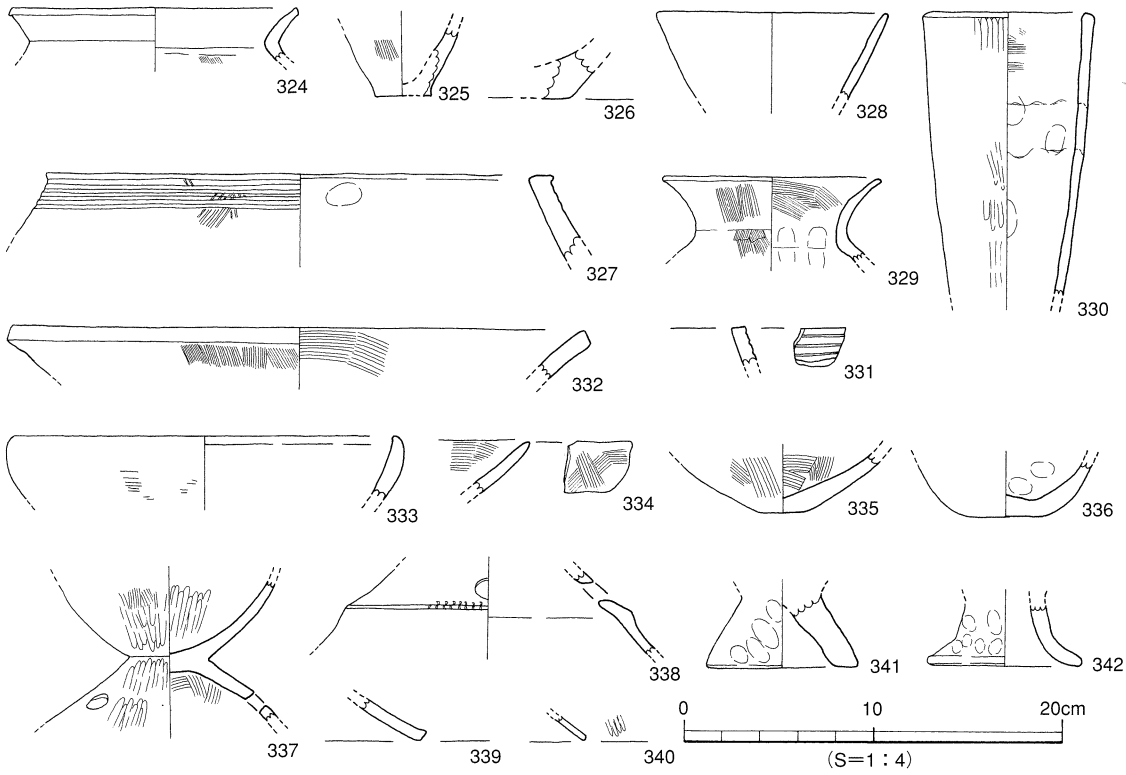


第71図　SB304測量図

２）溝（ＳＤ）

ＳＤ２０１（第74図、図版54）

調査区北西のＡ2～5区にある。第Ⅳ層上面で検出したが、本来は第Ⅲ①層上面からの切り込みである。この溝は2区のＳＤ201に続き、直線的な溝で、総長は72ｍを測る。3区での検出長は13ｍ、上場幅は中央部で70㎝、深さは北部で10㎝、南部で17㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈する。基底面は北から南へ傾斜している。埋土は細分すれば6層に分かれ、北部では1・2層が堆積し、南部では1・2層の堆積はみられず3～6層が互層堆積している。また、3～6層中には石粒が混入しているため、若干流水はあったものと考えられる。溝の南延長部はａトレンチで切られている。西壁土層精査の結果、竪穴住居址ＳＢ301との切り合い関係はなく、ＳＢ301の北側で西へ向くものと思われる。遺物には弥



第72図　SB304出土遺物実測図

生土器の甕形土器・壺形土器・鉢形土器などがあり、甕形土器の破片は比較的大きく、基底面より浮いた状態で検出した。

343～348は弥生式土器である。甕形土器（343～345）343は外反する口縁部で長丸型の胴部である。壺形土器（346）平底。鉢形土器（347・348）347はやや外傾、348は端部が外反する口縁部。

時期：出土遺物の形態及び埋土より、弥生時代後期末に埋没したと考えられる。

ＳＤ３０３（第51図）

調査区中央部のＡ6～Ｃ6区で検出した。上場幅40cm、深さ約10cm、検出長9.5mを測る。断面形態はレンズ状を呈するが、掘り方があまり明確でない。埋土は黒色土の単一層で、遺物の出土はない。

時期：埋土より弥生時代後期末と考える。

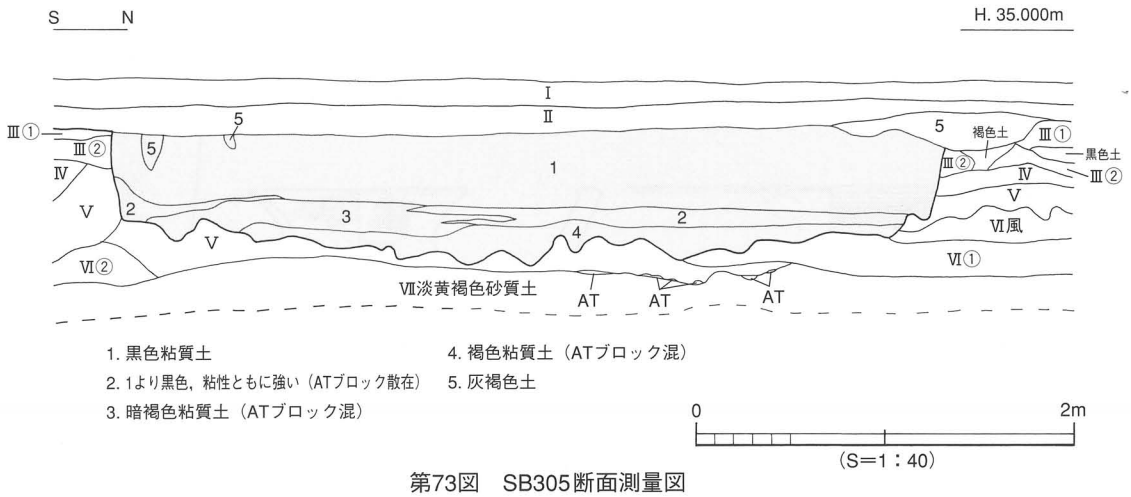
ＳＤ３０４（第51・75・76図、図版54）

調査区南部のＡ14～Ｃ15区での検出である。Ｃ14区では直角に曲がる平面プランをもつ。上場幅は最小26cm、最大64cm、コーナー部分は130cm、深さは10～16cm、検出長12.9mを測る。断面形態は皿状を呈する。基底部は南より北まではほぼ水平で、コーナー部分は少し高くなっており、西下がりに傾斜している。埋土は黒色土（やや粘性）の単一層である。遺物は弥生土器の鉢形土器、高坏形土器等の破片がコーナー部に集中して出土したが、全体では少量である。

時期：出土遺物の形態及び埋土より、弥生時代後期末に埋没したと考えられる。

ＳＤ３０５（第51・71図、図版54）

調査区中央北部の東側Ｄ7・8区で検出した。ＳＢ304とＳＫ303・304に切られ、ＳＤ306を切る。南北方向の溝で、ＳＢ304との切り合い部分でやや東へ曲がり、ＳＤ201とほぼ並行する。上場幅約100



第73図　SB305断面測量図

cm、深さ約10cm、検出長5mを測る。断面形態は段を2段もち、皿状を呈し、東側が深い。埋土は2層に分かれ、上層は黒色土、下層は茶褐色土（砂質に近い）である。遺物は弥生土器の甕形土器・壺形土器・鉢形土器などが出土したが、いずれも小片で少量である。

時期：出土遺物の形態より、弥生時代後期末に埋没したと考えられる。

ＳＤ３０６（第51・78図）

調査区中央のＤ7区で検出し、ＳＤ305に切られる。上場幅50cm、深さ約8cm、検出長1.6mを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は黒色土の単一層で、遺物は弥生土器片が少量出土した。

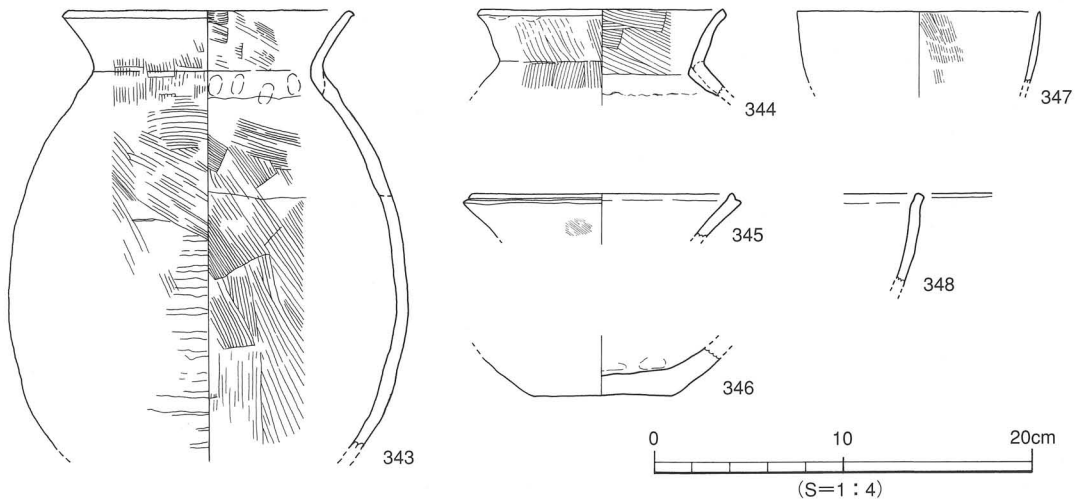
遺構の埋土・断面形態・溝幅などから未調査部分で蛇行しＳＤ303につながる可能性が考えられる。

時期：ＳＤ305に切られるために、弥生時代後期末以前に埋没したと考える。

３）土坑（ＳＫ）

ＳＫ３０３（第51・81図、図版55）

調査区中央東寄りのＣ8・Ｄ8区で検出した。溝ＳＤ305を切る。平面形態は南壁と西壁を撹乱で欠如するが、方形を呈するものと思われる。規模は南北1.75m、東西1.97m、深さ19cmを測る。断面形態は残存部分で逆台形を呈する。埋土は黒色土である。遺物は弥生土器の甕形土器・壺形土器・高坏



第74図　SD201出土遺物実測図

形土器が出土したが、いずれも小片である。

時期：出土遺物の形態及び埋土より、弥生時代末に埋没したと考えられる。

ＳＫ３０４（第51・81図、図版46・55）

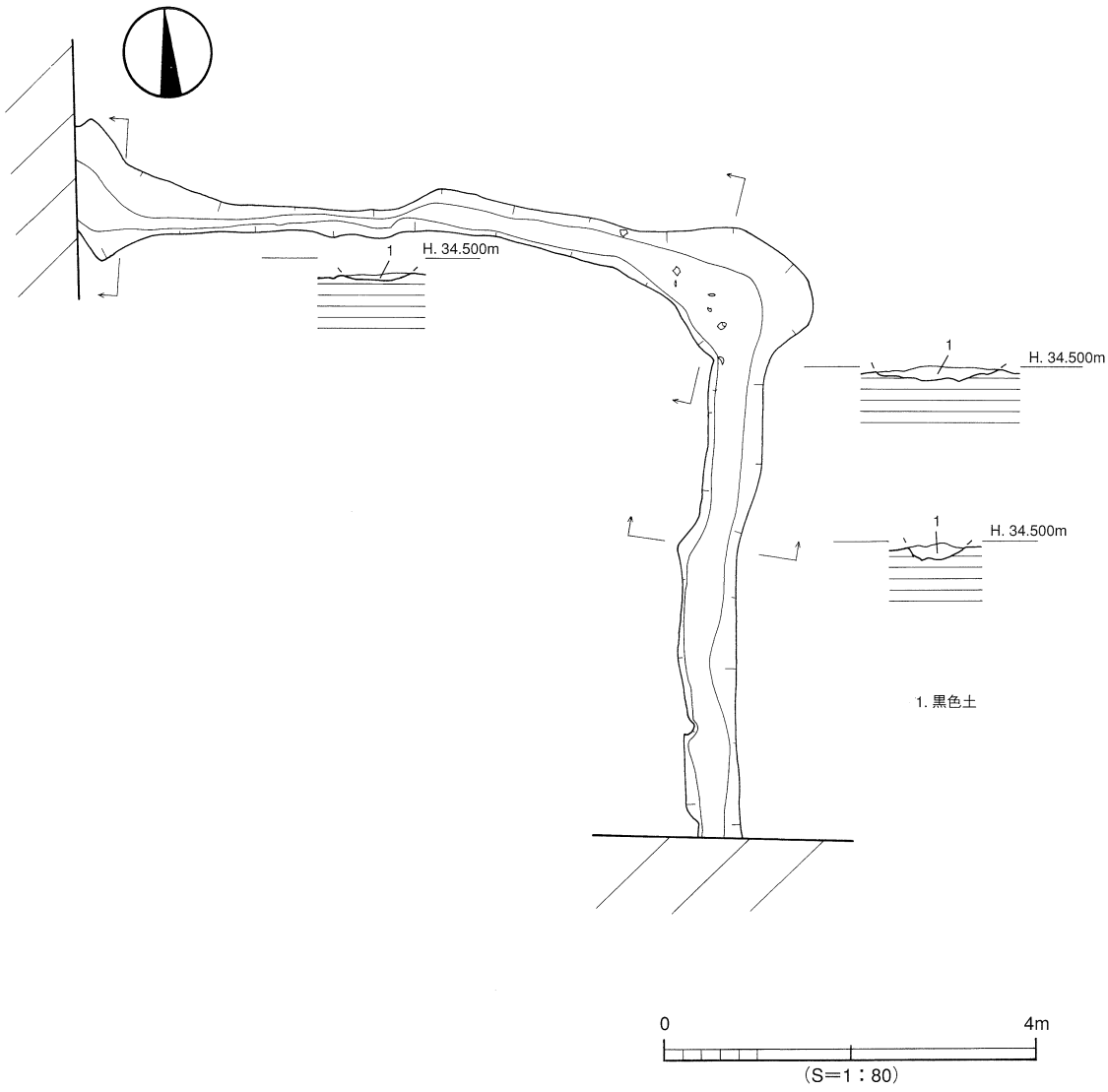
調査区中央東よりのＤ7区で検出した。ＳＤ305を切る。平面形態は楕円形で、規模は長軸127㎝、短軸69㎝、深さ40㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈し、基底面は2段である。埋土は黒色土である。遺物は弥生土器の小片が少量出土した。

時期：出土遺物の形態より、弥生時代末に埋没したと考えられる。

ＳＫ３０５（第51・79・81図、図版46・55）

調査区北部のＣ4区で検出した。平面形態は円形で、径72～78㎝、深さ30㎝を測る。断面形態は舟底状を呈する。埋土は黒色粘質土である。遺物は弥生土器の甕形土器と鉢形土器が出土した。遺構の埋土は黒色粘質土である。本土坑は、埋土がやや泥炭土に似ていることや鉢形土器の破片が大きいことなどから貯蔵穴と考えられる。

時期：出土した鉢形土器の形態より弥生時代後期末に埋没したと考えられる。



第75図　SD304測量図

ＳＫ３０６（第51・81図、図版47・55）

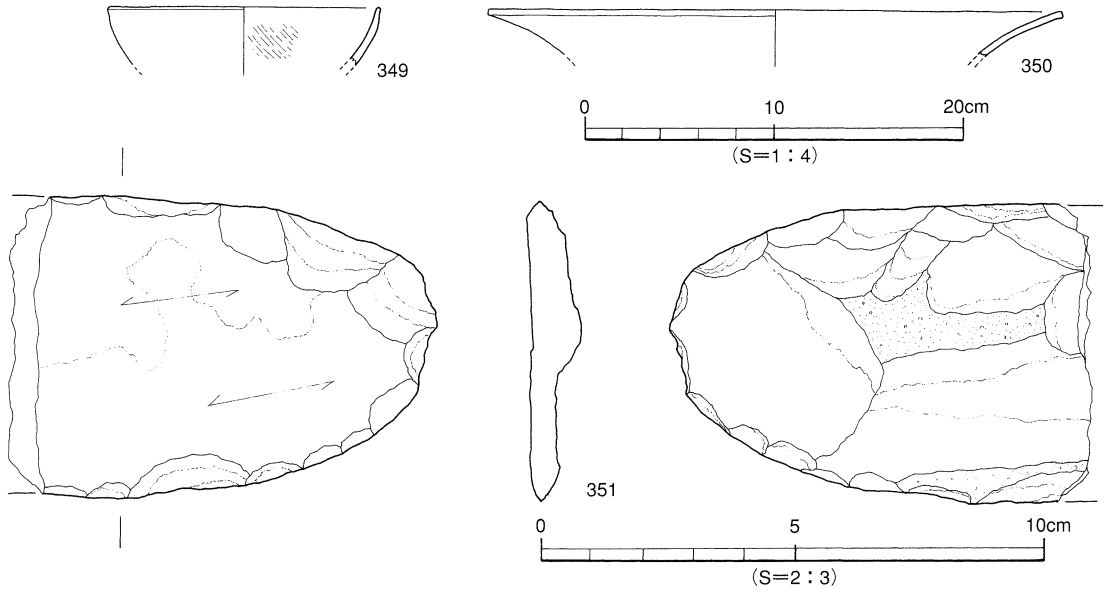
調査区北部のＢ5区で検出した。ＳＫ305からは南西約4.5ｍの地点である。平面形態は円形で、径約70㎝、深さ41㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は黒色粘性土（黒色泥炭土に近い）である。遺物は弥生土器の壺形土器・鉢形土器の小片が出土した。遺構の規模や埋土などがＳＫ305と似ていることから貯蔵穴と考えられる。

時期：出土遺物の形態より弥生時代後期末に埋没したと考えられる。

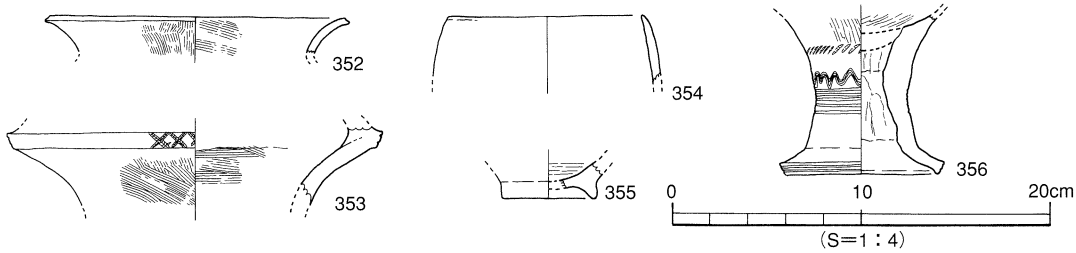
ＳＫ３０７（第51・80・81図、図版47・55）

調査区南端西寄りＡ15区で検出した。平面形態は楕円形で、規模は南北78㎝、東西45㎝、深さ18㎝を測る。断面形態は南北で皿状を呈する。埋土は黒灰色粘性土である。遺物は弥生土器片が少量と、石器の素材と思われる結晶片岩が壁際より出土した。

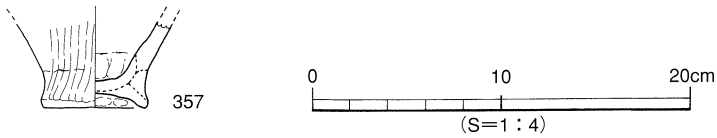
時期：出土遺物の形態より弥生時代後期末に埋没したと考えられる。



第76図　SD304出土遺物実測図



第77図　SD305出土遺物実測図



第78図　SD306出土遺物実測図

ＳＫ３０８（第51・81図、図版55）

調査区南部のＣ15区で検出した。平面形態は円形、規模は径55cm、深さ35cmを測る。断面形態は上部が少し広くなるが「U」字状を呈する。埋土は黒色土である。遺物は弥生土器の甕形土器・支脚形土器などの小片が出土した。この土坑も遺構の規模などから貯蔵穴と考えられる。

時期：出土遺物の形態より弥生時代後期末に埋没したと考える。

ＳＫ出土遺物（第81図・図版55）

ＳＫ303出土（358～363）。ＳＫ304出土（364）。ＳＫ305出土（365～367）。ＳＫ306出土（368・369）。ＳＫ307出土（370・371）。ＳＫ308出土（372～374）。器種は甕形土器358・365・366・372。壺形土器359・360・364・368・370。鉢形土器367・369。高坏形土器361・362。器台形土器363。支脚形土器373・374。石器の石材371。

４）柱穴（ＳＰ）（第51・82図、図版59）

弥生時代と思われる柱穴は、108基検出された。調査区全面に散在するが、北部側にやや密集する。平面形態はほとんどのものが円形ないし楕円形である。埋土は黒色土～暗茶褐色土がある。規模は径20cm前後から40cm前後を測るものが多い。遺物の出土はほとんどなく、数基の柱穴より弥生土器の小片が少量出土したにすぎない。

柱穴は埋土の違いにより少なくとも4分類される。

ａ類：埋土は黒色土であるもの　67基
ｂ類：埋土は黒色土に似ているが混入したもの　17基
ｃ類：埋土は茶褐色土に黒色土が混入したもの　6基
ｄ類：埋土は暗茶褐色土のもの　18基

ａ類は調査区全体で見られ、検出数も一番多い。ｂ類は調査区全体に散在するが北部での検出が目立つ。ｃ類は検出数も少なく、調査区北部に限り見られる。ｄ類は調査区全体に散在するが、ｂ類と同様に北部に多く見られる。

次に柱穴の切り合い関係をみる。ａ類とｃ類には切り合い関係がなく、ａ類とｃ類はｂ類に切られる。ｄ・ｃ類はｂ類に切られる。よって、柱穴はｂ類が新しく、次にｄ類、つづいてａ類及びｃ類の順となる。また、柱穴の形態・規模・埋土・切り合い関係などをもとにして掘立柱建物の復元に努めたが、建物として確定できるものはなかった。

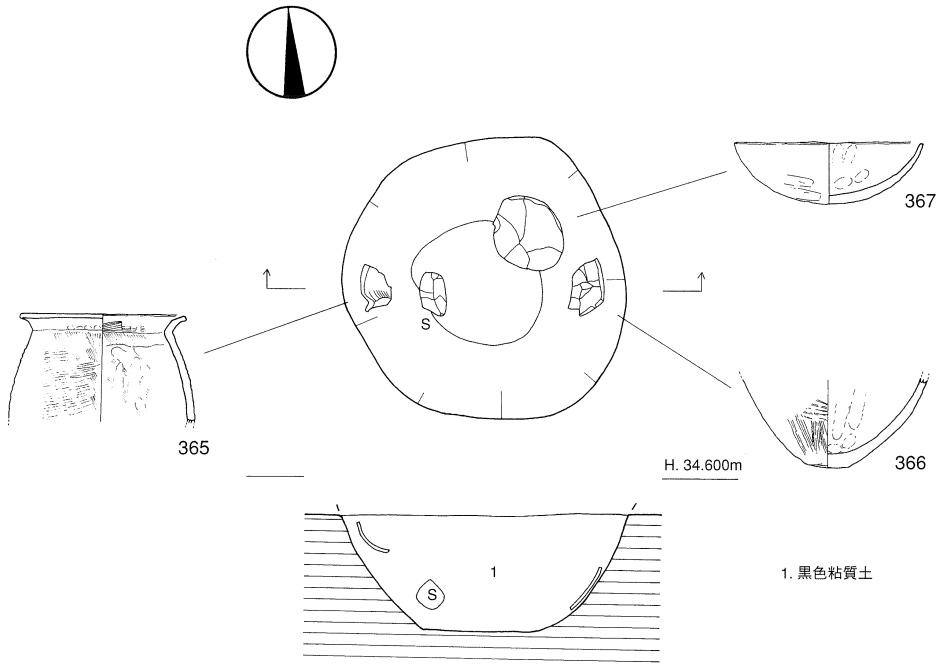
〔３〕古墳時代

古墳時代の遺構は溝1条、土坑1基が確認された。溝は調査区南部、土坑は調査区北壁際で、ともに3層上面での検出である。

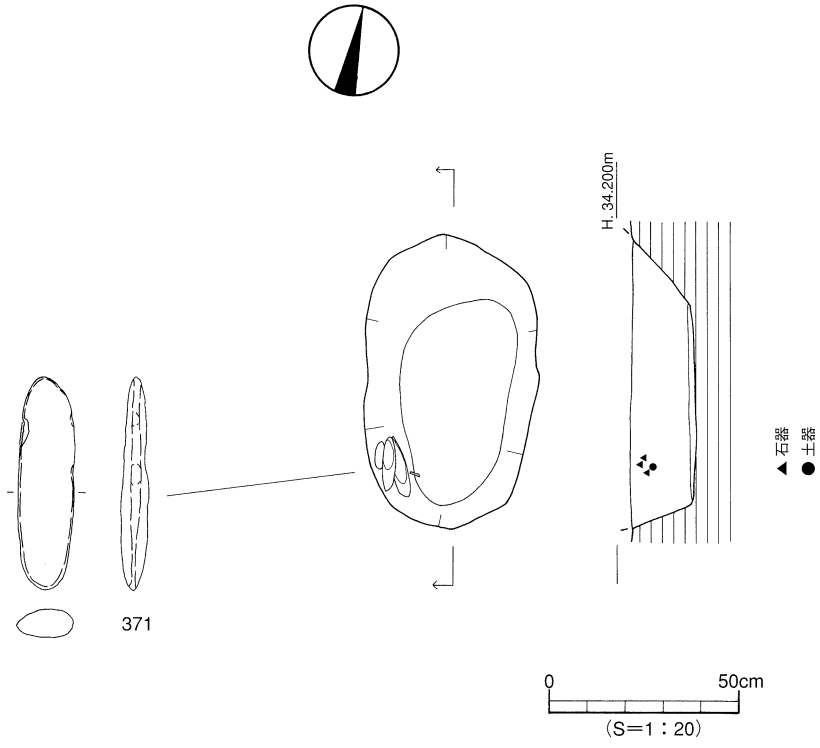
１）溝（ＳＤ）

ＳＤ３０１（第48・51・83図、図版48・56）

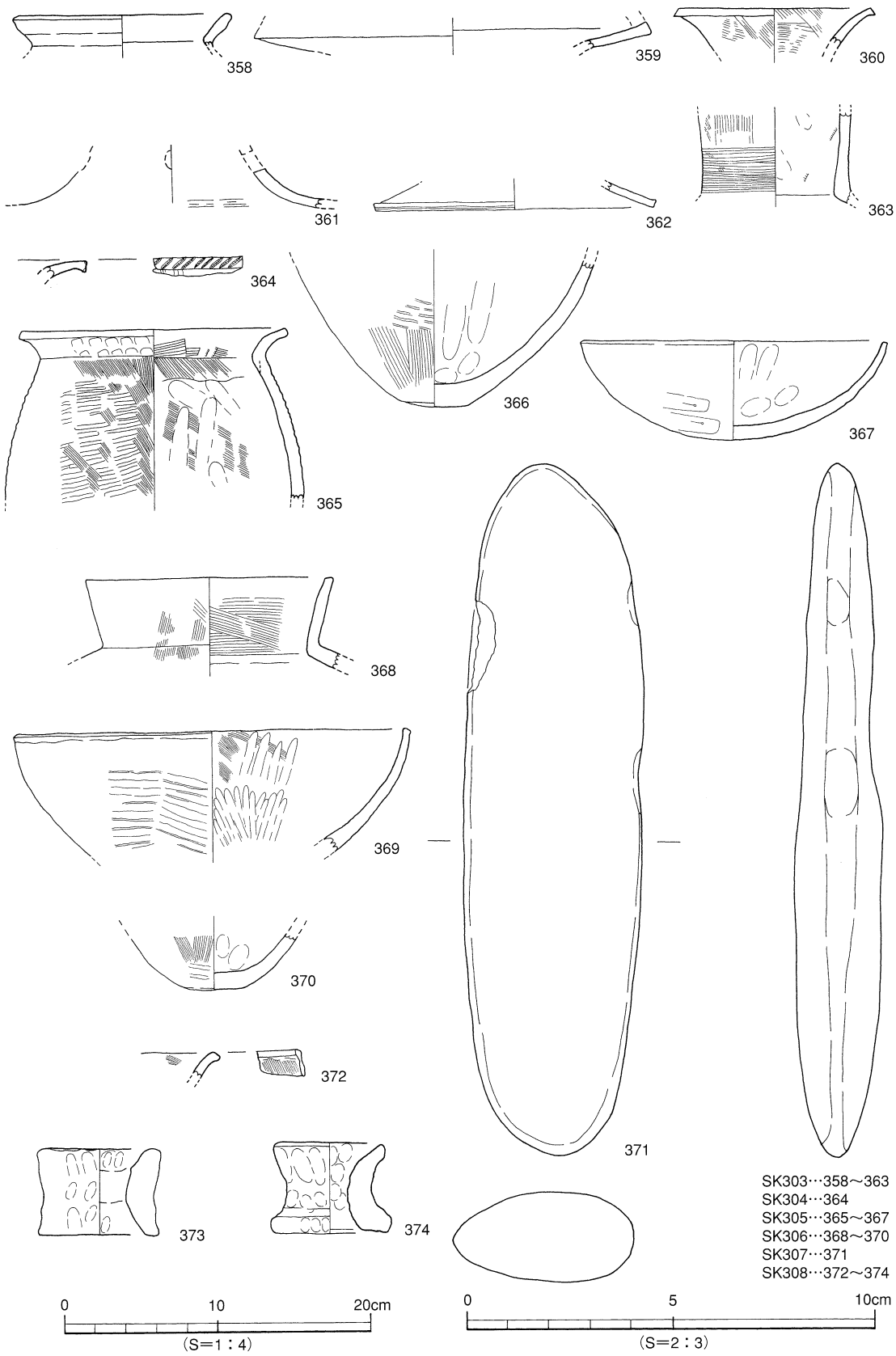
調査区南側、Ａ12～Ｃ13区で検出した。調査区を北東から南西に横切る溝である。規模は検出長14m、上場幅約4m、深さは北側で36cm、南側で56cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、基底面は北側が浅く、2段の溝となっている。埋土は2層に大別され、上層は細砂質土と細砂の互相堆積土、下層は粗砂質土である。遺物は上・下層ともに弥生土器・土師器・須恵器・石製品が出土した。上・下層とも弥生土器は小片で、角が丸く磨滅を受けている。須恵器は上層からの出土が多く、下層からは小片の出土である。埋土の堆積状況や混入遺物である弥生土器片の出土状況から、流水のある溝と判断さ



第79図　SK305測量図



第80図　SK307測量図



第81図　SK出土遺物実測図

れ、水路の可能性が考えられる。

出土遺物（第85図、図版56）

378～386は須恵器。387・388は石製品である。

坏蓋（378～381）　378～380は天井部との境にわずかに稜が残るものである。

坏身（382～386）　立ち上がりは短く内傾し、受部は水平もしくはやや上外方に延びる。

石鏃（387）ほぼ完形品。石材はサヌカイト。石錐（388）約2/3残存。石材はサヌカイト。

時期：出土遺物の坏の形態より6世紀末の溝と考える。

２）土坑（ＳＫ）

ＳＫ３０２（第51・85図）

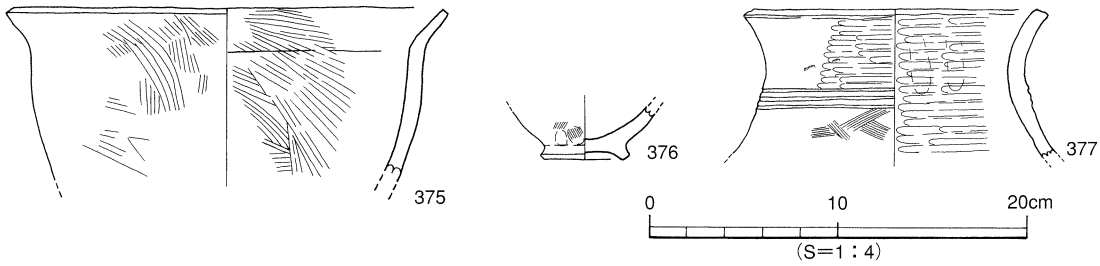
調査区北端部Ｂ2～Ｃ2区での検出である。本土坑は調査区外の北へ伸びるものと思われ、全容は不明である。検出された部分の規模は東西310cm、南北120cm、深さ25cmを測る。断面形態は皿状である。埋土は2層に分層でき、上層は灰黄褐色砂、下層は灰黄茶褐色砂質土である。遺物は上・下層より弥生土器・土師器・須恵器が出土したが、ほとんどのものが小片で角が丸く磨滅している。

この土坑は埋土が砂質土ないし砂であること、遺物が小片で磨滅を受けていることなどから、流路の湾曲部の一部分とも考えられる。

出土遺物（第85図）

389は須恵器片で器種不明。390は弥生式土器の壺口縁部片。半截竹管文を施す。

時期：出土遺物が小片であり時期比定は難しいが、出土遺物と埋土より古墳時代以降と考える。



第82図　SP出土遺物実測図

〔４〕その他の遺構と遺物

倒木（ＳＸ）

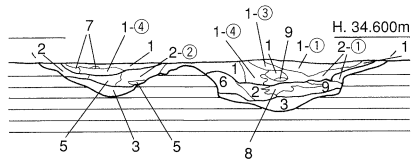
倒木痕跡は3基を検出した。倒木痕の調査は調査期間の関係より平面形態と倒壊方向を調査するにとどめた。

ＳＸ３０１

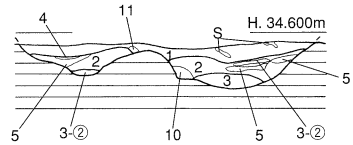
調査区中央のＡ・Ｂ8区で検出した。平面形態は楕円形で、径4～4.5mを測る。平面での土層観察では北半部で基本層位の第Ⅲ②層、南半部では基本層位の第Ⅵ層～第Ⅶ層が見られることから、北東方向へ倒壊したものと判断できる。なお、ＳＸ301はＳＢ305に切られており弥生時代後期末以前のものである。

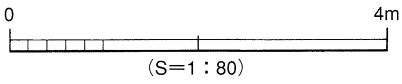
ＳＸ３０２

調査区中央Ａ9区、ＳＸ301の南で検出した。平面形態はほぼ円形で、径3mを測る。平面での土層観察では北半部に第Ⅲ②層、南半部に第Ⅵ層・第Ⅶ層が見られ、北方向へ倒壊したものと判断できる。

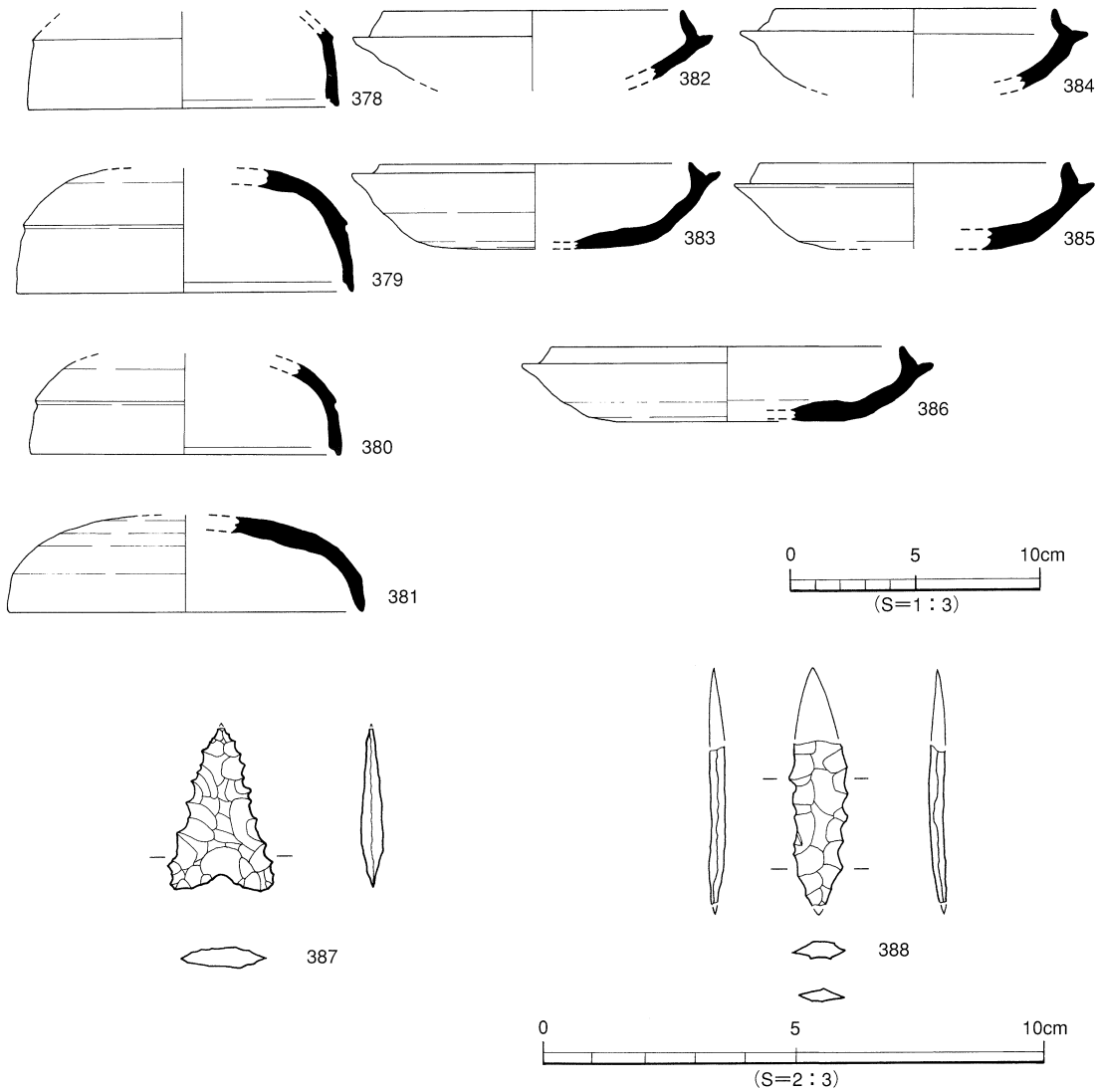


1. 灰黄褐色砂質土（粗砂）
1-①. 1に黒色土混じり
1-②. 1に灰色土混じり
1-③. 1に灰色粘土の混合
1-④. 1に灰黄色細砂の混じり
2. 暗灰褐色土
2-①. 2に黒色土が混じる
2-②. 2に緑色微砂混じり
3-①. 灰褐色粗砂
3-②. 灰褐色微砂
4. 灰色粘土
5. 灰褐色砂
6. 黒色土
7. 暗灰色粗砂
8. 暗灰色砂
9. 灰黄色微砂
10. 黒褐色粘土と暗褐色混じりのブロック
11. 暗灰黄褐色土ブロック

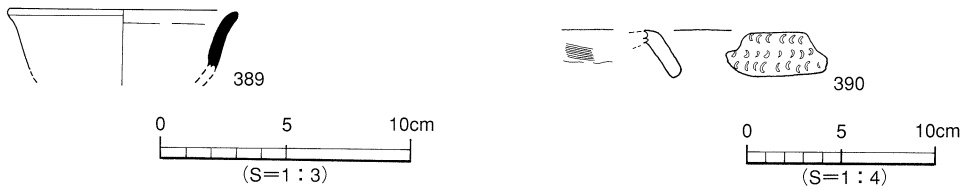




第83図　SD301測量図



第84図　SD301出土遺物実測図



第85図　SK302出土遺物実測図

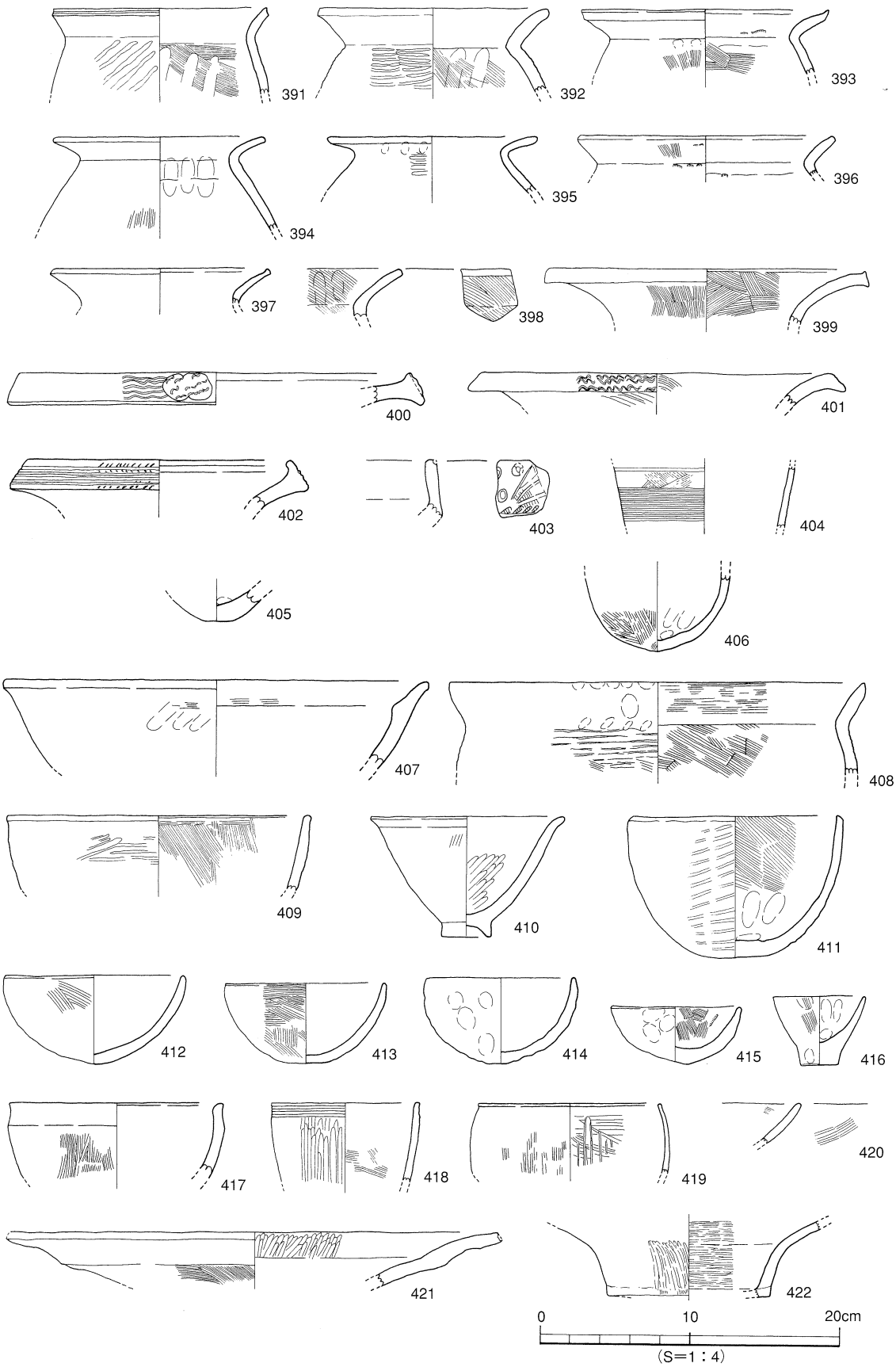
ＳＸ302はＳＢ303・305に切られており弥生時代後期末以前のものである。

ＳＸ３０３

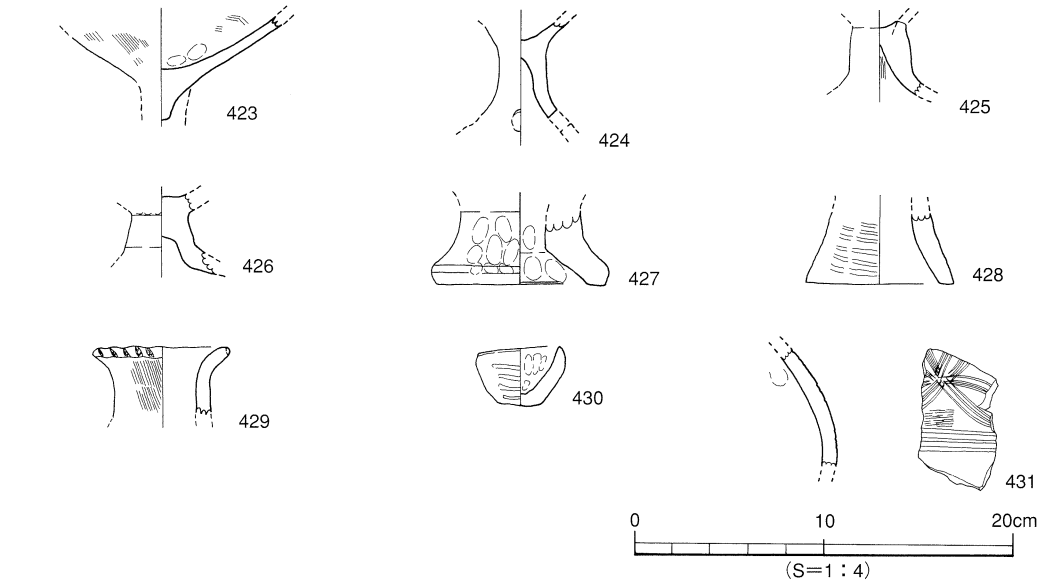
調査区南寄りのＡ11区で検出した。東半部はａトレンチにより欠除しており、全容は不明である。平面形態は残存部分で楕円形を呈し、検出径112㎝を測る。倒木方向は、第Ⅵ層及び第Ⅶ層がａトレンチに切られているため確認できなかった。

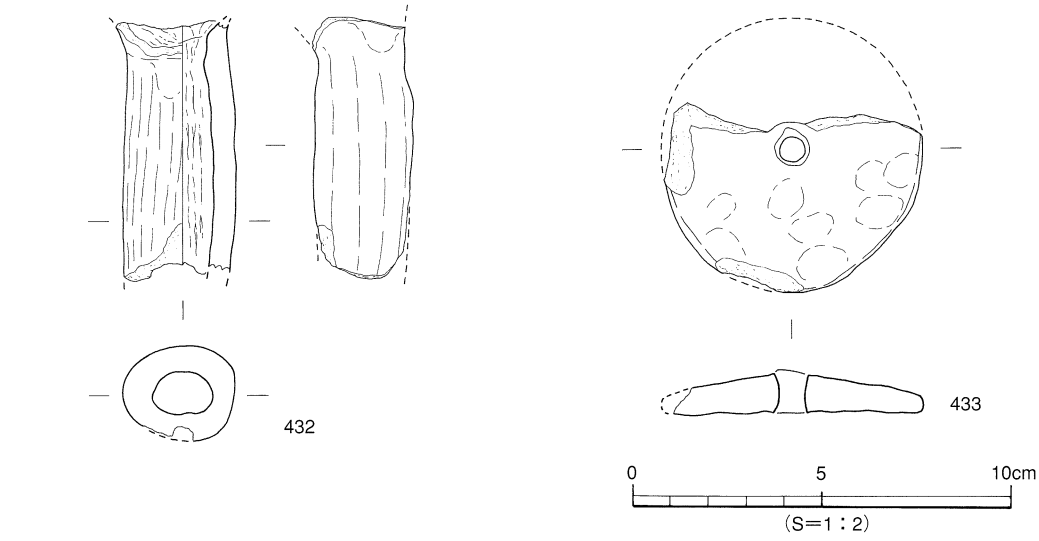
その他の出土遺物（第86図、図版56～58）

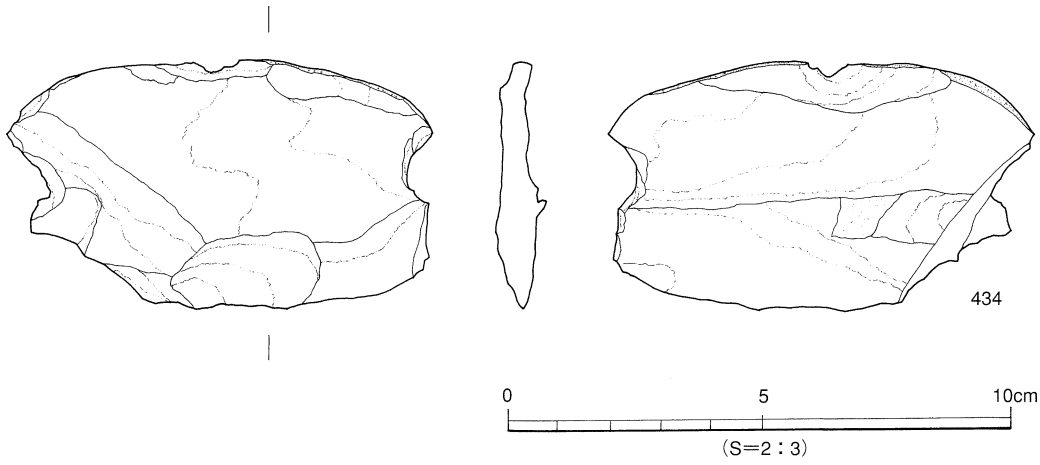
その他の出土遺物は第Ⅲ層を掘削中に取り上げたものである。これらは第Ⅳ層中に部分的に密集し



第86図　その他の出土遺物実測図（1）







第87図　その他の出土遺物実測図（2）

て出土（２．層位）したもので本来は何らかの遺構に依存していたと考えられる。

甕形土器（391～398）　外反する口縁部で口縁端部は394は丸くおさめ他は面をもつ。

壺形土器（399～406）　399～401は広口のもので400・401は口縁端部に加飾を施す。403は複合口縁。

鉢形土器（407～420）　407・408は大型品である。410は立ち上がりをもつ上げ底で口縁部は外反する。411～415は底部よりやや内湾気味に上方へ立ち上がる口縁部をもつものである。

高坏形土器（421～426）　421～423は坏部片で422は坏部は深い。424～426は脚柱部で424は円孔をもつ。

支脚形土器（427～429）　427・428は脚底部片。429は受部片で口端面に刻目を施す。

ミニチュア土器（430）　鉢形タイプのもので器壁は厚く平底の底部。

土製品（432・433）　432は中空柱状のもので器種不明。433は紡錘車で円孔は焼成前である。

石庖丁（434）　外湾刃のもので両面に抉りが施される。

４．小　結

この3区においてもアカホヤ火山灰とＡＴ火山灰を検出した。アカホヤ火山灰は調査地全域にあり、5～10㎝の堆積である。ＡＴ火山灰も同じく調査区全域にあり、20～100㎝の堆積である。

（１）層　位

第Ⅲ層から下位層は、調査区Ｄ11区からＡ12区にかけて地形が低くなっている。また、地形は東から西へ傾斜し、さらには調査区南へ徐々に高くなっている。高くなった部分では柱穴や土坑・溝などを検出した。竪穴式住居址はＡ12区より北側にあり、古墳時代の溝ＳＤ301はＡ12～Ｄ11区の低い地形を利用している。

（２）先土器時代～縄文時代

検出された石器と焼痕は、時期決定に有効な土器の出土がないが、アカホヤ火山灰の下から検出されたため、時期の下限は限定できるものである。また、アカホヤ火山灰と石器・遺構がセットで検出された例は四国初であり、貴重な資料である。

（３）弥生時代

弥生時代の遺構はほとんどのものが後期末に位置づけられる。

竪穴式住居址は円形で大型のもの1棟、方形で大型のもの2棟、小型のもの2棟を検出した。

大型の円形住居ＳＢ302　大型円形住居址の類例は東本遺跡2次調査（ＳＢ01）や本調査の2区のＳＢ203などがある。2棟の住居址は炉が住居址の中央よりやや南側に位置し、主柱穴が外側と内側にあり2重の構造となる。一方、ＳＢ302は炉と主柱穴が外側に10本巡るが、炉を囲む主柱穴の構造に差が認められる。この違いは上屋構造の差に関係するものと考えている。

大型円形住居址ＳＢ302は出土遺物に銅鏡片、ガラス玉、完形の高坏形土器、線刻土器、多量の焼土塊などがあり、祭祀がおこなわれた住居址であると考える。銅鏡片の出土は有力者の存在も想定でき、平野での中心的集落の一つであると考える。

大型の方形住居ＳＢ304・ＳＢ305・ＳＢ304は調査区外に延びるため全容は不明であるが、周壁溝が巡り、柱穴が未検出、検出した一辺が8ｍを測ることなどから、大型の方形住居と判断したものである。ＳＢ305は壁面だけの調査であるが、建て替えが確認でき、建て替え以前の住居基底面は深さ

70㎝を測ることを確認した。

小型の方形住居ＳＢ301・ＳＢ303からは高床部・炉・主柱穴・土坑・円礫石を検出した。

高床部は部分的に造り付けるものがあり、ＳＢ301の高床部は古墳時代前期の住居址（樽味四反地遺跡2次調査地ＳＢ6）に類例がある。

炉址はＳＢ303から平面プランが長方形のものが検出された。炉の西半分は削り出し、炉堤上部は貼り土をして1段高くしているものであった。炉と炉堤の形態や構造を考える上で好資料となるものである。

主柱穴はＳＢ303で2基検出した。住居址の南壁に近い位置に2本が同時に建っていたと考えられる。また、2基の柱を斜めに支える柱穴を住居址南壁中央より検出している。この柱穴は支柱穴と考えている。今後、支柱穴については、調査資料の追加とともに検討したい。

土坑はＳＢ301より検出した。住居址の隅に位置しており、束本遺跡3次調査検出の住居址（弥生時代後期ＳＢ01）に類例がみられる。3次調査ＳＢ01の土坑は貯蔵穴の可能性があると報告されており、本土坑も同様であると考える。なお、住居の規模や時期は異なるが、樽味高木遺跡3次調査地（古墳時代中期後半～後期初頭ＳＢ1）検出の住居址においても類似する土坑が検出されている。

ＳＢ301・303からは円礫が出土した。ＳＢ303では円礫は炉の北縁に接する位置で出土し、円礫の上面には凹みが認められ、何らかの作業を行った痕跡がうかがわれる。ＳＢ301の円礫はやや小ぶりであるが、作業台と考えている。

ＳＢ303出土の炭化材や焼土は、出土状況が小坂釜ノ口遺跡6次調査ＳＢ1や同7次調査地ＳＢ1に類似している。よって、ＳＢ303は焼失住居と思われる。

溝は性格を判断しがたいが、ＳＤ201は水利を目的としたものであり、ＳＤ304は区画溝と考えられる。このほかの溝の性格は、今後の調査で解明していきたい。

土坑は貯蔵穴と考えるものを3基（ＳＫ305・306・308）検出した。小坂釜ノ口遺跡3次調査で検出した明確な貯蔵穴とは断面形態や遺物の出土状況が異なるものであるが、埋土や遺物より貯蔵穴と考えた。本例は集落内での住居と貯蔵穴の位置関係を示す一例としておきたい。

（４）古墳時代

古墳時代の遺構は溝1条と土坑1基である。

溝ＳＤ301は土層の堆積状況から水路と考えられるが、特定の機能を判断することはできなかった。土坑302は土坑としたが埋土が砂質土ないし砂であること、出土する遺物が小片で磨滅を受けていることから、流路の湾曲部の一部分と思われる。

遺構・遺物一覧　－凡例－

（１）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
遺構一覧は志賀、遺物観察表は山本が作成した。

（２）遺物観察表の各掲載について。

法　量　欄　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。
例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例）砂・長（1～4）、多→「1～4㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。
焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表24　竪穴式住居址 一覧

竪穴(SB)	時期	平面形	規模 長さ(長径)×幅(短径)×深さ(m)	主柱穴(本)	内部施設 高床	土坑	炉	カマド	周壁溝	備考
301	弥生後期末	長方形	3.60×1.9+α×0.20		○					aトレンチに切られる。調査区外へ続く。
302	弥生後期末	円形	8.90×8.40×0.32	10			◎		○	
303	弥生後期末	隅丸方形	3.80×2.80×0.17	2			○			SD301に切られる。
304	弥生後期末	方形	8.00+α×2.20+α×0.40	(1)					○	調査区外へ続く。
305	弥生後期末	方形	α×0.07	α						aトレンチに切られ、西壁で4.4mを測る。

◎副次的炉

表25　土坑 一覧

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ（m）	埋土	出土遺物	時期	備考
301	B9	方形	逆台形状	1.27×0.70×0.21	灰白色土		近現代	SB302を切る
302	B2～C2	半円形(全容不明)	舟底状	3.50×1.15×0.19	灰黄褐色砂 灰黄茶褐色砂質土	炭、焼土	古墳時代以降	調査区外へ続く
303	C8～D8	楕円形	逆台形状	1.97×1.75×0.19	黒色土	弥生	弥生後期末	SD305を切る
304	D7	楕円形	逆台形状	1.27×0.69×0.40	黒色土	弥生	弥生後期末	SD305を切る
305	C4	円形	舟底状	0.78×0.72×0.30	黒色粘質土	弥生	弥生後期末	
306	B5	円形	逆台形状	0.70×0.70×0.41	黒色粘質土	弥生	弥生後期末	
307	A15	楕円形	皿状	0.78×0.45×0.18	黒灰色粘質土	弥生、石器	弥生後期末	
308	C15	円形	U字状	0.55×0.55×0.35	黒色土	弥生	弥生後期末	

表26　溝 一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ（m）	埋土	出土遺物	時期	備考
301	A13～B11	舟底状	7.21×3.3×0.53	灰黄褐色砂質土	土師器、須恵器	古墳後期	NE→SW
302	A2～5	レンズ状	13.0×0.70×0.17	黒色土 茶褐色土	弥生	弥生後期末	N→S
303	A6～C6	レンズ状	9.50×0.40×0.10	黒色土		弥生後期末	
304	A14～C15	皿状	12.90×0.64×0.16	黒色土	弥生	弥生後期末	S→N E→W
305	D7～8	レンズ状	5.20×1.11×0.11	黒色土	弥生	弥生後期末	SD306を切る SB304・SK303・304に切られる
306	C6～D6	レンズ状	1.60×0.50×0.08	黒色土	弥生	弥生後期末以前	SD305に切られる。

表27　第Ⅳ層上面 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
230	スクレイパー	完形	サヌカイト	9.6	3.6	0.9	39.7		59
231	尖頭器	完形	不明	8.0	2.1	0.8	15.0		59

表28　SB302 出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
232	甕	口径(16.0) 残高 3.3	「く」の字状口縁。端部は面をもつ。	㊐ナデ ハケ（５本/cm） →ナデ	ナデ	乳茶色 茶色	石･長(1~3) ◎		
233	甕	口径(14.6) 残高 2.6	外面煤付着。 口縁端部は面をもつ。	一部ハケ(8本/cm)	ハケ(10本/cm)	黒色 暗茶色	石･長(1~2) ◎	外面 煤が付着	
234	甕	底径 3.8 残高 6.0	やや上げ底の底部。	ハケ ハケ→ヨコナデ	削り ㊎ナデ(指頭痕)	茶色	石･長(1) ◎		
235	甕	底径 4.6 残高 14.3	やや丸味の底部で厚手。	ハケ(6~7本/cm) ㊎ナデ	ハケ→ナデ	灰茶色	石･長(1~2) ◎		
236	甕	底径 (4.0) 残高 9.4	丸味の底部でやや突出する。	ハケ(6~7本/cm) ㊍㊎ナデ	ナデ	乳茶色	石･長(1) ◎		
237	甕	底径 (3.8) 残高 5.0	平底。 底部外面にナデ調整。	ナデ ㊎ナデ	ナデ	茶色	石･長(1~3) ◎		
238	壺	口径(18.5) 残高 3.6	複合口縁。 ５条の波状文が巡る。	㊐ヨコナデ ナデ	ナデ	茶色	石･長(1~3) 金 ◎		
239	壺	口径(11.6) 残高 3.4	複合口縁。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	灰黄色	石･長(1~4) ◎		
240	壺	口径(10.2) 残高 3.8	ラッパ状に開く口縁。 口縁端部は面をもつ。	㊐ナデ ハケ（８本/cm） →ナデ	ハケ(7本/cm)→ ヨコナデ(指圧痕)	茶色	石･長(1~4) ◎		
241	壺	残高 2.7	外反する口縁。 口縁端部は面をもつ。	ハケ→ヨコナデ (指頭痕)	ナデ	黒色	石･長(1~4) ◎		
242	壺	口径 (9.6) 残高 3.7	短頸壺 10条の沈線 ４条の波状文 12条の沈線 } 櫛状工具による	ミガキ	ハケ→ミガキ	乳茶色	石･長(1~2) ◎		49
243	壺	残高 6.2	長頸壺 ６条の沈線 16条の沈線	ナデ	ナデ	茶色 灰茶色	石･長(1~3) ◎		49
244	壺	残高 4.3	長頸壺 ４条の沈線 ７条の沈線 ２条の沈線 } 櫛状工具による	ミガキ	ハケ→ナデ	乳茶色	石･長(1~2) ◎		49
245	壺	口径 (8.4) 残高 9.4	長胴タイプ 口縁端部下内面に接合痕	ハケ（９本/cm）→ ナデ	ハケ(9本/cm)→ ナデ 指圧痕あり	赤茶色 灰茶色	石･長(1~5) ◎		49
246	壺	口径 (7.4) 残高 6.7	長頸壺 内傾し直線的に立ち上がる口縁。 外面ミガキ、内面に接合痕。	ハケ(12本/cm)→ ミガキ	ヨコナデ	乳茶色	石･長(1~6) ◎		49

SB302出土遺物観察表　土製品

（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
247	壺	残高 10.0	球状の胴部。 上段 4条の沈線文 下段 4条の櫛描波状文 } (櫛状工具による)	ハケ→ミガキ	ハケ(9～10本/cm) 指圧痕	乳茶色	石・長(1～3) 金 ◎		49
248	壺	残高 4.4	上段 5条の櫛描波状文 中段 凸帯の上に半截竹管文 下段 6条の櫛描波状文	ハケ(9本/cm)→ナデ	ヘラ状工具により ナデ上げ	赤茶色	石・長(1～2) ◎		49
249	壺	底径 (2.7) 残高 14.7	やや丸味の底部。 内・外面ともハケ調整顕著。	ハケ(12本/cm) (底)ハケ	ハケ(10本/cm)	赤褐色	石・長(1～3) ◎		
250	壺	底径 (4.5) 残高 19.0	外面中央に線刻。 平底の底部。	(頸～胴)ハケ(8本/cm)→ナデ (胴～底)ヘラナデ(ミガキ風)	(頸～胴)ナデ(指圧痕) (胴～底)削り(板状工具)	乳茶色 茶色	石・長(1～5) ◎		49
251	壺	底径 5.1 残高 14.3	底部外面に「×」の線刻。 やや丸味をおびた平底の底部。	(肩上～中)ハケ(3～4本/cm) (胴中～下)ナデ (底) ナデ	ナデ上げ(指頭痕)	暗茶色	石・長(1～4) ◎		49
252	壺	底径 5.2 残高 9.8	丸味のある平底。 底部より直線的に上外方向へ立ち上がる。	ハケ(6本/cm)→ナデ	ハケ(4本/cm)→ナデ	乳茶色 灰色	石・長(1～2) ◎		
253	壺	底径 (4.4) 残高 7.0	底部よりやや内湾ぎみに上外方向へ立ち上がる。	(胴中)ハケ(9本/cm) (胴下)ハケ→ナデ (底) ナデ	ハケ→ナデ上げ	茶色	石・長(1～3) ◎		
254	壺	残高 2.0	平底の底部。	ナデ	ナデ	乳黄色	石・長(1) ◎		
255	鉢	口径(33.0) 残高 17.8	「く」字状の口縁。 内・外面ともハケ調整顕著。	(口)ハケ→ナデ ハケ(9本/cm)	(口)ハケ→ナデ ハケ(9本/cm)指頭痕	乳茶色	石・長(1～4) ◎		50
256	鉢	口径(13.2) 底径 2.5 残高 9.2	底部より内湾して立ち上がる。 口縁端部内面に面をもつ。 丸味のある底部。	(口) ハケ(8本/cm) (胴上) ハケ(6～7本/cm) (胴下) タタキ→ハケ (底) ナデ	ナデ指頭痕	乳茶色	石・長(1～3) ◎		50
257	鉢	口径(17.6) 残高 4.6	内湾ぎみの口縁は端部がやや外反する。	ナデ 一部タタキ	ハケ(6本/cm)	茶色	石・長(1～3) 金 ◎		
258	鉢	口径(16.6) 残高 4.2	外傾ぎみに立ち上がる口縁は直角に屈曲する。	(口)ヨコナデ ナデ	(口)ヨコナデ ハケ→ナデ (指頭痕)	黒色 乳茶色	石・長(1～3) ◎		
259	鉢	口径(14.2) 残高 4.7	内湾ぎみに立ち上がる口縁は端部がやや外反する。 端部外面に面をもつ。	ナデ	ナデ	灰茶色 茶色	石・長(1～4) ◎		
260	鉢	口径(13.4) 残高 4.7	内湾ぎみに立ち上がる口縁は端部がやや外反する。	(口)ナデ ミガキ	(口)ナデ ハケ→ミガキ	茶色	石・長(1～4) ◎		50
261	鉢	口径(11.4) 残高 4.4	内湾ぎみに立ち上がる口縁は端部内面に面をもつ。	(口)ナデ ハケ(12～16本/cm)→ナデ	ハケ→ナデ (口)指頭痕)	乳茶色 灰黄色	石・長(1～2) 金 ◎		
262	鉢	口径(11.8) 残高 3.9	外反ぎみに立ち上がる口縁。 端部は面をもつ。	ハケ(10本/cm)	ハケ(10本/cm)	乳茶色 灰茶色	長(1) ◎		
263	鉢	残高 3.5	外反ぎみに立ち上がる口縁。 端部は丸味。	ハケ(10～12本/cm)→ナデ	ハケ(9～11本/cm)→ナデ	乳茶色	石・長(1～4) ◎		
264	鉢	底径 (4.6) 残高 9.5	底部より内湾ぎみに立ち上がる。 平底の底部。	ハケ→ミガキ (底)ナデ	ハケ(13本/cm)→ナデ	赤茶色	石・長(1～3) ◎		50
265	鉢	底径 2.8 残高 9.9	上げ底のややくびれをもつ底部。 くびれ部に押圧痕。	ナデ (胴下)押圧痕 ハケ	ハケ(5～6本/cm)	灰茶色 赤茶色	石・長(1～6) ◎		50

SB302 出土遺物観察表　土製品　（3）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
266	鉢	底径 (3.4) 残高 5.5	やや上げ底の底部。 底部より内湾ぎみに立ち上がる。	ハケ(9本/cm)→ナデ (底)ナデ(指頭痕)	ハケ(9本/cm) ヘラ状工具による ナデ上げ→ナデ (底)(指頭痕多い)	茶色	石・長(1~3) ◎		
267	鉢	底径 4.0 残高 4.4	突出したやや丸味の底部。	タタキ→ナデ (底)ナデ	ハケ(6本/cm)	赤茶色 茶色	石・長(1~5) ◎		50
268	鉢	底径 2.9 残高 4.4	突出した底部。 底部より内湾ぎみに立ち上がる。	ナデ (底)ナデ(指頭痕)	板状工具による ナデ (底)押圧痕	灰黄色	石・長(1~2) ◎		50
269	鉢	底径 (5.2) 残高 3.1	平底の底部。 底部内面中央が指圧により凹む。	ナデ たてミガキの 可能性もある。	ナデ (底)押圧痕	乳茶色	石・長(1~3) ◎		
270	高坏	口径 30.1 底径 24.2 器高 23.4	(口)櫛状工具による4条の波状文。(口)黒斑有り。円形浮文が2個並びで全体に8ヶ所有り。中央に竹管文が施されている。(脚)円孔(径約1.61cm)上段中段は5ヶ所、下段は10ヶ所。	(口)ヨコナデ ハケ(17本/cm) →ミガキ (脚)ミガキ	(口)ヨコナデ・ミガキ (脚上)竹か棒の様なもの 押圧痕 指頭痕 (脚下)ハケ(12本/cm)→ミガキ	茶色 赤茶色	砂 ◎		50
271	高坏	口径(30.7) 残高 9.3	外反する口縁部。口縁端部は丸い。 充填技法。	(口)ナデ (坏上)ハケ→ヨコナデ (坏中)ハケ(14~15本/cm)→ミガキ (脚)ハケ→ナデ	(口)ナデ (坏)ハケ(14~15本/cm)→ミガキ (坏底)ナデ (脚)ナデ	乳茶色 赤茶色	石・長(1~5) ◎		50
272	高坏	口径(27.3) 残高 2.2	外傾する口縁は中央で「へ」字状に屈曲し、外方に突出する。端部は丸くおさめる。	(口)ナデ ハケ(9~10本/cm)→ミガキ	(口)ナデ ハケ→ミガキ	赤茶色	石・長(1~4) ◎		
273	高坏	残高 3.4	内湾して口縁へ立ち上がる。内・外面ともミガキ調整顕著。	ハケ(13本/cm)→ ミガキ	ミガキ	乳茶色 茶色	石・長(1~2) 金 ◎		
274	高坏	残高 2.9	接合部は段。 やや外反ぎみの口縁。	磨滅の為不明	磨滅のため不明	赤茶色	石・長(1~3) ◎		
275	高坏 (脚)	底径(21.4) 残高 0.8	脚裾部。端部上面に面をもつ。端部側より「く」字状刻目。竹管文半截竹管文がめぐる。	磨滅の為不明	磨滅のため不明	茶色 乳茶色	長(3) ◎		51
276	器台	口径(40.0) 残高 2.0	上下に拡張した口縁端部。 (口端)5条の沈線（凹線ぎみ）がめぐる。浮文の痕跡有り。	ヨコナデ	ミガキ	茶色 乳茶色	石・長(1~4) ◎		51
277	器台	残高 1.0	口縁部垂下。口縁端面に刻目を施した半円帯状の浮文を貼り付ける。	ナデ	ナデ	茶色	石・長(1) ◎		51
278	器台	口径(23.2) 残高 1.0	やや肥厚させた口縁端部。 (口端)半截竹管文。	ハケ(8~9本/cm) →ナデ	ハケ(6本/cm)→ ヨコナデ	茶色	石・長(1~3) ◎		51
279	不明	残高 2.3	(口)粘土を折曲げて玉縁状に仕上げる。	(口)ハケ(8~9本/cm) →ナデ ハケ→ナデ	ナデ	暗灰茶色 灰黄色	石・長(1~2) 金 ◎		51
280	壺	残高 4.0	(頸)3条の沈線。	ナデ	ナデ	灰黄色	石・長(1~3) 金 ◎		59

表29　SB302 出土遺物観察表　装身具　（1）

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 孔径（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
281	小玉	完形	ガラス 薄い青色	0.3	0.4	0.18	0.05		51
282	小玉	完形	ガラス 薄い青緑色	0.25	0.4	0.15	0.04		51

SB302 出土遺物観察表　装身具　（2）

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	孔径（cm）	重さ（g）		
283	小玉	完形	ガラス 薄い青緑色	0.2	0.35	0.15	0.03		51
284	小玉	完形	ガラス 青色	0.35	0.35	0.15	0.05		51
285	小玉	完形	ガラス 濃い青色	0.35	0.35	0.15	0.04		51
286	小玉	完形	ガラス 青色	0.35	0.25	0.1	0.04		51

表30　SB302 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
287	石鏃	完形	赤色チャート	2.3	1.9	0.2	0.9		51

表31　SB302 出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
288	鏃	先端部が残る	鉄製	5.9	0.6	0.5	10.5		51
289	鉄片	ほぼ完形	鉄製	2.5	1.7	0.25	2.7		51
290	鏡	小片	銅製	5.7	2.6	0.35	19.5	破面及び表面研磨赤色顔料付着	51

表32　SB301 出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
291	甕	口径(22.8) 残高 3.0	外反する口縁。口縁端部は面をもつ。	㊐ ヨコナデ ハケ(6本/cm)→ ナデ	ハケ(6本/cm)→ ナデ	乳灰黄色	石・長(1~2) ◎		
292	甕	口径(17.4) 残高 3.4	「く」字状口縁。口縁端部は面をもつ。	㊐ ヨコナデ タタキ(8本/5cm) →ヨコナデ	㊐ヨコナデ ハケ(12本/cm)→ ナデ	灰茶色	石・長(1~3) 金 ◎		
293	甕	口径(15.0) 残高 2.6	外反する口縁。口縁端部は面をもつ。	ハケ(10本/cm)→ ヨコナデ	ハケ(10本/cm)→ ヨコナデ	灰茶色	石・長(1~2) ◎		
294	甕	口径(15.0) 残高 3.5	直線的に外傾する口縁。 口縁端部は面をもつ。	㊐ ヨコナデ ハケ(11本/cm)	ハケ(10本/cm)	乳黄色	石・長(1) ◎		
295	甕	口径 (4.2) 残高 3.7	平底の底部。	㊎ ハケ(10本/cm) ナデ	ナデ指圧痕有り	灰茶色	石・長(1~2) ◎		

SB301 出土遺物観察表　土製品

（2）

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
296	甕	底径　2.2 残高　3.4	わずかに突出する小さな平底。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗灰色 灰茶色	石・長(1~3) ◎		
297	壺	残高　6.0	口縁部 波状文。 接合部 ヘラ状工具による刻目。	㊐磨滅のため不明 ㊦ナデ ハケ（10本/cm） →ナデ	ヨコナデ ナデ	茶色 茶褐色	石・長(1~4) ○		
298	鉢	口径 12.5 底径　3.5 器高　8.2	外反する口縁。口縁端部は面をもつ。 平底の底部。	ハケ→ナデ ㊇タタキ	㊐ハケ→ナデ上げ ナデ(指圧痕)	灰茶色	石・長(1~4) ◎		52
299	鉢	口径(14.2) 残高　3.1	やや内湾ぎみに立ち上がる口縁。 口縁端部は丸くおさめる。	タタキ→ナデ	ハケ(10本/cm)→ ナデ	乳茶色	石・長(1~2) ◎		
300	器台	口径(28.8) 残高　1.7	上下に肥厚させた口縁端部には櫛描波状文（6条）を施す。	㊐ヨコナデ 磨滅のため不明	ヨコナデミガキ	乳灰褐色 乳灰黄色	石・長(1~3) ◎		
301	甕	口径(16.7) 残高　1.4	如意形の口縁部。 口唇部下端にヘラ状工具による刻目。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄灰色	石・長(1~3) 金 ◎		
302	甕	口径(26.0) 残高　6.8	如意形の口縁部。口縁端部刻目。胴部は2条の沈線文とその間に刺突文を施す。	ヨコナデ ハケ→ナデ	ヨコナデ ハケ→ナデ	乳色	石・長(1~3) ◎		59

表33　SB303 出土遺物観察表　土製品

（1）

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
303	甕	口径(13.2) 底径　3.0 器高 20.7	直線的に外傾した口縁。口縁端部は面をもつ。 平底の底部。	㊐ナデ タタキ→ハケ（7本/cm）	㊐ハケ 削り→ナデ 指圧痕	乳灰色	石・長(1~5) ◎		52
304	甕	口径 15.0 残高　7.0	「く」字状口縁。口縁端部は面をもつ。	㊐ナデ ハケ→ナデ	㊐ハケ→ナデ ハケ(5本/cm)	明茶褐色	石・長(1~4) ○		52
305	甕	口径(19.8) 残高　2.7	外傾する口縁は端部近くで外反する。 口縁端部は面をもつ。	ナデ ㊐ハケ(10本/cm)	ナデ	乳灰黄色 黒灰色	石・長(1~2) ◎		
306	壺	口径 15.4 残高　6.8	複合口縁。 口縁部に波状文（4条）を施す。	㊐ナデ ハケ→ミガキ	㊐ナデ ミガキ ハケ→ナデ	茶色	石・長(1~3) ◎		
307	壺	口径(13.1) 残高　2.4	複合口縁。 口縁部に波状文（4条）を施す。	㊐ヨコナデ ハケ	㊐ヨコナデ	暗茶色	石・長(1~2) ◎		
308	壺	残高　3.9	複合口縁。	ヨコナデ ハケ(7本/cm)	ヨコナデ	赤茶色	石・長(1~5) ◎		52
309	壺	口径(21.0) 残高　5.6	ラッパ状に開く口縁。口縁端部は面をもつ。	㊐ナデ ハケ(10本/cm)	磨滅のため不明	茶色	石・長(1~3) ◎		
310	壺	底径　4.1 残高 11.9	やや丸味の平底の底部。外面底部付近に3ヵ所刻圧痕がある。	ハケ→ナデ	ナデ(指圧痕)	明黄褐色 赤褐色	石(1~2) ◎		
311	鉢	底径　(1.7) 残高　5.1	平底の小型の底部。 底部内面中央は凹む。	ナデ ㊇ナデ	ハケ→ナデ （板状工具による）	茶色	石・長(1~4) ◎		
312	高坏	口径(24.0) 残高　3.6	外反する口縁。口縁端部は面をもつ。 接合部は段をなす。	磨滅のため不明	ミガキ	茶褐色	石・長(1~2) ◎		

SB303 出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
313	高坏	残高 13.2	脚柱部。円孔を3段に4方向に穿つ。内面しぼり痕。	ハケ→ミガキ	しぼり痕	灰茶色 茶色	石・長(1~3) ◎		52

表34　SB303 出土遺物観察表　金属製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
314	鏃	完　形	鉄製	9.2	2.5	0.25	15.9		52

表35　SB303 出土遺物観察表　装身具

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
315	管　玉	完　形	碧　玉 薄い灰緑色	1.2	0.55	0.25	0.68		52

表36　SB303と思われる 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
316	甕	口径(11.6) 残高 18.8	直線的に外傾した口縁。 底部は小さく突出する。 胴部外面は叩き調整顕著。	㊐指ナデ ㊒タタキ(10~11本/5cm) ㊒下 削り→ナデ	㊐ ハケ→ナデ(10本/cm) ㊒上 ハケ(9本/cm) ㊒中 ハケ(5~6本/cm) ㊓ 指頭痕	灰茶色 乳茶色	石・長(1~3) ◎		53
317	甕	口径(15.5) 残高 12.0	「く」字状口縁。口縁端部は面をもつ。	㊐ハケ→ナデ タタキ(8本/5cm) →ハケ	㊐ ハケ→ヨコナデ ㊒上 ハケ(9~10本/cm) ㊒中 ハケ(5~6本/cm)	茶色	石・長(1~4) ◎		
318	甕	口径(17.0) 残高 5.9	「く」字状口縁。口縁はやや外反する。	㊐ヨコナデ ㊒タタキ(5本/2.5cm)	㊐ ヨコナデ ㊒上 ナデ ㊒ ハケ(9本/cm)	乳灰色 乳黄灰色	石・長(1~3) ◎		
319	鉢	口径(19.3) 底径 2.3 残高 7.3	底部から内湾ぎみに上外方向へ立ち上がる。口縁端部は面をもつ。やや突出する上げ底。	削り風の強いナデ	ハケ(10本/cm) 指頭痕	暗茶色 暗灰茶色	石・長(1~3) ◎		53
320	鉢	口径(31.2) 残高 7.9	内湾ぎみに立ち上がり、口縁は外傾する。口縁端部は丸くおさめる。器壁は厚手。	㊐ヨコナデ ハケ(10本/cm)→ ナデ	㊐ ヨコナデ ハケ→ナデ ㊒上 削り ㊒中 ハケ(6~8本/cm)→ナデ	茶色	石・長(1~2) 金 ◎		53
321	鉢	口径(12.2) 残高 4.7	内湾ぎみに立ち上がる口縁。口縁端部はやや丸くおさめる。器壁は厚手。	㊐ハケ(7本/cm)→ヨコナデ ㊒ハケ→ナデ	㊐ ハケ(5~6本/cm) →ヨコナデ ハケ	茶色	石・長(1~3) ◎		
322	鉢	口径(12.2) 残高 5.2	外傾する口縁。口縁端部は面をもつ。	㊐ヨコナデ ハケ(6本/cm)	㊐ ハケ(12本/cm)→ ナデ	乳灰茶色 黒色	石・長(1~2) ◎		
323	支脚	底径 (8.0) 残高 6.0	中空・柱状の体部。 受部は外傾し、端部は尖る。 器壁は厚手。	ナデ （指頭痕） ㊓ナデ	ナデ （指圧痕）	乳茶色 乳灰色	石・長(1~5) ◎		53

表37　SB304出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
324	甕	口径(15.0) 残高　2.8	やや外反ぎみの「く」字状口縁。口縁端部は面をもつ。	ヨコナデ	㊐ヨコナデ ハケ→ヨコナデ	灰茶色 乳茶色	石・長(2~4) ◎		
325	甕	底径　(2.9) 残高　3.3	やや立ち上がる底部。	ハケ(10本/cm) ㊋ 指おさえ	ナデ	茶色 灰茶色	石・長(1~3) ◎		
326	甕	残高　2.3	底部片。	磨滅のため不明 ㊎ナデ	剥離	乳茶色 乳灰色	石・長(1~2) ◎		
327	壺	口径(26.4) 残高　4.6	複合口縁。口縁部櫛描波状文（6条）ののちヘラ描沈線文（4条）を施す。	櫛描文	ヨコナデ (指頭痕)	茶色 灰茶色	石・長(2~4) ◎		53
328	壺	口径(12.0) 残高　4.6	外傾する口縁。口縁端部は丸くおさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	赤茶色	長(1~5) ◎		
329	壺	口径　11.0 残高　4.6	短い頸部に外反する口縁部をもつ。口縁端部は面をもつ。	ハケ(12本/cm)→ ナデ	ハケ→ナデ	乳茶色	石・長(1~3) ◎		53
330	壺	口径　(8.2) 残高　15.0	長頸壺。やや外傾して立ち上がる口縁。口縁端部は面をもつ。	㊐ナデ ハケ→ミガキ (磨滅が激しい)	ハケ(10本/cm)→ ナデ上げ	茶色	石・長(1~3) ◎		
331	壺	残高　2.0	複合口縁。 ヘラ描沈線を施す。	ヨコナデ	ナデ	暗茶色	石・長(1~2) ◎		53
332	鉢	口径(30.0) 残高　2.7	外傾した口縁。口縁端部は面をもつ。	㊐ヨコナデ 板ナデ	ハケ(5~6本/cm)→ ナデ	乳茶色	石・長(1~2) ◎		
333	鉢	口径(20.0) 残高　3.4	内湾ぎみに立ち上がる口縁。口縁端部は丸くおさめる。	磨滅の為不明 ハケ	磨滅のため不明	暗茶色 茶色	石・長(1~3) ◎		
334	鉢	残高　2.8	直線的に上外方向へ立ち上がる口縁。口縁端部は突りぎみ。	㊐ヨコナデ ハケ(8本/cm)→ ナデ	ヨコナデ	灰茶色 茶色	石・長(1~3) ◎		53
335	鉢	底径　(2.3) 残高　3.0	小さな平底の底部。 底部内面は凹む。	ハケ(8本/cm) 指押え ㊎ナデ	ハケ(8本/cm)	乳茶色	石・長(1~2) ◎		
336	鉢	底径　(3.8) 残高　3.0	小さな平底の底部。 底部より内湾ぎみに立ち上がる。	板ナデ ㊎ナデ	ナデ(指頭痕)	茶色	石・長(1~3) ◎		
337	鉢	残高　7.2	台付。 ㊒6方向に円孔を穿つ。	ハケ→ミガキ ㊒ミガキ	ミガキ ㊒ハケ(5~6本/cm)	乳茶色	石・長(1~3) ◎		53
338	高坏	残高　4.3	脚裾部。 屈曲部に半截竹管文を2段（S字状）に施す。円孔を穿つ（円孔数不明）。	ナデ	磨滅のため不明	茶色	石・長(1~4) ◎		53
339	高坏	残高　2.2	脚裾部。 裾端部は面をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶色	石・長(1~3) ◎		
340	高坏	残高　1.3	裾端部。	ミガキ	ヨコナデ	乳茶色 暗茶色	石・長(1~2) ◎		
341	支脚	底径　(8.0) 残高　3.8	裾部。器壁は厚い。 外面指頭痕顕著に残る。	ミガキ指押え (指頭痕有り)	かきとり	乳茶色 乳灰色	石・長(2~4) ◎		
342	支脚	底径　(8.0) 残高　3.2	裾部。裾端部は外反する。	ナデ(指頭痕)	ナデ	乳茶色	石・長(1~3) ◎		

表38　SD201 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
343	甕	口径(14.6) 残高 23.2	「く」字状口縁。口縁端部は面をもつ。長丸型の胴部。	㊐ハケ(5～8本/cm) ㊊上 ハケ(8本/cm) ㊊中 タタキ→ハケ ㊊下 タタキ(8～9本/3cm)→ナデ	㊐ハケ(7～10本/cm) ㊍指頭痕 ㊊ハケ(5～10本/cm)	乳灰褐色 乳茶色	石・長(1～5) ◎		54
344	甕	口径(12.6) 残高　4.6	やや外反する「く」字状口縁。口縁端部は面をもつ。	㊐ヨコナデ ハケ(3本/cm)→ ヨコナデ ㊊ハケ(7本/cm)	㊐ハケ(3本/cm) (7本/cm) ㊊ナデ	暗茶褐色	石・長(1～2) ◎		54
345	甕	口径(13.6) 残高　2.3	直線的に外傾する口縁。口縁端部はヘラ状工具による沈線文を施す。	㊐ヨコナデ ハケ(9本/cm)→ ナデ	ナデ	暗茶褐色	石・長(1) 金 ◎		54
346	壺	底径　(7.3) 残高　2.6	平底の底部片。	㊊ミガキ ㊎ナデ	ナデ ㊐指頭痕	乳茶色	石・長(1～2) 金 ◎		54
347	鉢	口径(12.6) 残高　3.8	やや外傾する口縁。口縁端部は細丸くおさめる。	ナデ	ハケ(9～10本/cm)→ ナデ	赤褐色	石・長(1) ◎		
348	鉢	残高　4.9	口縁部片。 やや外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	㊐ヨコナデ	㊐ヨコナデ	乳赤褐色	石・長(1) ◎		

表39　SD304 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
349	鉢	口径(14.0) 残高　3.1	口縁部片。 内湾ぎみの口縁。口縁端部は面をもつ。	㊐ヨコナデ (板状工具と思われる)ナデ	㊐ヨコナデ(板状工具と思われる)磨滅のため不明若干ハケ残る(5本/cm)	乳赤茶色	密 ◎		
350	高坏	口径(30.0) 残高　2.4	坏部片。 外反する口縁。口縁端部は面をもつ。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	茶褐色	石・長(1～2) ◎		

表40　SD304 出土遺物観察表　金属製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
351	石庖丁	約2／3	結晶片岩	8.3	5.9	0.9	67.0		54

表41　SD305 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
352	甕	口径(15.4) 残高　1.9	外反する口縁。口縁端部は面をもつ。	ハケ(7～8本/cm)→ ヨコナデ	ハケ(7～8本/cm)→ ヨコナデ	茶色	石・長(1～2) ◎		
353	壺	残高　4.1	複合口縁。 接合部は櫛状工具による斜格子文を施す。	㊐ヨコナデ ㊍ハケ(17～18本/cm)	ハケ ナデ	赤茶色	石・長(1～2) 金 ◎		
354	鉢	口径(10.0) 残高　3.6	内湾する口縁。口縁端部は突りぎみにおさめる。	ナデ?	ナデ	茶色	石・長(1～2) ◎		
355	鉢	底径　(4.8) 残高　2.0	底部片。小さくくびれ上げ底。	ヨコナデ ㊎ヨコナデ	ミガキ ㊎磨滅のため不明	暗褐色	密 ◎		
356	高坏	口径　(7.8) 残高　8.5	脚柱部上段から刺突文。波状文(4条)沈線文(5条)。裾端部は沈線文2条を施す。	ヨコナデ 磨滅多い	㊤絞り痕 ㊥ナデ ㊦ヨコナデ	茶褐色	石・長(1) ◎		54

表42　SD306 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
357	甕	底径　5.2 残高　4.6	くびれをもつ上げ底の底部。	(胴)ミガキ風ヘラナデ (底)ナデ（指頭痕）	ナデ	暗灰茶色 赤褐色	石・長(1~3) ◎		

表43　SK303 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
358	甕	口径(13.3) 残高　2.2	直線的に外傾する口縁。口縁端部はやや丸くおさめる。	ヨコナデ	ナデ	茶色	石・長(1~3) ◎		
359	壺	残高　1.7	複合口縁。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	茶褐色 茶色	石・長(1~3) ◎		
360	壺	口径(12.4) 残高　2.7	外反する口縁。口縁端部は面をもつ。	(口)ヨコナデ ハケ(8本/cm)	ハケ(6本/cm)	乳茶色	長(1~2) ◎		
361	高坏	残高　3.0	脚部片。 円孔有り（円孔数不明）。	ナデ	ハケ	乳茶褐色	長(1~2) ◎		
362	高坏	底径（18） 残高　1.7	脚裾部。	ミガキ (裾)ヨコナデ	ヨコナデ	茶色	長(1~2) ◎		
363	器台	残高　5.8	1条づつ計18条の沈線文を施す。	ハケ→ミガキ	ハケ→ナデ （指頭痕有り）	暗茶色 茶色	石・長(1~3) ◎		55

表44　SK304 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
364	壺	残高　1.2	外反する口縁。口縁端部はハケ状工具による刻目文を施す。	ヨコナデ→ミガキ	ヨコナデ	乳茶色	石・長(1~3) ◎		55

表45　SK305 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
365	甕	口径(17.0) 残高 11.2	外反する口縁。口縁端部は面をもつ。	(口)ヨコナデ（指頭痕） タタキ（10本/5cm） →ハケ(10~12本/cm)	(口)ヨコナデ ハケ→ヨコナデ(指頭痕) (頸)ハケ(6~7本/cm)→ナデ ハケ→ナデ上げ	茶色	石・長(1~4) ◎		55
366	甕	底径　4.0 残高　9.2	やや丸味をおびる平底の底部。	タタキ(10本/5cm)→ ハケ(7本/1.5 cm) (底)板状工具によるナデ	ナデ上げ (胴下)ナデ（指頭痕）	暗茶色	石・長(2~6) ◎		
367	鉢	口径(19.4) 器高　6.4	底部より内湾ぎみに上外方向へ立ち上がる。口縁端部は面をもつ。丸底。	(口→胴中)磨滅のため不明 (胴中→肩)削り	(口→胴中)ヨコナデ (胴中→肩)ナデ	茶褐色 灰茶色	石・長(1~3) ◎		55

表46　SK306 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
368	壺	口径(16.0) 残高　6.0	直線的に外傾する口縁。口縁端部は面をもつ。	(口)ハケ(10~12本/cm) →ヨコナデ (胴)ハケ後ナデ	(口)ヨコナデ (胴)ハケ(8~9本/cm) 胴ヨコナデ	茶色 乳茶色	石・長(1~4) ◎		55
369	鉢	口径(25.2) 残高　7.9	内湾ぎみに立ち上がる口縁。口縁端部は面をもつ。	(口)ヨコナデ タタキ(10本/5cm) →ナデ	ハケ(12~14本/cm) →ミガキ	赤茶色 茶色	石・長(2~5) ◎		55

表47　SK307 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
370	壷	底径　(4.0) 残高　3.5	やや丸みのある平底の底部。	タタキ→ハケ(10～12本/cm) ㊎タタキ→ナデ	ハケ→ナデ (工具痕が残っている指頭痕)	乳茶色	石･長(1～3) ◎		

表48　SK307 出土遺物観察表　石製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
371	石器素材	ほぼ完形	結晶片岩	16.9	4.3	2.1	242.4		55

表49　SK308 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
372	甕	残高　1.7	外反する口縁端部片。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	乳茶色	石･長(1～2) ◎		
373	支脚	口径　(8.0) 底径　7.8 残高　5.7	中空、円柱状の体部。 器壁は厚い。	ナデ指頭痕	ナデ指頭痕	乳茶色	石･長(1～3) ◎		55
374	支脚	口径　(6.6) 底径　(7.2) 残高　5.8	中空、円柱状の体部。 胴中位でくびれる。	指押え指頭痕	ナデ指頭痕	灰黄色 灰茶色	石･長(1～3) ◎		55

表50　SP 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
375	鉢	口径(22.5) 残高　9.0	稜をもって外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	㊐ヨコナデ ハケ(5本/cm)	ハケ(4本/cm)	乳茶色 乳灰茶色	長(1) ◎	SP28	
376	甕	底径(4.0) 残高　2.8	くびれをもつ上げ底の底部。	ハケ(9本/cm)→ナデ 指頭痕	ハケ→ナデ	茶色	石･長(1～3) ◎	SP28	
377	壷	口径(14.8) 残高　7.9	短く外反する口縁部。 頸部外面はヘラ状工具による沈線文3条が施される。	ナデ ミガキ	ミガキ	乳黄色	石･長(1～3) ◎	SP82	59

表51　SD301 出土遺物観察表　土製品

（1）

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
378	坏蓋	口径(12.2) 残高　3.2	天井部との境にわずかに稜が残る。口縁端部は内傾する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	青灰色 灰色	長(1) ◎	黒斑	56
379	坏蓋	口径(13.2) 残高　4.9	天井部は比較的丸く、稜は沈線によって浮かび上がらせた感がある。端部は内傾する。	回転ヘラ削り ㊐回転ヨコナデ	回転ヨコナデ→ナデ ㊐回転ヨコナデ	青灰色	石･長(1～3) ◎		56
380	坏蓋	口径(12.2) 残高　3.6	稜は沈線によって浮かび上がらせた感じ。端部は内傾する。	回転ヘラ削り ㊐回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	乳灰色	長(2) ◎		56
381	坏蓋	口径(14.0) 残高　4.8	天井部からなだらかに口縁部に下がり口縁端部は丸い。	回転ヘラ削り ㊐回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色	長(1～2) ◎		56
382	坏身	口径(11.8) 残高　2.8	立ち上がりは内傾し、端部は尖り気味に丸い。受部はほぼ水平。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	乳灰色	長(1) ◎		56
383	坏身	口径(12.0) 残高　3.4	立ち上がりは短く内傾。受部は上外方に延びる。	回転ヘラ削り ㊐回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	青灰色 灰色	長(1) ◎		56

SD301 出土遺物観察表　土製品　（２）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
384	坏身	口径(10.8) 残高 3.2	立ち上がりは短く内傾する。受部はほぼ水平。	回転ヘラ削り ㊁回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色	長(1) ◎		56
385	坏身	底径(12.0) 残高 3.5	肉厚の立ち上がりは短く内傾する。受部はやや上外方へ延びる。	回転ヘラ削り ㊁回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	青灰色	長(1～3) ◎		56
386	坏身	口径(13.8) 残高 3.0	立ち上がりは短く内傾する。受部はほぼ水平。底部は平底風°	回転ヘラ削り 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ→ナデ ㊁回転ヨコナデ	青灰色	長(1～3) ◎		56

表52　SD301 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
387	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	3.2	2.1	0.4	2.0		56
388	石錐	約２／３	サヌカイト	3.2	1.1	0.3	1.3		56

表53　SK302 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
389	不明	口径（9.0） 残高 2.4	須恵器口縁部。 外反する口縁部。端部は尖りぎみに丸い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	長(1) ◎		
390	壺	残高 2.5	外下方に屈曲した口縁端部。 端部には半截竹管文が３段に施される。	ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	乳茶色	石･長(1～2) ◎		

表54　その他の 出土遺物観察表　土製品　（１）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
391	甕	口径(14.0) 残高 5.7	外反する口縁部。口縁端部はナデ凹む。	㊁ヨコナデ タタキ(4本/3cm) →ナデ	㊁ヨコナデ ハケ(12～13本/cm)→ ナデ	乳茶色	石･長(1～3) ◎		56
392	甕	口径(15.0) 残高 5.5	外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	㊁ヨコナデ タタキ	㊁ヨコナデ ハケ	乳灰色 乳茶色	石･長(1～3) ◎		56
393	甕	口径(16.2) 残高 4.4	外反する口縁は端部内面がわずかにナデ凹む。口縁端部は外下方に面をもつ。	㊁ヨコナデ ハケ(12本/cm)→ ナデ　指頭痕	㊁ヨコナデ ハケ(12/cm)→ナデ	乳茶色	石･長(1～4) ◎		56
394	甕	口径(13.6) 残高 6.0	外反する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。	㊁ヨコナデ ハケ(7本/cm)→ ナデ	㊁ヨコナデナデ 指頭痕	乳茶色	石･長(1～3) ◎		
395	甕	口径(13.8) 残高 3.7	外反する口縁部。やや丸くおさめられる口縁端部は外下方に面をもつ。	㊁ヨコナデ(指頭痕) タタキ(3本/cm)	㊁ヨコナデ ナデ	茶褐色 乳茶色	石･長(1～4) ◎		
396	甕	口径(17.0) 残高 2.7	外反する口縁は端部内面がわずかにナデ凹む。口縁端部は面をもつ。	㊁ヨコナデ タタキ(3本/cm)	㊁ヨコナデ ナデ	茶褐色 乳茶色	石･長(1～3) ◎		
397	甕	口径(14.0) 残高 2.3	外反する口縁は端部内面がわずかにナデ凹む。口縁端部は面をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶色	石･長(1～2) ◎		56
398	甕	残高 3.5	外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	ハケ(8本/cm)	ハケ→ナデ上げ	乳灰色	石･長(1～2) ◎		
399	壺	口径(21.0) 残高 3.5	外反する口縁部。口縁端部は面をもちナデによりやや上下方に肥厚する。	㊁ヨコナデ ハケ(10本/cm)	㊁ヨコナデ ハケ(10本/cm)→ナデ	茶色 乳茶色	石･長(1～2) ◎		

その他の 出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調整		色調 (外面)/(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
400	壺	口径(25.8) 残高　2.0	上下に拡張された端部。端部には波状文を施した後、円形の浮文を貼り付け浮文に半截竹管文を施す。	ナデ	ハケ→ナデ	茶色	石・長(1~2) ◎		57
401	壺	口径(23.2) 残高　1.8	外下方に拡張した口縁端部。端部には3条づつ2段の波状文が施される。	㊐ヨコナデ ハケ(5本/cm)→ ナデ	ハケ→ヨコナデ	乳茶色	石・長(1~2) ◎		57
402	壺	口径(17.4) 残高　3.3	上内方に拡張した口縁端部。端部には貝殻による刺突文後に沈線文4条を施す。	ハケ(5本/cm)→ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶色	石・長(1~3) ◎		57
403	壺	残高　3.8	複合口縁。 口縁は山形文と竹管文が施される。	ハケ→ナデ	ヨコナデ	乳灰色	石・長(1~2) ◎		57
404	壺	残高　4.0	外傾する口頸部。 上段は2条以上の沈線文下段に18条の沈線文を施す。	ミガキ	ヨコナデ	灰茶色	長(1) ◎		57
405	壺	底径　(2.2) 残高　2.1	平底の底部。	ナデ	ナデ	乳黄色	石・長(1~5) ◎		
406	壺	残高　5.2	わずかに突出する丸底の底部。	ハケ(9~10本/cm)	ナデ上げ 指頭痕	乳茶色	石・長(1~5) 金 ◎		57
407	鉢	口径(27.7) 残高　5.8	わずかに稜をもち外反する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。	㊐ヨコナデ ハケ(9~10本/cm)	ハケ	乳灰黄色 黒色	石・長(1~2) ◎		
408	鉢	口径(27.8) 残高　6.3	稜をもち外反する口縁部。口縁端部は尖りぎみにおさめる。	㊐ナデ指頭痕 タタキ(6本/2cm) →ハケ(8本/cm)	㊐ハケ(9~10本/cm) →ヨコナデ ハケ(9本/cm)	暗茶色 黒色	石・長(1~3) ◎		57
409	鉢	口径(18.8) 残高　5.0	外傾する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。	㊐ヨコナデ タタキ(4本/2cm)	㊐ヨコナデ ハケ(1本/cm)	黒灰色 黒色	石・長(1~2) ◎		
410	鉢	口径(12.8) 底径　3.2 器高　8.0	底部よりやや内湾ぎみに上外方向へ立ち上がり口縁は外反する。端部は丸い。立ち上がりをもつ上底の底部。	㊐指圧痕 ハケ→ナデ ㊒下指圧痕 ㊒指圧痕	㊐ナデ ミガキ	茶色	石・長(1~3) ◎		57
411	鉢	口径(13.4) 底径　4.0 器高　9.5	底部よりやや内湾ぎみに上方向へ立ち上がる口縁部。口縁端部は面をもつ。底部はやや丸味の平底。	タタキ(8本/5cm) →ナデ	ハケ(8本/cm)→ ナデ ㊒ナデ上げ	灰茶色	石・長(2~5) ◎		57
412	鉢	口径(11.6) 器高　5.8	底部より上外方向に内湾ぎみに立ち上がる口縁部。口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。丸底の底部。	㊐ヨコナデ ハケ→ナデ (指頭痕)	㊐ヨコナデ ナデ	乳茶色	石・長(1~3) ◎		57
413	鉢	口径(10.4) 器高　5.3	底部より上外方向に内湾ぎみに立ち上がる口縁部。口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。丸底の底部。	㊐指押え ハケ→ナデ (指頭痕)	ナデ 指頭痕	灰茶色	石・長(1~3) ◎		57
414	鉢	口径　9.8 器高　5.7	底部よりやや内湾ぎみに上方向へ立ち上がる口縁部。口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。丸底の底部。	磨滅のため不明	指押え	灰茶色	石・長(1~5) ◎		57
415	鉢	口径　8.4 器高　3.8	底部よりやや内湾ぎみに上外方向へ立ち上がる口縁部。口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。丸底の底部。	指押え	ハケ(14本/cm)→ ナデ	茶色	石(1~2) ◎		57
416	鉢	底径　(2.5) 器高　4.6	ミニチュア。底部より内傾ぎみに上外方向へ立ち上がる口縁部。端部は丸い。立ち上がりをもつ平底の底部。	磨滅のため不明	ナデ(指頭痕)	乳白色	石(1~2) ◎		57
417	鉢	口径(13.8) 残高　5.0	やや内傾する口縁部。口縁端部はやや外反し丸くおさめる。	㊐ヨコナデ ハケ(8本/cm)→ ナデ	㊐ヨコナデ ナデ	灰茶色	長(1) ◎		57
418	鉢	口径　(9.8) 残高　5.2	やや外傾する口縁部。口縁端部は面をもつ。口縁部に5条の沈線文を施す。	ミガキ	㊐ヨコナデ ハケ(10本/cm)→ ナデ	茶褐色	長(1) 金 ◎		57

その他の 出土遺物観察表　土製品　（3）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
419	鉢	口径(12.0) 残高 4.7	内湾して立ち上がる口縁部。口縁端部は面をもつ。	㊀ヨコナデ ハケ(6本/cm)→ナデ	㊀ヨコナデ ハケ(12本/cm) →ミガキ	茶褐色	長(1) 金 ◎		57
420	鉢	残高 2.7	口縁部片。 口縁端部は丸くおさめる。	ハケ→ナデ	ミガキ	乳茶色	石・長(1~3) ◎		
421	高坏	口径(32.3) 残高 3.4	外反する口縁部。 口縁内面にミガキ調整を施す。	剥離 ハケ(9~10本/cm)	磨滅のため不明 ミガキ	茶色	石・長(1~3) ◎		
422	高坏	残高 5.2	大きく広がる坏部。 内・外面ともミガキ調整が施される。	ナデ ハケ(8本/cm)→ヘラミガキ部分的に磨滅	ヨコナデ→ヘラミガキ	乳赤色	石・長(1~2) 金 ◎		58
423	高坏	残高 5.4	坏部底部外面中央は突出する。 組み合せ技法？。	ハケ(9本/cm)→ナデ	削り→ナデ (指頭痕)	乳茶色	石・長(1~3) ◎		58
424	高坏	残高 5.3	円柱状の脚柱部。 円孔有り（円孔数は不明）。	ナデ(指頭痕)	削り→ナデ	乳茶色 乳褐色	石・長(1~3) ◎		58
425	高坏	残高 3.8	短い脚柱部。 柱部内面にしぼり痕。	磨滅の為不明	絞り痕 ナデ	乳茶色	石・長(1~3) ◎		58
426	高坏	残高 4.2	短い脚柱部。器壁は厚手。	ナデ	ナデ	茶色	石・長(1~2) ◎		58
427	支脚	底径 9.0 残高 3.9	中空、柱状のものと考えられる。 器壁は厚い。	ナデ(指頭痕)	ナデ(指頭痕)	乳灰色 乳茶色	石・長(1~2) ◎		58
428	支脚	底径 7.6 残高 3.6	脚裾部。 外面叩き整形が顕著に残る。	タタキ→ナデ	ナデ	乳茶色	石・長(1~3) ◎		58
429	支脚	口径 6.6 残高 3.6	中空、柱状のものと考えられる。 受部は外反する。端部は刻目を施す。	ハケ(9本/cm)→ナデ	ナデ	乳茶色 茶色	石・長(1~2) ◎		58
430	ミニチュア	口径 4.3 器高 3.2	底部より内傾ぎみに上外方向へ立ち上がる口縁部。口縁端部は突りぎみ。やや丸みの平底。	磨滅のため不明	ナデ指頭痕	乳白色	石(1~2) ◎		58
431	壺	残高 6.2	3条の沈線（ヘラ描）で木葉文。 3条の沈線文。	ミガキ	ナデ	乳茶黄色	石・長(1~2) ◎		59
432	不明	長 6.9 幅 2.9 厚 0.6	筒状であるが片方端部でいったんくびれてやや広がる器形になると思われる。	ナデ(タテ方向)	ナデ	乳茶色	石・長(1~3) ◎	重量 44.2 g	58
433	紡錘車	径 (7.0) 厚さ 1.1 孔径 0.6	紡錘形断面をなす。中央部に焼成前の円孔あり。	指おさえ→ナデ	絞り痕	黒灰色	石・長(1) ◎	重量 35.1 g	58

表55　その他の 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
434	石庖丁	完形	結晶片岩	8.4	4.8	0.9	55.8		58

第8章

東本遺跡4次

－4区の調査－

第８章　　４区の調査

１．調査の経緯

4区は3区の南に位置する。調査区は3区と同様に南北に縦長く、調査面積は740㎡である。3区と4区の境界には東西方向に生活道路が横切る。この生活道路を境に耕作面は南に一段低くなる。また、4区内には東西方向に農道があり、この農道を境に調査区は北区と南区に区分した。

調査は黒色土（第Ⅲ層）を手掘り作業により掘り下げを行った。遺物の出土は少ないが、土器が部分的に密集して出土した地点もあった。これら密集地点の下位からは遺構を検出したところもある。よって密集地点では遺構の埋土であると考えられた。

遺構の検出は第Ⅳ層上面にて行い、順次掘り下げ図面記録作業を行った。他の調査区で検出されているＡＴ火山灰層の確認のため、遺構完掘後に調査区西壁下（ａトレンチ）と北・南区に東西方向の深掘りトレンチ（ｂ・ｃトレンチ）を入れ確認作業を行った。

２．層　位（第４・89図）

本調査区では第Ⅰ層から第Ⅷ層までの土層を確認した。遺構の検出は第Ⅳ層上面で行い第Ⅳ層から第Ⅷ層までは調査区西壁下の深掘りにて確認調査を行った。以下、本調査区の基本層位を記述する。

第Ⅰ層：灰色土で15～20cmの堆積を測る。現在の耕作土である。

第Ⅱ層：黄灰色砂質土で5～10cmの堆積を測る。耕作土の床土である。

第Ⅲ層：第Ⅲ層は2層に分層される。

第Ⅲ①層黒色土で約5～12cmの堆積を測る。北区の北半部で確認された。

第Ⅲ②層黒褐色土で約5～15cmの堆積を測る。北区中央部から北区南端の間で確認された。

第Ⅳ層：褐灰色土（小礫石混入）で約8～20cmの堆積である。北区中央南から南区南端の間で確認された。

第Ⅴ層：暗褐色土で約10～20cmの堆積である。北区中央部から南区南端まで確認された。

第Ⅵ層：第Ⅵ層は3層に分層される。

第Ⅵ層砂　層厚10～20cmを測り、北区中央から南区南端の間で確認された。

第Ⅵ層風　層厚10～20cmを測り、南区に限り確認された。

第Ⅵ①層　黄色土で10～35cmの堆積である。調査区全域で確認された。

第Ⅶ層：第Ⅶ層は4層に分層される。

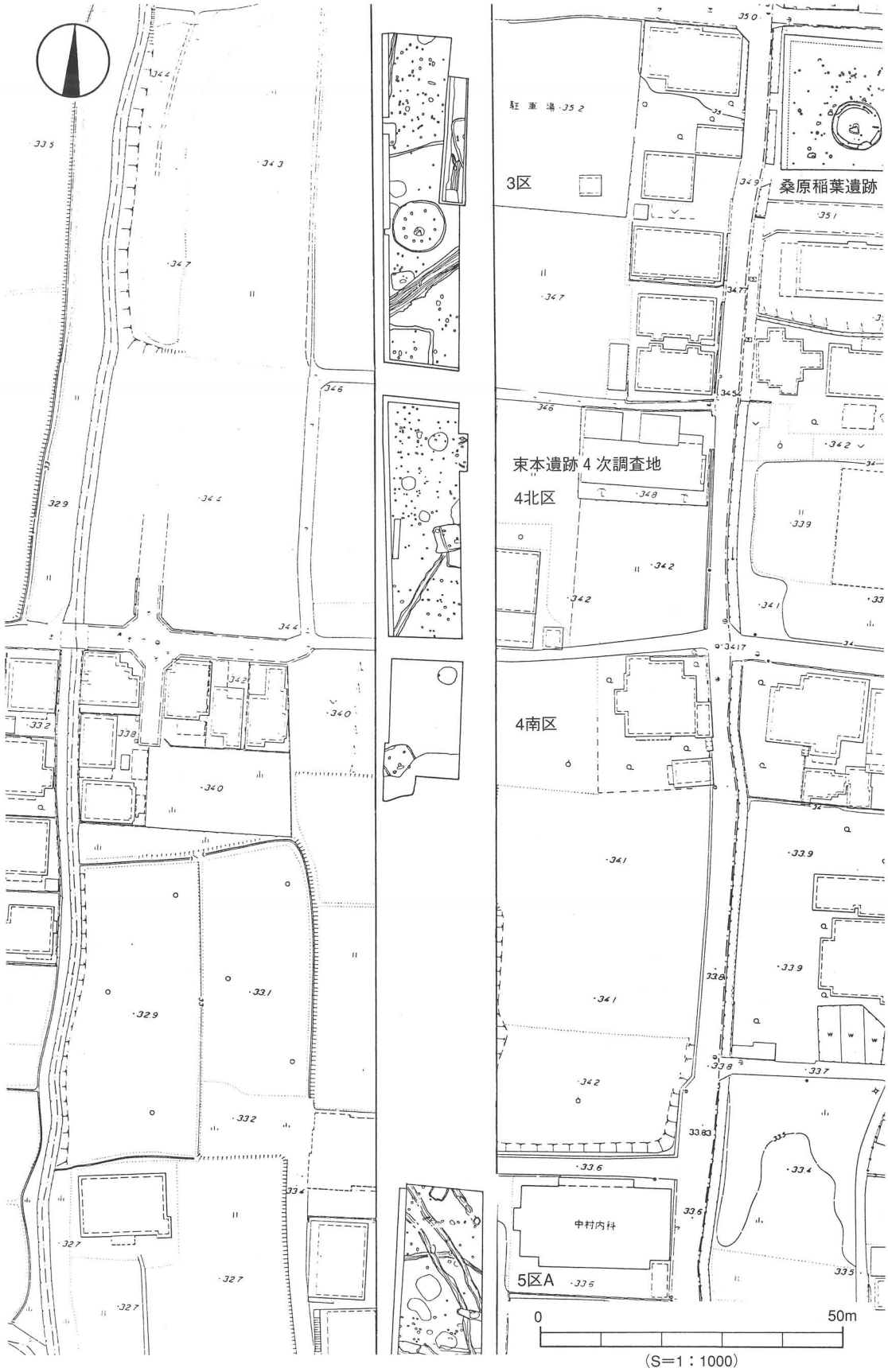
第Ⅶ①層　黄褐色砂質土で20～40cmの堆積である。北区中央で確認された。

第Ⅶ③層　褐色砂質土で10～28cmの堆積である。北区北部で確認された。

第Ⅶ⑤層　黄灰色粘質土で約15cmの堆積である。南区南端で確認された。

第Ⅶ⑨層　黄褐色砂礫で10～45cm以上の堆積である。調査区全体で確認された。

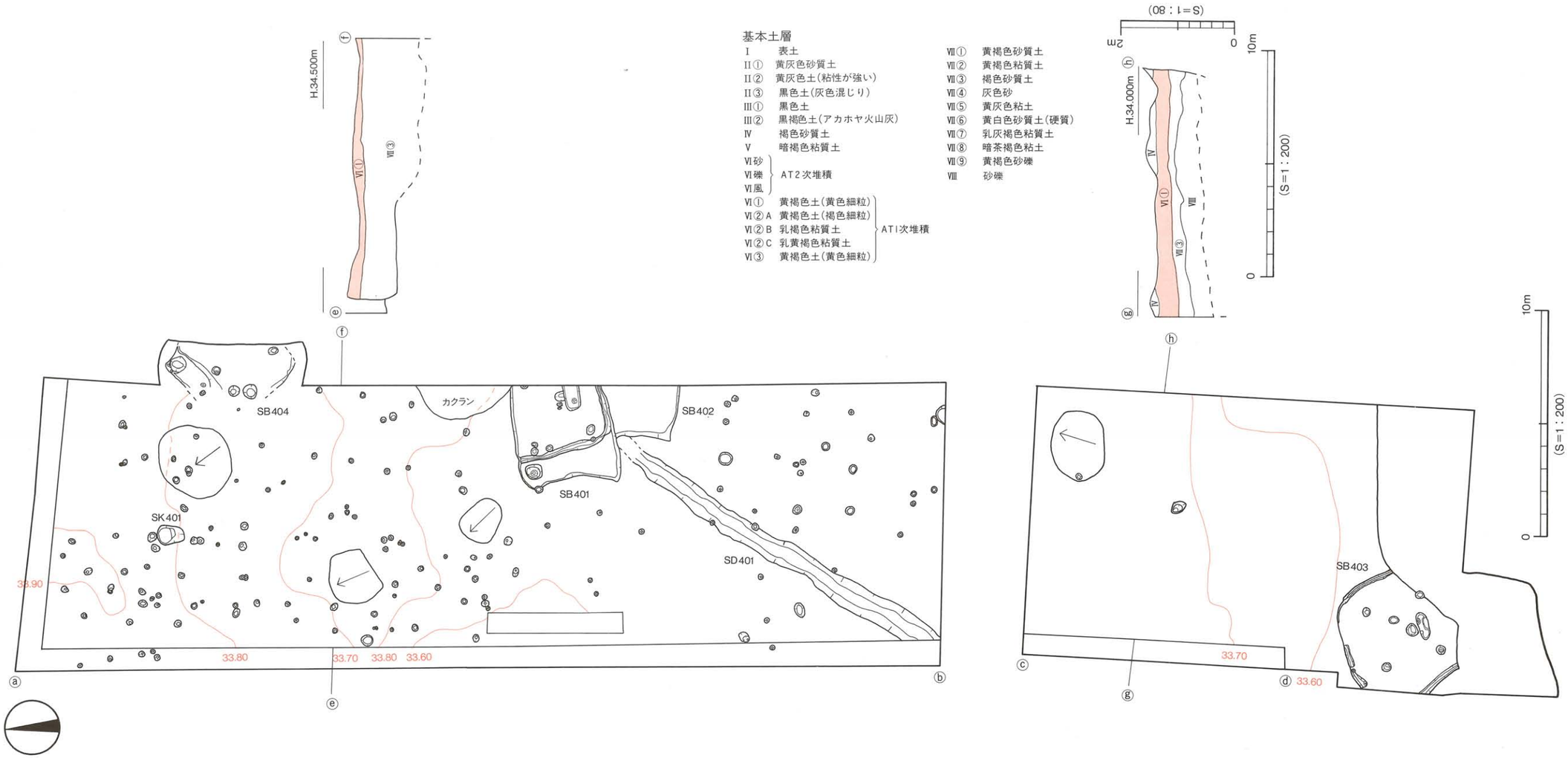
第Ⅷ層：砂礫層で45cm以上の堆積である。



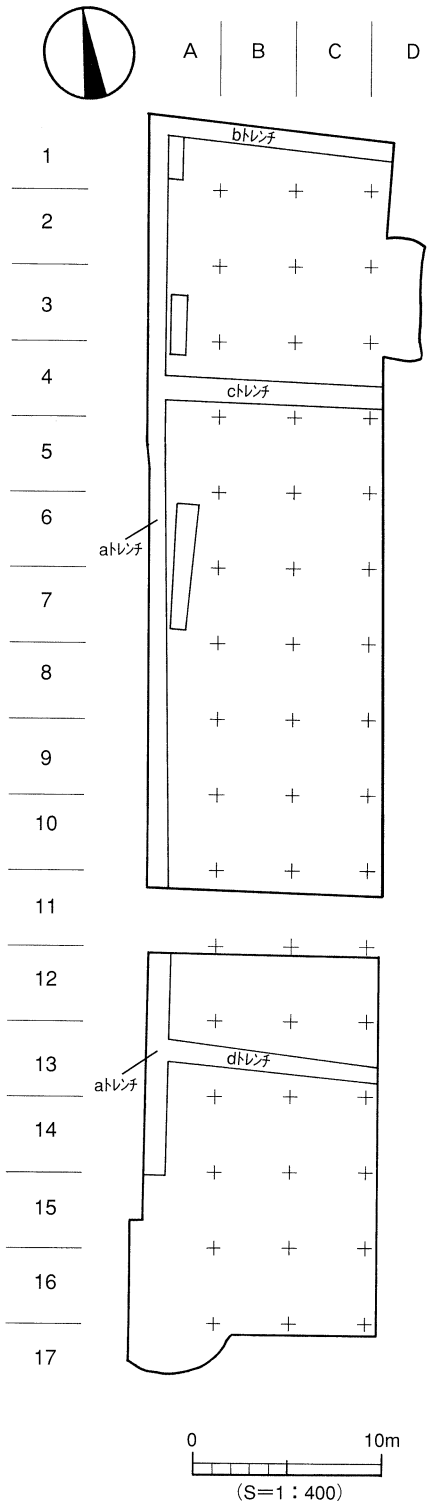
第88図　調査区位置図

基本土層

Ⅰ	表土
Ⅱ①	黄灰色砂質土
Ⅱ②	黄灰色土(粘性が強い)
Ⅱ③	黒色土(灰色混じり)
Ⅲ①	黒色土
Ⅲ②	黒褐色土(アカホヤ火山灰)
Ⅳ	褐色砂質土
Ⅴ	暗褐色粘質土
Ⅵ砂	AT2次堆積
Ⅵ礫	AT2次堆積
Ⅵ風	AT2次堆積
Ⅵ①	AT1次堆積 黄褐色土(黄色細粒)
Ⅵ②A	AT1次堆積 黄褐色土(褐色細粒)
Ⅵ②B	AT1次堆積 乳褐色粘質土
Ⅵ②C	AT1次堆積 乳黄褐色粘質土
Ⅵ③	AT1次堆積 黄褐色土(黄色細粒)
Ⅶ①	黄褐色砂質土
Ⅶ②	黄褐色粘質土
Ⅶ③	褐色砂質土
Ⅶ④	灰色砂
Ⅶ⑤	黄灰色粘土
Ⅶ⑥	黄白色砂質土(硬質)
Ⅶ⑦	乳灰褐色粘質土
Ⅶ⑧	暗茶褐色粘土
Ⅶ⑨	黄褐色砂礫
Ⅷ	砂礫



第89図　遺構配置図


A
B
C
D
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
bトレンチ
cトレンチ
aトレンチ
dトレンチ
aトレンチ
0
10m
(S=1：400)

第90図　区 割 図

３．遺構と遺物

遺構は、弥生時代の竪穴式住居址4棟、溝1条、柱穴38基、中世の土坑1基、柱穴120基を検出した。遺物は第Ⅲ層中と各遺構中より弥生土器、須恵器、土師器、土製品、鉄製品などが出土している。

〔１〕弥生時代

１）竪穴式住居址（ＳＢ）

ＳＢ４０１（第89・91～95図、図版63～66）

北区のＣ6～Ｄ7区で検出した。ＳＢ404からは約15m、南区のＳＢ403からは約40mを測る。ＳＢ402とＳＤ401を切る。平面プランは多少歪んでいる。これは、大型機械の重圧によるもので、住居址南西隅などは特に歪んだものである。

住居の東縁部は調査区外にあり全容は不明であるが、方形を呈するものと思われる。規模は東西335cm＋α、南北450cm、壁高26cmを測る。埋土は黒褐色土で、部分的に明褐色土が混入する。

住居内からは高床部、土坑3基、溝1条、主柱穴4基、作業台を検出した。遺物は弥生土器・土師器・鉄製品の他、炭化材・焼土が出土した。

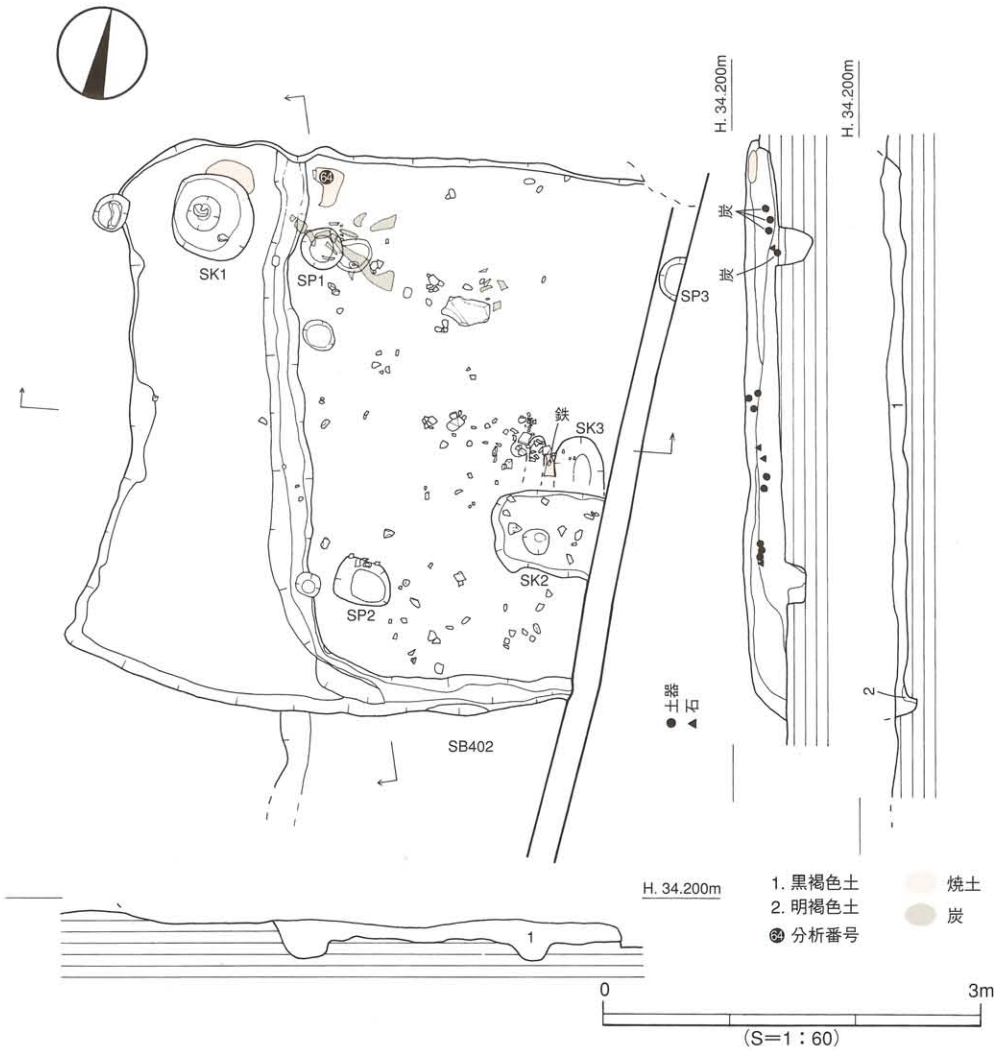
高床部　高床部は住居西端部で西縁と平行するように検出された。平面形態は長方形で、規模は南北450cm、東西100～130cm、厚さ15cmを測る。高床部は削り出しで作られ、上面はほぼ水平で平坦である。

土坑（ＳＫ１）（第91・92図）　住居北西隅での検出である。平面形態は楕円形で、断面形態は南北で「Ｕ」字状を呈する。規模は長軸70cm、短軸65cm、深さ50cmを測る。埋土は3層に細分が可能で①層黒色土（やや明るい）、②層黒色土、③層黒色土（やや赤味で柔らかい）である。②層は北側肩部から堆積し、③層にもぐり込む様に土坑中位まで堆積し、その上部に焼土が密集する。遺物は弥生土器の鉢形土器が焼土中より出土した。

土坑（ＳＫ２）（第91・93図）　住居南東部での検出である。東部は未確認であるが、平面形態は方形を呈するものと思われる。規模は東西80cm＋α、南北65cm、深さ15cmを測る。東西断面形態は皿状である。埋土は上層が茶褐色土、下層が黒褐色土となる。遺物は上・下層から弥生土器が出土している。土坑西端より出土した鉢形土器は比較的残りが良いものである。また、床面西では凹地を検出した。平面形態は円形で、規模は径20cm、深さ15cmを測る。埋土は黄橙色土である。この凹地はＳＫ2に伴うものと思われる。

土坑（ＳＫ３）（第91・93図）　ＳＫ2の北で、床面精査時に住居埋土と茶褐色土の混合土を除去した後に検出した。平面形態は東部が未調査であり、南縁はＳＫ2に切られることにより全容は不明であるが、北西コーナーが検出されていることから方形を呈するものと思われる。規模は東西100cm分を検出、南北60cm、深さ20cmを測る。東西断面形は皿状を呈する。埋土は上層の茶褐色土に黒色混じり、下層の黒褐色土の2層である。上層の茶褐色土は焼土が混じり西側に堆積していた。遺物は上層からは炭化物の小片が、下層からは弥生土器と鉄製品、炭化物の小片が出土した。なお、遺物は土坑の西半部からの出土が目立つ。床面からは凹地を検出した。平面形は楕円形で、径39～45cm、深さ7cmを測る。埋土は黒褐色土で、遺物の出土はない。

溝　高床部の内側面に沿うように検出された。溝の南部は、住居南壁手前で東に曲がり徐々に南壁へと接して行き、溝幅は徐々に狭くなる。規模は検出長630cm、上場幅20～30cm、深さ15cmを測る。



第91図　SB401測量図

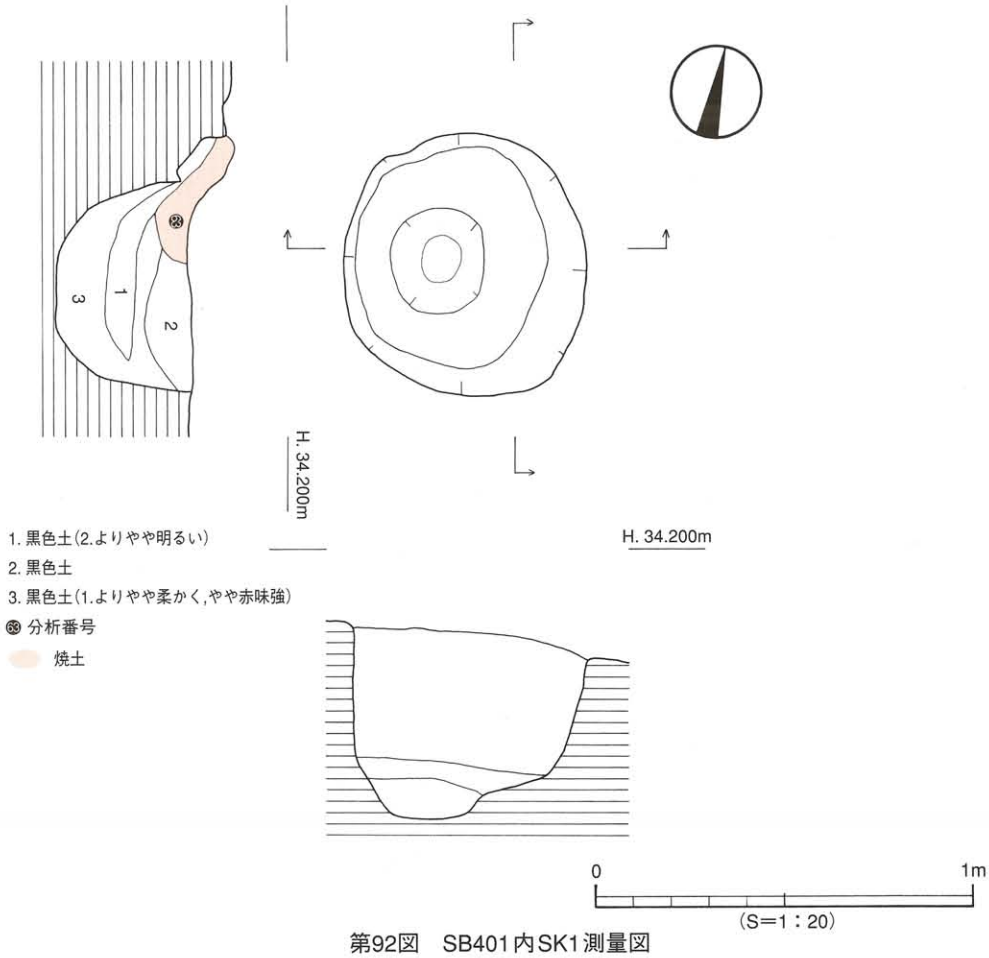
埋土は黒褐色土である。遺物の出土はない。

主柱穴　高床部内側の床面と住居北東隅で3基を検出した。南東の主柱穴は未確認であるが主柱穴は4本柱と考えられる。北西隅の主柱穴には切り合いがあり、住居内側に旧柱穴、外側に新柱穴が位置する。柱間隔は新柱穴間で東西280cm、南北270cm、旧柱穴間は東西間が約10cm短かいものである。柱穴は円もしくは楕円形のプランで、径33～45cm、深さ20～30cmを測る。埋土は茶褐色土である。遺物は出土していない。

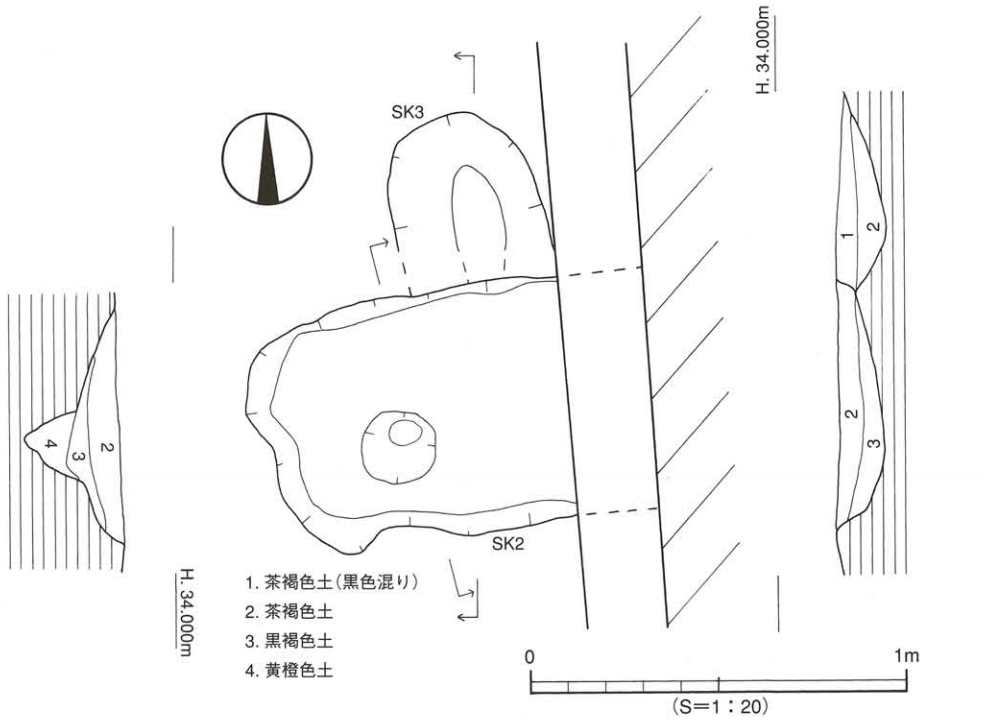
遺物出土状況

作業台　住居北壁から1.3m、ＳＫ2からは北西に2mの位置で、床面に据え置かれた状態で検出した。作業台は隅が丸い花崗岩である。長さ35cm、幅20cm、厚さ15cmを測る。石の上面では顕著な使用痕は確認されなかった。

弥生土器は土坑より出土したが、特にＳＫ2・3の周囲に分布が濃い。器種は甕形土器・鉢形土器・器台形土器・支脚形土器である。土錘は北壁際の床面から、不明土製品は土錘のやや東側の床面よりはやや浮いた状態での出土であった。鉄製品はＳＫ3からの出土である。炭化材は主柱穴ＳＰ1・4に覆いかぶさるような形で出土した。ＳＰ4の北側にある東西方向のものは長さ35cm、幅13cm、厚さ7cm、



第92図　SB401内SK1測量図



第93図　SB401内SK2･3測量図

ＳＰ1・4を斜めにまたぐように出土したものは長さ90cm、幅8～15cm、厚さ1.5cm（最厚部）を測る。これら炭化材の間には小さい炭化材が出土している。

焼土はＳＫ1の北縁部とＳＰ1の北側から出土した。ＳＫ1の北縁部から検出されたものは楕円形状に堆積しており、東西40cm、南北30cmを測る。焼土の南半分はＳＫ1につづき、厚さは6～8cmを測る。炭化材の北で検出されたものは、東西22cm、南北30cmを測り、南北の断面形態は住居床面を基底部とし、山形状に盛り上がっているものである。焼土中からは遺物の出土はない。

出土遺物（第94・95図、図版72）

甕形土器（435）　口縁部片である。口縁端部は面をもつ。

壺形土器（436～439）　436～438は口縁部片である。436・437は口縁端部をやや肥厚させている。436は口縁端面に鋸歯文を施す。438は大きく開く口縁部である。口縁端部は面をもち、「ノ」字状の文様を施す。439は底部片である。

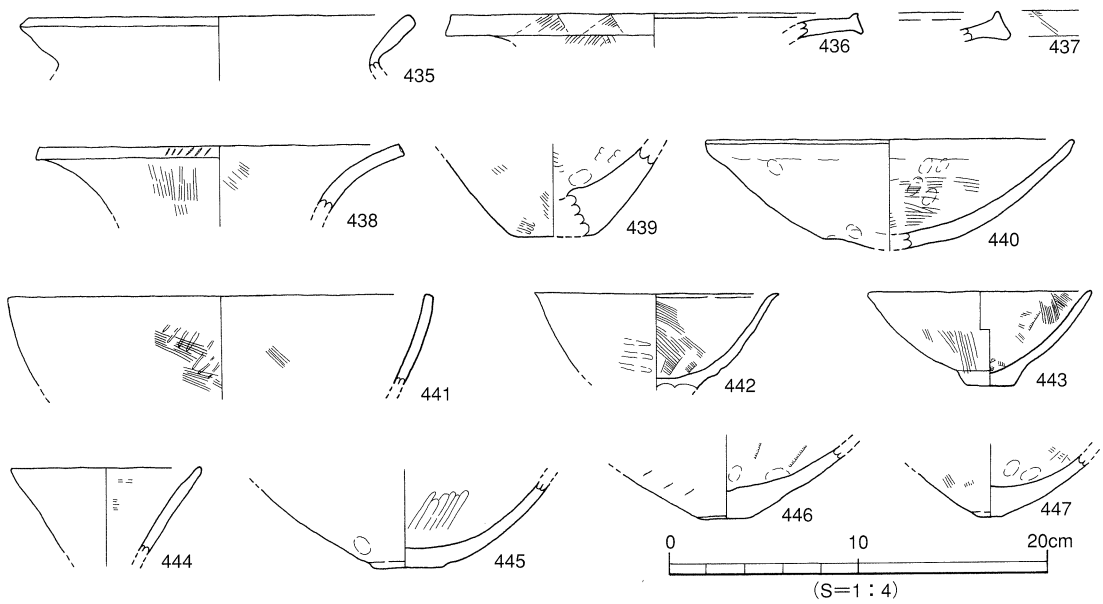
鉢形土器（440～447）　440は底部から緩やかに立ち上がるものである。441は口縁部片で端部はやや角張る。442は底部が欠損している。ゆるやかに内湾気味に立ち上がり、端部付近で外湾し端部は尖る。443は突出した底部をもつ小型品で、口縁端部はあまり尖らず丸味をもつ。444は逆「ハ」字状に開く口縁部片で、端部はやや丸い。445～447は底部片である。445はわずかに突出した底部をもち、緩やかに内湾気味に立ち上がる。446は平底の底部で、大きく外側へ開くように立ち上がる。447は小型品でボタン状の底部はわずかに突出している。

器台形土器（448）　受部の端部片である。端部が上下方向に突出する。

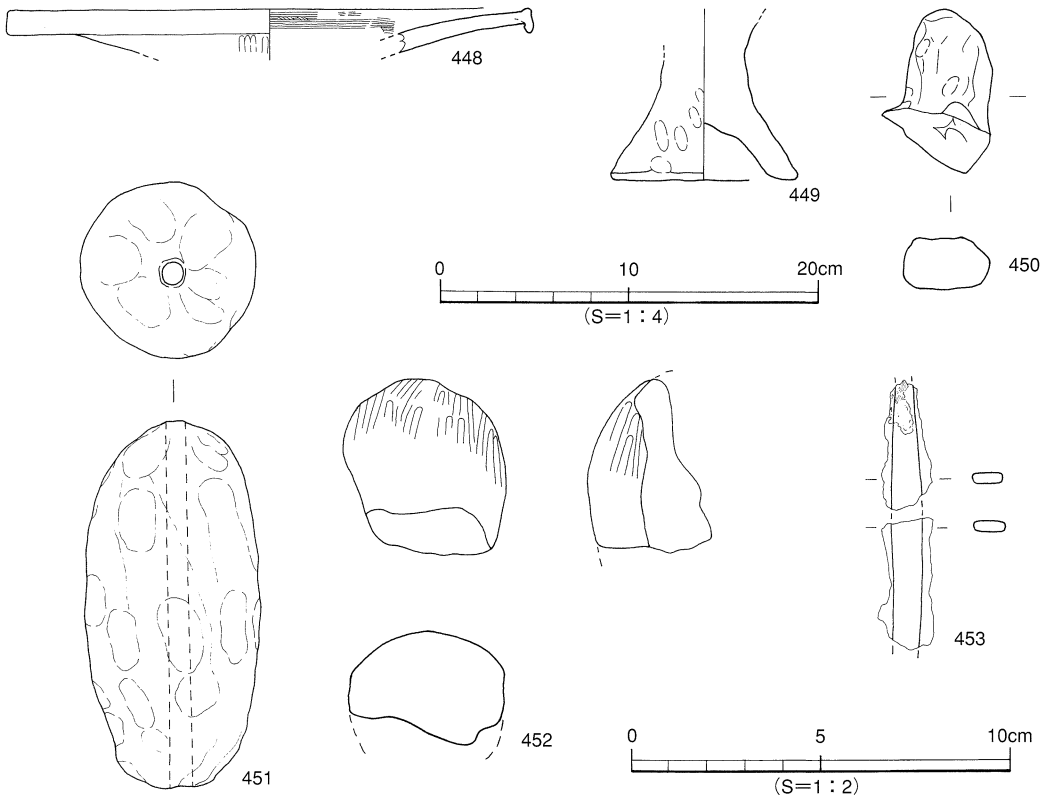
支脚形土器（449・450）　449は柱部から端部までの破片である。器壁は厚く、作りは雑である。450は角状突起の受部片である。

土製品（451・452）　451は土錘である。棒状工具に粘土を巻き付け形成したと思われるもので、指圧痕がみられる。452は器種不明品である。器面はミガキ調整が見られる。

時期：出土遺物の鉢形土器の形態より弥生時代後期末に埋没したと考える。



第94図　SB401出土遺物実測図（1）



第95図　SB401出土遺物実測図（2）

ＳＢ４０２（第89・96図、図版63）

ＳＢ402は調査区中央のＣ7～Ｄ8区で検出した。ＳＢ401に切られ、ＳＤ401を切る。住居床面西半部は重機による歪みをもつ。

住居の東壁は調査区外にあるが、南西コーナーを検出したため平面形態は方形を呈するものと思われる。検出された東西長は200cm、南北長は320cm、壁高は5cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層である。住居内からの遺構は検出されなかった。なお、土層観察用のベルトでは住居埋土（黒褐色土）に焼土の混入がみられる部分が観察できた。ただし、この土は上面からの切り込みのものであり、かつ住居床面は変化がみられなかったため、住居に伴うものではないと判断した。

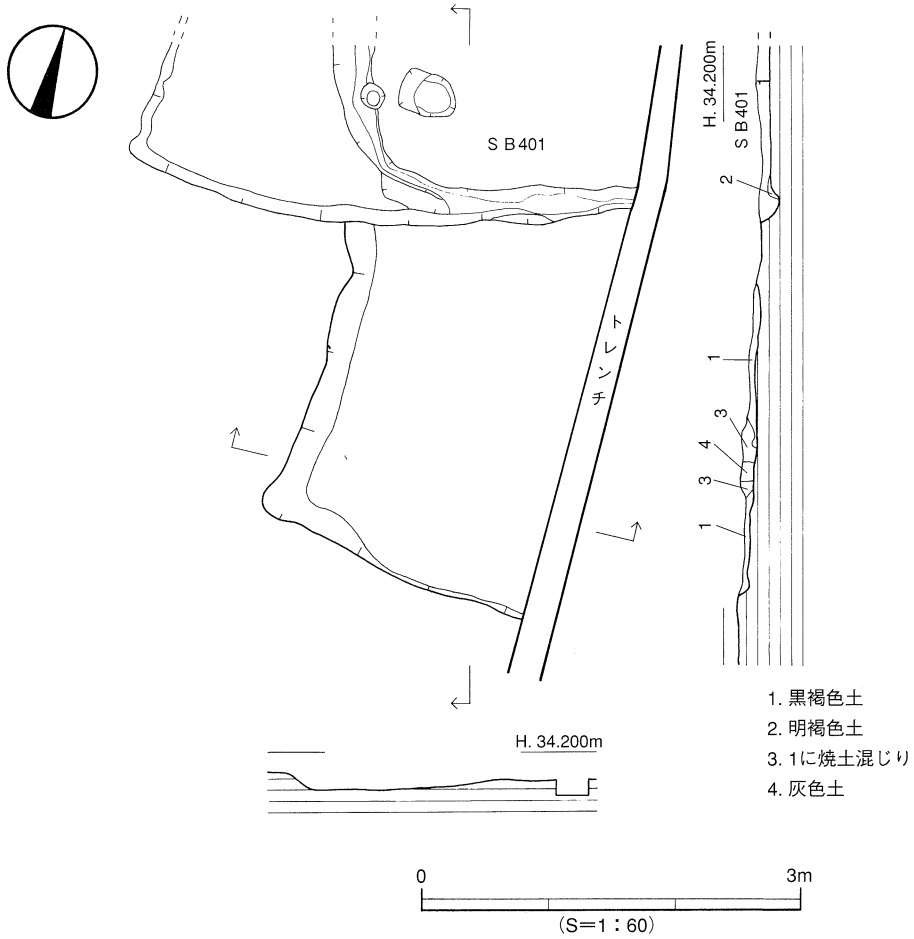
遺物は弥生土器の小片が少量出土したが図化はできなかった。

時期：ＳＢ401に切られるが、埋土及び遺物よりＳＢ401と同時期の弥生時代後期末と考えられる。

ＳＢ４０３（第89・97・98図、図版66～69）

ＳＢ403は4区南端のＡ15～Ｂ16区で検出した。住居の南壁部分は近現代に削平されているが、北東コーナーを検出しているため平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。規模は東西530cm、南北520cm（＋α）、壁高15cmを測る。埋土は黒褐色土（焼土を含む）である。住居址内からは炉址、周壁溝、主柱穴、貼り床を検出した。遺物は、弥生土器、円礫石、焼土、炭化物がある。

炉址（第98図）は住居中央南寄りに位置し2基検出した。南側の炉①の平面形態は楕円形を呈し、東西121cm、南北48cm、深さ50cmを測る。埋土は黒色土である。炉の北・南縁には炉内の埋土を覆うように焼土の堆積がみられた。また、炉①の北側より炉②を検出した。炉②の平面形は不整な円形で、



第96図　SB402測量図

径42～54cm、深さ45cmを測る。埋土は茶褐色土に黒褐色土が混ざるものである。この炉①と炉②の境には土堤がみられる。

周壁溝は壁体に沿って検出された。北東のコーナーから西約2m間は検出されなかった。規模は幅15～20cm、深さ約8cmを測る。埋土は黒褐色土であり、住居埋土と同じである。北西では周壁溝は部分的に途切れ、小ピットにかわる所がある。周壁溝からは遺物の出土はない。

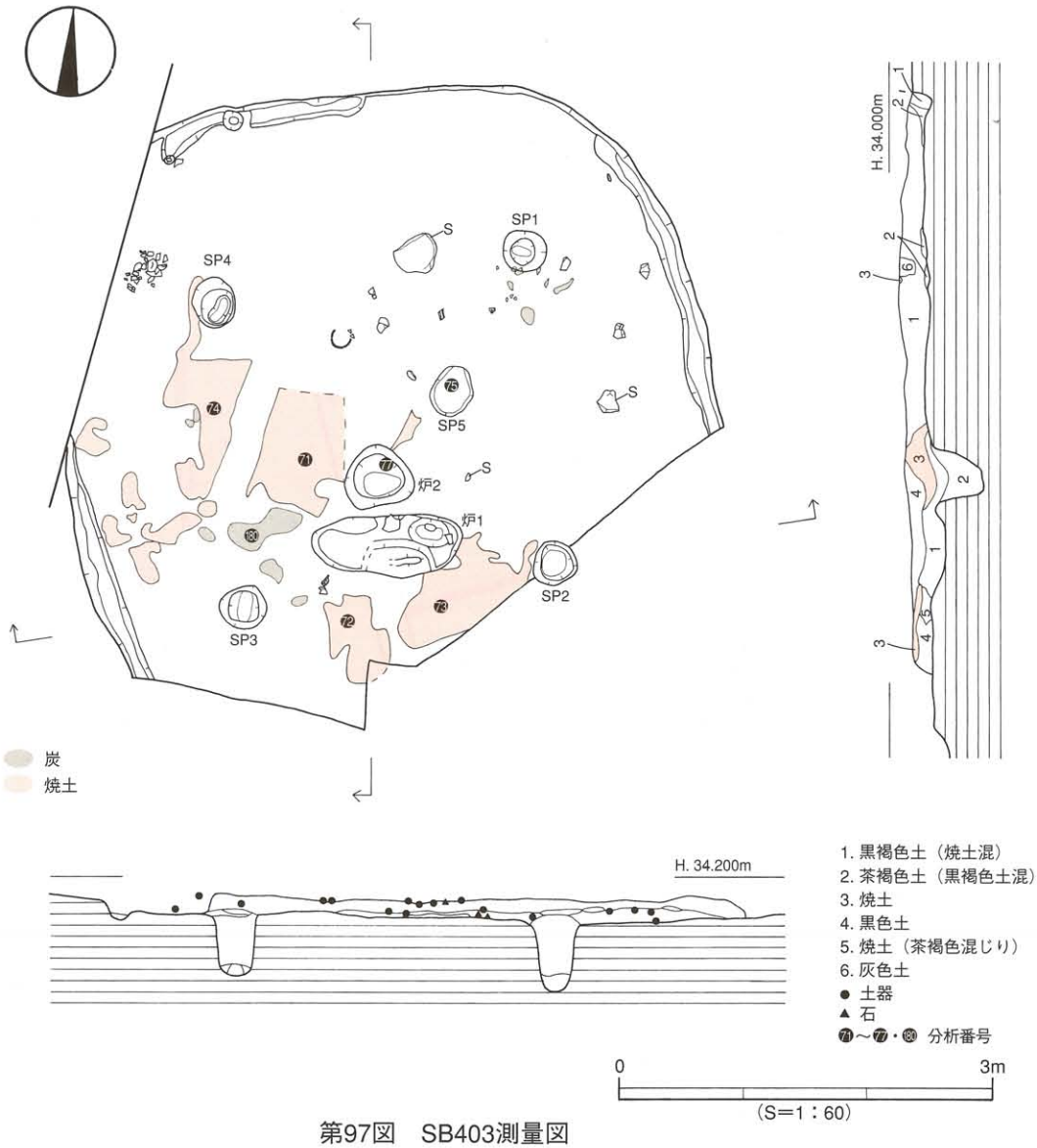
主柱穴は4基検出した。柱穴は正方形に配置し、柱間は250cmを測り、ほぼ住居の壁と平行する。柱穴は円形及び楕円形を呈し、規模は径33～40cm、深さ50～60cmを測る。埋土は黒褐色土と黄褐色土である。柱穴からは遺物の出土はない。

貼り床は住居の西半部より検出した。貼り床の西辺は住居のやや中央北側を通るように弧を描いて検出された。規模は南北長400cm、東西235cm、厚さ5～8cmを測る。この貼り床土は基本層位の第Ⅳ層と黒色土の混合土である。

遺物出土状況　弥生土器は住居全体に散在していたが、特に北側に出土が多い。器種は甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、土製紡錘車（1点）がある。

円礫石が1点出土した。北側主柱穴とほぼ一直線に並びＳＰ1の西1mの位置である。材質は花崗岩で長さ35cm、幅25cm、厚さ25cmを測る。

焼土は主柱穴ＳＰ1とＳＰ4を結んだ線から南西部で検出した。炉の上面では堆積は見られない。北



第97図　SB403測量図

西方向に延びる焼土は炉の中心から2.3m、幅1m、厚さ約10cmを測り、横断面形は山形状を呈している。炉の南で検出されたものは東西2.5m、幅約0.9m、厚さ10cmを測り、横断面形は山形状を呈する。焼土中からは炭化物が出土している。

炭化物は炉の南西にあり楕円形を呈し、径100cm、厚さ2～3cmを測る。炭化物からは遺物の出土はない。

出土遺物（第99図、図版73）

甕形土器（454・455）454は底部を欠損しているもので、「く」の字状に折り曲げられる口縁部は短い。胴部の器壁は厚く、内面は板状工具でカキ取りされたもので調整は粗雑である。455は口頸部片である。「く」の字状に折れ曲がるもので、明瞭な稜は見られない。

壺形土器（456）小さく突出する底部をもち、胴部は少し横へ張り出す球形をなす。器壁はやや薄手で、外面は細かくミガキ調整がなされる。長頸壺と想定される。

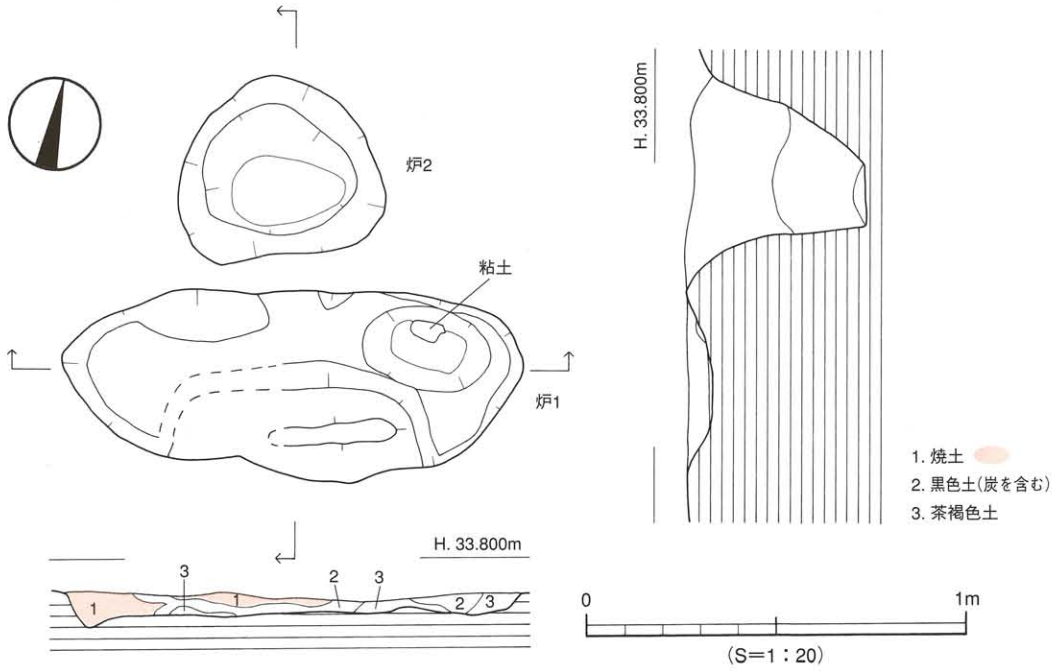
鉢形土器（457～459）457は平底で突出した底部をもち、内湾気味に立ち上がる口縁部は薄手に仕上げられ、端部は丸味をもつ。458は口縁部片である。口縁部及び端部は457と類似する。459は小さく

上げ底となるくびれの底部をもち、底端部は尖る。胴部は器壁が厚く、外方へ開くものである。

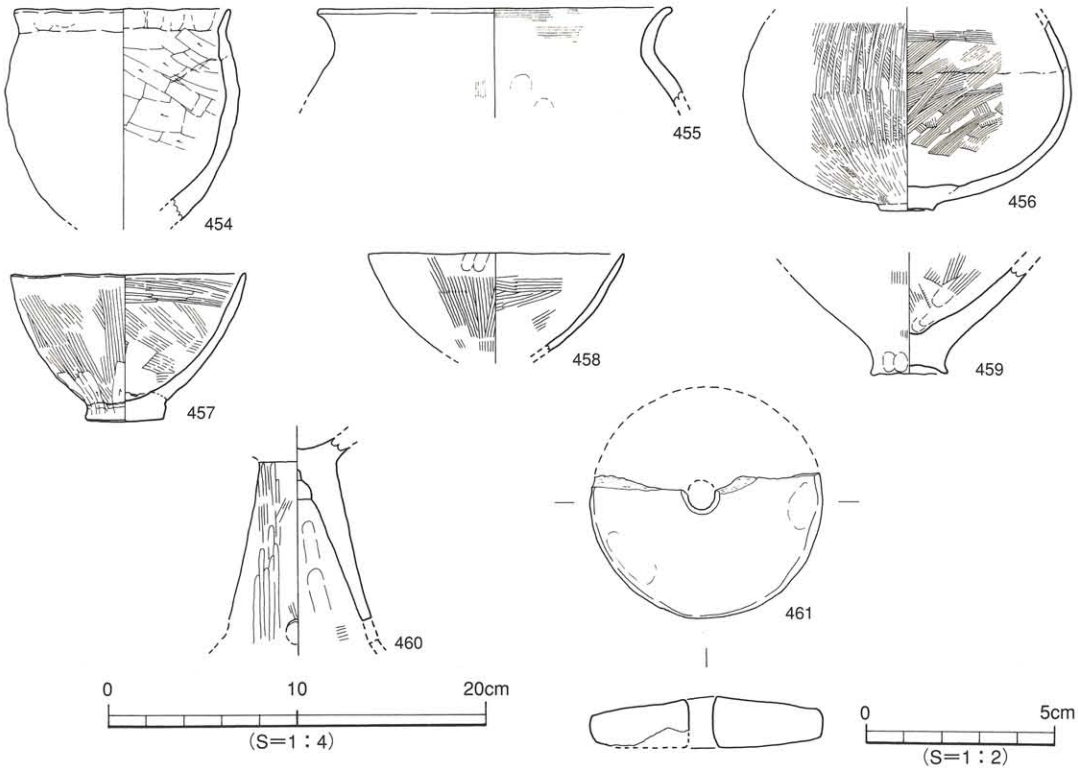
高坏形土器（460）柱部の破片である。柱部は坏部に差し込み接合する。脚柱内面の天井部には棒状工具で穿った小円孔が見られる。裾部には円孔が3方向に残り、全体として4方向が想定される。

土製品（461）紡錘車である。

時期：鉢形土器の形態より弥生時代後期後葉～末に埋没したと考える。



第98図　SB403炉測量図

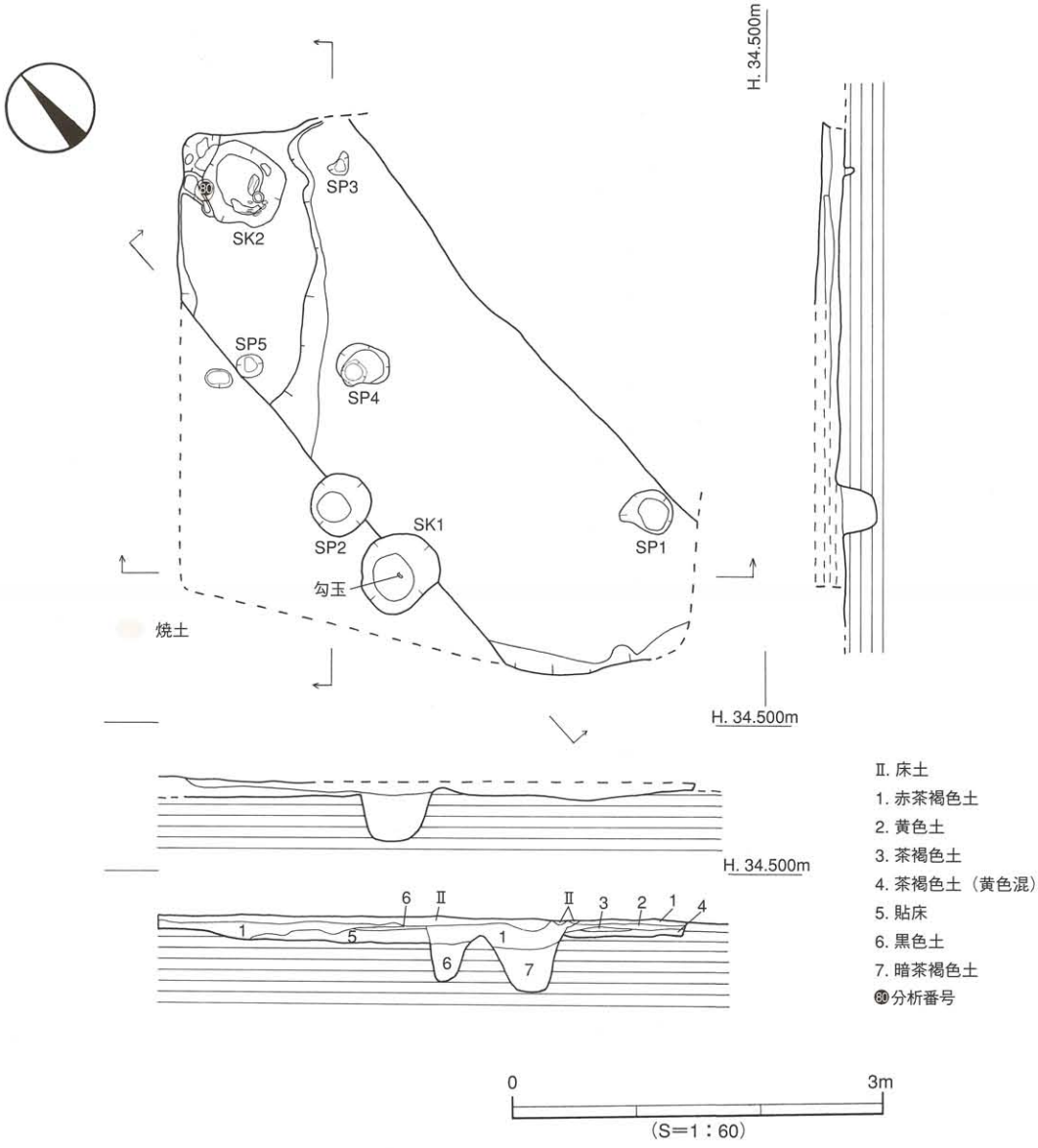


第99図　SB403出土遺物実測図

ＳＢ４０４（第89・100図、図版69～71）

ＳＢ404は調査区北部のＤ2～3区で検出した。住居の西隅コーナーは削平を受け欠除し、東隅は調査区外にあり全容は不明であるが、北隅を検出したため平面形態は方形を呈するものと思われる。規模は、確認できた周壁の推定線上では北西～南東420cm＋α、北東～南西440cm＋αを測る。壁高は残存部分で約10cmを測る。埋土は4層に分層ができ、①層赤褐色土、②層黄色土、③層茶褐色土、④層茶褐色土（黄色土混入）である。住居址内からは土坑2基、主柱穴3基、柱穴2基を検出した。遺物は弥生土器と土製勾玉が出土した。

土坑（ＳＫ１）　主柱穴ＳＰ2の南隣りで検出した。平面形態は楕円形を呈し、径60～68cm、深さ60cmを測る。埋土は上層の赤茶褐色土と下層の暗茶褐色土に分層できる。遺物は下層中の土坑基底面より土製勾玉が出土した。住居址内の貯蔵穴と考えられる。



第100図　SB404測量図

土坑（ＳＫ２）（第100・101図）　住居址北隅で検出した。平面形態はやや不整の楕円形を呈し、径65～68cm、深さ53cmを測る。埋土は5層に分層ができる。遺物は基底面より弥生土器と礫石、焼土が出土した。弥生土器にはほぼ完形に近い小型の鉢形土器が2点ある。礫石は花崗岩で、大きさは18×6×5cmを測る。使用痕は見られない。焼土は土坑中位で埋土④層の下部に堆積し、厚さは15cmを測る部分がある。住居内の貯蔵穴と考えられる。

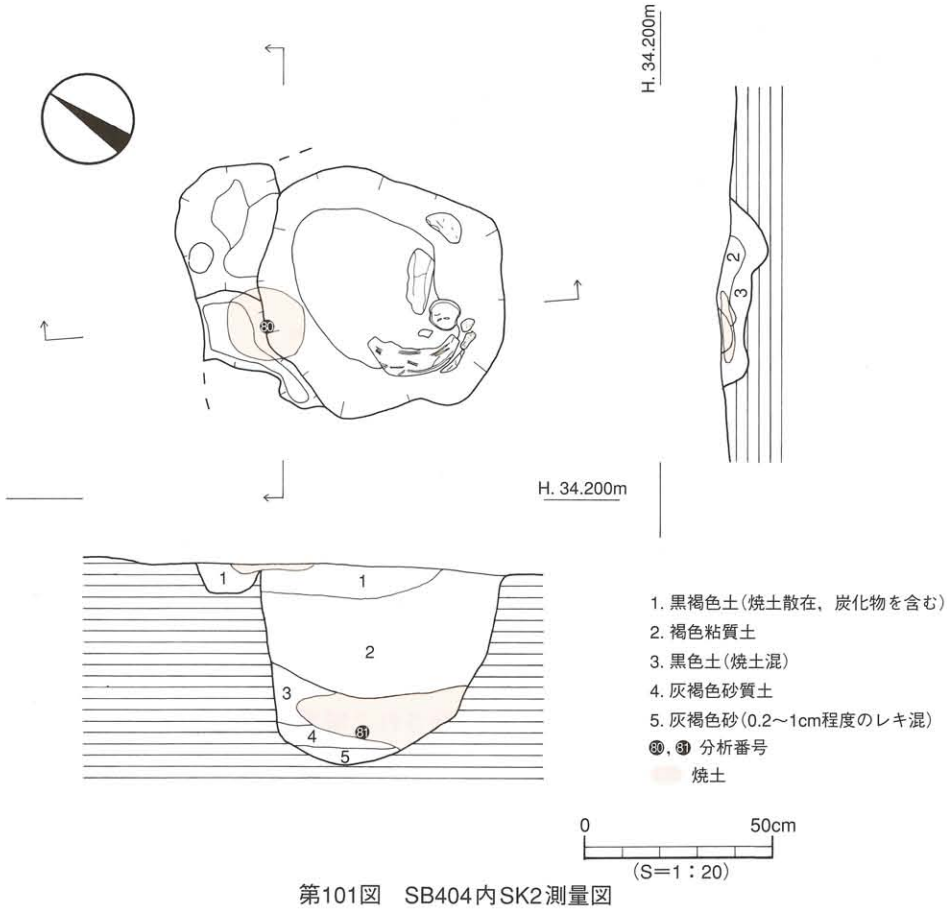
主柱穴（第100図）　住居址の北西～南東壁に沿って検出された。平面形態は楕円形でＳＰ2は径40～50cm、深さ28cm、ＳＰ3は径11～21cm、深さ33cmを測る。埋土は黒色土である。柱穴からの出土はない。

柱穴　2基の柱穴は住居址北西部で検出した。ＳＰ4の平面形態は楕円形を呈し、規模は径35～45cm、深さ47cmを測る。ＳＰ5は円形を呈し、規模は径20cm、深さ11cmを測る。埋土は黒色土である。遺物の出土はない。埋土が住居址埋土と同じであるため、住居に伴うものであるが、柱穴の性格は判断できない。

遺物出土状況　弥生土器は住居址埋土及び土坑から出土しており、甕形土器・壺形土器・鉢形土器・土製勾玉がある。住居の遺存状況が悪く遺物の出土も少量である。図化できたものには鉢形土器が多い。

出土遺物（第102図、図版73）

甕形土器（462・463）　底部片である。462はやや尖り気味の丸底である。外面は細かいミガキが施され丁寧に仕上げられる。463は平底である。



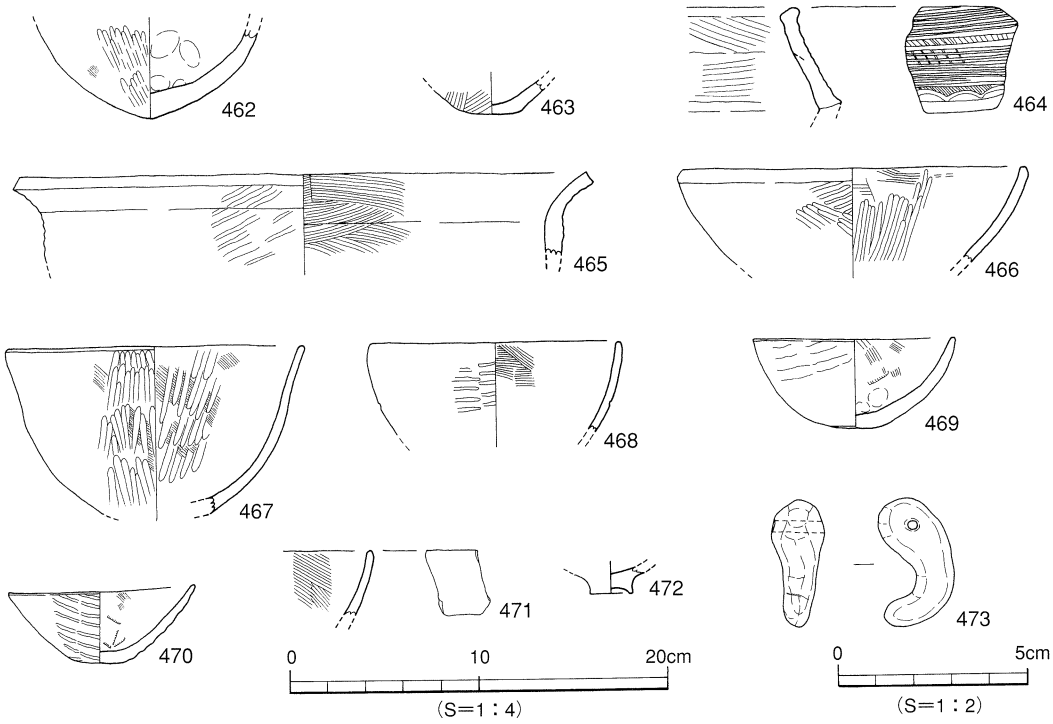
第101図　SB404内SK2測量図

壺形土器（464）　複合口縁壺の口縁部片である。多条沈線の最下段には波状文が施されている。

鉢形土器（465～472）　469は小さい平底で、内湾気味に立ち上がる口縁端部は尖り気味である。470は平底で、口縁部は外方へ開き端部は尖り気味である。外面はタタキ痕跡が顕著に残る。465は口縁部片で「く」の字状に折れ曲がり、内面では稜が見られる。口縁端部は面をもつ。外面はタタキのみで、仕上げの調整は見られない。内面はハケ調整である。大型品。467は底部が欠損する。内湾気味に立ち上がる口縁部はやや外反する。口縁端部は丸い。内・外面とも細かくミガキ調整されている。466は口縁部が玉縁状に仕上げられている。内・外面ともミガキ調整されているが、外面にはタタキの痕跡が残る。468・471は口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられる。472は底部片で突出する上げ底をもつ。

土製品（473）　勾玉である。

時期：出土遺物の鉢形土器の形態より弥生時代後期末に埋没したと考えられる。



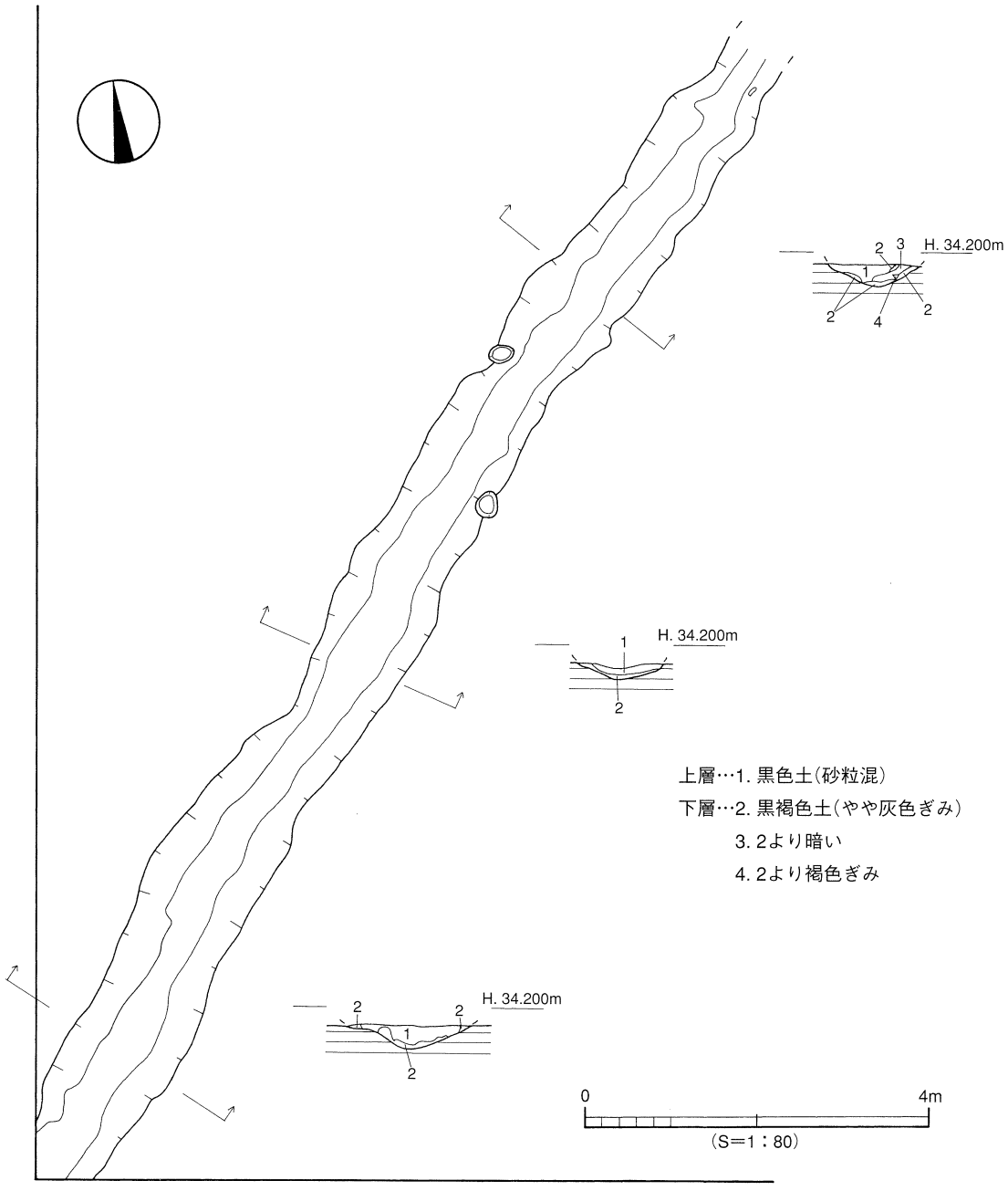
第102図　SB404出土遺物実測図

２）溝（ＳＤ）

ＳＤ４０１（第89・103図）

調査区中央部のＣ7～Ａ11区で検出し、ＳＢ401・402に切られる。検出長17m、上場幅90～130cm、深さ16～28cmを測る。断面形はレンズ状を呈する。埋土は上・下層に大別され、下層は細分される。上層は１層黒色土（砂粒混じり）であり、下層は3分され２層黒褐色土（やや灰色気味）、３層黒褐色土（２層よりやや暗い）、４層黒褐色土（２層よりやや褐色気味）となる。基底部は傾斜（南部が低い）し比高差は約10cmを測る。遺物は弥生土器の小片が少量出土したが、図化できるものはない。

時期：ＳＢ401とＳＢ402に切られるため、弥生時代後期末以前に埋没したと考えられる。



第103図　SD401測量図

3）柱穴（ＳＰ）

弥生時代の柱穴は38基である。柱穴は調査区全体に散在するが、北区の南部には多くみられた。平面形態は円形ないし楕円形を呈し、径15～50cm、深さ12～40cmを測る。埋土は黒色である。遺物は弥生土器の小片が少量出土したものもあるが図化はしきれない。遺物の出土がない柱穴は、埋土が黒色土であることから弥生時代と判断した。

〔２〕中世～近世代

中世～近世代の遺構は土坑1基と柱穴120基である。

１）土坑（ＳＫ）

ＳＫ４０１（第89図）

調査区北部のＢ2区で検出した。平面形態は長楕円形を呈し、規模は長さ115cm、幅70～90cm、深さ27cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。断面形態は縦断面で逆台形状を呈し、南壁はなだらかに傾斜している。遺物は土師器（かわらけ）の小片が少量出土するが図化しきれなかった。

時期：出土遺物と埋土より中世以降と考える。

２）柱穴（ＳＰ）

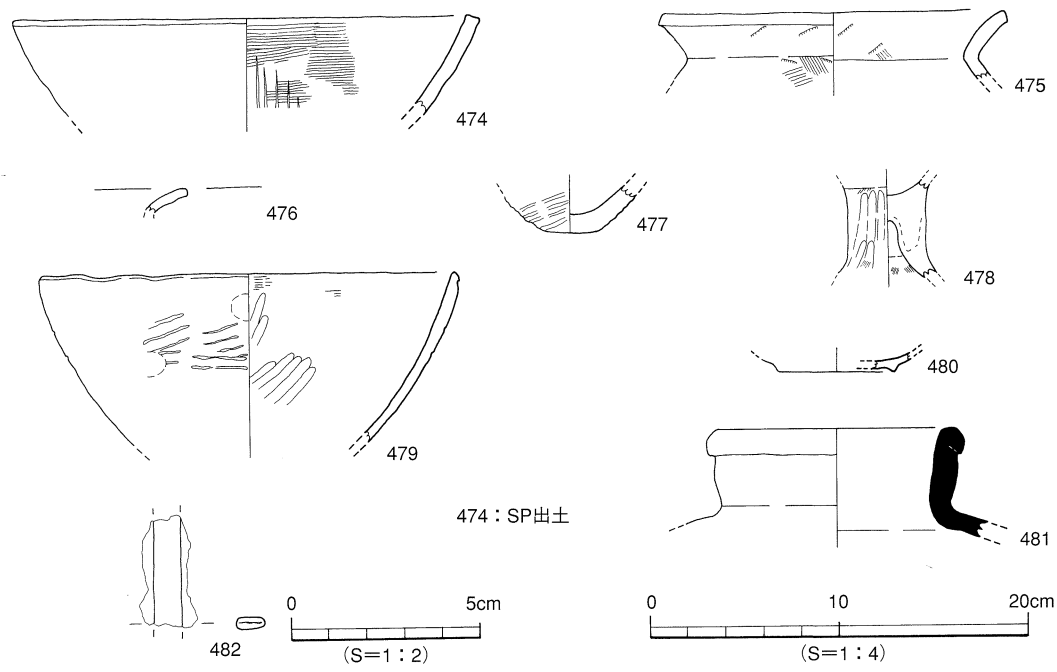
北区のほぼ全面で検出したが南端部では見られない。また、柱穴は中央部から北部にかけて密集している。柱穴の平面形態は円形ないし楕円形を呈し、径20～50cm、深さ10～40cmを測る。遺物の出土はほとんどなく、数基の柱穴より土師器の小片が少量出土したが器種の判断はしがたい。また、図化したものには土師器（古墳時代）が1点あるが埋土は中世～近世代の柱穴に似ており混入品と考える。

柱穴は埋土の違いにより少なくとも3分類される。

ａ類：埋土が灰褐色土であるもの　67基

ｂ類：埋土が暗灰褐色土であるもの　44基

ｃ類：埋土が暗茶褐色土であるもの　9基



第104図　その他の出土遺物実測図（1）

a類は北区の中央から北で集中して検出された。規模は径20～40cmで小型～中型のものである。b類は北区の全体に散在するが北側での検出が多く、規模は径30～50cmの中型～大型のものである。c類は調査地全体に散在しており、規模は径8～50cmで中型のものである。

柱穴の規模・埋土からは、掘立柱建物の復元にはいたらなかった。

出土遺物（第104図、図版72）

土師器（474）　鉢形土器の口縁部片である。口縁端部は面をもつ。

〔3〕その他の遺構・遺物

南区南端部と北区北西部で倒木4基、近現代坑を検出した。第Ⅱ層と近現代坑の埋土からは弥生土器と土師器（かわらけ）が出土した。

1）倒木（ＳＸ）（第89図）

ＳＸ４０１

北区Ａ～Ｂ4区で検出された。倒木方向は北西方向である。痕跡の北西半分は黒色土、南東半分はＡＴ火山灰が確認された。

ＳＸ４０２

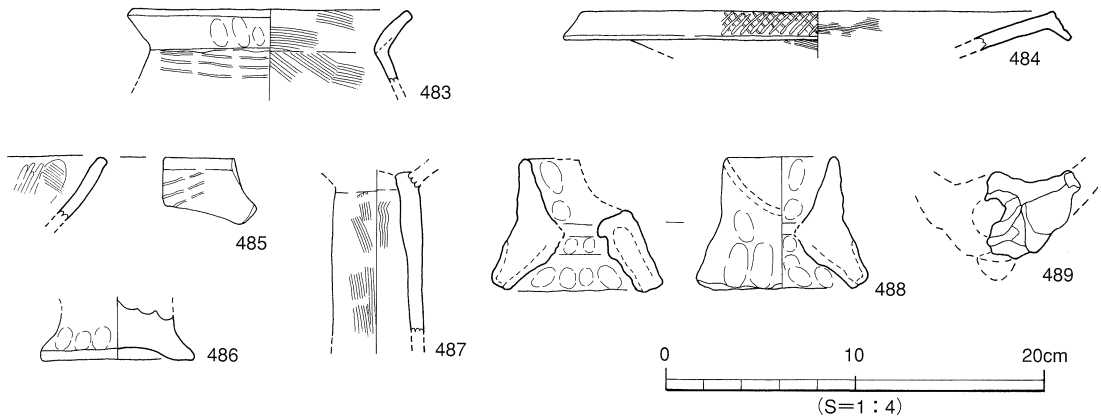
北区Ｂ5・6区で検出された。倒木方向は北西方向である。痕跡の北西半分は黒色土、南東半分はＡＴ火山灰が確認された。

ＳＸ４０３

南区Ｃ13で検出された。倒木方向は北東方向である。北東半分は黒色土、南西半分はＡＴ火山灰が確認された。

ＳＸ４０４

北区のＣ2・3区で検出された。倒木方向は北西方向である。北西半分は黒色土、南東半分はＡＴ火山灰であり、南東端部ではＡＴ火山灰下位層が確認された。



第105図　その他の出土遺物実測図（2）

２）その他の出土遺物（1）（第104図、図版72）

弥生土器（475～479）　475は甕形土器の口縁部片である。「く」の字状に折れ曲がり、内外面とも稜をもつ。口縁端部は面をもつ。477は甕形土器の底部片で、平底である。外面はタタキ痕が見られる。476は甕形土器の口縁部片で、口縁端部は丸い。478は高坏形土器の柱部片で、充塡技法である。柱・裾部境には円孔をもつ。　479は鉢形土器の口縁部片で、やや内湾気味に立ち上がる口縁部はやや尖り気味に面をもつ。

瓦器（480）　埦の底部片で、断面が逆三角形の輪高台をもつ。

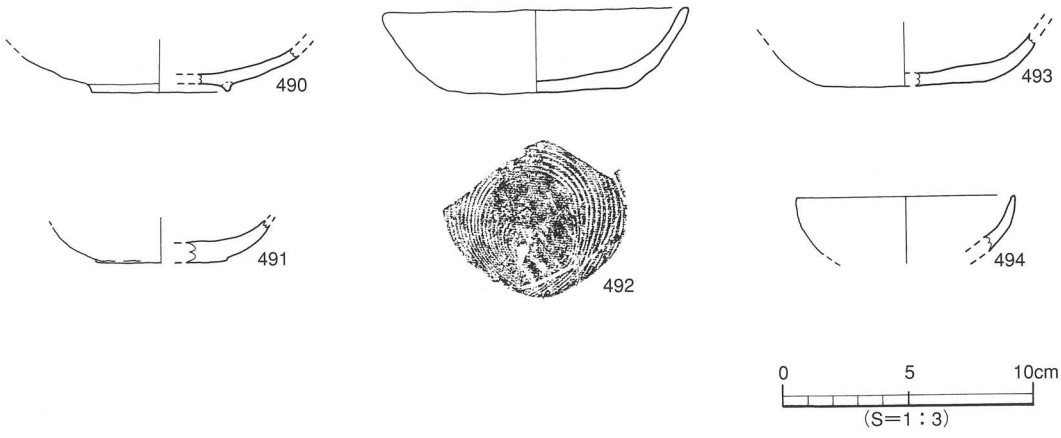
備前陶器（481）　壺形土器で口縁部から肩部へかけての破片である。頸部はやや外へ開き、口縁端部は折り曲げ玉縁をなす。

３）その他の出土遺物（2）（第105・106図、図版72）

弥生土器（483～489）　483は甕形土器の口縁部片である。「く」の字状に折れ曲がり、口縁端部は面をなす。内・外面ともに稜をもつ。484は壺形土器の口縁部片で、端面は下方へ拡張する。端部には斜格子目文が施される。485は鉢形土器の口縁部片で、端部は丸い。487は高坏形土器の柱部で、充填技法がみられる。486・488・489は支脚形土器である。488は受部を「U」字状にカットしたもので、489は角状の突起をもつものである。

瓦器（490）　埦の底部片である。輪高台は断面が逆三角形状を呈する。

土師器（491～494）　491～493は坏である。491は底面が回転糸切りである。492・493は底部片で、底面には糸切り痕跡が見られる。494は口縁部片である。端部は尖っており、口径が小さく皿であろう。



第106図　その他の出土遺物実測図（3）

4．小　結

（1）層　位

本調査区においても第Ⅲ②層（アカホヤ火山灰）と第Ⅵ層（ＡＴ火山灰）を検出した。第Ⅲ②層は北区中央から南部で検出したが、南区は近現代に削平を受けたと考えられ検出されなかった。第Ⅵ層は調査区全域で厚い堆積をなすが、本調査区では2次堆積層の第Ⅵ砂層が部分的な堆積であった。これは、地形が要因と考える。

なお、第Ⅲ②層を検出した地点では、第Ⅳ層上面にアカホヤ火山灰降下以前の生活面が残っていたと考えている。

（2）弥生時代

4区で確認された竪穴式住居址は方形プランが3棟、隅丸方形プランが1棟である。方形プランの3棟は調査区北部に集中している。

ＳＢ401では土坑3基を検出した。ＳＫ2とＳＫ3は遺物の出土状況や埋土中に炭化物と焼土が確認されたことから炉の可能性がある。また、ＳＢ401ではＳＫ2とＳＫ3は切り合い関係にあり、主柱穴にも切り合いがみられることから、建て替えの可能性がある。

ＳＢ403検出の焼土と炭化物は、3区ＳＢ302検出の焼土・炭化物と出土状況が類似している。ただし、ＳＢ403のものは炉に近い位置にあり、炉から掻き出された焼土・炭化物と考えられ、ＳＢ302は焼土・炭化物は住居址全体に広がる様相を異にしている。

ＳＢ401と403から出土した礫石は、3区ＳＢ303で出土した礫石と石材（花崗岩）が類似することから、用途は作業台と考えられる。

（3）中世～近世

柱穴からは明確に時期決定できる遺物の出土はなかった。ただし、調査区北西部の現代坑より出土した遺物は本来これらの柱穴に帰属していた可能性がある。よって、柱穴は中～近世のものと判断した。なお、柱穴群は掘立建物の復元にはいたらないが、中～近世の集落に伴う構築物と思われる。

以上より、本調査区は弥生時代後期末は住居地であり、以降中世までは土地利用の痕跡がなく、中～近世になり住居地帯として再度利用されたものと推察される。

遺構・遺物一覧　－凡例－

（１）以下の表は、本調査区検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
遺構一覧は志賀、遺物観察表は山本が作成した。

（２）遺物観察表の各掲載について。

法　量　欄　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。
例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。
例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例）砂・長（1～4）、多→「1～4㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。
焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表56　竪穴式住居址 一覧

竪穴(SB)	時　期	平面形	規　模 長さ(長径)×幅(短径)×深さ(m)	主柱穴(本)	内部施設 高床	土坑	炉	カマド	周壁溝	備　考
401	弥生後期末	方　形	3.30＋α×4.50×0.26	(3)		○	○		○	ＳＤ401を切る。
402	弥生後期末	方　形	3.20×2.0＋α×0.05						○	ＳＤ401を切る。
403	弥生後期末	隅丸方形	5.30×5.20×0.15	4			◎			ＳＢ401に切られる。
404	弥生後期後葉～末	方　形	4.40＋α×4.20＋α×0.10		○	○				

◎副次的炉

表57　土坑 一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
401	B2	長楕円	逆台形状	1.15×0.9×0.27	暗灰褐色土	土師器	中世～近世	

表58　溝 一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
401	A11～C7	レンズ状	17.0×1.30×0.28	黒色土	弥生土器	弥生後期末以前	ＳＢ401・402に切られる

表59　SB401 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調 (外面) (内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
435	甕	口径(19.8) 残高　3.0	外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色 乳茶色	石・長(1~3) ◎		
436	壺	口径(21.5) 残高　1.3	水平に延びる口縁部。口縁端部は上下方向に拡張する。端部は鋸歯文を施す。	ハケ(5~6本/cm)→ナデ	ヨコナデ	乳茶色	石(1~3) ◎		72
437	壺	口径不明 残高　1.5	上下方向に肥厚する口縁端部。端部にはヘラ状工具による細い線状の文様が認められる。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶色	石(1~2) ◎		72
438	壺	口径(18.8) 残高　3.7	大きく外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。端部にはハケ状工具による刻目を施す。	㊐ヨコナデ ハケ(7~8本/cm)	㊐ヨコナデ ハケ(7本/cm)	茶褐色 黒色	石・長(1~2) ◎		72
439	壺	底径　(4.0) 残高　4.0	平底の底部。	ハケ(8~10本/cm)→ナデ ㊇タタキ	ハケ(5~6本/cm)→ナデ	乳茶色	石・長(1~5) ◎		
440	鉢	口径(19.2) 残高　5.8	やや内湾ぎみに上外方向へ立ち上がる口縁部。端部は尖りぎみに丸くおさめる。丸底の底部。	㊐ヨコナデ	㊐ヨコナデ ハケ(5~7本/cm)	乳茶色	石・長(1~5) ◎		72
441	鉢	口径(22.2) 残高　4.8	やや内湾ぎみに上外方向へ立ち上がる口縁部。口縁端部は面をもつ。	㊐ヨコナデ タタキ(4本/2cm) →ハケ(10本/cm)	ナデ	乳茶色	石・長(1~2) ◎		
442	鉢	口径 12.8 残高　5.0	やや内湾ぎみに上外方向へ立ち上がる口縁部。口縁端部は外反し、尖る。底部は欠損して不明。	㊐ヨコナデ タタキ→ナデ	㊐ヨコナデ ハケ(12本/cm)→ナデ	茶褐色 黒色	石・長(1~2) ◎		72
443	鉢	口径(11.8) 底径　2.6 残高　5.1	やや直線的に上外方向へ立ち上がる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。立ち上がりをもつ平底の底部。	ハケ(6~7本/cm)	ハケ(12本/cm)→ナデ	乳褐色 乳黄色	石・長(1~5) ◎		72
444	鉢	口径(10.0) 残高　4.6	直線的に上外方向へ立ち上がる口縁部。口縁端部は尖る。黒斑有り。	ナデ	㊐ナデ ハケ→ナデ	乳茶色	石・長(1~3) ◎		
445	鉢	底径　3.6 残高　4.5	わずかに立ち上がる平底の底部。	ナデ	ミガキ ㊇ナデ	茶褐色 茶色	石・長(1~4) ◎		
446	鉢	底径　2.8 残高　3.8	小さい平底の底部。	タタキ→ハケ ㊇ナデ	ハケ→ナデ	乳茶色	石・長(1~3) ◎		
447	鉢	底径　1.4 残高　3.3	わずかに立ち上がる小さい平底の底部。	ハケ→ナデ ㊇ナデ	ハケ→ナデ	乳茶色	石・長(1~3) ◎		
448	器台	口径(27.2) 残高　2.4	受部は端部が上下方向に拡張する。	㊐ヨコナデ ミガキ	ヨコナデ ㊐ハケ(11本/cm)	茶色 乳茶色	石・長(1~3) 金 ◎		
449	支脚	口径　(9.6) 残高　8.4	裾部は「ハ」字状に開く。	ナデ 指圧痕	ナデ	乳茶色 乳　色	石・長(1~3) ◎		
450	支脚	残高　8.7	角状突起の受部。	指圧痕		乳茶色	石・長(1~3) ◎		
451	土錘	長さ　9.7 最大径 4.7 孔径　0.5	外面指圧痕顕著。	指圧痕 ナデ		黒灰色 部分的に 黄灰色	石 ◎	重量 187.0 g	72
452	不明	残高　4.65	球状を呈するものと思われる。 器面はミガキ調整が施される。	ミガキ 磨滅のため不明のところもある。		黒色 暗茶色	石・長(1~3) ◎		72

表60　SB401 出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
453	刀子	茎部片	鉄製	7.0	0.8	0.3	6.7		72

表61　SB403 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
454	甕	口径 11.2 残高 11.2	短い「く」字状口縁部。口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。	ナデ	㊐ナデ ㊥削り ㊦ナデ	暗褐色	石・長(2~3) ◎		73
455	甕	口径(18.4) 残高 5.3	外反する口縁端部。口縁端部は面をもつ。	㊐ヨコナデ ハケ(10本/cm)	㊐ハケ(10本/cm) →ヨコナデ 指圧痕	乳茶色 乳灰白色	石・長(1~3) ◎		
456	壺	底径 2.7 残高 10.1	球状の胴部。 立ち上がりをもつ底部は小さくやや上げ底気味。	ハケ(12~13本/cm) →ヘラミガキ ㊎ナデ	㊥㊦ハケ(12~13本/cm) ナデ	赤茶色	石・長(1) ◎		73
457	鉢	口径 12.6 底径 4.0 器高 7.8	やや内湾気味に上外方向へ立ち上がる口縁部。口縁端部は丸い。立ち上がりをもつ平底の底部。	㊐ヨコナデ ハケ(5~6本/cm)→ナデ ㊎ナデ	㊐ヨコナデ ナデ→ハケ(5~6本/cm)	暗褐色	石・長(1~3) ◎		73
458	鉢	口径(13.4) 残高 5.2	やや内湾気味に上外方向へ立ち上がる口縁部。口縁端部は尖る。	ハケ(7~8本/cm)→ナデ	ハケ(6~7本/cm)→ナデ	明黄褐色 明黄赤褐色	石・長(1~4) ◎		
459	鉢	底径 (3.8) 残高 5.3	小さくくびれる上底の底部。 内面底部中央がやや凹む。	ハケ(7本/cm) ナデ ㊎磨滅のため不明	ハケ(7本/cm)→ナデ	乳白色 乳黄色	石・長(1~3) ◎		
460	高坏	残高 10.7	円錐状の脚柱部。 円孔を4方向に穿つ。内面天井部に工具痕残る。	ハケ→ミガキ	ハケ→ナデ	乳茶黄色 茶色	石・長(1~3) ◎		
461	紡錘車	最大径6.1 厚さ 1.3 孔径 0.7	紡錘形断面をなす。中央部に焼成前の円孔あり。	ナデ 一部指おさえ		乳灰茶色 (表面黒色)	石・長(1) ◎	重量 26.7g	73

表62　SB404 出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
462	甕	残高 5.2	極小の平底の底部が残る。 器壁は厚い。	ハケ→ナデ ミガキ	ナデ	茶色	石・長(1~3) ◎		73
463	甕	底径 2.6 残高 1.8	平底の底部。	ハケ(10本/1.5cm)	ナデ	黒色 乳茶色	石・長(1~3) 金 ◎		
464	壺	残高 5.7	複合口縁。 17条の沈線文と1条の波状文を施す。	ハケ	ハケ→ナデ	茶色	石・長(1~3) ◎		
465	鉢	口径(29.8) 残高 4.5	外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	㊐ナデ タタキ(7本/4.5cm)	ハケ(8本/cm)	暗茶色	石・長(1~3) ◎		
466	鉢	口径(18.0) 残高 5.1	内湾ぎみに上外方向に立ち上がる口縁部。口縁端部外面に面をもつ。	㊐ヨコナデ タタキ→ナデ ミガキ	ハケ(8本/cm)→ ミガキ	暗灰色 乳灰色	石・長(1~3) ◎		
467	鉢	口径 15.4 残高 8.8	やや内湾ぎみに上外方向へ立ち上がり口縁部はやや外傾する。口縁端部は丸い。	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	乳茶色	石・長(1~7) ◎		73

SB404 出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
468	鉢	口径(13.0) 残高　4.8	やや内湾ぎみに上方向へ立ち上がる口縁部。口縁端部は丸い。	㊀ナデ タタキ	ハケ(9本/cm)→ナデ	暗灰色 乳灰色	石・長(1~3) ◎		
469	鉢	口径 10.7 器高　4.7	やや内湾気味に上外方向へ立ち上がる口縁部。端部は尖り気味に丸くおさめる。やや丸味の平底。	タタキ→ナデ	ハケ(9本/cm)→ナデ	茶色 暗茶色	石・長(1~5) ◎		73
470	鉢	口径　9.7 器高　3.8	やや直線的に上外方向へ立ち上がる口縁部。端部は尖る。やや丸みの平底。	タタキ→ナデ	ハケ→ナデ	乳茶色	石・長(1~3) ◎		73
471	鉢	残高　3.5	やや内湾ぎみの口縁部。口縁端部は尖る。	磨滅のため不明	ハケ(8本/cm)	乳茶色	石・長(1~3) ◎		
472	甕	底径　2.2 残高　1.4	立ち上がりをもつ上げ底の小さな底部。	ナデ	ナデ	乳茶色	石・長(1~2) ◎		
473	勾玉	長　3.4 幅　1.3 孔径　0.3	表面は丁寧にナデられ丸味をもつ。 横断面はほぼ円形。	ナデ		乳黄色	石・長(1) ◎	重量 7.4 g	73

表63　SP出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
474	鉢	口径(24.4) 残高　5.2	外傾する口縁部。口縁端部は面をもつ。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ハケ→ヨコナデ (一部櫛目有り) (8本／cm)	灰茶色 乳茶色	長(1) ◎		72

表64　その他の出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
475	甕	口径(18.0) 残高　3.6	外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	㊁ヨコナデ ハケ→ナデ	ヨコナデ	乳灰色	石・長(1~3) ◎		
476	甕	残高　1.3	外反する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。	ナデ	ナデ	乳茶色	石・長(1~3) ◎		
477	甕	底径　2.8 残高　2.5	平底の底部。 外面・底部外面タタキ痕顕著。	タタキ	ハケ→ナデ	黒色 乳灰色	石・長(1~5) ◎		
478	高坏	残高　5.2	円柱状の脚柱部。 柱部は器壁は厚い。	ミガキ	ハケ→ナデ	茶色	石・長(1~3) ◎		
479	鉢	口径(21.6) 残高　9.0	やや内湾ぎみに上外方向へ立ち上がる口縁部。口縁端部は三角形状に尖る。	㊁ヨコナデ タタキ→ナデ	㊁ヨコナデ ハケ(7本/cm)→ ミガキ	茶色	石・長(1~3) ◎		
480	埦	底径　(6.0) 残高　1.0	底部片。 高台は低く断面三角形。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	黄茶色 黄色	石・長(1~3) ◎		72
481	備前壺	口径(12.2) 残高　5.8	やや外傾する口頸部。口縁端部は折曲げ玉縁状におさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 白灰色	石・長(1~3) ◎		

表65　その他の出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
482	刀子	茎部片	鉄製	2.9	0.7	0.3	3.9		

表66　その他の 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
483	甕	口径(14.4) 残高 3.8	外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	㊐磨滅のため不明 タタキ	㊐磨滅のため不明 ヨコナデ ハケ(7~8本/cm)	茶色	石・長(1~4) ◎		
484	壺	口径(24.8) 残高 2.0	口縁部垂下。口縁端部に斜格子文を施す。	㊐ヨコナデ ナデ ハケ(6本/cm)	ハケ(6本/cm)→ヨコナデ	乳黄灰色 乳茶色	石・長(1~3) ◎		
485	鉢	残高 3.4	やや内湾ぎみに上外方向へ立ち上がる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。	タタキ→ナデ	ハケ(9本/cm)→ミガキ	暗茶色 灰茶色	石・長(1~3) ◎		
486	支脚	底径 8.0 残高 3.2	脚底部片。上げ底の底部。	ナデ	しぼり痕 削り	灰茶色	石・長(1~6) ◎		
487	高坏	残高 8.4	円柱状の脚柱部。	ハケ	しぼり痕 削り	茶色	石・長(1~3) ◎		
488	支脚	底径 9.0 器高 6.95	「U」字状の傾斜部分をもつ受部。器高低く、器壁は厚い。	指圧痕	指圧痕	乳茶色 茶色	石・長(1~4) ◎		
489	支脚	最大厚 4.5	受け部に２本の角状突起、円孔。後面に小さい突起が付くものと推定される。	指ナデ	指ナデ	乳茶色	石・長(1~5) ◎		
490	埦	底径 (5.4) 残高 1.1	底部片。 高台は低く断面三角形。	磨滅のため不明 ㊐板ナデ ㊎ナデ	磨滅のため不明	乳色	長(1) ◎		72
491	坏	底径 5.2 残高 1.6	平底の底部。 回転糸切り。	ヨコナデ ㊎回転糸切り	ヨコナデ ナデ	乳黄白色	長(1~2) ◎		72
492	坏	口径(11.8) 底径 7.0 器高 3.3	底部よりやや内湾ぎみに上外方向へ立ち上がる。平底の底部。回転糸切り。	ヨコナデ ㊎回転糸切り痕 板圧痕	ヨコナデ ㊎ナデ	乳茶色	長(1) ◎		72
493	坏	底径 (6.2) 残高 2.0	平底の底部。 回転糸切り。	磨滅のため不明 ㊎回転糸切り痕	磨滅のため不明	乳色 乳茶色	石・長(1) ◎		
494	皿	口径 (8.6) 残高 2.2	内湾ぎみに立ち上がる口縁部。 口縁端部は尖がりぎみに丸くおさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶色	石・長(1) ◎		

第９章

束 本 遺 跡 ４ 次

－５区Ａの調査－

第９章　　５区Ａの調査

１．調査の経緯

調査区は、調査地の南部に位置し、調査以前は造成地であった。調査対象面積は960㎡であったが、安全対策及び排土置き場を確保したため、最終的な調査面積は498㎡余りとなった。以下調査工程を略記する。

1994年2月24日から重機により西壁に土層確認のためのトレンチ（ａトレンチ）を掘り、土層確認後、表土剥ぎ取り作業を行った。

3月2日から第Ⅱ②層及び第Ⅱ③層の掘り下げを行う。3月15日、第Ⅲ①層上面で柱穴・溝等の遺構を検出する。

3月17日から遺構の掘り下げ及び遺物の取り上げと測量を行い、第Ⅲ①層上面での調査を終了する。4月6日から第Ⅲ①層中での遺構検出を行う。慎重に掘り下げを行ったが、第Ⅲ①層中では遺構が明確に確認できなかったため、第Ⅳ層上面で遺構検出を行った。

4月27日から検出された柱穴・溝等の掘り下げと、遺物の取り上げを行った。5月9日に調査区北側を5m拡張し、竪穴式住居址を1棟検出した。その後、遺構の測量及び写真撮影を行った。

5月24日に航空測量を実施した。その後、ＡＴ火山灰の堆積状況を確認するのため、東西にトレンチ（ｂトレンチ）を掘り、写真撮影と測量を行ない調査を終了した（野外調査終了）。

２．層　位（第109図）

本調査地は石手川左岸の標高33.600ｍに立地する。

基本層位は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ①層床土、第Ⅱ②層黒色土（灰白色粗砂混）、第Ⅱ③層暗灰褐色土、第Ⅲ①層黒色土、第Ⅲ②層黒褐色土（アカホヤ火山灰）、第Ⅳ層茶褐色土、第Ⅴ層褐色粘質土、第Ⅵ層黄色土（ＡＴ火山灰、2次堆積・1次堆積）、第Ⅵ①層、第Ⅵ②層、第Ⅶ層、第Ⅷ層である。

第Ⅰ層　近現代の造成土及び、耕作土である（18～60cm）。

第Ⅱ①層　水田耕作に伴う床土である（10～20cm）。

第Ⅱ②層　調査区南半分に堆積が見られ、厚さ3～15cmを測る。須恵器、土師器、白磁、青磁、石器、鉄器の遺物を包含する。

第Ⅱ③層　調査区南西部に堆積し、厚さ5～10cmを測る。1～6区の中で、本調査区に限り検出された土層である。

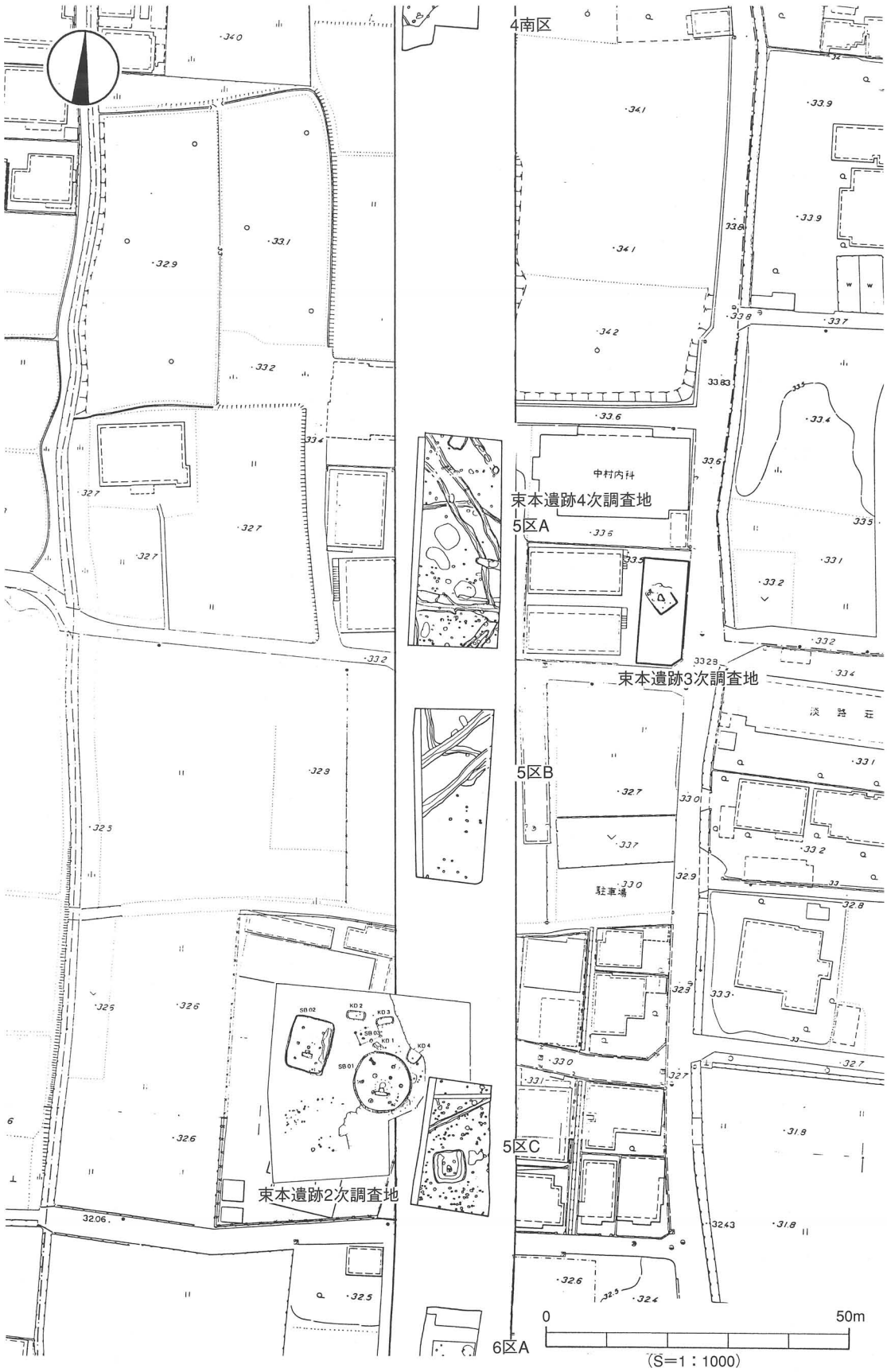
第Ⅲ①層　調査区全域に15～40cmの堆積が見られる。

第Ⅲ②層　アカホヤ火山灰。調査区全域に平均して堆積が見られる（15～30cm）。

第Ⅳ層　調査区全域に10～30cmの堆積が見られる。第Ⅳ層は最終遺構検出面であり、上面の標高を測量すると北から南へ向かって緩傾斜している。

第Ⅴ層　第Ⅳ層に比べて粘性が強く、2～3㎜の砂礫を多く含む。10～30cmの堆積である。

第Ⅵ層　第Ⅵ層はＡＴ火山灰の堆積層である。ＡＴ火山灰は大きく、1次堆積と2次堆積に分けられ、さらに3層に細分することができた。



第107図　調査区位置図

2次堆積

第Ⅵ層砂　1～2㎜の砂粒を含む。aトレンチの北部を除く全域で8～34㎝の厚さで検出した。bトレンチでは、西側と東側で8～14㎝の厚さで検出した。

第Ⅵ層礫　2～5㎜の砂礫を含む。aトレンチの北部を除く全域で厚さ10～30㎝を測る。bトレンチの全域で厚さ8～28㎝を測る。

第Ⅵ層風　黄色土（小礫混じり）。a・bトレンチの中央部で厚さ4～16㎝を測る。

第Ⅵ①層　黄色土（細粒）。aトレンチの北側と中央部で厚さ16～30㎝を測る。bトレンチでは東側を除く全域で厚さ16～32㎝を測る。

第Ⅵ②層　乳黄褐色粘質土。aトレンチの北側を除く全域で厚さ10～20㎝を測る。bトレンチ全域で厚さ10㎝を測る。

第Ⅵ③層　乳褐色粘質土。aトレンチの北側を除く全域で検出した。bトレンチの東側では厚さ8～10㎝を測る。

これより下層はbトレンチでの堆積状況である。

第Ⅶ①層　黄褐色砂質土。西側で24㎝の厚さを測る。

第Ⅶ④層　灰色砂（粗砂）。東側で24～36㎝の厚さを測る。

第Ⅶ⑤層　黄白色粘土。全域で10～20㎝の厚さを測る。

第Ⅶ⑨層　黄褐色砂礫（3～5㎝の礫多し）。全域で10～20㎝の厚さを測る。

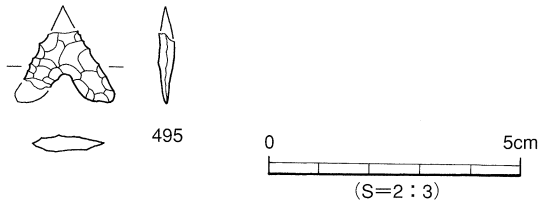
第 Ⅷ 層　砂礫層（10～20㎝の円礫を含む）。

遺構は、第Ⅲ①層上面及び第Ⅳ層上面の2面で検出した。第Ⅲ①層上面では溝10条、土坑5基、柱穴42基を検出した。第Ⅳ層上面では竪穴式住居址1棟、堀立柱建物址1棟、溝3条、土坑2基、柱穴88基、不明遺構1基、倒木痕3基を検出した。第Ⅳ層上面検出の遺構は本来は第Ⅲ①層中からの掘り込みであるが、遺構埋土が第Ⅲ①層と類似しており、第Ⅲ①層中で明確に確認できなかった。そのため最終的に第Ⅳ層上面での検出となったものである。

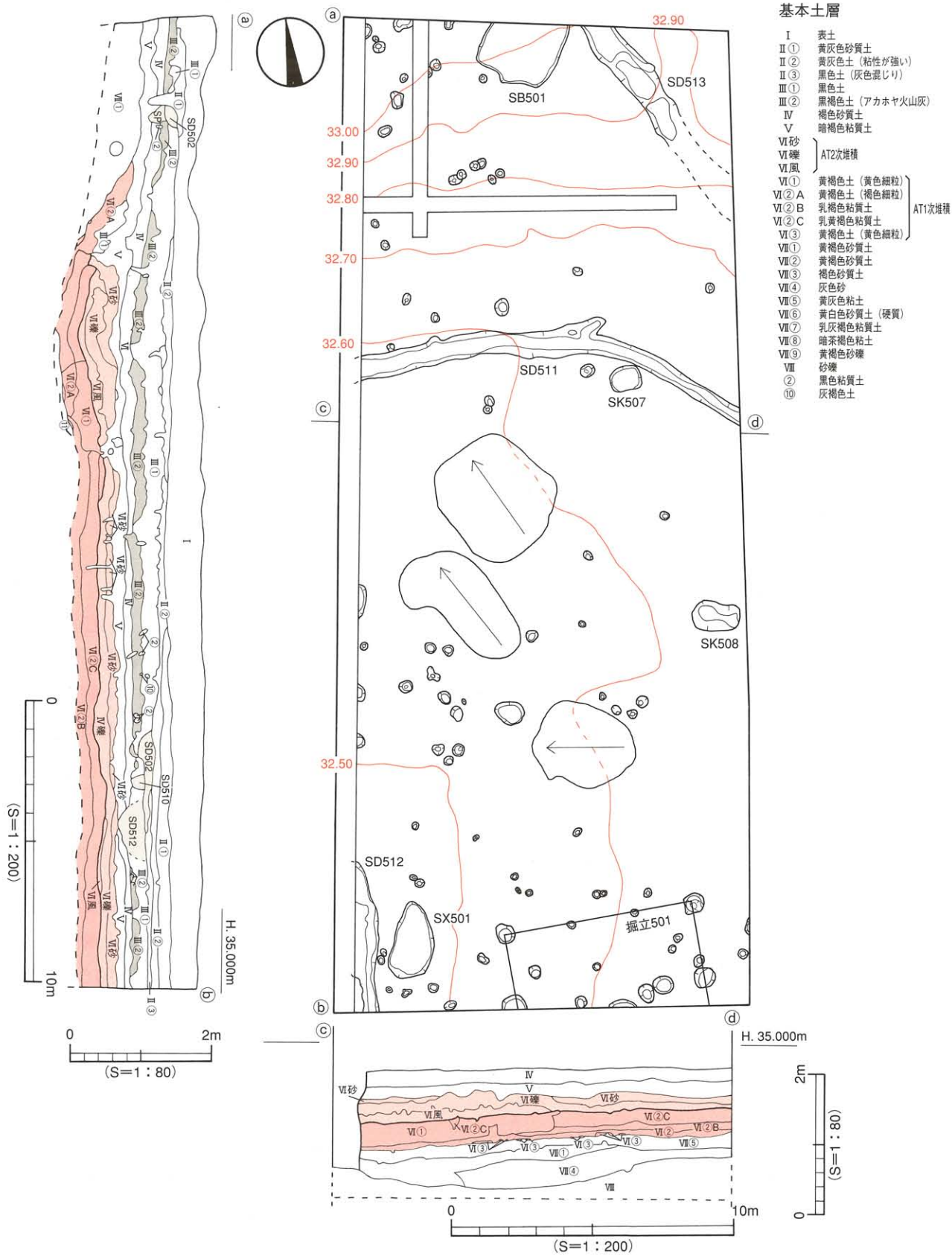
3．遺構と遺物

〔1〕先土器～縄文時代

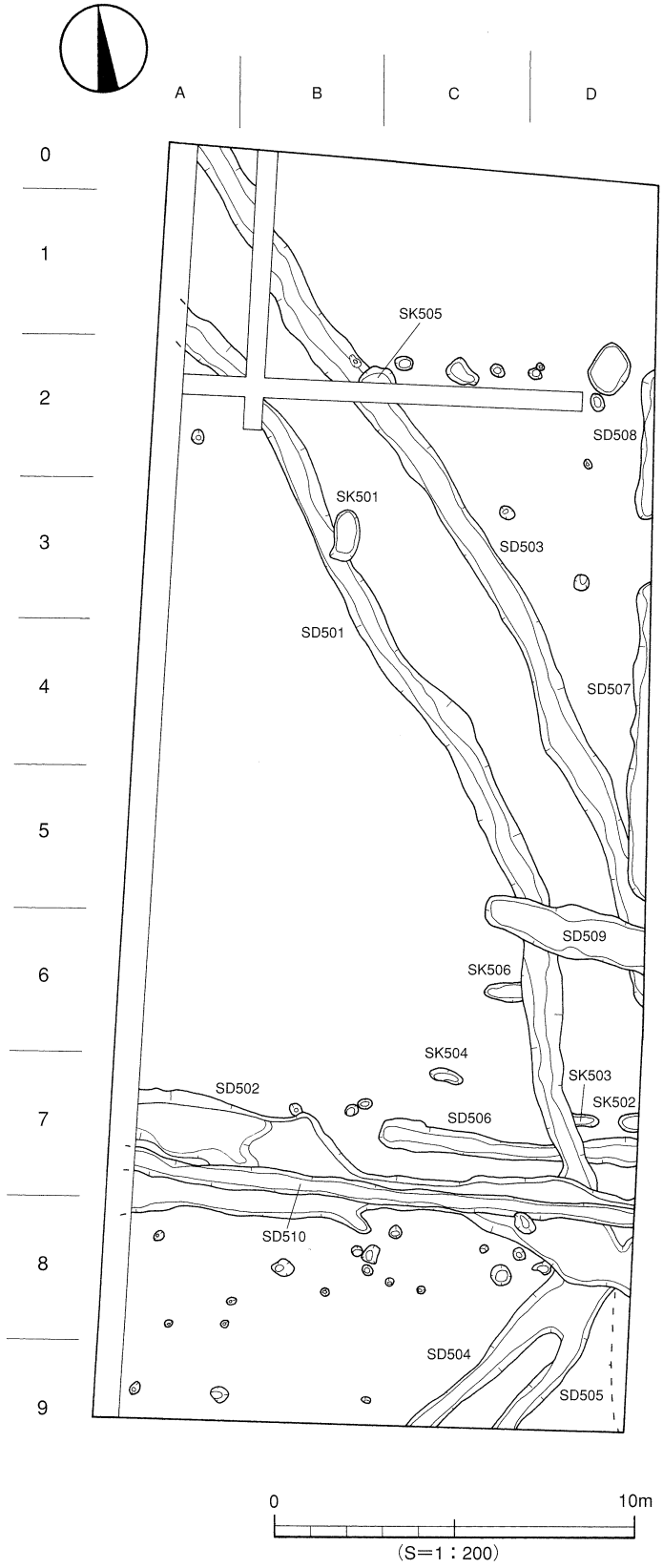
調査区A8区の第Ⅲ②層中（アカホヤ火山灰土）から石鏃が1点出土した。アカホヤ火山灰土から石鏃が出土したことよりアカホヤ火山灰降下以前の生活遺構が検出できるものと考える。出土遺物（第108図、図版81）石鏃495は、先端部を欠失している。長さ1.4㎝、幅1.6㎝、厚さ0.3㎝、重さ0.5ｇを測る。小型の石鏃で基部の抉りが深い。材質はサヌカイトである。



第108図　第Ⅳ層上面出土遺物実測図



第109図　調査区第Ⅳ層遺構配置図



第110図　調査区第Ⅲ層遺構配置図

〔２〕弥生時代

本調査において確認された遺構は、竪穴式住居址1棟、掘立柱建物址1棟、溝３条である。

１）竪穴式住居址（ＳＢ）

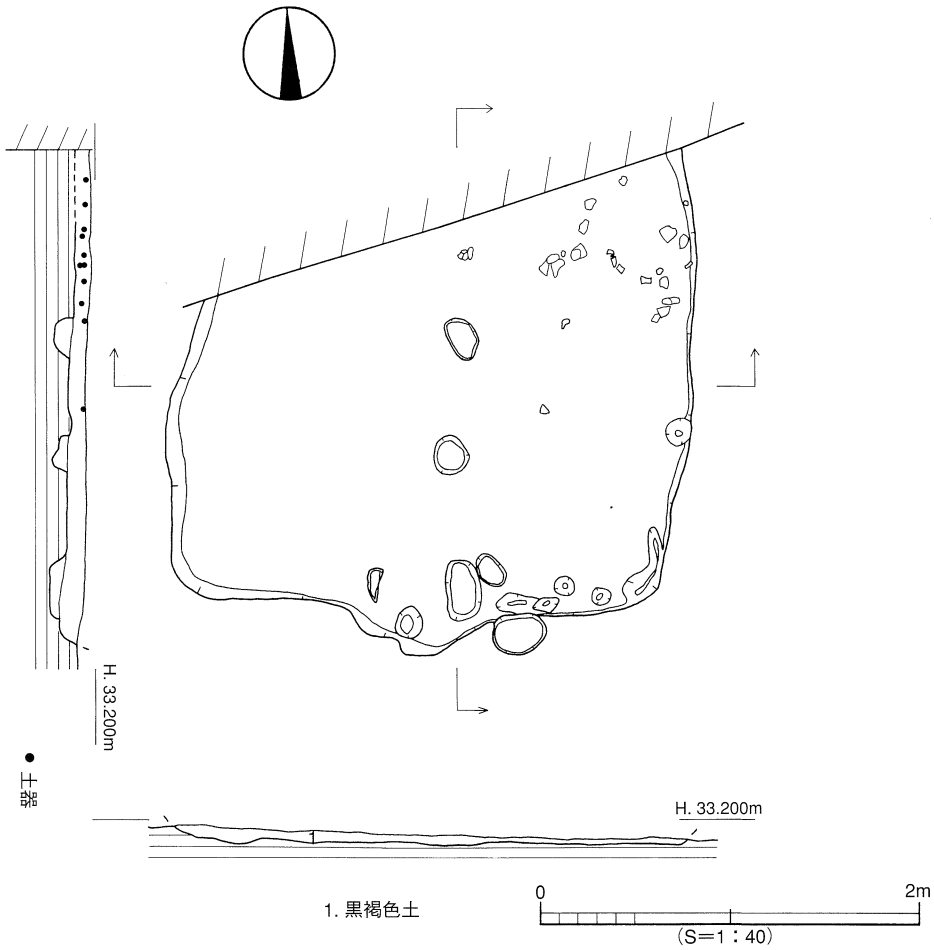
ＳＢ５０１（第109・111図、図版77）

調査区北壁中央部Ｂ0～Ｃ1区に位置する。平面形態は北側が調査区外へ続き、南壁の中央部が突出するが、隅丸方形を呈すると考える。規模は東西270cm、南北300cm＋α、壁高は12cmを測る。埋土は黒褐色土である。主柱穴・周壁溝などの内部施設は未検出である。遺物は弥生土器片が住居址北東部より少量出土し、床面からは弥生土器の鉢形土器口縁部片1点が出土した。

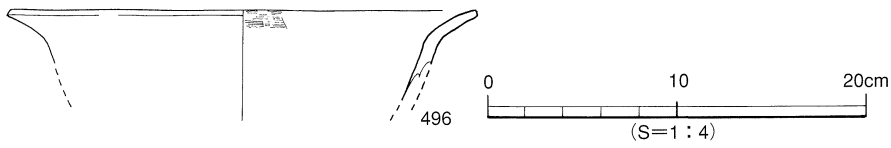
出土遺物（第112図、図版81）

496は鉢形土器の口縁部片である。緩やかに外反する口縁部で、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。内面にヨコナデ、外面にナデ調整が施される。

時期：出土遺物から弥生時代後期末の遺構と考えられる。



第111図　SB501測量図



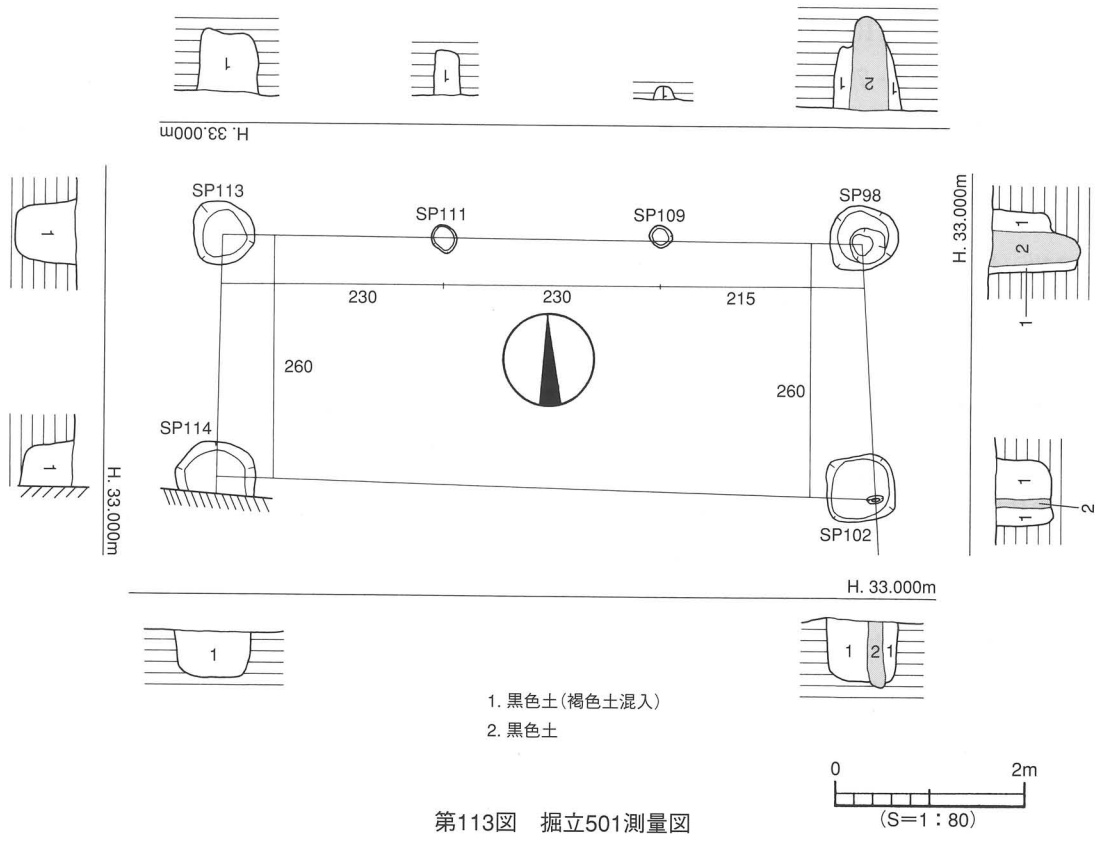
第112図　SB501出土遺物実測図

2）掘立柱建物址（掘立）

掘立５０１（第109・113図）

調査区南側Ｂ8～Ｄ9区で1間×3間を検出した。南側は調査区外に続くものと思われる。桁行長は6.7m、梁行は2.6mを測る。各柱穴間は210～230cmとほぼ一定している。ＳＰ109とＳＰ111の平面形態は円形及び楕円形を呈し、規模は径25cm、深さ10～45cmを測る。径・深さともに小さく浅い。この2本以外の柱穴の平面形態は円形で規模は、径60～70cm、深さ60cm～100cmを測る。埋土は黒色土に明褐色土が混入するものである。柱穴内からの出土遺物はない。

時期：南壁にかかっている柱穴は第Ⅲ①層上面からの掘り込みであることから弥生時代後期末以前の遺構と考えられる。



第113図　掘立501測量図

3）溝（ＳＤ）

ＳＤ５１１（第109図、図版77）

調査区Ａ3～Ｄ4区に位置する。わずかに北に膨らみながら東西にのびる。規模は上場幅81cm、深さ26cm、検出長14.6mを測る。溝底は、比較的平坦である。断面形態は皿状を呈する。埋土は黒色土である。遺物の出土はない。

時期：西壁の層位関係から弥生時代の溝と考えられる。

ＳＤ５１２

調査区Ａ8～9区に位置する。溝はａトレンチに削平され不明瞭であるが、断面形態を南壁と西壁で検出したことから、南へのびる溝と判断した。規模は上場幅63cm、深さ25cm、検出長5mを測る。断

面形態はレンズ状である。埋土は黒色土である。遺物は出土していない。南側に隣接する5区Ｂで検出したＳＤ519と埋土・断面形態が類似しており、溝の方向性も同じことから、ＳＤ519に合流するものと考えられる。

時期：西壁の層位関係から弥生時代の溝と考えられる。

ＳＤ５１３（第109図）

調査区北東部のＣ0～Ｄ1区に位置する。規模は上場幅110cm、深さ30cm、検出長5.5ｍを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は黒色土である。遺物は出土していない。

時期：北壁と西壁の層位関係と埋土より弥生時代の溝と考える。

〔３〕古墳時代～古代

１）溝（ＳＤ）（第110・114図）

ＳＤ５０１（図版78・79）

調査区Ａ1～Ｄ7区に位置し、北西から南東に走る。ＳＤ506とＳＤ511を切り、ＳＤ502とＳＤ509に切られる。規模は上場幅84cm、深さ25cm、検出長26.5ｍを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は灰色砂質土である。出土遺物は土師器の羽釜が1点出土している。

出土遺物（第115図）

497は土師器羽釜の鍔片である。鍔はやや上向きで外方向の延びる。鍔端部は丸く仕上げられる。上部にハケメ、下部にヨコナデ調整が施される。また下部に煤が付着している。

時期：中世の溝ＳＤ502に切られていることより、古墳時代以降、古代以前に時期比定される。

ＳＤ５０３（図版78）

調査区Ａ0～Ｄ6区に位置し、ＳＤ501と平行に北西から南東に走る溝である。ＳＤ511を切り、ＳＤ507とＳＤ509に切られる。規模は上場幅110cm、深さ20cm、検出長26ｍを測る。断面形態はレンズ状を呈し、溝底は北西から南東に向けて緩傾斜となる。埋土は灰色砂質土である。出土遺物は土師器の甕・坏、須恵器の坏蓋片と鉄製の摘鎌が出土した。

出土遺物（第115図、図版81）

498は土師器甕の口縁部である。「く」字状に折れ曲がる口縁部をもち、端部は丸く仕上げる。500は須恵器の坏蓋である。天井部と口縁部を分ける稜は明瞭であり、断面は三角形を呈する。499は土師器の坏である。口縁部は内湾ぎみに立ち上がり口縁端部は丸く仕上げる。501は摘鎌のほぼ完形品。長さ2.1cm、幅7.3cm、厚さ0.1cmを測る。長方形の鉄板の左右を折り曲げ木質部を装着する袋部を作る。袋部は1cmの幅で折り返される。

時期：ＳＤ501と規模・断面形態・方向・埋土などが同じであり、古墳時代以降、古代以前と考える。

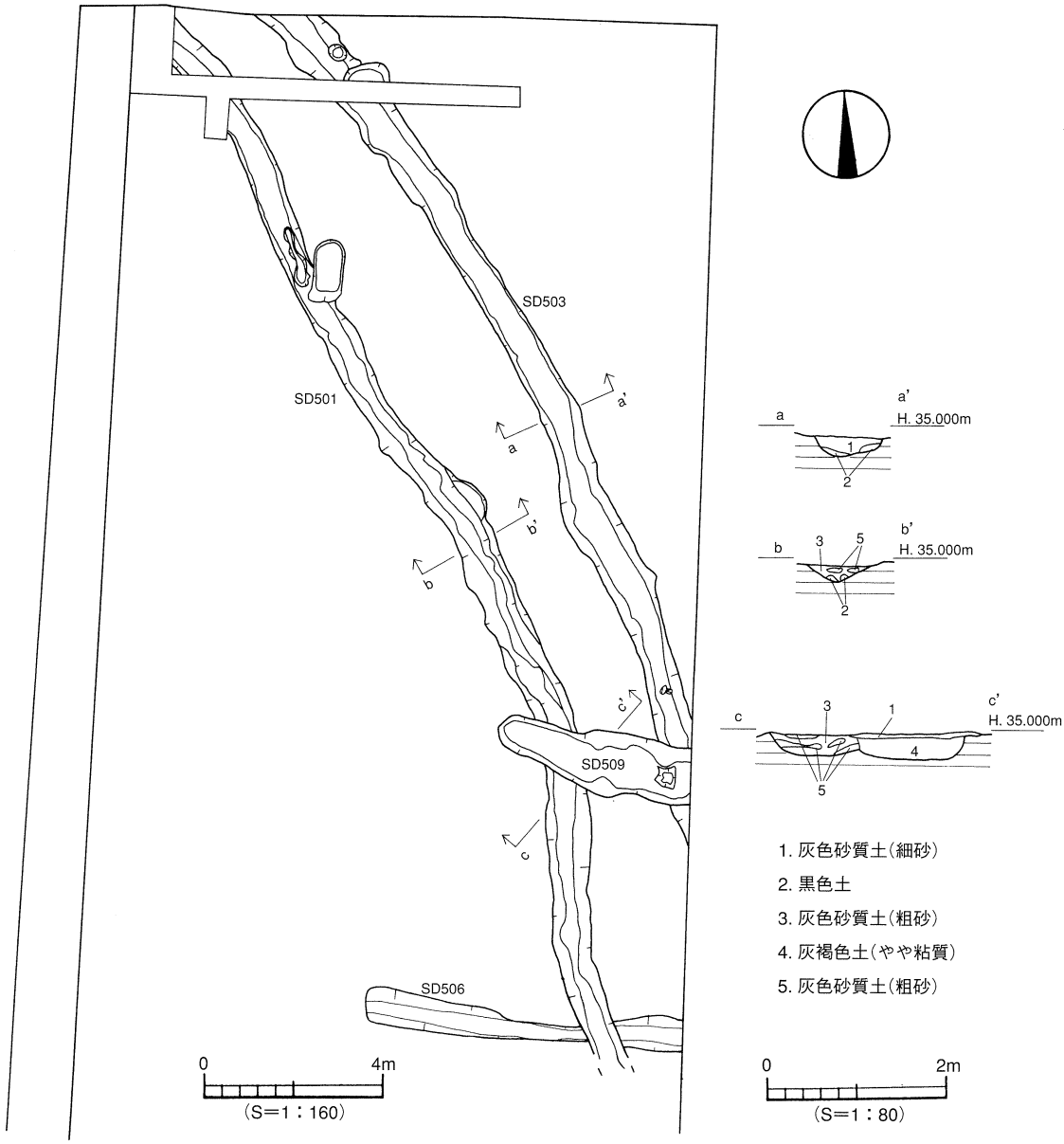
ＳＤ５０４

調査区のＣ9～Ｄ8区に位置し、ＳＤ502に切られる。規模は上場幅65cm、深さ18cm、検出長5.6ｍを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰色砂質土である。遺物は出土していない。

時期：ＳＤ502に切られていること、埋土等より古墳時代以降の溝と考える。

ＳＤ５０５

調査区Ｃ8～Ｄ9区に位置し、ＳＤ502に切られる。規模は上場幅55cm、深さ18cm、検出長5ｍを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰色砂質土である。遺物は須恵器の坏蓋と石鏃が出土している。



第114図　SD501･503測量図

出土遺物（第115図、図版81）

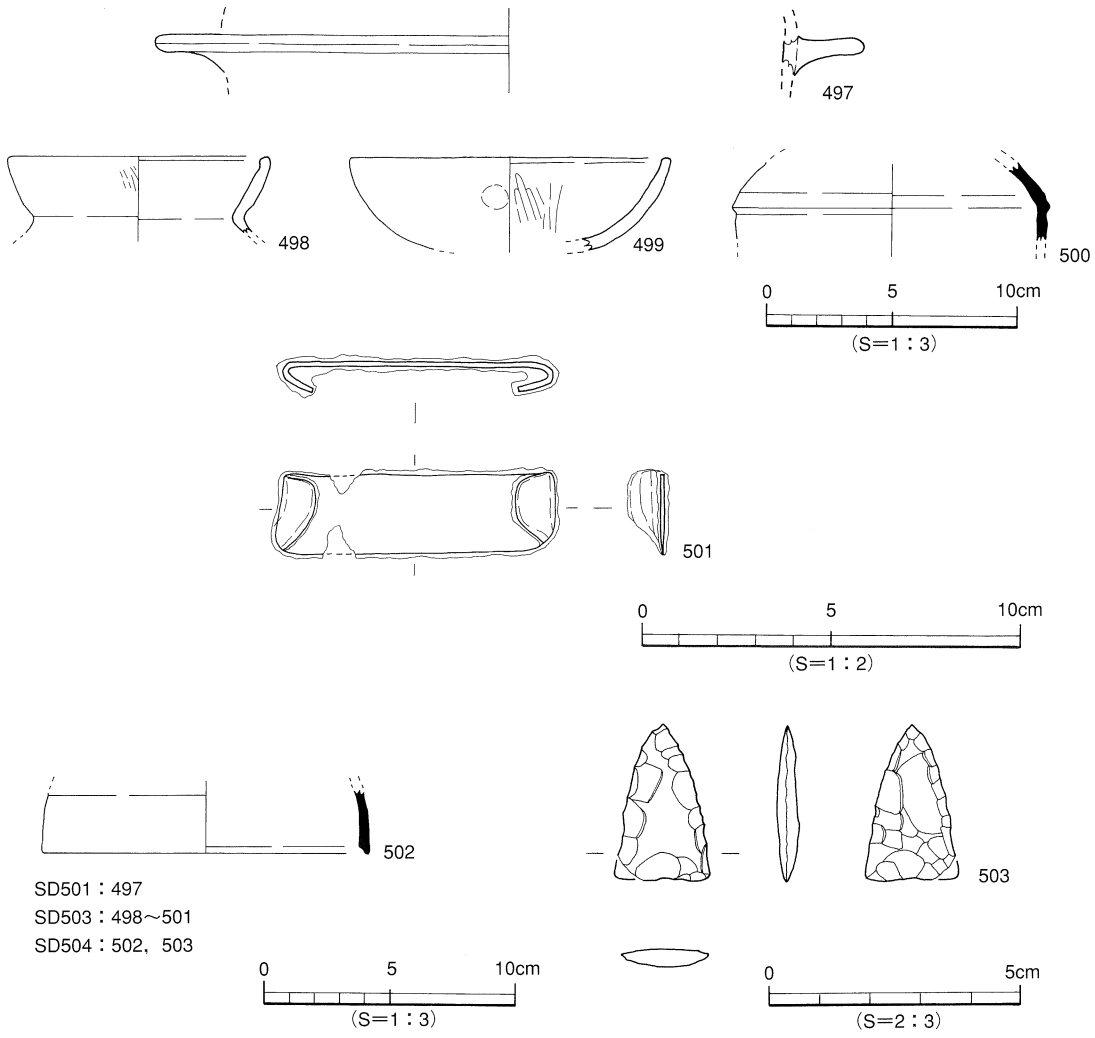
502は須恵器の坏蓋であり、口縁端部は丸く凹みがある。503は石鏃。凹基無茎式である。長さ3.1cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ1.9ｇを測る。石材はアプライトである。

時期：ＳＤ502に切られていること、出土遺物の形態等より古墳時代以降の溝と考えられる。

ＳＤ５０６

調査区南東のＣ7～Ｄ7区に位置し、ＳＤ501に切られる。規模は上場幅60cm、深さ14cm、検出長7.2ｍを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は明灰褐色土である。遺物は出土していない。

時期：ＳＤ501に切られており下限を古代と考える。



第115図　SD出土遺物実測図（1）

２）土坑（ＳＫ）

ＳＫ５０３（第110・116図）

調査区Ｄ7区に位置する。平面形態は西側をＳＤ501に切られており、全容は明らかではないが楕円形を呈すると思われる。規模は長軸73cm、短軸33cm、深さ8cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は明灰褐色土である。遺物は出土していない。

時期：ＳＤ501に切られており下限を古代と考える。

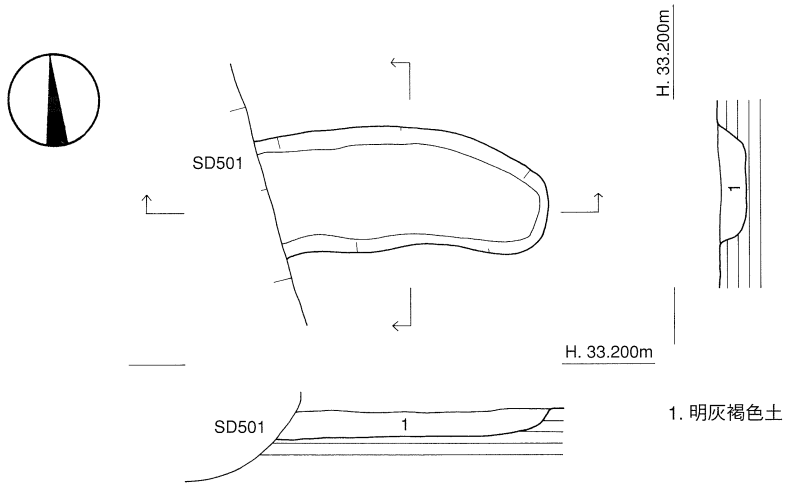
ＳＫ５０６（第110・117図）

調査区Ｃ7区に位置する。平面形態は東側をＳＤ501に切られているため、全容は明らかではないが楕円形を呈すると思われる。規模は長軸114cm、短軸44cm、深さ9cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は明灰褐色土である。遺物は出土していない。

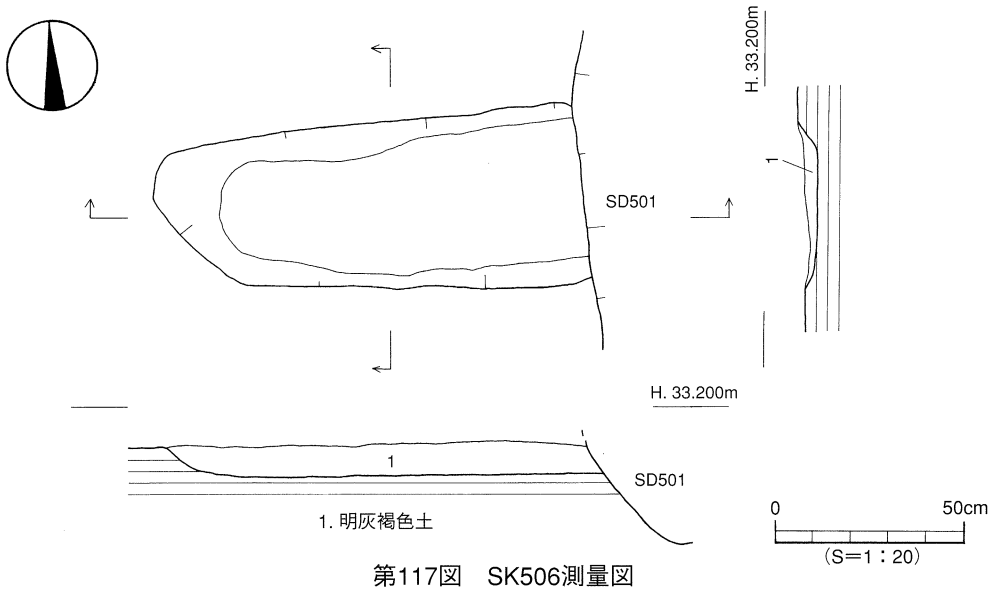
時期：ＳＤ501に切られており下限を古代とする。

ＳＫ５０７

調査区Ｃ3～4区に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。ＳＤ503に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し規模は長軸109cm、短軸87cm、深さ11cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒色土である。遺物の



第116図　SK503測量図



第117図　SK506測量図

出土はない。

時期：ＳＤ503に切られているため古代以前の土坑と考える。

ＳＫ５０８

調査区D6区に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。ＳＤ509に切られている。平面形態は楕円形である。規模は長軸170cm、短軸113cm、深さ16cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒色土と明褐色土である。遺物は出土していない。

時期：ＳＤ509に切られていること、埋土等より古代以前の土坑と考える。

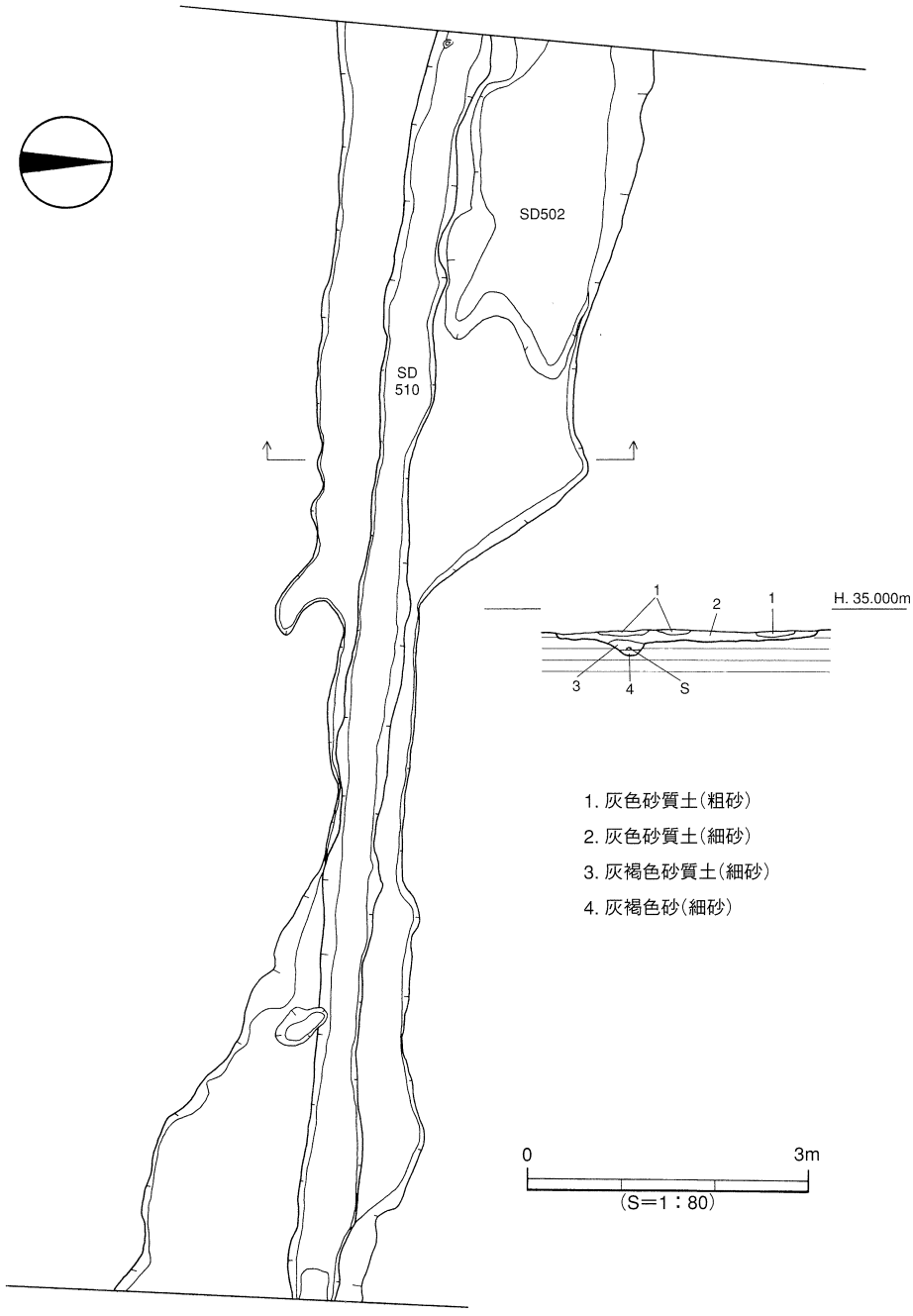
〔４〕中　世

１）溝（ＳＤ）

ＳＤ５０２（第110・118図、図版79・80）

調査区Ａ7～Ｄ8区に位置し、東西に走る溝である。ＳＤ501・ＳＤ504・ＳＤ505・ＳＤ510を切っている。規模は上場最大幅330㎝、深さ14㎝、検出長13ｍを測る。溝の西部では幅300㎝を越えるが、中央部では80㎝と細くなる。断面形態は皿状を呈する。溝底は凸凹が激しく、東から西へ緩傾斜している。埋土は灰色砂質土（細砂）に粗砂がブロック状に混入するものである。

出土遺物は、土師器坏の口縁部と底部、及び鉄製品が出土している。



第118図　SD510測量図

出土遺物（第119図、図版81）

504～508は口縁部片である。504は外反し端部は丸く仕上げる。507は内湾気味に立ち上がる。505・506・508の口径は14～16cmを測る。内湾気味に立ち上がり、端部付近でわずかに外反する。口縁部に弱い稜をもち端部は丸く仕上げている。調整は内外面ともに、ヨコナデ調整を施す。509～514は土師器椀の底部である。いずれも底部に断面三角形状の高台を貼付する。高台端部は先細りし、口縁端部は丸く仕上げる。調整は内面が回転ナデとナデ、外面はナデ調整が施される。517器種不明鉄製品。長さ2.0cm、幅0.8cm、厚さ0.3cmを測る。断面は長方形である。錆が厚く付着する。

時期：出土遺物の形態より12世紀後半の溝と考える。

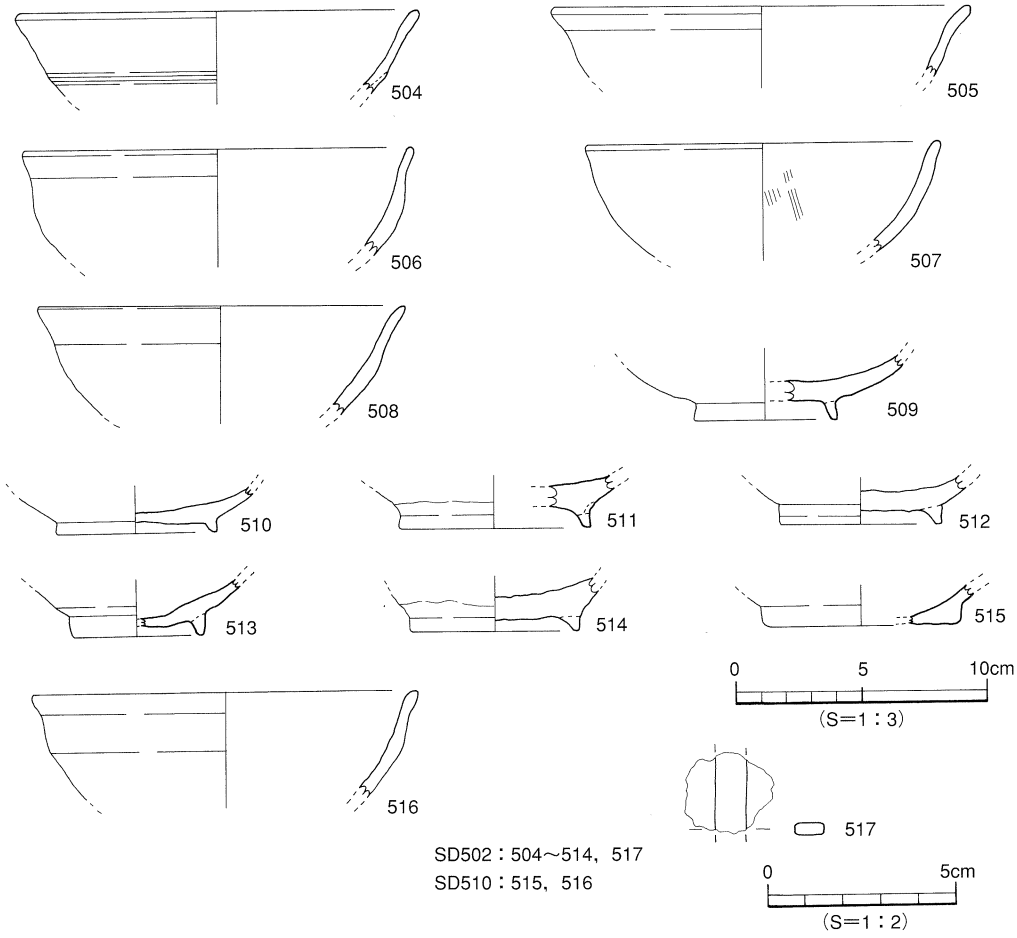
ＳＤ５１０（第110・118図、図版79）

調査区Ａ7～Ｄ8区に位置し、西から東に走る溝である。ＳＤ503・ＳＤ504・ＳＤ505を切り、ＳＤ502に切られる。規模は上場幅60cm、深さ17cm、検出長13ｍを測る。断面形態は皿状を呈し、溝底は比較的平坦であるが、西から東へ向けて緩傾斜をなす。埋土は上層が灰褐色土、下層が灰褐色砂質土である。出土遺物は土師器坏の口縁部、底部が1点づつ出土している。

出土遺物（第119図）

515は底部である。円盤高台の底部をもつ。516は口縁部である。内湾気味に立ち上がり端部でわずかに外反する口縁部をもつ。端部は先細りし、丸く仕上げられている。口縁部下に弱い稜を残す。

時期：出土遺物の形態と、ＳＤ502との切り合い関係から12世紀以前の溝と考えられる。



第119図　SD出土遺物実測図（2）

ＳＤ５０９（第110図）

調査区Ｃ5～Ｄ6区に位置し、ＳＤ501とＳＤ503を切る。規模は上場幅148cm、深さ34cm、検出長4.4ｍを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色土である。遺物は出土していない。

時期：ＳＤ501とＳＤ503の切り合い関係より古代以降の溝である。

ＳＤ５０７（第110図）

調査区中央東壁Ｄ3～5区に位置する。規模は上場幅50cm、深さ16cm、検出長9ｍを測る。断面形態は東壁に切られるため不明である。埋土は灰褐色土である。遺物は出土していない。

時期：埋土と東壁での土層関係より近世の溝と思われる。

ＳＤ５０８（第110図）

調査区東壁Ｄ2・3区に位置する。規模は上場幅42cm、深さ4cm、検出長4.3ｍを測る。断面形態は東壁に切られるため不明である。埋土は灰褐色土である。遺物は出土していない。

時期：埋土と東壁での土層関係より近世の溝と思われる。

２）土坑（ＳＫ）

ＳＫ５０１（第120図）

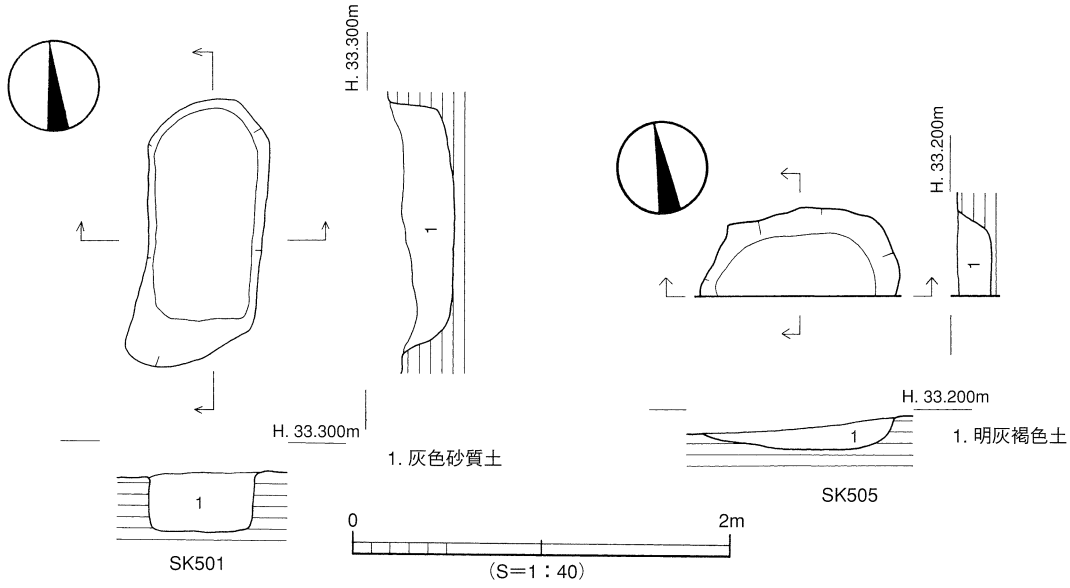
調査区Ｂ3区に位置する。ＳＤ501を切る。平面形態は楕円形で、規模は長軸116cm、短軸62cm、深さ32cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰色砂質土である。遺物の出土はない。

時期：ＳＤ501を切っているために古代以降の土坑と考える。

ＳＫ５０５（第120図）

調査区Ｂ2～Ｃ2区に位置し、ＳＤ503を切り、南側を撹乱に切られる。平面形態は撹乱に切られているために全容は明らかではないが、楕円形を呈すると思われる。規模は長軸103cm、短軸46cm、深さ17cmを測る。埋土は明灰褐色土である。遺物の出土はない。

時期：ＳＤ503を切っているため古代以降の土坑と考える。



第120図　SK501･505測量図

〔5〕その他の遺構

1）土坑（ＳＫ）

ＳＫ５０２（第110図）

調査区Ｄ7区に位置する。東壁に切られる。平面形態は楕円形を呈すると思われる。規模は長軸50cm、短軸48cm、深さ13cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は明灰褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＫ５０４（第110図）

調査区Ｃ7区に位置する。平面形態は楕円形を呈すると思われる。規模は長軸86cm、短軸26cm、深さ5cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は明灰褐色土である。遺物は出土していない。

2）性格不明遺構及び倒木（ＳＸ）

性格不明遺構（ＳＸ５０１）

調査地Ａ8区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は南北270cm、東西130cm、深さ10cmを測る。埋土の上層は黒色土、下層は灰褐色土の2層に分かれる。遺物の出土はない。

倒木址（ＳＸ５０２・５０３・５０４）

調査区中央部Ｂ4～6区に位置する。平面形態は円形と楕円形である。規模は2.1～4.8mを測る。倒壊方向はＳＸ502北西、ＳＸ503は北西、ＳＸ504は西である。今回倒木址の調査は時間的な関係で、平面形態と規模及び倒壊方向の調査にとどめた。

3）柱穴（ＳＰ）

本調査において確認された柱穴は123基である。ＳＰ1～42は第Ⅲ①層上面で検出し、ＳＰ43～131は第Ⅳ層上面で検出した。これらの柱穴の平面形態は円形及び楕円形である。埋土は、5種類に分かれる。

ⅰ）明灰褐色土を埋土にもつものは40基である。この内遺物が出土したのはＳＰ14とＳＰ20である。
ⅱ）黒色土で明褐色土を含む埋土をもつものは73基である。ＳＰ118から遺物が出土している。
ⅲ）黒色土を埋土にもつものは1基。遺物の出土はない。
ⅳ）灰褐色土を埋土にもつものは5基。遺物の出土はない。
ⅴ）灰色砂質土を埋土にもつものは4基である。遺物の出土はない。

ＳＰ14・20

第Ⅲ①層上面Ａ8区からはＳＰ14、Ｃ8区からはＳＰ20を検出した。平面形態はともに円形で、埋土は明褐色土である。出土遺物はＳＰ14からは土師器小皿、ＳＰ20からは瓦器埦が出土している。

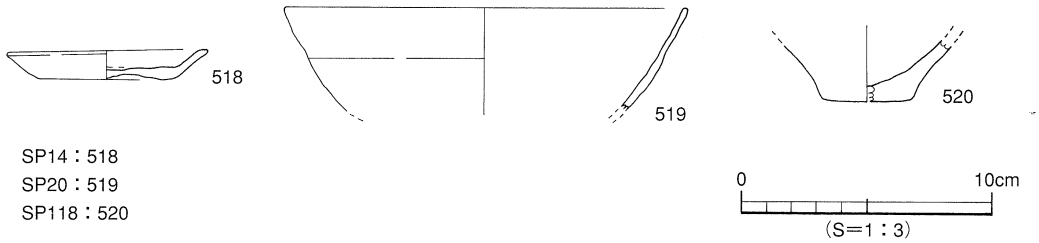
出土遺物（第121図、図版82）

518は土師器小皿である。口縁部は外反しながら緩やかに立ち上がる。端部付近でわずかに外反し端部は丸く仕上げる。底部は回転糸切りである。内外面共ナデ調整が施される。

519は瓦器埦の口縁部片である。復元口径15.7cmを測る。口縁部は外反し、端部は丸く仕上げる。調整は外面にヨコナデが施される。

ＳＰ１１８（第121図）

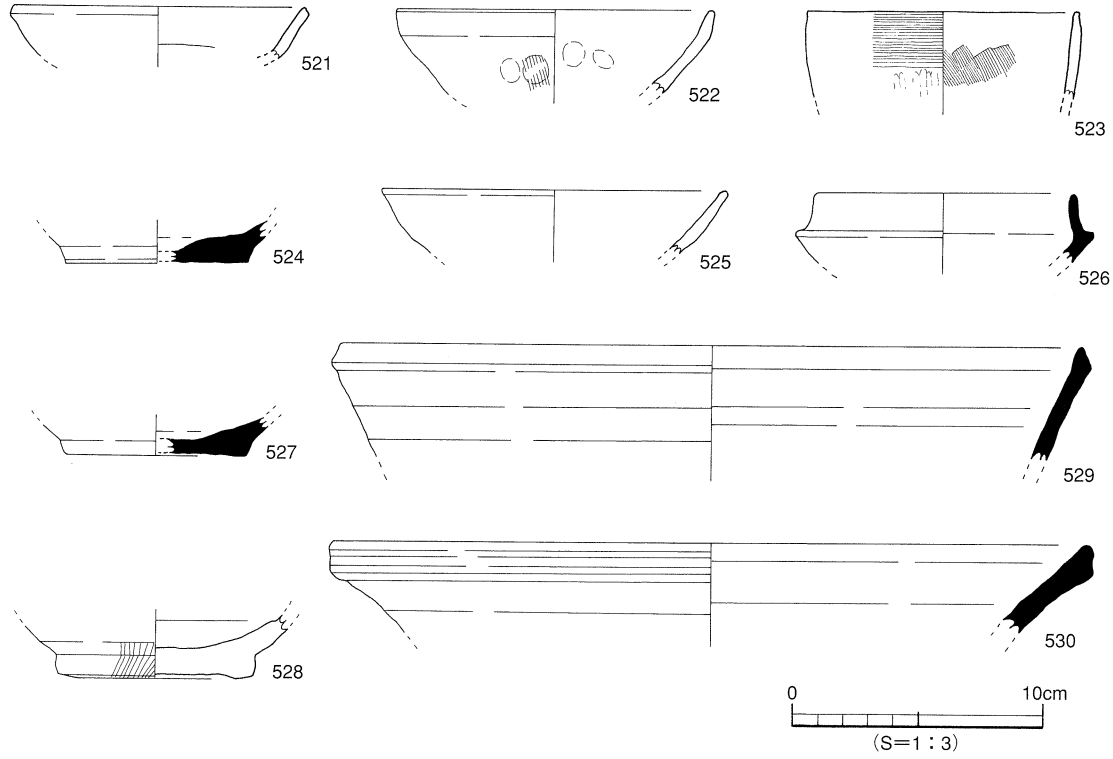
第Ⅳ層上面Ａ9区に位置する。平面形態は円形、埋土は黒色土に明褐色土が混入する。出土遺物520は弥生土器の甕形土器の底部片である。平底の底部で内面はケズリが施される。



第121図　SP出土遺物実測図

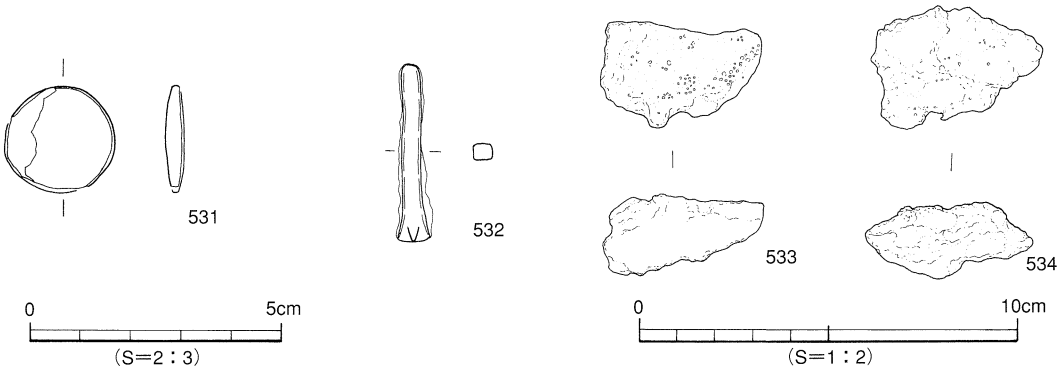
第Ⅱ②層出土遺物（第122・123、図版82）

521は青磁皿の口縁部片である。外反する口縁部をもち、口縁端部は丸く仕上げる。内外面ともにヨコナデ調整を施し、灰オリーブ色の釉がかかっている。龍泉窯系のものと考えられる。522・525は土師器坏の口縁部片である。口縁は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部下に弱い稜をもつ。525は緩やかに外反する口縁部をもつ。522・525はともに端部は丸く仕上げる。523は弥生土器の口縁部片である。内湾ぎみに立ち上がる口縁端部は「コ」字状に仕上げる。外面に19本のヘラ描き沈線が施される。524・527は須恵器埦の底部である。524・527ともに円盤高台で内外面は回転ナデ調整が施される。527はわずかに上げ底になっている。528は白磁埦の底部で、削り出し高台である。灰色の釉がかかっているが底部はかかっていない。529・530は須恵器のこね鉢の口縁部片である。529は直立ぎみに立ち上がる口縁部をもち、口縁部は上方に拡張され外面は明瞭な稜が残る。内外面ともに、回転ナデ調整が施される。530は緩やかに外反する口縁部をもつ、口縁部端部は強い回転ナデにより上下方向に拡張されて、外面は明瞭な段に仕上げられている。529・530ともに東播系こね鉢と思われる。



第122図　第Ⅱ②層出土遺物実測図（1）

531は、器種不明石器、径2.1cm、厚さ0.3cm、重さ2.4gを測る。532・533は、茎部から緩やかに広がる刃部をもち、鑿工具の可能性が考えられる。533・534は、坩形滓。533は上面に気泡が多い。底部に薄く炉底の付着物が見られる。



第123図　第Ⅱ②層出土遺物実測図（2）

その他の出土遺物（第124・125図、図82・83）

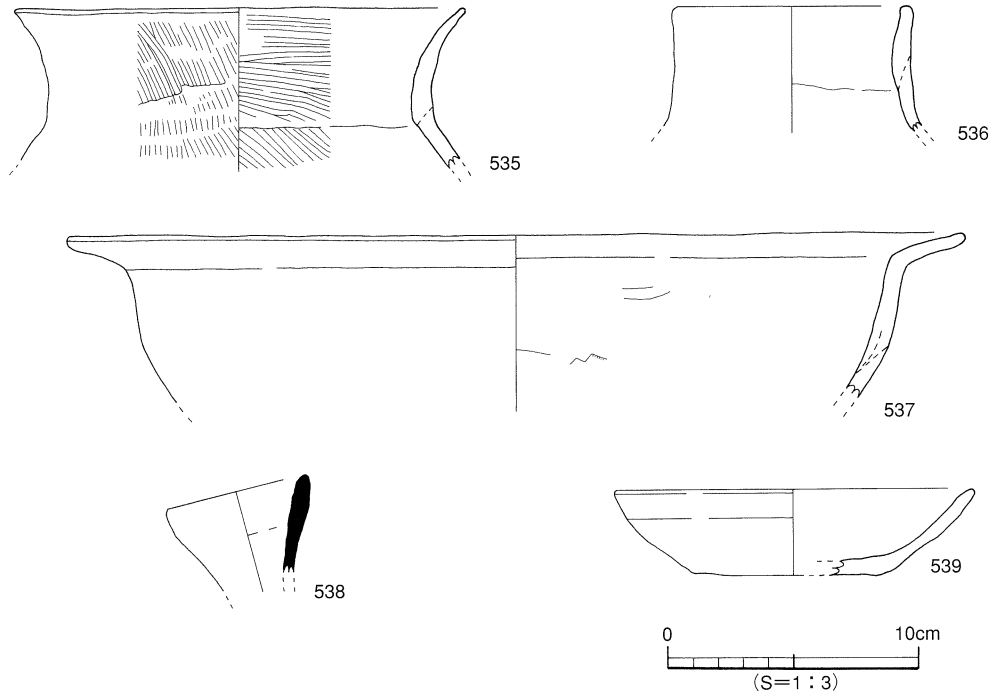
535は弥生土器の甕形土器の口縁部で、直立ぎみに立ち上がり外反する口縁部をもつ。端部は先細りし、丸く仕上げる。内・外面ともハケメ調整が施している。

536は弥生土器の直口口縁壺の口縁部片である。直立して立ち上がり、やや長い口縁部をもつ。端部付近でわずかに内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。

537は土師器の土鍋の口縁部片である。口縁部は外傾し斜め上方にのび、端部はわずかに内湾する。端部は丸く仕上げる。外面はヨコナデ、内面は口縁部がヨコナデ、胴部はハケメ調整を施す。

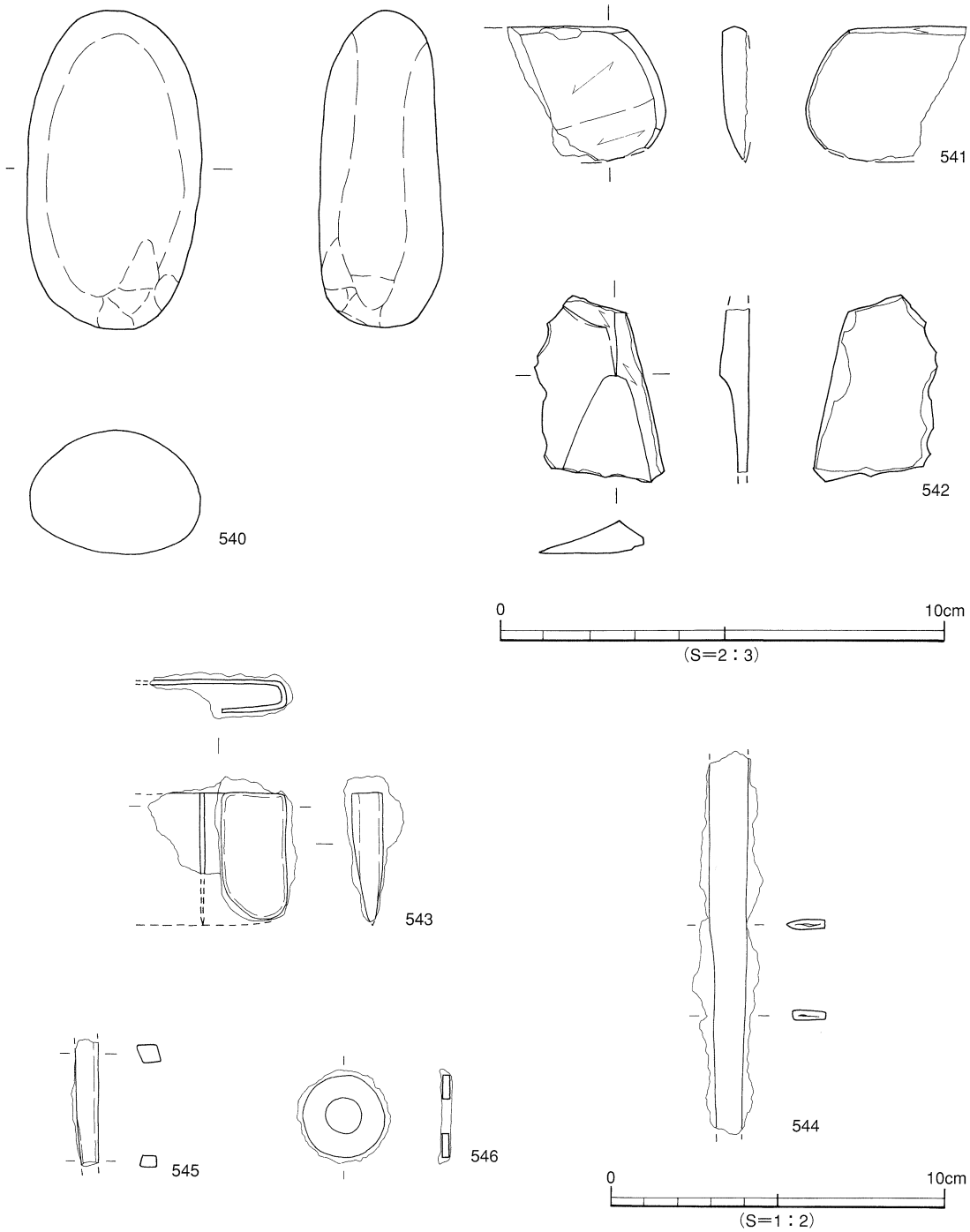
538は須恵器の平瓶の口縁部である。

539はほぼ完形の土師器坏である。体部は外反しながら立ち上がり端部は丸く仕上げる。底部は回転糸切りである。内外面ともヨコナデ調整が施される。



第124図　その他の出土遺物実測図（1）

540は磨石である。長さ7.1cm、幅3.9cm、厚さ2.7cmを測る。片面に研磨が呈されている。541は石庖丁の側部片で、長さ3.5cm、幅3.0cm、厚さ0.55cmを測る。両面に研磨が丁寧に呈される。543は鋤先。長方形の鉄板の左右を折り曲げ風呂部を挿入するために袋部を作る。袋部は1.9cmの幅で折り返される。544は刀子・刀身部と茎端部を欠く。長さ11.4cm、幅1.1cm、厚さ0.3cmを測る。鉄板を2つ折りにし製作する。緩やかな関部をもち、身部断面は刃と棟が明瞭である。茎部断面は長方形を呈する。546は器種不明。円形で中央に径1cmの円孔あり。



第125図　その他の出土遺物実測図（2）

4．小　結

1）層　位

本調査区においても第Ⅲ②層（アカホヤ火山灰）と第Ⅵ層（ＡＴ火山灰）を検出した。また、第Ⅳ層上面からは石器を2点検出した。このことは本調査地周辺にアカホヤ火山灰降下以前に生活址が存在する可能性を示唆した資料である。

2）遺　構

①弥生時代

遺構は、竪穴式住居址1棟、掘立柱建物式址1棟、溝3条である。

住居址ＳＢ501は、東西3ｍを測る小型方形住居である。住居址南壁の中央部では、幅80㎝、突出部25㎝の張り出し部を検出している。張り出し部は、検出の位置より入口の可能性を考える。時期は住居址床面出土の土器より弥生時代後期後葉～末と考える。松山平野では、主柱穴をもたない小型住居の構築方法は明確でないため、今後の調査において解明したい。

掘立501、ＳＤ511・512・513は遺物の出土がないが、埋土と土層関係よりＳＢ501と同時期の弥生時代後期後葉～末とした。これ等の遺構は同一時期に認定することで、本調査区は弥生時代後期後葉～末の住居域であったと考えられる。

②古墳時代～古代

本調査区で検出した遺構は溝4条である。

ＳＤ501とＳＤ503は、調査区の北西から南東にかけて検出した。2条の溝は1.8ｍの間隔を保ち併走する。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は砂を含んでおり流水の跡が確認できた。

本調査区では住居は未検出であり、居住区は本調査区の東西に位置するものと考える。出土遺物にはＳＤ503より鉄製の摘鎌が出土している。摘鎌は、松山平野では３例目の出土であり、鉄製品の研究をする上での一資料となるものである。

③中　世

溝を3条検出した。明確に時期特定ができるのは、ＳＤ502とＳＤ510である。

ＳＤ510はＳＤ502の溝底からの検出で、幅60㎝、深さ17㎝、東から西までは同一規模を測る。一方ＳＤ502の溝幅は、西側と東側では3ｍ、中央部では80㎝を測り、溝幅に大きな差がある。規格性がないことより人為的な溝ではなく、ＳＤ510上面で生じた自然流路と考える。出土遺物は、12世紀後半の土師器がＳＤ510・502より出土している。

本調査区では柱穴を123基検出した。埋土は土色より5種類に分けられる。数少ない遺物から時期比定するならば、ｉとiiは土師器と瓦器が出土しており中世の柱穴と考える。iii、iv、ｖは、遺物が出土していないために、他の調査区との比較により判断したい。（第16章を参照）

遺構・遺物一覧　－凡例－

（１）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

遺構一覧は志賀、遺物観察表は相原が作成した。

（２）遺物観察表の各掲載について。

法　量　欄　　（　）：復元推定値

形態・施文欄　　土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）砂・長（1～4）、多→「1～4㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表67　竪穴式住居址　一覧

竪穴(SB)	時　期	平面形	規　模 長さ(長径)×幅(短径)×深さ(m)	主柱穴(本)	内部施設 高床	土坑	炉	カマド	周壁溝	備　考
501	弥生後期末	隅丸方形	3.0＋α×2.70×0.12							調査区外に続く

表68　掘立柱建物址　一覧

掘立	規模(間)	方位	桁行 実長(m)	桁行 柱間寸法（m）	梁行 実長(m)	梁行 柱間寸法（m）	床面積(㎡)	時　期	備　考
501	3×1＋α	東西	675(22.5)	7.1・7.7・7.7	260(8.7)	8.7	17.5	弥生後期末以降	ＳＰ114に切られ 調査外に続く

表69　土坑　一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
501	Ｂ３	楕円形	皿　状	1.16×0.62×0.32	灰色砂質土		古代以降	ＳＤ501を切る
502	Ｄ７	楕円形	皿　状	0.50×0.48×0.13	明灰褐色土			
503	Ｄ７	楕円形	レンズ状	0.73×0.33×0.08	明灰褐色土		古墳～古代	ＳＤ501に切られる
504	Ｃ７	楕円形	皿　状	0.86×0.26×0.05	明灰褐色土			
505	Ｂ２～Ｃ２	楕円形	皿　状	1.03×0.46×0.17	明灰褐色土		中　世	ＳＤ501を切る
506	Ｃ７	楕円形	皿　状	1.14×0.44×0.09	明灰褐色土		古墳～古代	ＳＤ501に切られる
507	Ｃ３～Ｃ４	楕円形	皿　状	1.09×0.87×0.11	黒　色　土		古墳～古代	ＳＤ503に切られる
508	Ｄ６	楕円形	皿　状	1.70×1.13×0.16	黒　色　土 明褐色土		古墳～古代	ＳＤ509に切られる

表70　溝　一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
501	Ａ１～Ｄ７	レンズ状	28.0×0.84×0.24	灰色砂質土	土師器	古墳～古代	SD502･509に切られる。 SD506･511を切る。
502	Ａ７～Ｄ８	皿　状	13.0×3.3×0.14	灰色砂質土	土師器・鉄	中世	SD501・504・ 505・510を切る。
503	Ａ０～Ｄ６	レンズ状	26.0×1.10×0.20	灰色砂質土	土師器・須恵器・鉄	古墳～古代	SD511を切る。 SD507･509に切られる。
504	Ｃ９～Ｄ８	皿　状	5.6×0.65×0.18	灰色砂質土			SD502・510に切られる。
505	Ｃ８～Ｄ９	皿　状	5.0×0.55×0.18	灰色砂質土	須恵器・石鏃	古墳～古代	SD502・510に切られる。
506	Ｃ７～Ｄ７	レンズ状	7.2×0.6×0.14	明灰褐色土		古代以前	SD501に切られる。
507	Ｄ３～Ｄ５	不　明	9.0×0.5×0.16	灰褐色土		近世	SD503に切られる。
508	Ｄ２～Ｄ３	不　明	4.3×0.42×0.02	明灰褐色土		近世	
509	Ｃ５～Ｄ６	皿　状	4.4×1.48×0.34	灰黄褐色土		古代以降	SD501・503を切る。
510	Ａ７～Ｄ８	レンズ状	13.8×0.6×0.17	灰褐色土	土師器	中世	SD503･504･505を切る。 SD502に切られる。
511	Ａ３～Ｄ４	レンズ状	14.6×0.81×0.26	黒色土		弥生後期末	
512	Ａ８～Ａ９	レンズ状	5.0×0.63×0.25	黒色土		弥生後期末	SD519と同一か？
513	Ｃ０～Ｄ１	レンズ状	5.5×1.10×0.30	黒色土		弥生後期末	

表71　第Ⅳ層 出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
495	石鏃	約3／4	サヌカイト	1.4	1.6	0.3	0.5		81

表72　SB501 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
496	鉢	口径(24.4) 残高　4.8	ゆるやかに外反する口縁部をもつ。 端部は「コ」字状を呈する。	ナデ	板状工具による ヨコナデ	暗灰茶色	石・長(1~3) ○		81

表73　SD501 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
497	羽釜	鍔径(28.0) 残高　1.6	貼り付けられた鍔は、やや上向きで外方向にのびる。 鍔端部は丸く仕上げられている。	ヨコナデ	磨滅の為不明	黒茶色 暗茶色	石・長(2) ○		

表74　SD503 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
498	甕	口径(10.0) 残高　3.0	口縁部片。「く」字状に折れまがる口縁部をもつ。端部はわずかに内湾し丸い。頸部内面に明瞭な稜をもつ。	ハケ(6~7本/cm) → ヨコナデ	ヨコナデ	赤茶色	密 ◎		
499	埦	口径(12.4) 残高　3.6	内湾ぎみに立ち上がる口縁。 端部は丸い。	㊀ヨコナデ ㊁ナデ	㊀ヨコナデ ㊁ヘラミガキ	乳灰茶色	密 ○		
500	坏蓋	残高　3.0	明瞭な稜をもつ。稜の断面は三角形である。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	長(1) ◎		

表75　SD503 出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
501	摘鎌	ほぼ完形	鉄製	2.1	7.3	0.1	20.7		81

表76　SD505 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
502	坏蓋	口径(12.8) 残高　2.4	口縁端部は、丸く凹みがある。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		

表77　SD505 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
503	石鏃	ほぼ完形	アプライト	3.1	1.7	0.4	1.9		81

表78　SD502 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
504	埦	口径(15.5) 残高　4.3	口縁部小片。口縁部が外反し、端部を丸く仕上げている。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳灰黄色	密 ◎		81
505	埦	口径(16.2) 残高　2.8	口縁部小片。 口縁部が内湾ぎみに立ち上がり、端部付近でわずかに外反する。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶色	密 ◎		
506	埦	口径(15.1) 残高　4.3	口縁部小片。口縁部が内湾ぎみに立ち上がり、端部付近でわずかに外反する。端部は丸く仕上げる。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	乳灰茶色	密 ◎		81
507	埦	口径(13.7) 残高　4.4	口縁部が外反し、端部を丸く仕上げている。	㊐ヨコナデ ㊒ナデ	㊐ヨコナデ ㊓ハケ(4本/0.5cm)	乳黄茶色 乳赤茶色	密 ◎		
508	埦	口径(14.2) 残高　4.3	口縁部が内湾ぎみに立ち上がり、端部付近でわずかに外反する。端部は先細りで丸く仕上げる。	ヨコナデ	ナデ	乳灰茶色	密 ◎		81
509	埦	底径　(5.6) 残高　2.1	高台付埦。輪高台の底部。	ナデ	ナデ	黄白色	密 ◎		
510	埦	底径　(6.2) 残高　1.5	高台付埦。輪高台の底部。底部に指頭痕あり。高台の断面三角形。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	乳黄色	密 ◎		81
511	埦	底径　(7.5) 残高　1.5	高台付埦。輪高台の底部。高台貼り付けの際の接合痕残る。	ナデ	磨滅のため不明	乳赤茶色	密 ◎		
512	埦	底径　(6.3) 残高　1.4	高台付埦。輪高台の底部。高台断面三角形でシャープ。	ナデ	ナデ	乳赤茶色 乳黄茶色	密 ◎		81
513	埦	底径　5.1 残高　1.9	高台付埦。輪高台の底部。高台断面三角形。	ナデ	ナデ	黄白色	密 ◎		
514	埦	底径　6.6 残高　1.5	高台付埦。輪高台の底部。高台貼り付けの際の接合痕残る。高台断面三角形。	ヨコナデ	磨滅の為不明	乳黄茶色	密 ◎		81

表79　SD510 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
515	坏	底径　(7.2) 残高　1.2	底部片。円盤高台をもつ。	㊎磨滅の為不明 ヨコナデ	磨滅の為不明	乳灰黄色	密 ○		
516	坏	底径(15.0) 残高　4.2	口縁部が外反し、端部が丸い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳茶色	密 ○		

表80　SD502 出土遺物観察表　金属製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
517	不　明	小　片	鉄　製	2.0	0.8	0.3	6.9		

表81　SP 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
518	小皿	口径 (7.8) 底径　4.9 器高　1.2	回転糸切り。 外反する口縁。端部は丸い。 底部に板状痕あり。	回転ナデ	回転ナデ	乳黄茶色	密 ◎	SP14	82
519	埦	口径(15.7) 残高　4.0	口縁部が外反し、端部は丸い。	ヨコナデ	磨滅の為不明	乳灰色	密 ◎	SP20	
520	甕	底径 (3.4) 残高　2.4	底部片、小型品？平底。	ナデ上げ	ケズリ→ナデ	暗灰茶色	石･長(1~8) ○	SP118	

表82　第Ⅱ② 層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
521	皿	口径(11.4) 残高　2.0	口縁部は外反し、端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰オリーブ	密 ◎		
522	坏	口径(12.3) 残高　3.3	口縁部は外反し、端部は丸い。	磨滅の為不明	ナデ	乳色 (一部赤色)	密 ○		
523	壺	口径(10.6) 残高　3.4	口縁部片。内湾ぎみに立ち上がる口縁部。端部は「コ」字状に仕上げる。19本のヘラ描き沈線。	(口上)ヘラ描き沈線 (口下)ヘラミガキ	(口上)ヨコナデ (口下)ハケ(10本/0.7cm)	赤茶色	石・長(1~3) ◎		82
524	埦	底径 (7.2) 残高　1.6	底部片。円盤高台の底部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1) ◎		
525	坏	口径(13.4) 残高　2.5	口縁部は外反し、端部は丸い。	ナデ	ナデ	乳灰黄色	長(2) ◎		82
526	坏身	口径(10.0) 残高　2.7	口縁端部丸い。受部凹みシャープでない。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1) ◎		82
527	埦	底径 (7.0) 残高　1.2	底部片。円盤高台の底部。わずかに上げ底になっている。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		82
528	埦	底径 (7.6) 残高　2.0	底部片。削り出し高台の底部。高台部に釉はかかっていない。	ケズリ (ロクロ使用)	施釉の為不明	灰色	密 ◎		82
529	こね鉢	口径(29.1) 残高　4.5	口縁部は上方向につまみ上げられている。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密 ◎		82
530	こね鉢	口径(29.7) 残高　3.5	口縁部は上方向につまみ上げられ、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色青灰色 青灰色	石・長(1~2) ◎		82

表83　第Ⅱ②層 出土遺物観察表　石製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
531	不　明	ほぼ完形	頁岩？	径2.1		0.3	2.4		82

表84　第Ⅱ②層 出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
532	鑿	完形	鉄製	4.7	0.9	0.4	4.1		82
533	鉄滓	小片	鉄製	4.0	2.7	2.0	29.9		82
534	鉄滓	小片	鉄製	4.3	2.8	1.8	22.4		82

表85　その他の 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
535	甕	口径(17.3) 残高 5.9	口縁部は外反しながら立ち上がる。端部は丸く仕上げる。	ハケ(9本/1.9cm)	ハケ(6本/cm)	乳赤茶色 乳赤茶色 (一部黒色)	石・長(1~3) ◎		82
536	壺	口径（9.0） 残高 4.8	直口口縁壺。直立に立ち上がる口縁部。端部は丸く仕上げる。	ヨコナデ	ナデ	灰茶色 茶色	石・長(1~2) ◎		
537	土鍋	口径(35.0) 残高 6.5	口縁部片。口縁部は外反しながら立ち上がる。端部は丸く仕上げる。	ヨコナデ	㊐ヨコナデ ㊒ハケ	乳灰茶色 乳茶色	石・長(1~4) ◎		82
538	平瓶	口径（5.6） 残高 3.7	口縁部片。端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色	長(1) ◎		
539	坏	口径(14.0) 器高 3.4 底径 7.3	体部は外反しながら立ち上がる。端部は丸く仕上げる。底部は回転糸切り。板状痕あり。	ヨコナデ ㊎回転糸切り	ヨコナデ	乳黄色	密 ○		83

表86　その他の 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
540	磨石	完形	安山岩系？	7.1	3.9	2.7	121.0		83
541	石庖丁	側部破片	結晶片岩	3.5	3.0	0.55	9.3		
542	不明	小破片	不明	4.1	2.6	0.65	6.7		83

表87　その他の 出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
543	鋤先	片側袋部 付近が残る	鉄製	3.8	4.1	0.1	25.7		83
544	刀子	刀身端部と 茎端部を欠く	鉄製	11.4	1.1	0.3	16.0		83
545	刀子	茎部片	鉄製	3.7	0.7	0.55	4.4		83
546	不明	完形	鉄製	径2.4		0.2	7.4		83

第10章

束本遺跡4次

－5区Bの調査－

第10章　　5区Bの調査

1．調査の経緯

5区Bは5区を北からA・B・C区と小区分した中央部に位置し、調査以前は住宅であったため造成土が80cmと厚い。調査面積は320㎡である。遺構検出面の第Ⅳ層上面までは地表下120cmと深いため、第Ⅳ層上面までは重機を使用して掘削を行い、排土は搬出することにした。遺構は、第Ⅳ層上面で溝5条、土坑1基、柱穴22基を検出した。その一部は住宅建設によって消滅している。遺構検出後は掘り下げを行い、遺構と遺物出土状況の測量を写真撮影を行った。

調査区西壁下にトレンチ（aトレンチ）を掘り土層の確認を行った。5区Bにおいても第Ⅲ②層（アカホヤ火山灰）と第Ⅵ層のAT火山灰を検出した。調査の最後には、東西にトレンチ（bトレンチ）を入れAT火山灰の広がりとⅣ層以下の堆積状況の調査を行った。

2．層　位（第4・128図）

本調査区では、第Ⅰ層～第Ⅶ層までの土層を検出した。

第Ⅰ層は造成土及び耕作土で厚さ100cmを測る。

第Ⅱ層床土は調査区全体で2～7cmの厚さを測る。

第Ⅲ①層黒色土は西壁では10～20cmを測る。なお、例外的に東壁では検出されない地点があるが、ほぼ全域で検出される。

第Ⅲ②層黒褐色土はアカホヤ火山灰を含む層であり石器を検出している。このアカホヤ火山灰は分析の結果、二次的な堆積であることを確認している。調査区の北側で部分的に検出されないところがあるがほぼ全域で厚さ5～10cmの堆積をみる。

第Ⅳ層以下は、aトレンチとbトレンチでの確認である。

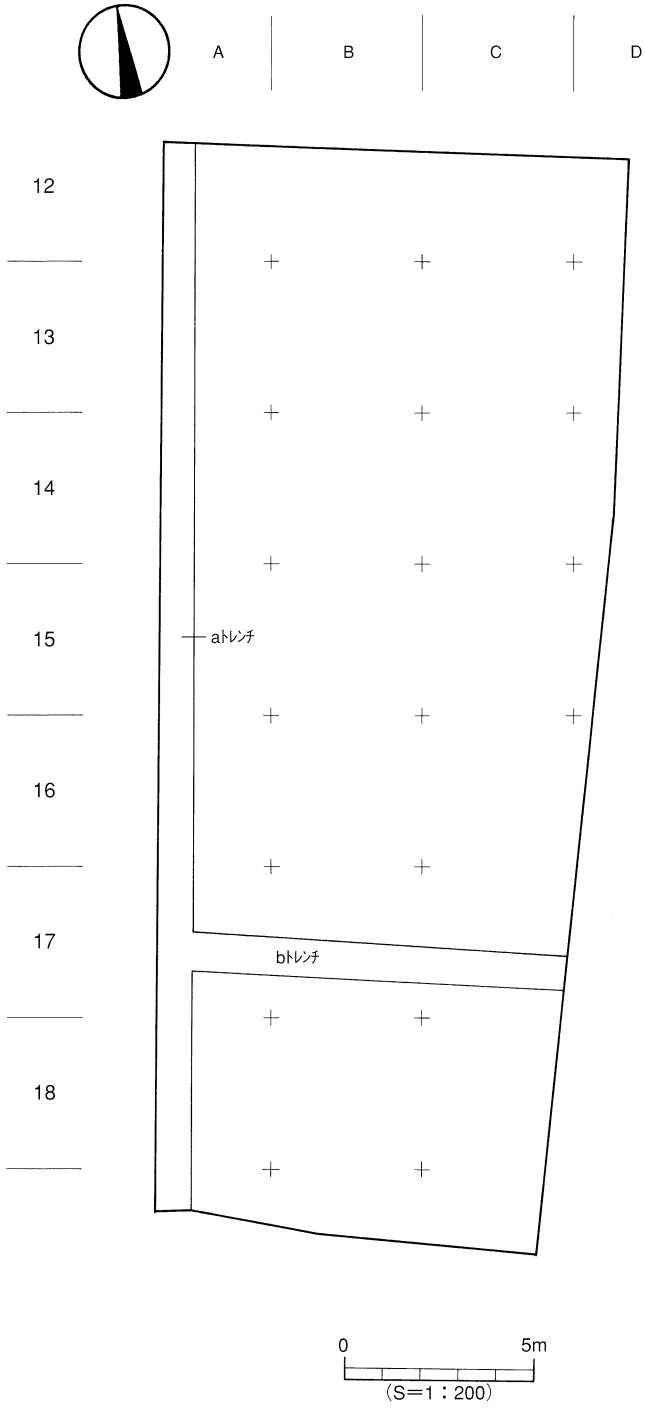
第Ⅳ層褐灰色土と第Ⅴ層暗褐色土は、5～15cmの厚さを測り、a・bトレンチ全域で検出した。

第Ⅵ層AT火山灰は、1次堆積と2次堆積の2種類に分けられ、それぞれが3分層でき、2次堆積は風・礫・砂、1次堆積は第Ⅵ①層・第Ⅵ②層・第Ⅵ③層と呼称した。

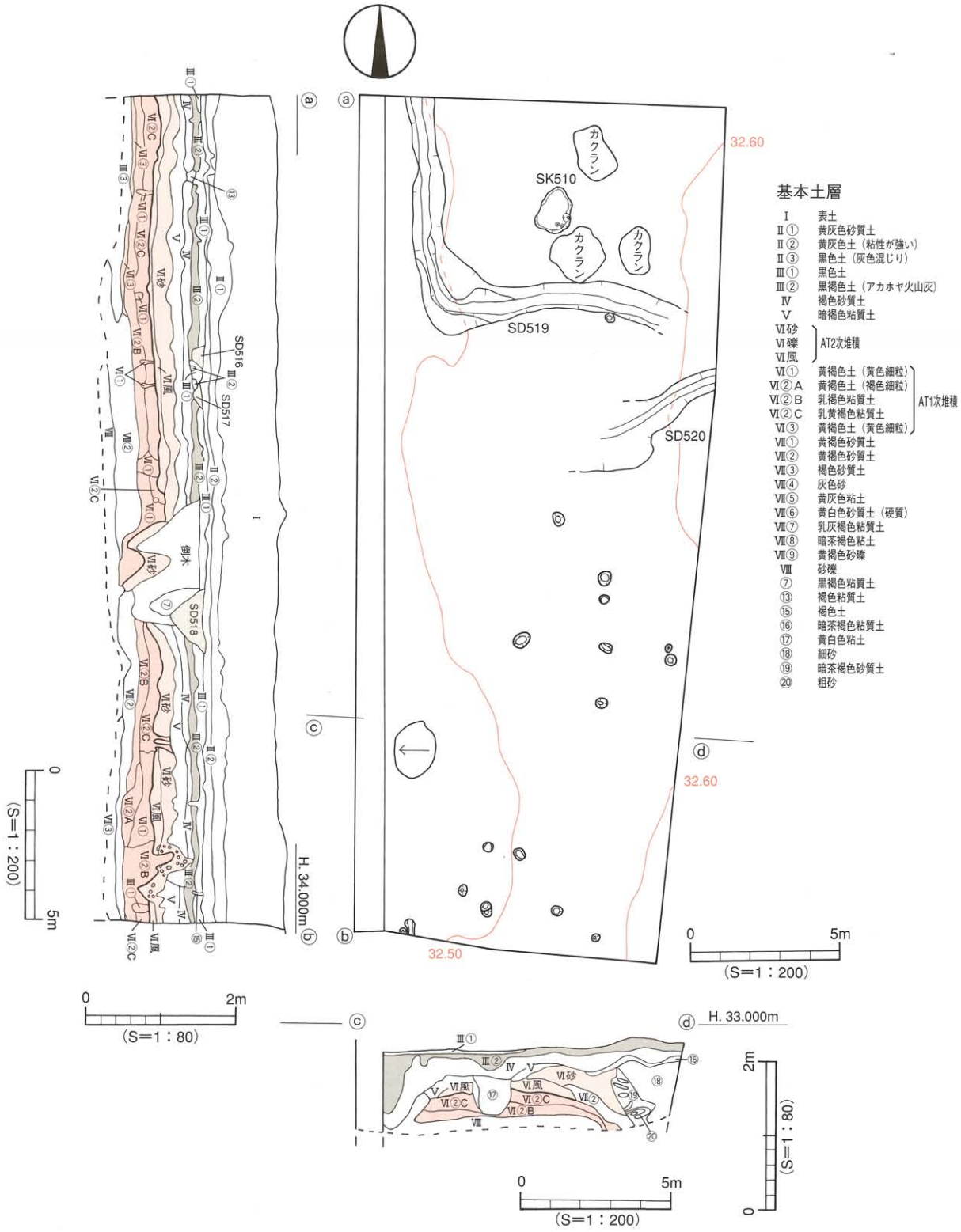
第Ⅶ層は黄白色砂質土で調査区西壁中央より南側で検出した。

遺構は第Ⅳ層上面で検出した。

第126図　調査区位置図



第127図　区 割 図



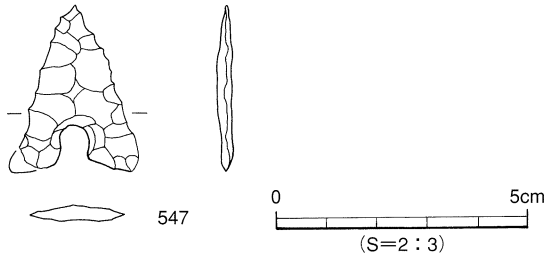
第128図　第Ⅳ層上面遺構配置図

3．遺構と遺物

〔1〕縄文時代

本調査で縄文時代の遺構は検出されなかったが、第Ⅲ②層中（アカホヤ火山灰）より石鏃が出土した。この石鏃は第Ⅲ②層中である事と形態より、縄文時代早期のものである。

石鏃（第129図）は、凹基式である。基部の抉りがかなり深い。法量は長さ3.3cm、幅2.4cm、厚さ0.3cmを測る。材質はサヌカイトである。



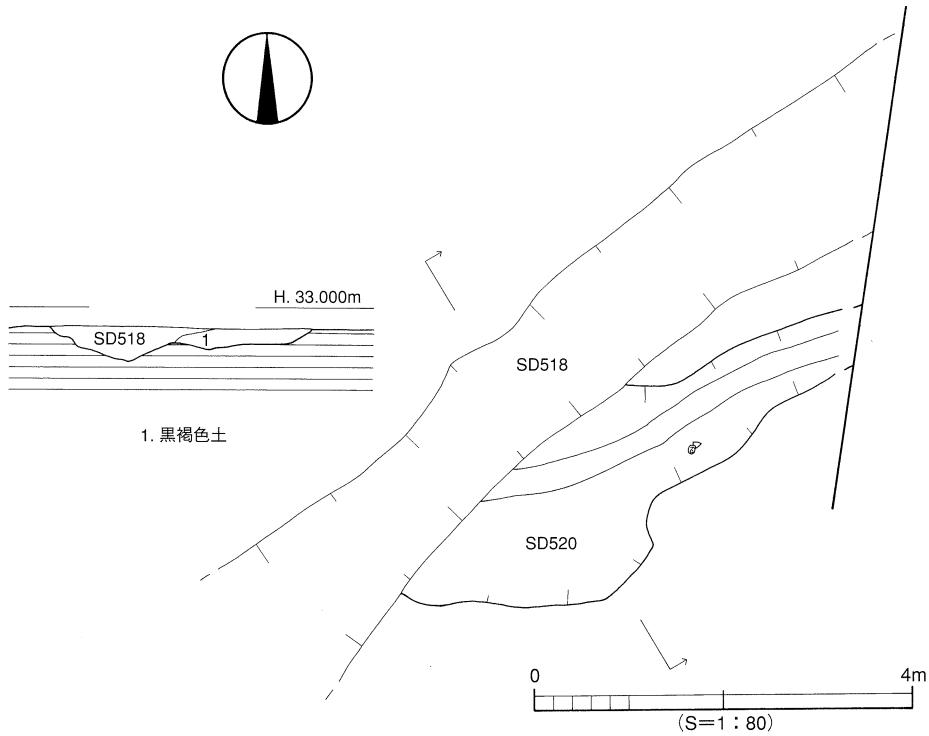
第129図　第Ⅲ②層出土遺物実測図

〔2〕弥生時代

1）溝（ＳＤ）

ＳＤ５２０（第128・130図）

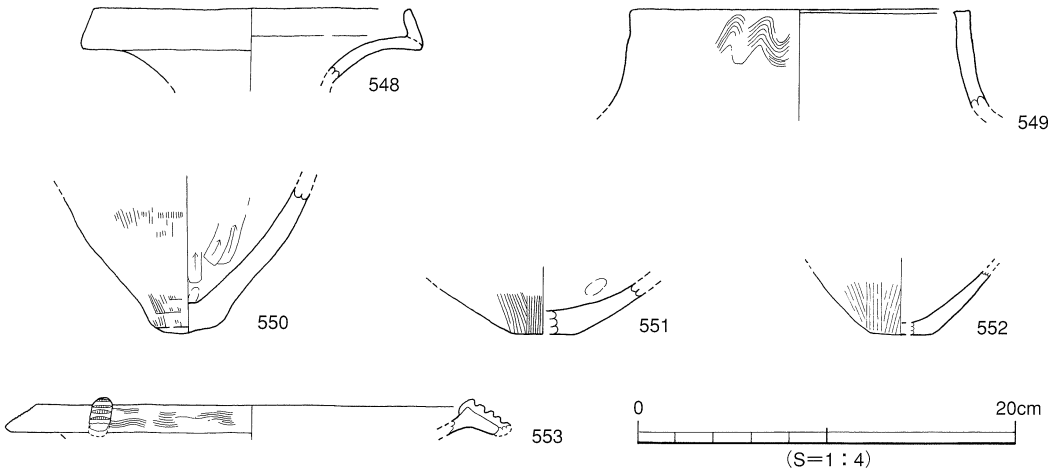
調査区中央東側のＣ14～Ｄ15区で検出しＳＤ518に切られる。規模は上場幅170cm、深さ27cmを測り、長さはＳＤ518に切られているために、576cmを検出したにとどまった。埋土は黒褐色土である。出土遺物は弥生土器片が少量出土した。



第130図　SD520測量図

出土遺物（第131図）

548・549は複合口縁。548は短く内傾する拡張部。端部は丸味をもつ。549は外反し内傾する拡張部片。端部は「コ」字状を呈しナデにより凹む。外面に6条の波状文を施す。551壺形土器の底部片、小さな平底。550・552甕形土器の底部片。550は丸味のある不安定な平底。553器台の口縁部片。口縁部に粘土を貼り付け拡張し垂下させる。端面に2条の波状文とキザミのある棒状浮文を貼り付ける。



第131図　SD520出土遺物実測図

ＳＤ５１９（第132図）

調査区北側のＡ12～Ｃ14区で検出し、ＳＤ516・517・518に切られ「Ｌ」字状に折れ曲がる溝である。規模は上場幅117cm、深さ24～35cm、検出長14ｍを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒色粘質土である。遺物は出土しなかったが、ＳＤ516・517の古墳時代以降の溝に切られていることと、北壁の土層で第Ⅲ①層中からの掘り込みであることより、古墳時代以前の溝と考えられる。

2）土坑（ＳＫ）

ＳＫ５１０（第133図）

調査区北側のＣ13区で検出しＳＤ516に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し規模は長軸146cm、短軸105cm、深さ17cmを測る。断面形態は逆台形状で、埋土は黒色土である。遺物は検出されなっかたが埋土とＳＤ516（古墳時代以降）に切られていることより古墳時代以前の土坑と思われる。

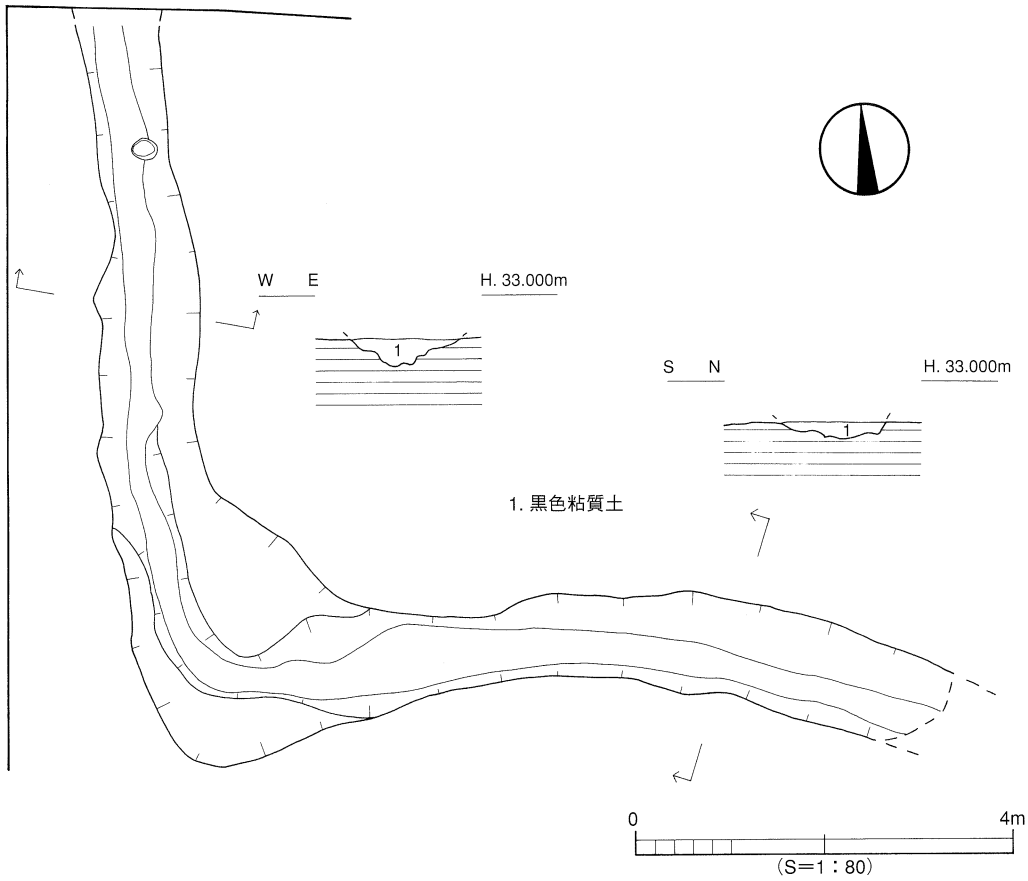
〔３〕古墳時代以降

ＳＤ５１６（第135図）

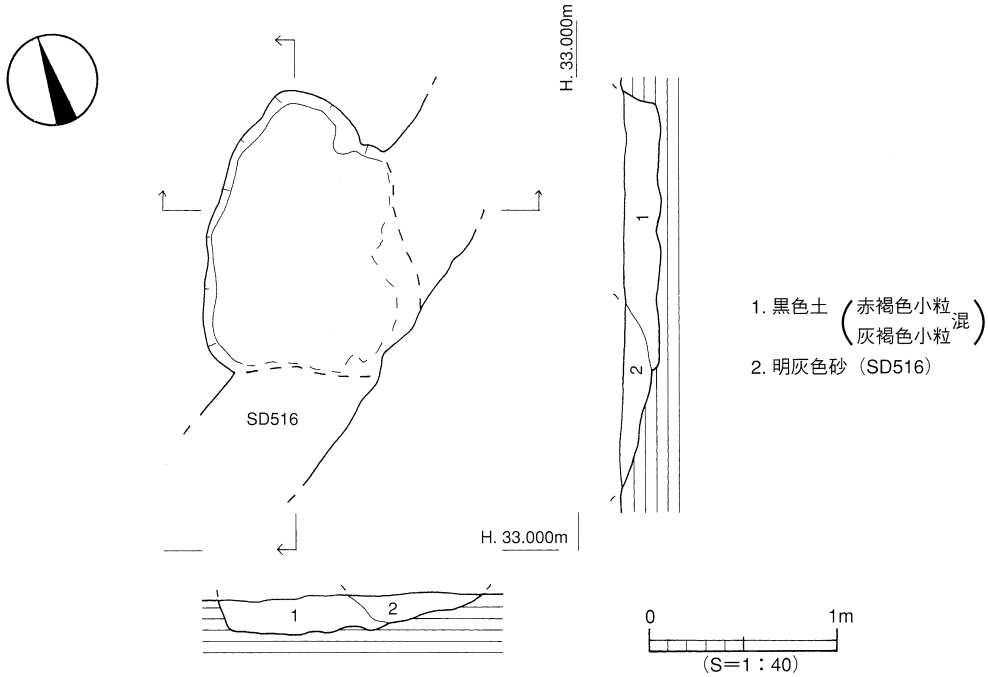
調査区北側のＡ14～Ｃ12区で検出し、ＳＤ519とＳＫ510を切る。さらに一部を現状の撹乱に切られている。規模は上場幅10～87cm、深さ12cm、検出長12.8ｍを測り、断面形態はレンズ状を呈する。埋土は明灰色砂である。

ＳＤ５１７（第135図）

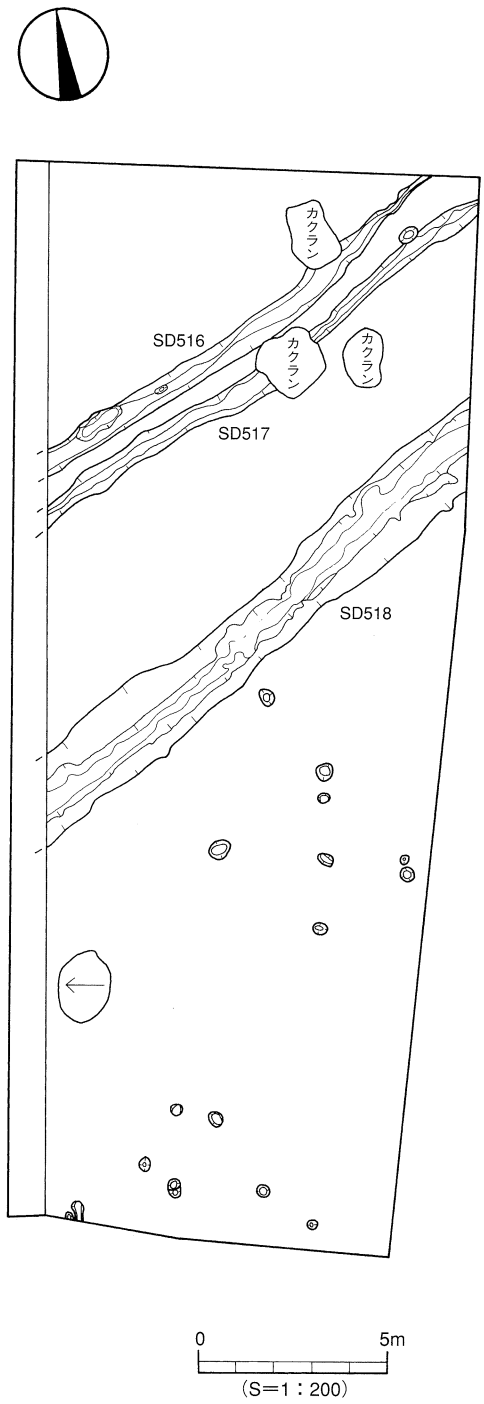
調査区北側のＡ14～Ｃ12区で検出し、一部近現代の土坑に切られる。規模は上場幅41～71cm、深さ11cm、検出長14.2ｍを測る。断面形態はレンズ状で埋土は明灰色砂である。ＳＤ517はＳＤ516と50cmの間隔をへだてて、並行に走る溝で規模・埋土も同じものである。出土遺物は弥生土器の甕形土器、壺形土器、高坏形土器、石器などがある。溝の埋土は西壁土層では第Ⅲ①層（弥生時代）を切っており、流れ込みの可能性の高いものである。



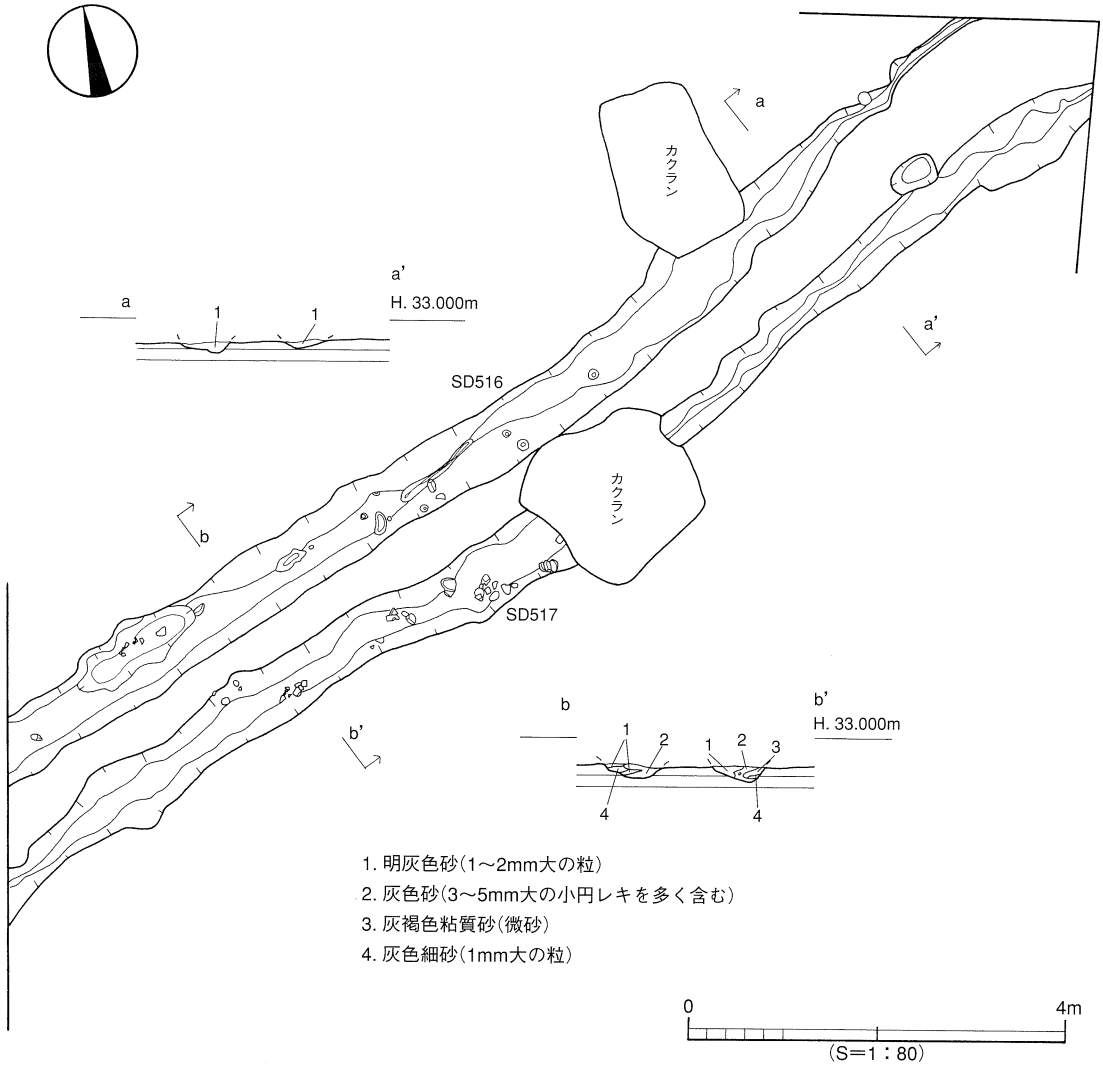
第132図　SD519測量図



第133図　SK510測量図



第134図　第Ⅲ層上面遺構配置図

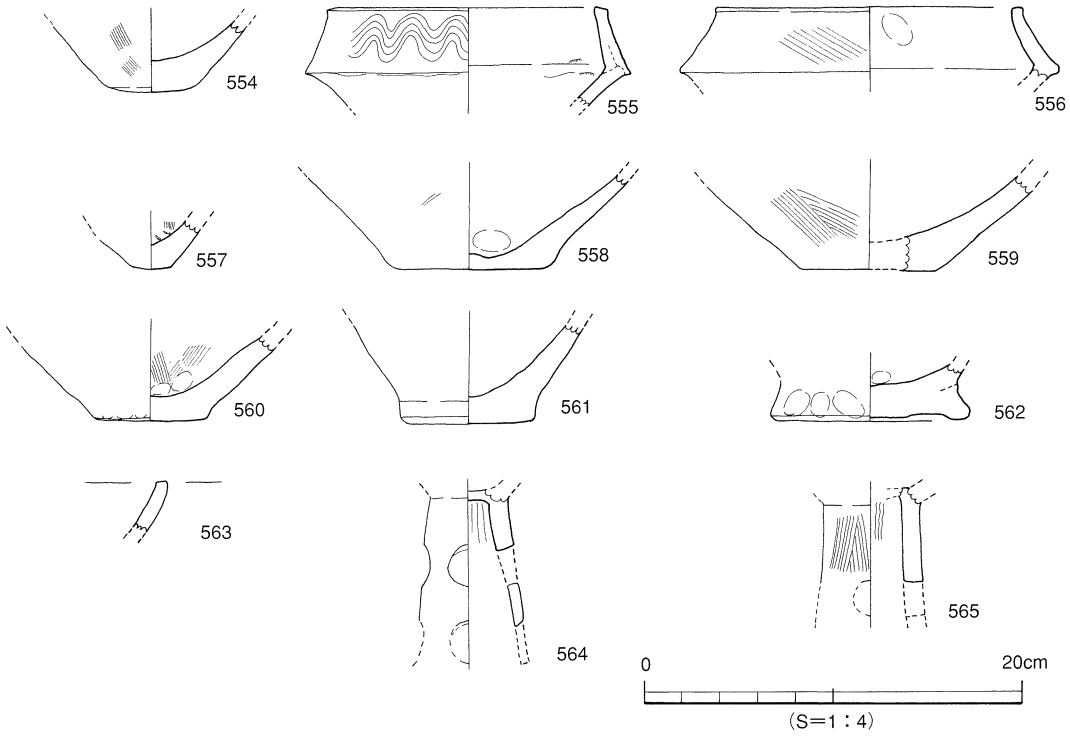


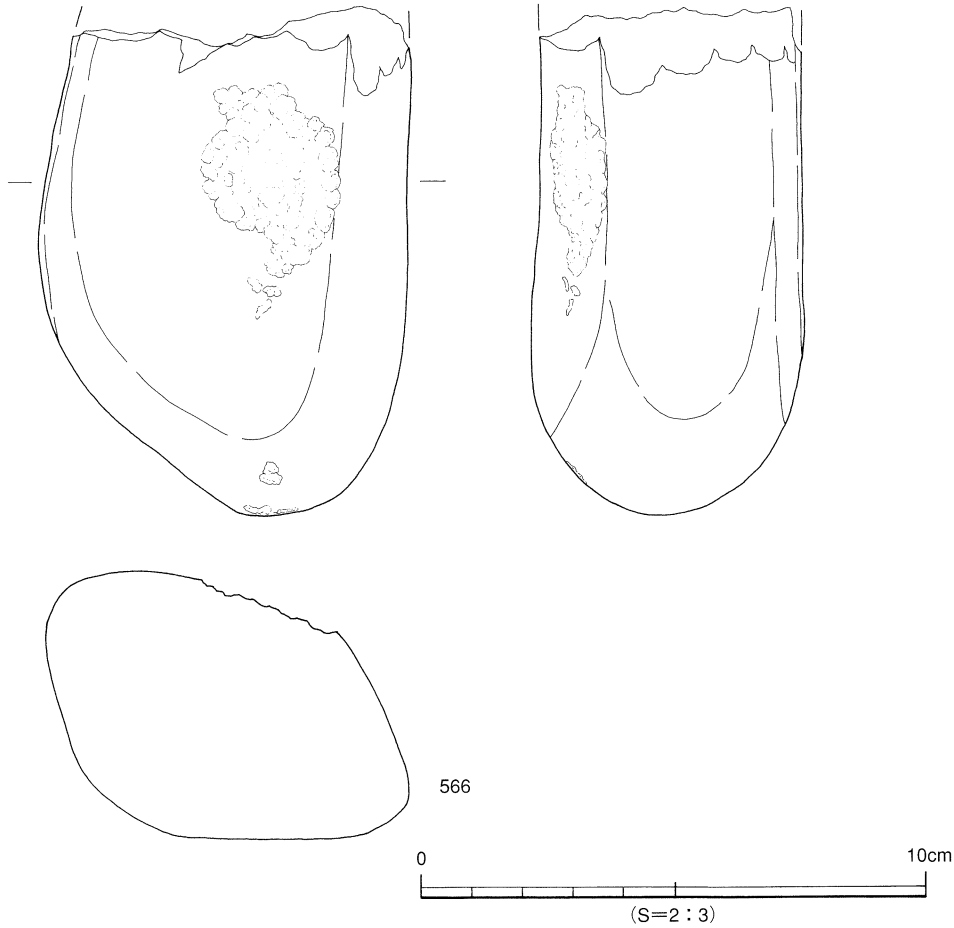
第135図　SD516・517測量図

出土遺物（第136・137図）

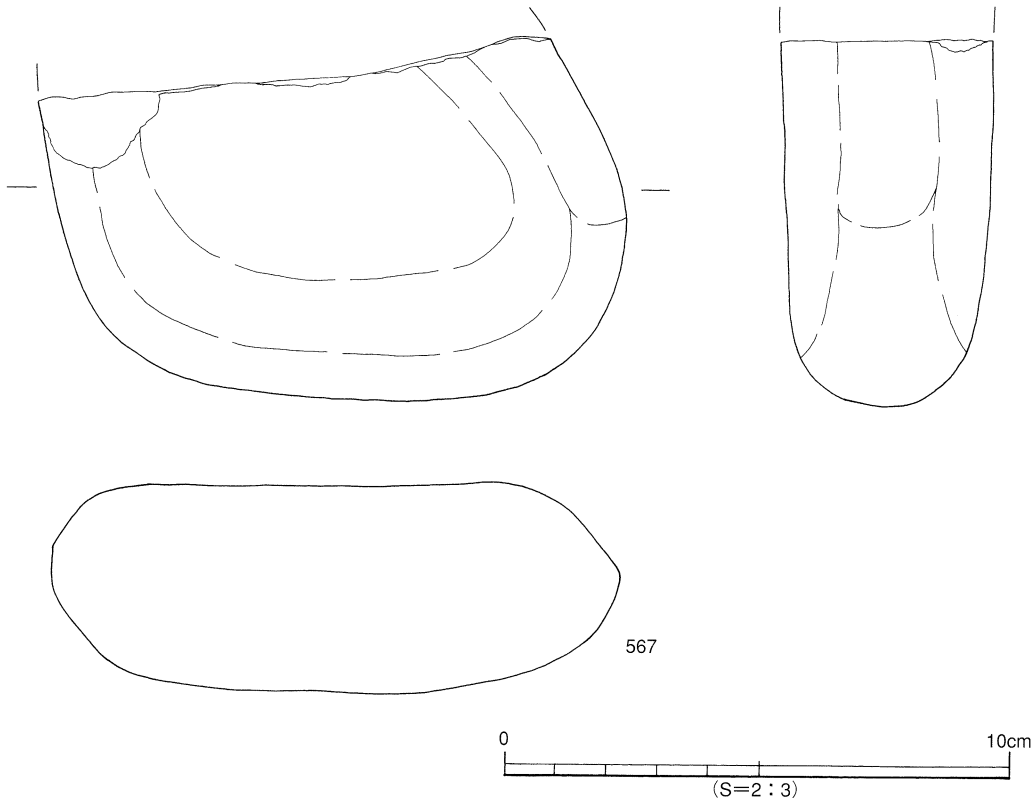
554甕形土器の底部片、やや丸味をもつ平底。557ミニチュア品。555～561は壺形土器、555複合口縁、外反気味に内傾する口縁部。外面に5条の波状文を施す。556複合口縁、外反して内傾する口縁部。端部はつまみにより外方向にわずかに拡張する。558～561は平底の底部片。562鉢形土器、くびれてわずかに上げ底。くびれ部に指頭痕が顕著に残る。563鉢の口縁部片。564・565は高坏の柱部。564は径2.1cmの円孔を4方向に上下2段施す。565は径1.8cmの円孔を4方向に施す。566は、長さ10.3cm、幅7.3cm、厚さ5.2cmを測る。上面中央部と小口に使用痕が見られ、敲石と凹石の両方の用途として使用されている。567は台石である。長さ7.2cm、幅11.3cm、厚さ4.2cmを測る。上面がわずかに凹む。

時期：西壁土層と埋土より古墳時代以降と思われる。





第136図　SD517出土遺物実測図（1）



第137図　SD517出土遺物実測図（2）

ＳＤ５１８（第138図）

調査区中央のＡ16～Ｄ13区で検出し、ＳＤ519とＳＤ520を切っている。規模は上場幅177㎝、深さ24～35㎝、検出長14.7ｍを測る。断面形態は舟底状を呈し、埋土は灰褐色砂である。出土遺物は、弥生土器の壺形土器と器台形土器、須恵器の坏蓋と坏身、石庖丁が出土している。

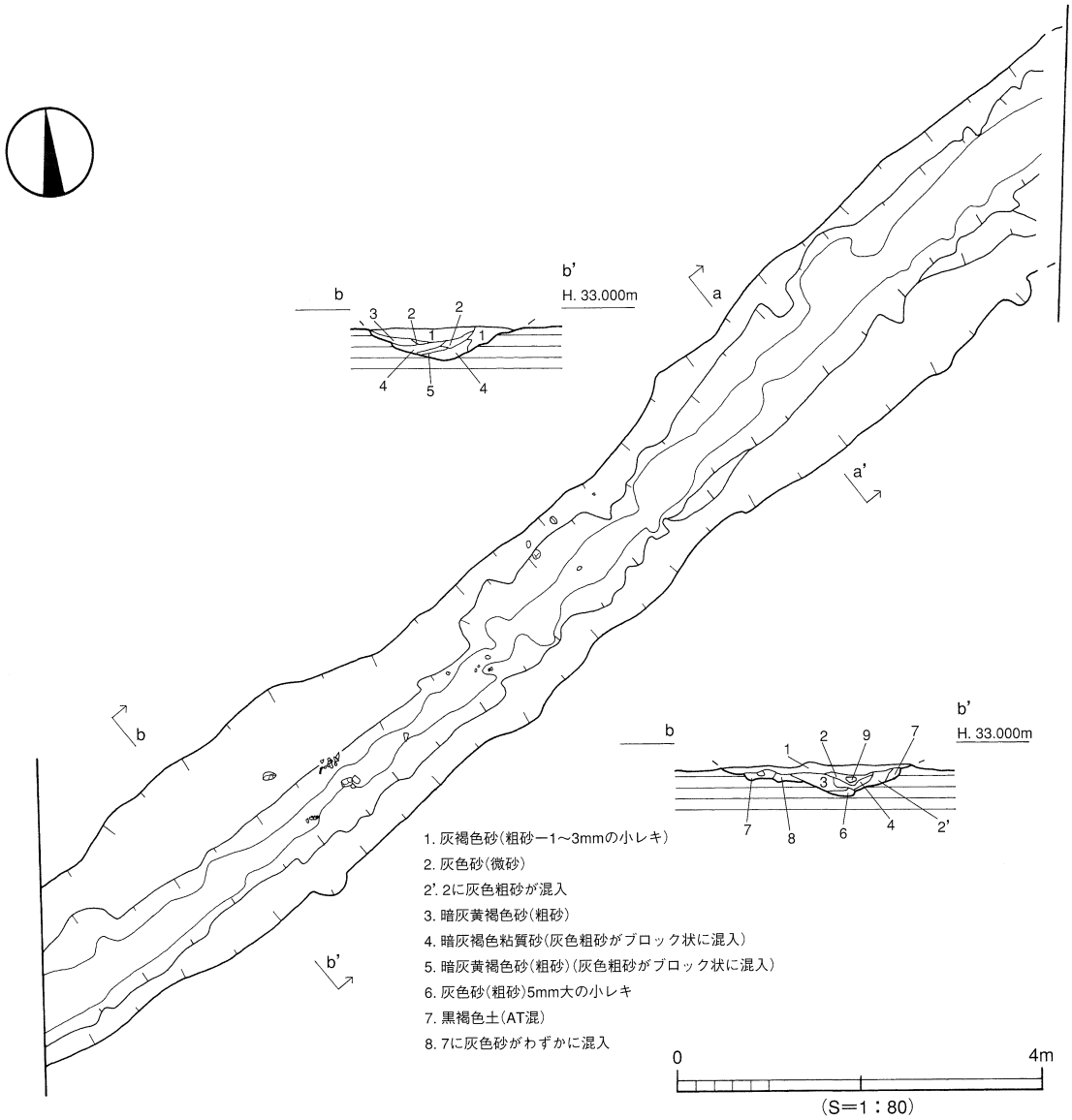
出土遺物（第139・140図）

568壺形土器、外傾する口縁部の端部はわずかに内傾する。569壺形土器、突出気味の平底。570器台、口縁部に粘土を貼り付し拡張する。端面に1条、口縁内側に2条の竹管文を施す。571～574は須恵器。571・572坏蓋、内湾する口縁部。口縁部と天井部を分ける境に断面三角形の稜をもつ。573蓋、中央部に大きく凹むつまみをもつ。天井部は扁平である。574坏身・口縁部、立ち上がりは短く内傾する。受部はやや外上方に伸びる。575石庖丁である。長さ8.1㎝、幅3.7㎝、厚さ0.7㎝を測る。研磨段階の未製品である。石材は結晶片岩である。

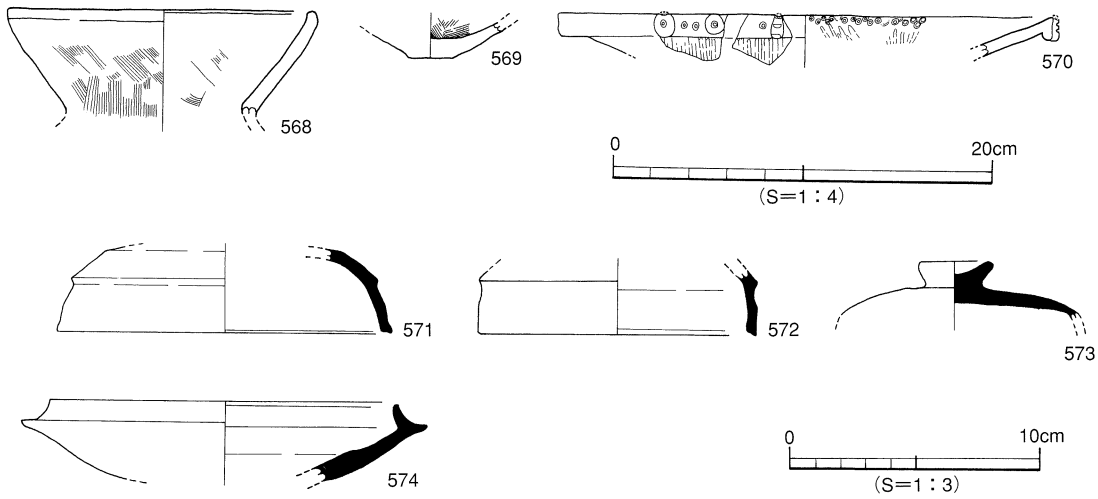
時期：出土した須恵器の坏身より古墳時代後期以降の溝と考えられる。

その他の出土遺物（第141図）

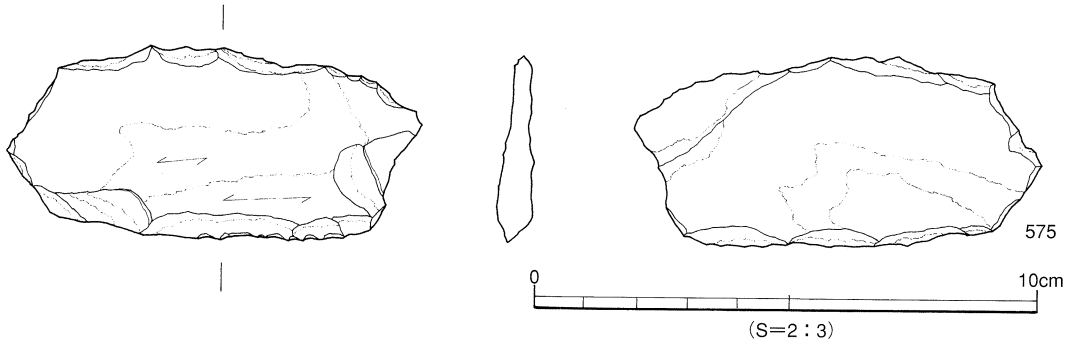
576・577複合口縁の口縁部片、577外面に櫛描き沈線を4条施す。578甕形土器の底部片。平底。



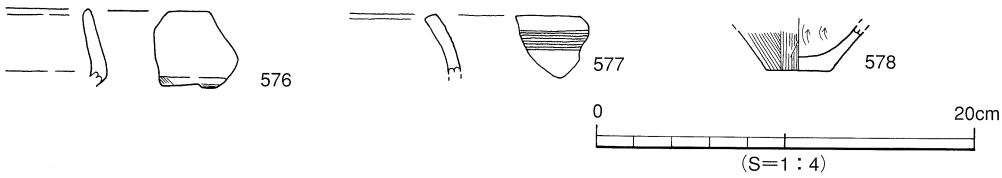
第138図　SD518測量図



第139図　SD518出土遺物実測図（1）



第140図　SD518出土遺物実測図（2）



第141図　その他の出土遺物実測図

4．小　結

土層：調査区全域でアカホヤ火山灰土とＡＴ火山灰土を検出した。アカホヤ火山灰土の下層からは石鏃を検出している。石鏃は、縄文時代早期の遺物であり、調査地周辺に縄文時代の遺跡をうかがわせる一資料である。

遺構：本調査区では弥生時代以降の遺構と遺物を検出した。弥生時代の遺構は溝2条、土坑1基、古墳時代以後の遺構は溝3状である。

弥生時代

ＳＤ519は遺物は検出されなかったが、北壁土層では第Ⅲ①層中からの掘り込みであることを確認し、さらに古墳時代以降のＳＤ516に切られているため、弥生時代の溝と考える。ＳＤ519は、「Ｌ」字状に折れ曲がる溝で、埋土は黒色粘質土の砂を含まないものであり、水路ではなく区画溝と考える。なお、埋土、断面形態、方向より5区Ａの南西部で検出したＳＤ512と同一の溝と考える。

ＳＤ520は調査区中央東側でＳＤ518に切られる形で検出した。検出長は短いが、溝底部は東から西に傾斜している。埋土は黒褐色土で弥生の遺物を検出している。ＳＤ520はＳＤ519とは検出位置、上場幅、断面形態、埋土が異なるため、ＳＤ519（区画溝）とは別な性格をもつと考える。

ＳＫ510は遺物の出土は見られなかったが、古墳時代以降のＳＤ516に切られているために弥生時代の遺構とした。

古墳時代

ＳＤ516・517は、北東から南西に併走する溝で、埋土は灰色砂、断面はレンズ状である。2条は5区Ａで検出したＳＤ501及びＳＤ503と埋土（灰色砂）、断面（レンズ状）が同じである。よって、ＳＤ516・517は、調査区間の道路（未調査地）で湾曲してＳＤ501・503に各々続くものと考えられる。

ＳＤ518は調査区中央部より、北東から南西に走る溝である。出土遺物は須恵器と弥生土器が出土

している。SD518は、SD516・517と同一方向の溝であるが、規模はSD516・517に比べ上場幅は広く深さは深いものであり、SD516・517とは異なる用途と考えられる。

本調査区では弥生時代と古墳時代以降の溝を検出したが、竪穴式住居址は検出されなかった。しかし、検出した溝からは弥生土器や須恵器が出土しており、周辺地域に弥生時代～古墳時代の生活址があるものと思われる。今後の東西近隣地域の調査に期待したい。

遺構・遺物一覧　ー凡例ー

（1）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
遺構一覧は志賀、遺物観察表は高尾・田崎・中村が作成した。

（2）遺物観察表の各掲載について。

法　量　欄　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。
例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。
例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例）砂・長（1～4）、多→「1～4㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。
焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表88　溝　一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模 長さ(長径)×幅(短径)×深さ(m)	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
516	A14～C12	レンズ状	12.80×0.87×0.12	明灰色砂		古墳以降	SD519、SK510を切る。
517	A14～C12	レンズ状	14.20×0.71×0.11	明灰色砂	弥生	古墳以降	
518	A16～D13	舟底状	14.70×1.77×0.35	灰褐色砂	弥生・須恵器		SD519・520を切る。
519	A12～C14	逆台形状	14.00×1.17×0.35	黒色粘質土			SD516・517・518に切られる。
520	C14～D15		5.76×1.70×0.27	黒褐色土	弥生	弥生後期末	SD518に切られる。

表89　土坑　一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
510	C13	隅丸方形	逆台形	1.46×1.05×0.17	黒色土		古墳以前	SD516に切られる。

表90　第Ⅲ②層 出土遺物観察表　石製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
547	石　鏃	ほぼ完形	サヌカイト	3.3	2.4	0.3	1.8		87

表91　SD520 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
548	壺	口径(16.3) 残高　3.9	複合口縁。拡張部は短く、ゆるやかに内傾する。端部は丸味をもつ。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	灰茶色	石·長(1~4) ◎		87
549	壺	口径(18.0) 残高　5.2	複合口縁。端部は「コ」字状。端面はヨコナデによりやや凹む。外面に6条の波状文あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶色 灰茶色	石·長(1~3) ◎		87
550	甕	底径　4.1 残高　7.7	丸味のある不安定な平底。胴部は底部に向ってすぼまる。底部周辺にハケ目木口痕が多数残る。	㊎ナデ ㊍ハケ(10本/cm)	強い板ナデ (ケズリ風)	灰茶色 茶色	石·長(1~4) ◎	黒斑	87
551	壺	底径　(3.2) 残高　2.8	小さな平底。胴部は大きく広がりながら立ち上がる。	㊎ナデ ㊍ハケ(7本/cm)	ナデ	乳茶色 乳黄茶色	石·長(1~3) ◎		87
552	甕	底径　(3.0) 残高　3.3	小さな平底。	㊎ナデ ㊍ハケ(5~6本/cm)	ナデ	黒色 乳灰黄色	石·長(1~3) ◎	黒斑	87
553	器台or壺	口径(22.4) 残高　1.9	口縁部に粘土を接合し、端部を拡張し垂下させる。端部には12条の波状文とキザミのある棒状浮文。	ナデ	ヨコナデ	乳赤茶色	石·長(1~2) ◎		87

表92　SD517 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
554	甕	底径　(4.4) 残高　3.8	平底。胴部はやや丸味をもって立ち上がる。	㊍ハケ(10本/cm) ㊎ナデ	ナデ	乳茶色 灰茶色	石·長(1~4) ◎	黒斑	
555	壺	口径(13.4) 残高　5.3	複合口縁。拡張部外面波状文(5条)。	㊊ヨコナデ ㊋ナデ	ヨコナデ	乳茶色	石·長(1~5) ◎		87
556	壺	口径(16.0) 残高　3.9	複合口縁。拡張部端部は外方に突出する小片。	㊊ハケ(5本/cm) ㊌ヨコナデ	ヨコナデ	茶色	石·長(1~3) ◎		
557	ミニチュア	底径　1.9 残高　2.4	平底。	ナデ	ハケ(6本/0.5cm)→ ナデ	灰茶色 黒色	石·長(1~3) ◎	黒斑	
558	壺	底径　(7.6) 残高　5.3	平底。胴部はやや丸味をもってゆるやかに立ち上がる。	ハケ(一部磨滅)	磨滅のため不明	茶色	石·長(1~4) ◎	黒斑	
559	壺	底径　(7.0) 残高　5.1	平底。	ハケ(6本/cm)	磨滅のため不明	茶色 乳灰色	石·長(1~7) ◎		
560	壺	底径　6.0 残高　4.5	平底。底部と胴部の境に押圧痕を顕著に残し、器壁は凹凸が著しい。	㊍磨滅のため不明 ㊎ナデ	ハケ(7~8本/cm) →ナデ	茶色 灰茶色	石·長(1~8) ◎		
561	壺	底径　7.0 残高　5.1	平底。直立気味に立ち上がり、外面に稜線をもつ。	㊍磨滅のため不明 ㊎ナデ	磨滅のため不明	乳茶色 茶色	石·長(1~3) ◎		
562	鉢or甕	底径　10.4 残高　3.0	くびれをもつ。わずかな上げ底。外面くびれ部に指頭痕顕著で器壁は凹凸が著しい。	ナデ 指頭痕	ケズリ→ナデ	乳茶色	石·長(1~5) ◎	黒斑	
563	鉢	口径(小片のため不明) 残高　2.6	口縁部はわずかに内湾する。 小片。	磨滅のため不明	ナデ	乳茶色	石·長(1~3) ◎		
564	高坏	残高　7.2	柱部に径2.1cmの円孔を4方向に上下2段施す。	磨滅のため不明	㊏ミガキ ㊐ケズリ(ヨコ)	乳茶色	石·長(1~3) ◎	黒斑	
565	高坏	残高　5.2	柱部に径1.8cmの円孔を4方向に施す。	磨滅が著しいがハケ(7本/cm)残る	㊏ミガキ ㊐ケズリ	灰黄色 茶色	石·長(1~3) ◎		

表93　SD517 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
566	敲石 凹石	約２／３	不明	10.3	7.3	5.2	590.0		88
567	台石	約２／３	不明	7.2	11.3	4.2	560.0		88

表94　SD518 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
568	壺	口径(16.0) 残高 5.6	口縁端部はやや内傾し、「コ」字状を呈する。	(口端)ヨコナデ (口)ヨコナデ (胴)ハケ(10本/cm)	(口)ヨコナデ (胴)ハケ(10本/cm) →ナデ	乳茶黄色	石・長(1~3) ◎		
569	壺	底径 2.4 残高 1.9	突出ぎみの平底。胴部は大きく広がりながら立ち上がる。	ナデ	ハケ(12~14本/cm)	乳茶色	石・長(1~3) ◎	黒斑	
570	器台	口径(26.0) 残高 2.1	口縁端部に粘土を貼付し、拡張。端面に1条、口縁内側に2条の竹管文を施す。円形浮文・棒状浮文あり。	(口端)ヨコナデ (口)ミガキ	(口端)ヨコナデ (口)ミガキ	茶色	石・長(1~3) ◎		
571	坏蓋	口径(13.0) 残高 3.4	口縁部は内湾する。端部は凹面をなして内傾する。天井部と口縁部との段差による断面三角形の稜。	(天)1/2回転ヘラケズリ (口)回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色	長(1~2) ◎		88
572	坏蓋	口径(11.0) 残高 2.5	口縁部はほぼ直に下る。端部は凹面をなして内傾する。天井部と口縁部とを分ける稜は断面三角形。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色	長(1~2) ◎		88
573	蓋	残高 2.2	中央部が大きく凹むつまみをもつ。天井はかなり扁平。	(つまみ)回転ヨコナデ (天)回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	灰色 青灰色	長(1~2) ◎		88
574	坏身	口径(13.7) 残高 3.1	口縁部立ち上がりは短く、反り気味に内傾する。端部は先細り。受部は比較的長くやや外上方。	(口)回転ヨコナデ (底)1/2回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	青灰色 灰色	長(1~2) ◎		88

表95　SD518 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
575	石庖丁	完形	結晶片岩	8.1	3.7	0.7	26.7		88

表96　その他の 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
576	壺	口径不明 残高 4.0	複合口縁。端部は内傾し、丸味をもつ。	(拡)ナデ (接合)ハケ(10本/cm)	ナデ	乳茶色 茶色	石・長(1~3) ◎		
577	壺	口径不明 残高 3.1	複合口縁。端部は内傾肥厚し、「コ」字状を呈する。拡張部外面に、櫛描沈線4条あり。	ヨコナデ	(口端)ヨコナデ (口)ナデ	茶色 乳茶色	石・長(1~3) ◎		
578	甕	底径(3.4) 残高 2.5	平底。器壁は薄め。	(底)ナデ (胴)ハケ(10本/cm)	板ナデ	暗茶色 黒色	石・長(1~2) ◎		

第11章

東本遺跡4次

－5区Cの調査－

第11章　　5区Cの調査

1．調査の経過

調査区は、調査以前は既存宅地であった。調査対象面積は560㎡であるが、安全対策及び排土置き場を確保したために、最終的な発掘調査面積は約248.5㎡となった。以下、調査工程を略記する。

調査区の西壁に土層観察用のトレンチ（aトレンチ）を掘り、土層確認後地表下70cmまで掘り下げた。排土は調査区外に搬出した。つづいて、遺構検出作業を行い竪穴式住居址・溝・柱穴を検出し、写真撮影を行う。竪穴式住居址など遺構の掘り下げを行ない、出土遺物及び遺構の測量を完了する。7月20日に、航空写真撮影を行い野外調査を終了する。

2．層　位（第143図）

本調査区は松山平野の東部に広がる。石手川左岸の低位段丘上、標高33.300mに立地する。

基本層位は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層床土、第Ⅲ①層黒色土、第Ⅲ②層黒褐色土（アカホヤ）火山灰、第Ⅳ層茶褐色土、第Ⅴ層褐色粘質土、第Ⅵ層2次堆積は、第Ⅵ層砂、第Ⅵ層礫、第Ⅵ層風、第Ⅵ層1次堆積は、第Ⅵ②B層乳褐色粘質土、第Ⅵ②C層乳黄褐色粘質土、第Ⅵ③層、第Ⅶ⑥層黄白色砂質土（硬質）

第Ⅰ層表土　近現代の造成工事及び農耕による客土である。（40～140cm）

第Ⅱ層床土　水田耕作に伴う床土である。（6～14cm）

第Ⅲ①層　調査区北部を除く全域で検出する。（4～14cm）

第Ⅲ②層　調査区全域に堆積する。（アカホヤ火山灰）（8～20cm）

第Ⅳ層　調査区全域に堆積する。第Ⅳ層上面の標高を測量すると東から西へ緩傾斜している。

第Ⅴ層　第Ⅳ層と類似するが粘性が強く2～3㎜の砂礫を多く含む。調査区全域に堆積する。（6～25cm）

第Ⅵ層より下層はbトレンチで検出した。

第Ⅵ砂　1～2㎜の砂粒を含む。調査区全域にブロック状に堆積している。（6～10cm）

第Ⅵ礫　2～5㎜の砂粒を含む。調査区全域にブロック状に堆積している。（8～20cm）

第Ⅵ風　小石・礫混じり、a・bトレンチともに部分的に堆積が見られる。（6～10cm）

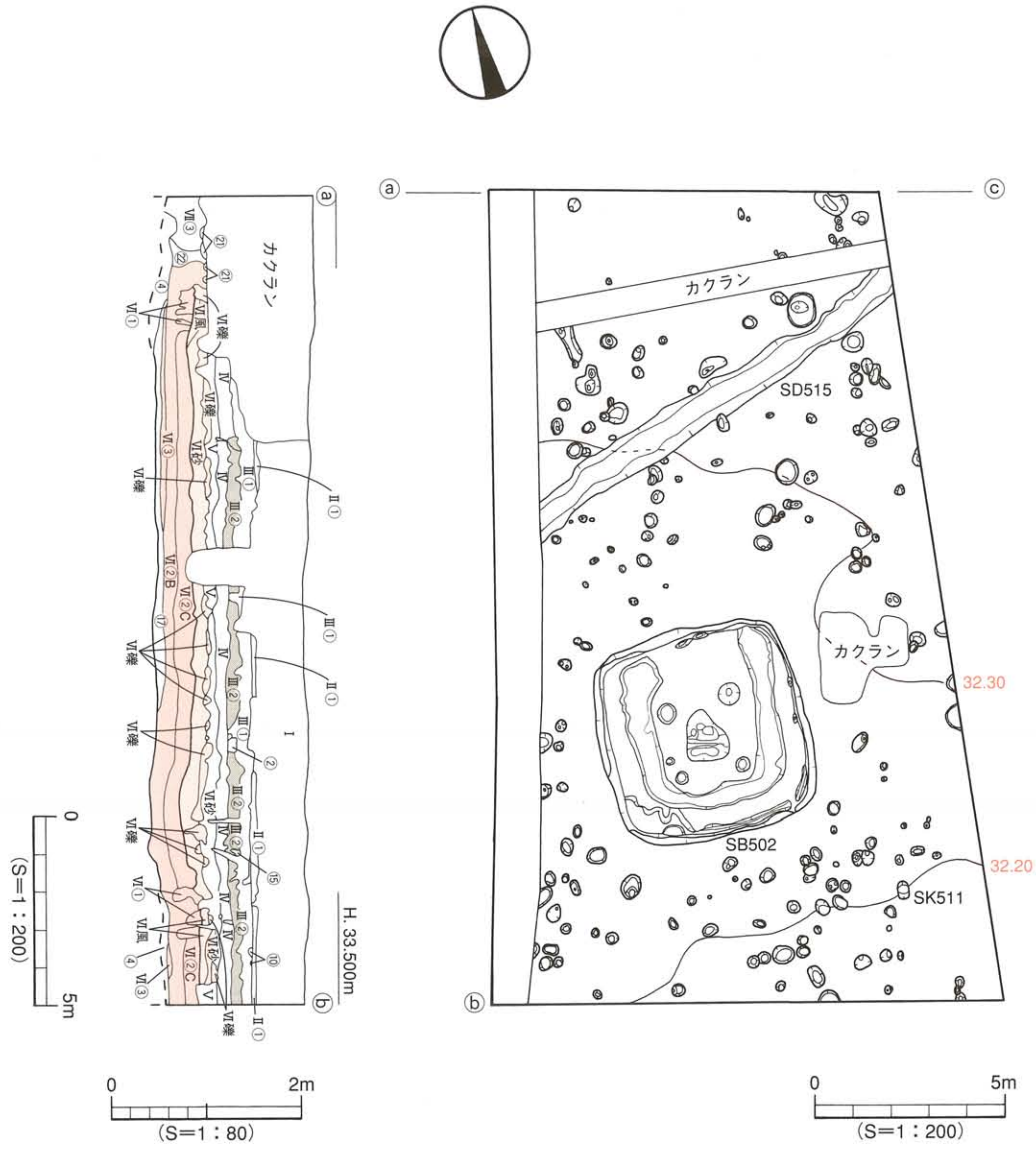
第Ⅵ②B層　乳褐色粘質土、調査区全域に堆積している。（14～30cm）

第Ⅵ②C層　乳黄褐色粘質土、調査区全域に堆積している。（15～20cm）

第Ⅵ③層　調査区のaトレンチで部分的に堆積が見られる。（2～4cm）

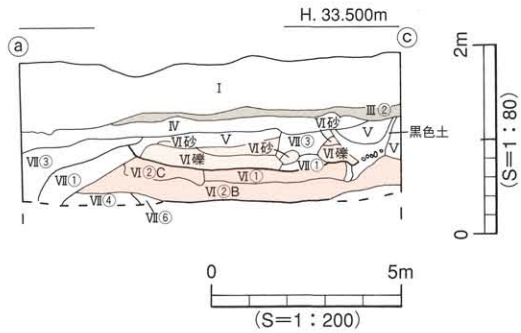
第Ⅶ⑥層　黄灰色砂質土（硬質）部分的に堆積が見られている。（7～10cm）

第142図　調査区位置図

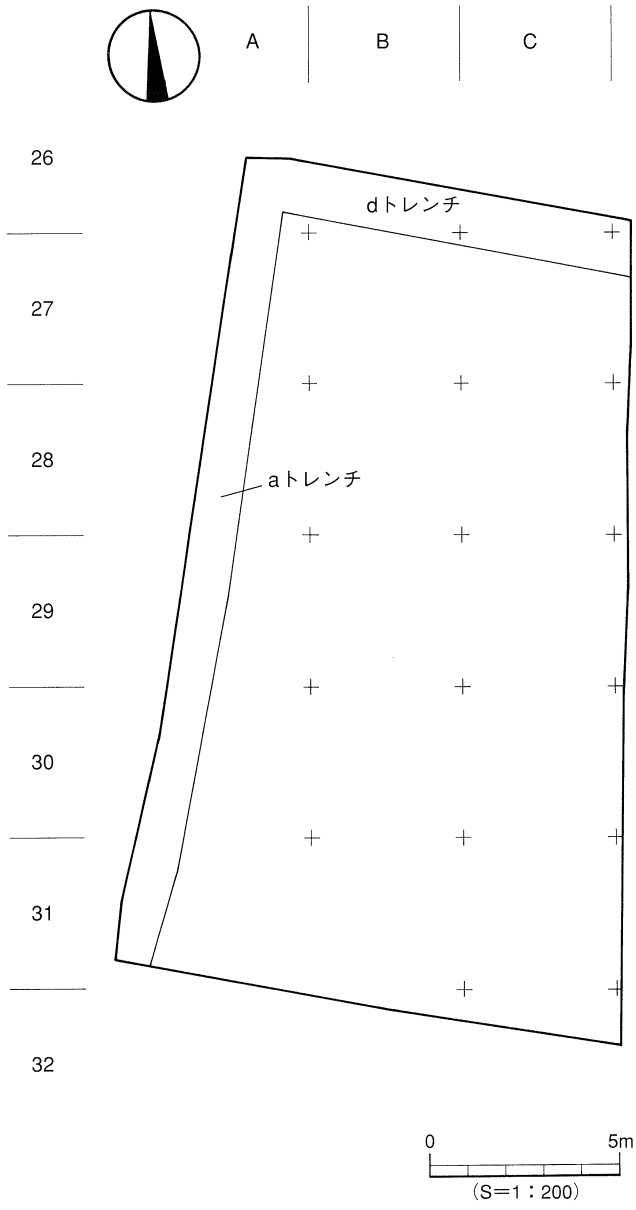


基本土層

Ⅰ	表土
Ⅱ①	黄灰色砂質土
Ⅱ②	黄灰色土（粘性が強い）
Ⅱ③	黒色土（灰色混じり）
Ⅲ①	黒色土
Ⅲ②	黒褐色土（アカホヤ火山灰）
Ⅳ	褐色砂質土
Ⅴ	暗褐色粘質土
Ⅵ砂	AT2次堆積
Ⅵ礫	AT2次堆積
Ⅵ風	AT2次堆積
Ⅵ①	黄褐色土（黄色細粒）
Ⅵ②A	黄褐色土（褐色細粒）
Ⅵ②B	乳褐色粘質土
Ⅵ②C	乳黄褐色粘質土
Ⅵ③	黄褐色土（黄色細粒）
	AT1次堆積
Ⅶ①	黄褐色砂質土
Ⅶ②	黄褐色砂質土
Ⅶ③	褐色砂質土
Ⅶ④	灰色砂
Ⅶ⑤	黄灰色粘土
Ⅶ⑥	黄白色砂質土（硬質）
Ⅶ⑦	乳灰褐色粘質土
Ⅶ⑧	暗茶褐色粘土
Ⅶ⑨	黄褐色砂礫
②	黒色粘質土
④	灰色砂
⑰	黄白色粘土
㉑	黒色粘土
㉒	黄灰色砂質土



第143図　遺構配置図



第144図　区 割 図

３．遺構と遺物

〔１〕弥生時代

本調査において弥生時代の竪穴式住居址1棟と土坑1基を確認した。第Ⅳ層上面での検出である。

１）竪穴式住居址（ＳＢ）

ＳＢ502調査工程

第Ⅲ層上面で遺構検出を行い、調査区中央部でわずかに土質の違いと、土色の違う部分に亀裂が入っているのを検出した。土色の違いが明確でないため、亀裂をたよりに検出を行った。調査区の写真撮影を行うため高所作業車で上方から見ると、住居との土色の違いが分かり5×5mの竪穴式住居址と

確認した。まず始めに、住居の埋土と深さを確認するために十字にベルトを残しトレンチを掘る。その結果、深さは70cmを測り、埋土は3層に分層できた。住居址内を北東より時計廻りに①～④に区分けし、掘り下げを行った。遺物は埋土①からはわずかの出土であるが、③区の埋土②より、まとまって土器が出土した。特に、大型の複合口縁壺が2個体分が上部より、押しつぶされた形で検出した。埋土③からは、弥生土器と砥石2点を検出した。この大型複合口縁壺と2種類の砥石が出土したことより、鍛冶遺構の可能性を考え金属探知器を使用して、鉄片などの検出につとめたが明確な金属反能はえられなかった。また、床面付近の土壌を採取し洗浄を行ったが、これも遺物の検出にはいたらなかった。次に遺物を取り上げ土層の測量を行いベルトを撤去し内部施設の検出を行った。内部施設は周壁溝と炉と主柱穴を検出した。周壁溝は床面を入念に調査したが部分的な検出である。炉は、住居の中央部で2基を検出した。炉は北側は浅く南側は深い作りである。主柱穴は4本を検出した。柱穴埋土と床面との土色が類似しており、貼り床がなされているのではと考え、十字にトレンチを掘った。その結果、床全体に硬く突き固めた厚さ10cmの貼り床を検出した。次に貼り床を掘り下げると、掘り方の床面より「U」字状の溝を検出した。この掘り方床面は基本土層の第Ⅵ層の火山灰層である。そして、この溝の底は砂の層まで達している。「U」字状溝の埋土のサンプルと住居の測量及び写真撮影を行い住居址の調査を終了する。

ＳＢ５０２（第145・146図、図版91～96）

調査区中央部のＡ29～Ｂ30区に位置する。平面形態は隅丸方形を呈する。規模は東西・南北ともに550cm、壁高60cmを測る。非常に残りのよい住居である。内部施設は炉・主柱穴・周壁溝・貼り床と貼り床の下より「U」字状の溝を検出した。

炉（第146図）は、住居の中央南よりで2基検出した。南側の炉（炉①）の平面形態は長方形である。規模は、長軸104cm、短軸42cm、深さ11cmを測る。断面形態はレンズ状で埋土は黒色土である。遺物は弥生土器片が出土している。北側の炉（炉②）の平面形態は隅丸三角形である。規模は長軸101cm、短軸74cm、深さ15cmを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は黒褐色土と茶褐色土である。遺物は炭化物と焼土が出土している。

主柱穴はＳＰ1～4の4本を検出した。平面形態は円形である。規模は径34～54cm、深さ36cmを測る。埋土は暗灰褐色土に灰色砂礫混である。この4本の柱穴より径15cmの柱痕を検出した。遺物は出土していない。

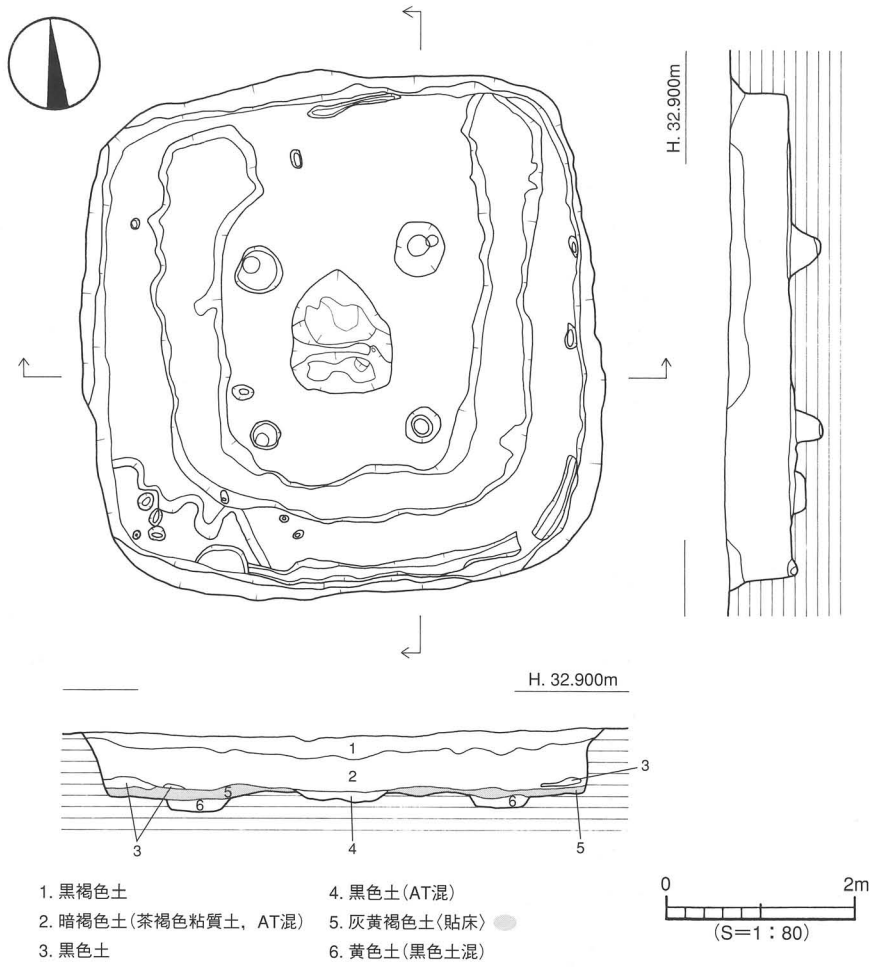
周壁溝は、北側と東側及び南側より部分的に検出した。規模は幅7～22cm、深さ5～12cmを測る。断面形態は「U」字状である。貼り床は、床面全域で厚さ10cmを測る。貼り床は灰褐色土に黄色土混じりの土を貼り付ける。

特種溝は、貼り床を掘り下げた後に壁より80cmの位置で検出した。平面形態は北側が開く形で「U」字状である。規模は、幅30～100cm、深さ14cmを測る。断面形態は皿状である。埋土は黄色土（ＡＴ火山灰に黒色土混じり）である。遺物は出土していない。

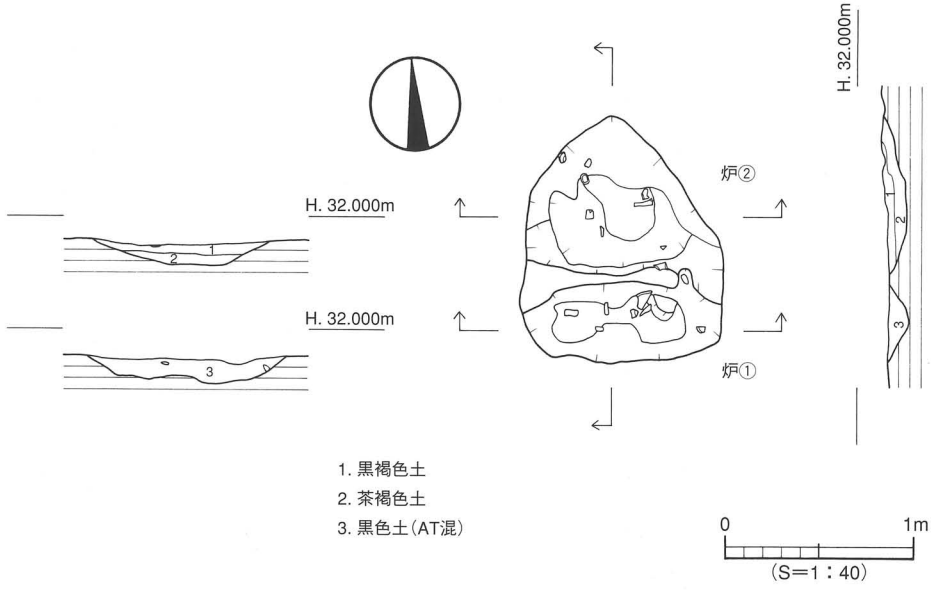
遺物は、埋土中及び床面から出土した。特に南西部の③区より多量に出土した。出土遺物は弥生土器の甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏形土器・砥石・石包丁・鉄鏃が出土している。

出土遺物（第148～154図、図版98～103）

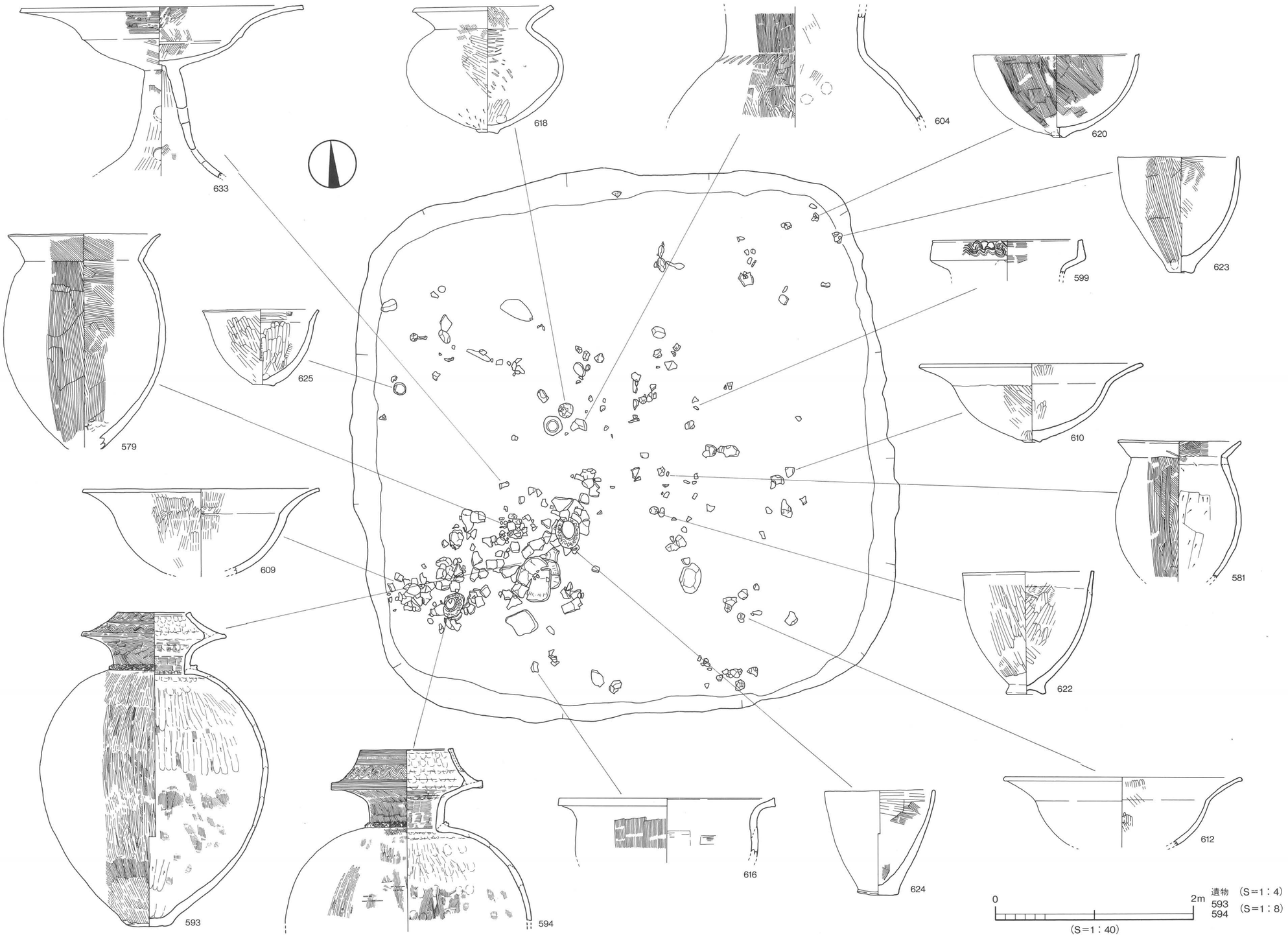
甕形土器（579～592）　579は底部を欠損するがほぼ完形品である。「く」字状に折れ曲がる口縁部をもつ。口縁端部は先細りし内外面ともハケメ調整が施される。底部付近は器壁が厚くなっている。



第145図　SB502測量図

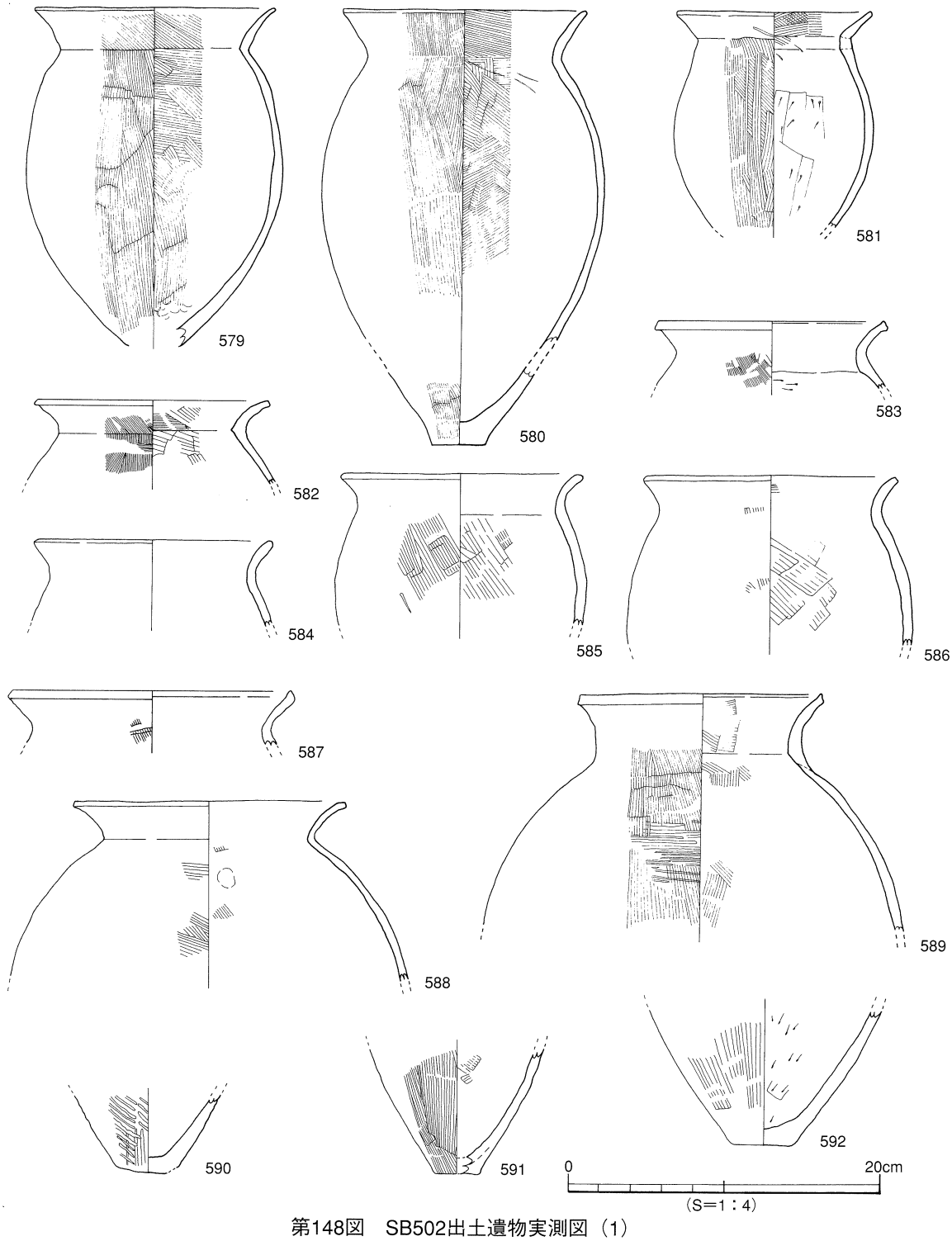


第146図　SB502炉測量図



第147図　SB502遺物出土測量図

580は一部欠損するがほぼ完形品である。口縁部は「く」字状に折れ曲がる口縁部である。底部は平底であり、調整は内外面ともハケメが施されている。581は小型甕で炉址からの出土である。口縁部は「く」字状に折れ曲がり、口端部は先細りし、丸く仕上げる。内面はケズリが施される。584・585・586は緩やかに外反する口縁部をもつ。584・585の口縁部は丸く仕上げる。586の口縁端部は「コ」字状に仕上げる。582・583・587～589は「く」字状に折れ曲がる口縁部をもつ。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。585の口縁端部はヨコナデにより上下に拡張する。587の口縁端部は上方に拡張する。内面はハケメ調整が施される。

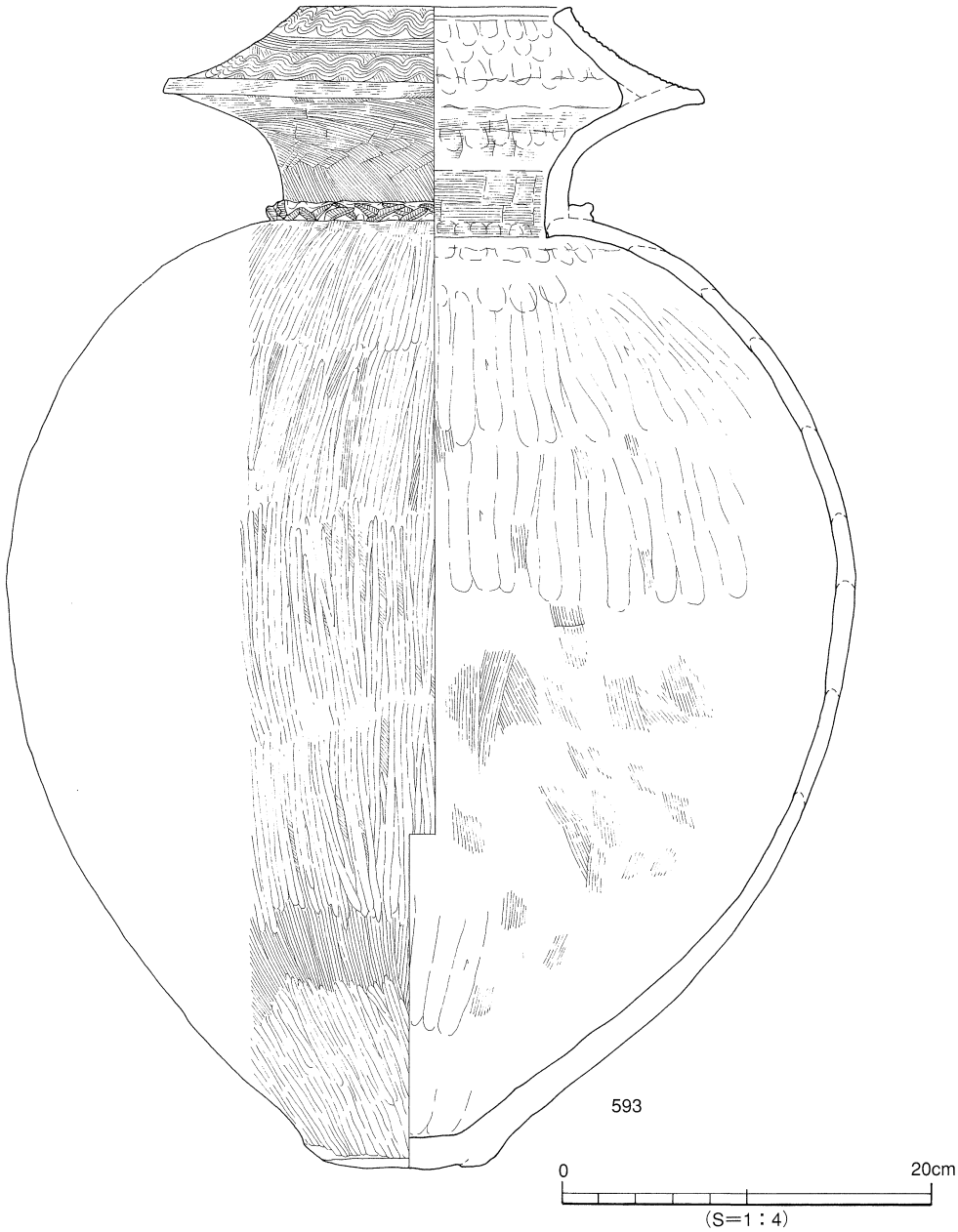


第148図　SB502出土遺物実測図（1）

590～592は甕の底部である。590は丸味のある平底である。外面にタタキが施されている。591は厚みのある平底で内外面ともハケメ調整が施される。592は平底で器壁が厚く、外面はハケメ、内面はケズリが施される。

壺形土器（593～608）

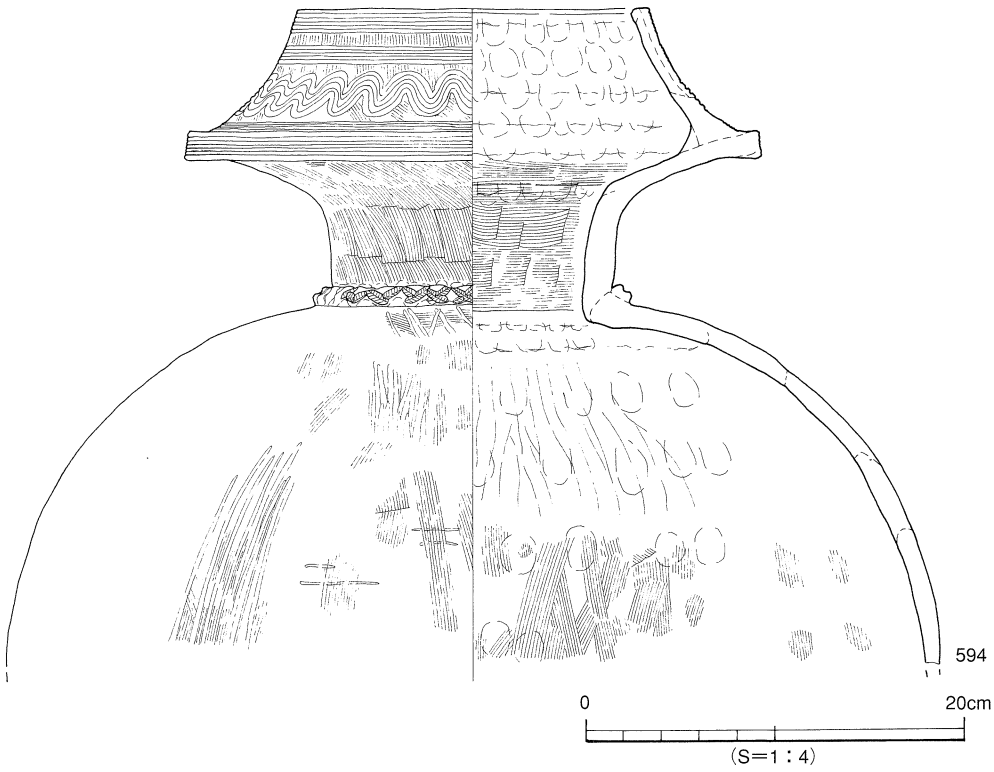
593～601は複合口縁壺。593・594は大型品。593は大きく内傾する拡張部に波状文と沈線文を施す。595は口縁部と接合部が、たが状を呈する。拡張部は内傾し、端部は「コ」字状に仕上げる。また拡張部に櫛描沈線が5・6条施される。596の拡張部は内傾し、端部は「コ」字状に仕上げる。内外面ともハケメ調整が施される。597の拡張部は短く大きく内傾し、端部は丸く仕上げる。調整は、磨滅のため不明である。598は拡張部に櫛描で波状文が施されている。内外面ともハケメ調整である。599の拡張部はわずかに内傾し、口縁端部は丸く仕上げる。拡張部に櫛描による波状文が5条施される。内面はハケ



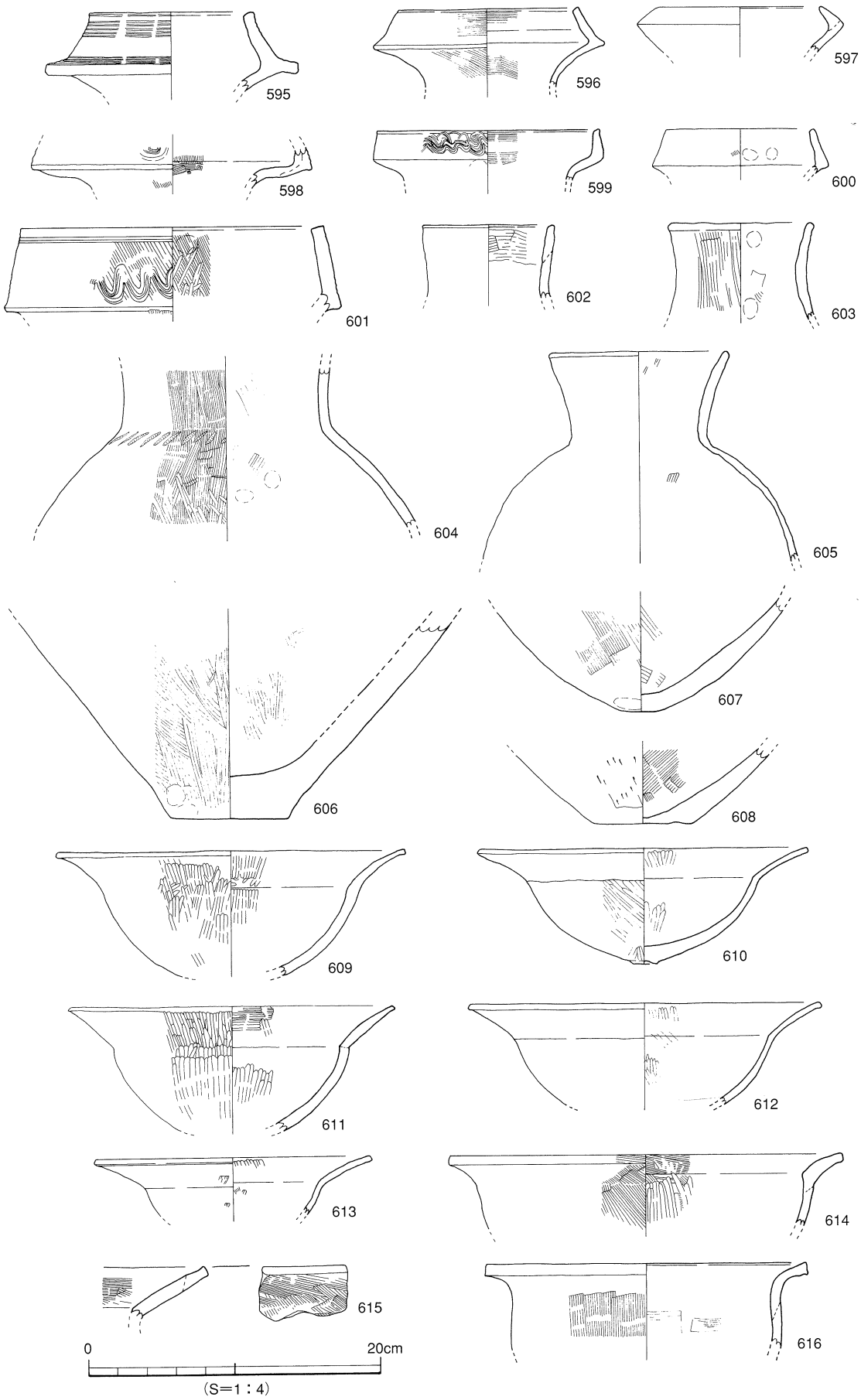
第149図　SB502出土遺物実測図（2）

メ調整である。600の口縁部はわずかに内傾し、口縁端部は丸く仕上げる。601は大形の複合口縁壺の口縁部片である。口縁部はゆるく内傾し端部は「コ」字状に仕上げる。拡張部に櫛描による沈線3条、中央部に波状文3条施されている。602は長頸壺の口縁部片である。口縁部はわずかに外傾し端部は丸く仕上げる。603の口縁部はわずかに外湾し、端部は丸く仕上げる。604・605は長頸壺でともに大型品である。604は頸部に列点文が施されており、外面はハケメ調整後、ヘラミガキが施されている。605は、わずかに外反する口縁部をもち端部は丸く仕上げる。607は丸味をおびた平底である。器壁が厚く内外面ともハケメ調整が施される。608は平底である。外面ヘラケズリで内面はハケメ調整である。606は大型品の底部である。器壁は厚い平底である。内外面ともハケメ調整を施す。

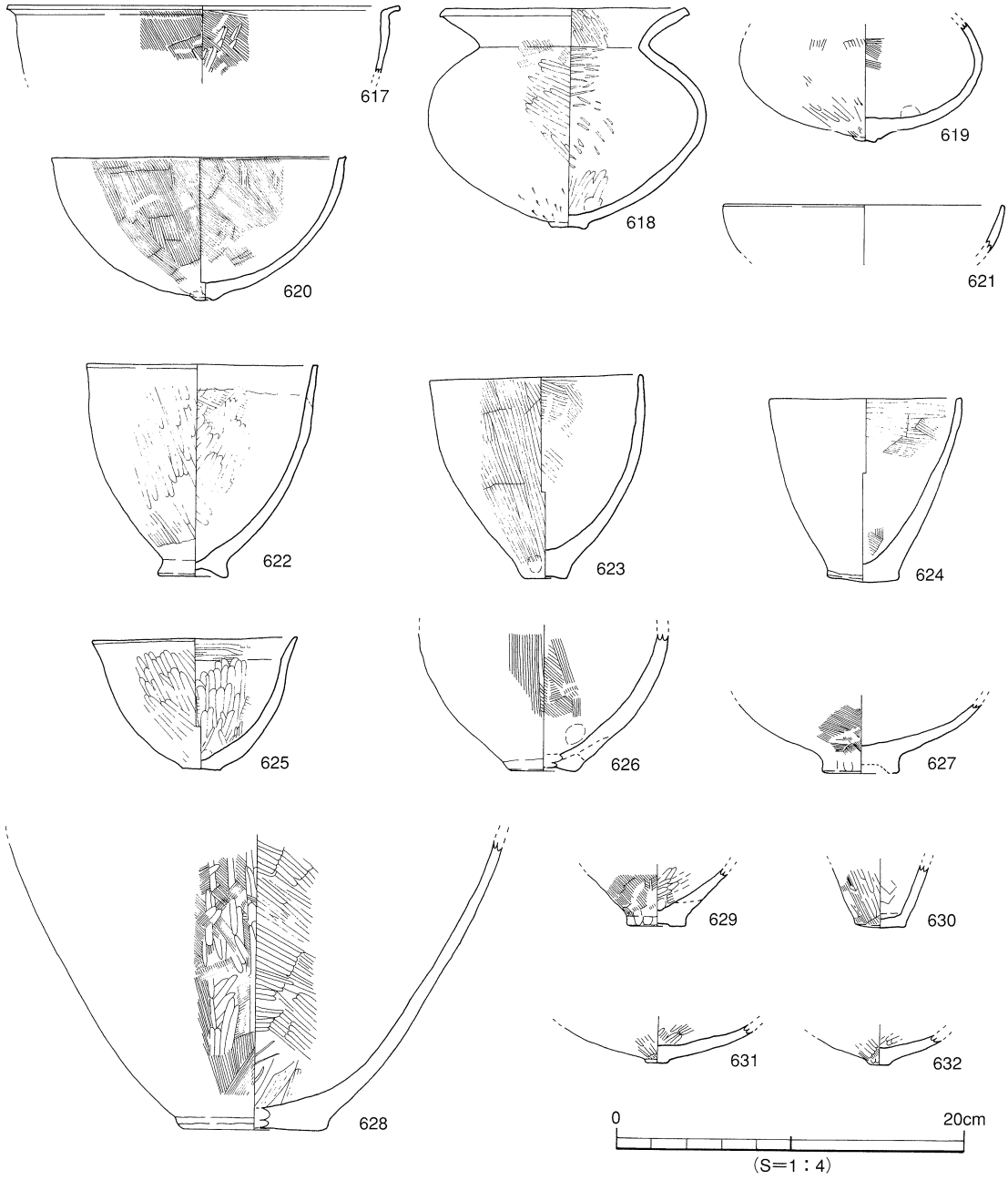
鉢形土器（609～632）　609は底部を欠損するがほぼ完形の鉢である。ゆるやかに外反する口縁部で端面は丸く仕上げる。610は完形品で内外面ともヘラミガキが施されている。611・612は底部を欠損するがほぼ完形品でゆるやかに外反する口縁部をもつ。内外面ともヘラミガキが施される。609～613は類似した形態をしている。616・617は短い口縁部をもつ。調整はハケ後ヘラミガキが施されている。617は端部付近でわずかに外反し、端部は先細りし丸く仕上げる。内外面はヘラミガキ調整である。618は口縁部が大きく外反し端部はヨコナデにより下方へ拡張する。底部はボタン状を呈する。619は口縁部が一部欠損するほぼ完形品である。底部はボタン状に突出する平底である。622～624は直口口縁である。620は完形品で底部はボタン状に突出しわずかに上げ底である。内外面ともハケメ調整である。620～625は直口口縁で小型品である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸く仕上げる。平底の底部である。外面はナデで内面はハケメ調整が施される。622はくびれの上げ底をもち、内外面とも丁寧にヘラミガキが施されている。623は直口口縁の鉢で小型品である。口縁部はやや内湾し、口縁端部は先細りである。外面ハケメ調整、内面はハケメ調整後ナデが施されている。



第150図　SB502出土遺物実測図（3）



第151図　SB502出土遺物実測図（4）



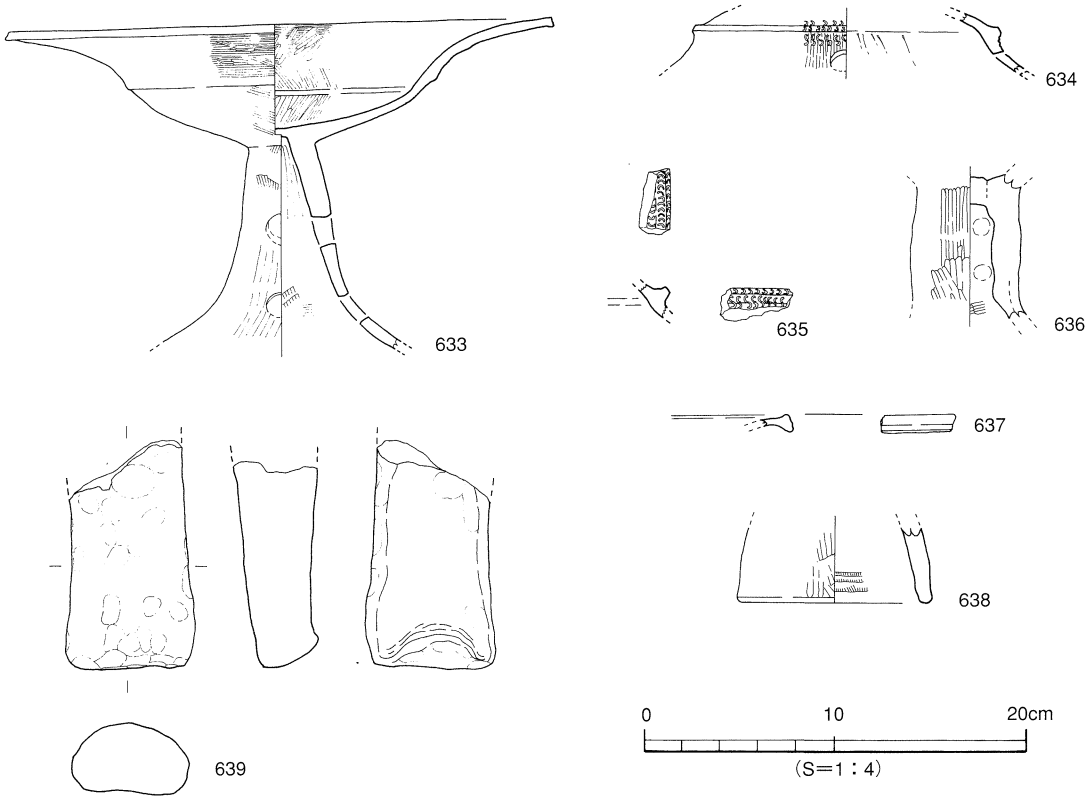
第152図　SB502出土遺物実測図（5）

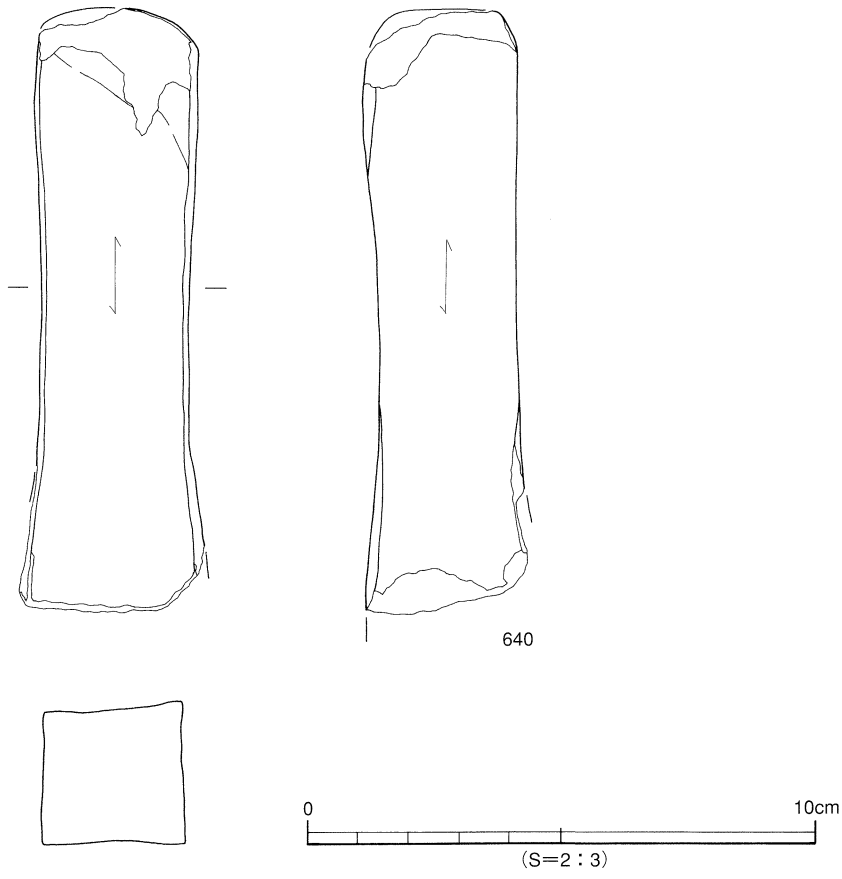
高坏形土器（633～637）

634は裾部に円孔と段をもち外反し、段部に半截竹管文を施す。外面にヘラミガキ、内面はナデ調整が施されている。633は柱部から口縁部である。4方向2段の円孔が穿たれている。外面と坏部内面はヘラミガキ調整。636は膨らみをもつ柱部。器壁が厚い。637は口縁部小片である。

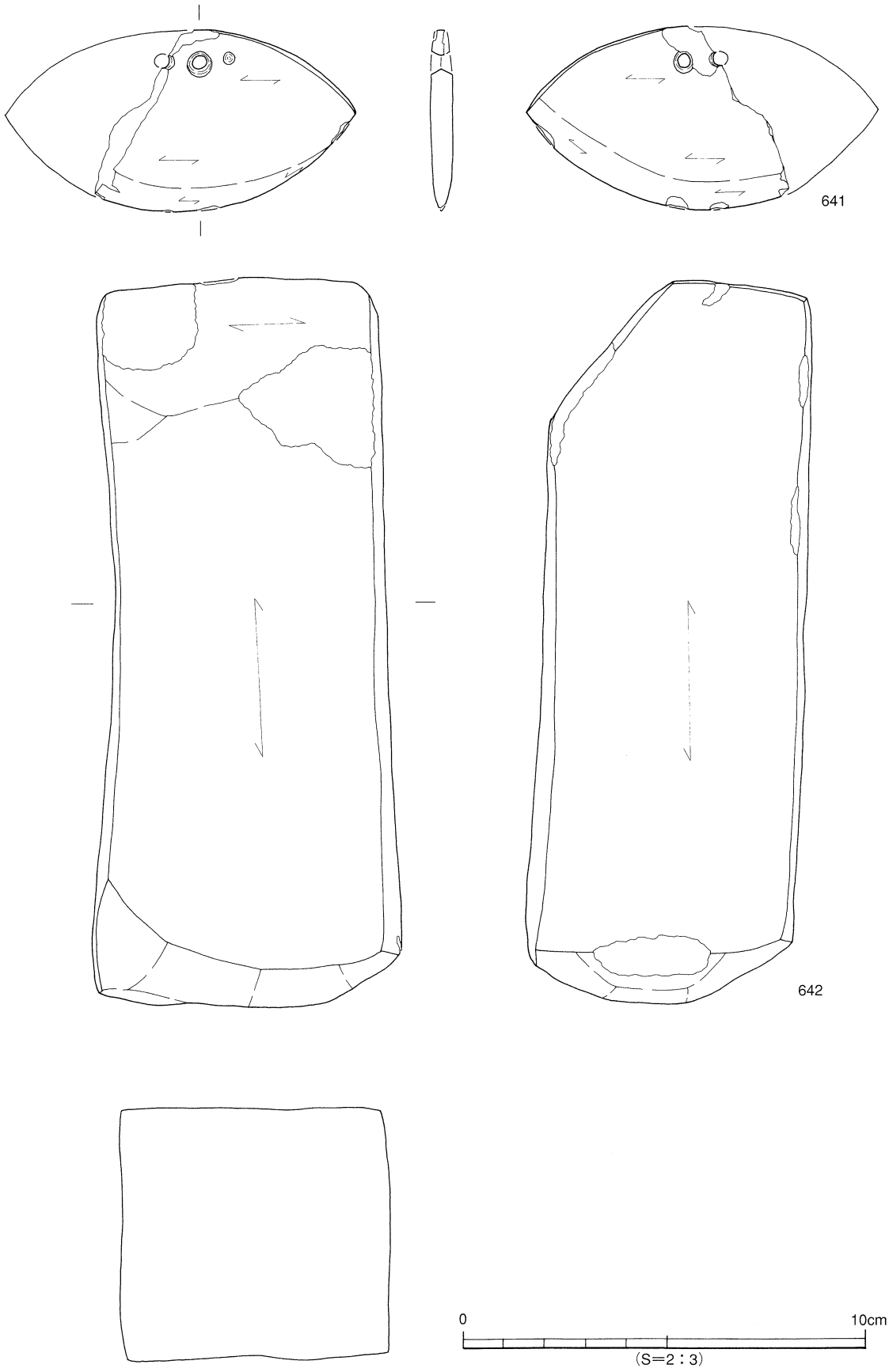
638は支脚の脚部。639は不明土製品。641は杏仁形石庖丁。研磨丁寧。640・642は大小の砥石。

時期：出土遺物の形態より、弥生時代後期後葉～末に埋没したと考える。





第153図　SB502出土遺物実測図（6）



第154図　SB502出土遺物実測図（7）

２）土坑（ＳＫ）

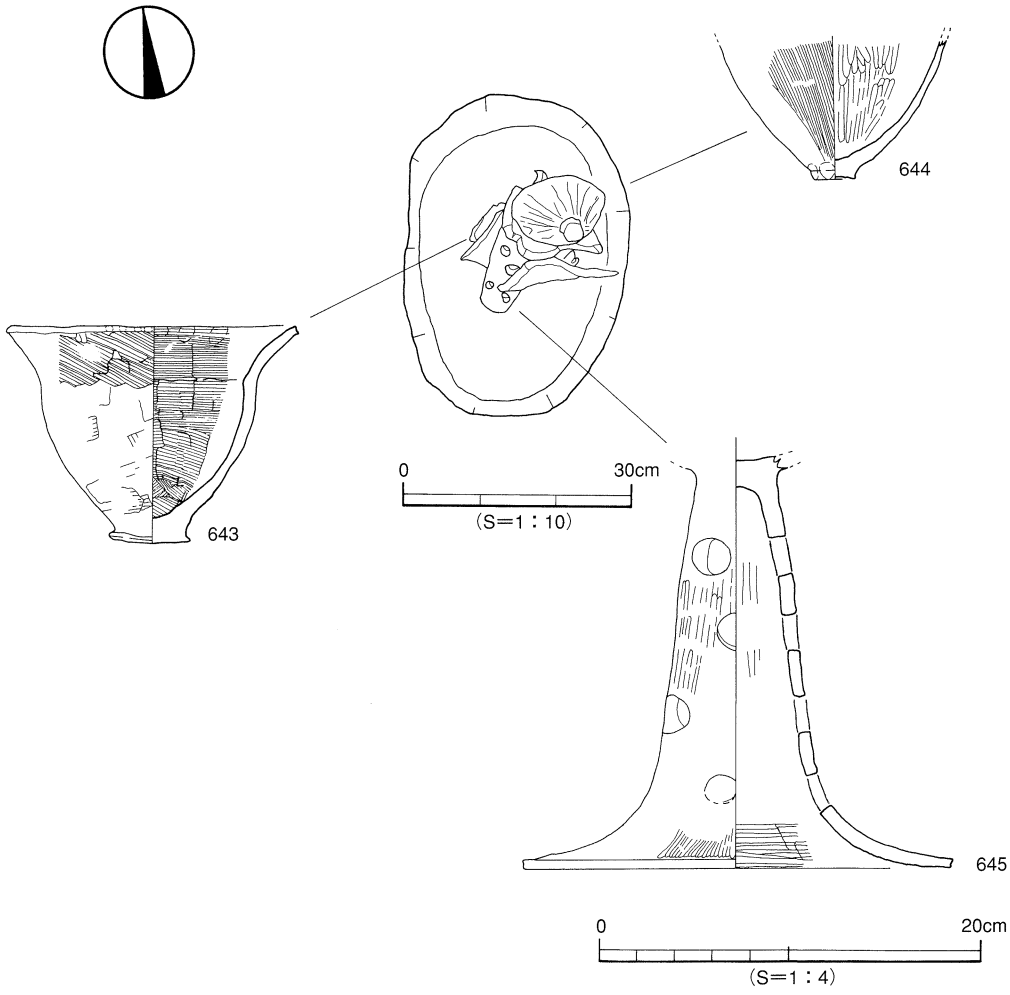
ＳＫ５１１（第155図、図版97）

調査区南東のＣ31区で検出した。ＳＢ502から南東に3.2ｍの位置である。平面形態は楕円形である。規模は長軸50㎝、短軸27㎝、深さ32㎝を測る。断面形態は「Ｕ」字状である。埋土は黒褐色土である。出土遺物は、鉢形土器、高坏形土器が出土している。

出土遺物（第155図、図版103）

643・644は鉢形土器。643は外反口縁、端部は「コ」字状を呈する。底部はわずかにくびれ突出する。644は、やや突出する平底。645は高坏形土器の脚部である。裾部はゆるやかに開き柱部に4段の円孔が穿たれている。外面ヘラミガキ、内面ヨコナデ調整が施されている。

時期：出土遺物の鉢の形態より弥生時代後期後葉～末に埋没したと考える。



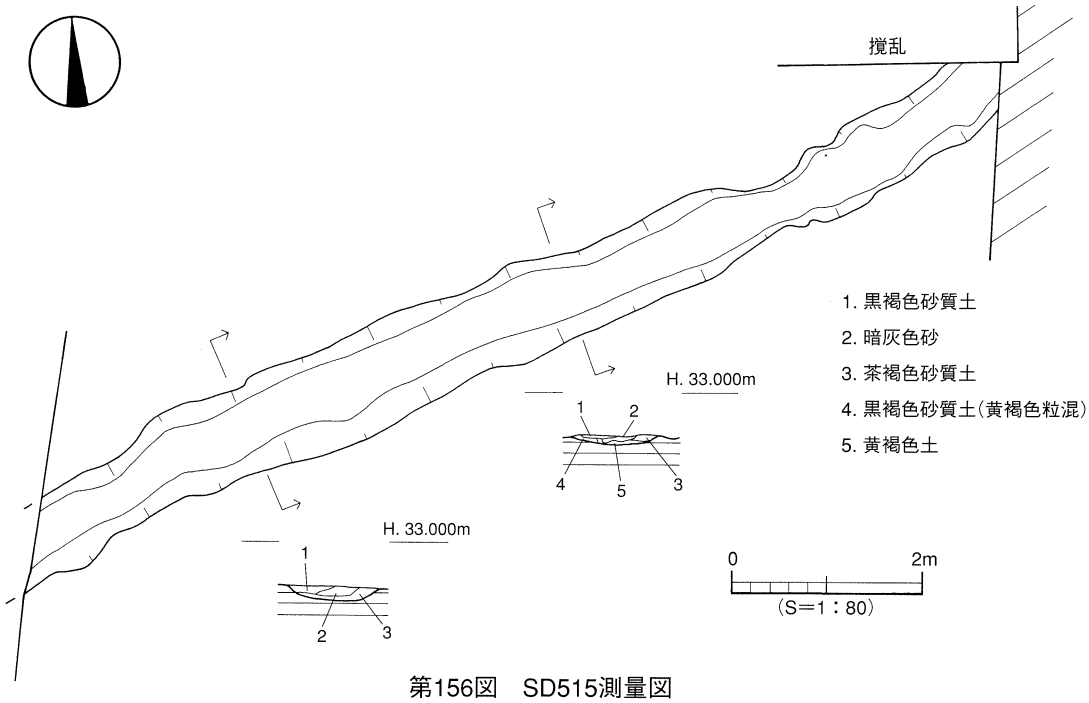
第155図　SK511測量図・出土遺物実測図

3）溝（ＳＤ）

ＳＤ５１５（第156図）

調査区北部のＡ28～Ｄ27区に位置する。規模は、幅93㎝、深さ7㎝、検出長11ｍを測る。断面形態は、レンズ状を呈する。埋土は黒褐色砂質土である。遺物は出土していない。

時期：遺物が出土しておらず西壁の土層と埋土より弥生時代後期末以降に埋没したと考える。

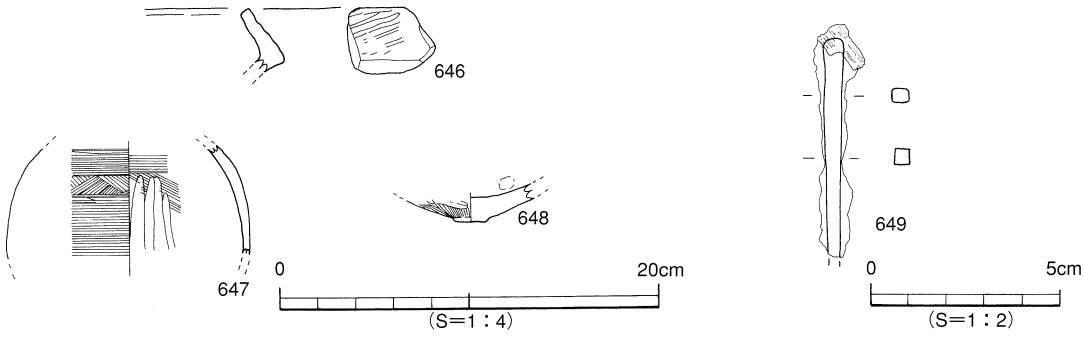


第156図　SD515測量図

4）柱穴（ＳＰ）（第157図、図版103）

本調査区で168基を検出した。埋土により2種類に分けられる。ａ類：黒褐色土を土層にもつもの159基は、調査区全域で検出した。ＳＰ160より弥生土器が出土した。ｂ類：黒色土を埋土にもつもの9基は調査区に散在する。

647は胴部片である。外面は櫛描による沈線が施される。



第157図　SP及びその他の出土遺物実測図

４．小　結

本調査区からは、竪穴式住居址1棟、土坑1基、溝1条、柱穴170基を確認した。なかでも注目されるのは、竪穴式住居址ＳＢ502である。住居址の掘方床面からは平面形態が「Ｕ」字状の溝が確認された。「Ｕ」字状の溝は筋違Ｃ遺跡に類例がある。床面の湿気抜きや排水を目的にしたものではないかと思われる。

ＳＫ511からは鉢形土器と高坏形土器の出土があり、祭祀的な意味がある土坑と考えている。

柱穴168基の時期は他の遺構の埋土を参考にすると、ａ類・ｂ類ともに弥生時代後期後葉以降の柱穴と考える。

以上より、本調査区では、竪穴式住居址の内部構造と祭祀形態を研究する上での資料を得ることになった。

遺構・遺物一覧　－凡例－

（１）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
　　遺構一覧は志賀、遺物観察表は相原、田崎が作成した。

（２）遺物観察表の各掲載について。
　　法　量　欄　　（　）：復元推定値
　　形態・施文欄　　土器の各部位名称を略記。
　　例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。
　　胎土・焼成欄　　胎土欄では混和剤を略記した。
　　例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
　　例）砂・長（1～4）、多→「1～4㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。
　　焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表97　竪穴式住居址　一覧

竪穴(SB)	時　期	平面形	規　模 長さ(長径)×幅(短径)×深さ(m)	主柱穴(本)	内部施設 高床	土坑	炉	カマド	周壁溝	備　考
502	弥生後期後葉～末	隅丸方形	5.50×5.50×0.70	4			◎		○	貼り床。［Ｕ］字状溝。

◎副次的炉

表98　溝　一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
515	A28～D27	レンズ状	11.05×0.93×0.07	黒褐色砂質土		弥生後期末以降	

表99　土坑　一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
511	C31	楕円形	U字状	0.50×0.27×0.32	黒褐色土	弥生	弥生後期末	

表100　SB502 出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
579	甕	口径(15.2) 残高 21.6	底部が欠損するが、ほぼ完形品。口縁部は「く」字状を呈する。端部は先細りする。内面に明瞭な稜をもつ。	ハケ(10～11本/1.5cm)	㈣ハケ(10～11本/1.5cm) ㈣指頭痕	暗茶色 茶色	石・長(1～2) ◎		
580	甕	口径 15.5 底径 3.4	ほぼ完形。口縁部は「く」字状を呈する。端部は丸くおさめる。胴部やや上部に張りをもつ。底部は平底。	ハケ(7本/cm)	ハケ(7本/cm)	暗茶色 (一部黒色)	石・長(1～2) ◎	煤付着	
581	甕	口径(12.2) 残高 13.8	小型の甕。一部欠損するがほぼ完形。口縁は外反し、端部は先細り。胴部の張りはやや下方にある。接合痕顕著。	㈡指頭痕 ㈣ハケ(8～9本/cm)	㈡ハケ(8～9本/cm) ㈣ケズリ	乳茶色 茶黄色	石・長(1～3) ◎		
582	甕	口径(14.6) 残高 5.2	口縁部片。口縁端部は「く」字状を呈する。端部は「コ」字状を呈し、やや下方へ拡張し、口縁部内面に明瞭な稜をもつ。	㈡ヨコナデ ㈣ハケ(15本/cm)	㈡ハケ(10本/cm)→ヨコナデ ㈣ハケ(5本/cm)	灰茶色 灰色	石・長(1～5) ◎		
583	甕	口径(14.3) 残高 4.2	口縁部片。口縁端部はナデにより拡張され、下方に張り出す。	㈡ヨコナデ ㈣ハケ(18本/cm)→ヘラミガキ	㈡ヨコナデ ㈣ヘラケズリ	乳灰茶色	石(1) ◎		
584	甕	口径(14.8) 残高 5.2	口縁部片。ゆるやかに折れ曲がる口縁部をもつ。端部は丸くおさめる。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	乳茶色	石・長(1～6) ◎		
585	甕	口径(15.1) 残高 9.7	ゆるやかに折れ曲がる口縁部をもつ。端部は丸くおさめる。口縁内面に稜をもつ。	㈡ヨコナデ ㈣ハケ(7～10本/cm)	㈡ヨコナデ ㈣ハケ(7本/1.5cm)(4本/0.5cm)	乳茶色	石・長(1～5) ◎		
586	甕	口径(15.7) 残高 10.7	ゆるやかに折れ曲がる口縁部をもつ。端部は「コ」字状を呈する。	㈡ヨコナデ ㈣ハケ(7本/cm)	ハケ(6本/1.5cm)	乳茶色	石・長(1～5) ◎		
587	甕	口径(17.7) 残高 3.4	口縁部片。口縁端部はヨコナデにより上方に拡張する。	ハケ(7～8本/cm)	ヨコナデ	灰茶色	石・長(1～3) ◎		
588	甕	口径(17.3) 残高 11.2	口縁部は大きく外反する。端部は丸味のある「コ」字状。胴部が張る。	㈡ヨコナデ ㈣ハケ(6～7本/cm)	㈡ヨコナデ ㈣ハケ(8本/cm)	乳茶色	石・長(1～3) ◎		
589	甕	口径 15.4 残高 15.1	ゆるやかに折れ曲がる口縁部をもつ。端部は「コ」字状を呈しヨコナデにより上方へ拡張する。	㈡ヨコナデ ㈣タタキ→ハケ(8本/1.2cm)	ハケ(6～7本/cm)	乳茶黄色 茶色	石・長(1～3) ◎		
590	甕	底径 (3.0) 残高 4.0	丸味のある平底。	タタキ	ナデ	灰色 乳茶色	石・長(1～3) ◎		
591	甕	底径 (2.7) 残高 8.0	厚みのある平底。胴部は直線的に外反し内湾する。	ハケ(8本/cm)	ハケ(7本/cm)→ナデ	赤茶色 (一部黒色) 乳茶色	石・長(1～5) ◎	煤付着	
592	甕	底径 3.8 残高 8.6	平底。器壁が厚い。	ハケ(6本/1.3cm)→ナデ	ヘラケズリ	乳灰茶色 黒色	石・長(1～5) ○	黒斑	
593	壺	口径 14.4 底径 9.6 器高 63.2	複合口縁。 ㈱櫛描波状文7条、横沈線文7条、波状文7条。	㈱ハケ(10～12本/cm) ㈱ハケ ㈱ハケ→ミガキ ㈱ナデ	㈱ヨコナデ ㈱ハケ(10～12本/cm) ㈱ハケ→ナデ上げ	乳茶色	石・長(1～3) ◎		
594	壺	口径 18.1 残高 34.9	複合口縁。 ㈱櫛描横沈線文6条2段、波状文6条、横沈線文6条。 ㈱櫛描横沈線文6条。	㈱ハケ(9～10本/cm) ㈱ヨコナデ ㈱ハケ ㈱タタキ→ハケ→ミガキ	㈱ヨコナデ ㈱ハケ(9～10本/cm) ㈱上ナデ ㈱下ハケ→ナデ	乳茶色	石・長(1～4) ◎		100
595	壺	口径(11.0) 残高 5.5	複合口縁壺。口縁部と拡張部の接合部たが状。内傾する拡張部の端部は「コ」字状を呈する。沈線6条、5条施す。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	茶黄色	石・長(1～2) ○		
596	壺	口径 12.2 残高 5.4	口縁拡張部は弓状にそる。口縁端部は「コ」字状を呈する。	㈱ハケ(10本/cm) ㈱ヨコナデ ㈱ハケ	㈱ハケ(6本/0.5cm) ㈱ハケ(15～16本/cm)	暗茶色	石・長(1～5) ○		100
597	壺	口径(10.7) 残高 3.1	複合口縁壺。拡張部は大きく内傾し、短い。端部は先細りで丸くおさめる。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	乳茶色	石・長(1) ○		

SB502 出土遺物観察表　土製品

（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
598	壺	残高 2.4	複合口縁壺。拡張部に櫛描きで波状文が施されている。	㊍ヨコナデ ㊎ハケ(10本/cm)	ハケ(10本/cm)	乳茶色	石・長(1~3) ◎		
599	壺	口径(15.0) 残高 3.5	複合口縁壺。拡張部はわずかに内傾する。口縁端部は丸くおさめる。拡張部に櫛描による5条の波状文。	㊍ヨコナデ ㊎指頭痕	ハケ(10本/cm)	乳灰茶色	石・長(1~3) ◎		100
600	壺	口径(10.0) 残高 3.0	複合口縁壺。拡張部はわずかに内傾する。口縁端部は丸くおさめる。	磨滅のため不明 わずかにハケ(5本/0.5cm)	ヨコナデ 指頭痕	乳灰茶色	石・長(1) ◎		
601	壺	口径(20.5) 残高 5.9	複合口縁壺。大型品。拡張部はゆるやかに内傾する。上部に櫛描による沈線3条。中部に波状文3条。	㊤ヨコナデ ㊥ハケ(6~7本/cm) ㊦ヘラミガキ	ハケ(7~8本/cm)→ヘラミガキ 指頭痕	茶色 黒色	石・長(1~5) ◎		100
602	壺	口径 (8.8) 残高 4.9	長頸壺の口縁部片。粘土接合痕が残る。端部は「コ」字状に仕上げる。	ヨコナデ	ハケ(6~7本/cm)	乳灰茶色	石・長(1~2) ◎		
603	壺	口径 (9.7) 残高 6.3	長頸壺の口縁部片。直立気味に立ち上がり、わずかに外反する。端部は丸く仕上げる。	ハケ(7本/1.3cm)	板状工具によるナデ→ハケ(4本/0.5cm)	乳茶色	石・長(1~2) ◎		
604	壺	残高 10.5	長頸壺。直立気味にのびる頸部。頸部に列点文が施されている。大型品。	ハケ(7~8本/cm)→ヘラミガキ	磨滅のため不明だが部分的にハケ(7本/cm)が残る。	茶色	石・長(1~2) ◎		100
605	壺	口径(11.9) 残高 14.1	長頸壺。わずかに外反する口縁部をもつ。端部は丸くおさめる。	磨滅のため不明	磨滅のため不明だが部分的にハケ(5本/0.6cm)が残る。	茶色 黒色	石・長(1~3) ◎		
606	甕	底径 8.0 残高 13.9	大型品。平底。器壁厚い。	ハケ(4~5本/cm)	㊋ハケ(4~5本/cm) ㊌ナデ	茶色 (一部黒色) 黒色	石・長(8) ○		100
607	壺	底径 (1.9) 残高 6.9	丸味をおびた平底。器壁厚い。	ハケ(12本/2cm) 指頭痕	ハケ(5本/cm)	暗茶色 (一部黒色) 黒色	石・長(1~3) ○		
608	壺	底径 (6.6) 残高 4.6	平底。器壁厚い。	ヘラケズリ	ハケ(8本/cm)	茶色 (一部黒色) 灰黄色	石・長(1~2) ◎		
609	鉢	口径(23.4) 残高 8.5	外反口縁。端部はわずかに下方へ拡張。不明瞭な稜をもつ。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	暗茶色	石・長(1~5) ◎		
610	鉢	口径(22.3) 残高 7.9	外反口縁。端部は丸くおさめる。内外面共、不明瞭な稜を残す。ボタン状の平底で、わずかに上げ底。	㊐ヨコナデ ㊋ヘラミガキ	ヘラミガキ	乳茶色	石・長(1~4) ◎		101
611	鉢	口径(22.1) 残高 8.5	端部はヨコナデによりわずかに上方に拡張している。内面に稜をもつ。	ヘラミガキ	㊐ヨコナデ→ヘラミガキ ㊋ヘラミガキ	暗赤茶色 (一部黒色) 暗赤茶色	石・長(1~4) ◎		101
612	鉢	口径 23.5 残高 6.9	口縁部はゆるやかに外反し、端部はヨコナデによりわずかに下方に拡張している。	㊐ヨコナデ 他は磨滅の為不明	ヘラミガキ	灰茶色	石・長(1~3) ◎		
613	鉢	口径(18.6) 残高 4.0	口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸くおさめる。内面に稜をもつ。	㊐ヨコナデ ㊋ハケ(6本/0.6cm)	㊐ヘラミガキ ㊋ハケ(3~4本/0.3cm)	乳茶色 (一部黒色)	石・長(1~5) ◎		
614	鉢	口径(26.5) 残高 5.0	外反口縁。端部は「コ」字状。内面に稜をもつ。	ハケ(8~10本/cm)	ハケ(10本/cm)→ヘラミガキ	乳茶色	石・長(1~2) ○		101
615	鉢	残高 3.5	口縁部小片。端部は「コ」字状を呈する。	㊐上ヨコナデ ㊐下ハケ(8本/cm)	㊐上ヨコナデ ㊐下ハケ(5~6本/0.5cm)	茶色 茶色 (一部黒色)	石・長(1~3) ◎		
616	鉢	口径(21.5) 残高 6.0	口縁部片。外反口縁。端部はヨコナデにより上下に拡張する。	㊐ヨコナデ ㊋ハケ(12本/1.2cm)	㊐ヨコナデ ㊋ハケ(10本/cm)	乳茶黄色	石・長(1~5) ◎		101

SB502 出土遺物観察表　土製品

（3）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
617	鉢	口径(22.3) 残高 3.9	短く外反する口縁部をもつ。器壁うすい。内面に明瞭な稜をもつ。	㊐ヨコナデ ㊋ハケ(9～10本/cm)→ヘラミガキ	㊐ヨコナデ ㊋ハケ(9～10本/cm)→ヘラミガキ	暗赤茶色 (一部黒色)	石・長(1～2) ◎		101
618	鉢	口径 13.6 底径 2.0 器高 12.9	口縁部は大きく外反し、端部はヨコナデにより下方へ拡張する。胴部中位は著しく張る。	㊐ヨコナデ ㊍ハケ(10本/cm) ㊋上ヘラミガキ ㊋下ヘラケズリ	㊐ヘラミガキ ㊋ナデ ㊎ヘラミガキ	赤茶色 (一部黒色) 赤茶色	石・長(1～3) ◎	黒斑	101
619	鉢	底径 1.2 残高 7.0	小型品。口縁部を欠損する。胴部中位が著しく張る。ボタン状に突出する平底をもつ。	ハケ(10本/cm)→ヘラミガキ	ハケ(10本/cm) 指頭痕	乳灰茶色 (一部黒色) 乳灰茶色	石・長(1～4) ◎	黒斑	101
620	鉢	口径 16.8 残高 8.3	直口口縁。端部はわずかに外反し突出する。底部はボタン状に突出し、わずかに上げ底である。	ハケ(7本/0.7cm) (10本/1.1cm)	ハケ(7本/0.7cm) (10本/1.1cm)	茶色 茶色 (一部黒色)	石(1～3) ◎		101
621	鉢	口径(16.1) 残高 2.8	口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。端部は先細りで丸くおさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳灰茶色	長(1～2) ◎		
622	鉢	口径(13.3) 底径 4.0 器高 12.3	小型品。直口口縁。口縁端部は先細りで丸くおさめる。胴上部に張りをもつ。底部はくびれて上げ底である。	㊐ヨコナデ ㊋ヘラミガキ ㊎上ハケ(7本/cm) ㊎下ヨコナデ	㊐ヨコナデ ㊋ハケ(6本/cm)→ヘラミガキ	乳暗茶色	石・長(1～4) ◎	黒斑	102
623	鉢	口径 12.3 底径 2.4 器高 11.7	完成品。小型の直口口縁。口縁部はやや内湾している。端部は先細り。胴部上方に張りをもつ。突出する平底。	㊐㊋ハケ(7本/1.3cm) ㊎指頭痕	ハケ(9本/1.2cm)→ナデ	茶色 (一部黒色) 茶色	石・長(1～5) ◎	黒斑	102
624	鉢	口径 11.1 底径 4.2 器高 10.6	小型品。口縁部が一部欠損している。ほぼ完形。直口の口縁部をもつ。端部は丸い。平底である。	ナデ	ハケ(9～10本/cm)	茶色 (一部黒色) 茶色	石・長(1～5) ◎	黒斑	102
625	鉢	口径 12.8 底径 2.1 器高 7.7	小型品。口縁部ゆるやかに外反する。端部は先細りし丸くおさめる。平底。	㊐ヨコナデ ㊋ヘラミガキ	㊐ハケ(8本/1.5cm) ㊋ハケ→ヘラミガキ	乳灰茶色 (一部黒色)	石・長(1～4) ◎	黒斑	102
626	鉢	底径 (4.0) 残高 8.0	丸味をおびた平底。器壁厚い。	ハケ(8本/cm)	ハケ(8本/cm)	乳赤茶色 (一部黒色) 黒色	石・長(1～2) ○		
627	鉢	底径 (4.4) 残高 4.0	わずかにくびれる突出した上げ底。	ハケ(15～16本/cm)→ヘラミガキ	磨滅のため不明	黒灰色 乳茶色	石・長(1～3) ◎		102
628	鉢	底径 (8.5) 残高 16.6	大型品。丸味をおびる平底。器壁厚い。	㊋ハケ(10本/cm)→ヘラミガキ ㊎板状工具による強いナデ	㊋ハケ(4～5本/cm) ㊎板状工具による強いナデ	乳茶色 (一部黒色) 茶色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
629	鉢	底径 3.3 残高 3.0	突出した平底でわずかに上げ底である。底部を指でつまみあげたあとが残る。	ハケ(9本/0.8cm)→ヘラミガキ	ヘラミガキ	茶色	石・長(1～3) ◎		
630	甕	底径 2.9 残高 3.5	平底。内面板状工具で強くなでる。	㊎ヘラミガキ ㊋ハケ(10本/cm)→ヘラミガキ	板ナデ(ケズリ風)	茶色 (一部黒色) 茶色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
631	鉢	口径 (2.3) 残高 1.9	ボタン状に突出した平底。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	乳茶色	石・長(1) ◎		
632	鉢	口径 (1.2) 残高 1.5	ボタン状に突出した平底。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	茶色	石・長(1) ◎		
633	高坏	口径 28.2 底径 11.9 器高 17.3	大きく広がる口縁部。屈曲部は明瞭な段を有する。脚部はラッパ状に広がる。4方の円孔が2段残る。	㊐ヨコナデ ㊍上ハケ(12本/cm)→ヘラミガキ ㊍下ハケ(6本/cm) ㊋ヘラミガキ	㊍上ハケ(10～12本/cm)→ヘラミガキ ㊍中ハケ ㊍下ハケ→ヘラミガキ ㊋絞り痕 ㊏ハケ(6本/cm)	乳茶色	石・長(1～3) ◎		102
634	高坏	残高 3.1	脚部。裾部は段をもって外反する。半截竹管文4段。円孔。	ヘラミガキ	ナデ	赤茶色	石・長(1) ◎		102
635	高坏	残高 1.8	裾部小片。段をもって外反する。半截竹管文。	磨滅のため不明	ヨコナデ	赤茶色	石・長(1) ◎		102

SB502 出土遺物観察表　土製品　（4）

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
636	高坏	残高　7.7	脚柱。膨らみをもつ柱部。	ヘラミガキ	ハケ(5本/0.6cm) 指頭痕	暗茶色	石・長(1~3) ◎		
637	高坏	残高　0.9	口縁部小片。端部はヨコナデにより上下に拡張する。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶色	長(1) ◎		
638	支脚	口径 (9.8) 残高　4.0	脚部端面丸くおさめる。	ヘラナデ	ハケ(10本/cm)	灰茶色	石・長(1~2) ◎		
639	不明	長 12.0 幅　6.6 厚　4.4	棒状であるが端部は指おさえによりやや凹む。断面は半円形に近い。	指おさえ ナデ		暗茶色	石・長(1) ◎	重量 340.0 g	102

表101　SB502 出土遺物観察表　石製品

番号	器　種	残　存	材　質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
640	砥　石	ほぼ完形	砂岩系？	11.9	2.9	2.8	197.2		103
641	石 庖 丁	約2／3	結晶片岩	5.7	4.5	0.5	22.0		102
642	砥　石	ほぼ完形	砂岩系？	18.2	7.6	6.3	1610.0		103

表102　SK511 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
643	鉢	口径 14.9 底径　4.0 器高 11.4	小型品。外反口縁の鉢。端部は「コ」字状を呈する。わずかにくびれ突出する平底である。	㊀ハケ(9~11本/0.6cm) ㊁タタキ→ナデ	ハケ(14本/2cm)	茶色 (一部黒色) 茶色	石・長(1~3) 金 ◎	黒斑	103
644	鉢	底径　2.2 残高　7.2	やや突出ぎみの小さな平底。	㊂ハケ(7~8本/cm) ㊃ナデ	ミガキ	茶色 (一部黒色) 赤茶色	石・長(1~3) 金 ◎	黒斑	
645	高坏	底径 22.2 残高 21.8	脚部、裾部はゆるやかに開く。 柱部に4段に円孔を穿つ。	㊄ヘラミガキ ㊅ヨコナデ	㊄上 絞り痕 ㊄下 磨滅の為不明 ㊆ハケ(6本/2.2cm)	赤茶色	石・長(1~4) ◎	黒斑	103

表103　SP 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
646	壺	残高　3.5	複合口縁壺。口縁部片。拡張部は大きく内傾する。端部は「コ」字状を呈する。	タタキ	ヨコナデ	乳灰茶色	長(1~2) ◎		103
647	壺	残高　5.8	櫛描横沈線部15条、斜線充填の三角文、櫛描横沈線文26条。	施文の為不明	ハケ(10本/cm)→工具によるナデ上げ	赤茶色 黒色	石・長(1) 金 ◎		103
648	鉢	底径 (1.6) 残高　1.9	ボタン状に突出する底部をもつ。底部に指頭痕あり。	㊇ハケ(6~7本/0.5cm) →ヘラミガキ ㊈ヘラミガキ	ナデ 指頭痕	黒色 灰色	石・長(1) ◎		

表104　その他の 出土遺物観察表　金属製品

番号	器　種	残　存	材　質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
649	工　具　？	先端部を欠く	鉄　製	5.7	0.5	0.4	5.2		103

第12章

束本遺跡4次

－6区Aの調査－

第12章　　6区Aの調査

1．調査の経緯

調査区は調査以前は既存宅地であった。調査対象面積は530㎡であるが排土置き場の都合上、最終的な発掘調査面積は約140㎡となった。以下、調査工程を略記する。

1994（平成6）年6月9日より調査区の西壁に土層観察用のトレンチを掘り、土層確認後地表下1.1mまで掘り下げた。排土は調査地外へ搬出した。6月13日より作業員を増員し遺構検出を実施する。つづいて、柱穴の掘り下げを開始する。7月11日、遺構の測量をすべて完了する。7月12日、出土遺物や調査用具等を撤去する（野外調査終了）。

2．層　位（第159図、図版105）

本遺跡は、松山平野東部に広がる石手川左岸の低位段丘上、標高33.40mに立地する。

基本層位は、第Ⅰ層造成土、第Ⅱ層水田床土、第Ⅲ層黒色土、第Ⅳ層黄褐色土、第Ⅴ層褐色粘質土、第Ⅵ層乳褐色粘質土、第Ⅶ層淡褐色砂質土である。第Ⅰ層～第Ⅳ層までは調査区全域を調査した。第Ⅳ層以下は西壁トレンチ（aトレンチ）と東西トレンチ（bトレンチ）で調査を行った。

第Ⅰ層は調査区全域で厚さを76.5cm測る。

第Ⅱ層は調査区全域で厚さを2～8.5cm測る。

第Ⅲ層は粘性の違いにより2層に分けられる。第Ⅲ①層は黒色土で厚さ2～9.5cmの堆積であり、調査区中央～南にかけて検出した。第Ⅲ②層は黒灰色土のアカホヤ火山灰で、厚さ2～12.5cmの堆積を測る。調査区中央北側と南側で検出した。

第Ⅳ層は褐色土で厚さ2～18.5cmの堆積であり、調査区全域で検出した。第Ⅳ層上面で遺構を検出。

第Ⅴ層は褐色粘質土で厚さ2～23cmの堆積である。a・bトレンチ全域で検出した。

第Ⅵ層はＡＴ火山灰層である。分析の結果をもとに1次堆積層と2次堆積層のものに分層し、さらに2次堆積層は砂・礫・風、1次堆積層は3層（①・②・③）に細分層した。

第Ⅵ層砂は1～2㎜大の砂粒が混じり、厚さ2～17.5cmの堆積である。aトレンチで検出したが、中央～南側は、2ヶ所途切れているところがある。

第Ⅵ層礫は2～5㎜大の砂粒が混じり、厚さ2～20cmの堆積である。a・bトレンチで検出し、中央北側が一部途切れる。

第Ⅵ層風は黄色に小石・礫混じり、厚さ2～6cmの堆積である。aトレンチ中央から南と、bトレンチで検出し、西側はブロック状になっている。

第Ⅵ①層は黄褐色を呈し、厚さ4～30cmの堆積である。aトレンチ中央とbトレンチ中央から東にかけてブロック状で検出した。

第Ⅵ②層は色調に若干の違いがみられ、乳暗褐色粘質土と乳褐色粘質土と乳黄褐色粘質土からなる。乳暗褐色粘質土は厚さ5～28cmの堆積である。aトレンチの中央から南側にかけてブロック状で検出

第158図　調査区位置図

した。乳褐色粘質土は厚さ5.5～9.5cmの堆積である。a・bトレンチの全域で検出した。乳黄褐色粘質土は厚さ2～12.5cmの堆積である。aトレンチ中央から南側とbトレンチ西側で検出した。

第Ⅵ③層は淡黄粗砂混じりを呈し、厚さ2～6cmの堆積である。aトレンチ全域とbトレンチ西側で検出した。

第Ⅶ層は黄白色粘土（硬質）、灰色砂礫、淡褐色砂質土（白色砂粒多し）からなる。

黄白色粘土（硬質）は厚さ1～6cmの堆積である。aトレンチ中央とbトレンチ西側で検出した。灰色砂礫は厚さ20～30cmの堆積である。bトレンチの全域で確認した。淡黄褐色砂質土（白色砂粒多し）は厚さ15～36cmの堆積である。aトレンチの全域で検出した。

第Ⅳ層上面で柱穴27基、倒木址1基を検出した。第Ⅳ層上面の標高を測量すると、調査区北東から南西へ、漸次緩傾斜をなしている。

なお、調査にあたり調査区内を4m四方のグリットに分けた。グリットは西から東へA・B・C、南から北へ1・2・3とし、第160図に示した。

3．遺構と遺物

1）柱穴（第160図）

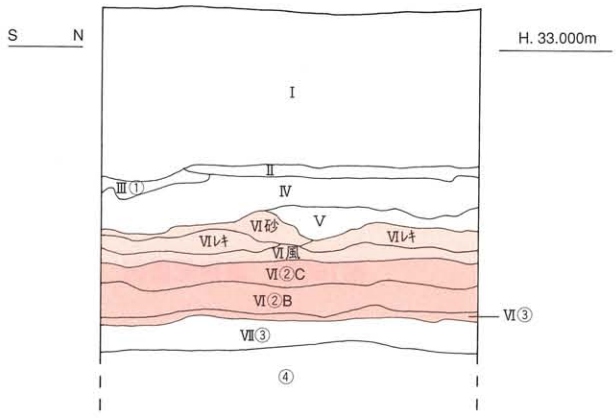
第Ⅳ層上面で確認された柱穴は27基である。埋土の違いにより黒色土、灰色土、灰色土に黒色土が混じるもの、茶色土の4つに分けられる。柱穴からの出土遺物がないため、時期はいずれも特定できない。

ⅰ黒色土を埋土にもつ柱穴は17基である。調査区全域A1～C3区で検出した。柱穴の平面形態は、円形・楕円形・方形・不整形である。規模は径15～47cm、深さ3～15cmを測る。

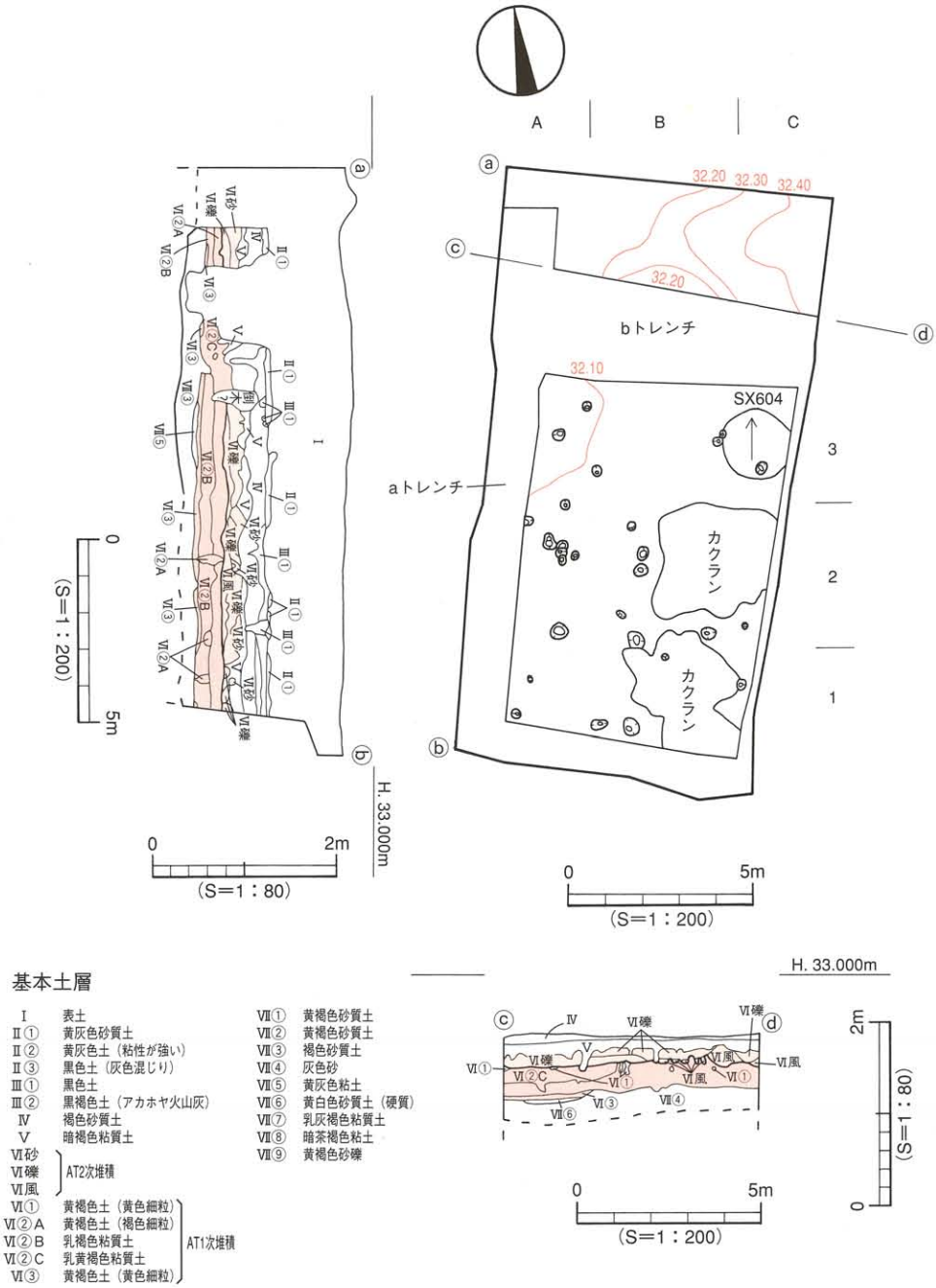
ⅱ灰色土を埋土にもつ柱穴は7基である。

調査区A1～B2区に位置し、柱穴の平面形態は円形・楕円形・方形である。規模は径15.5～46.5cm、深さ13～27cmを測る。遺物は出土しなかった。

ⅲ灰色土に黒色土を埋土にもつ柱穴は2基である。



第159図　土層柱状図



基本土層

Ⅰ	表土	Ⅶ①	黄褐色砂質土
Ⅱ①	黄灰色砂質土	Ⅶ②	黄褐色砂質土
Ⅱ②	黄灰色土（粘性が強い）	Ⅶ③	褐色砂質土
Ⅱ③	黒色土（灰色混じり）	Ⅶ④	灰色砂
Ⅲ①	黒色土	Ⅶ⑤	黄灰色粘土
Ⅲ②	黒褐色土（アカホヤ火山灰）	Ⅶ⑥	黄白色砂質土（硬質）
Ⅳ	褐色砂質土	Ⅶ⑦	乳灰褐色粘質土
Ⅴ	暗褐色粘質土	Ⅶ⑧	暗茶褐色粘土
Ⅵ砂	AT2次堆積	Ⅶ⑨	黄褐色砂礫
Ⅵ礫			
Ⅵ風			
Ⅵ①	黄褐色土（黄色細粒）		
Ⅵ②A	黄褐色土（褐色細粒）		
Ⅵ②B	乳褐色粘質土		
Ⅵ②C	乳黄褐色粘質土		
Ⅵ③	黄褐色土（黄色細粒）		

AT1次堆積

第160図　遺構配置図

調査区Ａ2～Ｂ3区に位置し、柱穴の平面形態は円形・半円形で、規模は径15.5～18.5cm、深さ3～6cmを測る。

ⅳ茶色土を埋土にもつ柱穴は1基である。

調査区Ａ2区に位置し、柱穴の平面形態は円形で、規模は長軸32cm、短軸20cm、深さ18cmを測る。

2）倒木（ＳＸ）

ＳＸ６０４

調査区北東部のＢ3～Ｃ3区に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。平面形態は円形で、規模は長軸192cm、短軸172cmである。倒壊方向は北である。今回の調査では、時間的な関係より平面形態と規模及び倒壊方向の記録にとどめた。

4．小　結

（1）層　位

土壌分析により地表下80～95cm及び110～130cmの間で2種類の火山灰を確認している。前者はアカホヤ火山灰（6,300年前）、後者はＡＴ火山灰（約22,000～25,000年前）である。6区Ａは6区Ｂと5区Ｃの間にあり、アカホヤ火山灰とＡＴ火山灰とが両地区と同じ堆積状況であることを確認した。

（2）遺　構

6区Ａでは、第Ⅳ層上面で柱穴27基、倒木址1基を検出した。遺構からは遺物が出土しなかったため時期は不明である。ただし、他の調査地と比較検討すれば埋土により時期特定は可能である（第16章まとめ参照）。

束本遺跡4次調査地の中では、弥生時代及び中世の集落跡が確認されているが、6区Ａでは住居址などが検出されなかった。よって、当地区は、同時代において居住空間として使用されなかった場所と考えられる。

第13章

束本遺跡4次

－6区Bの調査－

第１３章　　６区Ｂの調査

１．調査の経緯

調査区は北から南へ向かって6区画に区分した南方部に位置し、調査以前は果樹園であった為、部分的に撹乱を受けている。調査対象面積は720㎡であるが、調査区周縁の安全対策及び排土置き場を確保したため最終的な調査面積は215㎡となった。1994年（平成6）5月16日から重機を使用して、調査区西壁に土層観察用のトレンチ（ａトレンチ）を掘り土層を確認後、地表下約50cmまで掘り下げた。5月25日よりⅢ①層を人力で掘り下げ、6月6日に第Ⅳ層上面にて遺構を検出した。検出遺構は竪穴式住居址1棟、溝1条、土坑5基、柱穴125基等である。6月7日より遺構の掘り下げを行い。遺物の取り上げ及び測量と写真の撮影を行った。その後、東西にトレンチ（ｂトレンチ）を掘りＡＴ火山灰の堆積状況の測量と写真撮影を行い調査を終了する。

２．層　位（第４・163図）

本調査地は石手川左岸の標高32,500ｍ前後に立地する。基本層位は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層床土、第Ⅲ①層黒色土、第Ⅲ②層黒褐色土、（アカホヤ火山灰）、第Ⅳ層茶褐色土、第Ⅴ層褐色粘質土、第Ⅵ層ＡＴ火山灰（2次堆積）、第Ⅵ層砂、第Ⅵ層礫、第Ⅵ層風ＡＴ火山灰（1次堆積）、第Ⅵ層①、第Ⅵ層②乳黄褐色粘質土、第Ⅵ層③、第Ⅶ層灰色砂礫、灰褐色砂質土、第Ⅶ層黄褐色粘質土、第Ⅷ層砂礫層である。

Ⅳ層以下の堆積状況は、ａトレンチとｂトレンチの土層での確認である。

第Ⅰ層　近現代の造成工事及び農耕による客土である（20～120cm）。

第Ⅱ層　水田耕作に伴う床土である（15～20cm）。

第Ⅲ①層　調査区全域に厚さ10～20cm堆積する。

第Ⅲ②層　（アカホヤ火山灰）調査区全域に5～10cmの堆積である。

第Ⅳ層　調査区中央以南の全域で7～18cmの堆積である。

第Ⅴ層　第Ⅳ層に比べて粘性が強く、径2～3㎜の砂礫を多く含む。調査区全域に7～30cmの堆積である。

第Ⅵ層　ＡＴ火山灰は1次堆積と2次堆積に分層し、さらに2次堆積は砂、礫、風１次堆積は①・②・③の3種類に細分した。

第Ⅵ層砂　ａトレンチ全域で部分的に5～15cmの堆積である。北から南へ緩傾斜している。

第Ⅵ層礫　ａトレンチの北端で厚さ7～15cmの堆積を測る。ほぼ水平に堆積している。

第Ⅵ層風　ａ・ｂトレンチとも、厚さ8～25cmの堆積である。ｂトレンチで東から西へ、ａトレンチで北から南へ緩傾斜している。

第Ⅵ①層　ａ・ｂトレンチとも厚さ15～30cmの堆積を測るが、ａトレンチでは、部分的にとぎれる。ａトレンチは北から南へ、ｂトレンチでは東から西へ緩傾斜している。

第Ⅵ②Ａ層　ｂトレンチの中央部で5～12cmの堆積を測り、東から西へ緩傾斜している。

第161図　調査区位置図

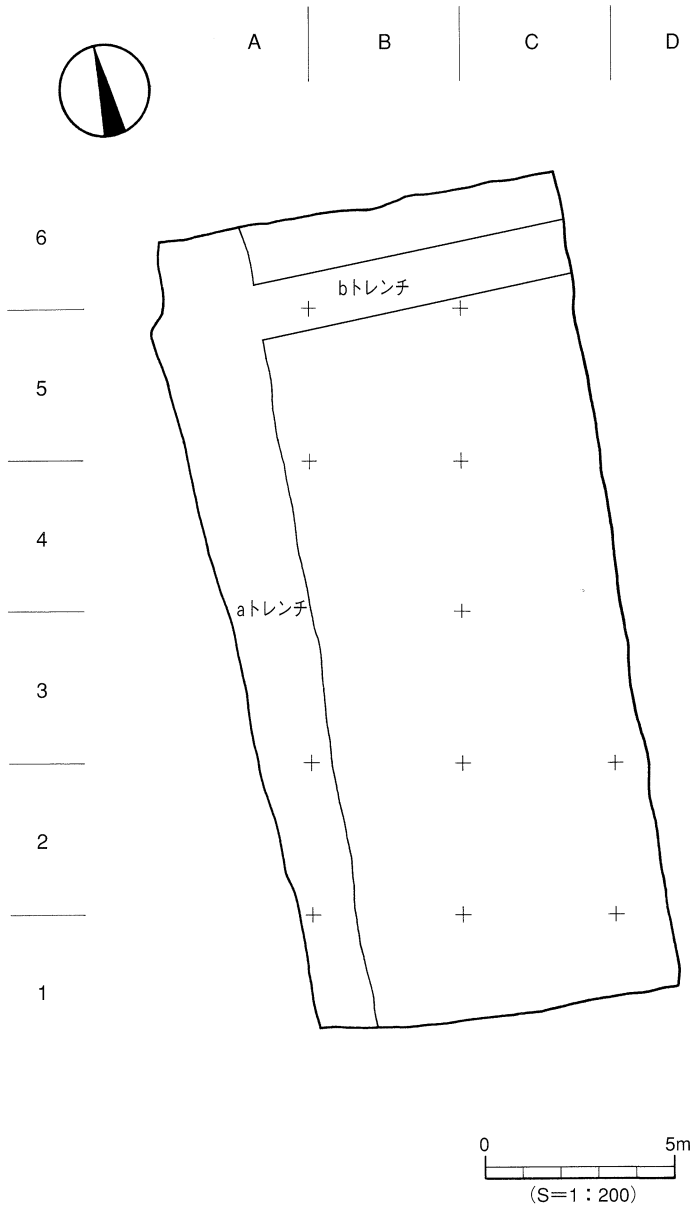
第Ⅵ③層　a・bトレンチとも3～10cmと薄い堆積である。aトレンチで北から南へ緩傾斜している。

第Ⅶ①層灰褐色砂質土　bトレンチ全域で堆積が見られる。

第Ⅶ②C層乳黄褐色粘質土　aトレンチで部分的な堆積である。

第Ⅶ④層灰色砂礫　2～5cmの小礫を含む。aトレンチ全域で8～40cmの堆積を測る。bトレンチで20～40cmの堆積を測り、東から西へ緩傾斜している。

第Ⅶ⑥層灰褐色砂質土　bトレンチの東で堆積が見られる。



第162図　区 割 図

基本土層

Ⅰ	表土	Ⅶ①	黄褐色砂質土
Ⅱ①	黄灰色砂質土	Ⅶ②	黄褐色砂質土
Ⅱ②	黄灰色土（粘性が強い）	Ⅶ③	褐色砂質土
Ⅱ③	黒色土（灰色混じり）	Ⅶ④	灰色砂
Ⅲ①	黒色土	Ⅶ⑤	黄灰色粘土
Ⅲ②	黒褐色土（アカホヤ火山灰）	Ⅶ⑥	黄白色砂質土（硬質）
Ⅳ	褐色砂質土	Ⅶ⑦	乳灰褐色粘質土
Ⅴ	暗褐色粘質土	Ⅶ⑧	暗茶褐色粘土
Ⅵ砂	AT2次堆積	Ⅶ⑨	黄褐色砂礫
Ⅵ礫			
Ⅵ風			
Ⅵ①	黄褐色土（黄色細粒）	AT1次堆積	
Ⅵ②A	黄褐色土（褐色細粒）		
Ⅵ②B	乳褐色粘質土		
Ⅵ②C	乳黄褐色粘質土		
Ⅵ③	黄褐色土（黄色細粒）		

第163図　遺構配置図

第Ⅶ層淡黄褐色砂質土　bトレンチ全域で厚さ16～44cmの堆積を測る。

第Ⅶ層黄褐色粘質土　bトレンチ全域で厚さ7～23cmの堆積を測る。

第Ⅷ層礫層

遺構は調査期間の関係上、第Ⅳ層上面での検出であるが、遺構の深さなどから考えると、本来は第Ⅲ①層上面から掘り込まれていたと考えられる。

3．遺構と遺物

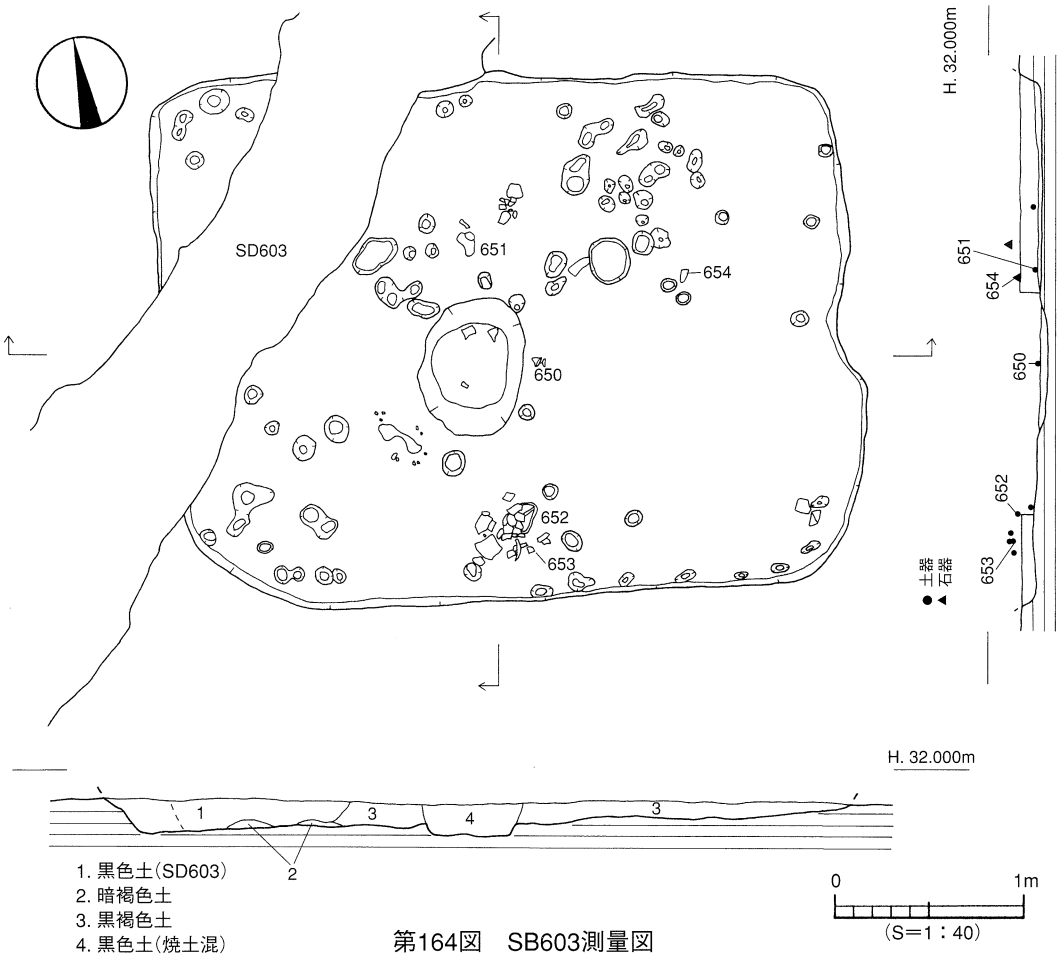
〔1〕弥生時代

本調査において竪穴式住居址1棟と溝を1条検出した。

1）竪穴式住居址（ＳＢ）

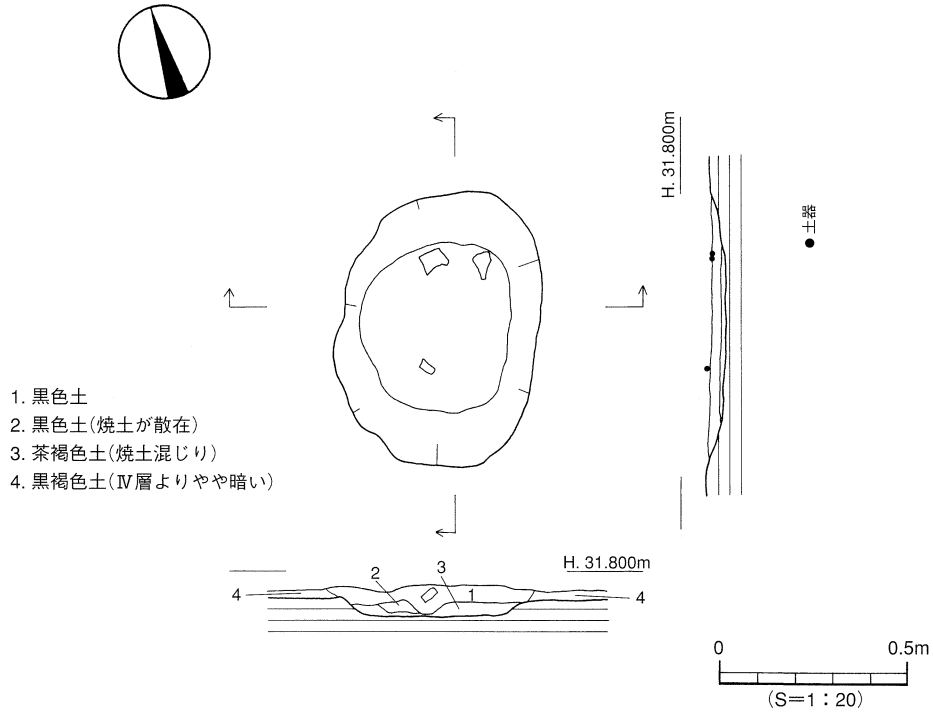
ＳＢ６０３（第164・165図、図版108～110）

調査区南部C2区に位置し、北西部をＳＤ603に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は東西360cm、南北280cm、壁高8cmを測る。埋土は黒褐色土である。内部施設として炉・大小のピットを検出した。炉址は住居址中央部で検出した。平面形態は楕円形で、規模は、南北74cm、東西56cm、深さ40cmを測る。断面形態は皿状を呈する。炉内の埋土は、黒色土（焼土混じり）と明茶褐色土（焼土混じり）である。黒色土中に20×20cm範囲で厚さ5cmの焼土を検出した。



第164図　SB603測量図

炉内から弥生土器片が数点と炉内及び周辺で焼土が出土している。周壁溝は検出されなかったが、大小のピットを住居址全域で72基検出し壁体沿いに18基を検出した。規模は径5～20cm、深さ2～12cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、住居址南東隅で径1mの範囲でわずかに盛り上がった部分を確認した。この盛り上がりはわずかなものであり、内部施設なのかは不明である。埋土は黒褐色土である。埋土中より弥生時代の甕形土器、壺形土器、高坏形土器と石庖丁1点が出土している。



第165図　SB603炉測量図

出土遺物（第166図、図版111）

650は甕の口縁部片である。大きく外反する口縁部をもち端部は「コ」字状を呈する。内外面ともにハケメ調整を施している。

651・652は壺である。651は平底の底部である。652は口縁部が欠損している胴～底部である。胴上部に張りをもち、丸みのある平底である。651・652ともに器壁は厚い。

653は高坏の坏部小片である。屈曲部に段をもち、内外面に明瞭な稜をもつ。654は石庖丁の側部片。長さ5.9cm、幅2.7cm、厚さ0.55cmを測る。研磨段階のものと思われ一部自然面が残る。石材は結晶片岩である。

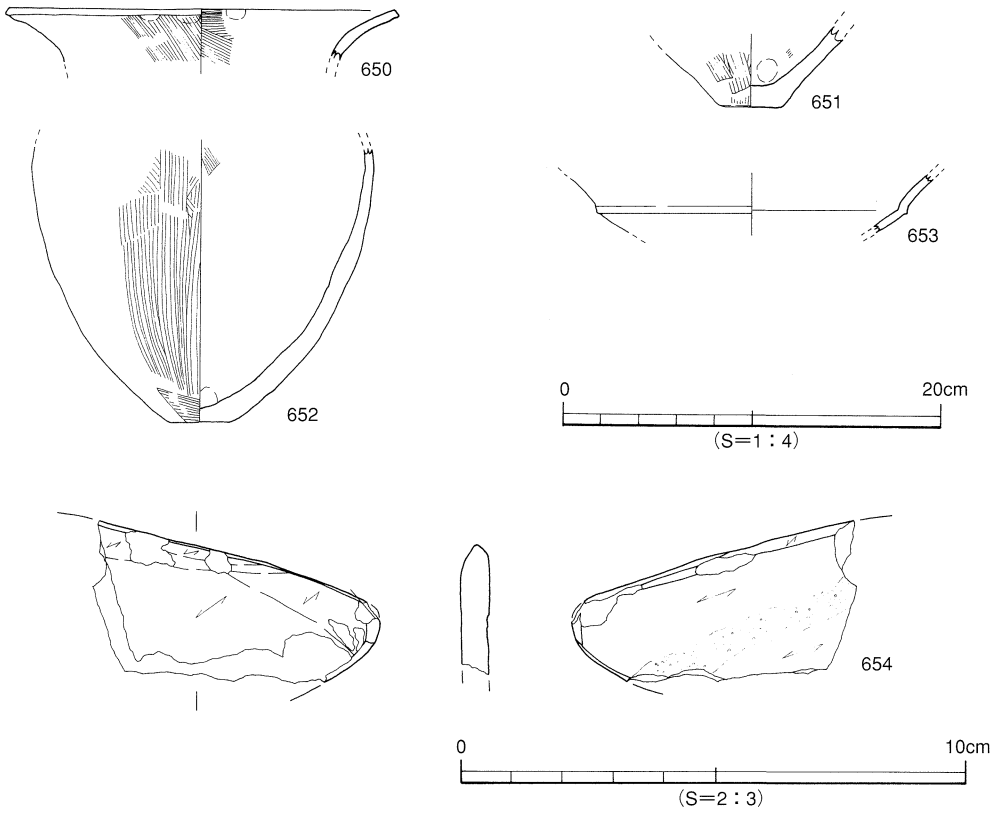
時期：出土遺物より弥生時代後期後葉～末の住居址であると考えられる。

２）溝（ＳＤ）

ＳＤ６０３（第167図、図版108）

調査区Ｃ2～Ｂ3区に位置する。ＳＢ603を切り途中消滅する。規模は幅100cm、深さ15～20cm、検出長6mを測る。断面形態はレンズ状を呈する。北東から南西への傾斜がみられる。埋土は黒色土である。遺物の出土はない。

時期：ＳＢ603を切っているため、弥生時代後期末以降の溝と考える。



第166図　SB603出土遺物実測図

〔2〕古墳時代

1）掘立柱建物址（掘立）

掘立６０１（第168図）

調査区Ｂ3～Ｃ4区に位置する。規模は1間×2間の東西棟で、桁行425cm、梁行230cmを測る。柱穴の平面形態は、円形及び楕円形を呈する。規模は、四隅の柱穴は径30～50cm、深さ35～80cmを測り、残りの2基（ＳＰ201、203）は径16～34cm、深さ9～15cmを測る。埋土は灰黄色土である。柱穴内から遺物の出土はない。

時期：遺物が出土しておらず、埋土から考えると古墳時代以降とする。

〔3〕その他の遺構と遺物

1）土坑（ＳＫ）

本調査区で検出した土坑は5基である。平面形態は楕円形もしくは不整形を呈する。規模は40～100cm、深さ8～30cmを測る。断面形態は皿状である。埋土は灰黄色土である。遺物は出土していない。

時期：遺物が出土しておらず不明であるが、他の遺構埋土から考えると弥生時代と古墳時代の2時期に分かれると考える。

2）柱穴（ＳＰ）

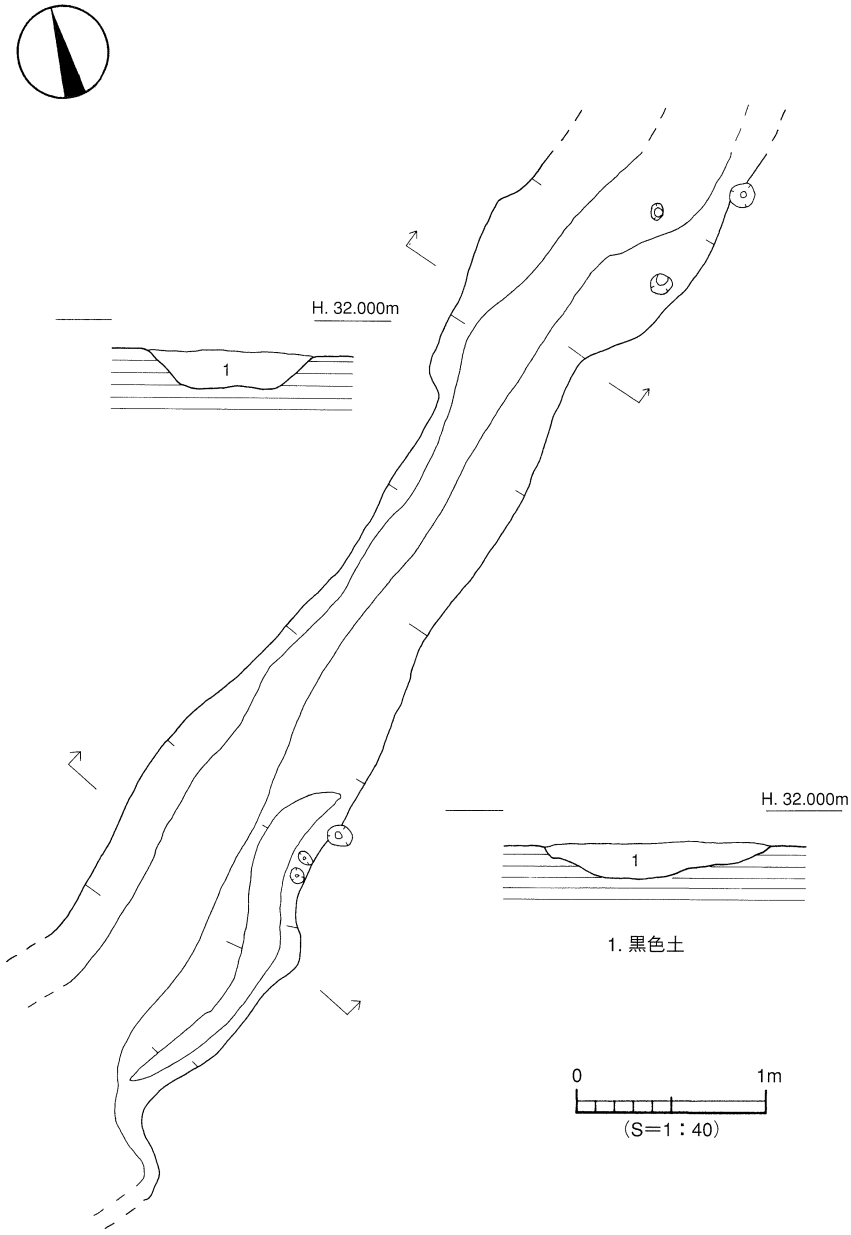
本調査区で検出した柱穴は118基である。この柱穴を埋土の色調で分けると3グループに分けられる。ａ類黒色土を埋土にもつもの39基、ｂ類黒褐色土を埋土にもつもの32基、ｃ類灰黄色土を埋土にもつもの47基に分けられる。

その他の出土遺物（第169、図版111）

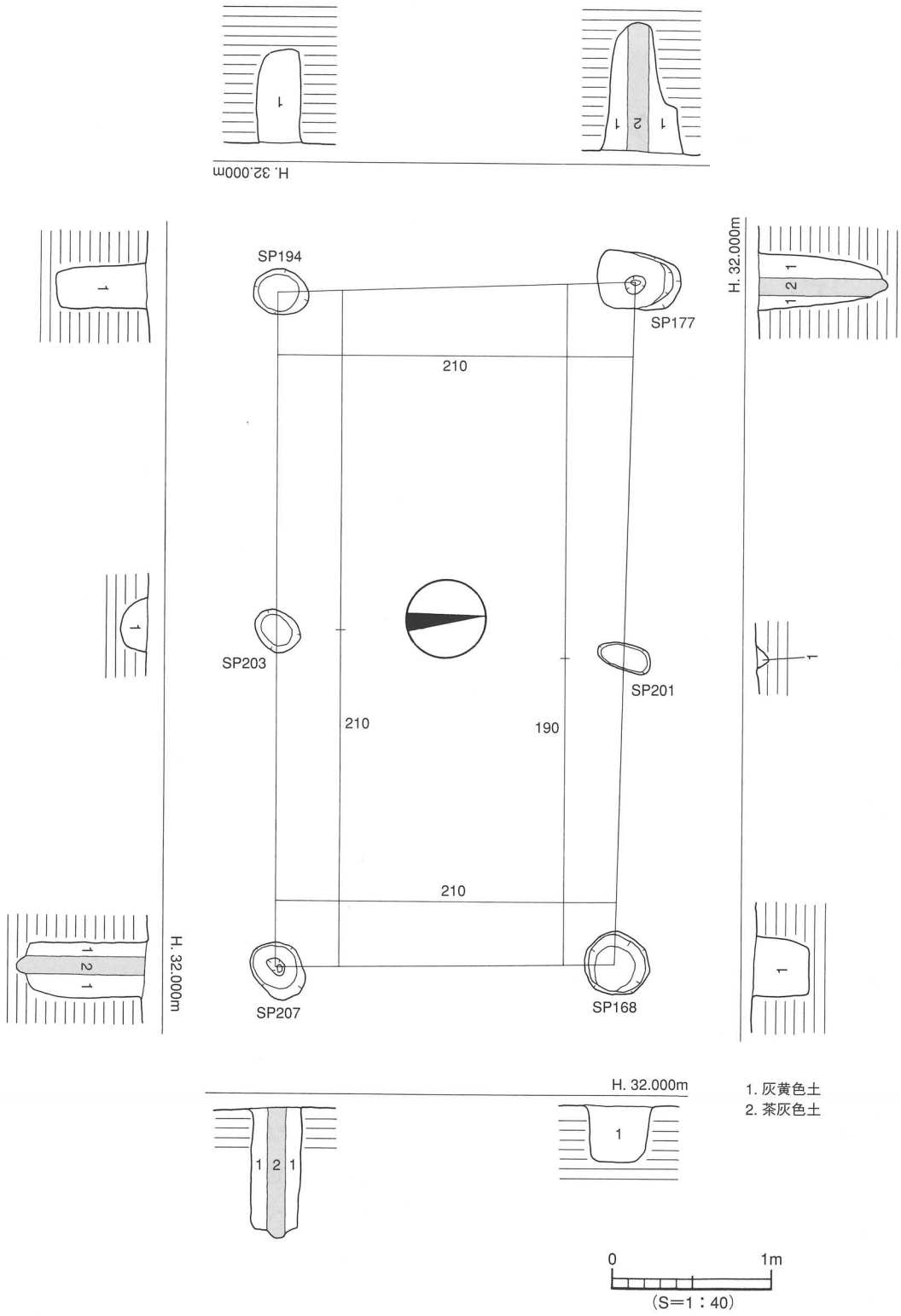
655～658は複合口縁壺である。655の口縁拡張部には、ヨコナデ後櫛描波状文、接合部には刻目列点文が施される。

656・658は口縁拡張部が「く」字状を呈し、口縁端部は「コ」字状に仕上げられる。外面はヨコナデ後ハケ、内面はヨコナデ調整である。657の口縁拡張部は内湾する。659・660は壺の底部である。ともに厚みのある平底である。659は突出する。

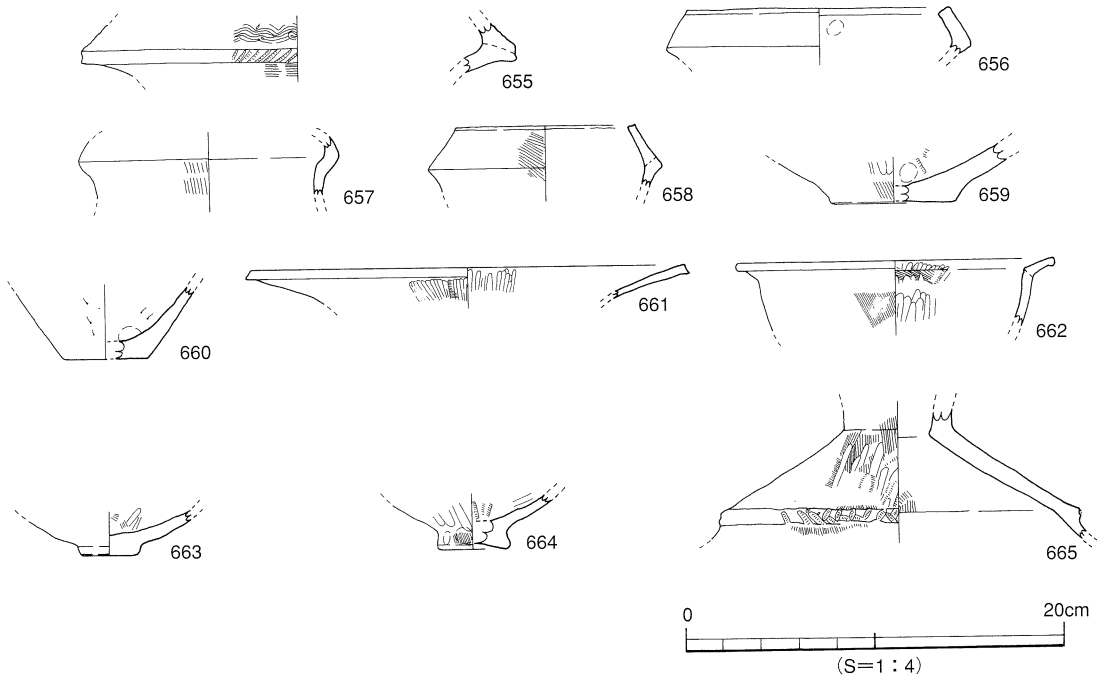
661～664は鉢である。661は外反しながら長くのびる口縁部をもつ。端部はヨコナデにより、わずかに下方に拡張される。662の口縁部は短い。663・664は鉢の底部。663は突出する平底である。664は突出しわずかに上げ底である。665は高坏の裾部である。緩やかに開き屈折部には刻目列点文が施される。



第167図　SD603測量図



第168図　掘立601測量図



第169図　その他の出土遺物実測図

４．小　結

１）層　位

本調査区においても第Ⅲ②層（アカホヤ火山灰）と第Ⅵ層（ＡＴ火山灰）を検出した。遺物は出土しなかったが、他の調査区と同様に第Ⅳ層上面には5～10cmの堆積がある。第Ⅳ層上面はアカホヤ火山灰降下以前の生活面であったと考える。

２）遺　構

①弥生時代の遺構は竪穴式住居址1棟と溝1条である。

住居址ＳＢ603は、小型隅丸方形住居址で東西3.6mを測る。内部施設には炉と小ピットがある。ＳＤ603は、ＳＢ603を北東から南西に切る形で検出した。住居址と溝を検出したことより本調査区は弥生時代後期後葉～末において集落域であったと考えられる。また、ＳＢ603は主柱穴をもたない小型住居であり、当該資料を研究するうえで一つの資料になるものである。

②古墳時代以降の遺構は、掘立柱建物址を1棟検出している。掘立601は1間×2間であり、四隅の柱穴が大きく深い構造である。本調査区では掘立柱建物址を検出したことより、古墳時代以降も居住域として土地利用されたものと考えられる。

本調査区で検出した柱穴の時期は他の遺構埋土を参考にすると、ａ類黒色土は弥生時代後期末以降、ｂ類黒褐色土は弥生時代後期末、ｃ類灰黄色土は古墳時代以降と考えられる。住居址や溝と同一時期を示すものであり、集落構造の分析資料となるものである。

遺構・遺物一覧　ー凡例ー

（1）以下の表は、本調査区検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
遺構一覧は志賀、遺物観察表は相原が作成した。

（2）遺物観察表の各掲載について。

法　量　欄　（ ）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。
例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。
例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（ ）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例）砂・長（1～4）、多→「1～4㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。
焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表105　竪穴式住居址 一覧

竪穴(SB)	時　期	平面図	規　模 長さ(長径)×幅(短径)×深さ(m)	主柱穴(本)	内部施設 高床	土坑	炉	カマド	周壁溝	備　考
603	弥生後期後葉～末	隅丸方形	3.63×2.82×0.08				○			SD603に切られる。

表106　掘立柱建物址 一覧

掘立	規模(間)	方位	桁行 実長(m)	桁行 柱間寸法(m)	梁行 実長(m)	梁行 柱間寸法(m)	床面積(㎡)	時　期	備　考
601	2×2	東西	425(14.1)	7.8　6.3	230(7.0)	7.0	8.93	古墳時代以降	

表107　土坑 一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
608	A6	楕円形	皿　状	0.85×0.60×0.14	灰黄色土		古　墳	調査区外に続く。
609	B6	不整形	皿　状	0.58×0.40×0.08	灰黄色土		古　墳	
610	A4	隅丸方形	レンズ状	0.73×0.61×0.12	黒褐色土		弥　生	
611	B4	楕円形	逆台形状	1.08×0.54×0.30	黒褐色土		弥　生	
612	A3	不整形	レンズ状	1.16×0.06×0.26	黒褐色土		弥　生	

表108　溝 一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
603	A2～B3	レンズ状	6.00×1.00×0.23	黒色土		弥生後期末以降	SB603を切る。

表109　SB603 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
650	甕	口径(20.3) 残高　2.7	口縁部片。口縁部は大きく外反。端部は「コ」字状を呈する。口縁部に指頭痕を残す。	ハケ(7本/cm) 指頭痕	ハケ(6～7本/cm) 指頭痕	赤茶色	石・長(1～5) ◎		111
651	壺	底径　3.0 残高　4.4	底部片。平底。	ハケ(6本/cm)	ナデ上げ 指頭痕	暗茶色	石・長(1～3) ◎		111
652	壺	底径　(3.2) 残高 14.5	口縁部が欠損している底部と胴部。丸味のある平底。胴部の張りは胴上部にある。	㊐ハケ ㊎ハケ(5本/cm)	㊐ナデ上げ ㊎指頭痕	乳灰茶色 (一部黒色) 乳灰茶色	石・長(1～2) ◎		111
653	高坏	残高　3.1	坏部小片。屈曲部に段をもつ。内外面とも明瞭な稜をもつ。口縁部は外反する。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	赤茶色	石・長(1～2) ◎		111

表110　SB603 出土遺物観察表　石製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
654	石庖丁	側部破片	結晶片岩	5.9	2.7	0.55	16.5		111

表111　その他の出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
655	壺	残高　2.7	複合口縁壺。口縁拡張部片。口縁拡張部には櫛描波状文、接合部には列点文を施す。	㊍施文 ㊓ハケ(6本/0.5cm)	ヨコナデ	乳茶色	石・長(1～2) ◎		111
656	壺	口径(13.7) 残高　2.5	複合口縁壺の口縁拡張部。接合部は「く」字状である。口縁拡張部は内湾し端部は「コ」字状を呈する。	㊀ヨコナデ 他は磨滅のため不明	㊀ヨコナデ 指頭痕	茶色	石・長(1～2) ◎		
657	壺	残高　3.1	複合口縁壺。口縁拡張部は内湾する。	㊀ヨコナデ ㊍ハケ(6～7本/cm)	ヨコナデ	赤茶色	長(1) ◎		
658	壺	口径　(9.3) 残高　3.4	複合口縁壺。口縁接合部は「く」字状である。口縁拡張部は内湾し端部は「コ」字状を呈する。	ハケ(8本/cm)	ヨコナデ	灰黄色	石・長(1～4) ◎		
659	壺	底径　(6.6) 残高　3.1	底部片。突出する平底をもつ。	ヘラミガキ ハケ(7本/0.8cm)	ハケ(8本/0.8cm) 指頭痕	赤茶色 (一部黒色) 黒色	石・長(1～4) ◎		
660	壺	底径　(4.3) 残高　3.8	底部片。平底である。	板状工具によるナデ	板状工具によるナデ 指頭痕	暗茶色	石・長(1～3) ◎		
661	鉢	口径(23.7) 残高　1.9	口縁端部ヨコナデによりわずかに下方に拡張される。	㊀ハケ(15～16本/cm) →ヘラミガキ ㊍ヨコナデ	ヘラミガキ	灰茶色 (一部黒色) 灰茶色	長(1) ◎		
662	鉢	口径(16.5) 残高　3.6	外反する口縁部。口縁端部はヨコナデによりわずかに拡張。頭部内面に明瞭な稜がみえる。	㊀ヨコナデ ㊐ハケ(12～13本/cm)	㊀ヨコナデ→ヘラミガキ ㊐上ハケ(12～13本/cm) ㊐下ヨコナデ→ヘラミガキ	赤茶色	石・長(1～3) ◎		
663	鉢	底径　(2.8) 残高　2.4	底部片。突出し丸味のある平底をもつ。	ナデ	ハケ(4本/0.3cm)→ ヘラミガキ	灰黄色 (一部黒色) 茶色	石・長(1～2) ◎		
664	鉢	底径　(3.7) 残高　2.8	底部片。わずかにくびれる 突出する上げ底をもつ。	ハケ(10本/cm)→ヘラミガキ	ハケ(10本/cm)→ ヘラミガキ	乳赤茶色	石・長(1～5) ◎		
665	高坏	残高　7.0	裾部片。裾上部と下部に段をもつ。段部にキザミ目列点文が交差される様に施される。	㊇上ハケ(9本/cm) →ヘラミガキ ㊇下キザミ目列点文	ハケ(7本/0.8cm)	赤茶色	石・長(1～2) ◎		111

第14章

束本遺跡4次

－6区Cの調査－

第14章　6区Cの調査

1．調査の経緯

調査地は調査以前は既存宅地であった。調査対象面積は840㎡であるが排土置き場の都合上、最終的な発掘調査面積は約325㎡余りとなった。以下、調査工程を略記する。

1994年（平成6）3月22日より重機による表土剥ぎ取り作業を開始した。表土剥ぎは、試掘調査の結果をもとに地表下約70cmまで掘り下げを行い、排土は調査地外へ搬出した。そのため表土剥ぎ取り作業は2日間を費やした。3月29日より作業員を増員し本格的な調査を実施する。西壁に深掘りトレンチ（aトレンチ）を掘り、遺構面を第Ⅲ①層上面と第Ⅳ層上面の2面検出した。まずは第Ⅲ①層上面で遺構検出を行った。遺構検出は4月11日に終了し、その後、土坑・柱穴・性格不明遺構の掘り下げを行い、遺構の測量は4月22日に完了する。つづいて第Ⅳ層上面で遺構検出を行った。遺構検出は4月28日に終了し、その後、竪穴式住居址・溝・土坑・柱穴・性格不明遺構の掘り下げを開始する。6月10日遺構の測量を完了し東西にトレンチ（bトレンチ）を掘り第Ⅳ層以下の調査を行う。6月13日出土遺物や調査用具等を撤去する（野外調査終了）。

2．層　位（第4・171図）

調査地は、松山平野東部に広がる石手川左岸の低位段丘上、標高32,00mに立地する。

基本層位は、第Ⅰ層表土（造成土・耕作土）、第Ⅱ層水田床土、第Ⅲ層黒色土、第Ⅳ層褐色土、第Ⅴ層暗褐色粘質土、第Ⅵ層黄褐色土、第Ⅶ層褐色砂である。第Ⅰ層～第Ⅲ層までは調査区全域を調査した。

第Ⅳ層以下は、a・bトレンチでの調査である。

第Ⅰ層は31～43cmの厚さを測る。調査区全域で検出した。

第Ⅱ①層は調査区全域で2～14cmの厚さを測るが、aトレンチの北～中央にかけてはブロック状で検出した。

第Ⅱ②層は灰褐色土で、調査区中央～南にかけて厚さ2～17cmを測る。弥生土器・須恵器・土師器・石鏃・鉄の遺物を包含する。

第Ⅲ層は粘性の違いにより2層に分層される。

第Ⅲ①層は黒色土である。調査区全域で、厚さ3～45cmを測る。弥生土器を包含する。第Ⅲ①層上面で遺構を検出した。

第Ⅲ②層は黒灰色土（アカホヤ火山灰）である。調査区全域で厚さ2～12cmの堆積を測るが、aトレンチの中央～南と中央北側2ヶ所は途切れている。遺物は先土器～縄文時代の石器が1点出土した。

第Ⅳ層は褐色土である。調査区全域で厚さ4～15cmを測る。aトレンチでは中央～南側にかけて途切れているところがある。第Ⅳ層上面では遺構を検出し、縄文時代の石器が1点出土している。

第Ⅴ層は褐色粘質土である。bトレンチとaトレンチの中央と中央北側を除く全域で、厚さ2～40cmを測る。

第170図　調査区位置図

層　位

第Ⅵ層はＡＴ火山灰層である。分析の結果をもとに1次堆積と2次堆積のものに分層し、さらに2次堆積は砂・礫・風、1次堆積では粒子の大きさにより3層（①・②・③）に分層した。

第Ⅵ層砂は1～2㎜大の砂粒が混じり、厚さ2～28㎝の堆積である。ａトレンチの北側と中央及び、ｂトレンチ全域で検出した。

第Ⅵ層礫は2～5㎜大の砂粒が混じる。厚さ2～20㎝の堆積である。ａトレンチの中央部で部分的に途切れているところがあるが、全域で検出した。

第Ⅵ層風は黄色に小石・礫が混じり、ｂトレンチとａトレンチの北側と中央北側を除く全域で、厚さ3～23㎝を測る。

第Ⅵ①層は黄褐色を呈する。ａ・ｂトレンチの北側を除き、厚さ2～36.5㎝を測る。

第Ⅵ②層は乳暗褐色粘質土と乳褐色粘質土と乳黄褐色粘質土からなる。

乳暗褐色粘質土は、ａトレンチの南側で、厚さ3～18㎝を測る。

乳褐色粘質土は、ａトレンチの北～中央にかけて、厚さ1～14.5㎝を測る。乳黄褐色粘質土は、ａトレンチの南側で厚さ4～10㎝を測る。

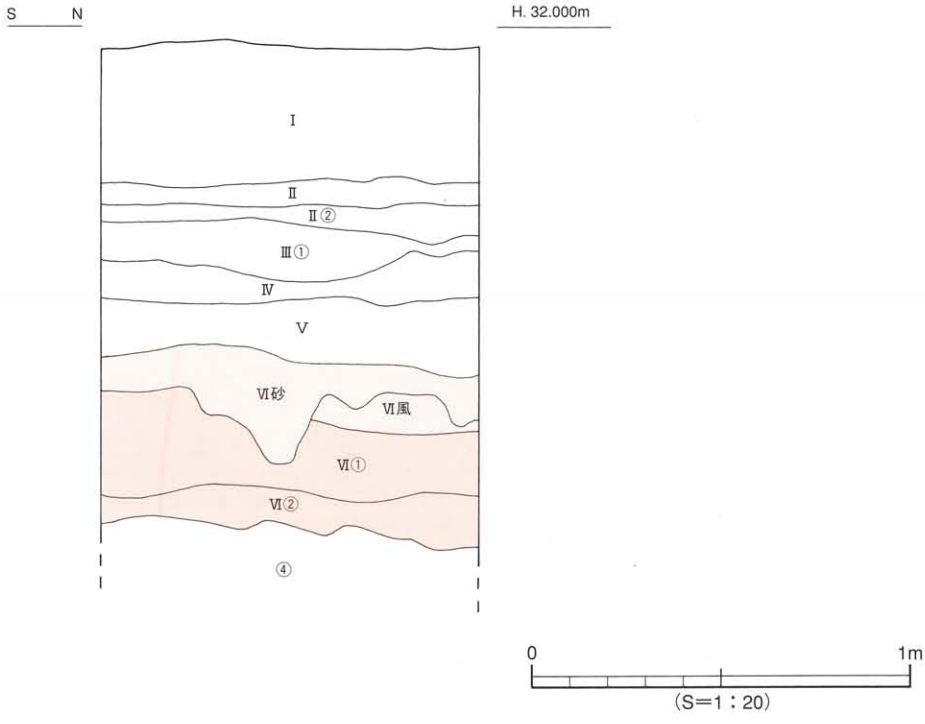
第Ⅵ③層は淡黄色粗粒混じりであり、ａトレンチの北側と南側及びｂトレンチ全域で、厚さ2～6㎝を測る。

第Ⅶ層は第Ⅶ④層灰色砂と第Ⅶ⑤層黄灰色粘土と第Ⅶ①層淡黄褐色砂質土からなる。

第Ⅶ④層灰色砂はａ・ｂトレンチ南側を除く全域で、厚さ2～25㎝を測る。

第Ⅶ⑤層黄白色粘土はａトレンチの南側で、厚さ1～10㎝を測る。

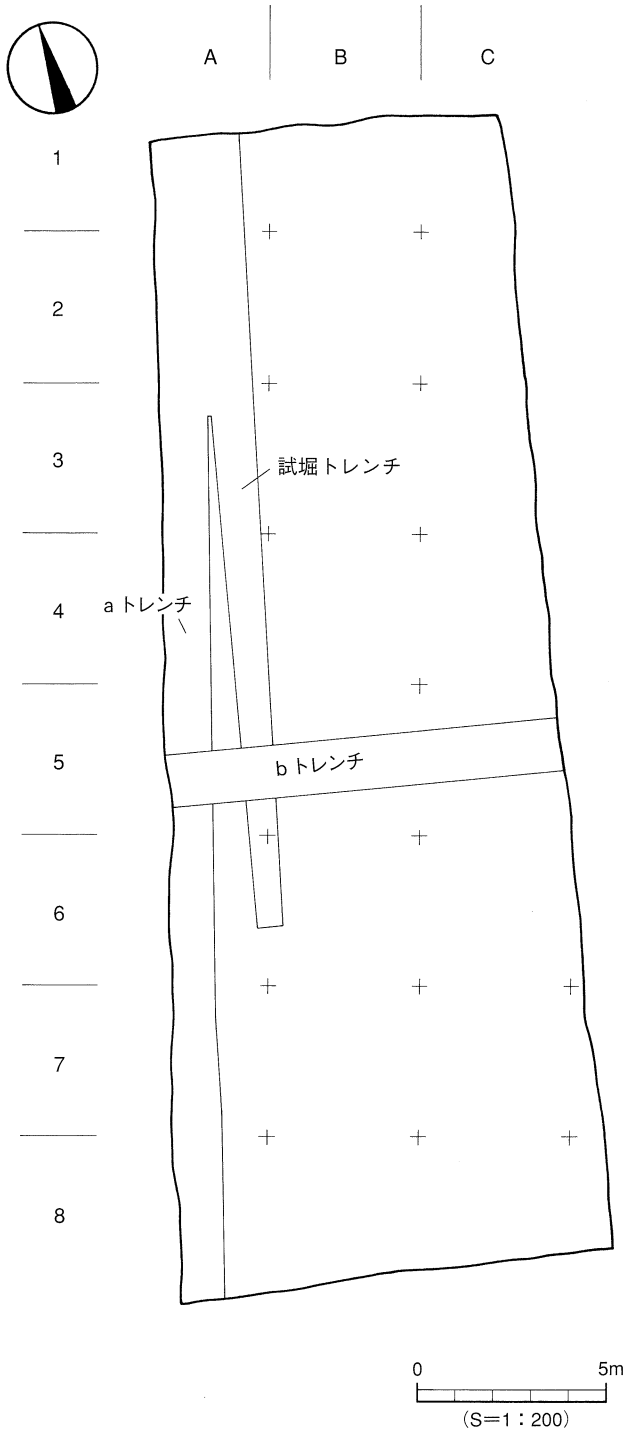
第Ⅶ①層淡黄褐色砂質土はｂトレンチの全域で、厚さ20～30㎝を測る。



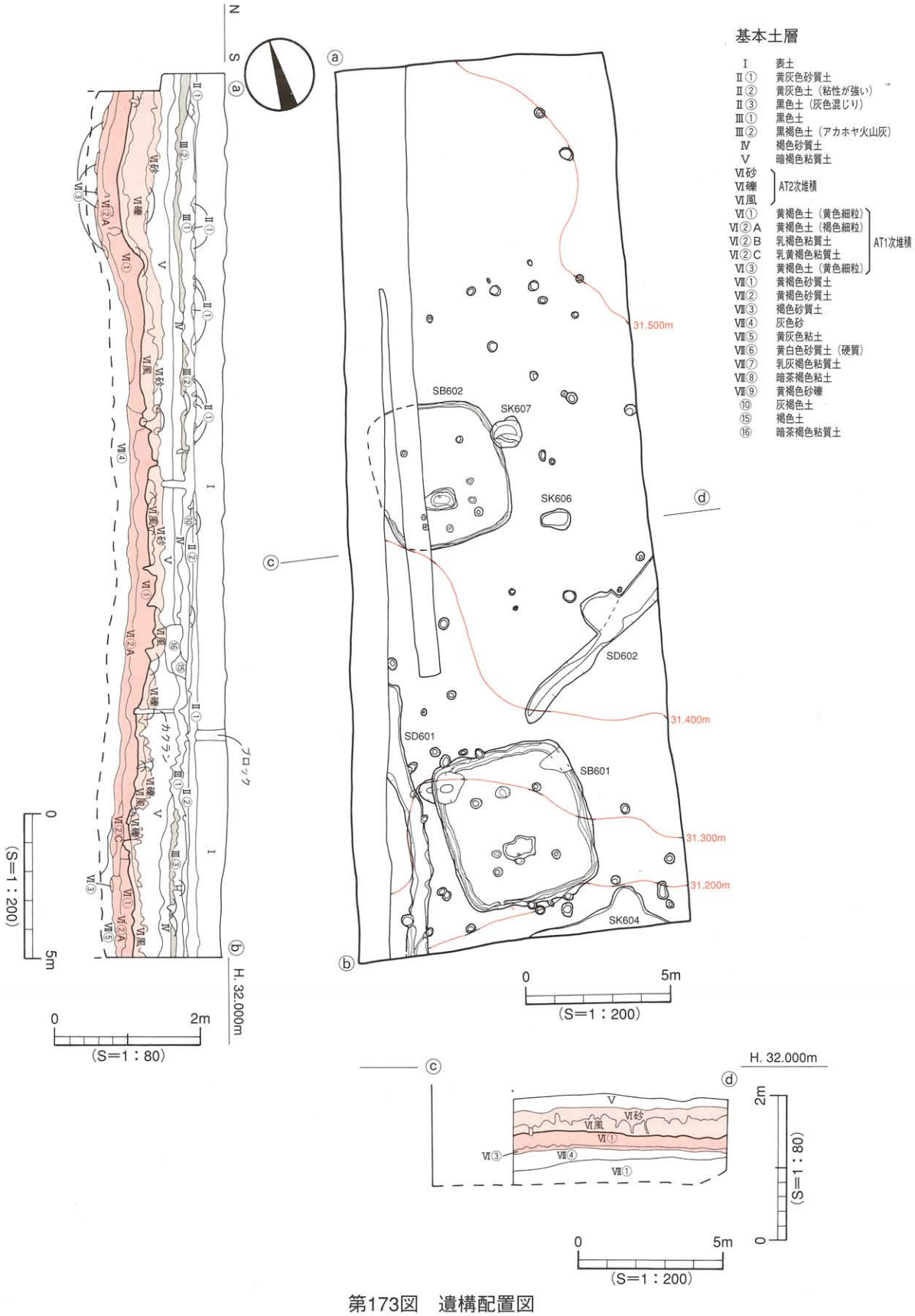
第171図　土層柱状図

遺構は、第Ⅲ①層上面では土坑3基・柱穴75基・性格不明遺構3基を検出し、第Ⅳ層上面では、竪穴住居址2棟・土坑6基・柱穴58基を検出するに至った。第Ⅲ①層及び第Ⅳ層上面の標高を測量すると、調査区北東から南西へ漸次緩傾斜をなしている。

なお、調査にあたり調査区内を4m四方のグリットに分けた。グリットは西から東へA・B・C・D、北から南へ1・2・3･･･8とし、第172図に示すようにA1・A2・A3･･･D8とグリット名を呼称した。



第172図　区 割 図


基本土層
Ⅰ 表土
Ⅱ① 黄灰色砂質土
Ⅱ② 黄灰色土（粘性が強い）
Ⅱ③ 黒色土（灰色混じり）
Ⅲ① 黒色土
Ⅲ② 黒褐色土（アカホヤ火山灰）
Ⅳ 褐色砂質土
Ⅴ 暗褐色粘質土
Ⅵ砂
Ⅵ礫
Ⅵ風
AT2次堆積
Ⅵ① 黄褐色土（黄色細粒）
Ⅵ②A 黄褐色土（褐色細粒）
Ⅵ②B 乳褐色粘質土
Ⅵ②C 乳黄褐色粘質土
Ⅵ③ 黄褐色土（黄色細粒）
AT1次堆積
Ⅶ① 黄褐色砂質土
Ⅶ② 黄褐色砂質土
Ⅶ③ 褐色砂質土
Ⅶ④ 灰色砂
Ⅶ⑤ 黄灰色粘土
Ⅶ⑥ 黄白色砂質土（硬質）
Ⅶ⑦ 乳灰褐色粘質土
Ⅶ⑧ 暗茶褐色粘土
Ⅶ⑨ 黄褐色砂礫
⑩ 灰褐色土
⑮ 褐色土
⑯ 暗茶褐色粘質土
N
S
a
b
c
d
ブロック
カクラン
H. 32.000m
0
2m
(S=1：80)
0
5m
(S=1：200)
31.500m
31.400m
31.300m
31.200m
SB602
SK607
SK606
SD602
SD601
SB601
SK604
0
5m
(S=1：200)
H. 32.000m
0
2m
(S=1：80)
0
5m
(S=1：200)

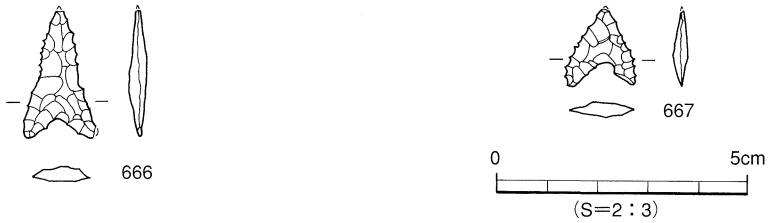
第173図　遺構配置図

３．遺構と遺物

〔１〕先土器～縄文時代（第174図、図版122）

本調査においては石鏃が2点出土した。第Ⅲ②層アカホヤ火山灰（6,300年前）の埋土中からは石鏃が1点、第Ⅳ層上面から石鏃が1点出土した。

石鏃666は、アカホヤ火山灰からの出土である。凹基式で縁辺部が鋸歯状である。長さ2.5cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.7ｇを測る。石鏃667は、凹基式で基部の抉りが深く縁辺部が鋸歯状である。長さ1.5cm、幅1.3cm、厚さ0.25cm、重さ0.3ｇを測る。



第174図　第Ⅲ②層及び第Ⅳ層上面出土遺物実測図

〔２〕弥生時代

本調査区において弥生時代に時期比定できる遺構は、竪穴式住居址2棟・溝2条・土坑3基である。

１）竪穴式住居址（ＳＢ）

ＳＢ６０１（第175図、図版114～116）

調査区南Ａ7～Ｃ8に位置し、住居址北西部はＳＫ613を切り、北壁中央部はＳＰ108に切られている。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は南北540cm、東西490cm、壁高は32cmを測る。内部施設は貼り床、周壁溝、主柱穴、炉がある。貼り床は住居址の床面全体になされ、厚さ5～16cmを測る。貼り床上面では黒色粘質土を検出した。床面は比較的硬く平坦である。周壁溝は、住居址北西コーナーを除くほぼ全域で検出され、幅10～15cm、深さ10～21cmを測る。埋土は黒褐色土である。

主柱穴は、ＳＰ1・2・4・6の4本である。各柱穴は円形を呈し、径20～34cm、深さ28～51cm、柱穴間は210～250cmを測る。炉は、住居址中央部やや南よりに位置する。平面形態は楕円形である。規模は長軸113cm、短軸78cm、深さ11cmを測り、断面形態は皿状を呈する。炉内にて焼土及び炭を確認している。

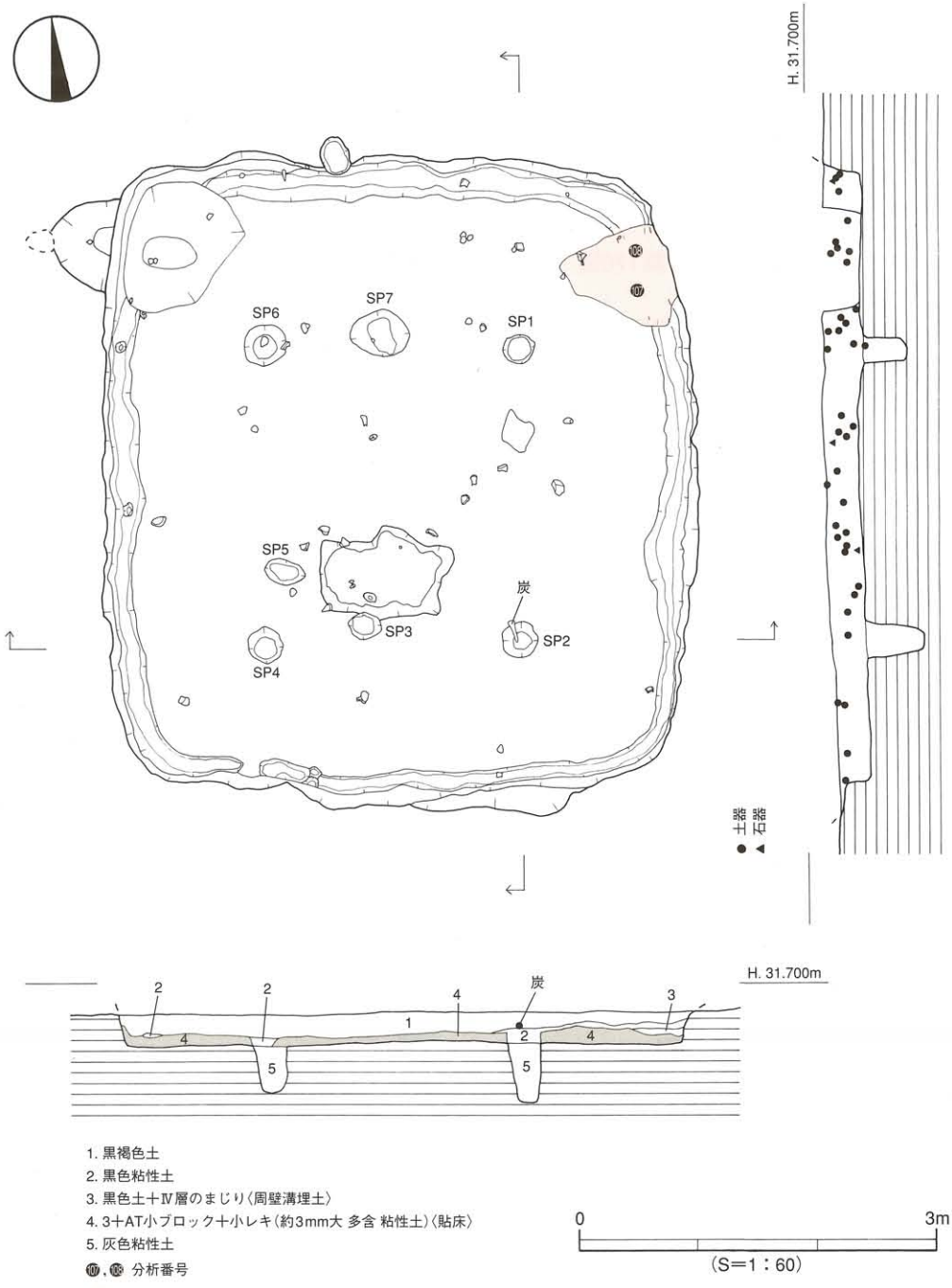
その他、焼土を住居址北東部の埋土中で検出した。焼土の広がりは、東西87cm、南北85cm、厚さ8～11cmを測る。この焼土は住居址床面に焼けた痕跡が無いことから、おそらく住居址外からの流れ込みだと思われる。また、住居址床面にて主柱穴以外に3基の柱穴を検出したが、本住居址に伴うものであるかは判断できなかった。

遺物は住居址全体に散在している。ほとんどが埋土中から出土したものである。埋土中からは、複合口縁壺の口縁部が2点・直口縁壺の口縁部が1点・鉢の口縁部が1点・鉢の底部が2点・ミニチュア土器の底部が1点・高坏の脚部が1点出土し、床面付近からは壺の底部片が1点出土した。

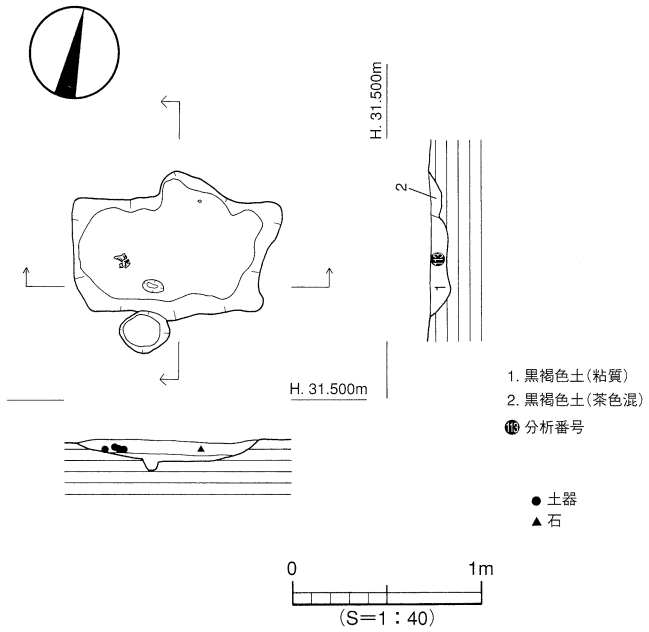
出土遺物（第177図、図版122）

壺形土器（668～670）668・669は複合口縁壺である。668は口縁端部に平坦面をもつ。調整は外面がハケ目、内面はヨコナデ調整を施す。669は小片で、口縁端部は丸く仕上げる。調整は内外共にヨコナデである。670は直口口縁壺である。口縁部はわずかに外反し、口縁端部は、細く丸く仕上げている。調整は内外面共に磨滅のため不明である。

鉢形土器（691～673）671は外反する口縁部をもつ。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。口縁部内面



第175図　SB601測量図



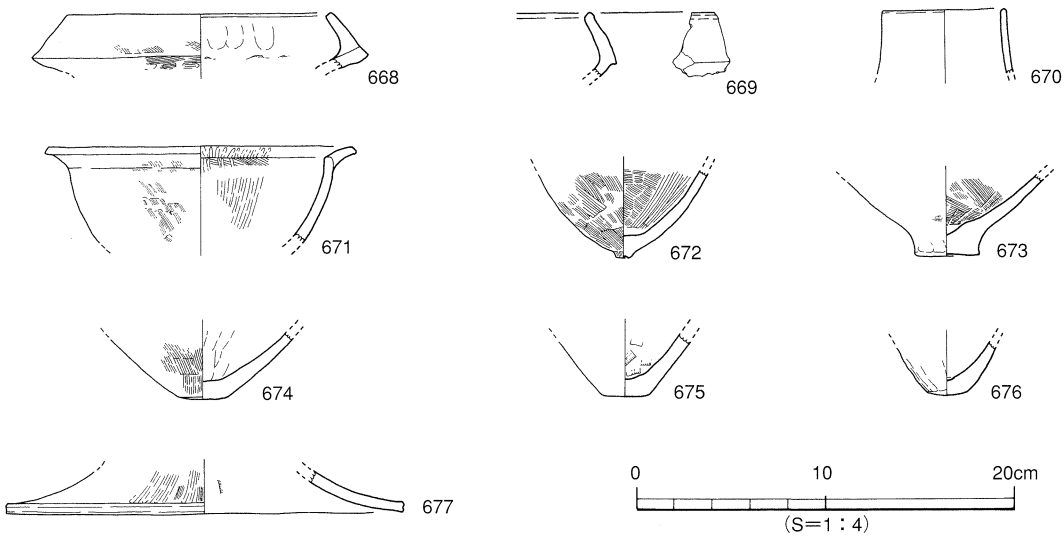
第176図　SB601炉測量図

に明瞭な稜をもつ。調整は、外面の口縁部がヨコナデ、胴部がハケ目、内面はハケ後ヘラミガキ調整を施す。672・673は底部片である。672はボタン状にやや突出した平底の底部である。調整は、胴部内外面ともハケ目、底部内面はナデ調整を施す。

高坏形土器（677）高坏の脚部片で、脚部端面はヨコナデにより凹みをもつ。調整は柱部外面ハケ後ミガキ調整、裾端部はヨコナデ、内面はヨコナデ調整を施す。

674～676は底部片である。674は床面出土品である。壺の底部片で平底である。調整は外面はハケ目、内面はナデ調整を施す。675は甕の底部片で平底である。調整は外面は磨滅のため不明、内面はハケ後ナデ調整を施す。676はミニチュア土器の底部片で、不安定である。調整は内外面ともにナデ調整で外面に指頭痕が残る。

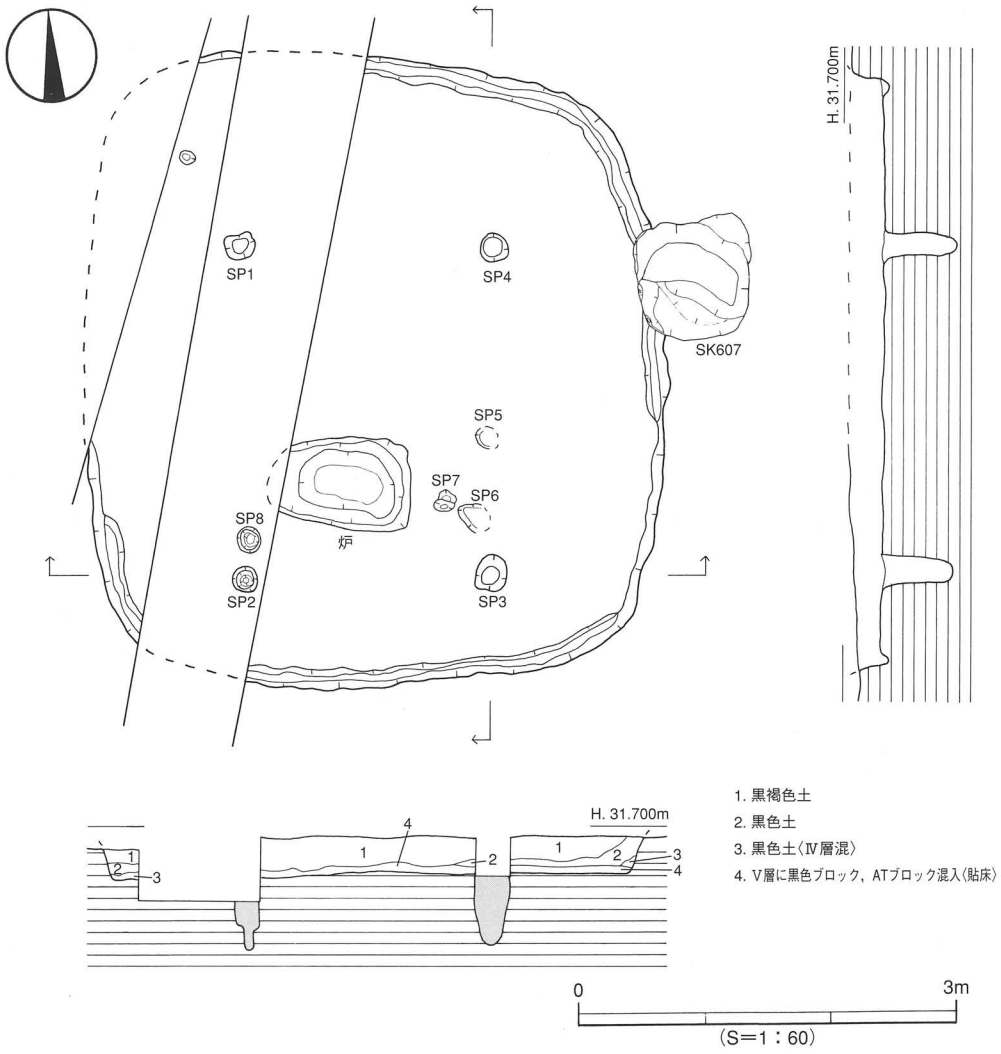
時期：出土遺物より弥生時代後期後葉～末に比定されるものであろう。よって、本住居址の廃棄・埋没時期は弥生時代後期後葉～末と考えられる。



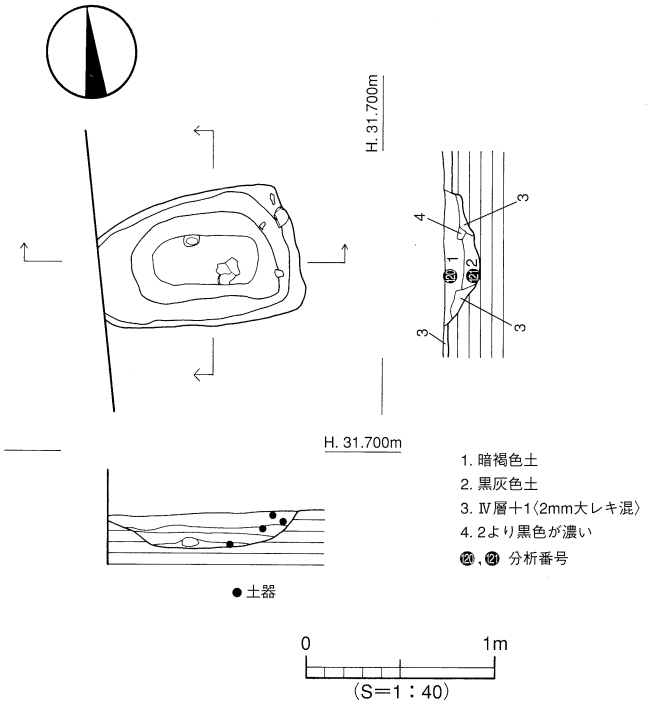
第177図　SB601出土遺物実測図

ＳＢ６０２（第178・179図、図版117～119）

調査区西Ａ4～Ｂ5区に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。住居址北壁中央部及び南西隅は試掘トレンチに切られ、住居址北西はａトレンチに切られ、住居址北東部はＳＫ607に切られている。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長500㎝、東西検出長430㎝、壁高は28㎝を測る。内部施設は貼り床、壁体溝、主柱穴、炉がある。貼り床は住居址の床面全体になされ、厚さ5～7㎝を測る。また、住居址東半部では、貼り床上面で黒色粘質土を検出した。床面は硬く平坦である。周壁溝は、幅10～15㎝、深さ20～24㎝を測る。埋土は黒褐色土である。主柱穴は、ＳＰ1・2・3・4の4本である。各柱穴は円形を呈し、径19～27㎝、深さ29～53㎝、柱穴間は190～260㎝を測る。柱穴の埋土は黒褐色土と黄褐色粘性土に褐色が混じるものである。炉は住居址中央部やや南よりに位置し、西側は試掘トレンチに切られている。平面形態は楕円形である。炉の規模は、東西検出長110㎝、南北69㎝・深さ16㎝を測り、断面形態は皿状を呈する。炉内にて焼土及び炭を確認している。また、住居址床面にて主柱穴以外に4基の柱穴を検出したが、本住居址に伴うものであるかは判断できなかった。



第178図　SB602測量図



第179図　SB602炉測量図

遺物は、住居址東半分に散在している。ほとんどが埋土中にある。埋土からは、甕の口縁部が1点、底部が2点、壺の口縁部と胴部が各1点、鉢の口縁部が3点、高坏の脚部片が1点出土した。炉の床面付近で鉢（683）が出土した。

出土遺物（第180図・図版122）

甕形土器（678）外反する甕の口縁部である。口縁端部は丸く、口縁部の内面は稜をもつ。調整は外面の口縁端部がヨコナデ、その他は内外面共にハケ後ヨコナデ調整を施す。

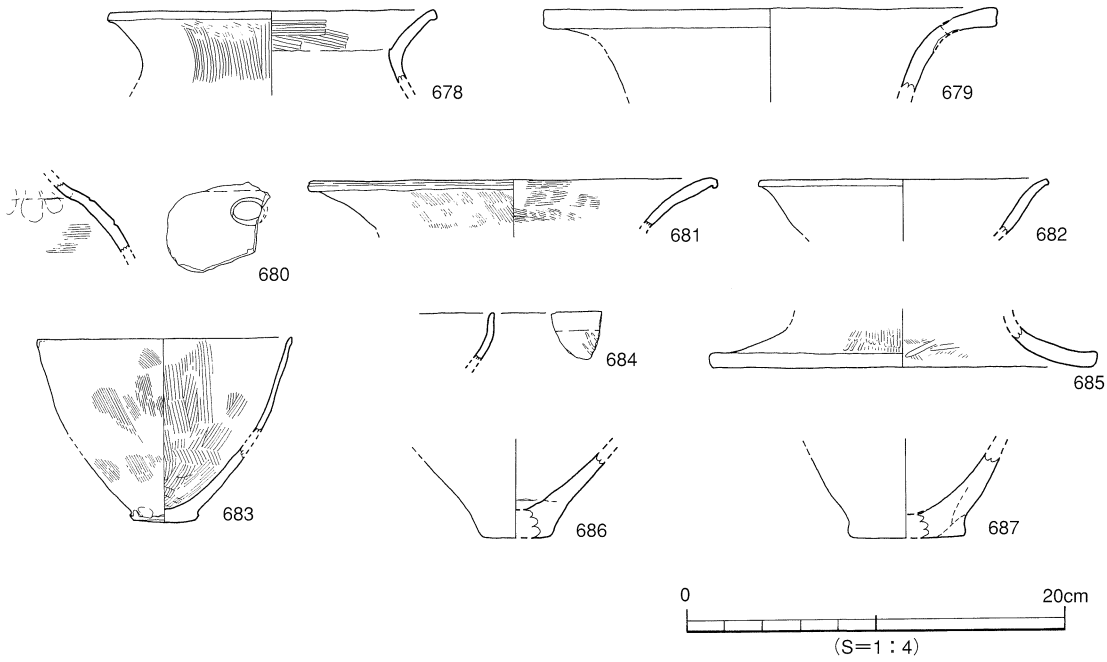
壺形土器（679・680）679は広口壺の口縁部片で、口縁部は外反し口縁端部は丸い。調整は外面の口縁端部はヨコナデ、他は内外面共にハケ後ミガキ調整を施す。680は胴部片で、直径1.4cm大の円形の竹管文が見られる。調整は内外面共にハケ後ナデ調整を施す。内面に指頭痕を残す。

鉢形土器（681～684）681・682は外反口縁、683は直口口縁をもつ鉢である。681は口縁部外面に粘土を貼り付け肥厚させている。調整は内外面共ハケ後ヨコナデ調整を施す。682は口縁端部を丸く仕上げる。調整は内外面共ヨコナデ調整を施す。683は炉内の出土品である。わずかに突出している平底の底部で、口縁端部は先細りである。調整は外面は口縁部がナデ、胴部はハケ目（部分的に磨滅）後ナデ、底部はナデ、内面はハケ目調整を施す。

高坏形土器（685）高坏の脚部片で、裾端部は丸みのある「コ」字状に仕上げている。調整は内外面共に磨滅のため不明である。

686・687は甕の底部で平底である。686は内面はナデ調整を施し、外面は磨滅のため調整は不明である。687は内外面共に磨滅のため調整は不明である。

時期：炉の床面付近出土の鉢形土器683が時期特定に有効な資料である。その特徴より、本住居址の廃棄・埋没時期は弥生時代後期後葉～末と考えられる。



第180図　SB602出土遺物実測図

2）溝（ＳＤ）（第173図）

ＳＤ６０１（図版120）

調査区南西部Ａ6～Ｂ8に位置し、北は試掘トレンチに切られている。第Ⅳ層上面で検出し、規模は幅70cm、深さ11cm、検出長930cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。溝底は比較的平坦であるが、北から南に向けて僅かに傾斜をなす。埋土は黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

時期：遺物が出土していないため不明であるが、南壁において第Ⅲ①層中から掘られているため、時期はＳＢ601・ＳＢ602と同じ弥生時代後期後葉～末と考えられる。

ＳＤ６０２

調査区東部Ｃ5～6区に位置し、ＳＫ605を切っている。第Ⅳ層上面で検出し、規模は幅100cm、深さ14cm、検出長620cmを測る。埋土は黒褐色土で、断面形態はレンズ状を呈する。溝底は北東側から南西側へ緩やかに傾斜している。遺物は出土しなかった。

時期：遺物が出土していないため不明であるが、ＳＤ602は東壁において第Ⅲ①層中から掘られているため、時期はＳＢ601・ＳＢ602と同じ弥生時代後期後葉～末と考えられる。

3）土坑（ＳＫ）（第173図）

ＳＫ６０５

調査区中央南東側Ｃ5・6区に位置し、ＳＤ602に切られている。第Ⅳ層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸135cm、短軸130cm、深さ13cmを測り断面形態は皿状である。埋土は上層が黒褐色土に褐色混じり、下層が褐色土に暗灰色シルト混じりである。遺物は出土しなかった。

時期：ＳＤ602に切られているために、弥生時代後期末以前の土坑である。

ＳＫ６１３（図版120）

調査区南西Ａ7～Ｂ7区に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。ＳＫ613はＳＢ601及びＳＰ110に切られている。平面形態は円形を呈すると考えられる。規模は南北74cm、東西検出長50cm、深さ45cmを測り、

断面形態は舟底状である。埋土は黒灰色土である。遺物は出土しなかった。

時期：遺物が出土していないため不明であるが、ＳＢ601に切られており、弥生時代後期末以前であると考えられる。

ＳＫ６１４（第120図）

調査区南西Ｂ7区に位置し、ＳＢ601掘り下げの時、埋土中にて検出した。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸110cm、短軸105cm、深さ32cmを測り、断面形態は「Ｕ」字状である。埋土は上層が黒褐色土、中層が褐色土に黒褐色（ＡＴの小ブロックを含有しており3㎜大の小礫を含んでいる）混じり、下層が褐色土に暗灰色混じりである。遺物は出土しなかった。

時期：遺物が出土していないため不明であるが、ＳＢ601を切っているが埋土が同じであり、弥生時代後期後葉～末の同時期に比定されよう。

ＳＫ６０７

調査区中央Ｂ4区に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。西側はＳＢ602を切っている。平面形態は方形で、規模は南北検出長100cm、東西92cm、深さ22cmを測り、断面形態は舟底状である。埋土は暗灰褐色土、下層が黒灰色土である。遺物は出土しなかった。

時期：遺物が出土していないため不明であるが、ＳＢ602より新しい時期であるが、埋土もあまり変わらないもので弥生時代後期末以降であると考えられる。

〔３〕中　世

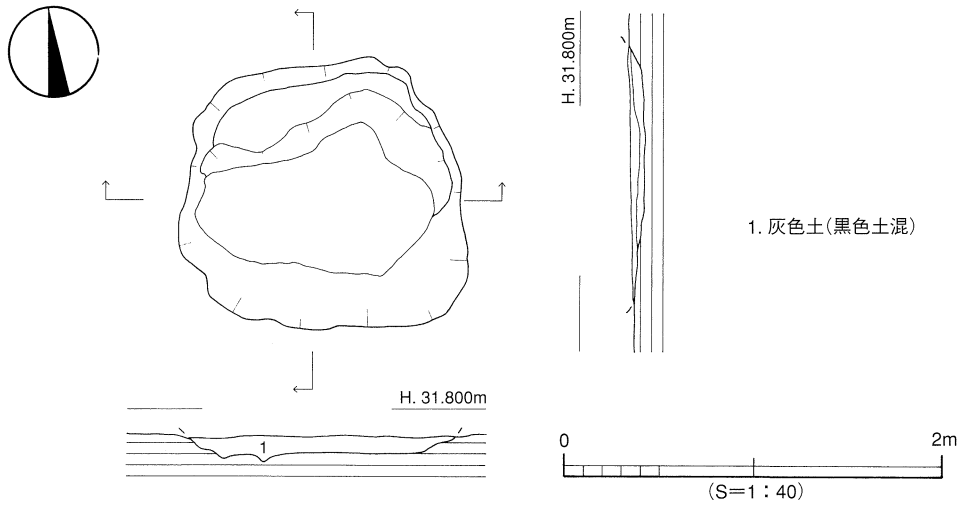
土坑（ＳＫ）

土坑は9基を検出した。そのうち確実に時期比定できる遺構は、土坑ＳＫ601・ＳＫ602の2基である。

ＳＫ６０１（第181・183図）

調査区南Ｂ8区に位置し、第Ⅲ①層上面で検出した。平面形態は方形を呈する。規模は長軸145cm、短軸137cm、深さ13.5cmを測り、断面形態は皿状である。埋土は灰色土に黒色土の小ブロック混じりである。遺物は土坑の床面付近から、土師器の坏の底部片が1点出土した。688の底部切り離しは回転糸切り手法である。調整は外面がヨコナデ、内面はナデ調整を施す。

時期：13～14世紀である。

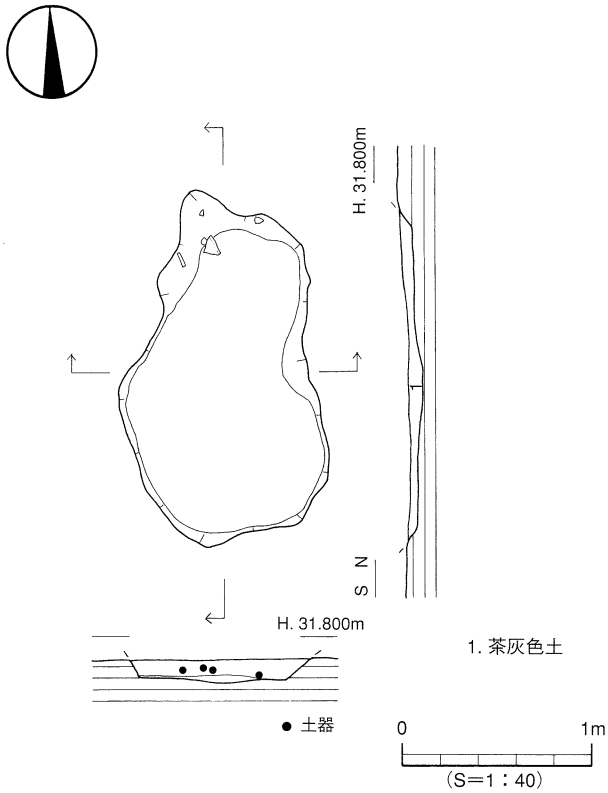


第181図　SK601測量図

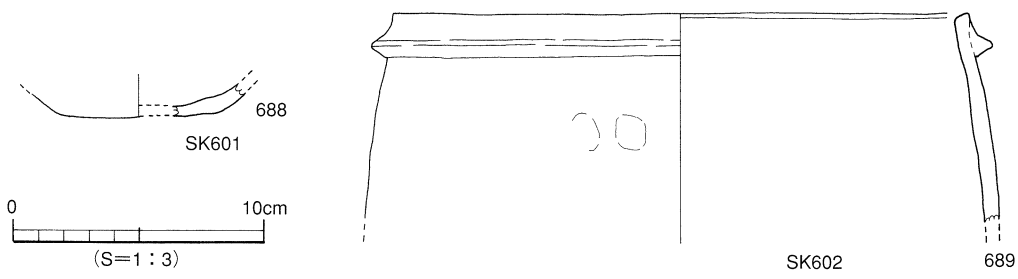
ＳＫ６０２（第182・183図、図版121・123）

調査区中央部西よりＢ5区に位置し、第Ⅲ①層上面で検出した。平面形態は不整楕円形を呈する。規模は長軸185cm、短軸110cm、深さ10cmを測り、断面形態は皿状である。埋土は明灰色土である。遺物は、床面付近から、土師器の土釜の口縁部が1点出土した。689は土師器の土釜の口縁部片で、口縁部はやや内湾し、口縁端部は面取りする。口縁下部に断面三角形の凸帯を貼り付ける。調整は外面の口縁部はヨコナデ、胴部はナデ、内面はヨコナデ調整を施す。

時期：出土遺物より13～14世紀である。



第182図　SK602測量図



第183図　SK出土遺物実測図

〔４〕時期不明遺構

本調査において時期不明遺構は、土坑ＳＫ603～ＳＫ606の4基である。

１）土坑（ＳＫ）

第Ⅳ層上面で確認した土坑は、ＳＫ604～ＳＫ606の3基であり、第Ⅲ①層上面で確認した土坑はＳＫ603の1基を検出した。

ＳＫ６０４

調査区南東Ｃ8区に位置し南側は調査区外へ続く。第Ⅳ層上面で検出した。平面形態は方形である。規模は長軸507cm、短軸135cm、深さ27～37cmを測り断面形態は逆台形状である。埋土は上層が黒色土に灰白色粗砂混じり、中層が黒色土、下層が黒灰色土である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ６０６（図版121）

調査区中央東側Ｂ5～Ｃ5区に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。平面形態は不整楕円形を呈する。規模は長軸100cm、短軸70cm、深さ20cmを測り、断面形態は舟底状である。埋土は黒色土（灰白色粗砂混）である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ６０３

調査区西側Ａ5区に位置し、第Ⅲ①層上面で検出した。平面形態は西側をａトレンチ、東側は試掘トレンチに切られているために不明である。規模は長軸198cm、短軸75＋αcm、深さ12cmを測り、断面形態は皿状である。埋土は灰色土に黒褐色と茶色が混じる。遺物は弥生土器片が2点出土した。時期は弥生土器片が出土しているが混入だと思われる。

〔５〕その他の遺構と遺物

本調査において柱穴133基と性格不明遺構3基を検出した。

柱穴133基のうち第Ⅳ層上面では58基を検出し、第Ⅲ層上面では75基を検出した。

（１）柱穴（ＳＰ）

１）第Ⅳ層上面の柱穴

第Ⅳ層上面で検出した柱穴の埋土は茶色土、黒色土、黒褐色土、明灰色土に分けられる。柱穴内からの遺物の出土は少ないため、時期を特定できるものは極めて少ない。ただし、数少ない遺物から時期を推察すると、茶色土と黒色土の埋土をもつ柱穴は中世と考えられる。黒褐色土と明灰色土を埋土にもつ柱穴については時期比定することは困難である。

①中世（第184図）

ⅰ茶色土を埋土にもつ柱穴は9基である。

調査区中央以南にある。平面形態は円形で、規模は径16～42cm、深さ2.5cmを測る。遺物はＳＰ108の柱痕内から土師器の坏が1点出土している。

ＳＰ１０８出土遺物　690は土師器坏の口縁部片で、口縁部は内湾している。調整は内外面ともにナデ調整を施す。時期は13～14世紀に比定できる。

ⅱ黒色土を埋土にもつ柱穴は9基である。

調査区中央以南にあたる。平面形態は円形・楕円形・方形があり、規模は径22～34.5cmを測る。遺物はＳＰ103の柱痕内から土師器の坏の口縁部が1点出土している。

ＳＰ１０３出土遺物　691は土師器坏の口縁部片で、口縁部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げている。調整は内外面共ヨコナデ調整を施す。遺物は13～14世紀に比定できよう。

②時期不明

i 黒褐色土を埋土にもつ柱穴は24基である。

調査区の全域に散在する。柱穴の平面形態は円形と楕円形で、規模は径16～42.5cm、深さ3.8～39.4cmを測る。これらの柱穴からは遺物は出土しなかった。

ii 明灰色土を埋土にもつ柱穴は1基である。

調査区中央東側C4区に位置し、柱穴の平面形態は円形で、規模は長軸25cm、短軸24cm、深さ8.5cmを測る。遺物は出土しなかった。

2）第Ⅲ①層上面柱穴

第Ⅲ①層上面で検出した柱穴の埋土は茶灰色土、茶灰色土に黒色が混じるもの、茶色土、茶色土に黒色が混じるもの、黒色土、黒色土に茶色が混じるもの、黒色に灰色が混じるものの7つがある。柱穴内からの遺物は少量であり、時期を特定できるものは少ない。出土遺物より中世の柱穴だと思われる埋土は、茶灰色土、茶色土に黒色が混じるものの2つである。茶色土、茶色土に黒色が混じるもの、黒色土、黒色土に茶色が混じるもの、黒色土に灰色が混じるものについては時期特定はできない。

①中世（第184図、図版123）

i 茶色土を埋土にもつ柱穴は28基である。

調査区中央以南にある。平面形態は円形・楕円形・不整形がある。規模は径13～40cm、深さ5～19cmを測る。遺物はＳＰ50の柱穴からは土師器の鉢が1点出土し、ＳＰ57からは土師器の坏の底部が1点出土している。

ＳＰ５７出土遺物　692は土師器の坏で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は欠損している。体部は多段のヨコナデが見られ、底部は回転糸切りによる切り離し手法である。調整は外面が体部はヨコナデ、内面はナデ調整を施し、指頭痕が残る。時期は13～14世紀に比定できよう。

ＳＰ５０出土遺物　693は東播系の鉢の小片である。口縁端部はわずかに平坦面をもち、口縁部は屈曲する。調整は内外面共にナデ調整を施す。時期は13～14世紀に比定できよう。

ii 茶灰色土に黒色混じりを埋土にもつ柱穴は2基である。

調査区南東C8区に位置する。柱穴の平面形態は円形・楕円形である。規模は径38～46cm、深さ15～21cmを測る。遺物はＳＰ61の柱穴から土師器の釜の口縁部が1点出土した。

ＳＰ６１出土遺物　694は土師質のコネ鉢である。口縁部は内湾し、口縁直下に下膨れの凸帯を貼り付けている。調整は内外面共ナデ調整を施す。時期は13～14世紀に比定できよう。

②時期不明

i 茶色土を埋土にもつ柱穴は10基である。

調査区中央～南東A3～C8区に位置し、柱穴の平面形態は円形・楕円形である。規模は径13～32cm、深さ7～17cmを測る。これらの柱穴からは遺物は出土しなかった。

ii 茶色土に黒色混じりの埋土をもつ柱穴は、ＳＰ8の1基である。

調査区中央北側B3区に位置し、柱穴の平面形態は円形である。規模は径30～34cm、深さ13cmを測る。遺物は出土しなかった。

iii 黒色土を埋土にもつ柱穴は18基である。

調査区北～南西A1～B6区に位置し、柱穴の平面形態は円形・楕円形である。規模は径19～38.5cm、深さ9～11cmを測る。これらの柱穴からは遺物は出土しなかった。

ⅳ黒色土に茶色混じりを埋土にもつ柱穴は1基である。

調査区南Ｂ8区に位置し、柱穴の平面形態は円形である。規模は長軸32cm、短軸29cm、深さ8cmを測る。遺物は出土しなかった。

ⅴ黒色土に灰色混じりを埋土にもつ柱穴は1基である。

調査区中央北側Ｂ3区に位置し柱穴の平面形態は楕円形である。規模は長軸41cm、短軸34cm、深さ7cmを測る。遺物は出土しなかった。

（２）性格不明遺構（ＳＸ）

本調査において確認された性格不明遺構は3基である。

ＳＸ601

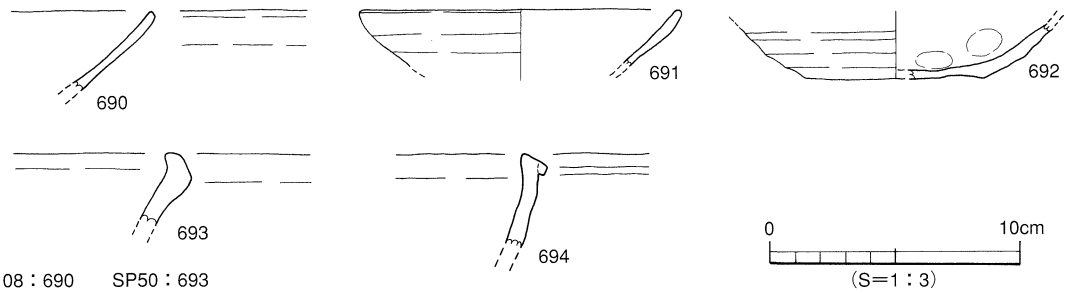
調査区南Ｃ8区に位置し、第Ⅲ①層上面で検出した。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸141cm、短軸95cm、深さ8cmを測り、埋土は黒色土（灰白色粗砂混じり）である。遺物は出土しなかった。

ＳＸ602

調査区北Ｂ1～Ｃ2区に位置し、ＳＸ602の北東部は撹乱に切られている。第Ⅲ①層上面で検出し、平面形態は不整形を呈する。規模は長軸376cm、短軸205cm、深さ12cmを測る。埋土は明灰色土である。遺物は棒状鉄製品が出土した。時期は古墳時代以降と考えられる。

ＳＸ603

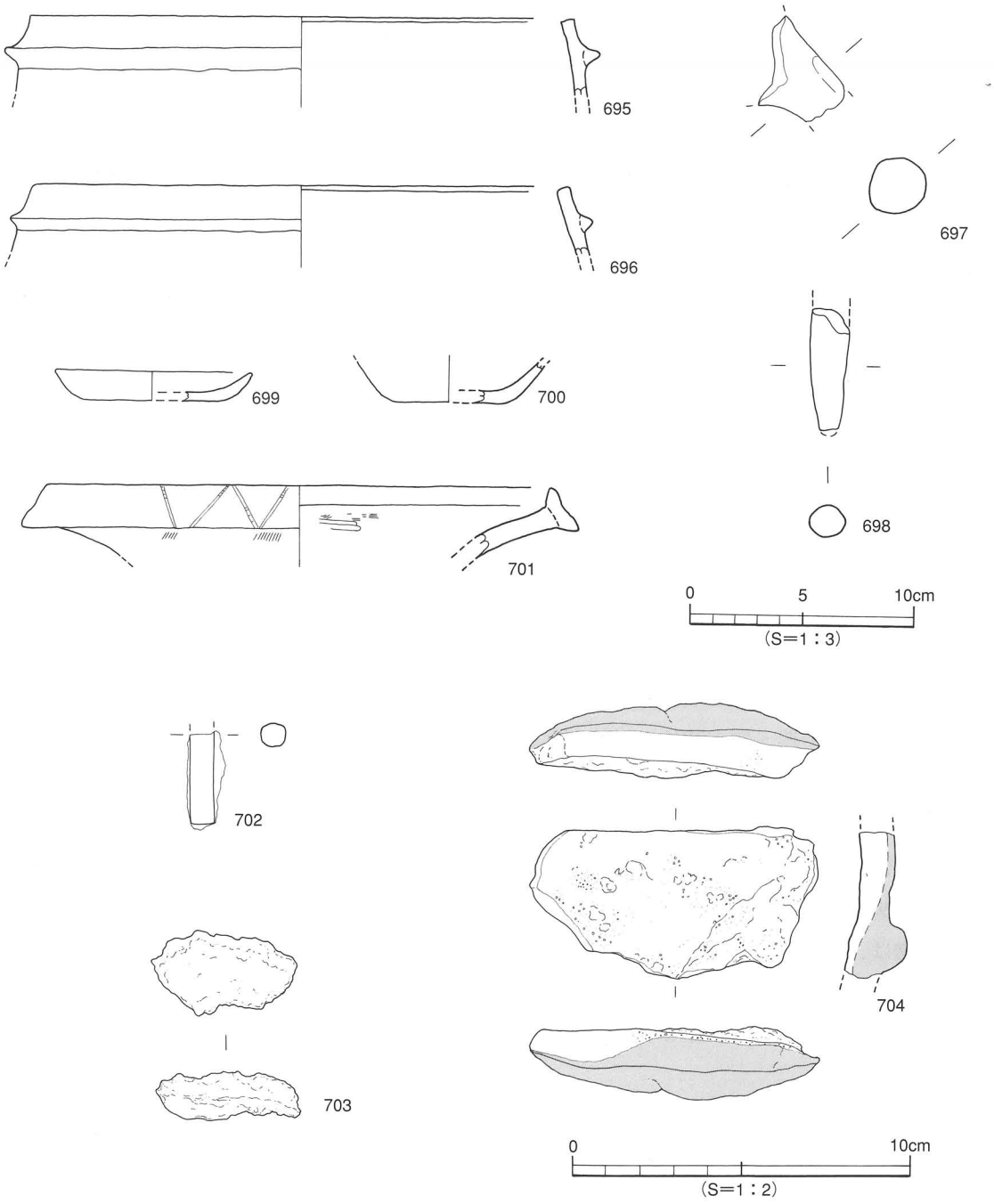
調査区中央北側Ｂ3～Ｂ4区に位置し、ＳＸ603の西側はＳＰ24に、北東部はＳＰ25に切られている。第Ⅲ①層上面で検出した。規模は長軸100cm、短軸90cm、深さ3～4cmを測る。埋土は明灰色土である。遺物は出土しなかった。



第184図　SP出土遺物実測図

（３）第Ⅱ②層出土遺物（第185図、図版123）

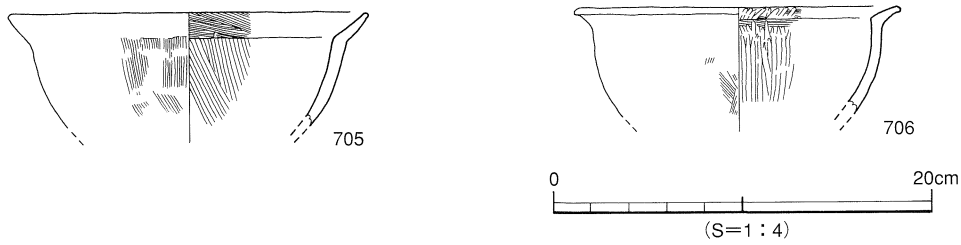
695・696は土釜の口縁部片、695・696の口縁端部はやや平坦面をもち、口縁端部よりやや下がったところに断面三角形状の凸帯を貼り付けている。調整は内外面共ヨコナデ調整を施す。697・698は土釜の脚部片である。調整はナデ調整を施す。699・700は土師器の皿。底部切り離しは回転糸切り手法である。699の体部はやや内湾気味に立ち上がる。700の体部はわずかに外反する。699・700共内外面はヨコナデ調整を施す。701は弥生土器の壺の口縁部片である。口縁端部は上下に拡張する。口縁端面にはヘラ描きの山形文を施す。調整は外面の口縁端面がヨコナデ、その他は内外面共にヨコナデとハケ目調整を施す。703・704は古墳～古代の鉄製品である。703の鉄製品は椀形滓の可能性があるが、不明である。704は椀形滓である。炉底の土が厚く付着している。



第185図　第Ⅱ②層出土遺物実測図

（4）その他の出土遺物（第186図、図版123）

705・706は鉢である。口縁部は外反し、口縁部内面は稜をもつ。705の外面は口縁部がナデ、胴部はハケ目、内面はハケ目調整を施す。706の口縁端部は「コ」字状に仕上げている。外面は口縁部がヨコナデ、胴部はハケ目後ナデ、内面はハケ目後ミガキ調整を施す。



第186図　その他の出土遺物実測図

４．小　結

本調査区ではアカホヤ火山灰とＡＴ火山灰を検出し先土器～縄文時代、弥生時代、古代～中世の遺構と遺物を確認することができた。

（１）層　位

土壌分析により地表下50～65cm及び80～130cmの間で2種類の火山灰を確認した。前者はアカホヤ火山灰（6,300年前）、後者はＡＴ火山灰（約22,000～25,000年前）である。6区Ｃは今回の調査地の最南端にあたり、調査対象地の南端部域にも2種類の火山灰が分布することを示す資料となった。

（２）遺構と遺物

１）先土器～縄文時代

第Ⅲ②層アカホヤ火山灰（6,300年前）の中からは石鏃が1点、第Ⅳ層上面からも石鏃が1点出土している。当地に先土器～縄文時代の遺跡が存在することを示す貴重な資料である。

２）弥生時代

弥生時代に時期比定できるものはＳＢ601とＳＢ602である。住居址の平面形態は隅丸方形を呈し、規模は一辺が5m四方の同規模である。内部施設は貼り床、周壁溝、炉、主柱穴を検出している。炉は住居址中央部やや南よりで検出し、平面形態は楕円形である。主柱穴は4本柱で平面形態も円形である。遺物は、ＳＢ601の床面付近から壺の底部片が1点、ＳＢ602からは炉の床面にて鉢が1点出土している。時期はいずれも弥生時代後期後葉～末である。ＳＢ601・602は規模と内部構造、さらに出土遺物に時期差が認められないことより、ほぼ同時期に建てられたものと考えられる。

３）中　世

中世に時期比定できるものは、ＳＫ601・602、ＳＰ50・57・61である。ＳＫ601からは土師器の坏、ＳＫ602からは土師器の土釜、ＳＰ50からは東播系の鉢とコネ鉢、ＳＰ61からは土師質のコネ鉢が出土した。時期はいずれも13～14世紀に比定されるものである。これ等の検出遺構より、6区Ｃには中世の集落が存在したことが明らかになった。

４）包含層出土品

第Ⅱ②層からは弥生時代後期の鉢、古墳～古代の鉄製品、中世の土釜と皿が出土している。第Ⅲ①層からは弥生時代後期の鉢が出土している。よって、第Ⅱ②層は中世までの堆積層、第Ⅲ①層は弥生時代後期の堆積層であることがわかる。

以上より、6区Ｃは、弥生時代と中世の住居区域であったことが明らかとなった。また、第Ⅲ②層であるアカホヤ火山灰出土の石鏃は東本遺跡4次調査地内においてしばしば検出されるものであり、同層が縄文時代に生活面となっていたことを裏付ける一資料である。

さて、第Ⅳ層上面と第Ⅲ層検出の柱穴を、埋土により整理すると以下となる。

第Ⅳ層上面では茶色土と黒色土は中世であり、第Ⅲ層では茶灰色（黒混）と茶灰色が中世に特定できる。また第Ⅲ層で特定できなっかた茶色土と黒色土は第Ⅳ層に準じると中世に時期比定される可能性をもっている。時期が全く想定できないのは、黒褐色土、明灰褐色土、茶色の黒混じり土、黒色の茶混じり土、黒色灰色混じり土の5つである。不明のものについては、他の調査区資料と比較検討することで、時期が特定できると思われる（第16章　まとめを参照）。

遺構・遺物一覧　－凡例－

（1）以下の表は、本調査区検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
　遺構一覧は志賀、遺物観察表は水本が作成した。

（2）遺物観察表の各掲載について
　法　則　欄　（　）：復元推定値
　形態・施文欄：土器の各部位名称を略記。
　　例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。
　胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。
　　例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
　　例）砂・長（1～4）、多→「1～4　大の砂粒・石長を多く含む」である。
　　焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表112　竪穴式住居址 一覧

竪穴(SB)	時　期	平面形	規　模 長さ(長径)×幅(短径)×深さ(m)	主柱穴(本)	内部施設 高床	土坑	炉	貼り床	周壁溝	備　考
601	弥生後期後葉～末	隅丸方形	5.40×4.90×0.32	4		○	○	○	○	SK613を切る。SP108に切られる。
602	弥生後期後葉～末	隅丸方形	5.00×4.30×0.28	4			○	○	○	試堀トレンチ、西トレンチに切られる。SK607に切られる。

表113　土坑 一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
601	B8	方　形	皿　状	1.45×1.37×0.14	灰色土 (黒色土ブロック混)	土師	13～14世紀	
602	B5	不整形	皿　状	1.85×1.08×0.10	明灰色土	土師	13～14世紀	
603	A5	方　形	皿　状	1.98×0.75×0.12	灰色土 (黒褐色土、茶色土)	弥生		SK603の西側・東側は試堀トレンチに切られる。
604	C8	方　形	逆台形状	5.07×1.35×0.27～0.37	㊤黒色土 (灰白色粗砂混) ㊥黒色土 ㊦黒灰色土			
605	C5·6	楕円形	皿　状	1.35×1.30×0.13	㊤黒褐色土 (褐色混) ㊦褐色土 (暗灰色シルト)		弥生後期末以前	SD602に切られる
606	BC5	不整楕円形	舟底状	1.00×0.70×0.20	黒色土 (灰白色粗砂混)			
607	B4	方　形	舟底状	1.00×0.92×0.22	㊤暗灰褐色土 ㊦黒灰色土		弥生後期末以前	SB602を切っている
613	A7～B7	円　形	舟底状	0.74×0.50×0.45	暗灰色土		弥生後期末以前	SB601に切られている
614	B7	楕円形	「U」字状	1.10×1.05×0.32	㊤黒褐色土 ㊥褐色土(黒褐色混) ㊦褐色土(暗灰色混)		弥生後期末以前	SB601を切っている

表114　溝 一覧

溝 (SD)	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
601	Ａ６～Ｂ８	レンズ状	9.30×0.70×0.11	黒褐色土		弥生時代後期末	
602	Ｃ５～６	レンズ状	6.20×1.00×0.14	黒褐色土		弥生時代後期末	

表115　第Ⅲ②層及び第Ⅳ層上面 出土遺物観察表　石製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
666	石　鏃	ほぼ完形	サヌカイト	2.5	1.4	0.3	0.7		122
667	石　鏃	ほぼ完形	サヌカイト	1.5	1.3	0.25	0.3		122

表116　SB601 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
668	壺	口径(13.8) 残高　3.0	複合口縁壺。 口縁端部は平坦面をもつ。	(拡)磨滅 (一部ハケ・ヨコナデ) (頸)ハケ(10～11本/cm)	ヨコナデ	乳茶色	石・長(1～2) ◎		122
669	壺	残高　3.3	複合口縁壺。小片。口縁端部は丸く仕上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶色	石・長(1) 金 ◎		122
670	壺	口径（6.4） 残高　3.5	直口口縁壺。　わずかに外反する口縁部。口縁端部は細く丸く仕上げる。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	灰黄色	石・長(1) 褐色粒を含む ◎		122
671	鉢	口径(15.9) 残高　5.1	外反する口縁部。口縁部内面に明瞭な稜をもつ。　口縁端部やや「コ」字状である。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ(10本/cm・20本/cm)→ナデ	(口)ハケ→ヨコナデ→ミガキ (胴上)ミガキ→ヨコナデ (胴)ミガキ	赤茶色	石・長(1) 精良な土 ◎		122
672	鉢	底径　0.8 残高　4.6	鉢の底部片。 ボタン状にやや突出した底部。	ハケ(8本/cm・12本/cm)	(胴)ハケ(8本/cm・12本/cm) (底)ナデ	灰茶色 灰色	石・長(1) ◎		122
673	鉢	底径（3.4） 残高（4.3）	鉢の底部片。 底部が突出している。 平底の底部である。	(胴上)ハケ(20以上/cm)→ナデ (胴下)指おさえ (底)ナデ	(胴)ハケ(11本/cm) (底)ナデ	灰茶色	石・長(1) ◎		122
674	壺	底径　2.5 残高　3.6	壺の底部片。 平底。	(胴)ハケ(11～12本/cm) (底)ナデ	ナデ	赤茶色 (一部黒色) 灰色	石・長(1) ◎		122
675	甕	底径　2.5 残高　3.4	甕の底部片。 平底。	磨滅のため不明	(胴)ハケ(12～13本/cm) →ナデ	乳茶色	石・長(1～5) ◎		
676	ミニチュア	底径　1.5 残高　2.8	ミニチュア土器の底部片。 底部は不安定である。	(胴)指おさえ→ナデ (底)ナデ	ナデ	灰茶色	石・長(1) ◎		122
677	高坏	底径(20.8) 残高　2.2	高杯の脚部片。 脚部端面はヨコナデにより凹みをもつ。	(裾)ハケ(10本/cm) →ミガキ (底端)ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶色	石・長(1) ◎		122

表117　SB602 出土遺物観察表　土製品　（１）

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
678	甕	口径(17.0) 残高　3.9	外反する甕の口縁部。口縁部が丸い。 口縁部の内側は稜をもつ炉内出土遺物。	(口端)ヨコナデ (口)(胴)ハケ(7本/cm) →ヨコナデ	(口)ハケ(7本/cm)→ ヨコナデ (胴)磨滅	乳茶色	石・長(1～3) ◎		122
679	壺	口径(23.8) 残高　4.5	広口壺の口縁部。口縁端部が丸い。 口縁部が外反する。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	茶色	石・長(1～4) ○		122
680	壺	残高　3.8	壺の胴部片。 直径1.4cm大の円形竹管文が見られる。	ナデ	ハケ(12本／cm)→ ナデ	乳赤茶色 灰色	石・長(1) ◎		122

SB602 出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
681	鉢	口径(21.0) 残高 2.6	外反する口縁部。 口縁端部の外面に粘土を貼り付けて肥厚させている。	(口端)ヨコナデ (胴) ハケ(10本/cm)→ヨコナデ	ハケ(10本/cm)→ナデ	灰赤茶色	石・長(1) 金 ◎		122
682	鉢	口径(15.0) 残高 2.9	外反する口縁部。 口縁端部が丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶色 黒茶色	石・長(1) ◎		122
683	鉢	口径(13.2) 底径3.0～3.4 器高 9.7	わずかに突出している平底である。 端部は先細り。	(口端) ナデ (胴上) ハケ(11～12本/cm) (胴下) ハケ(11～12本/cm)→ナデ (底) ナデ	ハケ(7～8本/cm)	茶色	石・長・少 ◎		
684	鉢	残高 2.5	鉢の小片。 口縁端部が丸い。	ミガキか？	ヨコナデ	黒色	白色粒を若干含む ◎		122
685	高坏	底径(20.0) 残高 2.1	高杯の脚部片。 脚端部は丸味をもつ「コ」字状に仕上げる。	(脚) ハケ(5本/cm)→ミガキ (底端)ヨコナデ	ハケ(8本/cm)→ミガキ	茶色	石・長(1～3) 金 ◎		122
686	甕	底径 (3.4) 残高 4.6	底部は平坦である。	(胴) 磨滅のため不明 (底) ナデ	磨滅のため不明	茶色	石・長(1～3) ◎		122
687	甕	底径 (6.0) 残高 4.3	底部は平坦である。	磨滅のため不明	ナデ	灰黄色 乳灰色	石・長(1～3) ◎		122

表118　SK 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
688	坏	底径 (6.1) 残高 1.3	底部は回転糸切りである。	(底)回転糸切り (胴)ヨコナデ	ナデ	乳灰色 乳白色	石・長(1～4) ◎	SK601	
689	土釜	口径(22.7) 残高 8.3	口縁端部は面取りする。断面三角形の凸帯を口縁下部に貼り付ける。口縁部はやや内湾する。	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	ヨコナデ	暗茶褐色	石・長(1～5) ◎	SK602	123

表119　SP 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
690	坏	残高 3.1	口縁が内湾している。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色	石・長(1～2) ◎	SP108	
691	坏	口径(12.6) 残高 2.3	口縁が内湾している。 口縁端部は丸く仕上げている。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶色	石・長(1～2) ◎	SP103	
692	坏	底径 (7.0) 残高 2.1	底部は回転糸切りである。 口縁が内湾している。	(底)回転糸切り (体)ヨコナデ	(体)ナデ (底)ヨコナデ	乳灰色 乳茶色	石・長(1～2) ◎	SP57	
693	鉢	残高 2.8	小片である。 口縁端部はわずかに平坦面をもつ。 口縁部は屈曲する。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶色	石・長(1～2) ◎	SP50	123
694	鉢	残高 3.7	口縁部は内湾している。 口縁直下に下膨れの突帯を貼り付ける。	(口端)ヨコナデ (口) ナデ	ヨコナデ	茶色 乳茶色	石・長(1～3) ◎	SP61	123

表120　第Ⅱ②層 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
695	釜	口径(23.6) 残高　3.0	口縁端部は平坦面をもつ。 口縁よりやや下がったところに断面三角形状の突帯を貼り付けている。	ナデ	ナデ	茶色	石・長(1~3) ◎		123
696	釜	口径(24.0) 残高　3.4	口縁よりやや下がったところに断面三角形状の突帯を貼り付けている。 口縁端部は平坦面をもつ。	ナデ	ナデ	茶色	長(1~2) ◎		123
697	三足付土釜	残高　4.7	釜の脚部である。	ナデ		茶色 黒色	石・長(1~2) ◎		
698	三足付土釜	残高　5.4	釜の脚部である。	ナデ		茶色	長(1) ◎		123
699	Ⅲ	口径　(8.4) 底径　(6.4) 残高　1.3	底部切り離しは回転糸切りである。 体部はやや内湾気味に立ち上がる	㊍ヨコナデ ㊎回転糸切り	ヨコナデ	乳灰色	石・長(1~2) ◎		123
700	Ⅲ	底径　(5.0) 残高　1.8	底部切り離しは回転糸切りである。 体部はわずかに外反する。	㊍ヨコナデ ㊎回転糸切り	ナデ	乳色	石・長(1) ◎		123
701	壺	口径(22.0) 残高　3.2	口縁端部は粘土を貼付し上下に拡張する。口縁端面はヘラ描きの山形文を施す。	㊐ヨコナデ ㊒ハケ(8~9本/cm) →ナデ	㊐ナデ ㊒ハケ(3本/0.2cm)→ ミガキ	灰茶色 茶褐色	石・長(1) ◎		123

表121　第Ⅱ②層 出土遺物観察表　金属製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
702	棒状鉄製品	端部片	鉄製	2.6	0.7	0.7	7.9		123
703	不明	小　片	鉄製	4.2	2.4	1.3	14.8		123
704	鉄滓	小　片	鉄製	8.5	4.4	1.8	69.8	塊形滓	123

表122　その他の 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
705	鉢	口径(18.6) 器高　6.1	外反する口縁部。口縁部内面には稜をもつ。	㊐ナデ ㊓ハケ(10本/cm)	㊐ハケ(11本/cm) ㊓ハケ(7本/cm)	茶色	石・長(1~3) ◎		123
706	鉢	口径(16.8) 残高　5.8	外反する口縁部。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。口縁部内面には稜をもつ。	㊐ヨコナデ ㊓ハケ(11~12本/cm) →ナデ	ハケ(11~12本/cm) →ミガキ	茶色	石・長(1~2) ◎		123

第15章

枝松遺跡4次